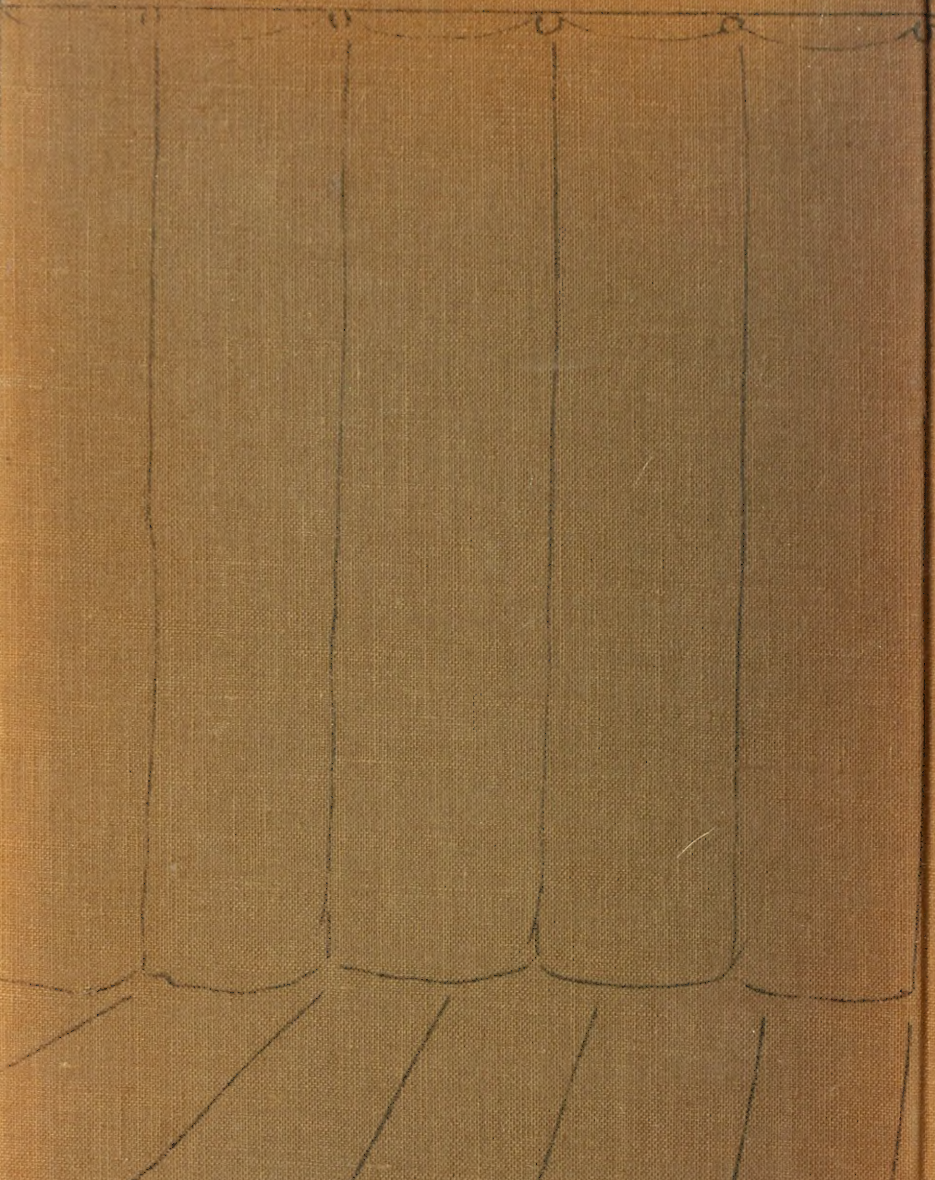


日本戯曲全集
第二十四巻

お家狂言集

東京
春陽堂版



嵐橘三郎の笹原隼人　（濃紅葉小倉色紙）

日本戯曲全集　第廿四巻　目次

お家騒動狂言篇

梅柳若葉加賀染



この狂言の再演「柳櫻彩繪加賀骨」番附

梅柳若葉加賀染

第一幕目三建目　氷川明神の場　長玄寺の場

役名――長玄寺の留月。多賀大清。花房求馬。花房主膳。柏木曾平太。奥女中、千早。梁川嘉藤次。栗坂權藤次。長玄寺の祐林比丘尼。多賀の大領。

本舞臺、三間の間、向う淺黃幕、眞中、石の大鳥居。上の方、向う梅の附いたる白き木綿の幕を張り延し、後ろ口、黑幕、これに誂らへあり、この前に太々御神樂修行と、記したる高札。下の方よき所に武州一の宮と書き付けし石碑。松の立ち樹、同じく吊り枝、すべて武州大宮驛、氷川明神鳥居先の體。爰に權藤次、揃りこみの裝束、刺貫、天狗の面、鉾を持ち、十二座の形にて酒に醉ひたる體。菖蒲革の侍ひ二人、六尺棒を持つて制して居る。上の方に曾平太、大小、小紋の股引、半纏、切り草鞋の形にて、立ちかゝつて居る。白張の仕丁三人詫び事して居る模樣よろしく、早神樂にて幕明く。

ト　かすめたる大拍子、馬士唄の合ひ方。

權藤　おらア否だ〳〵。

侍二　ヤア、扣へぬか〳〵。

權藤　おらア扣へるも、おしつけるも嫌いだ。面白い。切るなら切られべい。サア、切れ〳〵。

曾平　ヤア、おのれ、狼藉者、憎くい奴の。

仕丁　ハテ、マア、御料簡なされませ〳〵。

侍一　何を申すも此よい〳〵は、喰ひ醉つて居ります。

仕丁　マア〳〵、御料簡なされて下さりませ。

權藤　料簡も何も否だ。なぜ神事の役人に突き當つて、その上、狼藉者だと吐かした。うぬらより、此方が料簡しないぞ。

曾平　ヤア、不屆き千萬。我れ〳〵を何者と思ふ。多賀の家中に於て、柏木曾平太、殊さら今日、大殿大領公御出府の道筋、武士に向つて惡口雜言。この大小が目にかゝ

らぬか。

權藤　おきやアがれ。二本差しは怖くないぞ。

曾平　おのれ、その舌の根を。

ト立ちかゝる。皆々、マア／＼御料簡なされませ／＼

ト曾平太を留める。大拍子になり、向うより嘉藤次、股引、半纏、切り草鞋、大小の形にて、足早に出で來り、直ぐに舞臺へ來て

嘉藤　それにござるは、栫木氏ではござらぬか。

曾平　これは／＼、梁川嘉藤次どの、拙者、御本陣へ參る道にて、身共に對してこの狼藉、それゆゑかかる仕合せでござる。

嘉藤　何か仔細は存じませねど、狼藉とござれば、聞捨てにもなりますまい。それは格別、此方にも大變な事がござる。鎭まれ／＼。

侍ひ　ハツ。片寄れ／＼。

ト權藤次を鎭める。

曾平　して、大變な儀とは、如何の儀でござる。

嘉藤　殿の御寵愛になさるゝ白斑の鷹、お拳を外れて、今以て戻りませぬゆゑ、殿には御機嫌さん／＼。慥か、早蕨戸田の邊へ參つた樣子。我れ／＼も殿のお供いたし、參らうと存ずるが、貴殿は如何めさるゝ。

曾平　それは等閑ならぬ儀。さりながら、打捨て置かれぬこの場の仕儀。

嘉藤　して、狼藉者と云ふは、神事の役人ではござらぬか。

曾平　左樣にござります。雇はれ禰宜の分として、さまざまの惡口。おのれ、手は見せぬぞ。

嘉藤　尤もなる儀ではござれど、神事の庭と申し、罪科は追つて。この者は、神職方へ預け召されい。

曾平　イカサマ、貴殿のお詞と申し、然らばこの者を引立てい。

侍ひ　畏まつてござる。

嘉藤　然らば曾平太どの、片時も早く、大殿の御供仕り、お鷹の行くへを。

曾平　如何にも。ソレ、引立てい。

侍ひ　ハツ。立ちませい。

ト大拍子になり、皆々下座へ入る。右の鳴り物にて、向うより、犬清、若殿の形。後より、千早、奥女中にて、刀を持ち、付添ひ出る。鳥居の内より、主膳、小紋の股引、半纏、ぶッ裂き羽織、大小の形にて出て來

り、犬清を見て

主膳　これは〳〵若殿樣には、うるはしき御尊顏を拜し、恐悅至極に存じ奉ります。

犬清　花房主膳、遠路の交代、大儀であつたな。

千早　大殿樣にも御機嫌よう、御到着でござりまするか。

主膳　如何にも。見上げますれば、輕々しき御有樣して、お供廻りは。

千早　あれなる御門に、扣へさせ置きましてござります。

主膳　疾にもお出でと存じなば、設けの用意もあるべきに、思ひ依らざるこの御入來。先づ〳〵これへ。

犬清　參れ。

千早　ハア。

ト兩人、舞臺へ來つて、よろしく住ふ。

主膳　若殿のこれまでの御出では、大殿樣の、お待受けでござりまするか。

千早　左樣にござりまする。若殿樣には、御道中御安全の爲、當家の氏神、これなる氷川の御社へ、御祈願を籠められし所に。

專藏　今日、御到着の筈なれど、この邊はお鷹の御場所ゆゑ、道々御遊興を遊ばされたるところ、御秘藏のお鷹、お拳を放れ、今以て行くへ相知れざるゆゑ、御近習の面々も、心を痛め罷り居ります。

ト大拍子、馬士唄の合ひ方になり、向うより、一學、小紋の股引、半纏、ぶッ裂き羽織、大小。後より、求馬、着流し、大小の形にて、しな〳〵として出て來るを、旅中間兩人、求馬を取卷き、この人數、直ぐに舞臺へ來る。各々思ひ入れあつて

一學　これは〳〵若殿樣には、久々にて御目通り仕りまする。先づは美はしき御尊顏を拜し、恐悅に存じまする。

主膳　貴殿は蟹江一學どの。

千早　主膳どのゝ御子息、求馬さま、只今お着きになりましたか。

犬清　求馬、其方も、無事で到着いたしたか。近う〳〵。

求馬　ハッ、有り難う存じまする。

トうぢ〳〵として居る。

主膳　見れば、合點のゆかぬ侍が素振り。それは兎もあれ、一學どの、お鷹はお手に入りましたか。

一學　お鷹どころではござらぬ。一大事の儀が出來いたしてござる。

犬清　ナニ、一大事の儀とは。

主膳　心がゝりな。サ、様子は〳〵。

一學　その仔細と申すは外でもござらぬ、今朝、殿の御出立と申すに、これなる求馬どのには、衣服とても改めず、寢卷のまゝで居らるゝゆゑ、如何の仔細と咎めしに、お預かりの荷物の內、黃金の鷄の入りしを、夜分のお泊りに於て紛失との事。それゆゑ斯くの仕合せでござる。

主膳　すりや、お家の重寶黃金の鷄、紛失せしとや。して、盜賊の手がかりでもあるか。コリヤヤイ、申し譯の筋あらば、早く申せ。ドレ、どうぢや。

求馬　イヤモウ、役目疎かには似たれども、この程よりの旅行の疲れ、思はずまどろむ其うちに、目覺めて見れば、お預かりの荷物、悉く取散らしござるゆゑ、改め見れば、大切なる黃金の鷄紛失。正しく盜賊の所爲と存じますばかり。これぞと申す手がゝりとてござりませぬ。

ト主膳、當惑の思ひ入れ。

一學　聞きあされたか、主膳どの。御道中大切なる、殿の御荷物を預かりながら、盜賊に奪はれしとは、貴殿の御子息ではござるが、さて〳〵求馬どのには、お手柄な事でござるな。

ト主膳、ズッと寄つて、求馬が襟を取つて

主膳　おのれ、申さうやうもない、憎い奴。骨身に堪へるやうに、カウ〳〵。

ト刀を拔き、背打ちにする。

おのれはなア。何れもの手前、面目もなき仕合せ。年罷り寄つて親にまで、武士道を捨てさせる不孝者。いつぞの事に、憎くい悴め、面を見るもむやくしい。

ト刀を取り直し、振り上げる。犬淸、こなし。

犬淸　主膳、ひかへい。

主膳　でも、不埓なる悴ゆゑ。

犬淸　手討には罷り成らぬ。

主膳　とは又何ゆゑ。

犬淸　例へ其方が子息にもせよ、知行宛て行なへば、身が家來ぢやぞ。

主膳　ヤ。

犬淸　それとも、若年の某と侮つて、違背いたすか。

主膳　全く以て。

犬淸　いま手討に致せば、失せたる寶が手に入るか。

主膳　サア、それは。

犬淸　殊さら不淨を淸むる神の庭、血汐の穢れもおそれあれば、必らずともに早まるな。

主膳　憎くき悴ゆゑ、年寄りの一徹短慮、殿へ無禮と心付かざりしは、主膳が不調法、幾重にも御容赦下さりませ。

一學　併しながら、お家の重寶を失ひし上からは、疎かならざる大罪人、大殿へ言上なした上、罪科は追つての沙汰。どなたが御贔屓なされても、お家の重器失ひしからは、搦は逃られぬ。この時こそは、吠え面かはくぞ、見るやうだワ。ハテ、氣の毒千萬な。

ト求馬、思ひ入れあつて

求馬　さうぢや。

ト一腰へ手をかける。犬清見て

犬清　ソレ、待ちい。

千早　ハツ、御尤もでござりまする。お待ちなされませ。

ト止める。

一學　イヤ／＼、お留めなさるな。生きて恥つら晒さうよりか、いつその事に、この場に於て。

犬清　そりや、腹は成らぬ。

求馬　それは又、何故でござりまする。

犬清　生害とは、以ての外の事。大切なる重器を奪はれ、その盗賊に詮議もせず、今さら生害を致せばとて、申し譯が立つべきや。以後の見せしめ、大小取上げ、この場より追放申し付くる。

求馬　ヤ。

犬清　一學、彼れが兩腰、取上げい。

一學　心得てござる。

ト求馬の大小を取上げ、犬清の前へ置く。犬清、取上げ見て

犬清　この差添は、出立の砌り、其方へ遣はしたるこの品。鞘には向う梅の紋散らし。刀は格別、云はば穢れし科人の腰差、取上げには相成るまじ。直ぐさまこれより、取捨て申し付くる。コリヤ、千早、其方、この品を取上げ、いづくの誰れに遣はすとも、其方よきに計らうてよからう。ナ、合點がいたか。

千早　ハツ、有り難き、君のお詞。然らば御取捨てのこの一腰、私しが申し受けるでござりませう。

ト一腰を持つて下の方へ扣へる。

一學　イヤハヤ、何の事やら、この一學なぞには、とんと解らぬ。さりながら、如何ほど文句を付け、御贔屓相成つても、あの求馬どのには、一體武士の道は似合ひ申さぬ。常平生から藝道にばかり心を寄せてござれば、繪描

きでもなつて、猫の繪を描いて歩くがいゝ。又それが成らずば、四海波でも謠つて、袖乞ひがようござらう。思ひなしか、袖乞ひじみて來たやうだ。ハ、、、、。

犬清　寶の詮議の手段が肝要。首尾よく手にさへ入るならば、歸參の願ひは幾重にも。それまでは短慮なきやう、心を付けて、その身も大切に。ナ、合點がいたか。花房主膳、なんとさうではないか。

ト求馬に向つて云ふ。

主膳　御意の通り、八兵衛儀は法界の譬へ。隨分その身を全うして、歸參するまで無事で居てくりやれ。コレ忰。イヤサ、勘當すれば他人の科人、とつとゝ御前を立去り居らう。

求馬　天に風雨の愁ひあり、私しとてもこれまでに、犯せる罪はなけれども、この身に不時のかゝる災難、時節と存じますれば、なんのいとひがござりませう。

一學　ヤア、今さら益なきその繰り事。この場に用なき浪人、勝手な方へ出てお行きやれ。若殿へ申し上げます。神殿の方にて、何かの用意。

犬清　如何にも。やがてお着きに間もあるまい。

一學　委細は、大膳の御前にて。

主膳　然らば、我が君。

犬清　兩人、參れ。

皆々　先づ、入らせられませう。

ト唄になり、犬清先に、主膳、一學附いて鳥居の内へ入る。後、合ひ方になり、求馬、千早、殘り、こなしあつて

千早　求馬さま、思ひよらざる御身の御難儀、さぞ御無念にござりませう。憚りながらお察し申し上げまする。それに付けても、お腰が明いて見苦しうござりまする。モシ、殿樣の御心添へられしこの一腰、イザ〳〵。

求馬　有り難き御主人のこの賜物。辭退いたさば却つて不忠。然らば頂戴いたすでござらう。

ト差添取つて差す。この時、一學、鳥居の蔭より窺ひ見て、入る事。

千早　この上御身御大切になされ、寶詮議が肝要でござりまする。

求馬　そのお心添へは忝なう存じます。手がかりとても無ければ、何を以て寶の詮議を。

千早　さればでござりまする。金銀に目もかけず、お家の重寶に心をかけるは、この程世上に噂のある

求馬　合法太郎と云ふ盗賊、徘徊いたす由、もしや彼れらが、仕業やも計り難し。

千早　それは格別、爰に長居は上への恐れ。さりながら、これよりいづくへ便りにお越し遊ばす。

求馬　サア、それとても、誰れや便りにする者もなければ、親人に御恩を受けし、湯島の吉三と申す者、町人なれども、頼まん摘者が所存。

千早　左様なら、求馬さま、やがて、めでたう御歸參を。

求馬　とは云へ思へば。

ト思ひ入れ。

千早　アヽモシ、片時も早う。

ト思ひ入れ。權藤次、この時窺ひ寄つて

權藤　求馬、うぬ・・・

ト、かゝる。三人立廻りのうち、犬清出て、求馬を圍ひ、權藤次を支へる。求馬、見て

求馬　これは。

犬清　爰等はずつと、早行け。

千早　又も人目にかゝらば如何。

求馬　とは云へ、名殘りに。

犬清　未練な奴の。

求馬　ハツ。

ト思ひ入れ。三重になり、求馬、ツイと向うへ入る。

權藤　うぬをやつちやア

ト行きにかゝる。兩人、支へる立廻り。犬清・權藤次を見事に投げて切り倒す。千早、白刃を拭ふ。兩人よろしく、好みの鳴り物にて、道具廻る。直ぐに上手の幕を切つて落す。

本舞臺、二間、常足の二重、寺の佛壇、經机その外佛具、よき所に誂らへの位牌を飾り付け、更紗の暖簾口、床の間・軒口に額を掛け、これに望月山としるし、上の方、榎の老木、注連を張り、この洞、二段にて、上の方より下の洞へ水湧き出で、前の流れに杜若、その外草花。下手に羽黒山大權現と書いたる立て石。同じく梵天、うしろ藪垣。いつもの所に枝折り戸。一體座敷の模様は、羽黒木庵室の體。木魚の入つたる鳴り物にトヒヨ、風の音にて道具納まる。

ト揚げ幕の上より白斑の鷹來る。これと共に向うより松林尼、鼠の衣裳、そぎ尼の形にて、千ケ寺の葛籠を

負ひ、出で來る。緋縮緬の襷を巻き上げる。内に、望月、鼠衣、有髪、被衣の拵らへにて珠數を持ち、兩人ともにこの鷹に目を附け、キッと思ひ入れあつて、誂らへの合ひ方に變る。

望月　ハテしをらしき、野面の詠め、頃も卯月の雲晴れて、萬里も同じ青空に、鷹かあらぬか一つの翼。

松林　舞ひ行く方は我が庵、この程師の坊夜毎の眼病、その一葉を取り得んと、身は雲水の宿の枕、夢路をたどり日數を經て、難なう手に入る一品は、深くも包む心のうち。

望月　外面に訪づる參詣の、その難病は防かれども、我れは夜毎に鳥眼の病ひ。この眼病を直さんには、江州鷹巣山に棲む、八寸八分の青鷹、一名これを同薬といふ。

松林　いま一品は白斑の鷹、その生血を混じ合せて、水に浸し服すれば、忽ち病む全快とは云へど

望月　鷹は貴人の拳に宿る。なか／＼下賤の力に及ばず。さりながら、此まゝにて朽ち果てたば、我が心願も空しき折から、空翔ぶ鳥は、アレ／＼／＼

松林　正しく師の坊、好ませ給ふ白斑の鷹。

望月　この一葉さへ手に入れば、日頃の願ひは心の儘と

松林　思ふ折しもこの庭を

望月　目がけて舞ひくる白斑の一物。

松林　七尺去つて、影さへ踏まぬ

望月　師弟の孝を上覽あり

松林　天に感應せしものなるか。

望月　願ひ成就のしるしなるか。

松林　それにつけてもあの一葉。

望月　取り得て欲しき

兩人　ものぢやなア。

ト松林尼は、鷹を見て思ひ入れ。望月、手早く佛前の香入れを取つて、香の蓋にて器を叩く。鷹は餌箱と心得、一散に望月の手元へ來る。あたりへこなしあつて、鷹を〆め殺し、引裂かうとする。この間、松林尼、枝折の元へ來て

松林　ハイ、お師匠樣、只今歸りましてござりまする。

トこれにて望月、悄りこなしあつて、鷹を衣の袖へ隱く

望月　誰れかと思へば松林尼、無事で戻つて、めでたうござる。

松林　イヤモウ、私しよりあなた樣の、御無事な體を拜し

まして、お嬉しう存じまする。さりながら、何やらお取込みの御樣子、お顏の色も常なりませぬが、御氣分でも惡うはござりませぬか。

望月　イヤ、こりや、たつた今、鷹を

松林　エヽ。

望月　サア、かの知れたる鳥目の病ひ、さのみとも思はぬが、只明暮れ案じたは、其方の身の上。マア〳〵、無事で安堵しました。して、彼の一藥は手に入つたか。

松林　左樣でござります。他國に稀れなる品なれど、あなたの御病氣ゆゑ、どうぞ致して取得たいと、わたしの念が屆いたやら、道すがらのお關所も、千ケ寺參つて易々と、持參いたしたこの一藥、お受取りなされて下さりませ。

ト合ひ方になり、小箱に入れたる、青蜥蜴を出す。望月、取上げ見て

望月　紛ふ方なき、八寸八分の青蜥蜴、首尾よく手に入つたれば

松林　いま一種は、白斑の鷹。

望月　その生血は。

松林　お手に入つたでござりませう。

望月　ヤ。

松林　お隱しなさるな。最前慥かに。

望月　コレ。

トあたりへ思ひ入れあつて

いま思はずも、空行く鳥、正しくそれと望みの一物、鷹は貴人の拳を外れて、爰に來るを幸ひと、聞き覺えたる事あつて、難なく手には入つたれど、鷹を殺さば領主の咎め、それを存じて斯くの仕儀。

松林　サア、その案じも、無理ならねど、罪科は私しが引受けます。ちつともお氣遣ひなされまするな。

望月　頼もしい。その心底を見る上は、あたりへ心を。

ト合ひ方になり、兩人、思ひ入れ、望月は下の宮の内より一つの器を出し

望月　其方に預けるこの一品。

松林　モシ、こりや何でござんすえ。

望月　これこそ閏月に出生なしたる、女犬の血汐。

松林　あの藥の外に、これもお役に立ちますかえ。

望月　あれなる妙藥にて屆かぬ時は、この一品にて、仕樣はさま〳〵。コレ

ト囁く。松林尼心得、器を取り

松林　心得ました。そんならお前は。

望月　いま一種の薬の調合。

ト望月、僧具の皿を取つて件の鷹の血汐を絞り、蜥蜴諸とも器へ入れて、鷹の死骸は床下へ打込む。この時、上の梢へ雀大分むらがりゐる。松林尼、前の器を見て

松林　ヤ、、、、、今まで乾物なりし彼の蜥蜴、俄に蘇く血汐の奇特。

望月　木火土金に返すが秘法。水気に交へて五行を保つ。水に浸すが秘事口伝。

ト器のまゝ梢の下の洞の水中へ入れると、風の音烈しく、梢の雀、羽搔を縮めて落ちる。これと共に流れの菖蒲、その外の水草、残らず枯れしぼむ。松林尼、見て

松林　ハテ、争はれぬ薬の調合。器もろとも水に浸せば

望月　群がる雀、羽搔を縮め

松林　流れの花も、枯れしぼむは

望月　これぞ正しく

松林　南蛮秘法の

望月　コレ、サ、その一薬のしるしは後方、黄昏告ぐる入相に

松林　薬の利き目現はれて、暗き世界の有明も

望月　彼長者の萬燈と、なつて暮らすか但し又、貧の一燈細くして

松林　身の成行きも、見え分かぬ

望月　暮れての跡は

松林　積る話しを、語り明かすも夏の短夜

望月　労れは奥で。

松林　長い旅路の、そんなら、こちの人。

ト ちよつと思ひ入れ。

サア、こちの師の御坊。後ほど、お目にかゝりませう。

ト唄になり、松林、器を持ち、こなしあつて奥へ入る。望月残る。直ぐにカケリになり、大領、高野の奥にて鞭を持ち、跡より、主膳、嘉藤次、曾平太、以前の形にて、附いて出て

大領　秘蔵の逸物、正しく此あたりに。林の木々に心を付けい。

三人　ハ、ア、畏まりました。

大領　続け。

ト云ひながら舞臺へ来る。主膳、摺りぬけ、庵の内へ入る。跡より大領、嘉藤次、曾平太も続いて入る。望月

月、それと見るより平伏する。
主膳 高位の御方の御入來、扣へませい、扣へませい。
望月 ハッ、思ひよらざる國主の御入來。恐れ入つてござ
ります。
大領 其方は、當院主か。
望月 左樣にござります。
ト思ひ入れ。大領、あたりを見廻し、軒の額を見て
大領 これは物好きな住居ぢやな。山號は望月山と申す
か。
望月 御意の通り、望月山長光寺と申しまする。即ち拙僧
は住職にござりまする。
大領 然らば其處某とやら申す、家持の木のある院內か。
望月 左樣でござります、君には如何いたして、この所
へ。
大領 不圖た思ひ。予が領國なれど、白河の關、峯を外れて遠
かれにとか、へ。
望月 そのやうな、白河の
大領 ム、其許、存じ居るか。
望月 イヤ、一向左やうな儀は存じませぬ。御覧の如く、
諸木とても稀れなる所等、この先には山續きにて、高木

の茂りござれば、御秘藏の逸物、猿も休むる事もござあ
らんが、然らばその近邊をお尋ねあつて、然るべう存じ
ます。
大領 ア、返す〳〵もあの逸物、惜しい事を致した。然
らばその地へ。皆參れ。
主膳 ハッ。お立ちでござる〳〵。
大領 待て〳〵。
ト佛前の位牌に目を付け、ツカ〳〵と行き
ハテ心得ぬ。この位牌、眞如院殿前越州義明大居士、文
治四年四月二十九日、奧州高館に於て戰死。フム、譬に
は稀れなる法名ぢやが、これは何人の位牌なるや。
三人 御意ぢや。包まず申し上げい。
望月 世に憚かる御方にござりますれば、御法名の儀は。
大領 申されぬか。
望月 左樣にござります。
大領 アノこれが。
ト望月を、ヂロリと見やる。
望月 ハッ。
大領 ハテ、奧ゆかしい。
望月 ヤ。

大領　院主、茶を一つ。
ト合ひ方になり、床几を直す。
望月　ハッ。御意ではござれども、天目とても、見苦しければ。
大領　苦しうない、許す。早う持て〳〵。
望月　ハッ。
ト手早く有り合ふ茶碗を清め、土瓶の茶を酌んで恐れながら。
ト差出す。大領見て
大領　天目の茶濫の様子。これは當寺の靈寶か。いかさま風雅な。
ト飲まうとする。主膳、ツカ〳〵寄つて
主膳　イヤ〳〵、我が君、そのお茶召上がる儀は、御無用に遊ばされませう。
大領　如何いたした。
主膳　見ますれば、合點參らぬお茶の泡立ち。
大領　なにサ〳〵、戰國の砌りには、林間の酒、落葉の煎じ茶、土で蒸したる飯をも食ひ、四季に烈風を凌ぐは武門の習ひとあれば、苦しうない。これへ持て〳〵。
主膳　左様でござりますれど、あまり見苦しき器と申し。

望月　出花も古き番茶と申し、御遠慮いたし居りましたれど、達ての御所望ゆゑ、獻じましてはござれど、然らば、この儀、お斷わり申す。
ト茶碗を取り、前に置く。
大領　然らば外の茶を、早う持て〳〵。
主膳　畏まりました。お茶瓶を持たつしやい。
侍ひ　ハア。
ト侍ひ、結構なる茶瓶を持ち出て來る。
主膳　お茶瓶、これへ。
ト茶を酌む。待ちかねし體にて
大領　早う持て〳〵。
主膳　ハッ〳〵。恐れながら
ト銀張りの茶碗にて差出す。大領、取つて
大領　たわけ者め。かゝる性急の折から、殊の外茶がたぎつて居る。當寺は名水と聞き及ぶ。あれなる水を、うめい〳〵。
主膳　畏まりましてござりまする。
ト榎の洞の下の水を、茶碗にさし、出す。大領、取つて飲まんとするを望月、寄つて
望月　イヤ〳〵、御前、そのお茶、召上がる事は、御無用

に遊ばされませう。

大領　また飲まれぬか。其方どもは何ゆゑ左やう申すぞ。

望月　見ますれば、世の常ならぬ、茶の泡立ち。

主膳　何と申さるゝ。

望月　器の中より立のぼるは、正しく、紫霜斑猫の毒氣。凡眼の拙僧が、寸志の言上。君そのお茶をきこし召され、御頓死に過ちあらば、萬民の歎き、そこを存じてお止め申した。何卒そのお茶の儀は。

主膳　默り召されい。おてまへなぞが何を存じて。お鷹野の節には、いつにてもお用ひ遊ばさるゝ、このお茶瓶。殊に御譜代の某が、麁忽の品を差上げんや。

望月　何、御譜代、外様にもせよ、計り難きは人の心。木に棲む蟲は木より生じて、その木を枯らすの道理。臣として君を害する事まゝある習ひ。これが俗に申す、飼ひ置く犬に喰はるゝの道理。

主膳　ヤア、某を指して犬の譬へ。御前とて容赦は致さぬ。又その上に、合點ゆかぬ當寺の住職、其方が差上げんと致せしお茶にこそ、仔細あらん。

望月　口惜しくも申したり。おてまへの差上げしお茶にこそ、仔細もあらう。

主膳　イヤ、其方が。

望月　イヤ、おてまへが。

兩人　なにを。

ト思ひ入れ。

大領　アヽ、コリヤ〳〵、兩人、爭ひは取措いて、早う茶をくれぬか。

主膳　ハツ、延引いたさば、却つて不忠。然らばお毒見いたせしその上にて。

望月　イカサマ、双方の疑念を晴らす爲、同木より湧き出でたる水をさして。

ト榎の下へ行き、上の洞の水をさして來り

望月　然らばお侍ひ。

主膳　貴僧も、一緒に。

望月　イサ、お毒見。

ト兩人、めい〳〵に前にある、右の茶をグツと飲み

主膳　お茶のお毒見、致してござる。

望月　これにて御疑念。

兩人　お晴らし下さりませう。

大領　鬼役相濟んだら、早う持て〳〵。

主膳　ハツ、器を淸めまして。

ト立つて茶瓶の方へ行かうとする。タヂ〳〵となり、「アッ」と云うて苦しき思ひ入れ。嘉藤次、曾平太、見て

嘉藤　ヤ、、主膳どのゝこの體は。

大領　主膳々々。如何いたした。

主膳　只今お茶の毒見いたすと其まゝ、五體一度に惱亂なし、手足自由にならざるは。

大領　さてはその茶に、仔細ぞあらん。

望月　すりや、君を毒殺なし〳〵お家を窺ふ……ハテ、恐ろしい。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト思ひ入れ。

大領　心得ざる主膳が胸中。引ッ捕へて吟味いたせ。

嘉藤　畏まりました。

ト立ちかゝらうとする。

主膳　チエ、、お情なき我が君さま、毒と知つて手盛りを喰はんや。察するところ、館の内に逆賊ありと覺えたり。イデ　召捕つて一詮議。

ト立ちあがり、タヂ〳〵として、アッと云うて、落入る。

大領　兩人の者はこの旨、館へ注進なし、主膳が一家、殘らず閉門申しつけ、予が歸參を相待ち居れ。

嘉藤　でも、君御一人この所に。

大領　苦しうない。迎ひの同勢、目立たぬやうに致せ。

嘉藤　畏まりました。

大領　主膳一族の者ども、國法に依つて、召捕るとは云へど、手荒く致すな。いたはつて遣はせ。

嘉藤　畏まりました。

ト侍ひの茶瓶持ちも花道へかかる。

大領　待て〳〵。

ト呼びとめ、ちよつと思案して

よい。行け〳〵。

嘉藤　ハツ。

ト皆々向うへ入る。誂らへの合ひ方。

大領　最前より、さま〴〵なる事にて迷惑いたした。併しながら、其方この場になくば、予は落命いたす所であつた。ア、、恐るべし〳〵。この上は、心措きなき其方が手前、一服所望いたしたい。

望月　ハツ、有り難きその御諚、青雲めでたき國の君、かかる片ほとりの荒れ寺へ、お腰かけ下さるは、當寺の面目、この上やござりませう。不束なる手前なれども、さ

ほど御所望ござらば、粗茶一服奉らん。
　ト奥の方へ向ひ
望月　ヤア／＼松林尼、稀れ人の御入來。器を清めお茶一つ。
松林　畏まりました。
　ト合ひ方になり、松林尼、以前の形の上へ腰衣を附けて、茶を立て、持ち來り
　不束ながら、お茶一服。
　ト差出す。大領、何心なく取つて
大領　やう／＼の事で茶に有りついた。心措きなう所望いたすであらう。これは服加減な。
　ト茶を飲み、リツトリとなり、思ひ入れ。兩人顏見合せ
松林　モシ、如何遊ばされました。お心慥かに。
　ト立寄つて介抱する。大領、ホツと心付き
大領　ア、、ホツと逆上いたした。サ、、歸館申し付けい。これより道を替へ、水練の荒奴諸とも、川へ打入れ。近侍の者、馬を引け／＼。
松林　只今、御近侍の者は、何かの御用意。
　ト大領、松林尼を見て

大領　ヤ、其方は。
松林　ハイ、お給仕の者でござりまする。
大領　すりや、今の服加減は、其方か。
松林　左樣でござりまする。
大領　アノ、いよ／＼其方が。
松林　ハイ。
大領　ハテ、風流な其方が手前。ムウ。
　ト松林尼を見て、チッと思ひ入れ。誂らへの合ひ方。松林尼、望月、こなしあつて
望月　不束なる手前、御意に叶ひ、拙僧までが身の大慶。
松林　お恥かしう存じまする。
大領　院主々々。こりや何者ぢや。
望月　この者は拙僧が、弟子でござりまする。
大領　ナニ、弟子ぢや。ムウ、さうであらう。其方が教訓よろしきと見えて、取りなりと申し、萬事に通達、悧發才智の者と見えるが、コリヤ／＼、近う參れ／＼。
松林　有り難う存じますが、あまり恐れ多う存じます。
大領　苦しうない。近う寄れ／＼。コリヤ／＼、其方が形では隨分、歌の道なぞも、心得て居らうな。
松林　御意ではござりますが、師の坊の敎へくれましたる

經文の外、歌道なぞと申しましては。

大領　イヤ〳〵、さうであるまい。師の坊と申し、その傍らに立廻る其方、佛學の外に歌道の儀も、存じて居らう。予は至つて執心ぢやが、サ、、其方、何なりとも一首いたせ。

松林　これは又、御無體な事仰しやります。かゝる片ほとりの山路に居りまする不束者、御免なされて下さりませ。

大領　免せと申すか。然らば歸る。馬を引け〳〵。歸るぞ歸るぞ。

ト松林尼に心を殘し、立ちかゝるを

望月　御前、暫らくお待ち下さりませう。御意に叶ひまする儀を、何なりと申しつけるでござりませう。先づ〳〵……、日頃にも似合はぬ其方が心底。たかの知れたる雪月花、四季を結んで腰折れは、猶更一興。何なりと、早う〳〵。

松林　それぢやと云うて。

望月　ハテ、何事もこの場の一興。雪月花も、合點か。何卒彼れめに、お歌の題を下し置かれませう。

大領　それは一興。然らば、題を遣はさう。料紙持て〳〵。

望月　畏まりました。コレ、雪月花ぢやぞ。

ト云ひながら料紙を出す。

大領　ハテ、題は何に致さうな。

ト筆を取つて思ひ入れ。兩人顏見合せて、こなし。大領、何やら書いて

サア、この題にて一首いたせ。

ト題を差出す。

松林　すりや、どうござりましても私しに。お歌の題は、月雪花の内でござりませうな。アノ、この題は、山の上にて船を漕ぐ。これは怪しからぬ、お難題でござりまするな。

望月　イヤ、そんなら月雪花ではなうて、山の上にて船を漕ぐ。これは怪しからぬ御難題。なまじ要な事申して、御機嫌を損ねやうより、お斷わり申せ〳〵。

大領　なんと、面白い難題であらうがな。

望月　イヤモウ、この上もなき御難題、只管この儀は、

松林　お斷わり申しなば、却つて御不興。

望月　それでも、山の上にて船を漕ぐ。

松林　その御難題を其まゝに、腰折れながら

大領　なんと申すぞ。

ト思ひ入れ。松林尼、筆を取り、サラ〳〵と認め

松林　ハッ、お恥かしながら。

ト出す。大領取つて

大領　題は、山の上にて舟を漕ぐ。その歌は「富士映る田子の浦邊の夕風に、船漕ぎ寄せん、山の上まで」。

望月　ヤ、その難題を、どうして其方が。「富士うつる、田子の浦邊の夕風に。

ト大領へ思ひ入れ。

大領　船漕ぎ寄せん、山の上まで」、天晴れ秀逸。器量と云ひ、才智と云ひ、予も殆んど感心いたした。

松林　お恥かしう存じます。

大領　恥かしいか。サヽ、命を取れ〳〵。

ト引寄せる。望月これを見て

望月　南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

ト思ひ入れ。大領こなしあつて

大領　かゝる邊鄙に斯樣なる者ありと、この年月存ぜざるこそ殘念。師弟ともに感心いたした。師の坊、なんなりと、願ひの筋あらば、叶へてくれるぞ。

望月　有り難きそのお詞。お願ひと申しましても、沙門の儀でござりますれば。

大領　山門伽藍の建立か。

望月　イヤ、拙僧がお願ひと申しまするは。

大領　其方が願ひは。

望月　ハテ、何をがな。

ト合ひ方になり、植込みの葉櫻の一枝を取つて

恐れながら、拙僧の願ひ、斯くの通り。

大領　この葉櫻の一枝が、願ひとは。

望月　櫻は花の司にして、一旦美目を輝かすと雖も、時の嵐に吹き散らされ、葉櫻となつて世に捨てらるゝ。身も會稽の春を待ち、一度盛えん、愚僧が心願。花は櫻木、人は只、兩腰を横たへ

大領　ムウ、承知いたした。其方、武士になりたいか。

望月　御意の通りでござりまする。

大領　然らば其方を召抱へてくれやうが、仕官いたすか。

望月　アノ、私しを。

大領　して、祿の望みは。

望月　お取立ての私し、祿に望みはござりませぬ。勤功に依つては、御意次第。

大領　神妙なる返答。今日より近習にて召仕ふぞ。

望月　有り難う存じます。

大領　ト大領、硯筥を引寄せ、サラ〳〵と認め
知行をくれう。
ト差出す。望月、松林尼見て
松林　ヤヽ、こりやコレ御教書。
望月　諸侯に等しき、この高祿。
望松　エヽ、有り難う存じます。
大領　今日より、予が家來ぢやぞ。
松望　ハッ。
大領　然らば奉公初めの、忠義が見たい。
松林　武士の忠義と申しましては。
望月　命は君に奉る。
大領　奉公初めに、床をとれ。
望月　そりや、何ゆゑ。
大領　抱いて寢る。
望月　そりや、何者を。
大領　あの女を。
松林　エヽ、わたしや。
大領　不承知か。
松林　でも、釋尊の敎へには。
望月　破戒墮落を一つの誡め。

大領　その釋尊も、元は斯うして。
ト松林尼を引寄せる。
松林　モシ、何をお隱し申しませう。
望月　彼れめは拙者が、愚妻でござる。
大領　それも承知、下世話の捌き、七兩二分。
ト袖判を投げて遣る。望月取つて
望月　こりやコレ、君のお袖判。
松林　嬉しうござんす。
ト大領に寄りそふ。
望月　まんまと首尾よく。
大領　ヤ。
松林　アモシ。
ト大領を抱き、額見合はせて、持ちたる珠數を、舞臺へ打ちつける。チョンと木の頭。
大領　見ぬ振り致せ。
ト望月、墨附にて額を隱す。この仕組みよろしく　ひやうし幕

第一番目四建目

浅草紅粉屋の場
花房隠れ家の場
隅田川船中の場

役名――鎌田又八娘、お淺。紅粉屋娘、おかん。紅粉屋母、おくま。畫師、花房一洗實ハ花房求女。車力、丑五兵衛。片濱村の彌五兵衛。望月帶刀實ハ長喜寺の望月。下女、およし。古鐵買ひ、權七。へち馬銅八。大江息女、紅梅姫。嶺川勇造。谷澤頼母。柏木曾平太。梁川嘉藤次。金澤丹造。奥女中、梅田。同、皐月。同、千早。茶道、町山。湯島の三吉。鳥居又助。

本舞臺、三間の間、淺草諏訪町、紅屋の見世先。軒に暖簾、紅看板。正面紅簞笥。いつもの門口。勘八、色の黒き手代にて帳を附けて居る。若い衆二人、襦袢一つにて、莨のみ居る。中間一人腰を掛け居る。さんげ〳〵の合ひ方にて幕明く。

ト矢張り鳴り物彈きながら

勘八　コレ〳〵、手間の衆、今日は川口から注文の來た、板〆にかゝつてもらはずばなるまい。

若衆　アイ〳〵、その積りでござります。昨日の紅鹿子も、よく色が冴えやしたねえ。

勘八　イヤモウ、京染め同然サ。問屋方でも、上方へ上ぼせる者はないて。

若衆　左樣でござります。

ト話しのうち、暖簾口より、おくま、紅屋の婆にて出る。

くま　モシ〳〵、昌伯さまのお使ひのお方え。

中間　ハイ〳〵、私しでござります。

くま　お前、お歸りなすつたら、旦那へ左やう仰しやつて下さりませ。お手紙の通り承知いたしました。いづれ私しが一兩日中に上がりますと、よう申して下さんせ。

中間　ハイ〳〵、畏まりました。

くま　コレ〳〵、手間取り衆、如何に日が長いといつて、節句前でござんす。野良かはかずと、仕事にかゝつてもらひませう。

勘八　モシ〳〵、あの衆も、いま莨に致されました。

くま　莨は、仕舞うてのんでも、濟むわいの。

若菜　イエ／＼、もう仕事にかゝります。
中間　ハイ、お暇いたしませう。
　ト右の鳴り物にて向うへ入る。若い衆は下手へ入る。
勘八　モシ／＼阿母さま、手間取り手合ひに、今のやうな事、仰しやらぬがようござります。
くま　云へば悪いかいなう。コレ、勘八、昨夜も今朝も、わしが知らぬ顔して見て居れば、継子娘のあのおかんに、わが身は、嫌らしい眼使ひしやるが、まだ止まぬかいなう。マア、わしと譯のあつた身ではないかいの。
勘八　モ、御尤もではござりまするが、私しがこの眼附きは、性得生れつきでござります。
くま　黙りや。其方はわしを阿房にしやるか。コレ、あの娘のおかんは、ありや、先妻の娘。連合ひも疾に病死、後家立てゝ居るわしが目を抜き、やゝともすればわが身は、附けつ廻しつしやるゆゑ、憎らしめの為、この家を追ひ出したりや、道中ばたで雲助して居やるお不便さゆゑ、料簡して、以前の通り番頭さすと、云はせて置いても有やうは、わしが妻と思ふから。コレ、ちつとは、わしが恩も思やいの。
勘八　左様でござります。お前の御恩は忘れは致しませぬが、又あの娘御にも、決して心は掛けませねど、あの方から折々は、およしを頼んで口説きのまゝ。ナニ私しがお前をのけて、仇な心は、これ程も持ちませぬて。
くま　そりやその筈の事。此方の家を出ると其まゝ、雲助しやつた證據には、それ／＼、洗ひ粉の箱板を見るやうに、目ばかり光つて、色は眞ッ黒、その顔色の白くなるやうに、見拵で辛抱しやいの
勘八　ハイ／＼、あなたの御意見、キッと骨身にこたへましたが、阿母さま、あのおかんさまは、お奉公の口があるぢやござりませぬか。
くま　あるわいの。外でもない、多賀のお手醫者、昌伯さまへ、妾奉公。お支度金も、疾に受取り、もう極めて置いたわいの。娘を奉公に追ひ出せば、わが身と跡は差向ひ。
勘八　左様ならば阿母さま、この上ともに、お變りなう。
くま　コレ、勘八、必らず其方も
勘八　ハイ。
くま　見捨てゝたもんなや。
　ト思ひ入れ。聖天の鳴り物になり、向うより、三吉、派手なるやつし、團十郎縞の手拭を持ち、出て来り、

門口へ來て

三吉　ハイ、御免なさりませ。三吉でござります。

勘八　これは親方、私しもお蔭が叶つて、また歸りました。相變らず、お賴み申します。

三吉　番頭の勘八どのか。大分黑くなつたなう。

勘八　その筈でござります。この頃まで、道中で稼いで居りましたから、大きに日に燒けました。面の黑味の褪めるまで、お店守りを致さうと存じます。

三吉　呉服屋の前賣りは色が白いが、こなさんは黑んぼ島の手代と見える。コレ、珊瑚珠の出物があつたら知らせて下さい。

くま　ハテ、氣の輕いお方ぢや。ホ、、、。コレ、お茶を上げぬか。よしは居やらぬか。娘も來て、この間のお禮を申しやいの。

ト合ひ方になり、おかん、三升縞の浴衣にて、煙草盆を持ち、下女およし、茶を酌んで出て來る。

よし　モシ、三吉さま、この間は三軒家でおかんさまが、いかう御馳走さまにおなりなさんしたと、お噂でござりました。わたしどもも、ようおまさなされましたな。

三吉　こいつはおよし坊か、ばばアが云ふのか。コレ、何も御馳走は無かつたのサ。

かん　イエ〳〵、あの晩は、お前さまのきつい御馳走。わたしや、嬉しう思うて居りましたわいの。ナウ、母さん。

くま　イヤモウ、近年の馳走であつたわいの。イヤ、コレ、娘、わが身は、浴衣一つになつて居てもよいかや。暑いやうでも、どうやらジワ〳〵します。コレ、風邪引くまいぞや。

かん　イエ〳〵、わたしや浴衣で、丁度よい加減でござんす。モシ、三吉さんえ。思へば思ふ程、わたしやアノナア。

ト思ひ入れ。

ハイ、アノ、御馳走さまでござんしたわいな。

三吉　ナニお前、まだ御馳走の致し方もござりませうが、何を云つても、この婆アが……イエモウ、不漁だと云つて、魚は切れる、誠にお粗末な事サ。有りやうは申し譯のお手紙でも上げるのだが、何を申しても、筆が廻らないから、そこらの所は料簡して、大目に見てくんなさいやし。イヤ、大目と云つちやア、番頭さんと差合ひだ。

ト懐より手拭を出して、おかんに渡さうとして心附

　　き、思ひ入れよろしく、無性に汗を拭いて挨拶する。
かん　なんのまア、お手紙が參らいでも、わたしやお前さんの事を、疎末に思ふ心ぢやござんせぬ。ナウ、よし。さうぢやないかいの。
よし　ハイ〳〵、左樣でござります。このお娘さんは、その晩の事、それは〳〵仰しやつてござります。
三吉　ナニサ、お前。
　　ト手拭を綯にして居る。
くま　オヤ、お前さんの手拭は、この子の浴衣と、同じやうな染だね。
勘八　成る程、同じ染の縞でござります。これは近年の流行り物、おかんさまのお拵らへなされた浴衣と、あなたの手拭の染と同じ縞サ。
三吉　左樣かえ。この手拭の縞は、この頃流行りの團十郎縞と云ふがね、鎌輪奴が引込んだら、三升格子が出るやつサ。その縞を浴衣にするとは、此お子は成田屋が贔屓かえ。わつしは又、あの役者は嫌ひだね。
かん　わたしや又、この縞が、きつい贔屓でござんすえ。
　　トこなし。
くま　わたしも又、あの毎度流行つた桐縞も、今では甚六縞と云ふわいな。
三吉　無宿縞が聞いて呆れらア。
勘八　宗三縞はあつても、青梅縞であらう。
三吉　あつちやア、黒んぼ縞だ、ハヽヽヽ。
くま　ほんに、三吉さんにも、お話し申しませうが、この子も近々に、御奉公に上がりますわいな。
三吉　エ。
　　トおかん、その氣はないといふこなし。
して、どこへ行きなさるえ。
くま　ハイ、外でもござりませぬ。多賀のお手醫者、安達呂伯さまといふ方が、娘を欲しいと仰しやりまして、マア〳〵、最初は御奉公で、末々はお貰ひなさりたいと仰しやる、御相談でござります。お前さんも、お喜びなされて下さりましな。
三吉　ハイ、そりやおめでたい、お話しでござりやす。隨分とお喜び申しやせう。
　　トむつとするを、おかん、こなしあつて
かん　これはしたり、どうしてマア、わたしが屋敷へ
三吉　イエ〳〵、行くがいゝのサ。行くとお前、出世だわな。

ト思ひ入れ。
勘八　左やうサ、この子の仕合せでござりやす。娘を内へ置くと、得て蟲が附きたがるものでござりやす。ハ、、ハ、、。
ト此うちおかん、氣の毒なる思ひ入れ。
三吉　さうでござりやす。蟲が附いちやア、成る程、値が下がりやせう。油斷をしなさらぬがよい。さう云つても又、此方も今時分の娘に、油斷はなりやせぬ。
トおかん、ムッとする思ひ入れ。
かん　エ、、なんで娘に油斷のならぬ事がござんす。お前さんは、娘子供の事ばかり云ひなさんすが、おかみさんのある事は、隱してゞござんせうな。
三吉　ナニ、わつちらは、女房は無いのサ。併し、無いでもないと云ふのは、アノ多賀の御家中、花房主膳さまといふお方に、若黨奉公をしてゐた、鎌田又八と云ふ、片瀬生れの大力な親仁があつたが、お聞きなさりやし、その娘も同じやうに大力。或る時、その娘を、わしが女房に貰れと、主膳さまが仰しやつた。云ひ譯けは致して置きましたが、その女の親も病死。主膳さまもお果てなされて、それきりになつて居ります。

かん　それ見たさんせ。矢ッ張りおかみさんがあるのぢやわいなア。
よし　左樣でござります。ようお隱しなさんすわいなア。
三吉　ナニ隱すものだ。誠にこの通りサ。お前も母さんに氣を揉ませないやうに、お醫者樣の御新造さまになるがいゝのサ。
かん　イ、エ、わたしやア、外へ行く事は否でござんすわいなア。
くま　なんぢや、否ぢや。コレ、其やうに、其方に我まゝ、云はせて置くものか。行かぬと云やらば。
ト立寄るを、三吉、留めて
三吉　アモシ、母さん、云はゞ年端もゆかぬ娘子供の云ふ事を、取上げねえがようござりやす。
くま　それぢやと云うて、あまりッペコペ。
三吉　ハテ、ようござりますわな。
くま　モシ、三吉さん、お前、娘に、よう云ひ聞かして下さんせ。
三吉　ハイ、そりやモウ、わつち等が云つたといつて、得心もありやすまいが、そこが又話し合つて見やせうよ。併し、云ひ聞かしては見ませうが、不得心ならせう事が

ない。成たけ、わたしが勧めてこの子の
くま　得心するやう、三吉さん
三吉　阿母さん
勘八　近頃いらぬ
三吉　エ。
勘八　お世話でござります。
ト合ひ方になり、おくま、勘八、およし、奥へ入る。
おかん、思ひ入れあつて
かん　モシ、三吉さん、この間アノ江の島歸りに、よい所でお目にかゝり、その夜お前のお情が、ほんまになつて、モウ〳〵、外へといつては、母さんがどのやうに云はしやんしても、行く事ぢやござんせぬ。さう思うて下さんせ。
三吉　コレ〳〵、さうお前、云つてくれゝば有り難いが、いま云ふ通り、云ひ號けの女房はあつたが、それなりに、お世話なされた主様さまは横死なさる。尤もわしがお屋敷へ、お出入りになつたもあなたのお庇、その御恩を思ふから、いま浪人の求馬さま、及ばずながら、お世話も申し、また求馬さまにも、わしを兄とも思ふと、忝ないお詞。それゆゑ、あなたの御難儀を、成たけこの身に引受けて。
かん　その男氣なお前ゆゑ、わたしも結構な母さんが、好かぬ所へ行けとある、その大難も、どうぞお前、引受けて下さんせえ。又お前の身の上に、どんな難儀が出來やうとも、わたしや又その時は、勤め奉公してなりとも、それにいとひはござんせぬ。必らず見捨てゝ下さんすなえ。
三吉　そいつは有り難いの。お前がさう云ふ氣前なら、ナニ女房に持つよ。併し、お前に似合はぬ、たつた一つ、心意氣の惡い事があるの。
かん　そりや、なんでござんすえ。
三吉　外ぢやアねえが、この浴衣、團十郎縞は、恨みだの。
ト愁嘆になり、向うより、五兵衛、やつし車力の形、下駄にて、せんごりの御幣を大ぶん持つて捨ぜりふにて出て來り、門口へ來て、軒へ御幣を差し、何心なく内を見て居る。
かん　この浴衣を拵らへたも、平常お前が、その縞の、手拭ばかり持つて居なさんすと聞いたゆゑ、お前と一緒に暮らす心で、拵らへた浴衣ぢやわいなア。

三吉　さう聞いちやア、まんざらでもないが、ほんに小ッ恥かしい、生れて初めておらア、文といふものを書いて持つて來たゆゑ、これを見ると心意氣がすつぱり解るの。
かん　そんなら、この文に詳しう書いて。
ト文を出して渡す。五兵衞、外より覗きゐる。
三吉　コレ、外の者に見つかるまいよ。
かん　樂しんで、見ようわいなア。
ト袂へ入れる。
三吉　お前、こつそりと、出られるか。
かん　アイ、下女の、よしに頼んで置いたわいな。
三吉　そいつは奇妙、ちよつと寄りねえ。
ト引寄せる。門口の五兵衞、思ひ入れして居たりしが、堪えかねて
五兵　南無奇妙頂來、さんげ〳〵。
ト履いたる下駄にて門口を無性に叩く。二人は悧りする。奧より勘八、出て來り
勘八　なんだ〳〵。門口で、やかましい。モシ、何の音でございます。
三吉　何だか知られねえが、おいらはモウ、生膽を拔かれた。
勘八　とつけもねえ時分に、七草を始めたは誰れだ。
ト見て
ヤ、こなたは、丑坊ちやねえか。
五兵　丑だ〳〵。丑五兵衞も、どうやら馬のやうになつた。祈禱斷離の御幣を門口へ差しに來て、とんだ事を見たから、立すくみになつた。こいつは惡い風にでもならねばよいが。
勘八　何をうは言を云ふのだ。どうでも貴樣は風氣だわえ。
トさんげ〳〵になり、向うより若い衆一人、使ひの者にて出て來る。
若衆　モシ〳〵、お前の内に、三吉さんは居られますかな。
三吉　アイ〳〵、わしだが、どこから來なすつた。
若衆　イヤ、私しは、お前のお世話なさるゝ、繪描きの一濃どのゝ、店請けの事で、家主から使ひに來ました。たつた今來て下さりませ。
三吉　エヽ、店請け人の事かえ。あれ程わしが、云つて置くに。晩ほどにでも參りませうと、さう云うて下さりま

せ。
若衆　イエ〳〵、ちよつと今、來て下さりませ〳〵。
三吉　ハテ、わからねえ奴に會つちやア叶はねえ。
かん　お前、お歸りなさんすのかえ。わたしやまだ、お前に云ひたい事が、たんと。
ト勘八を見て思ひ入れ。
三吉　アイ〳〵、直に來るのサ。フム、先刻の物は。
ト文の事を氣を附ける。おかん思ひ入れ。
かん　アイ、爰の袂に。
ト思ひ入れあつて、出しかけて見せる。
勘八　綻びでも切れましたか。
ト寄るを、振り切り
かん　エヽ、知らぬわいなア。
勘八　これは御挨拶。
若者　サア、來て下さりませ。
三吉　エヽ、うるさい男だ。
ト聖天になり、おかん、ツンとして奥へ入る。三吉、使ひを連れて向うへ入る。五兵衛、勘八殘り
五兵　コレ〳〵、番頭々々、もういゝ加減にさつしやい。おらアもう、出ると早々、氣の悪い目にあつて、なんだか、目が廻るワ。ア、こいつは、餘ッぽど逆上せたと見える。貴樣も、あの娘に、どうやら當つて見る樣子だが、そりや悪いの。ハテ、芝居を見やれ。ツイに手代が娘に、いちやついて、勝利のあつたは、これまで覺えぬ。
勘八　イカサマ、そこもあるわえ。時に和坊、さうは云ふものゝ、內の娘が、祝言の邪魔をして、此方へ引上げる相談はあるまいか。
五兵　そりやアモウ、悪智慧を振つたら、いゝ算談もあらうから、貴樣、マア〳〵、おれに任せて置くがいゝ。
勘八　何分貴樣を賴む。併し、コレ、アノ、內の後家には、沙汰無しだよ。
五兵　エヽ、勘八、婆アとまだ切れぬのか。好い加減に切れてしまはつしやい。
勘八　わしはさう思ふが、後家御が何分切れる心は。
五兵　エヽ、色男め。
トこの時、おくま、出で來り
くま　オヤ、五兵衛どん、お出でか。わしやアこなさんに賴みたい事があつたに、よう來て下さつたの。マア、其ましはこの勘八に。コレ、其方、よいやうに、この人を

頼んで置きやいな。

勘八　ハイ〳〵、そこに如才はござりませぬ。先刻からこの男を頼んで居りました。

くま　さうかいの。コレ、五兵衛どの、譯を聞いてゞあらば、後方こなたの所へ行かうも知れぬ程に、必らずその時頼んだぞや。

五兵　そりや隨分、呑み込んで居りまするて。

くま　そんなら娘が、御奉公の事について、並木町まで行かねばならぬ。殊に依つたら、その時ちよつと寄りませう。

五兵　ハイ〳〵、左樣なさりませ。

くま　コレ〳〵、よしや〳〵、ちよつと來や〳〵。

ト奥より、およし、おかんの三升の浴衣を持ち出て來り

よし　ハイ〳〵、何の御用でござりまする。

くま　コレ、ちよつと娘が世話してくれる、肝煎りの所まで行つて來る程に、ちやつと浴衣を持つて來てたも。

よし　ハイ〳〵、畏まりました。ちよつとマア、此お衣桁へ掛けておきまして。

ト衣紋竹へ掛けて、欄間へ下げる。

くま　そりや娘が、浴衣ぢやないか。コレ、ちやつとわしが浴衣を取つて來やいなう。

よし　ハイ〳〵、畏まりました。

ト奥へ入る。この時、浴衣、風にて煽り、袂より件の文、卷きほどけ、段々と出る。おくま、思ひ入れあつて

くま　ほんにマア、この縞染めは、きつう流行るぢやないかや。

勘八　左樣でござります。近年の流行り物でござります。

くま　なんと、わしもその流行り物を着てもよからうかいの。

五兵　よい段ではござりませぬ。今の若さに。イヤ、今の年、まだ流行り物を召さぬも御損。

くま　そんなら、着ても大事あるまいかい。併し、似合へばよいが。

勘八　請合つてお似合ひなされます。

くま　さう云やるなら、あの子の浴衣を、ちよつとわしが借り着して。

ト衣紋竹より取らうとする。この時、袂の文を見附ける。

五兵　紅さま參る、三より。
くま　ヤ、娘が浴衣の袂から
勘八　出たのは、附け文
五兵　書いたその手は、確かに湯島の
ト文を取る。
勘八　道理で三より。
くま　エ、憎い女郎め。
ト奥へ思ひ入れ。
五兵　ア、モシ。
ト囁く。三人、こなしあつて
くま　そんなら、こなたに
五兵　お任せなさい。
く勘　貴様に頼む。
五兵　モシ、あの子が聞きやす。
ト三人、思ひ入れ。五兵衛、文を懷中する。四ツ竹の合ひ方にて道具廻る。
本舞臺、三間の間、鼠壁、紙幟の繪にて腰貼りしたる繪描きの内。棹には小幟の花笠を大分吊し、三間餘の大鯉を吊しあり、求馬、浪人の形にて、机の上にて小幟を書いて居る。側に銅八、勇みの拵らへにて、繪の具を拵らへ居る。いつもの門口。下の方、車丑と、かご字にて書いたる腰障子。傍は五兵衛の内。障子に鍵をおろしあり、隣格子の體。門口には權七、古手買ひの形にて、荷籠を下ろし煙草のんで居る。四ツ竹節にて道具とまる。
銅八　コレ〳〵、どうぞ早く描いて下さいな。おらア、性急者だから、出來ると早々、立てにやならねえ。早く描いて、くんねえ〳〵。
求馬　それぢやというて、まだ節句には日程の
銅八　これサ〳〵、節句もへちまも構ふ事はない。わつち等は、正月から正月までも幟を立てるつもりサ。そして、あの大鯉は、もう出來たのかえ。
求馬　あの吹流しは、上がつて居ますが、あれはマア、狭い所へは立ちますまいが、どこへ立てさつしやるのぢや。
銅八　あの鯉は、本所の方へ遣りますから、隨分狭くはねえのサ。わし等は又、べら坊に大仰な事が好きだから、あんな鯉を拵らへて、遣ひ物にするのサ。
求馬　左やう見えまするが、その大仰では、お附合ひも定

めし大分。

網八　ある段ではござりやせぬ。この節句前も、柏餅の恐らく十四五俵も搗かずばなりやすめえ。

權七　モシ〳〵、旦那、お前、この間の布袋の掛け物、絹地へ描いた日の出に鶴、買はうと云ひなさるから、置いて行つたが、あの代物はどうさつしやる。此方もお前、商賣物だ。早く方を付けて下さりませ。

求馬　成る程、尤もでござる。いづれあの圖は、我れら手本に致すおや程に、買つて置きまする。一兩日待つて下さりませ。

權七　サア、そこでござります。私しもお前、商賣づくの事、お前に間違ひもあるまいが、モシ、斯うなさりませ。なんぞ道具質でも有らば持つて參りませう。さうしてマア、僅かな事だから、方を附けておしまひなされませ。

求馬　イヤモウ、わしも貴様に氣の毒でやゆゑ、なんぞ代りに遣りたいが、見さつしやる通り、代りに遣る質物の品も

　ト内を見廻す。權七もあたりを見て

權七　モシ〳〵、ござりまする。あの腰の物はどうでござります。

　ト求馬の後にある、三建目より廻りし脇差を指さす。

求馬　イヤ〳〵、あの腰の物は、ちよつとした譯で、手放す事はならぬ品ぢやて。

權七　サア、そこでござりまする。手放されぬ程の代物でないと、人に借りた物は、ツイそれぎりになりやす。あの大小なりとも、當分お預けなさりませ。

求馬　サ、わしも差つまつた事が度々ござつたが、これまで放さずに置いたのぢや。

　ト脇差を取つて來る。

權七　お前、惡い合點だ。賣りなさいとは云はねえわな。この間の代が濟むまで、お預けなさいと申しやすのだわな。なんに龍にろ買ひだと云つて、さら無躰な事もしませぬわな。

求馬　でも、どうもこの代物ばかりは。

權七　そんなら、ようござりやす。道具質も取りやすまいが、その代り、ちよつとお前を、大家様へ屆けて行きやす。モシ、家主樣はどこだえ。

求馬　なぜ屆けをさつしやるのぢや。

權七　それだといつて、商人の物を買つて、手本にすると云ふが、内に無いから、もし間違つた事があつちやア、

賣つて遣らうと取つて來た、先の者へ濟みませぬから、ちよつとお家主樣へ。

求馬　ア、、コレ〳〵、僅かな事に家主樣まで話されては、わしを世話をする三吉の手前、ア、、どうも氣の毒。

銅八　コレ、お前、そりやアいくらの事だえ。

求馬　僅か貳朱ぐらゐの事ぢやて。

銅八　そんならお前、明日はわしが鍔の代を持つて來るから、それで濟ましてしまひなせえ。

權七　明日取りなさる當があらば、マア、その取れるまで、あの腰の物を寄越して置きなさいな。

求馬　そんなら、さうもしませうが、必らずそれまで、貴樣に賣つたのではないぞや。

權七　そりや承知サ。預かつて置くからは、賣る事ぢやござりやせぬ。わたしが內は阿部川町、道具屋の權七と申しやすぞや。

求馬　そんなら、預けて置いた。

ト權七、脇差を受取る。

權七　明日、お前、仕事の代を取りなさつたら、勘定して下さりませ。わしもその時は、直ぐにお返し申します。

求馬　必らず賣拂ひは。

權七　承知でござります。お前さん、お話しなされませ。古鐵買はう〳〵。

トてんつゝになり、件の脇差を籠へ入れ、振返り、舌を出し、思ひ入れあつて向うへ入る。

銅八　イヤモウ、古鐵買ひといふ者は、何だか味に當るものだね。お前また、あの手合ひの物を、うつかり買ふが惡いわな。

求馬　サ、わしもさう思うたが、無理やりに賣りつけて行きました。

銅八　ニ、、お前も人の善いものだ。

ト淨天の鳴り物になり、向うより、又助、黑紹の羽織、袴、股立ち、大小、雇ひ若黨の形にて、件の一腰を手に取り、拵らへを見ながら出る。後より權七、籠を擔いだまゝ附いて來り

權七　モシ、頭、思し召しがあらば、お買ひなされて下さりませぬか。

又助　買つて置いてもいゝが、貴樣の云ひ値ぢやア高いぞえ。

權七　ナニ、お前、高い事はござりやせん。實は高うの、あの浪人の繪描きが所へ、五百ばかりの物を賣つたが、

その殘りも今に拂はず、どうやら引賣りにした樣子だが、いろ〳〵と騙して、その脇差を當分代りに取つて來たが、必らず賣つて下さるなとは頼んだが、古鐵買ひの手へ渡つて、ナニ賣らずに置くものか。親方、壹分ならお前、掘出し物だ。

又助　その位なら買つてもいゝが、錢がさうあればいゝか。

ト叺莨入れより四文錢七百ばかりと、貳朱を一つ出し

コレ、貳朱と錢がこれだ。

權七　ようござりやす。上げやせう。

ト錢を受取る。

又助　さうして、こりや向うの繪描きの内の代物か。

權七　左やうサ、口錢に掛けて、たうとう錢にしたが、イヤ、人の惡い古鐵買ひだね。

又助　人の惡い商賣ぢやアねえ、おぬしばかり人が惡いのだ。

權七　こいつは當りだね。ハヽヽヽ。古鐵買はう〳〵。

ト樂天にて權七、引返して向うへ入る。又助、思ひ入れあつて

又助　そんならアノ求馬が、いつぞや屋敷をお暇の出た時、取上げられたこの脇差、若殿の手から貰つたと聞いたが、安金で又助が、買つて置いたら、なんぞの役に。

ト思ひ入れあり

あの求馬の口裏をむしつて見ようと、供先から廻つて來たが、道具質に遣つたと云ふを、あそこの内へ今直ぐに、持つても行かれず。

ト門口へ來り、思ひ入れあつて

ア、歸るまで、爰らへでも上げて置かうか。

ト門口の鴨居へ上げて

ハイ、御免なされませ。

ト入る。求馬見て

求馬　ヤ、其方は屋敷に居やつた

又助　ヘイ、鳥居又助めでござりまする。

求馬　ほんに、又助々々、よう尋ねて來てくりやつた。

又助　ヘイ〳〵、疾にお尋ね申します筈。今日まで上がりませぬは、イヤモウ、申し譯もない儀でござります。

銅八　コレ〳〵、繪描きさん〳〵、この幟はもう出來たのか。

求馬　出來た〳〵。大きにお待遠でござりました。この大鯉もお持ちなされまするか。

ト小幟は、棹へ掛けて渡す。

銅八 イエ〳〵、そりや明日に取りに來やせう。この代は濟んでゐやすよ。

求馬 慥かに受取りました。

銅八 鯉は明日取りに來やせう。お前、お話しなさりませ。サア、内へ行つて飾るぞ。

ト運天になり、銅八、幟を持つて向うへ入る。あと合ひ方。又助、思ひ入れあつて

又助 見ますれば只今では、御浪人の御身分、渡世の爲に、あなたには。

求馬 見やる通りの微かな手業。お屋敷に勤めて居るうち、描き習うた浮世繪も、今は渡世の種となり、僅かな筆の命毛に、助けられ居る花房求馬。繪描きの名乘りも其まゝに、同じく花房一洗と、描きならひの幟繪描き、賴もしうしてくれるは、屋敷へ出入りの湯島の三吉。あの者が世話になつて、今はわしを身に引受け、よう世話してくれるわいの。

又助 それは奇特な人でござります。モシ、慥かアノ前度、あなたのお内に勤めてゐられし、ア、何とか申しました。オヽ、それ〳〵、鎌田又八といふ大力の親仁どのがござりましたが、まだ達者でゐられまするかな。

求馬 イヤ〳〵、あの者は最早三年以前に病死せしとの事。生れは鎌倉片瀬村、至つて大力。その娘が一人あつて、幼少のうちに屋敷の御奉公が、見習はらせたう存じますると、御家老石部氏へ少しの間、淺尾といふ腰元奉公。

又助 モシ〳〵、旦那樣、お前樣、御存じかは存じませんが、アノ淺尾というて、御家老樣に勤めて居た子は、ありやアお前樣の、お姉樣だと申す噂がござりました。

求馬 其方は譯も無い事を申す。どうしてアノ淺尾が、身が姉であらう。コレ、あの淺尾はナ、親主膳どのが、至つて目をかけて遣はされ、末々はあの湯島の三吉へ、女房に遣はさうと、親父六もその心で、云ひ號けして居やつたが、その淺尾は、親に似たやら、女に稀れな力強。やう〳〵屋敷に一兩年も居やつたとの事。病氣づいて片瀨へ歸り、それから江戸へ出やらいで、たうとう今では片瀨村の、海女も同然。それがマア、どうしてわしが姉と云ふには。

又助 モシ〳〵、お前樣は御幼年の時分ゆゑ、御存じはござりますまいが、親旦那主膳さまが、お腰元にお手が掛り、懷妊して産み落したは娘のお子。その娘のお子を持

參で、御家來の又八へ縫づけ、先の娘と思はせて、誠の所は主膳どの、お胤。そんなら、あなたの姉樣も、同然ではござりませぬか。

求馬　ハテマア、てまへは、よう詳しう存じて居やる。

又助　ハイ、御家中でのお噂を、聞き挾んで居りました。モシ、旦那のお噂を申せば、アヽ、お氣の毒なは、多賀のお屋敷、今參りの望月といふ成上がり、女の尼をお部屋にして、お家の方と敬まはれ、國元さまより入らしつた、お姫樣のお縁談、今日までも御沙汰なく、いとしぼなげに大振り袖、打捨て置かれぬ所を、矢張り其まゝ。大江の家とお館は、誠に合戰が出來ぬばかり。忠臣の侍ひは、戰が出るやら、閉門やら、イヤモウ、聞いても腹が立ちまするて。

求馬　そんなら噂に違ひなう、お屋敷内は皆佞臣、親仁さまにも思はぬ横死。黄金の鷄失ひし、其お咎めでわしは勘當。

又助　して、その品は、今以て知れませぬかな。

求馬　それぞといへる手掛りも。

又助　ハテ、困つたものでござりまするな。

ト脇を向いて嘲笑つてゐる。てんつゝになり、向うより、おあさ、やつしの形、菅笠を持ち、跡より彌五兵衛、田舍者の拵らへ、脚絆、草鞋、風呂敷包みを擔ぎ、出て來り、花道にて

彌五　コレ〳〵、おあさどの、いま跡の茶屋で聞いて見たが、繪描きどの、内は、向うだと云ひまする。

あさ　わたしも子供の時分は、觀音樣へお供を致して參つたが、在所へ歸つて餘程の間、久し振りでお江戸へ參り、方角とてもうろ覺え。お前、よう聞合はせて見なさんせ。

彌五　イヤ〳〵、向うの内に違ひもあるまいて。

ト兩人、門口へ來て

ハイ、御免なされませ。わしどもは、鎌倉の片瀬から參りましたが、この間、アノ浪人して出てござる、花房求馬さまと申すは、御存じござりませぬか。

求馬　オヽ、その求馬は身が事ぢや。片瀬と聞いては、心當りがあるが。

ト外の方を見て

ヤ、其方は鎌田又八が娘の、淺尾ではないか。

あさ　ハイ、左樣でござりまする。若旦那樣、御息災で、ハイ、おめでたうござりまする。

求馬　ヤレ／＼、久しや。マア／＼、此方へ入りや／＼。
あさ　左樣なら、御免なされて下さりませ。
ト彌五兵衛も附いて內へ入る。又助、さてはとおあさへ目をつける。
モシ、旦那樣、親旦那は不慮に、お果てなされし御樣子。又お前樣のお浪人なされた事も、お手紙にて詳しう承りましたが、さぞマア、御殘念にござりませう。
求馬　推量してくれい。
ト兩人、淚ぐむ。又助、こなし。
又助　ハイ、旦那、左樣ならお暇仕りませう。
求馬　これはしたり、ゆるりと話して行きやいなう。
又助　ハイ、お客樣で、お取込みでござりませう。
あさ　イエ／＼、御遠慮な者ぢやござりませぬ。私しは、あなたの御家來の娘、何にもお心遣ひな者ぢやござりませぬ。矢張りお話しなされませ。
又助　左樣ならば有やうは、今朝七ツのお供揃ひで、木母寺へお供、どうでお立ちは夜に入りませうと、その間にお立寄り申しました。モシ、旦那樣、近頃不躾ながら、お二階の隅で、トロ／＼やつて參りたうござります。
求馬　ア、、そりや心易い事ぢや。併し、二階は穢うて埃だらけぢや程に、その心で、一睡やつて行きなさい。
又助　それは有り難うござりまする。左樣ならば御遠慮無しに。モシ、お前、話してお出でなさりませ。
ト合ひ方になり、又助、奥へ入る。此うち、おあさ、風呂敷包みより目刺の鰯、鰹節を取出す
あさ　これはマア、麁末な品でござりまするが、手前の濱で引きました、目刺の田作り、在所で造ひまする鰹節。心ばかりのお土産。
求馬　これは／＼忝ない。
彌五　イヤ、モシ、旦那樣、これは初めてお目にかゝりました。私しは片瀨村の彌五兵衛といふ者でござりますが、この子の親仁どのからして、懇ろに致しますが、イヤモウ、親仁どのは大力でござりました。その娘かして、この子にも小力がござります。その上、濱仕事に出ました時は、水の中は、誠に鵜のやうでござります。
あさ　これはしたり、お前とした事が、女子に其やうな業があつたとて、それが云立てにならうかいなア。
彌五　ハテ、力があつて、水心があつちやア、おいらが濱方ぢやア、その位な云立ては無いて。ハヽヽ、ハヽ。コレ、どうで手間が取れやう。其うちわしや、觀音樣へ參らう

し、頼まれた買ひ物もして來ずばなるまい。

あさ　さうしなさんせ。用を足したら、また來て下さんせ。

彌五　ハテ、どうで今夜は約束して來た、馬喰町へ泊らねばならぬ。連れに來ます。モシ、旦那、爰らに古着屋がござりますかな。

求馬　オヽ、その古着屋は、田原町の後へござると、門並に古着屋でござる。

彌五　ハイ〳〵、左樣なら、あの源水の裏通りでござりますか。

求馬　左樣〳〵。よう御存じぢや。

彌五　ハイ、私しも築地で生れまして、肴賣りを致したが、今ぢや片瀨へ引込みましたのサ。

あさ　彌五兵衛さん、お前、買ひ物は何ぢやえ。

彌五　おらが旦那の白[illegible]、紬の帷子と、吊り頃な蚊帳を買うて來てくれろと頼まれたのサ。權兵衛の娘の姐えも、黒朱子の帯が欲しいと云つてたが、買つた買ひ物を頼まれた、そんならわしに、ちよつと行つて來ますぞや。

あさ　早う戻りなさんせ。また道に迷ふまいぞえ。

彌五　ナニ、淺草の道は、江戸者よりは詳しいて。ハヽヽヽ。ハイ、行つて參ります。

ト畢天になり、彌五兵衛、向うへ入る。おあさ、こなしあつて

あさ　先達て道に遣されましたる、あのお手紙、親又八が存生で居りましたなら、早速に參りまして、お手助かりにもなりませうが、何を申すも兩親の無い私し、存じながら、御無禮に致しまするも、誠に女の獨り身ゆゑ。ハイ、御容赦遊ばして下さりませ。さぞやあなたも、親旦那樣の御成行き、御殘念にござりませう。

求馬　イヤモウ、無念なとも殘念とも、この上も無いわしが心。其の上、聞いたであらうが、お家の重寶、黄金の鷄、身がお預かりの役目、何者とも知らで、盜賊の爲に奪ひ取られ、その落度によつて御勘當。それより間もなく父上には、癪氣に中つて果敢なく横死。今では浪人の求馬、どうぞ黄金の鷄を尋ね出して、歸參の願ひと、此やうな賤しい身過ぎ。

あさ　それはマア、さぞ御艱難にござりませう。して、御浪人の只今の賄ひは、どれからマア、お貢ひなされて。

求馬　イヤ、其方も知つてであらう。親仁樣の御恩になつ

た町人、湯島の三吉といふが、それは〳〵深切に、わしを貢いで朝夕ともに。

あさ　そりやマア、お奇特なお方でござりまする。

求馬　イヤ、三吉と云へば、其方は、あの三吉を知つて居やらうの。

あさ　アイ。イエ〳〵、存じませぬわいなア。

求馬　その三吉と云ふは、親仁様がアノ、其方が親又八とも御相談なされて、末々はあの三吉が女房に致しくれうと、御意なされたが、アノ、てまへは知らずか。

あさ　ハイ、一向存じませぬが、お前様を其やうに、身に引受けてお世話なさんすとは、エヽ、頼もしいお方さんぢやわいなア。

求馬　頼もしいとも〳〵。誠に男一疋ぢやわいの。

　ト思ひ入れ。唄になり、向うより、おかん、振り袖に着替へ、およし、青傘を相合ひにして、出て來り

よし　モシ、あの三吉さんは、大方繪描きさんのお内でござんせう。

かん　サア、わしもさう思ふから、先刻に云ひ殘した事を話さうと思うて、琴の浚ひに行て來ると、嘘を云うて、其方を連れて主に逢ひたさ。

よし　キツとあのお内にでござんせうわいな。

　ト門口へ來り

モシ、お前さんに、湯島の三吉さんがお出でなされまするかえ。

求馬　イエ〳〵、今は居ませぬが、もう見えませう。御用ならば、此方へ入らつしやりませ。お前方、どれからござりました。

　トおあさ、これを聞き、思ひ入れ。

よし　ハイ、此お子は、紅屋の娘御でござりまするが、三吉さんが仰しやりまするには、あなたのお内まで參るやうにと。それゆゑお連れ申しました。今にお出でござりませう、お置き申して參じまする。お頼み申しまするわいなア。

かん　ア、そんなら其方、先へ行きやるかや。

よし　ハイ、私しが長う居りますると、ナ、モシ。

　ト囁き

又お迎ひに參ります。必らず琴のお浚ひに行たとナ。それをお忘れなさんすなえ。

かん　合點ぢやわいなア。

よし　お頼み申しまする。

ト聖天に成り、およし、向うへ入る。おかん殘り、恥
かしき思ひ入れ。
かん　ア、コレ、まだ用があるわいな。コレ、よしや、エ
エ、もう行きやつたか。わし一人お內へ殘して。
トもぢ／＼して居る。
あさ　お前さん、此方へお出でなさりませ。
かん　アイ／＼。
あさ　サ、お茶一つあげませうかえ。
かん　アイ／＼。
トおあさ、土瓶を取上げ、思ひ入れあつて
あさ　これはしたり、お茶は皆になつたさうな。
求馬　その通りぢや。誰れ一人、茶を拵らへてくれ手もな
し。
あさ　左樣でございませう。御勝手知らねど私しが、その
位な御奉公は。
求馬　これはしたり、お客を使うてよいものか。
あさ　アノ、御臺盤にございませぬ。して、お茶はどれに
ございます。
求馬　アイ、あの戸棚の抽斗に。
あさ　左樣なら私しが、お臺所も覺える爲。

ト土瓶を持ち、おかんへ思ひ入れ。
あなた、お話しなされませ。
かん　アイ。
あさ　ドリヤ、お茶拵らへて參りませうか。
ト唄になり、思ひ入れあつて、奧へ入る。この唄にて
向うより三吉、スタ／＼出て來り、門口より、おかん
を見て
三吉　おかんぼう、どうした。マア、爰の內へ……ハイ、
旦那、御免なさりませ。
ト內へ入る。
かん　アイ、先刻にわたしが內へござんした時、アノお使
ひが來たに依つて、大方爰ぢやあらうと、琴のお浚ひに
行くと云うて、アノよしを連れて來たのぢやわいなア。
求馬　何か譯は存せぬが、其方を尋ねて見えた女中。
三吉　ハイ、お話し申した、紅粉屋の娘御でござります。
コレ、おかんさん、お前、何がマアそんなに、急に逢ひ
たいとは、何の話しだえ。
かん　アイ、そりやわたしが身の片附き、嫁入りの事が、
苦勞になつたわいなア。
三吉　ハテ、氣の短かい。さう性急に。これが人に話しも

なるまいわいな。殊に繼母、慾張り婆ア、それには思案もあらうわな。
ト思ひ入れ。矢張り聖天になり、向うより、五兵衛、劍菱の印ある樽を轉がして出て來る。
五兵　エヽコレ、あの内の番頭は、一樽ばかりの酒を、屆けてやつてもいゝ事を、坂本まで遊ばずばなるまい。イヤ、そりやいゝが、相談して來た三吉が附け所。こいつを一番、仕事にしにやアならぬわえ。
ト樽を門口へ置き、内を窺ひ
モシ、先生、お内かえ〳〵。
トこれにて皆々、吃驚する。三吉、求馬に囁いて、おかんは、衝立の蔭へ入る。
求馬　ハイ、誰に來ますが、なんぞ御用でござりまするかな。
ト門口へ來て挨拶する。
五兵　イエ〳〵、わたしぢやござりませぬが、會所で大家さんが、何かお前に用があるから、ちよつと寄越してくれろと云はれました。ちよつと行つて來なさい。
求馬　それはお世話でござりまする。只今參りませう。
五兵　直に來てくれろと云はれました。早く行きなさい。
ト鍵を出し、錠前を明けて内へ入る。
三吉　モシ、家主が何を云はうとて、私しに逢へと仰しやりませ。
ト内を見廻し
モシ、お前樣、此ぢうの蚊帳は、どうなさりました。
求馬　サア、蚊帳はアノ隣の五兵衛どのに、貸して遣はした。
三吉　ナニ、貸したえ。お前もマア、餘ツぽどめでた者だ。
求馬　でも、度々世話になるゆゑ、よん所なう。
三吉　して、何を吊つて御寢なりまする。
求馬　蚊帳の代りに、この鯉を吊つて見せるぢや。
三吉　ナニ、鯉を吊るえ。
求馬　どうして、その吊り方は存じまい。コレ、このマア鯉の口から、這ひ込むのぢや。さうして、クルリと、もんどりを切ると、イヤ、蚊帳よりは至つて調法ぢや。
三吉　成る程、お前樣の分別は違つたものだ。
求馬　そんならお前、話してござりませ。ツイ行て來ませう。

ト門口へ出る。三吉、見て

三吉　モシ〱、お前、お腰の物わえ。

求馬　サア、あの一腰は。

ト面目なき思ひ入れ。

近所の衆へ、ツイ貸して置いた。

三吉　それも貸したのかえ。もし又、質入れではござりませぬか。

求馬　イヤ〱、どうして、なんの脇差を、決して賣る事ではないて。

三吉　ナニ又賣られませうぞ。早く行つてお出でなされませ。

求馬　オイ。

ト唄になり、求馬、向うへ入る。三吉、おかん、殘り

三吉　イヤ又、侍ひの子の人の善いのも、あんまり世話がやける。

トこの時、奥より、おあさ、土瓶、茶碗を持ち出て來り、あたりを見て

あさ　こりや旦那はどれに……ようお出でなされました。モシ、お二方、お茶を上げませう。

トおかんに茶を差出す。

かん　ハイ、お構ひなされまするな。

あさ　お前さん、お茶上がりませ。

ト三吉へ茶を差出す。顔を見て、さてはト思ひ入れ。

三吉一向に心づかず

三吉　アイ、こりやア御馳走でござりやす。ア、、見馴れない女中さん、お前、爰のお内の、何でござります。

あさ　ハイ、私しは。

ト三吉を見て、傍にこなし。また恥かしき思ひ入れ。

かん　アノ、三吉さん、主はナ、阿母さんぢやといな。

三吉　エ、、阿母かえ。これはしたり、其お客に、お茶を酌ませて。モシ、御免なさりませ。

あさ　ハイ〱。

トもぢ〱して居る。

かん　先刻にから見ました所が、どうやらお前さんは、在所からお出でなさんした様子。左様でござんすかえ。

あさ　ハイ、私しは、十二三里も在方の者でござります。

かん　何の御用でお出でなさんしたのぢや。

あさ　ハイ、久しう便りも致しませぬから、お尋ね申しに參じました者でござりまする。

三吉　して、お前、お國はどこだえ。
あさ　ハイ、相模でござりまする。
三吉　相模女に、播磨鍋、尻の早い親方だ。
かん　これはしたり、悪口を云はしやんすなえ。
三吉　モシ、お客さん、お前も在所のお方だが、どこの何國でも、サ、色事と云ふものは、さて氣の揉める者だねえ。
あさ　ハイ、どうでござりまするやら。その色戀と云ふもの、私し等は存じませぬが、浮氣な事では、ひよんな心の起るも色。斯う見た所がお前さんも。
かん　ア、、コレ、お客さん、わたしや其やうな浮氣な者ぢやござんせぬわいな。
あさ　さう云ひなさんすりや、あのお方さんは、お前の御亭主さんかえ。
かん　イエ〳〵、アノ、主はナ、兄分とやら云ふやうなお方ぢやわいな。
あさ　エ、、お前、在所の者ぢやと思うて、ようお騙しなされまするが、なんぼう野暮な、わたしでも、ちよつと見ましても、ハイ、やる事ぢやござりませぬ。
三吉　イヤ、こいつはお客が當りを云ふわえ。何を隠さうこの子は、ちつと譯のある娘御サ。モシ、お前、斯う知つても、必らず爰の旦那には沙汰なしだよ。
あさ　ハイ〳〵、そりや私しも、在所者でも、そこは又、お互ひの事でござりまする。隨分お沙汰なしに致しまするわいな。
三吉　ハテ、行き渡つたお詞だ。お前、亭主持ちか。
あさ　ハイ、キッと致した亭主が、私しにはござりませぬわいな。
　ト思ひ入れあり
三吉　エ、、まだやもめでお暮らしかえ。
あさ　ハイ、左様でござりまする。
三吉　ナニ、今の若さに、いくらも亭主は持たれるわな。
あさ　イエ〳〵、悪い氣性で、一筋に思うたばかり。
かん　こりやお前も、男選みと見えるわいな。
　ト思ひ入れ。聖天になり、向うより彌五兵衛、足早に出て來り
彌五　コレ〳〵、おあさどの、居さつしやるか〳〵。
あさ　彌五兵衛さん、買ひ物はどうぢやえ。
彌五　サ、そこぢやて。田原町の古着屋に、何もかも揃うてはあるが、男の眼からは、何がどうやら、一向わから

ぬ。蚊帳も帶も帷子も、大儀ながら、ちよつと來て目利きして下され。わしにはどうしてわかる事ぢやござらぬ。

あさ　ハテ、お前も大儀な所で、よいぢやござりませぬか。

彌五　イヤ／＼、買ひかぶりでもして見さんせ、あの伯母御に、一生の云はれ草ぢや。ちよつと來て、目利きして下され／＼。

あさ　アイ／＼、そんならちよつと行つて參りませう。モシ、あなた、御ゆるりとお話しなされませ。

かん　ア、、もうお歸りなさんすのかえ。

あさ　イエ／＼、ちよつと買ひ物して參りまする。旦那樣お出でなされたら、左樣仰しやつて下さりませ。

三吉　アイ、早く歸りなさい。

あさ　ツイ行て參じまする。

ト彌五兵衞に附いて花道まで行き、思ひ入れ。

年端もゆかぬ時分から、あのお方ぢやと思ふから、此方でばかり末々は。

彌五　コレサ、歩んで下され。

あさ　サ、參りませう。

ト唄になり、兩人、向うへ入る。

三吉　ハテ、あの客人は、なんだか心意氣のありさうな、意氣な女だわい。

かん　エ、、それ見なさんせ。女中さへ見なんすと、其やうにマア、直に心變りなさんすゆゑ、滅多に油斷はならぬわいなア。

三吉　ならねえと云つて、どうするものだ。コレ、おらア、眞に主にのろくなつて居るよ。それを云ふこたアねえ。コレ、嘘でないといふ事は、實は大事の旦那の內だが、向後お主の罰があたつて、よい／＼になる法もあれ、偽はりは云はねえよ。その證據には、コレ、ちよつと爰で。

トおかんを捕へてこなし。

かん　ア、コレ、惡い事しなさんすな。

三吉　惡くても、善くつても、もう斯うなつちやア。

トしなだれる。この時、奧にて、咳吹を毀す音する。

三吉、惘り飛びのく。

かん　それ、見なさんせ。誰れやら奧に居るわいなア。

三吉　居ても大事ない。ア、コレ、どこぞに藏があればいいが。

ト大鯉を見附け

いゝ物があるワ。いま旦那が数へさしつた、コレ、この鯉の中がよい。入つて見よう。

ト鯉の口より入り、顔を出し

こいつは野郎の金魚だ。イヤ又、これは奇妙だ。コレ、爰へ来ねえ。

かん　滅相な。どうしてマア其やうな所へ。

三吉　これはしたり、鯉の腹の中へ入りやア名聞だ。これサ、爰へ来なよ〳〵。

トおかんを捕へ、鯉の口より引込まうとする。

かん　ア、コレ、後生ぢや程に、堪忍して下さんせ。

三吉　ハテ、鯉に網は差合ひだわな。

トロの方からおかんを捕へて引込む。唄になり、向うより、彌五兵衛、風呂敷に包み、中古の蚊帳を肩にかけ、跡より、おあさ、附き出て来る。両人、門口へ来て

彌五　コレ〳〵、おあさどの、そんならわしは、この品を持つて、今夜は馬喰町へ行つて泊るが、こなたは爰の旦那の所に泊らつしやるか。

あさ　ハイ、わたしや外に用事もあれば、今夜は頼うて一宿しやんせう。

彌五　さうさつしやい。コレ〳〵、この蚊帳は此方へ置いて行きます。明日取りに来ませう。

あさ　さうしなさんせ。それはさうと、マア、一服のんで行かしやんせ。

彌五　イカサマ、泊りは知れて居る。ドレ、一服して行きませうか。

ト両人、何心なく内へ入る。右の鯉、轉げる。おあさ、吃りして

あさ　こりやマア、怪しからぬ、この鯉が

彌五　ヤア、途方もない、素敵な鯉だが、どうして爰へ飼ね込んだのだ。コレ〳〵、おあさどの、滅多に油断は、しやるな〳〵。

ト此うち、おあさ、思ひ入れあり

あさ　ほんに、油断も隙もなる事ぢやないわいの。懐中と云ひ、いかに鯉ぢやというて、鯉の腹とはエ、、阿房らしい。慥かに先刻の二人のお方。

彌五　ナニ、二人だえ。

あさ　ア、モシ。

トちよつと囁く。



五世岩井半四郎のおあさ

彌五　ハヽア、鯉は鯉だが、アヽ、忍ぶ戀だ。

あさ　サア、蚊帳の代りに、この鯉かやも知れぬ。幸ひ、この蚊帳、貸して上げようわいな。

彌五　さうサ／＼。ぶッ掛けてやるぶい／＼。

トちり／＼に念佛太鼓をかぶせ／＼、合ひ方になり、おあさ、蚊帳を網のやうに手繰りて、この鯉へぶッかける。彌五兵衛、有り合ふ棕梠箒を取りて、あたりを片附ける思ひ入れにて、船の艫を押すやうに箒を遣ふ。よき所にて鯉を二つに引ッ切り、おかんは鯉の口より頭を出し、三吉は鯉の腹のあたりより顔を出し、二人とも逆上せし體。

三吉　アヽ、暑い／＼。素敵に暑いぞ。一杯飲みたい。水は無いか／＼。

トこれにて、おあさ、手桶の水を茶碗に汲み、おかんに差出す。おかん何心なく茶碗を取つて水を飲む。此うち彌五兵衛、手桶の水を柄杓に汲み、三吉に飲ませる。

三吉、これを飲んで

三吉　アヽ、いゝ心持ちだ。併し、のろまが鹽風呂へ入つたやうだ。

あさ　さぞマア、お暑うござりましたらうよ。

ト三吉見て

三吉　ヤ、こりや今のお客かえ。

あさ　左樣でござります。

彌五　イヤハヤ、いかい御精の出る事でござりまする。

かん　其やうに云うて下さんすと、わたしや面目ならうて。

あさ　ハイ、御苦勞樣でござりまする。

三吉　モシ／＼、お客、有やうは爰へ蚊帳を吊つて、あの子に灸を据ゑてもらはうと思つたが、蚊帳が無いばかりに、この鯉の中で

あさ　やいとをお据ゑなさんしたかえ。

三吉　据ゑやした。夏のうち、お前、鯉の腹で灸を据ゑると、惡い風を引かぬね。イヤ、その代り、素敵に暑い。

彌五　さうでござりませうとも／＼。イヤ、ほんに、灸と云へば、宿へ着いて、三里を据ゑにやアならねえ。そんなら、おあさどの、明日來ませう。

あさ　ほんに、お草臥れでござんせう。ゆるりと休息しなさんせ。

彌五　アイ／＼。早く行つて、錢湯へでも入りませう。イヤ、どなたもこれにござりませ。

ト念佛太鼓になり、彌五兵衛、向うへ入る。

あさ　モシエ、幸ひとコレ、蚊帳を買うて參りました。爰へ吊つて上げませう。まだ跡をお据ゑなさんせいなア。

かん　イエ〳〵、わたしやモツ、やいとは据ゑいでもようござんす。

あさ　ハテ、お前、不用前おやわいな。ア、コレ、釘打つてあるが、肝心の釣手が見えぬ。直ぐにこの釘へ。

ト蚊帳の鐶を掛けようとして屆かぬゆゑ

ア、コレ、踏つぎを欲しいものぢやが。

トこなしあつて、門口の酒樽を見附け

ア、よい物があるわいな。

ト件の酒樽を輕々と提げて來り、上の方よき所へ置き、この上へ上がつて蚊帳の鐶を掛けるとて、手を伸ばす。この時、腕にある三吉といふ彫り物見える。おあさ、これに心附かず、三吉、思ひ入れあつて

三吉　あの四斗入りの酒樽を輕々と。

かん　どうやらあなたの、腕に彫つたは

三吉　[illegible]

あさ　エヽ。

ト兩方とも、途端に吃りする。

あさ　サア、入つて据ゑなさんせ。

ト樽より下りる。三吉、立寄り、酒樽を引立て見て

三吉　イヤ、素的な女だ。

ト思ひ入れ。四つ竹節になり、向うより、求馬、先に、およし、足早に出て來り

求馬　イヤモウ、別してもない事で呼びつけ居つた。

あさ　旦那樣、お歸りなさりましたかえ。

求馬　折角のお客を、留守居に置いて、悪い亭主振りぢや。

よし　モシ、おかんさま、お迎ひに參りました。

かん　よく來やつたが、母さんの機嫌はよいかや。

よし　隨分よろしうござりまする。また御機嫌を損ねぬうち、サア、お歸りなされませいなア。

かん　そんなら、三吉さん、わたしや行くぞえ。モシ、必らずアノ外へ行くのを。

三吉　ハテ、そりや承知だよ。コツソリと歸つて行きなよ。

かん　ハイ、おやかましうござりました。モシ、お客樣、ゆるりとお出でなさりませ。

あさ　ハイ、お歸りなされますか。又お遊びにお出でなさりませ。

かん　有り難うござりまする。モシ、三吉さん、必らずお前。

三吉　承知だよ。

よし　サア、お出でなさりませ。

ト唄になり、おかん、先に、およし附いて、向うへ入る。此うち始終、五兵衛、戸を明けて、窺ふ事あつて、おかんが歸りした見定め、門の戸をさす。求馬、思ひ入れあつて

求馬　コレ、三吉、こなた、あの女中を知らずか。

三吉　ハイ、只今爰で逢ひましたが始めて。

求馬　オヽ、これまで逢うた事は。

三吉　ハイ、一向に覺えませぬて。

求馬　ハテ、逢ひさうなものぢやが。コレ、こなたも、あの男に逢うた事はないか。

あさ　ハイ、お屋敷に御奉公いたして居りますうち、主は格別、私しは、よう覺えて居ります。

三吉　ア、そんならお前、お屋敷に勤めてござつたか。それぢやア見覺えがござりさうなものサ。

あさ　して、お前さん、私しが御奉公いたして居る時を、御存じないかえ。

三吉　小二才野郎の時分だから、何がどうやら。

あさ　わたしもやう／＼十二三、あづまへ知らぬ身ながらも、あのお方ぢやと思ふ程、どうしてお顏を見忘れませう。

三吉　ア、味な事を云ひなさるが、お前、どうしてわしを忘れませぬ。

あさ　サ、そりやアノ。

ト恥かしきこなし。

求馬　コレ／＼、三吉、あの女中は、親仁様が、其方の女房に致して遣はさうと、あの者の親どもへお話しなされし、若黨の又八が娘、幼少な時御仕へ、其方の傍には云ひ號けの、淺尾といふたは、あれが事ぢやわいの。

三吉　エヽ、そのお話しのあつた、わしが云ひ號けの女房……ハテ、知らぬ事とて、氣の毒千萬。ハテ、どこにどうした近附きが、あらうやらも知れないものでござりまする。

あさ　ハイ、どこに女房があらうも知れぬが浮世。その心のないお方でも、云ひ號けを致したからは、もう／＼、外へは目も掛けず、一生男持つまいと。

三吉　ア、道理で腕に三吉女房。ハテ、似た名ぢやと思

うたが、矢ッ張りわしで。

あさ　灰になるまで、離れぬ夫婦。此方ばかり眞實つくし、男の方では浮氣な戀に。それを眼前見て居る辛さ。顏には出さねど、胸の炎は

ト思ひ入れあつて

ホヽヽヽ。モシ、若旦那様、ほんに思へば、果敢ない昔でござりまする。

ト思ひ入れ。三吉、氣の毒なるこなし。奥より、又助、寢起きの體にて出て來り

又助　アヽよい心持ちに眠りました。もう暮れに間もござりますまい。そろ〳〵と參りませう。

トおあさを見て

モシ、わたしはお前を存じて居りますが、定めしお忘れであらう。

あさ　アイ、わたしも參つた時、存じたやうなお方ぢやと。

又助　その筈サ。お前、お屋敷にお小姓奉公の時分から、存じて居りやす。若黨の、鳥居又助サ。

あさ　ほんに、さう云なさんすりや、思ひ出したわいなア。

三吉　お屋敷へ出入りの時分、知つた顏でも、これまでに、まだ知る人にならぬ三吉。又助さん、お心安うお頼み申します。若いお方の御浪人、お前さん、折角お頼み申しまする。

又助　イエモウ、お氣の毒だと存じたばかり、別してお役にも足りませぬて。

あさ　早う御歸參のあるやうに。

又助　わしも、共にさう思ひますが、當分旦那の御歸參はありますまいて。

三吉　エヽ、そりやなぜ、アノ御歸參は、叶ひませぬえ。

又助　聞きなさい。イヤ又、お前、女だが、あの成上がりのお柳といふ奴は、イヤハヤ、酢でも蒟蒻でもゆく奴ぢやアねえ。この旦那のお噂も、度々奥向であるげなが、どうして〳〵、あの望月とお柳めが殿様へ、さま〴〵な事を拵へつけて、既にお前、この間も、この旦那を尋ね出して死罪にするがよいと、あの望月どのが云ひ出して、既での事に侍ひ衆が、主様を探しに歩いた程の事サ。

トこれにて皆々、思ひ入れ。

イエ〳〵、まだそんな事ぢやアござりませぬ。親御さまが讒に中つて死なしつたも、よく〳〵聞けば、お柳と、

望月が。

あさ　親旦那の毒害も、求馬さまの流浪も。

又助　お柳が口先、まだ／＼、嫁入りなすつてござる廣元さまのお姫様、サア、あなたも又、邪魔にして、さまざまの事を申し上げて、おいとしやお嬢様も、成上がり者の邪魔にされて、とゞのつまりが、こりやアこれぎりだが、毒害にでも、お逢ひなさらねばよいが。

ト いろ／＼焚きつける。求馬、おあさ、無念の思ひ入れ。五兵衛、出かゝり居て

五兵　モシ／＼三吉さん、此方にかえ。

三吉　アイ、來て居ますが誰れだえ。

五兵　アイ、わしでござりやす。

ト内へ入り

モシ、三吉さん、わしやア、紅屋の後家御に頼まれて來やしたが、お前、あの娘の事は、思ひ切つて、身の有つきだから、屋敷の方へ遣つて下さりませ。

三吉　コレ、五兵衛どん、藪から棒のその頼み。紅屋の娘がどうしたえ。

五兵　モシ／＼、白を切りなさんな。しつかりとした向うには、證據を取つて云はれまする。その證據と云ふは、

モシ、この文でござりやす。

ト件の文を出す。おあさ、眼を明ける。三吉、おあさに氣の毒なる思ひ入れあつて

三吉　その文が、どうしたとえ。

五兵　こりやア差詰めお前の手だ。向うに氣の無い娘へ、斯ういふ付け文しなさるは、男らしくねえね。向うの娘は怖さ半分、よん所なくウムと云つたね。それにこそこの文を、母親に見せて、どうぞ仕樣はあるまいかと、内證での相談サ。三吉さん、男らしく、切れてやつてしまひなせえな。

ト三吉、思ひ入れあつて

三吉　ハテ、合點がゆかねえナ。今の今まであのおかん、奉公の先まで變替へてと、頼んだ者が、俄に文を母親へ。こいつは女の心意氣も。

ト思はず、おあさと見合せ、こなし。

五兵　ハテ、そこは娘子供だわな。ナニ實があるものか、女に油斷はなりやせぬ。モシ、お前さん、左樣ぢやアござりませぬか。

又助　左やう／＼。イヤ又、女に油斷はならぬ。何が扨か存せぬが、親仁様をも毒害し、お前までをも死罪にと、

思ふ程なるお柳どの、どうして歸參は心元ない。望月お柳、あの衆が屋敷にあつては、どうして〳〵、ア、、おいとしいのはお姫様。

求馬　すりや、成上がりのお柳とやら、身共が歸參の事までも、妨げ云うて臣の手前を、お云ひ號けの姫君も、あるがなしにと、聞いてはどうも。

ト思ひ入れ。

五兵　どこにも、そんな間違ひが、出來たがるも女の口先。

三吉　娘子供と思へども、男の面の立たねえ時は。

又助　いつそ、お柳をスッパリと、やらねえうちはお館の、納まり方がむづかしい。併し、命を的にかけ、乗り出す人も、無いものサ。

あさ　そんなら、いよ〳〵大旦那の、露の横死も、あなたの流浪も、その成上がりのお柳とやらが。

ト腹の立つ思ひ入れ。

又助　當時の妲妃サ。

あさ　エ、、憎くい女め。

求馬　逢うたら、斯うして。

三吉　女の心を、よもやと思へど。

あさ　殊によつては生死の、切り切らるゝも。

三吉　切つて、見せうワ。

ト立ちあがる。

あさ　何を切る氣で、あなたも、お前も

ト兩方へ云ふ。

三吉　品に依つては、向うの相手を。

あさ　刃物があるかえ。

求馬　ア、、折も折とて、先刻に一腰。

ト向うへ思ひ入れ。

あさ　刃物の無いのが、あなたのお身の。サ、お前も定まる女房の無い身、もしやの事がある時は、世間の口に。

三吉　世間の噂はいとはねど、知らぬながらも云ひ號け、その女房の聞く手前。

あさ　祝言せねば女房とも、云はれぬながらも、腕にキッと。

三吉　それだに依つて、黒白を、分けて見せねば、こなたに。

あさ　エ。

三吉　證據の文から、借りたによ。

ト文を引ッたくり、門口へ出る。五兵衞、それをトか

かるを振り切る。聖天になり、三吉、文を持つて向うへ入る。五兵衛、思ひ入れあつて

五兵　南無三、仕事か。無駄にはせぬぞ。

ト追ひ驅けて、向うへ入る。

又助　なんだか、ソワ／＼と、女の噂で挨拶か。もうお暇に致しませう。

求馬　まだ、その外に屋敷の樣子。

又助　ハイ、お聞きとあらば、ござります。

ト居直る。向うより、伴介、中間の體にて走り出て來り

伴介　コレ／＼、又助どの／＼。

又助　誰れだ。オヽ、伴介か、なんだ。

伴介　なんだどころかお立ちだワ。サア、來さつしやい來さつしやい。

ト又助を引立てゝ外へ出る。

又助　エヽ、せわしない。煙管を忘れた。

伴助　煙管はいらない。お立ちだわな。

ト引ッ張つて、花道へ行く。

又助　これサ、跣足で居るワ。

伴介　跣足でもいゝ。お立ちだわな。

ト引ッ張つて揚げ幕まで行く。又助、思ひ入れあつて

又助　イヤ、肝心の物を忘れた。あの鴨居の上に。

伴助　ハテ、お立ちだと云ふに／＼。

ト無理に引立てる。又助、振り返り／＼、引ッ張られ、向うへ入る。求馬、急き込んで門口へ出ようとするを、おあさ、留める。

あさ　お前樣、こりやどこへお出でなされます。

求馬　コレ、淺香、いま聞きやる通りの屋敷の樣子、今日木母寺へ、お松が來て居るこそよき幸ひ、逢うてこの身の恨みの丈を。お家の爲ならば、切つてなりとも。

ト急いて行くを、おあさ、留めて

あさ　これはしたり、その大勢のお供の中へ、お前がお一人お出でなされ、どうマアお部屋に逢はれませう。殊に丸腰、狼藉者と打ち叩かれ、この上にどのやうな、恥をかゝうも知れませぬ。モシ、必らず滅多な事なされまするな。

トきつと云はれ、求馬思ひ入れあつて

求馬　それぢやというて、口惜しいわい／＼、口惜しいわえ。

あさ　御尤もでござりまする。そのお前のお腹立ちは、私

しか晴らして上げませう、と申したばかりで女の私し、誠か嘘か知らねども、今のやうなる噂では、親旦那の敵も同然。お家の為にならぬお部屋のお柳どの。モシ、必らず短気な心をお出しなされまするな。

求馬　さう云うてくりやれば、是非ことも云ふまいが、兼ねて噂に聞いて居るげな。其方の素性、親主膳さまの肉身分けたる血筋なりや、姉者人も同然。

あさ　アヽ、モシ、決して左様な、身の上の者ぢやござりませぬ。

トこの時、入相の鐘、きびしく鳴る。おあさ、思ひ入れあつて

浅草寺の、ありやモウ入相。

求馬　隅田川原の、お立ちの刻限。

あさ　暮れぬその間に、ちよつと参つて。

求馬　コレ、必らず、帰りを。

あさ　ハイ、早届けて参りませう。

ト矢張り時の鐘。おあさ、身繕ひする。向うバタ／＼にて、三吉、走り出て来り、ツカ／＼と入つて、おあさを見て

三吉　コレ、云ひ訳に来た、女房浅尾。

あさ　イエ／＼、縁無きわたしは他人。

ト門口へ出ようとする。三吉、留めて

三吉　以前の様子を、あらましわしに。

あさ　詳しい事は、跡であなたに。

三吉　して、又どこへ。

あさ　サ、観音様へ。

三吉　ヤ。

あさ　お主の代参。

ト門口へ出る。

三吉　どうやら様子の。

ト続いて出ようとする。おあさ、外よりシヤンと閉す。この途端に鴨居に上げし脇差、程よき所へ落ちる。おあさ、手早く取上げ

あさ　天より、わたしへ。

三吉　どうしたと。

トまた出かゝるを、求馬とめる。おあさ、ツカ／＼と花道へ行き、鯉口抜きかけ、キッとなつて

あさ　もし捕はれて、心掛りは。

ト腰の彫り物へ思ひ入れある。

三吉　ヤ。

ト木の頭。おあさ、一腰をシャンと納める。これをキザミにて、拍子

幕

おあさ、花道に殘り、向うを見てヤッと思ひ入れ。双盤になり、気を替へ、向うへ走り入る。この鳴り物にてツナギ。引返し。

本舞臺、浅黄幕。正面に橋場の渡しと書いたる傍示杭。稲叢、蘆の茂りし土手。鳴り物、禪のツトメにて引返して、幕明く。

ト向うより、頼母、上下、つまみ股立ち。下座より、勇造、同じく股立ちにて出て来り、両方行き合い

頼母　勇造どの、お船の用意、手揃ひ萬端よろしくござるかな。

勇造　谷澤どの、お指圖の通り、先達てより船は殘らず、この河岸に用意いたさせてござる。最早姫君には、お立ちでござるかな。

頼母　知らるる通り今日は、この木母寺に於て、御連歌のお催ふし。殊更、當時、殿のお心に叶ひしお柳の方、これとてもお相手にと、上よりのお指圖。勇造どの、なんと、心憎き事どもではござらぬか。

勇造　お云やる通り、廣元公より大殿へ、御縁談の姫君、今以て御祝言なきは、お柳の方と望月、上たる姫君さまと御同席の儀も、我れ〳〵どもは心外に存ずるて。して、御歸殿の砌り、浅茅ケ原へ、お立寄りの儀は、御延引になりましたかな。

頼母　木母寺にて餘程の手間どり、殊さら雨盛と申し、夜に入りましては如何と存じ、拙者たつてお止め申し、これより直さま、御歸館。最早姫君お立ちでござれば、先觸れの為、參つてござる。どうやら降り出しましてござる。

勇造　左様でござる。夜に入りましては、大雨と見えまする。

ト向うを見て両人、思ひ入れ。三味線入り、禪のツットメになり、向うより丹造、上下大小にて、お先を拂ひ、紅梅姫、姫の拵らへ。侍上下の供ひ、長柄をさしかけ、吾妻、千早、皐月、常夏、揃ひの帽子奥女中の拵らへ。嘉藤次、曾平太。雨山、十徳の茶道。その外供廻り大勢、附き出て来り、舞臺へ来る。頼母、こなしあつて

賴母　姫君樣には、最早御歸館遊ばされまするか。
勇造　拙者儀は、先刻よりお船の拵らへ、用意いたしてござりまする。
丹造　勇造どのには、御苦勞千萬。夜に入つては隅田の流れも一しほなれど、今宵の大雨計り難く、姫君樣へ、お立ちの儀は、お急ぎあるやう、お願ひ申してござりまする。
賴母　イザ、御出行
三人　あられませう。
ト紅梅姫、思ひ入れあつて
紅梅　聞きしにまさる隅田の風景、殊にこの程、殿樣へお願ひ申して、自らは、尼になりたきこの身の願ひ。申さば東の名殘りと存じ、思ひ付いたる今日の催ふし、この身にかゝる村雨も、思うて見れば、雨に柳の拵まるゝ道理、お柳の方の
ト思ひ入れ。
其方達もさぞかし、心遣ひであらうの。
常夏 若妻　有り難い姫君樣の御意。さりながら、世を味氣なう思し召し、御出家の儀も、仰せ出されてはござりませうか、マア／＼何事も、いま暫らくの御辛抱。

千早　其うちには又、殿樣のお心もお直りなされ、御祝言のお取急ぎもござりませう。何を申すも只今では、御前さまには、申して見ませうならば、打續きたる春雨に、あうた櫻は、お姫樣と同じ事、花の盛りを御覽もなう。
皐月　その、お心のつれない殿樣、それを恨みのお心もなう、お部屋樣との御中垣、わたしらとても、心の安堵。
丹造　これにしたり、女中方、左樣な噂は、申さぬ儀でござる。イヤ又、今日は一しほのお眺めでござりました。
皐月　左樣でござります。花は散りても葉櫻や、澤邊に咲いた杜若、花壇の牡丹、夏菊も
千早　今を盛りのその中へ、狂ふ胡蝶の又一しほ、空は五月の時鳥、水鷄の聲も珍らしう。
常夏　田植女の一節も、在所めかしてこれも一興、ナウ、皆さん。
若妻　さうぢやわいなア。わたしらまでも、今日のお供を此樂しみに。
町田　お茶道仲間の町田も、誠に今日は、命の洗濯仕つた。
常夏　お立ちの、お觸れと承り、本意なう存じ、お附きの我れ／＼。

千早　踏みも習はぬ、徒歩路の御歩行、姫君樣には、さぞやしんどう

皆々　思し召しませう。

紅梅　イヤナウ、館の内は庭前を、歩行するより外もなう、それに引かへ今日の遊行、自らは心に叶うて、この上もなきよい慰み。して、お柳の方には、まだお寺に殘つてかいなう。

丹造　御意でござりまする。お部屋樣には、御連歌の品々を、御持參あつてお後より。

勇造　殊に、お二方にては、船中も如何と存じ、姫君樣のお船より、先へ渡しまするやう、申しつけ置きましたでござります。

顏母　兎やかう申す其うちに、大雨にならば路次の程も如何。少しも早う。

紅梅　皆の者、早う供しや。

一同　ハア／＼。

丹造　お立ち／＼。船中、心附けませうぞ。

ト暮れ六ツの鐘。禪のツトメにて、俄雨の思ひ入れ。皆々下座へ入る。丹造、殘り

丹造　コリヤ／＼、お提灯を附けぬか／＼。お提灯／＼。

ト呼びゐる。向うより、釣り臺を擔ぎ、此うちに、赤合羽、菅笠、箱提灯入れてある、傳助、權藤次、中間にて、これを擔ぎ、一人の中間、醉ひたる體にて、菊蝶の紋附きの提灯をともし、よろしく出て來り

權藤　ハイ／＼、お提灯／＼。

丹造　灯をつけい／＼。

權藤　畏まりました。

ト提灯を開く。殘らず菊蝶の紋附きなり。

丹造　これにしたり、こりやコレ皆、お柳の方の御紋ぢやの。

權藤　左樣でござります。皆お部屋樣のお提灯でござります。

丹造　姫君樣のお提灯は、なぜ持ち參らぬ。

傳助　イエ／＼、私し共は、お部屋樣のお道具へ廻りました。

丹造　たわけ面め、姫君のお道具は如何いたした。

傳助　只今、後から參りまする。

丹造　後からでは濟まぬ。

ト叱りつける。町山、驅け出で

町山　サア／＼、お提灯／＼。

丹造　これはしたり、残らずお部屋のお紋附きぢや。マアマア、是非がない。マア、何なりと、灯をつけい／＼。

町山　マア／＼、なんでも、早くさつしやい／＼。エヽ、小者どもと申す者は。

ト皆々手傳ひ、菊[illegible]の紋附きの提灯へ灯をつける。此うち始終雨のツトメ、雨車の音。向うよりおあさ、件の一腰を差して、身輕に拵らへ、糸立てをかむり、出て來り、花道にて窺ひ居る。三人の中間、提灯の灯をつける。

丹造　サア／＼、灯がついたら、早くお船へ、參らぬか參らぬか。

擔籠　ハイ／＼。ソレ、やらかせ／＼。

町山　サア／＼、急げ／＼。

ト皆々うろたへ、釣り臺を捨てて、町山、丹造も急いで下座へ入る。中間一人、紋付きの提灯を持ち、醉うたる體にて、合羽を着て居る。此うち、捨ぜりふにておあさ、釣臺へ窺ひ寄つて

あさ　すりや、あの猫がお家を亂す、兼ねて聞いたるお柳さやら。仲間を幸ひに

ト中間が持つたる提灯へ手をかける。

中間　ア、コレ、何をする。

ト立ちかゝるを、おあさ、立廻り、中間が赤合羽を着て、笠をかむる。此うち始終立廻りの仕組みよろしく、中間またかゝるを、提灯を奪ひ取り、一つ當てる。中間、見事に水へ落ちる。おあさ、思ひ入れあつて走り入る。向うより赤合羽の供二人、丁子車の紋付きの提灯を二張ともし、赤合羽の陸尺、女乘り物を擔ぎ、出て來り、下座より、丹造、傘下駄にて、出迎へる。

丹造　お駕籠の内は、お部屋樣か。

侍ひ　左樣でござります。

ト丹造、駕籠へ差寄り

丹造　これは／＼、俄の雨ゆゑ、不調法千萬。姫君のお提灯が遲なはりしゆゑ、あなたのお提灯にて、只今お供仕つて居りまする。誠に不調法千萬、幾重にも御容赦を願ひまする。折惡う俄の大雨、申し譯もない儀でござりまする。サア／＼、急ぎませうぞ／＼。

ト前のツトメに雨車にて、この人數、下座へ入る。これにて道具廻る。

本舞臺、三間の間、向う打抜き、隅田川の景色。正

面、高土手、蘆間堤の體。下の方、茂りし蘆間、誂らへの道具。禪のツトメにて、道具、納まる。

ト波手摺、の上へ誂らへの渡し船、これに紅梅姫、立ち身、後より、丹造、件の長柄を差しかけ居る。管平太、嘉藤次、蛇の目の傘をさし捕へ、赤合羽、丸傘の中間、二人、菊蝶の紋付いたる箱提灯を差出し、簑笠の船頭、棹をさして、船を引出す。此うち、風の音、時の鐘、雨車。空には時鳥の聲。船はよき所まで押出す。紅梅姫、思ひ入れあつて空を眺め、

紅梅　五月闇、覺束なき夜時鳥、啼くなる聲のいとど物憂き。

ト思ひ入れ。合ひ方かはる。紅梅姫、こなたあつて

隅田川原の大空に、騒かしましく聞ゆるは、冥土の鳥と聞くからに、ハテ、何とやら。

トこの時、また水中より鳥、大分立つて、虚空へ上がる。紅梅姫、これに目をつけ

又も流れに羽音して、一度に立ちし夜鳥、時に列を亂すの時、正しく野邊に伏勢ありと、譬へもあれば。

ト思ひ入れ。この時、提灯を持ちし赤合羽の中間、窺ひ寄つて、抜くと其まゝ紅梅姫を刺し通す。皆々立ちかゝるを突きのけ、紅梅姫を小脇に抱へし體にて、水中へ飛び込む。二人の腰元、丹造もかゝると、立廻りあつて、川へ打込む。矢張り、禪のツトメ。これより、バタ／＼の人音。赤合羽の中間大勢、菊蝶の紋付いたる提灯を持つて

大勢　狼藉もの／＼。

ト鋒を立ち騒ぐ。向う打抜き、馬場の方にも子供大勢、簑赤合羽にて、丁字車の箱提灯、小さく仕立てたるを持ち、狼藉もの／＼／＼と立騒いで通る。よきキッカケにて、知らせにつき、本雨サッと降り来る。下の方に物音して、蘆間を掻き分け、おあさ、鉢巻、身輕に出立ちたる體、姫の切り首を抱へ、抜き身を持つて、窺ひ出る。上の方より、簑笠の船頭、件の渡し船に棹して乘りつける。おあさ、首を抱へ、向うへ行かうとする。掛け聲にて、アッヤ／＼の聲。これにて立廻り、上の方へ来る。此うち、くらがりの仕組み。船頭、棹にて、おあさを引寄せんとする。おあさ、切りつける。よき立廻りの後、簑笠ぬいで、帶刀、頰かつら、上下、高股立ちの體。首は立廻りのうち帶刀の手へ渡り、よき時分に空へ月を引出す。このあかりにて

帶刀、首をかざして、ニツコリ思ひ入れ。木の頭、おあさ、捨てある簑をかむり、顏を隱す。これをキザミにて

ひやうし幕

第一番目五建目　谷中螢澤の場

役名――傾城、藤波音妻。口入れ、雀屋お百。道具屋、元八。同、專平。同、藤七。下女、お松實ハ道房娘濱町。鳥居文助。木屋辰五郎實ハ合邦太郎。

本舞臺、三間の間、谷中螢澤の借り寮。左右、建仁寺垣。上の方に四つ目垣、下手、見越しの松の御手水鉢、木戸、黑らへの枝折り門。門柱に大坂木屋辰五郎と云ふ表札を打ち、座敷は蔀手屋體。爰に音妻、大阪おやまの拵へつき、投帶の形の上へ前垂れ。お百、桂庵の女房にて、縞の上へ羽織をつけ帶を締き、二人とも目を打ち、碁を打つて居る。元八、專平、藤七、道具屋の拵らへにて、詰めかけて居る。流行り唄、砧の音にて幕開く。

元八　モシ〳〵、旦那にお目にかゝりたうござりまする。

專平　お留守でござりますか〳〵。

お百　イエ〳〵、お内にお出でなされまする。あなたはこの間御逗留ゆゑ、お逢ひなさんす事ではござりますまいぞえ。

三人　エヽ、左様なら御逗留様に、お目にかゝりませう。

音妻　サア、わたしや大阪の新町から、辰五郎さんと連れ立つて參つたゆゑ、なんの譯も知らぬわいなア。

三人　番頭は、御他行かな。

お百　イエ〳〵、まだ番頭さまも手代衆も、お下りでござんせぬゆゑ、お内は御不自由なと、わたしがお話し申し、王子の在から、大仕の奉公人をナ。

音妻　このお方が、よい女中を世話して下さんしたゆゑ、それは〳〵わたしらが氣休め。在所者に似合はぬ、よう働らいてぢやわいな。

元八　エヽ、あの女中は王子の生れかえ。それにしては、器量が利いて、よく働らきます。わしらが參つたも、外の事でもござりませぬ。大阪で評判の木屋の辰五郎さま、江戸見物にお出でなされて、この螢澤の寮をお借りなさ

れてお出でと承り

藤七　道具屋どもが申し合せ、持ち傳へましたる代物、木屋の旦那にお目にかけ、鑑定を付けてもらひませうと、持つて參つた吳道子の雲龍。

專平　漢の武帝の、鯉魚の一軸、達磨大師の如意ぢやと申しまするが、旦那のお目利を願ひませうと、この間持つて參つて、あの女中衆に賴みましたが、今もつて埒が明き申しませぬ。どうぞ今日は持つて歸りたうござります。

藤七　旦那へ、この由

三人　お取次をお賴み申します。

吾妻　そんなら、アノまつが存じてゐやらう程に、歸りを待つて、問うて行かんせいなア。

お百　買ひ物に參つたとの事。私しもお內へ肝煎りして、どうぞ早う請け狀をしてやりたいと、宿書も持つて參りました。モシ、御新造さま、よろしうお願ひ申しまする。

元八　左樣なら、女中衆の歸りを待ちませうか。

藤七　さうしませう〳〵。

ト　てんつゝになり、砧の音にて、向うより芋賣り、半臺の荷を擔ぎ、呼びかけて來る。後よりおまつ、田舍者下女の拵らへ、前垂れがけにて、安下駄を履き、岡持ちの豆腐を下げ、襟へ見世開きの團扇を差し、百茶の袋と大根を割掛けにして肩へ掛け、火口箱を帶へ差し、鬢つけ油と楊枝齒磨、附木を袂へ入れ、醬油德利を提げ出て來る。

芋賣　芋々。

まつ　芋屋さん〳〵。

芋賣　アイ、呼びなさつたか。

まつ　一升、なんぼぢやえ。

芋賣　三十六文、一升量りやせうか。

まつ　もそつと引けぬかえ。

芋賣　ナニ、掛け値は云ひやせぬ。

まつ　そんなら、半分量つておくれ。

芋賣　おいらは、量りがいゝね。

ト　枡にて半分量る。おまつ、前垂れを擴げ、これを受けて

まつ　芋屋さん、袂にお錢がある。取つておくれ。

芋賣　アイ〳〵。

ト　おまつの袂より、はした錢を出して、思ひ入れあり

モシ、十八文取りやした。

ト また銭を袂へ入れる。

まつ　アイ、お世話おやの。

芋賣　また明日來やせう。青々。

ト てんつゝにゝ、芋屋、揚げ幕へ入る。おまつ、門口へ來て

まつ　ハイ、只今戻りました。

吾妻　まつ、歸りやつたか。

まつ　ハイ〳〵、皆買うて參りました。

お百　何やら大分、買うてござんしたの。

まつ　オヤ、香屋のおかみさん、お出でか。

お百　お前の宿搆を、持つて來たよ。

まつ　アイ、それはお忝なうござります。モシ〳〵、御新造様え、何もかも買うて參りました。先づ旦那さんのお好きなお豆腐、醬油も隨分よい所を。火口紙がこれで八文。明日のお菜は練馬の大根、お茶が一斤、附木が一把に、御新造様の遣ひ物、買つけ、旦那のお誂らへの楊枝箱、先づあらましはこの通り。後に一つ私しが、よい働らきを致しましたわいなア。

吾妻　そりやマア、こなさん、どういふ働らきおやえ。

まつ　開いておくれ。買ひ物かひに參つたところ、谷中町に幸ひ、店開きがござんすゆゑ、御覽じませ、團扇の景物二本まで、取つて參りました。御新造様へ私しがお土産、こればかりが、今日の儲けでござります。

ト 品々を出す。

お百　そりや、よう心が附いたわいの。

吾妻　して、お藥は、取つて來やつたか。

まつ　ハイ、それが肝心でござりまする。お藥は即ち爰に。

ト 袱紗に包みし疊紙を二つ出し

これは、旦那様、此方はお前様。兩方とも、生姜は一へぎ。サア〳〵、仕掛けませう。

ト 七輪に鍋、火鉢へ土瓶、兩方の藥を仕掛ける思ひ入れ。

元八　コレ〳〵、この間旦那へ願うた、お目利の儀は、どうでござりまする。御覽じて下さりましたか。

まつ　サア、その事でござんす。お聞きであらうか、旦那様は眼病、シタが、この間は餘程、お心よいと仰しやつて、あの御道具も御覽じた様子。お道具好きなあなたゆゑ、殘らず買うて置かうと仰しやりました。さう心得て

お出でなさりませ。

元八　エヽ、皆買はうと仰しやりまするか。それは有り難い。

専平　イヤ又、どうでも木屋の辰五郎さま程はあつて、大氣な旦那様ぢやわいの。

藤七　イヤ、待たつしやれ〳〵。わしが持つて來たのは、お目利をお頼み申しに來ましたを、皆買うて置かうとは、こりやどうも、合點がゆきませぬわいの。

元八　成る程、さう云はつしやれば、そんなものぢや。大分限でも、旅掛けの旦那の事。左様なら斯うしませう。代金の拂ひを願ひませう。

専平　それがようござる。モシ〳〵、女中衆々々、左様なら斯う申して下され。殘らずお召しなされまするなら、代金をお貰ひ申したうござりますると、旦那へこの段を。

まつ　これはしたり、モシ、其やうな事が、此方の旦那様に申されませうかいの。大阪のお宅は大分限、業平に榮耀をなされ過ぎて、あの若妻さまをお連れなされて、お下りなされた、東下りの旦那様、其やうな事申しまするると、私しが叱られまするわいな。

専平　目利を頼みに持つて來て、今では俄に渇きまするワ。

まつ　モシ〳〵、なんにもお前様方、お案じなさる事はござりませぬ。旦那様が仰しやるには、珍らしい道具ぢやに依つて、殘らずわしが求める、皆なら皆で置いてくれ、金はなんぼうでも大事ない、決して戻すな、戻すと、その業が、外へ賣らうも知れぬ、取りに見えても渡す事はならぬ。もし渡して遣ると、われを又その分にはして置かぬと、嚴しく仰しやりましたゆゑ、どうあつても私しが、お返し申す事はなりませぬ。それともお持つて行かうと仰しやりますならば

ト下の方より古葛籠、[illegible]を重たさうに持ち出し

こりや、私しが着替へでござります。これなりとお持ちなされまして、どうぞあの品を、置いて下さりませ。ハイ、どうぞお願ひ申しますわいな。

トいろ〳〵頼む。三人、思ひ入れあつて

元八　イヤ、これは迷惑な事ぢや。古物の道具の目利を頼むお傳の、おさんどのから、着替への葛籠を持つて行けまい。ナウ、お二人。

藤七　左やうサ、どうやらそれでは、借錢乞ひにでも來た

やうでござる。全く掛取りではござらぬ。

專平　もう一兩日置いて行けと云はるゝなら、置いて行つてもよいではござらぬか。

元八　サア、わしもさう思ひますが、コレ、女中、疑ふではござらぬが、その道具は、お內にござるかな。

まつ　[illegible]私しが、大事に仕舞うて置きまする。モシ、御覽じませ。

ト白木の掛け物箱より取出し、蓋を開けて

これは花かに鞍に龍、此方は鶴の附いた掛け物。これはアノ、禪坊さんの持ちなさんす物でござりました。

トいろ／＼袱紗のまゝ見せる。

元八　左様、その二品でござる。皆お內にあるからは、ナウ、お二人。

兩人　別條も、ござりますまい。置いて行きませう。

元八　コレ／＼、女中、こなたが今のやうに云つては、旦那に叱られると云ふから、マア／＼置いて行きます。必らず其方の道具を代りに持つて行かうなぞと、そんな事を云ひには來ませぬ。ハテ、借錢乞ひではござらぬわいの。

まつ　ハイ／＼、それは有り難うござります。一兩日うちにお出でなされませ。

三人　さうしませう／＼。

まつ　又、よいお道具がござりましたなら、何なりと持つてお出でなさりませ。

元八　珍らしい物が出ましたなら、お目利願ひに持つて參りますて。イヤ、珍らしい物と云へば、コレ聞かしやつたか。此やうな珍らしい物が出ましたの。

ト木綿風呂敷より、古掛け物に描きし娘の繪姿を出し

モシ、お慰みに、御覽じませ。

ト吾妻へ渡す。

吾妻　こりや何おやえ。娘の繪ぢやござんせぬかえ。

元八　左様でござりまする。何か公卿の娘の、お尋ね者ぢやと、觸れが廻りました。

お百　公家衆の娘のお尋ね者とは、こりや珍らしい者でござりまする。

まつ　珍らしい物ならば、旦那にお話し申しまする。モシ、お前さん、今度お出でなされるまで、私しにお貸しなさりませぬか。

元八　ハテ、怪しからぬ物を借りたがる女中ぢや。ようござる、置いてゆきませう。

まつ　ハイ、キツとお借り申しました。
專平　モシ、また珍らしい物がござります。
　ト白木の箱より結構なる南天の簪を出し
これは、お屋敷方からお拂ひに出ましたが、御新造樣、
お求めなさりませぬか。
吾妻　わたしらには、似合はぬ代物、コレ、まつや、わが
身買やらんか。
お百　こりや、おまつどのには打ちつけぢやわいの。ホ、
ホ、、、。
まつ　又、嬲らしやんすかいの。
藤七　コレ、女中、重ねて參りますまで、お邪魔ながらこ
れも、一緒に置いて下され。
まつ　アイ／＼、一つに致して置きまするぞえ。
專平　サア／＼、暮れぬうち歸りませう。
元八　コレ、女中、一兩日のうちに來ますぞや。
まつ　左樣なさりませ。
三人　御新造樣、おやかましうござりました。
　トてんつゝになり、三人とも向うへ入る。
吾妻　コレ、まつや、そりやアノこの間、噂のあつた、多
賀のお屋敷のお姫樣とやらの、繪姿ぢやないかや。

お百　イエ／＼、隅田川で騷動のあつたと云ふ話し。それ
とは違うて居りませう。それでおまつどの、こなさん、
あのマア金高なお道具を預かつて置いて、麁末にしなさ
んすなえ。
まつ　アイ／＼、隨分大事に仕舞うて置きますわいな。
　トこの時、藥鍋、煮えこぼれ、七輪の灰パツと立つ。
おまつうろたへ
これはしたり、お藥が煮えこぼれまする。併し、藥のこ
ぼるゝとは、御病人には、善い方ぢやげな。
　ト門口へ手桶を持つて出て、干し物を見つけ
南無三、折角乾かした洗濯物、濕りが來たであらう。お
芋の皮も剝かずばなるまい。さて／＼マア、日が長いか
して、一倍忙がしう思はるわいの。ホ、、、、
　トあちこち片附ける。障子の内にて、辰五郎、手を打
つ。
お百　アレ、旦那がお呼びなさんすぞえ。
まつ　ハイ／＼、畏まりました。
　ト合ひ方になり、障子を明ける。内に辰五郎、中月代
眼病の體にて、木地の脇息に凭れ居る。吾妻、差寄り
吾妻　モシ、辰五郎さん、お前のお眼の痛みは、今日はど

うでござんすえ。

辰五　サア、藥の加減か、今日は痛みも、大きによいやうおぢや。してマア、風氣ぢやと云やつたが、其方も藥を立てつけて、服ねがよいぞや。

吾妻　アイ、下女のまつに云ひつけて、お藥も煎じて居りまする。

まつ　ハイ〳〵、只今、上げませう。

お百　モシ、旦那樣、お續きなされまして、お限はよろしござりまするか。私しは今日、日柄もようござりまするから、下女のおまつどの、宿書を持つてあがりました。どうぞお取極めの儀を、お願ひ申しまする。

辰五　サヽ、こりやこの間、あの下女を世話して下された内儀か。よい女子を寄越して下され、それはそれは、よう働らきまするわいの。

お百　それは〳〵、マア、嬉しう存じまする。おまつどの氣を付けて勤めなさんせ。なんぞ用はないかや。

まつ　アイ、今度來なさんす時に、木綿絲、四五本買うて下さんせ。

お百　アイ〳〵、晚に來る時、買うて來やんせう。ハイ、旦那樣、御新造樣、お暇申しませう。

吾妻　マア、よいわいな。話して行きなんせ。

お百　ハイ〳〵、晚には直に參じまする。

ト出ようとする。

まつ　アヽモシ、待ちなさんせ。灯をつけてから、歸つて下さんせ。

ト灯をともし、行燈を出し

サア、もうようござんす。

お百　ハテ、奇特な子ではあるぞ。

ト唄、暮れ六ツの鐘。お百、足早に向うへ入る。

辰五　コリヤ、まつよ、そちや道具屋どもの手前から聞けば、道具を預かつて、わしが買はうと申したと、今も云うたが、いつわしが其やうな事申した。

まつ　ハイ、お難かしからうと存じまして。

トもぢ〳〵する。

辰五　そのマア預かつた物は、どこにあるのぢや。

吾妻　サア、そりや爰に箱入りの儘。

ト件の箱三つを、辰五郎の側へ持つて行く。おまつ、驚ろき

まつ　アヽモシ、それは。

辰五　ハテ、道具屋どもが、大事な品と聞いて居つたが、

武帝の一軸、吳道子の雲龍、達磨大師の如意なぞと申しては、珍らしい道具ぢやが、それをマア、わしにも云はいで、留めて置くとは。

ト云ひながら、袱紗を取る。一軸は、摺粉木を包んであり、辰五郎探り見て

コレ、吾妻、こりや一軸ではないと見えるぞや

吾妻　アイ、そりや、お還しぢやわいな。

辰五　成る程、擂粉木ぢや。此方の軸物は。

ト袱紗を取る。

吾妻　それも火吹竹でござりまする。

辰五　ヤ、、、、。この如意はどうぞや。

吾妻　ホ、、、、。そりや僞杓子ぢやわいな。

ト此うち、おまつ、術なき思ひ入れ

辰五　コリヤ、まつよ、爰へ來い〳〵。

まつ　ハイ〳〵。

ト怖々行く。

辰五　來いと云ふに。コリヤ〳〵、マア、われは此やうな物を、なぜ受取つて置き居つた。たわけ面めが。おれが眼病幸ひに、なぜ斷りを云うて返してはしまひ居らぬ。こりや、騙りに會うたのぢや〳〵。

吾妻　こりや、云ひなさんすが尤も。なぜマア此やうな物を、ウカ〳〵と受取つて置きやつた。ほんに賢こう見えても、流石在所の生れぢやわいな。

辰五　サア〳〵、早う先刻の道具屋を呼んで來て、返してしまへ〳〵。イヤ、たわけもたわけ、あんまりな奴ぢや。

まつ　ハイ〳〵、そのマア品々、道具屋へ遣はしたとて、どうして受取つて參りませう。

辰五　そりや、なぜ〳〵。

まつ　申し譯ではござりませぬが、ようお聞きなされて下さりませ。私しが此お內へ、お目見得に上がりましたその日から、お前樣方へ、お氣の毒ゆゑ、道具屋衆が持つて見え、目利を頼むと申した品、ボツ〳〵出して預け物、それから毎日、御覽じたならお返しなされと云ふを、やう〳〵只今まで隱して置きましたは、私しが越度ゆゑ、モシ、お堪忍なされて下さりませ。

辰五　ヤ、なんと云ふ。道具屋どもが目利を頼むと、持つて來た品は、そんなら預け物にして、その金で。

まつ　ハイ、お內を賄うて居りました。どうぞ御免なされて下さりませ。

辰五　さう聞いては、あの者どもは騙りではない。此方が騙りぢや。コレ、吾妻、あの下女に、日々賄ひを遣つたか。

吾妻　イエ／＼、お前が遣らしやんしたであらうと思うて、わたしや一向存じませぬわいな。

辰五　ア、、知らぬとは、如何に女郎の上がりぢやとて、あまり物事に……イヤ、さう聞いては、まつめが尤も、わしは眼病、家内の事も見え分かず、殊には假宅、何ともならう不案内。その上ソレ、醫者どのに按摩取り、肴屋が參りました、買うて置け、酒も銘酒を取りにやれ、はんぞう雜作、近所の附合ひ、それも澁さず身上がりして主人を過し、奉公するとは、成る程こりや、徳用な奉公人ぢや。イカサマ、爰等はお江戸の有り難さぢや。

吾妻　あれが云やるを聞いて、わたしや云ひ譯もござんせぬわいな。

辰五　如何に女郎ぢやというて、あまり意氣地がなうて……コレ、まつよ、わしらが悪かつた。氣にさへまいぞ。ハテマア、悧巧の利いた、女子ぢやな。

まつ　ハイ／＼。御免遊ばされて下さりませ／＼。

　ト　うぢ／＼する。

辰五　これはしたり、てまへが悪いのではない。此方から詫びねばならぬわい。コレ、どこに居る／＼。

　ト探り／＼出て、おまつを探す。

吾妻　まつは、爰に居りますわいなア。

　ト手を取つて連れて來る。

辰五　コリヤ／＼、まつよ、モウ／＼、われが悪いと云はぬ。みな此方が悪かつたわいの。コレ、吾妻、して、まつに給金でも貸しやつたか。

吾妻　イエ／＼、給金は要りませねと、斷わりばつかり申しまするわいなア。

辰五　イヤ、猶々安い奉公人ぢや。

　ト奥にて五ッの時計鳴る。

辰五　ア、、もう五ッぢやな。夜は短かし、コリヤ、まつよ、わが身もモウ、寢ぬか／＼。

まつ　ハイ、夜なべ仕事に、あなたのお寢間着を、拵らへて置きませう。

吾妻　なんのマア、草臥れたであらう。サア、早う寢やいなう。

まつ　ハイ／＼、お先へ臥りましても、ようござりませうか。

吾妻　大事ない、寐たがよいわいなう。
まつ　左樣なら、御免なされて下さりませ。旦那樣、お先へ臥るでござります。
ト下の方の古葛籠の上より、寢間着、莫蓙と布團、木枕を取出し、誂らへの二枚屏風を立て、寢支度する。
吾妻　コレ、わが身は、蚊帳は吊らずかや。
まつ　イエ〳〵、蚊は居りませぬわいなア。
吾妻　でも、きつい蚊ぢや。
まつ　なんのマア、ありや皆、螢でござりますわいなア。お先へ臥りまする。
ト思ひ入れ。
イヤ〳〵、肝心の物を忘れた。
トよき所より割り木を一把持ち來る。
吾妻　わが身、そりや割り木ぢやないか。
まつ　左樣でござります。何を申しても、用心が惡うござりまするから、枕元へ割り木を置きまして、もし泥坊が入りますると、この木で、したたか喰はしてやりまする。
吾妻　それならば、一本あればよいぢやないか。
まつ　サア、そこでござりまする。もし向うの奴が、この木を引ッたくりますると、また後から出しまする。それを取り居ると、また出しまする。今度も取り居ると、また出しまする。
ト仕方して見せる。
その用心に、貯へ置きまする。
辰五　ハテ、用心深い下女めだわやい。
ト唄、時の鐘にて、蒲團をかむり、屏風を引廻す。
もう、わしも寐所へ行かうか。
吾妻　サア、此方ぢやぞえ。
ト手を引いて二重へ上がり
モシ、お前、お藥わえ。
辰五　服んで、寐ようか。
吾妻　待ちなさんせ。
ト下りて來り、藥茶碗を持つて來り
ハイ、お藥。
ト渡す。
辰五　ア、コレ、惡い時、わしが眼病。知りやる通り、大阪の住居もならぬ辰五郎、其方を連れて、この東へ、便つて來る事は來たけれど、何を云うても不自由な住居。今日らあたりは大阪の、手代どもの所から、何か便りが

ある筈ぢや。

吾妻　さうでござんす。思うて見れば遠山越えて、同じその名の東路へ、お前と一緒に旅の空。いつぞやもお話し申したわたしが身の上、幼ない時に人手に渡り、兄ぢやといへど心得ぬ、又助といふ人が、連れてわたしを大阪へ、勤め奉公にやつたわいな。

辰五　大方そりや、兄といへど、誘拐かした奴ぢや知れぬ。

吾妻　モシ、辰五郎さん、お前、アノ、大阪にござんす時關白樣とやらいふ、公卿樣のお姫樣と、云ひ號けなさんして、それがお家の亂れとなつて。

辰五　木屋の辰五郎は、家財を沒收、諸道具も封印つけられ、大阪の住居もならず、町人なれども大家ゆゑ、關白道房さまお娘をやらうと、わしへの約束、云ひ號けした姫のその名も濱町どの。その女子の顏も知らず、公卿と町家の縁組みを、お咎めあつて、道房さまは流罪。氣の毒な事ぢやわいの。

ト此の時、おまつ、寢相の惡きこなし。

吾妻　サ、其のお姫樣と云ひ號けのお前ゆゑ、斯う睦まじう人目に見えても、それからフッツリ、一所寢なさんせぬのは、大方云ひ號けのお方へ立つる

辰五　これはしたり、知りやる通りの眼病ゆゑ、殊に家も立つやうに、この頃女子は斷ち物にしたわいの。

ト此の時

まつ　ソレ、鼠が肴を咬へて。

ト寢言を云ふ。兩人、恟りして

辰五　ヤ、どこへ鼠めが。

トあたりへ思ひ入れあり

なんの事ぢや、下女めが寢言か。ハテ、寢相の惡い。

ト唄、時の鐘、蛙の聲、簾下りる。この唄にて、向うより又助、頰冠り、一本差しにて、足早に出て來る。花道にて

又助　あの浪人の求馬を擲てゝ、一番屋敷の騷動を、ぶッくりかけたその晩に、橋場の渡しで何者か、船へ切り込み、その時に、祝言のない大江の姫を、まだ實否はわからぬが、お大切だとその日から、姫は御不例。どうでもこいつは、やらかされたと見えるわえ。

ト思ひ入れ。

いつかいつまで、あの屋敷に奉公したとて、高が若黨。一足飛びに音締めをきめ、これからソロソロ夜稼ぎと、

最初の手見せが大阪から、旅宿と聞いたこの寮は、辰五郎といふ大分限。先づ爰らを當つて見よう。

ト窺ひ／＼、門口へ來り、門の脇の生垣を、白刃にてこぢる。この時、おまつ、何やら寢言を云ふゆゑ、又助、外より窺ふ事。よろしくあつて、垣を破り内へ入り、コソ／＼と見廻して歩き、おまつの古葛籠を見附け、よき所へ持ち出す。この時、おまつ、足を踏まれ、目の覺めたる思ひ入れ。又助奥の方へ行かうとする。おまつ、これを見つけ、ソツと起きて、割り木を抱へ、一本持つて、跟けて歩く。又助、古葛籠を擔がうとするゆゑ。

まつ　泥坊々々。

ト聲を立てる。又助、恟りして、窺ひ見て

又助　此奴、女だな。聲を立てると、ぶッた切るぞ。

まつ　それでも、こなた、そりやわしが葛籠ぢやぞえ。

又助　それをおれが知るものか。入つたからにやア持つてゆくウ。

まつ　太い事を云ふ人ぢや。旦那の物は格別、奉公人の物を取るとは、あんまり太い人ぢや。

又助　べら坊め、太くない泥坊があるものか。コレ、こりやアわれが葛籠か。飯炊きの雜物なら、高の知れた垢付き木綿、太織の帶が當り前だ。そんな物は要らねえ。コレ、内の奴等が雜物は、どこにある。それを云へ。

まつ　雜物とは、なんの事だ。

又助　貴樣の事だ。雜、爰の内にやア、好い道具があるさうだ。その在所を云へ。

まつ　わしや、知らぬものを。

又助　知らぬと吐かし居ると、ぶッた切るぞ。

ト振り廻す。

まつ　アヽ、教へます／＼。コレ、そこの箱に。

ト道具の箱へ指さす。又助、行燈を提げ、箱の蓋の書附けを見て

又助　なんだ、吳道子の雲龍、漢の武帝の鯉魚。イヤ、斯うあらうと思つた。

まつ　サア／＼、早う持つて行きなさんせ。

ト掛け物の箱を突きつける。

又助　エヽ、待ちやアがれ。聲を立てるな。

ト蓋を明けて、袱紗を取つて

ヤア、こりやなんだ。吳道子の雲龍も、漢の武帝のも、みんな世帶道具だ。エヽ、飯炊きの女、よくも騙した

な。サア、書類があらう。それを云へ。
まつ　イエ〳〵、此方の内は、何にもござんせぬ。
又助　書類も金も、無いと吐かすか。
まつ　アイ。
　トこのあたりより、簾を卷き上げ、辰五郎、吾妻を押へ、窺うて居る。
又助　金も書類も、無いならば、吾妻といふ女郎が居やう。それを盗ませろ。
まつ　アイ、そのお方は、爰の内の。
辰五　そりや辰五郎の女房ぢやが、なんで又、盗人どのには、吾妻を盗みに入らしやつた。
又助　ア、、こなさんが辰五郎どのか。そんならわしは、貴様の爲には小舅だ。こなたは盗人の小舅を持つたよ。
辰五　ヤア、そんなら、かね〴〵吾妻の話しの
　ト吾妻、思ひ入れあつて
吾妻　ヤア、お前はわたしの
又助　オヽ、兄だ〳〵。妹の吾妻、久し振りだな。われがこの辰五郎どのと、大阪から下つて居ると聞いたゆゑ、妹のおぬしを盗みに來た。有やうは盗人ぢやねえぞ。兄樣が妹を引上げに來たのだ。

吾妻　そんならお前、兄ぢやと云うて、わしを連れに來なんしたのかえ。
又助　さうサ。大分限でも、木屋の辰五郎、今ぢやア家も絕えたげな。いらざる公家へ緣組み、關白どのもこなさんも、家の破滅と聞いたゆゑ、そんな天竺浪人に、娘を遣つちやア置かれぬから、連れに來た、渡してくりやれ。
辰五　イヤ、わしも大阪で、大金出して身請けした吾妻、こなたが、兄でも身寄りでも、金で買うたる吾妻は滅多に。
又助　それだによつて盗むのだワ。サア、妹、兄樣に盗まれろ。
　ト吾妻を引立てる。吾妻、思ひ入れ。
吾妻　モシ、兄さんといへば、お前の妹のやうに聞ゆれど、よく〳〵聞けば、五つの時、お前わたしを、誘拐かして
又助　無駄を吐かすな。覺えは無いワ。辰五郎どの、たつて妹を渡さねば、貴樣から
　ト云ひながら
持つて行く物がある。

辰五　そりや、何を貴樣は持つて行くのぢや。
又助　黄金の鷄。
辰五　ヤ。
又助　唐土の玄宗皇帝の時より、日本に渡つて多賀の大領、家の重器を秘藏する、その鷄が慥かに、こなたの手にある筈だ。辰五郎さん、わしに下さい。それがならずば、吾妻を下さい。
まつ　モシ〳〵、旦那樣、鷄とやらがあるならば、早う遣つてしまひ、吾妻さんは御無用になさりませ。お藥煎じる手助けがござりませぬ。
又助　べら坊め、うぬが自由にさせるものか。斯う見た所が、こなたはどうやら。
辰五　わしは眼病。知る人になりたいが、何を云うても皆目に
又助　見えませぬか。そいつは難儀だ。併し、わざ〳〵妹を、盗みに入つたこの兄が、素手ぢや歸らぬ。是非ともどちらか二つのうち。
辰五　二つのうちとは、この吾妻、外の一つは覺えなき
吾妻　黄金とやらの鷄を。
又助　貰つて行かにや歸らねえ。是非とも返事を聞かして下さい。
辰五　折角こなたも盗人に、入つてまでの、わしへの頼み。いづれ返事を。
又助　それまで妹は。

ト引立てる。

吾妻　ア、モシ、
又助　いゝから來いと云ふに。

ト唄、時の鐘になり、又助、吾妻を引立て、辰五郎、探り〳〵入る。簾下りる。おまつ、跡を見送り

まつ　なんぢや、ハア、家の內は、裏から泥坊が入つたと思へば、イヤ、妹をくれい、それが否なら、鷄を貰はうのと、家の旦那は、盗人に近付きがあるさうな。ハテナア。

ト思ひ入れあつて

これはしたり、蒲團をかぶつて寐た所爲かして、髪を損ねて此やうに。と云うても忙しない。夜なべになりと、撫でつけて置かうか。

ト合ひ方、おまつ、下の方より櫛臺と麁末なる鏡立を出し、行燈を引寄せ、髪を撫でつけにかゝる。向うよりお百、四十八文のぶら提灯を提げ、出て來り、門明

けて

お百　エヽまだ寢ずにかいの。

ト悔りする。

まつ　何をマアうろたへた。コレ、まだ寢なさらぬか。

アイヽわたしや今、髪を撫でつけて置かうと思つて。

お百　夜なべにかいな。蚊が居ませうに、よう精を出さんす。わたしや木綿縮を買うて來たぞえ。次手にわしが、撫でつけませう。

まつ　御慮外でござんす。

お百　大事ないわいな。

まつ　そんなら、わたしや顔を直して。

お百　オヤ〳〵、夕化粧ぢやの。

まつ　ほんに、せまじきものは、假炊きぢやわいな。

ト獨吟になり、おまつ、鏡に向ふ。お百、立ちかゝり、髮を直す事よろしくあつて、そろ〳〵と見廻し、最前道具屋が置いて行きし花簪を取つて頭へ差す。おまつ、向ひし鏡へ映るを見つける。唄切れる。

これはしたり、お前、惡い惡戯をしなさんすな。

お百　イヨ〳〵、よう似合うたわいの〳〵。どうやら色狂人のやうぢやわいの。

まつ　また嬲らしやんすわいなう。

お百　ハイ、もう歸りませう〳〵。

まつ　泊つてお出でな。

お百　亭主が待つて居ますわいな。

ト合ひ方、時の鐘になり、お百、向うへ入る。おまつ、跡を見送り

まつ　エヽなんぞといふと、田舍者ぢやと思うて阿房にさんす。ドレ、着る物着替へて、臥りませうか。

ト誂らへの二枚折りを引廻す。また獨吟になり、おまつ、屏風より立ち身にて半身に立ち居る事。此うち唄。おまつ、廣袖、姫の形に着替へし姿、檜扇を持つて、屏風より出づる。爰にて唄一ぱいに切れる。おまつ、鏡立の側へゆき、行燈を提げて來り、我が姿を見て、思ひ入れあつて檜扇にて灯りを消す。これより誂らへの唄。おまつ、奥へ入る。知らせにつき道具廻る。

本舞臺、正面の屋體に屏風立て廻し、誂らへの枝折り戸、よき所に石燈籠、萩垣、植込み、流れに杜若、

屋體の軒に、好みの螢籠を吊し、上の方に風呂釜、茶の湯道具一式飾り、丸棚の上に白木の箱載せてあり、この見得にて道具とまる。

ト矢張り唄、彈き流し、時の鐘、時鳥、蛙の聲。奥よりおまつ、出て來り、あたりを見て、丸棚の上に掛けある淺黄の大縮紗を取つて短檠へ掛け、思ひ入れにて、屏風を開く。内に辰五郎、絹の夜具蚊帳吊りかけてあり、寢入つたる體。枕元に差寄り

まつ　ハイ、御免遊ばされませ。旦那さま〱、お起きになつて下さりませ。

ト　そろ〱起す。辰五郎、枕を揚げ

辰五　誰れぢや〱。吾妻か〱。

まつ　イエ、私してござります。

辰五　さう云ふは、下女のまつか。

まつ　左樣でござります。

辰五　何しに來やつた。

まつ　ハイ、私しは今晩、日柄もようござりますゆゑ、御奉公の取極め、それをお願ひ申しませうと、宿書を持つて參じました。旦那樣、即ちこれが私しの、宿書でござりまする。

ト　姫の繪姿を差出す。辰五郎、探り取つて

辰五　ア丶、これが宿書か。併し、知る通り、この程の眼病、皆目に見えぬに依つて、マア〱、わしが眼の病ひが癒つた上で

まつ　御尤もでござりまするが、お手形を致しますれば、私しは水仕の女子、お主樣と家來の分ち、その殿方に、一度枕を。

辰五　ヤ。

まつ　それが下女めが、兼ねての願ひ。お情受けに、これまで忍んで參りましたわいな。

辰五　すりや、なんと云やる。水仕の其方が主人のわしへ、枕を交せと申すのか。

ト　此あたりより吾妻、探り〱、窺ひ出る。

まつ　ハイ、憚りながら、どうぞ願ひを、旦那樣、お叶へなされて下さりませ。

辰五　これはしたり、ハテサテ、珍らしい事を聞くものぢや。主人の寢間へ水仕の女子が、夜這ひに來るとは珍らしい趣向ぢや。わしも分限と浪花にて、呼ばれし木屋の辰五郎、今のこの身は落ちぶれて、東の空の假住居、殊に眼病、下女のおまつが姿もそれと。

まつ　御覧あつては、なんのマア、不束な水仕の私し、お肌を穢すお願ひは、厚皮面な女めぢやと、お下げすみもござりませうが、そこを私しが、旦那へお願ひ。

辰五　それ程までにいやる其方、身をかゝすも本意でない。必らず、吾妻へ沙汰なしに。

ト探り寄つて、おまつが手を取る。おまつ、會釋の思ひ入れ。

ハテ、其方は忝ない。ようマアわしに心を通じて。

ト引寄せるとて、着物の手觸りに、思ひ入れあつて

辰五　水仕の其方が衣服の手觸り。

ト心得ぬ思ひ入れ。おまつ、その手を拂ふ。辰五郎、また寄らうとするを、吾妻、ツカ／＼と寄つて、辰五郎を撫へ

吾妻　コレ、辰五郎さん。

辰五　ヤ、吾妻か。そんなら様子を、

吾妻　ハイ、聞いたわいなア。お前もマア悪性な。水仕のまつを閨へ引込み、わたしに沙汰なしとは、よう云ひなさんしたの。あのマア下女めも大膽な。主のある男を寐取らうとは、呆れて物が云はれぬわいなア。道理こそ常から、心に掛けての奉公が、今といふ今解つたわいの。

エヽ、茲な大膽女子め。

まつ　イエ／＼、私しばかりぢやござりませぬ。お前様も新町の、旦那を騙した太夫職、云はゞ浮かれ女、遊女のあなた。

吾妻　エヽ、なあ過ぎた。水仕の身を以て、主人へ不義を云ひかける、大膽女子の悪性者。側へわたしがおやまの身であらうが、辰五郎さんの女房ぢやわいの。

まつ　左様でござりませう。女郎と下女の高下はあれど、落つれば同じ谷川の、水仕のわたしが添ひ遂げまする。それとも願ひが叶はぬ時は、用意いたして參りました。旦那様、ハイ、あなたへ心中、お目に掛けませう。

吾妻　其方が心中見せうと云へば、わしも女子ぢや、心中見せませう。

辰五　そんなら、吾妻と水仕の下女も、心中見せうと云やつても、この眼の消ひで見られぬわし。成る程、二人が云やる通りに、見えぬながらも心中見よう。吾妻はわしが、この腰で。

ト探りながら一腰を吾妻に差附ける。吾妻、探り取つて

吾妻　すりや、この刃物で、わたしは心中。

まつ　アノ、わたしは用意の刃物か。

ト懷劍を出す。

辰五　して、心中は起請か、指か。

吾妻　アイ、指を切るのが

まつ　あなたへ心中。

吾妻　わたし等とても、かゝる闇夜を

まつ　照らす螢光。

辰五　ヤ。

トおまつは、軒に吊せし螢籠を、手早く取る。吾妻は丸棚の上の白木の箱を探り取つて、よき所へ置き、兩人一度に箱と螢籠の上にて、指を切る。これにて籠は切り割る。螢パッと飛びめぐる。この途端、短檠の大袱紗落ちて、明るくなる。吾妻は白木の箱を切り割る。薄ドロ／＼にて、鷄聲を發し、黄金の鷄、血の穢れにて、丸棚の上へ飛び去り、時を告ぐる。辰五郎、これにて目の見える體。キッとなる。草笛入りの合ひ方。

辰五　今、鷄の一聲と、共に開きし兩眼は、吾妻が心中、血汐の穢れに寶の威徳。

まつ　ヤ、あなたは、お目が

吾妻　見えますか。

ト辰五郎、おまつに目を付ける。

辰五　さてこそ、おまつが、高位の姿に

まつ　今こそ明かす自らは、云ひ號けせし

吾妻　すりや、濱町さんか。

ト驚ろく。辰五郎、吾妻が指を切りたる白刃を取つて、吾妻が首を打ち落す。おまつ、行燈に掛けたる前垂れを持つて血刀を拭ふ。合ひ方變る。

辰五　尋ね嚴しき冠者緯基、それに縁組む濱町どのゝ

まつ　すりや、その首級を、自らが

辰五　似寄りの女と思ふゆゑ、連れて立退くこの吾妻、もしや其方に巡り合ひ、こなたの大事と聞く時は、即ち吾妻は身替りと、心積りの心中、これといふのも濱町へ、恩を謝さんず爲ばかり。さるにても貞女の其方、水仕となつて我が家へ入込み、朝夕附添ふ志し、今日の今まで、露ほども、知らで月日を徒らに、心なき身も陸奥に、生ひ立つ武骨のこの身の誤まり。

まつ　正しく、連れ添ふ御方には、御所持の黄金の鷄が、八聲を告げて鷄が啼く、東の空と思ふゆゑ、都を出でゝ遙々と、お行くへを慕ひ、在所を求め、夫ぞ正しく我が夫と、使つて附添ふ水仕の奉公。父上御所持の品々まで、

密かにこの地へ都より、用意いたさせ置きたりし、呉服商人肝煎りの、女子も残らず手廻りの、腰元雑掌、譜代の侍ひ。

辰五　驚ろき入つたる其方の計らひ。女に劣りし某は、それとも知らぬこの身の眼病、浪花に住ふその砌り、町人ならぬをお若しあつて、姫を娶らん道房の、深き所存も情なや、科に伏す身の痛はしく、清流ありしも我が家の、鹿の臥床となつたるも、鎌倉武士のなせる業。その無念さやむ事なく、大義と思ふ某は、分限の暮らしと見すれども、世上の財寶我が物と、軍用集むる、當世の強盗、合邦太郎と變名して、その名を包むも一つの計略。泉の小次郎親平も、疾より當地に入込んで、仕官を望むも、兼ねての大望。

まつ　あなたに、巡り逢ふからは、今よりしては變らぬ女夫。いづくの山林渡世なりとも、離れぬわたしが心中に、切つた小指が、心の潔白。

辰五　夫婦は二世と云ふものゝ、今にも露顯なす時は、召捕らるゝは兼ねての覚悟。その時必らず潔よく

まつ　例へ木の空、梟木に、かゝりや繋がる、わたしも共に。

辰五　その一言に我れも滿足、必らず共に、秘すべし〳〵。

ト兩人、思ひ入れ。奥より又助、窺ひ出で、眞中へ入り

又助　妹が敵、これから貴樣を訴人するワ。

辰五　最前見えた吾妻が兄の

又助　又助でござりますが、見りやアあなたの兩眼も、俄に癒つた樣子と云ひ、殊更聞けば、噂のある合邦太郎といふ大盗人のこの家へ、知らず盗みに來た又助、妹を一人棒に振り、素手の孫三で歸られねえ。吾妻が代りを、見附けておれへ。

辰五　我が身の上を知つたる其方、命助けて置くからは、それが即ち、吾妻が代り。

又助　イヤ、それぢやア不得心。吾妻が代りはこの女。

トおまつ、思ひ入れ。

まつ　すりや、濱町を吾妻どのゝ

又助　替りに貰はう。

辰五　イヤ、そりやならぬ。

又助　くれずば此まゝ二人が訴人を

ト行かうとする。辰五郎、留めて

辰五　吾妻が代りに、暫らくこれを。

ト黄金の鶏を差出す。又助、取つて

又助　この一品は。

辰五　多賀の重寶、黄金の鶏。

又助　アノ、これが。

まつ　マア、モシ、その品、彼れにお渡しあつては。

辰五　ハテ、大事ない。二人が身の上、訴人と聞いては、わしら二人が命の代り、あの一品を

まつ　お渡しなされて、この場を遁がるゝ

辰五　命も物種、又助とやら、この身の願ひ叶ふまで、われに預けた。

又助　預かりました。二つともなき寶ぞと、草を分つて尋ねる品を、手輕く渡すも器量あり、流石聞えし合邦太郎。わしも今からこなたの手下。頭、用があるなら使ひを下さい。

辰五　見所のある又助。今からおれが手下に付くか。

又助　付きます〳〵。この上は、こなさんの願ひも叶ひ、住家知れざるその時は、持つて参つて、その時互ひに。

辰五　大事取りとならうも知れぬ。手放し難き品なれど、それまで預ける。

又助　預かりました。して、この後、こなたの隠れ家は。

辰五　所定めぬ今の身の上。秘文の合ひ紋、目印しに。

又助　呑み込みました。必らず首尾よく。

辰五　めでたう爰を。

又助　頭。

辰五　早く行け。

又助　合點だ。

ト時の鐘の合ひ方。又助、鶏を持ち、上の方、手水鉢の上へ上がり、竹垣を越して下座の方へ入る。矢張り時の鐘。辰五郎、鐘を數へる思ひ入れあつて

辰五　最早この地の住居も怪ふし。暫らく爰を、こなたも支度。

まつ　アイ。

ト立ち上がり、帶を引揚げ、身拵らへする。

辰五　アノ、コレ、支度といふわナ。

ト飯を食ふ思ひ入れをして見せる。

まつ　飯あがるのかえ。

辰五　程が知れない。

トおまつ、膳拵らへして、辰五郎の側へ持ち行き、据ゑる。

まつ　サア、お早うあがつて

ト辰五郎、箸を取つて飯を喰ひかゝる。此うち向うより元八、専平、藤七、その外、捕り手の形にて窺ひ出て来り、門口へ来て窺ふ。

辰五　天気はどうだ。

まつ　ようござんせう。

ト何心なく門の戸を明ける。捕り手、一度に十手を振り上げる。これにておまつ、門口をシヤンと締めてキッと押へ

まつ　モシ〳〵、来たぞえ。

辰五　どうするものだ。来るのは合點。

ト云ひながら茶碗を差出す。おまつ、片手にて土瓶を取上げる。此うち専平、裏口より廻り入りし様子にて、窺ひ寄り

専平　捕つた。

トかゝる。辰五郎、茶碗を下に置き、専平を上へ投げのけ、また茶碗を取つて差出す。おまつ、土瓶の湯をつがうとする。これにて藤七、門口をサッと開ける。おまつ、驚ろき、門の戸を閉す。これより捕り手二人、裏口より忍び込む。辰五郎へかゝる。よろしく捻ちあげる。

辰五　茶をくれろ。

トおまつ、茶碗へ土瓶の茶をつぎ、差出す。辰五郎取つて、飲む事あつて元八を投げつけ、又かゝるを、一腰抜いて、元八を切り倒す。この間に捕り手、忍び込んで立廻り。

まつ　モシ、危ないぞえ。

ト土瓶を持つて慄へ居る。辰五郎、捕り手を切り倒す。おまつ、土瓶の茶を捕り手にぶッかける事。また外の捕り手かゝるを、同じく見事に切り下げる。この時、元八、起上がつてかゝる立廻り。辰五郎おまつ、思ひ入れ。これにて門口をソッと明ける。表に窺ふ藤七、十手を振り上げる。おまつ、直ぐに戸口をピッシャリ締め、懐剣を持つて、内よりグッサリと藤七が脇腹へ差し通す。

辰五　ハテ、見かけによらぬ。

まつ　鬼の女房に。

ト懐剣を引抜く。

辰五　ヤ。

トおまつ、門口を明ける。藤七、立ち身にて苦しむ。これにて直ぐに引戸をピッシャリと締める。辰五郎、

元八を見事に切り倒す。元八、ポンとかへろ。この途端、一度に木の頭。

まつ　鬼神でござんす。

トこれにてキザミ、

ひやうし幕

第一番目大詰　　多賀館の場

役名――多賀の大領。愛妾、お柳の方。多賀犬清。花房求馬。蟹江一學。香川権平。姫川勇造。梁川嘉藤次。村井正助。谷澤頼母。柏木曾平太。望月帶刀。腰元、梅田。同、皐月。同、千早。同、菖蒲。同、常夏。安達昌伯。茶道、町山。長谷部重左衛門。

本舞臺、三間の間、向う一面の金襖、欄間附き、結構なる御殿のかゝり、尤も平舞臺にて、上の方九尺程、筋かひに下座の方へかけ、半分は御簾、半分は茶屋の暖簾を掛け、下の方は塗り骨の障子二枚眞中に大衝立。これも誂らへの葭戸を入れ、よき所に梅園と書いたる掛け行燈。すべて多賀の館、奥御殿を仲町糸本の大座敷に仕立てたる模様。よろしく、莨の内より銚子杯、硯蓋、鉢肴三つ物など取散らし、舞臺先に、大領、羽織衣裳、着流しの形、頭へ加賀染めの手拭を巻き、刀を提げて立ちかかり、この側に帶刀、廣桟とめの御本手縞、年配なる店者の形を、上下衣裳に仕立てたる拵らへにて、頼母、勇造、正助、いづれも上下衣裳、大小の形にて、諫言して居ろ。上の方に昌伯、坊主醫者。町山、茶道の形の上へ両人とも鬘かけたる太鼓持ちの思ひ入れ。曾平太、嘉藤次、袴着流しの形に腰へ手拭を挾みたる優し男、船頭の思ひ入れにて立ちかかり、千早、皐月、菖蒲、いづれも、椎茸髱、奥女中の形に前垂れ〆め、手拭を肩にかけ、二階廻し、娘分、仲居の思ひ入れにて、上の方に立ちかゝる。賑やかなる騒ぎ唄、時の太鼓にて幕明く。

大領　ヤア、無禮なる諫言立て。重ねて申さば、手には見せぬぞ。

帶刀　ハッ、御尤もなる御怒り。御遊興の妨げ、折悪しくたつてのお諫め。却つて不忠。

額母　イヤ、おてまへは新參、我れらは譜代恩顧の身を以て、お諫め申すはお家の爲。

勇造　紅梅姫さま、この間、隅田堤より御不例にて、他聞を憚かる密かの御病氣。

正助　それになんぞや、晝夜を分かぬ、酒食に耽る御身持ち。

額母　もと姫君は鎌倉の大老・大江の廣元公の御息女にて、お輿入れはありながら

正助　未だ御婚禮の御沙汰もなき

勇造　紅梅姫のお身の上。

三人　鎌倉の聞え、廣元公への申し譯。

帶刀　イヤ、御不例は世上の疑ひ。一つには、殿の御氣鬱晴らさん爲、御酒宴の御催ふし。ナウ、何れも。

昌伯　左やう／＼。當月どのゝ仰せの通り、紅梅姫さまの病氣も、愚老はつく／＼、内察いたすに、勝たれないのはお主と病、なんでも旦那の御意に入つて、一品づゝも拜領の、お太鼓醫者とひねつたが、先づ當世でござるてな。

町山　憚りながら私しも、昌伯老とお對／＼。不洒落も對でござりまする。

嘉藤　洒落と聞いては飯より好き、扶持方棒では、巾の利かぬ。摩利支天河岸へ乘りこんだ、西河岸の兄イといふ氣取り。

曾平　柏木曾平太は乙女樣、早歸りの一座を乘せて來た、梅隣の姉さん、お客だよ。

嘉藤　ソレ、お女中方、氣の利かない。河岸を呼ぶのだ。どうなりと二階への氣取りでおやりなさい。

三人　ハイ／＼、お客樣方は、お早うお出で遊ばされました。

ト不器用に辭儀をする。

町山　オヤ／＼、ねつからの野暮でない。

三人　ほんに、お前方も、いけどうな。

ト口々に笑ふ。

額母　ヤア、尾籠なる里言葉、聞くもなか／＼穢らはしき

正助　いづれもの振舞ひ。

勇造　殿の御所存。

千早　私しどもは恐れながら

三人　御免を願ひ上げまする。

大領　主命に背く不屆きな奴。男女に限らず、予が手討ち。

ト立ちかゝる。

帶刀　御怒りは理り、先づ暫らく。

ト手に縋つて

御機嫌の恐れ、お目通りの方々、御前を下がり召されい。

賴母　すりや、我れ〳〵が御諫言。

勇造　イヤ、命は塵芥。

正助　諫めを入れるは、臣下の常。

千早　姫君樣への申し譯。

皆々　我れ〳〵とても冥土のお供。

大領　小賢しき過言。望みの命。

トまた立ちかゝる。

帶刀　君に逆らふ不忠の奴原。引立て召されい。

皆々　心得ました。下がり召されい

ト嘉藤次、曾平太。勇造、正助を引立て、昌伯、町山、女形を引立て、花道へかゝる。大領、これを見て

大領　不忠の成敗。帶刀、放せ。

ト帶刀を退け、拔刀にて大領、花道へ追ひかける。帶刀、思ひ入れ。また騷ぎになる。管絃を打込みたる鳴り物にて、花道より、梅田、椎草たほの奥女中の形に、前垂れ掛け、梅そのと書いたる、ぶら提灯を提げ、お柳、藝者の形。奥女中一人、同じく前垂れ掛け、三味線箱を抱へ、出て來る。この跡より一擧、上下大小の形にて、手拭を頭へ卷き、權平、同じく上下大小の形にて、火繩箱を提げて、着と船頭の形にて出て來る。お柳、平舞臺の體を見て、皆々を掻きのけ、大領の側へツカ〳〵と來て

りう　殿さん、何を腹立て。お前、でもない遊びおやなア。

ト生醉ひ心にて云ふ。

大領　イヤサ、一座の興を覺ます彼れらが振舞ひ。只一討ち。

奥女　モシ、宵泊りから、朝直し。明日も板頭のお柳さん、やう〳〵と貰つて參じました。

梅田　サア、此やうに申しますが、今宵の御趣向、深川遊び。

りう　酒にする氣は無いかいなア。

ト寄り添ふ。

大領　ムウ、

ト思ひ入れあつて、刀を納め、矢張り騷ぎになる。この人數皆々、平舞臺へ來て、並よく居並び、權平、下

の方に抑へる。帶刀、前へ出て

帶刀　熾んなる火に水を注げば、却つて燃え立つ殿の御氣色。谷澤、姫川、村井氏、おてまへ方も一趣向、御機嫌直しの御相手。

賴母　イヤ、武骨なる我れ〱、華やかなる席へ。

勇造　立消らるるも心外。御意に任せ

正助　暫らく退散仕らう。

帶刀　それも尤も。然らばイザ。

勇造　良藥、口に苦きの譬へ。

賴母　ハテ、諫言は後して。先づお茶やれ。

ト管絃になり、賴母先に正助、勇造、思ひ入れあつて奥へ入る。一學權平、前へ出て

一學　イヤ、きついものだ。癇癪で突ツぱり返つた大殿を、たつた一言でお柳の方、流石當時の手取り者。殿には定めて御滿足に、思し召すでござりませう。

權平　これはどうた、一學どの。申すまでには及ばねども、御所望ゆゑに現在の、卯月どの、お內方、お部屋に差上げ遊ばされ、田なら畦なら御前の首尾、帶刀どの、お勤め方、感心いたした儀でござる。

帶刀　お取立ての御恩、何をかな、お馬先の討死より、大殿の夜の御奉公、忠義と申すも烏滸がましき、拙者が雲らぬ心の忠義。それは格別、今日の御催ふしは、蟹江一學、おてまへの御趣向。これからは、御機嫌直しの御酒になされい。

一學　御酒ども〱。お女中方。椎茸たぼの二階廻し。これも一興。サア〱酒々。

大領　イヤ〱、一學、其方を始め、昌伯なぞが進めゆゑ、心得たとは申したなれど、樣子を存ぜぬ遊所の趣き。とくと合點のゆくやうに、指南いたしてくれまいか。

帶刀　ナニサマ、この儀、拙者も店者とやらになれとある事ゆゑ、先づ出立ちは斯くの通り、白衣羽織も御殿へは、如何かと存じて上下衣服、その店者の遊びやう、とくと御指南受けませねば。

昌伯　オツとそれにも、ぬからぬお柳の方さま、お指圖ゆゑに用意いたしました、今宵の御趣向。オヽ、さうおや、洒落れとやら申しまして、詳しい書き物がござりまする。

大領　ムウ。すりや、遊びの書き物があるか。

昌伯　ハイ〱。御覽遊ばしませ。

ト懷中より、誂らへの洒落本二三冊取出し

衣裳附けやう、詞の樣子、詳しう書きました物でござりまする。
大領　ドレ〱。
ト取つて
ムウ、仕掛け文章辰巳の園。
トあれこれ外題を讀み、二三枚繰返し見て
イヤ、これなれば出來さうな事ぢや。サア〱、急いで始めい。
昌伯　こいつは智慧だ。とてもの事に、書拔きを配ればよかつた。
女皆　昌伯さんの芝居といふのは、あやまるの。
町山　イヤ、お女中方、天晴れだ。それで捌ける座敷の模樣。
昌伯　帶刀さまは大座敷、さて殿樣は裏座敷。
町山　先づお床から廻したり。
ト浮いた騷ぎの合ひ方になり、女方皆々、大衝立にて眞中な仕切り、嘉藤次、風呂敷に包みたる夜具包みを開けて、二つ持つて來る。上の方は二つ蒲團、緞子の夜着の綺麗なるを敷き、下の方は郡内縞の薄蒲團、尤も敷紙附き、古びたる夜具廻し、枕を並べ、女形皆々、これを手傳ひ、帶刀は上の方、大領は下の方の床の上に來つて、双方納まる。お柳、ツト立つて暖簾の内へ入る。菖蒲、皐月、これに附いて入る。嘉藤次、行燈を一つ持つて來て、よき所へ直し、油を注ぎながら
嘉藤　西河岸の二人、どうするのだ。汐時は悪し、お泊りか。
曾平　されば、どうせう。
町山　でもあるまい。船頭も女郎衆の蒲團で寢た夜かな。
千早　措いてもおくれ。不洒落だなう。
ト帶刀が脱いだる上下を疊んで居る。
曾平　モシ、旦那、明けてからお起し申しやせう。
帶刀　オヽ。御苦勞だ。休まつし。
大領　あの通り云ふのか。休め〱。
嘉藤　御ゆるりとおしげりなさりやし。
トこなしよろしく、嘉藤次、曾平太、奥へ入る。
大領　たんと昌伯。これは待ち久しい事ではないか。
昌伯　イエ〱、これが遊びの命。待たせるも手事でござりまする。
大領　手事とあれば、大事ないが、イヤ、この間一學が夜詰めの話し、兎角、遊女の女子なぞは、彼の金野郎とや

らねどうやら致す、福有の者は大嫌ひ。何か物事不洒落に、身貧な者に思ひ附くとは申したが、成る程、コレ、この書き物にも、左様な様子が相見える。

呂伯　左様でござりまする。また私しが芝居通と、叱られるかは存じませぬが、丁度申さば春狂言の、曾我の意久は僅か大盡、金を蒔いても突き出され、見る影もない助六に、心中立てる揚卷は、即ち今晩、御趣向の、お柳さまでござりまする。

大領　イカサマ、左様なものであらう。一學、どうぢや。

一學　左様の儀ではござりませぬ。併し、今晩の存じ付きは、あまり日頃があなた様と、お柳の方のお仲が好すぎまするゆゑ、望月氏を店者に仕立てゝ、お柳の方を揚げ詰めに致させ、あなた様を、迫かせるのでござります。

大領　それは迷惑。その節には其方とても、内々予が荷擔人を致してくれ。

嘉藤　イエ〱、それはなりませぬ。私し共はお店方。主の座敷へ勤めるが、今宵の御趣向。千早さん、お前もさうであらうなア。

千早　さうぢやわいな。これからは御殿の務は取措いて、梅田どの、お前も初心らしい、いけどうな所を、お習ひな。

梅田　イエモウ、最前から見まするに、何やら覺え憎い事。御指南なされて下さりませ。

嘉藤　これサ、それぢや矢ッ張り地金。先刻の御意に困りもせず、娘分氣取りでやりなさい。

梅田　それぢやと云うて、私しは、御免なされて下さりませ。

ト迷惑さうに云ふ。

大領　ハテサテ、彼奴は兎や角と申し、予が氣に背く困つた奴。コリヤ〱、一學、斯樣いたせ。香川權平、兩人とも、あの者を連れて奧へ參り、左様然らばの堅苦しき者ども、出仕いたさぬやうに、キッと申せ〱。

一學　成る程、これは御尤も。然らば權平、一刻も早く梅田どの、お次へ。

梅田　お貳人さま、どうやら矢ッ張り堅いぞえ。

ト浮きたる合ひ方になり、一學、權平。梅田を連れ、町山もこれに附いて奧へ入る、直ぐに暖簾内よりお柳の方、寢間着の形に着替へ、最前の洒落本を鼻紙に持ち添へ、しどけなく出て來て、大領の方へ行かんとする。

嘉藤　モシ、お柳さん、此方でござりまする。
　トこれにてお柳、立戻り、帶刀が枕元へつくばひ
りう　ほんに、折が惡いなう。なにサ、わたいが客衆ぢやないが、言傳があると云ふから、ちよつと逢つて來たいわいな。
　ト云ひ〳〵莨を吸ひ付けて帶刀へ出す。大領、合點のゆかぬこなし。
昌伯　これが遊びサ。今に來るから、氣を揉むなといふ事サ。
嘉藤　困つた者ぢや。
昌伯　折は惡いが、モシ、お前さんは常泊り、あつちやア今に歸るのでござります。
帶刀　店の衆か、お座敷か、お座敷ぢやアないか。
りう　アイ、お座敷では、御門が難かしいによつて、どうで長くは居ないわな。なんにしろ、ちよつとお前、禿さんを頼んだによ。
帶刀　どうとも勝手にしやアがれ。
　ト夜着を着てコロリと寢る。お柳、ツイと立ち、大領の方へ來て、床の上へベッタリ座り
りう　昌伯さん、よく居ておくれだの。モシ、淋しかつたかえ。
　ト大領が方へ摺り寄る。
昌伯　そりやこそ、もう〆めた。
　ト眼で教へる。大領、モヂ〳〵、勝手の知れぬこなしあつて
大領　昌伯々々、さて斯う改たまつて見れば、なんと挨拶してよいかなう〳〵。
昌伯　これはしたり、そこで彼の書拔きではない、洒落本の秘書を御覽じますがよい。
大領　オヽ、それ〳〵、大事の事を失念した。
　ト以前の洒落本を取つて讀む。此うち千早も鼻紙へ書きつけた覺え書を出し、眞面目に讀んで居る。お柳鼻紙へ添へた洒落本を出し
りう　コレ、御覽。丁度この本の女郎衆と、わたいが心が同じ事。苦勞でもあらうし、ほんにやつれもしやうわいなア。
大領　サア、それは又どうした事で。
りう　どうしたと云つて、この頃ぢやお前で、客衆はみんな離れる。あの大座敷の店者の、禿さんからしてお前を退けと云ふけれど、それする位なら、これまでに、何し

に身の皮を剝いで、お前を呼ぶものか。死んでも退く氣は無いけれど、面工は惡し、しみ〴〵と、ほんにわたいが胸の內、推量してくれたがよいわいなア。

大領　オヽ、成る程、さうであらうが、先づ第一、その面工とは、なんの事ぢや。この書に見えぬが、コリヤ、昌伯、面工とは、どうした譯であらう。

昌伯　これは御尤も。面工とは、御存じない筈だ。これは斯うでござりまする。

大領　どういふ譯ぢや〳〵。

昌伯　イヤ、先づ下々で金銀に、手支へまして、取遣りの一向出來ませぬを、工面の惡いと申しまする。それを引ツくり返して、面工でござりまする。

大領　ア、、さうか。金銀融通の成りかねるを、工面が惡いと申すので、それを返して、面工とは、金銀自由になるであらう。

りう　アレ、又あんな、不洒落ばつかり。わたいがこんなに瘦せる程、苦勞になるは、この節句の、仕舞ひ札もまだ叶はず、晉の遣らぬ借錢は、反物の拂ひと小間物屋、髮結床へも祝儀の附け金、これほど無ければ、しみ〴〵苦勞になるよ。

大領　サア、また知れぬワ。借用の金子、方々にあるも聞えたが、その又、節句の仕舞ひ札とは、何の事ぢや。

昌伯　ヘイ、またか。只今、此お子の申されました仕舞ひと申すは。

大領　エヽ、聞えた。大方これは、內通せし男、間夫狂ひの合ひ詞であらう。さうか〳〵。どういふ譯ぢや。どう云ふ譯ぢや。

ト煙管にて灰吹を叩き、急いて云ふ。これにて、帶刀起き上がり

帶刀　なんだ、隣は騷々しい。彼のお屋敷は、まだ歸られえのか。

千早　ハイ、殿樣には、まだお夜詰め前でござりまする。

嘉藤　エヽ、コレ、さうぢやないわな。

千早　ほんに忘れて、帶刀さま。

嘉藤　ではない、帶はん、酒でも上がれいなア。

帶刀　ナニ、酒は飮みたくもない。いま〳〵しい。宿泊りで今夜來てくれろ、話しがあると吐かしやアがつて、野郎の縮めのやうに、蒲團の番をさしやアがる。茶碗で飮んで、獻した。

嘉藤　サア〳〵、お一つ。

ト銚子を取る。
オヽ、ぬるいさうな。お燗を直して參じませう。
千早 わたしも、なんぞお肴を。
帶刀 ホイヽみんな行くのか。
ト嘉藤次、銚子を持ち、千早附いて奥へ入る。矢張り合ひ方、昌伯、扇をひねくりながら
昌伯 モシ〳〵、悪い癇癪だ。モシ、旦那、あのお子の仰しやる、仕舞ひ札と云ふのは、菖蒲の節句はどこでも、色客と一緒に來たいのが、此お子達の身の樂しみ。その上に、下々の節句の前日は諸拂ひ方、祝儀の付け屆け、彼れこれに餘ッぽど、物のいる儀でござりまする。
大領 ムウ。して、それは又、何萬石の出費であらう。
昌伯 エヽナニ、滅相な。石高には及びませぬ。大方、三百金もござりますれば、相濟む儀でござります。
大領 それなれば、いと易い事おや。納戸方へ申し付けう。イヤ、併し、兎角女郎といふ者は、身貧な者を大切に致すではないか。
昌伯 エヽ、成る程。
ト困つたる思ひ入れ。
イヤ、モシ、併し、お柳さん、旦那の心意氣はあの通り。これからお前の心中わえ。
りう エヽ、鈍な事云ひなんす。初手から知れたわたしが胸、主に苦勞を掛けまして、なんのわたしが嬉しからう。成らる所は、どうなりと、大座敷の客を勧めても、首尾の札は殿さんの名前、わたしが胸で兎も角も、菖蒲の節句は、ナア、申し。
大領 フウ。すりや、金子は餘人に出させ、その折は予を客にして
りう 二日も三日も居續けの、顔な話しがあるわいなア。
大領 昌伯、なんと、これ程な、予の樂しみはあるまいな。
昌伯 御意でござりまする。
ト眞面目になる。
りう それから、跡は來ての事。エヽ、また其方を向くのかいなア。
ト引寄せる。
大領 どうしてよいやら、勝手の知れぬ。夜詰めとは、きつい違うたものおや。
りう 昌伯さんは大事ない。難ようわいなア。
ト大領へ寄り添ふ。騒ぎになり、昌伯、仰天して

昌伯　ハア、萬歳樂々々々。

ト耳を塞ぎ

色事師には何がなる。これぢやアお座に溜られない。

ト上の方へ逃げようとしてうろたへ、帶刀に行き當る。

帶刀　うろたへ坊主め、何を吐かす。

ト突き轉かす。昌伯、愕りして

昌伯　帶刀さま、まだお寢らぬか。

帶刀　寢られるものか、馬鹿々々しい。得心づくで去り狀渡し、御前へ預けた女郎でも、まさか今のを聞いて居て、腹は立たぬが、否だ〳〵。お店のお客はお歸りなさるがな。頭は居ねえか。上下を寄越せ〳〵。

ト無性に手を叩く。これにて奧より、一學、權平、嘉藤次出て

權平　これはしたり、帶刀どの。イヤ、お店の旦那、おとなしくもない、なんの事でござりまする。

帶刀　なんの事とは歸るのだ。

權平　それだとて、今時分。鷄が啼いてから、お起し申します。

帶刀　否だわえ〳〵。隣の態を見ろ。

嘉藤　モシ、お隣のお座敷が、どういふ事でござりまする。

帶刀　どういふ事とは、乙女橋の兄イ、お柳は今夜宵泊りで、おれが仕舞つて置いたのぢやないか。

權平　左やうサ、指でも附け手はござりませぬ。

ト手拭を癖に船頭のやうに云ふ。

帶刀　イヤ、あるの。

ト下の屏風の方を顎にて敎へる。

權平　ヘイ左やうかえ。あつちやアとんだ事だ。コレ、若い衆、爰の内ぢやア、二重賣りをするか。どこのどなたか知らないが、横鎗を切られちやア、先づ旦那より、おれが否だ。濟まないぞ〳〵。

トぶツ座る。これにて、梅田、曾平太、出て來て

曾平　お客の邪魔をする奴は、何奴だ〳〵。

一學　隣座敷だ。引摺り出せ〳〵。

曾平　オヽ、合點だ。

ト下の屏風へ立ちかゝる。町山、昌伯、愕りして

コレ、滅法界な。御前だぞ。大殿樣だ。靜かにしやれ靜かにしやれ。

ト留める。

一學　大殿様でも御前でも、今夜の趣向、大事ない。

權平　引摺り出して、論判しろ〳〵。

ト下の屛風を引退け、大領を、無理に帶刀の所へ連れて來る。お柳、附いて來つて思ひ入れ。皆々立ちかゝるを、昌伯、町山、よろしく留め

昌伯　押へさつしやい。恐れ多い、御遊興とはいひながら

町山　御家來の身として何事ぢや。

大領　イヤ、大事ない〳〵。斯様いたさねば、興にならぬ。心遣ひ致すな。押へて居れ〳〵。

兩人　それぢやと申して勿體ない。

大領　ハテサテ、主でも家來でも、色戀の道に隔てはない。帶刀が立腹、至極々々。存分に致せ〳〵。

帶刀　イカサマ、左様に御意なされば、今更なんとも御不足の、申し上げやうも無き仕合せ。

大領　イヤサ、さうではない〳〵。予が身の上は、どうであらうと、可哀さうにお柳の心底。帶刀、其方が得心のなるやう、思案を致せ〳〵。

帶刀　へイ、成る程、寛仁大度の思し召し。二世と交した……イヤサ、今晩揚げ詰めに致したお柳を、差上げまするから、先づは詫び代、手切れ心。

一學　ナニサマ、これはさうでござらう。取扱ひは兎角金子。

權平　斯様な事は先づ早速、金で濟まさねば、いづ方のお店も立たぬでござりまする。

大領　して、帶刀が望みは、如何程。

帶刀　イヤ、別して、大さうな儀でもござりませぬ。百萬町のお墨付。

大領　エヽ、なんと。

ト思ひ入れ。

イヤ、苦しうない〳〵。成る程、左やう有りさうな事。隨分書いて遣はさう。

皆々　アノ、お手づからお墨付を。

大領　讃は添げぢや。料紙持て〳〵。

町山　ハイ〳〵、畏まりました。

ト高蒔繪の硯箱に、料紙を載せ、持つて來る。大領取つて、サラ〳〵と書き認め

大領　ソリヤ、お望みの百萬町。

ト投げ遣る。皆々思ひ入れ。帶刀取つて、改め

帶刀　存じかけなき御墨附。とてもの事に、お袖判。

ト懐より、三建目に預かりし袖印を出して捺す。大

　顔、チロリと見て
大領　それでは行く末、家國にも
りう　エヽ、御前樣、何を御意遊ばす。
大領　イヤサ、其方ゆゑなら惜しうないて。
　ト手を取つて引寄せる。帶刀、丞附を納め
帶刀　さて、この上は、お寢間の邪魔、拙者を始め、いづれも方、お次へ退散仕らう。
大領　さうしてくりやれ。イヤ、時に只今の寢間はむさくるしい。
りう　サア、それもわたしが、手づから直しまするわいな。
梅田　ハイ、左樣なら、御前樣。
皆々　御機嫌よう、おしげりなされませう。
　ト唄になり、帶刀先に、一學、權平、思ひ入れあつて、梅田、昌伯、町山、嘉藤次、眞太平、皆々奥へ入る。あと合ひ方。お柳、よき所へ以前の結構なる蒲團を敷き直し、屏風立てよせる。大領、煙草盆を提げ、蒲團の上へ來て
大領　思ふ事、叶はねばさて浮世とは、よう云うたものぢや。さりながら、先づ〳〵これで一安堵。お柳、其方もさぞ嬉しう思ふであらうなう。
りう　サア、嬉しいやら、悲しいやら。どうもせう事はござりませぬ。
　ト蒲團の上へ來て座る。
大領　ハヽ、氣味の惡い。この上に又、悲しいと、そりや又なぜ。
　ト不思議さうに、お柳が顔を見る。お柳、涙ぐんで
りう　モシ、殿さん、これ見て下さりませ。
　ト大領が手を取つて、懷へ入れる。大領、探り見て
大領　ヤ、こりやコレ、慥かに岩田帶。
りう　サア、お情うけて此やうに、あなたのお胤を宿せし身の上。
大領　フム、それが又、なんで其やうに、悲しいのぢや。
りう　ハテ、生きる瀬、死ぬる瀬と、產は女子の命の瀬戸、それが慣ひではなけれども、あなたに名殘の惜しまれて。
大領　ハテ、心細い事を云やる。其やうな折の爲にこそ、典藥數多召し使ひ、まだその上に、予が家内に天滿宮の守もあれば、必らず安產いたさす程に、案じやるな〳〵。
りう　イエ〳〵、さうぢやござりませぬ。例へ又、產み落

りう　したと云うてから、わたしや卑しいお側仕へ。生れたお子も、その通り、卑しいわたしがお腹の嬰兒。

大領　これはしたり、其やうに又、先潜り云はぬものぢや。

ト手を取つて引寄せる。餘念なき思ひ入れ。此うち帶刀、マヂ／＼奧より出て、屏風の外に窺ひ居る。

りう　それなればマア、神や佛のお惠みで、安産いたしましたなら

大領　ハテ、その時は御臺所、直ぐに奧樣ぢや。なんと、どうぢや。

りう　エヽ、嘘々。お云ひ號けの紅梅さま、歴とした、あなたもある上に。

大領　サア、その紅梅姬はの。

りう　尤もこの程、御不例とはいふものゝ、御本腹なされば御祝言。

大領　イヤサ、戒名と杯は致されまい。

りう　エヽ、なんと御意遊ばす。

大領　必らず共に、他言は無用。紅梅姬はこの間、隅田川にて不慮の横死。

りう　そんなら、紅梅姬さまは。

大領　ぢやに依つて、其方を直ぐに御臺。

りう　そりや、あんまりな、冥加もない。

大領　奧になるのが、其方は否か。

りう　さうではなけれど。

大領　そんならなんで。

ト　お柳、差俯向き、默つて居る。此うち帶刀、以前の硯を引寄せ、大領の詞を一々に書きとめる。大領、無理にお柳を引起し

大領　紅梅の身の上まで、其方に明かす予が心底。

りう　それぢやに依つて、わたしが事も又、人さんに打明けて

大領　なんの云はうぞ。サヽ、この上其方の望みは、どうぢや／＼。

りう　お腹の嬰兒をお家の跡目、お世繼になされて下さりませ。

大領　ハテ知れた事。男子なれば、二言となしに家の世繼。

ト帶刀、これを書きつける。お柳、ニッコリ思ひ入れあつて

りう　すりや、誓言でお家の跡目。

ト云はうとして
イエ〳〵、まだあなたには弟御の、犬清さまもあるなれば。
大領　イヤ、犬清は一生部屋住み。
りう　それも心の濟まぬもの。
大領　然らば濡衣、切腹に、申し附けたら、其方の心。
帶刀　切腹とは面白い。
ト威儀を正して高く云ふ。
大領　南無三、それを聞かれたか。
トぎよつと思ひ入れ。お椽、直ぐに大領へ寄り添ふ。唄になり、屏風引廻す。帶刀、思ひ入れ。チョン〳〵にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、高足の二重。矢張り御殿のかゝりにて、正面の見附け、向う梅の金襖、軒には同じ紋所の、紫幕を張り、雪洞付きの燭臺先に、臺提灯二張り飾り付け、よろしく、二重舞臺の眞中に、犬清、上下衣裳、大小、若殿の形にて、褥に座し、上の方に、權平、求馬、下に正助、勇造、いづれも最前の上下衣裳にて扣へ、時の太鼓、琴唄にて道具とまる。

ト直ぐに下座より、求馬、前幕の拵らへの形にて繩にかゝり、菖蒲革の侍ひ二人、この繩を扣へ、後より一學、以前の形、上下衣裳にて誂らへの白木の箱を携へ、これに附いて出て來て、求馬を舞臺先へ据ゑ
一學　仰せに任せ、花房求馬、召捕りましてござりまする。
權平　夜陰の御評議、御苦勞ながら、捨て置き難き大切の御詮議、とくと御賢慮めぐらされ、御尤もに存じ奉りまする。
犬清　云ふにや及ぶ。兄大領の仰せを受け、名代勤める犬清が目通り、花房求馬、覺えあらば、包まず隱さず白狀いたせ。
求馬　存じよらざる身の災難、罪の覺えはなけれど、有無を云はせずこの繩目、無體の御詮議、引出され、古朋輩の手前、面目もなき。して、御不審の仔細はな。
權平　イカサマ、少しは恥かしからう。以前はお家の譜代にて、花房主膳の御子息どの、ハテ、いゝ態な、お目見得ぢやなア。
正助　イヤ、權平どの、扣へ召されい。御名代とは申せど

も

頼母　大切の御評議、御前でござる。

犬淸　鎌江一學、仔細をとくと申し聞け、なごやかに詮議いたせ。

一學　畏まつてござりまする。以前は以前、只今では素浪人の求馬、貧苦に迫り、慾から起つて、何者に頼まれ、隅田川にて殺害なした。

求馬　こは口惜しきお疑ひ、如何に身貧に暮らせばとて、人を害して寶を貪る、無道の不所存持つべきや。何を證據に人殺しの。覺えは曾てござりませぬ。

犬淸　イヤ、コリヤ求馬、一應の云ひ譯はさもあらんが、當家に於ての一大事、許し置かれぬ仔細といふは、隅田川にて紅梅姫。

ト云にうとする。

頼母　アイヤ、その儀は今暫らく、申さば今は他門の求馬、しかと所存を試した上。

犬淸　如何にも。明けては申さねども、紅梅姫にはこの程より、御不例なるが、世上の噂とり沙汰、定めて聞いたであらう。心に覺えがあるならば、古主の爲に白狀いたせ。

求馬　すりや、拙者めがお家へ不忠。

一學　問ふに落ちいで語るにと、お家へ不忠と口走れば、紅梅姫を害したに、求馬、相違はあるまいがな。

求馬　ヤ、、なんと。

一學　ナニ仰々しい驚ろき顏、遁がれぬ證據は、この一品。

ト白木の箱より四立目の鞘を出し、求馬が目先へ突き付ける。求馬、チツと見て

求馬　ムウ、すりやこれが。

一學　覺えがあるか。

求馬　正しくそれは紛ひなき、鞘に散らしの向ふ梅。

權平　お家の定紋。

正助　大殿より

一學　拜領なした一腰。

求馬　如何にも、こりやコレ親人に、御勘氣受けしその砌り、大宮氷川の境内にて、召上げられしその一腰。

一學　科極まらば逆磔刑。求馬が成敗、獄屋へ引け。

頼母　イヤ、待たれよ、詮議が暗い。

一學　へ、、、。小癪なる谷澤頼母、證據慥かな科人を、なんで詮議が暗いのだ。

賴母　例へ證據はあるとても、自身に白狀なさゝるうち、科の輕重は、どうして知れた。
一學　イヤサ、そりやア。
賴母　その上、未だ若殿に、お指圖なきうち、粗忽の下知。
正助　御名代たる犬清さま。
勇造　お主に隔て召さるゝか。
一學　サア、そりやア。
三人　サア〳〵〳〵。
賴母　なんと詮議は疾らうがや。
　ト　きつと云ふ。
一學　ムウ。
　ト　この時、奥より
帶刀　大殿の御上意、控へ召されい。
　ト　管絃になり、正面の襖を開き、帶刀、キッとしたる上下衣裳に改め、三方に以前の墨付と、九寸五分を載せたるを持ち出で
　恩を戴いて恩を忘るゝ、野の鹿の、野草を損ねる如きの不忠の奴ばら、今日只今、國家の政務を預かつたる望月帶刀、詮議せよとのお袖判賜はり、上意でござる。

賴母　合點參らぬ望月どの、隅田川の一埒、弟君犬清どのへ、大殿より竊かに詮議せよとの、かねての御諚。それに又、いま改めて其許へ。
犬清　國家の政務を預かりしと、人も無げなる無禮の過言。
帶刀　如何にも人は多けれど、お家へ對して御奉公、役に立つ武士一人もない。殿のお目鏡叶つて、執權職たる望月帶刀。お家の政務は今日より、心の儘に計らひ申す。
賴母　ムウ。すりや、當家の執權職。
正助　帶刀どのへ大殿より
勇造　改めて上意ありしとな。
帶刀　疑はしくば、これをお見やれ。
　ト　三方の上なる以前の墨付を見せる。愕り思ひ入れあつて
一學　誠に、疑ふ方もなき
帶刀　殿の嚴命お袖判、執權職たる帶刀が、なんと詞は背かれまい。
一學　天晴れ出來た。出頭の忠心第一、望月氏。
權平　執權職とは、この上なき、立身出世も、御器量ゆ

る。

一學　大慶至極の儀でござる。

　ト輕薄する。求馬、思ひ入れあつて

求馬　こは珍らしきお家の政務、如何に時代なればとて、古參の武士は見る影もなく、昨日今日まで新參の、名も無き侍ひ、執權とは。

一學　ヤア、囚人の身を以て、望月どのへその雜言。

求馬　イヤ、求馬はお家の譜代、黄金の鶏紛失の、身の越度より浪人なし、又その上に覺えなき、疑ひ受けて、この縲目。よくも武運に盡き果てしか、侫人讒者のこの手籠め。思へば〳〵口惜しい。

　ト ぢつとなる。

帶刀　フム、讒者とは事をかしや。明白なるはおのれが罪、事顯はれしと知らざるか。既に汝が父たる者、花房主膳といふ老ぼれ、殿へ毒害いたしたる、逆罰當つて、即座の最期、その悴たるおのれが科、お家の重器、黄金の鶏、紛失させしばかりでも、縛り首には極まる罪。隅田川にて紅梅姫、何者に頼まれ、殺害いたした。

求馬　イヤ、存ぜぬ、且以て。

帶刀　蟹江一學、證據を以て、慥かに糺命遂げたでないか。

頼母　イヤサ、その證據分明ならぬ、互ひの爭ひ、後しての詮議。

犬淸　帶刀とくと、思案の致せ。

帶刀　お指圖御無用、若殿にも科は遁がれぬ、お覺悟あれ。

犬淸　ナニ、某に覺悟とは。

帶刀　大殿の嚴命、痛はしながら。

　ト九寸五分を載せたる三方を取つて、犬淸の前へ直す。

皆々　これは。

　ト管絃になり、帶刀、また懐より以前の書き物を出し

帶刀　弟犬淸、お柳の方へ艶書を送りし科に依つて、切腹申し付くるものなり。お袖判慥かに、斯くの通り。

犬淸　ヤ、、覺えなき艶書の沙汰。これも讒者の業なるよな。

　ト ぢつとなる。

頼母　ハテ心得ぬ、殿の御所存。例へ疑ひありとても、詮議も遂げぬ成敗。

帶刀　權平、賴母を引出し召され。

權平　心得てござる。イザ、お立ちあれ。

　ト賴母へ立ちかゝる。立廻りあつて

賴母　尾籠なり方々、某には何科あつてのこの手籠め。

帶刀　云ふな、越度は第一に犬清どのゝお守り役、放蕩惰弱にそゝつたゆゑ、大小取上げ御追放。

犬清　ハテ、是非もなや。我れのみか、無實の科に賴母まで。

賴母　よくも讒者の企みしよな。

　トぢつとなる。

一學　科極まつた上からは、どうで遁がれぬ、罪人達。

勇造　すりや、若殿には御切腹。

正助　谷澤賴母は御追放。

一學　花房求馬は縛り首。

求馬　聞けば聞く程身の不運、お家にはびこる佞人ばら、生け置く殘念、口惜しい。

帶刀　引かれ者の小唄、ナニ小癪な。若殿、急いで切腹あれ。但し、この期に御未練か。

犬清　とはいへ、無念な、やみ／＼と。

帶刀　大膳の下知狀、御違背か。

犬清　イヤサ、全く。

帶刀　谷澤賴母、大小渡せ。

賴母　サ、それは。

帶刀　嚴命背くか。

賴母　サ、それは。

皆々　サア／＼／＼。

帶刀　遁がれぬ重罪。未練な事を。

　トきつとなる。向う揚げ幕にて「長谷部信連出仕」と呼び、三味線入り、鼓の合ひ方、雨車になり、花道より重左衞門、黑木綿、紋付き、麻上下大小、高股立ち、足駄がけ、傘をさし、銅燈籠を提げたる蟻通しの見得にて出て來り、花道の中にて

重左　見渡せば、ゑのこ柳にぶちまぜて、都ぞ春の二疋なりけり。錦にあらぬ黑どてら、麻上下の角とれぬ、長谷部重左衞門といふ武骨者、久し振りにて館の出仕。罷り通る、許さつしやい。

　ト矢張り鳴り物にて、ツカ／＼と本舞臺へ來る。下座より嘉藤次、曾平太、野袴、大小の形にてツカ／＼と出て、立ち塞がり

嘉藤　ヤ、、大膽なる出仕呼はり。

曾平　殊に御殿へ高足駄。

嘉藤　夜陰の出仕。

三人　抑へ召されい。

ト立ちかゝるを、重左衛門、構はず左右へ投げ

重左　小癪な餓鬼めら。長谷部が出仕、用があれば夜中でも、奥御殿まで罷り通る。雨が降るから高足駄、無禮の咎めはなんのたわ言。いつれも、左樣ぢやないか。

ト舞臺の眞中へ來て、あたりを見廻し、ドッカと座す。帶刀思ひ入れ。

帶刀　多賀のお家に名も高き、音に聞えし長谷部氏、さてはおてまへ、重左衛門信元どのでござるよな。

重左　おてまへは何人、ついぞこれまで。

帶刀　イヤ、拙者儀は先達て、召出されし望月帶刀。

重左　アノ、おてまへが兼ねて聞く

帶刀　一徹無敵の長谷部どの。

重左　出頭一の望月どの。

帶刀　始めて知る人。

重左　以後別懇に

帶刀　ハテ、信元どの。

重左　帶刀どので

兩人　ござつたよな。

ト兩人、思ひ入れよろしくあつて

重左　見受けますれば、お白洲に、引据ゑられしは花房求馬、犬清さまにも何とやら、お氣むづかしき御面色。何事が起つて、よる夜中、武士の評議でござります。

一學　イヤ、長谷部どの、求馬は、黄金の鶏紛失の越度。

重左　ハテ、その事なら疾に濟んで、親主膳には勘當受け、お家は追放、今更に、又も縄目は可哀さうに、窮屈らしい。赦してやりやれ。

ト求馬が縄目を解く。一學、權平顏見合せ

權平　ア、コレ、我まゝ千萬な。

三人　花房求馬は大事の囚人。

重左　四の五と云ふな。いつでも用があるなら、身が預かり、粗忽はせぬ。ナア、求馬。

求馬　如何にも、貴殿のお志し、拙者ばかりか犬清さま、御切腹との非道の上意。

重左　ナニ、若殿に御生害。そりや、何奴が裁き立て。

帶刀　イヤ、外でもない、拙者言上。

犬清　無實の科も兄の、殿命下れば是非なき仕儀。

頼母　お傅きたる拙者めも、身の越度にて御追放。

正助　執權職たる望月どの。
勇造　有無を云はせぬお計らひ。
重左　ムウ、執權の望月とは。
帶刀　餘人ではござらぬ、矢張り拙者。
重左　ハテ、いつの間に、うま〳〵と、桂馬の高上がり。
面白い手も出るものぢやなア。
一學　イヤ、長谷部どの、求馬は詮議重なる大罪人。この
一品を御覽なされい。
ト以前の鞘を重左衞門へ見せる。重左衞門、取つて
重左　ムウ、こりや先年大殿より、これなる求馬が拜領せ
し、向う梅の紋散らし。この鞘が、求馬にかゝる詮議
とは。
一學　隅田川にて、この間、紅梅姫の横死ある、水中より
出でたその一品。
重左　それなら猶更、この詮議、他門へ對して罷り成ら
ぬ。
皆々　そりや又なぜに。
重左　ハテサテ、世上の噂にも、紅梅姫は御不例と、横死
の沙汰もなきうちに、よしなき詮議は毛を吹いて、疵を
求むる諺にて、お家の爲になるまいがや。

一學　イヤサ、その儀は。
重左　御家老どの、イヤサ、執權の望月どの、それでも詮
議おしやるか。
ト笑つて云ふ。帶刀、思ひ入れあつて
帶刀　疑ひ深きは隔ての元。お家に久しき長谷部どの、拙
者が役儀を何とやら。御疑念ござらば、斯くの通り、お
袖判の墨付、拜見あれ。
ト以前の書き物を出す。重左衞門、取つて
重左　夜陰でござれば、墨色とくとお袖判の證跡。失禮な
がら求馬、その燈、これへ持ちやれ。
求馬　心得てござりまする。
ト重左衞門が持つて來たる銅燈籠を出す。扉を開き、
書き物をつく〴〵見て
重左　成る程なア、仔細なき殿のお袖判、しかも弟御大淸
さま、御切腹との御下知。いま一札は望月帶刀、國家の
政務執權職、申しつくるものなり。
權平　なんと、それでも、長谷部どの。
一學　支へこさへをお云やるのか。
重左　なか〳〵以て恐れ多い。ハテ、結構なるお袖判。
ト云ひ〳〵、燈籠の火にて二枚とも燒き捨てる。

皆々　ヤア、大切なるお袖判。ホヽホイ。

ト恟りする。重左衛門ニッコリこなしあつて

重左　殿の袖判焼き捨てたる、罪科は重類絶すは掟。

帯刀　如何にも國法、遁がれはない。

一學　長谷部信元。

敵皆　繩かゝれ。

ト立ちかゝる。

重左　ハヽヽヽ。長谷部長兵衛信連が妻、斯く云ふ重左衛門信元が母はナ、大殿多賀の大領へ、お乳の人に召出され、この信元が乳兄弟、重類絶やして見やれ。

皆々　サア、そりやア。

トもぢ／＼、ヂッと扣へる。

重左　お袖判なければ、犬清君御切腹はさて措き、谷澤頼母追放の沙汰にも及ぶまい。

犬清　ヤヽ、すりや、この上大領へ、某が身の申し譯。

重左　信元が胸にござります。

頼母　チエヽ、忝なき御計らひ。

重左　花房求馬は證據のこの鞘、預け遣はす。何卒して鯉口合はす中心を尋ね、身の科の云ひ譯、一つには、紛失なしたる黄金の鷄、求め出さば、その時こそ、再び當家へ歸參あれ。

求馬　拙者めに、すりやこの一品。

ト鞘を取り、押戴く。

重左　長居は恐れ、早お行きやれ。

求馬　然らば此まゝ。

ト立ちかゝる。

曾平　われをやつちやア。

トかゝるを求馬、立廻りにて、見事に取つて投げる。

重左　出來た。堅固で歸參。

求馬　ハッ。

ト思ひ入れよろしく、早三重にて、右の鞘を持ちながら求馬、一散に花道へ入る。

重左　許し召され、望月どの、おてまへの役儀は推まねども、何かと申すはお家の爲。

帶刀　何がさて、數代忠臣の長谷部どのに習ひ、某も大殿の御前、弟君犬清さまのお命も、申しなだめて又ゆるりと。

重左　重ねて面談仕らう。

皆々　先づそれまでは若殿様。

犬清　信元、過分。

重左　帯刀どの。
帯刀　過分の返禮。
　ト小柄を手裏劍を打ちかける。重左衞門、手ばしこく宙にて握る。
重左　ハテ、叮嚀な御挨拶。此まゝ長谷部が貰ひまする。
　ト取り納める。
帯刀　ムウ。
　トまた寄るを、一擧、よろしく留める。管絃になり、犬淸先に韜扮、權平、正助、勇造、これに付き、帯刀思ひ入れあつて、二重舞臺の奥へ入る。齋藤次、管平太、下座へ入る。重左衞門殘りて、これを見送り、今の小柄をチッと見て
重左　ハテ、この小柄は覺えある、漢の武帝の出世鯉。ムウ。
　ト思ひ入れ。合ひ方になり、下座よりお柳の方、裲襠衣裳に改め、手燭を持ち出て來て、空を眺める。時鳥の聲。
りう　でも、今鳴いたは時鳥、只有明の月ならで、あやめもわかぬ五月闇、殘り多い事であつたなア。
　トあたりを見廻し、行かうとする。

重左　イヤ、コレ女中、その燈、ちよつとお貸しなされ。
　トお柳、立ちどまる。重左衞門、つく〴〵見て
ハ、ア、讀めた。音に聞えしお柳の方、花の顏、柳の眉、實に嬋妍たる楊家の娘、玄宗現を拔かしたも道理。ハテ、あてやかなものだなア。
　ト騙し寄つて切らうとする。お柳、手ばしこく身をかはす。立廻りに重左衞門が落したる今の小柄を見付け
りう　ヤ、、この小柄は。
　ト取上げる。重左衞門思ひ入れ。
模樣も慥かに、オ、、さうぢや。
　ト重左衞門を見て
これを所持なす、其許は。
重左　長谷部長兵衞信連が倅、重左衞門信元、その小柄は、最前貰ひました。
りう　そりや何人に。
重左　以前は、こなたの夫とやら、望月帯刀に申し受けた。
りう　そんなら、いよ〳〵、こりやわたしが。
重左　なんと。
りう　サア、故あつて大事の品、望月どのへ讓りしを。

重左　所持する長谷部が不思議より、合點のゆかぬこなたの身元。もしや以前は捨て子にて、幼なき時の物語り、心覺えはあらざるや。
りう　エ、。どうして又、わたしを捨て子と云ふ事を。
重左　さてこそ、疑ふ所もなき、常々父の物語り、未生の以前のあらましを、語り聞かさん、よつく聞け。
　ト合ひ方になり、お柳を此方へ引廻し
未だ平治のその昔、高倉の宮の令旨を受け、父信連は吾妻路へ、旅の寢覺めの物憂さに、とある女と語らひしが、計らずも懷胎。月日を經て産み落したは女の子、國は陸奥その時は、諸國全く穩やかならず、戰場へ赴むく足手纏ひ、勇士に娘は益なしと、下野の國底野の里、遊行柳の澤のほとり、流石は恩愛、行く末を、壽ぐ色緒の出世鯉、小柄を添へて捨て置きしと、はるか後の物語り。
りう　ヤ、そんならわたしが、父さんは
重左　長谷部長兵衞信連どの。
りう　拾ひ取りしは、陸奥にて、樋爪の兵衞何某とて、佐藤一家の名だたる勇士。
重左　遊行柳の緣に依り、その名もお柳と名乘らせしか。
りう　お前は現在
重左　血筋の兄。
りう　エ、懷かしい。
　ト寄らうとする。重左衞門、共まゝむごく突き退け
重左　同胞持たぬ。穢らはしい。
りう　ぢやと云うて、今さら名乘り合ひ、實の妹のわたしぢやもの。
重左　吐かすな。然な不所存者。現在夫のある身にて、不義間男も同然の、今の身の上、氣に喰はない犬畜生め。四つ足の妹持つた覺えはない。
　トきつと云ふ、お柳ハッと思ひ入れあつて
りう　道理ぢや、兄さん、憎からう。善惡ともに夫に連るるの習ひ、世に淺ましい女子ほど、義理あるものはないわなア。
　トわつと泣く。重左衞門もホロリとして
重左　とは云ふものゝ不便やなア。たま〳〵廻り逢ひながら、犬よ猫よと切諫も、無道の夫に添うたる其方。
りう　イヽヤ、心に曇りはない。
重左　なんと。
りう　わたしも長谷部の娘と聞く。忠孝二つ立つならば
重左　その時こそは、誠の妹。

りう　もし〳〵願ひの叶はねば

重左　お家の爲には替へられぬ、國家を亂す望月帶刀、品に依つたらこの兒が。

りう　モシ。

ト寄らうとする。重左衞門突き廻し、ツカ〳〵と花道へかゝり

重左　太平の代に。

りう　エ。

ト思ひ入れ。

重左　兜着ずばなるまいか。

ト唄、雨車になり、重左衞門よろしく傘足駄にて、心を殘し花道へ入る。お柳殘つて、チッと思案の思ひ入れ。合ひ方、時の鐘になり、二重舞臺より帶刀、刀を提げ、あたり見廻し、窺ひながら出て來て、キッと思案し、目釘を濕めし、股立ち取つて、ツカ〳〵と下座の方へ行かうとする。お柳向うへ廻り、チッと留める。帶刀、鎌はず突き退けて行かうとするを、お柳其まゝ裾を捕へ、キッとなつて

りう　物をも云はず、血相替へて奥を目がけ、只ならぬ思案の色目。早まつては、事の破れになりますがや。

帶刀　毒喰はゞ皿、まだ〳〵と、時を逃がすも人心、變ぜぬうちの一思案、手短かに踏ん込み、大領どの、殺らして直ぐに鎌倉へ。邪魔せずと退け。そこ放せ。

りう　イヤ、大事は時を得て、不意を討たすが味方の勝利。十の梯子も九つまで、登りおふせし今宵の手筈。

帶刀　支へるおぬしも物蔭にて、様子を聞けば長谷部が妹。

りう　エヽ。

帶刀　それだに依つて、今となつて心變りか。油斷はならぬ。

りう　イエ〳〵、なんで夫に替へ、我が子に替へて未練な心。

帶刀　留めるが曲事。そこ放せ。

ト突き放して行くを、お柳いろ〳〵して留める。

りう　お腹に宿すお前の胤。

ト立廻つて

帶刀　事顯はれたら逆磔刑。

りう　それぢやに依つて。

ト縋つて留め

我が子は可愛うないかいなア。

トちつと抱き付く、帶刀キッとお柳が顔を見る。この仕組みよろしく、管絃にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、引拔きの障子屋臺。中足にて好みあり、左右に柴垣庭先の模様よろしく、矢張り管絃にて道具とまる。

ト時の鐘になり、上の柴垣の蔭より昌伯、最前の形、頰冠りして、合ひ口を差し、尻からげにて、ノツ〳〵と出て來り、あたり見廻し

昌伯　まんまと首尾よく念願成就。ナニ、半田稻荷ぢやアあるまいし、當時芝居でするやうだ。

ト云ひ〳〵懷より袱紗包みの金出し

ヤレ〳〵怖い思ひをした。お枕金を手當り次第、エ、コレ、思ふ程、丁度あつてくれゝばいゝ。

ト懷へ納め、探りながら數へる思ひ入れ。この時、後へ町山、以前の形にて出て

町山　盜人、捕つた。

ト大きく云ふ。昌伯、恟りして逃げるを、町山、後より引き戻す。昌伯、立廻りにて、町山を當て、花道の角へ來て

昌伯　エ、、斯うと。お熊に渡した金、こいつを遣り繰つて、斯うすりやア紅屋のおかんを手も濡らさず……うまいワ。〆めた。

ト町山、起き上がつてかゝるを、昌伯、振り返つて突き廻し、町山が帶を捕へ、大道めぐりを四五遍させ花道へ突き放す。町山、うろたへ、ヒヨロ〳〵して、昌伯は向うへ逃げしと心得

町山　道は一筋。オ、、それよ。

ト捨て鐘の音、尻からげして、一散に花道へ入る。昌伯、跡より懷を抱へ

昌伯　泥坊〳〵、泥坊やアい。

ト煽てながら向うへ入る。直ぐに小唄になり、正面の障子一面に開く。眞中に大領、褥に座し、結構なる臺盆、銚子杯取散らし、この左右に梅田は琴、菖蒲は三味線、皐月、千草、常夏、以前の前垂れを取りたる形にて扣へる。舞臺先に螢大ぶん群がり、何にても唄一くさりあつて

大領　草の葉を落つるより飛ぶ螢かな。果敢なき事の譬へには、電光石火と申せども、春秋知らぬ夏の蟲。人の上にも今日あつて、明日を知らぬは世の習ひ。一寸先は闇

の螢、死なうとまゝ、サア、つげ／＼。

ト杯を取上げる。

千早　ハイ、また御酒でござりまするか。申し上げるは憚りながら、餘り澤うは、ナア、皆さん。

梅田　なんぼ憂ひの玉箒、百藥の長とは申しながら

皐月　お過しなさるは御身のお爲に。

菖蒲　典藥方も朝夕に、御酒の駈引き、それに又

常夏　只今のやうな氣にかゝる、無常な事を御意遊ばし

大領　ハテサテ、この世へ生れては、どうで一度は死なねばならぬ。目を瞑つたら飲まれぬ酒、息のあるうち、サア、つげ／＼。

五人　アレ、また左樣ないまはしい。

大領　どうぢや、つがぬか。

五人　ハイ。

大領　イヤサ、つげ。

五人　ハイ。

トうぢ／＼する。

大領　ヤア、くど／＼と、身が詞を。

ト一間取つて立ちかゝる。この時、奥よりお柳、以前のまゝ螢籠に銀團扇を持ち添へ、ツカ／＼と出て、皆皆を引き退け、大領が前へチッと座る。

五人　お柳の方さま、好い所へ。

りう　お氣に背かぬ酒のお相手、御意見は必らず無用でござる。

五人　ハイ。

ト思ひ入れ。

りう　お次へござれ。

五人　ハイ。

りう　ござれと云ふに、さりとては。

トむつとして云ふ。

大領　不粹な者ども。皆、行け／＼。

梅田　左樣なら、皆さん。

りう　早うござれ。

五人　御機嫌よう居らせられませう。

トもぢ／＼辭儀する。これより、しつぽりとした合ひ方になり、女方皆々奥へ入る。お柳側なる銚子を取上げ

りう　サア、これからは、わたしがお酌。

大領　それで一しほ……杯も浮かみ出て、友に逢ふぞめでたき。

ト謠ひながら酒を飲み
どうでも秘藏の手活けの花、柳の枝に梅が香を、とめて咲かせし櫻の風情、命は其方が物ぢやわい。
ト手を取つて引寄せ、懐へ手を入れる。
りう　オヽ、こそば……寒ようかえ。
ト ちつと寄り添ふ。大領、矢張り謠にて
大領　渡りに船が……御意はよし、殺す心か。大膽者め。
ト背中を叩く。
りう　エヽ。
ト恟りして氣を替へ
でも又、邪魔な燈の影。
ト團扇にて燈臺をあふぎ消す。
大領　これは暗いワ。
りう　ハテ、好いわいなア。燈はこれ。
ト籠の戸を開く。螢パッと一面に群がる。
大領　これも一興。
りう　オヽ、涼し。
ト唄になり、障子一面に閉ぢる。本釣り鐘。蟲の聲、しんとした合ひ方になり、下の柴垣より帶刀、以前の形、高股立ち、龕燈を提げて窺ひ出て來て、あたりを見廻し
帶刀　最早丑滿、合ひ圖の時刻、女の手業の……ア、心許ない。
ト思案して龕燈を捨て、刀拔き持ち、拔き足して、障子屋體の元へ立ちかゝる。障子の内、物音して血煙パツと障子へかゝる。帶刀、ギヨッとして立戻り
さては女房、仕負ふせしか。
ト思ひ入れにて、刀を納める。障子の内にて
りう　いづれも、殿の御大事、急いで出仕いたされよ。
ト高らかに呼ぶ。これにて下座より犬清先に、賴母、權平、勇造、正助、嘉藤次、傳平太、押取り刀にて、バラ／＼と出る。帶刀、眞中へ來て
皆々　夜陰の騷動、何事やらん。
帶刀　殿の御身の大事とは。
りう　それへ參つて委細の御諚、申し聞かさん、控へ召されい。
ト鼓入りたる合ひ方になり、正面の障子、中一枚開き、お柳、裲襠の凛々しき肌脱ぎにて、長刀携へ、靜々と出て、床几にかゝる。皆々キッと思ひ入れ。
犬清　お柳の方の出立ちは。

皆々　さては正しく大殿には。

ト また立ちかゝる。

りう　ヤレ、騒がれな。お家の大事。急く所でない。鎮まり召され。

皆々　ウム。

ト 左右へ抑へる。お柳、思ひ入れあつて涙を紛らし

りう　春花秋葉の理りも、常とは知れど、情なや、殿には俄の御大病、末々の事思し召し、自らを召されて密かの御意。

皆々　ヤ、、すりや、殿には御不例にて。

りう　如何にも、御様子御大切。されども勇氣の我が君様、大切なるはお袖判、鎌倉武將への跡目の願ひ、紛失なさば何を以て、多賀の本領安堵せん。執權望月帶刀へ、この事申し聞かせよと、世に頼りなき御有樣。

ト 帶刀、ニッコリ笑ひを隱し

帶刀　ハテ、情なき儀の珍事。如何にも殿のお袖判、拙者奧より

ト 云はうとして、

イヤ、この節には人手にも、手渡しならぬ大事の場所。

りう　サ、、それゆゑに自らへ……ナ、殿の御先途、何事も御諚に任せて……サア、跡目は誰れであらうとも、自らが心……イヤ、殿樣の御指圖……ぢやに依つて、マア兎も角も、大切なるはお袖判、帶刀どの、イザ、お渡しあれ。

ト 帶刀へ顏にて呑み込ませる。實事師各自心遣ひの思ひ入れ。敵役皆々、締めたト思ひ入れ。帶刀、つくづく思案して

帶刀　ナニサマ、殿の御諚なりとも、お袖判なければ跡目の願ひ。帶刀が胃の腑にとつくりと落ちさへ致しますならば。

りう　ハテ、自らを何者ぢやと思ふ。疑ひ深きは、大望の……イヤ、大切な今日の仕儀、お袖判なければ、いつまでも、多賀の跡目は、自らが口外ならぬが、合點の悪い。

ト 帶刀が顏を見る。敵役さてはト喜ぶこなし。立役、無念の思ひ入れ。帶刀、ニッコリ思ひ入れあつて

帶刀　それも尤も。當家の執權、身不肖ながら、帶刀控へあるからは、跡目は必らず。

りう　云ふにや及ぶ。

帶刀　然らば慥かに、お袖判。

ト懐中より出してお柳へ渡す。お柳、改め、思ひ入れ
あつて
りう　嬉しや、紛ふ方もなきお袖判、守護なす上からは、
今こそ殿の御指圖。
皆々　して、我が君の御諚はな。
ト詰め寄る。
りう　跡目は卽ち弟犬淸。
敵役　ヤア。
ト呆れる。
りう　お袖判慥かに、跡目のお願ひ。イザ〳〵、お渡し申
しまする。
ト床几を下がり、犬淸が手を取り、右の床几へ上座に
直し、袖判を渡す。一學、これを見て
一學　ハテ、どぎまぎと合點のゆかぬ。これではどうやら
帶刀どの。
りう　イヤ、大殿の御指圖。蟹江一學、其方こと酒宴を勸
め、家を亂す越度に依つて、香川權平兩人とも、知行召
上げ御追放。
兩人　ヤ、、そりやア。
ト恟り思ひ入れ。

りう　さて忠臣は谷澤賴母、いよ〳〵犬淸守り立て、跡目
相續なす上は、村井正助、姫川勇造、諫言を加へ、家を
思ふ御褒美の加增、各々千石。
三人　すりや、我れ〳〵への御惠み。
りう　有り難く頂戴いたされよ。
ト帶刀に向ひ
望月帶刀、切腹いたせ。
トきつと云ふ。帶刀、ギヨツと思ひ入れあつて、せゝ
ら笑ひ
帶刀　ハテ、珍らしい事を聞く。弓術馬術は云ふに及ばず、
筆道算勘何一つ、拔け目がなさにお取立て、望月山の和
尙から、多賀のお家の執權職、忠臣無二の帶刀だワ。身
共に向つてナニたわ言。
りう　イヽヤ、自殺はお慈悲の遺言。
帶刀　なんと。
ト立ちかゝる。お柳、懷より三立目の位牌を出し
りう　覺えがあらう。
ト帶刀の目先へ突きつける。
寬仁大度の君に仕へ、我が身の罪も、夫の惡も、明かさ
にやならぬ今この仕儀。

トぢつと泣く。

憎い女子と自らを、恨むも尤も、さりながら、最早遁がれぬお前の俗性、もと高館の一族にて、義理の仇を報はんため、身を粉に砕き遍歴して、當家へ入込み、殿を害し、家國横領なすならば、鎌倉へ弓引く足立てと、かねての企みも、古主を思ふ、忠義の根ざしとお察しあつて、竹鋸の淺ましい、刑罰にもあふべき惡人を、武門の道ゆゑ切腹せよと、仰せは殿の御情。

帯刀　ムウ。すりや、汝が口走り、我が本名を明かせしよな。

りう　イエ〳〵、なんのさうではない。武に猛くましますり判官、鷹野に事寄せ、我れ〳〵を誘き寄せられ、鎌倉へ洩れ聞えたるお前の惡事。

帯刀　ヤヽ、すりや、これまで參りしも、天のなさゞる運拙く、智仁の眼に是非なくも、見顯はされて、籠中の鳥、網裡の魚となつたかやい。

トぢり〳〵と口惜しき思ひ入れ。

たゞ許　言や諺が詞にも、女はおのれを喜ぶ者の爲に形づくれ、士はおのれを知る者の爲に命を捨つると、天晴れ潔しき[illegible]帯刀。

頼母　本名明かして切腹あれ。

トきつと詰め寄る。

帯刀　イヤ、小ざかしき多賀の大領、無量の手段に望月が、忠義も破れ、やみ〳〵と。斯くなる上は、今更に、何を包まん、某こそ、先年奥州高館にて、無念の最期遂げられたる、義經公の御公達、冠者太郎を守り立つて、旗上げなさんと計りたる、泉の小次郎親衡とは、おれが事だ。さるにても、無念や口惜しや、妹が腹に懐妊なす、冠者太郎の御胤こそ、義經公の嫡孫にて、この君守り立て高館の、鬱憤晴らさんものと思ひしも、千日の茅、運盡きて、いま親衡が覺悟の生害、見物いたせ。

りう　傾むく運とは云ひながら、思へばいとしや。

ト寄らうとして

イヤ〳〵、我れ〳〵こそは、拙なき運命、お家は末代萬代も、御家督定めの御壽き。

ト扇を開き、ヨロ〳〵と立ち上がる。この時、下座にて、めでたき小舞を謡ひかける。正面の障子一面に開き、眞中に大領、床几にかゝり、小鼓を打つて居る。この後に梅田、菖蒲、皐月、常夏、千早居並び、お柳よろしく小舞一くさり舞ふ間に、着付けの白無垢へ血

汐にじんで滴り、バチ〳〵と苦しむ。皆々、これを見
て

女皆　お柳の方さま、この體は。

大領　不便や生害いたせしか。天下の爲に天晴れ貞女。

りう　チエ、、有り難い其お詞。さはさりながら我が夫の

ト帶刀の方へ摺り寄る。帶刀、ヂッと見る。

帶刀　悔いて歸らぬ惡念發起。

ト刀を腹へ突き立てる。大領、ツカ〳〵と前へ出て、
以前の位牌を取上げ

大領　出かした。流石は泉の親衡……英雄君前の生害、義經の前にて切腹は、戰場にて討死同然。それを本意に成佛いたせ。

帶刀　イヤ、佛果は願はしからず、同じ清和の御流れ、冠者太郎の御身の上。

大領　我が眼力に違はずして、鎌倉どのへ怨敵たる、泉の親衡、討取つたる功に免じて、冠者太郎の助命は計らひ得させん。紛失なしたる黃金の鷄、これも冠者が爲す業ならん。

賴母　イヤ、それとても瞬くうち。

犬清　やがて怨敵退散の

一權　その血祭りは。

ト犬清へ切つてかゝる。正助、勇造、立廻りあつて、
手早く兩人を下げ緒にて括し上げる。

大領　一張の弓の勢ひたり、東南西北の

帶刀　敵もやす〳〵西方淨土。

トお柳と顏見合せ

フ、、。

トにつこり、木の頭。

大領　ハ、、、。

ト思ひ入れにて笑ふ。キザミよろしく、帶刀、引廻す。
お柳、落入る。拍子　幕

シャギリ。

第二番目序幕

兩國橋詰の場
榛の木馬場の場

役名　花房求馬。見世物師、銅八。蛇使ひ、おたか。判人、福田屋金六。紅屋婆、おくま。番頭、勘八。紅屋娘、おかん。安達昌伯。姫川勇造。辻番人、元八。湯島の三吉。鳥居又助。

本舞臺、上の方、吹拔きの講釋場、葭簀の圍ひ、日除けの半障子、閉ちてあり、張り物の立て看板、これに和漢書軍談と記し、内には講座、机の上に湯呑み、拍子木、張り扇、入り口に鹽を盛りたる錢箱。下の方、掛け茶屋、軒に繪を書いたる掛行燈、水茶屋道具一式。後へ淺黃幕。よき所に床几を直し、爰に求馬、僞按摩の姿にて、前幕の繪先を袱紗にて包み、腰に差し、金六、獵人の形、この兩人立ちかゝつて居るを、銅八、引張りの見世物師。蛇使ひのおたか支つて、これを支へて居る。すべて兩國橋詰めの體。囃子の鳴り物にて幕明く。

銅八　マア〳〵、料簡さつしやりませ〳〵。

求金　料簡ならない〳〵。

銅八　爰でごたつかれては、商賣の邪魔だ。

たか　靜かにさつしやい〳〵。

金六　この泥坊野郎め、どうするか見やアがれ。

求馬　泥坊と云はれる覺えはない。いま一度吐かすと料簡ならぬぞ。

金六　こいつは、碎くおりを差して居るな。それでうぬ、どうする氣だ。

たか　ハテ、料簡さつしやりませ。

銅八　一體、この喧嘩は、どういふ譯でござりまする。

金六　聞いて下さい。わしは爰に待ち合す人があるゆゑ、講釋を聽きながら揉んで居たら、この按摩めが、おれの懷を探すゆゑ、それで泥坊と云つたのサ。

求馬　イエ〳〵、私しは泥坊ではござりませぬ。按摩の事ゆゑ、方々揉みましたを、あのやうな事を云ひます。お前方、よろしくお頼み申します。

たか　オヽ、お前は淺草に居なさる、花房何とやらいふ繪描きさんではござりませぬかえ。

求馬　五月前までは繪を描いて居りましたが、そればかりでは過されませぬゆゑ、お恥かしながら按摩足力、上下揉んで人並より、安いわたしと思し召し、御料簡なされて下さりませ。

銅八　あのやうに云はつしやる事だ。お前も料簡なさりませ。

金六　貴樣達が其やうに云ふ事なら、よんどころない、不承しませう。

銅八　それは有り難うござります。

金六　エヽ、これから氣を附けろ。
　ト輕業の鳴り物になり、金六入ろ。銅八、おたかも下座へ入る。求馬殘り、こなし。右の鳴り物にて向うより勇造、羽織袴、大小の形、若黨一人、草履取り一人。後より三吉出て來り
三吉　モシ〳〵、それへお出でなさるは、多賀の御家中、姫川勇造さまではござりませぬか。
勇造　如何にも。其方は湯島の三吉。拙者はこの邊へ用事あつて罷り越した。
三吉　左樣なれば、それまでお供いたしませう。
　ト本舞臺へ來り、三吉こなし。
　これで一服おあがりなさりませ。オイ〳〵、茶屋の姐え、お茶を上げて下さい。
求馬　ハイ〳〵、畏まりました。
勇造　三吉、見やれ、繁華な事ではないか。
三吉　左樣でござります。爰に來月から嵯峨の釋迦の開帳がござりまして。
　ト此うち求馬、茶を汲んで來り
求馬　ヘイ、お茶お上がりなされませ。
　ト勇藏、求馬を見て

勇造　ヤ、おてまへは花房求馬どのではござらぬか。
求馬　これは姫川氏、三吉も一緒にか。
三吉　若旦那、どうして爰に。ヤレ〳〵、好い所でお目にかゝつた。
　ト楊弓の合ひ方。
求馬　これは〳〵、勇藏どの、見苦しいこの形、お目にかかるも面目次第もござりませぬ。三吉を御同道、其許には御存じでござるか。
勇造　隨分存じて居るて。コリヤ〳〵、其方ともは、先刻申し付けた通り、合點か。
若黨　畏まりました。
　ト兩人は下座へ入る。
求馬　して、其許には、今日これへお出でなされしは。
勇造　別儀でもござらぬ。先達て御用金紛失、右金子には、一兩々々向う疵の極印。それは格別、黄金の鷄、それを所持なす者は同類なりと、即ち拙者、彼の詮議を崇むるとはいへど、黄金の鷄は、其許キッと詮議し出して、お上へ差上げずば、その身は一生埋れ木と存じ、貴殿を尋ね、わざわざこれまで參つてござる。
　ト此うち後へ金六、出かゝり、窺ひ居て、入る。

求馬　忝ないその御心底。某とても、いろ〳〵に詮議いたしますれど、今に手がかりとてもござりませぬ。

三吉　御恩になつた、旦那の方はこの通り。ア、コレ、力づくで行く事なら、鬼でも蛇でも捜り殺して、取つて來ませうが、在所が知れにやアなりませぬ。

求馬　まだその上に、某にお疑ひかゝり、既に命に及びしを、重左衛門どのゝ情によつて、命助かり、詮議の種の手蔓にと、下されしはこの鞘に、しつくり合ふ白刃を所持する者こそ、姫君を失ひし科人ゆゑ、片時も放さず所持いたし、種々に心を碎くといへども、これとても今に手がゝりござりませぬ。よくも武運に盡き果てしか。思へば思ひ廻す程、因果な拙者が身の成行き、御推量下されい。

三吉　モシ、その二種の詮議の仕様がござりまする。

求馬　何ぞ手がゝりでもあると申すか。

三吉　何も手がゝりはござりませぬが、無性に尋ねて見ませう。

求馬　何と申す。

三吉　なんぼ廣い世界だと云つて、知れない事はござりますまい。シタガ、若旦那は御浪人の身の上と云ひ、私しどものやうに飛び歩かれもしますまい。そこへ云つちやア輕い身分の私しが、命限りに尋ねて見ませうが、なんと、その鞘をお貸しなされては下さりますまいか。

求馬　成る程、その志しは忝なけれど、大切なるこの鞘、預け遣はす事は。

三吉　成りませぬか。

求馬　如何にも、こればつかりは。

勇造　イヤ、ナニ、求馬どの、さほどの心底、よも粗忽はござるまい。大切なる鞘なれど、三吉にお預けあつても苦しうござるまい。

求馬　何がさて、貴殿のお詞と申し、彼れが心底。如何にも鞘は預けてくれう。

三吉　そんなら、お預け下さりますか。エヽ、有り難うござります。

ト鞘を受取る。

求馬　二品の行くへ、必らず共に。

三吉　お氣遣ひなされまするな。キッと詮議いたして差上げませう。

勇造　まだ申し談ずる仔細もござるが

求馬　爰は往來、人目もあれば。

三吉　青柳へでも、お連れ申しませうか。

勇造　イカサマ、それも一興。

求馬　左様なら、勇造どの。

三吉　ドリヤ、御案内いたしませう。

ト鳴り物になり、三人、下座へ入る。向うより勘八、前幕の手代にて出て来り、下座より後家おくま、日傘を持ち、出て来り、両人、舞臺にて行きあひ

くま　其方は勘八ぢやないかや。

勘八　おかみさまでございますか。お草臥れでございませう。これへお掛けなされませ。

くま　ヤレ〳〵、好い所で逢ひましたなう。

ト両人、床几へかける。

勘八　時に、お娘御の行くへ、手がゝりでも知れましたか。

くま　サイナア、其方も知つての通り、娘おかんは、昌伯さまへ、百五十両の支度金で遣る筈ゆゑ、手付けの金を受取つて、間もなく娘は、あの三吉と駈落ち。手付けの金は遣ひ込み、おかんが行くへは知れず、昌伯さまへの云ひ譯なさに、娘の在所を尋ねんと、今日も一日あくせくと、本所邊を心ざし、番場の町を後になし、小梅、原庭、業平橋、石原道を足曳の、山の宿から今戸邊、眞崎稲荷大明神、娘を尋ねに王子の稲荷、元の起りは、三吉稲荷に、のぼせて敦盛、熊谷稲荷の大明神、利益はあれど、どういふもんだ廣徳寺の稲荷大明神。

ト思はず、有り合ふ茶碗を、狐のやうに並べながら云ふ。

オヽ、辛度やなう。

勘八　それでは、お疲れでございませう。

くま　して、其方は、どこへ行た戻りぢや。

勘八　私しもその通り、お娘御のお行くへを尋ねに出ましたが、モシ、有やうは、斯う云ふ時が、吞氣ゆゑ、先づ一ツ目の橋越えて、ズツと辨天松井町、それから愛宕で二ツ玉、ポンと云はせた常磐町、これから縁の網打場と、尻をからげて褄つゝき、表櫓や裏櫓、腹の時計も日の仲町、もしや爰らに居やうかと、見て行く裏や三間堂、通し矢數は當る筈、さしづめ一の富が岡、クルリと廻つて中木場へ、出ると向うの川岸に、紫匂ふ藤の茶屋、爰で一杯引ッかけて、暮れてとつかわ歸り道、もしお娘御に逢ふならば、この厄拂ひが引ッ攫み、西の海とは思へども、紅屋の内へサラリ〳〵。サア、此やうに致します

も、私しが不所存にて、お暇下されたゆゑ、是非なく旅稼ぎして居たを、お取上げ下されました御恩返り。その上、お前様が毎晩々々、可愛がつて下さりますれば、此やうな有り難い事はござりませぬ。

くま　其やうに云やれば、猶いとしさが増るわいなア。

ト寄り添うて思ひ入れ。この時、講釈場の日除け障子を内より取る。高座の上に昌伯、机を叩きて、修羅を云つて居る。両人、これに心付かず

くま　コレ、勘八、願つてもない、丁度好い首尾。ちつと此方へ寄りやいなう。

ト勘八を引寄せる。昌伯、高座の上から見付け、猶々机を叩き、腹の立つ思ひ入れ。

勘八　でも、爰は往来、人が見たら水を掛けませう。

くま　ナニ、犬ではあるまいし。

勘八　そんなら、おくまさま。

くま　勘八。オヽ、嬉し。

ト抱き付く。昌伯、これを見て、高座より転げ落ちる。仕出し皆々立寄つて

仕出　講釈師が目を廻した〳〵

ト昌伯を連れて出て来る。これにておくま勘八、別れて思ひ入れ。下座より銅八、蛇使ひの女、出て来り

銅八　どうしたのだ〳〵。

仕出　講釈師が目を廻しました。

銅八　そりや大事だ。水を吹ツかけるがいゝ。

仕出　合点だ〳〵。

ト水を持つて来て吹きかける。銅八、下男、介抱する。昌伯、心付き、銅八、蛇使ひの女、皆々、捨ぜりふにて向うへ入る。おくま、勘八、昌伯残り

くま　ヤヽ、こりや此方の聟どの。

勘八　昌伯さま、モシ、どうなされました。

昌伯　オヽ、痛い〳〵。

ト脇腹を抱へて思ひ入れ。

くま　勘八、御介抱々々。

勘八　畏まりました。

ト両人介抱する。

昌伯　どうしたも凄まじい。うぬ等に逢ひたくつてならぬ所へ、うしやアがつて、飛んだ所で始めたゆゑ、おらアひどい目に遭つた。サア、婆ア、番頭も動きやアがるな。

勘八　御尤もでござります。さりながら、合点が参りませ

ぬ。あなたは御大家のお醫者樣、それに又、この形は。

昌伯　おかんにかゝつて、たうとうおらァ講釋師。もう斯うなつたら、いよ／＼おかんを女房に持たにやァならぬ。サア、手付けの帶代金、後金の百兩も爰に持つて居る。サア、これを受取つて、おかんをおれにくれろ。

ト財布の金を見せる。

くま　サア、その金は欲しうござりますが、おかんは駈落ち致しました。

昌伯　ヤア、それは一人か。但しは相手があるか。

勘八　サア、その相手は、お前さんも御存じの、湯島の三吉。

昌伯　ヤア、腹が立つ／＼。それより太いはこの婆ァ、手付け金を取つて置きながら、駈落ちしたで濟まうと思ふか。大騙りめ。この趣きを、代官所へ。

くま　サア、御尤もでござります。それゆゑ娘の行くへを尋ねて居りますわいなア。

勘八　今晩中にも見付け出し、お前さんの所へ連れて參つたら、好いぢやござりませぬか。

昌伯　おかんさへ受取れば云ひ分はない。その時には、この金と引替へ。シタガ、心當りがござります／＼。高飛びは致しますまい。この近所

くま　ござります／＼。高飛びは致しますまい。この近所が怪しい。モシ、その埋め所は。

ト昌伯に囁やく。

昌伯　イカサマ、そこらであらう。それに付けても、憎いはあの三吉め。

勘八　モシ、お腹の立つは御尤もだが、何事も騙すに如くはござりませぬ。

くま　暮れるを待つて、何かの手番ひを致しませう。

昌伯　なんとそれまで、講釋でも聞いて待つて居ぬか。

勘八　モシ、講釋は何でござりまする。

昌伯　弓削の道鏡お伽の物語り。

くま　ヤア、それを聞いたら、また氣が味に、ナア、勘八。

ト思ひ入れ。

昌伯　オツと、先刻の事は、もうならぬぞ。

勘八　お前も轉りはなりませぬ。

くま　左樣なら昌伯さま。

昌伯　二人も一緒に。

勘八　サア、參りませう。

ト輕業の鳴り物にて、三人、講釋場の内へ入る。下座

より三吉、窺ひ出て

三吉　いま聞けば、帯代の手付けを寄越したと云ふは、あの男か。おかんを釣出し、埋めては置いたが、どうか彼奴らに、氣取られた樣子。こいつは滅多な所へは置かれぬわえ。ア、コレ、氣の付かぬ所へ。ハテナ。オヽ、〆めた。あるぞ／＼。ちつとも早く。

ト管絃の鳴り物になり、足早に花道へかゝる。向うより又助、拵らへの形、藤倉の草履にて出て來る。兩人行きあひ

又助　三吉か。貴樣にやア、ちつと話しが。

三吉　おらア、急の用だ。話しならむらくが所へ行かッし。

ト云ひながら、ツイと向うへ入る。又助、悄りして

又助　あの野郎め。氣が狂つたさうだ。

ト舞臺へ來る。下座より金六出て來り

金六　又公、いゝ所で逢つた。

又助　金六、何ぞ用か。

金六　大變な話しだ。

又助　大變な話しとは。

金六　サア、別の事でもないが、先刻聞いて居れば、慥か彼奴は多賀の家中、黄金の鶏を持つて居る者は、合邦太郎が同類と、爰らあたりへヅキが廻つたが、貴樣はそこに、彼のゑて吉を持つて居るか。

又助　そんなら、もう此あたりでその噂か。それぢやアこの鶏も。

ト出して見せる。

金六　コレ／＼、此やうな結構な物を、いつの間に。

又助　いつぞや、蛍澤の庵に居る、木屋の辰五郎が所から、捲上げて來たのよ。

金六　さう云ふ事なら猶の事、早くこかしてしまふがいゝぜ。

又助　それも承知だが、大枚の代物、滅多に人手には渡されず、ハテ、困つたものだ。なんと、てまへが、預かつてはくれまいか。

金六　飛んだ事も云つたものだ。ヅキの廻つたその鶏。おれも命が惜しい。預かる事は、御免だ／＼。

又助　ハテ、お主に預けて後の手段は、斯うするワ。

ト囁やく。金六呑み込み

金六　さう云ふ事なら、おれが預からう。

又助　そんなら必らず。

ト黄金の鶏を金六に渡す。

金六　この代物を預かつて、おらアこの揚を。

又助　ちつとも早く。

金六　合點だ。

ト輕業の鳴り物になり、金六、向うへ入る。又助、こなしあつて

又助　あの野郎に、鶏を渡して置けば、跡はカウ〳〵。よし〳〵。

ト領づき、講釋場の内を覗き

オイ〳〵、先生々々。

昌伯　オイ〳〵、おれか〳〵。

ト合ひ方、揚弓の音にて、昌伯出て來り

お主は又助ではないか。何の用だ。

又助　ちよつと、あそこまで來さツし。

ト袖から手を入れ、グツと締め上げる。昌伯、愡りして

昌伯　エヽ、そりやどこへ。

又助　知れた事だ。姫川勇造さまが。

昌伯　ナニ姫川勇造。其奴は大變々々。コレ〳〵、又助、おらア何も覺えはない。賴む〳〵。

又助　云ひ譯があるなら、彼方へ行つてするがいゝ。おらア勇造さまに賴まれて來たのだ。

昌伯　ヤア、てまへは屋敷を逐電した惡黨であつたが、そんなら善心に立返つたか。

又助　左やうサ、今までの惡事を後悔して、善心に立返り、勇造さまと心を合せ、お家の寶は元より、兼ねては盜人の詮議もするのだ。

昌伯　それは、お主は見上げた事だ。勇造さまが用といふは、定めておれが盜んだ金の事であらう。その金を差上げて、おれも善心に立返る。どうぞてまへ、云ひ譯いてくれまいか。

又助　どうして〳〵。一旦盜んだ金を返して、ナニ御勘辨があるものか。

昌伯　サ、そこがお主も馴染み甲斐の所だ。どうぞ賴む、賴む。

又助　それ程に云ふ事なら、マア云ひ上げて見よう。して、その金は。

昌伯　爰に持つて居る、又衆、偏へに賴む〳〵。

ト財布のまゝ金を渡す。又助取つて

又助　耳を揃へて百兩あるかね。

昌伯　そつくり其まゝ。どうぞ頼む〳〵。

又助　どうぞ御勘辨あればいゝが。

昌伯　ハテ、お主と云ふ手本があるから、御得心さつしやるであらう。

又助　イカサマ、そこもある。マア〳〵、案じたさる事はない。あの講釋場で待つて居なさい。いづれ吉左右知らせませう。

昌伯　偏へに頼む。

又助　モシ〳〵、これから逃げては、お前の爲にならねえよ。

昌伯　ナニ逃げるものか。頼む〳〵。

ト講釋場へ入る。又助、跡見送り

又助　まんまと首尾よく、耳を揃へて小判で百兩。

トこの時、後へ勇造、家來を連れて、窺ひ居て

勇造　怪しい醫者、ソレ召捕れ。

家來　やらぬワ。

ト組み付くを、又助、立廻り、勇造もかゝるを振り解いて、ちよつと當て、この間に又助、件の財布を首に掛けながら、一散に向うへ逃げて行くを、勇造家來、起き上がつて、跡追ひ駈けて走り入る。この時、昌伯、出かゝり見て

昌伯　なんだか、表が騒々しい。案じられるはおれが身の上。又助めが、うまく云ひ説いてくれゝばいいが、心がかりはおかんが事。それに付けても、あの三吉、人知れずぶッ放せば、戀の恨みを晴らす道理。それ〳〵。

ト下座より求馬、出かゝり居て

求馬　イヤ、さうはならぬワ。

昌伯　ヤア、わりやア求馬だな。邪魔せずと、そこ退け。

求馬　イヤならぬ。

昌伯　なにを。

ト輕業の鳴り物になり、兩人、立廻りあつて、よき見得になり、この道具廻る。

本舞臺、眞中、辻の番家、辻行燈、六尺棒、左右玉椿の生垣、榎の吊り枝。うしろ黒幕。爰に元八、老けたる拵らへにて、夜の間に衝立を前に置き、土火鉢にて、蚊をいぶして居る。すべて榛の木馬場、夜の景色、かすめたる雷鳴、雨車の音、時の鐘にて道具とまる。

ト向うより三吉、以前の形、おかん兩人、下駄がけ、

　合ひ傘にて出て來り

かん　モシ、こりやマア、何處まで行くのでござんすえ。

三吉　何處と云つても知れた事、お主も知つての通り、友達の所に世話になつて居たが、おくま婆アや勘八が、おいら二人の居所を嗅ぎつけた樣子。

かん　それゆゑ今宵のうち、脇へ行くのかえ。アレ、また光るわいなア。

三吉　ソリヤ、又すべるな〱。

　ト兩人舞臺へ來る。

　オイ〱。隱居は内か〱。親方々々。

元八　何者だ、通れ。

　トおかん悧りする。

三吉　なにサ、ありやア叱つたのぢやアねえ。オイ〱、雨が降つて素敵に濡れた。早く明けて下さい

元八　雨が降るのに、捨て子がある。そいつは大變々々。

　ト一本差して、棒を持ち、出る。

三吉　捨て子ぢやアない、おれだよ。

　ト元八、よく〱見て

元八　オヽ、三吉どのか。いま時分どこへ行くのだ。鐘の下へでも行つたのか。

三吉　其やうな事ぢやねえ。ちつと頼む事があつて來たのよ。

元八　なんだ、頼む事とは。

三吉　外でもねえ。斯う云ふ譯よ。

　ト囁く。元八、呑み込み、おかんを見て

元八　オヽ、女か。いゝたぼだ。その頼みを聞いてやりたいが、爰は大切な役所だ。ならぬ〱。通れ。

三吉　ハテ、ねんごろにも似合はねえ。よし〱。そんなら借りますめえ。時に親方、久し振りだ。角の酒屋で一杯やりなせえ。

　ト懐より錢を一本出して遣る。元八、見て

元八　ナニ、よさつしやればいゝ。氣の毒な。志しなら貰つて、廻りながら一杯やつて來ませう。

三吉　それがいゝ。跡はおれが呑み込んだ。

元八　そんなら跡を頼みます。火の用心〱。

　ト時の鐘、合ひ方になり、元八、ばつてう笠、下駄にて、棒を突き、下座へ入る。

三吉　サア、邪魔は拂つた。今までは心安い友達の内でも、二階に居れば根太がギチ〱鳴つて、心遣ひであつたが、今夜はその心遣ひがなくなつて、心ゆつくり。

かん　サア、お前とわたしと早う世帯して、こちの人、女房と云はれて見たうござんす。

三吉　それも何かのごたつきが濟んでの事。それまでは、當分居候ふ。今夜は爰に引越し女房、もつと此方へ、よりの角宿、西海屋。

かん　それぢやと云うて恥かしい。どうして爰へ。

三吉　ナニ遠慮があるものか。

かん　アレ、忙しない。待ちなさんせ。

ト兩人、思ひ入れ。よき時分より元八、ソツと出て見て居る。三吉、思はず人影を見て

三吉　通りませう。

ト大きな聲で云ふ。元八愕り。

元八　ハイ／＼

ト思ひ入れ。三吉見て

三吉　ヤ、親方ぢやアねえか。

元八　廻つて來ました。

三吉　早い廻りやうだ。

元八　三公、見たぞ／＼。これぢやアおれも吉岡町へ行つて、大ゴトをぶッ放さにやアならぬわえ。

三吉　そんなら、路地の締まらぬうち、早く行きなさい。

留守は承知だ／＼。

元八　有り難い。ドリヤ、長屋と出かけようか。

ト花道へ行きかける。向うにて

勇造　泥坊々々。

ト元八、取つて返す。兩人うろたへ、騒ぎ合ひ、奥へ入る。向うより又助、以前のまゝ逃げて出る。跡より勇造、家來、追ひ駈けて來る。組み付くと又助、左右へ蹴散らし

御番の衆、御加勢々々々。

元八　心得ました。

ト雨車、雷鳴の音になり、元八勇造かゝる。立廻り。

トヾ兩人危ふい所へ、奥より三吉おかん出て

三吉　今のお聲は勇造さま。

ト六尺棒を取つて又助に打つてかゝる。暗き立廻り。

トヾ三吉、又助を捕つて投げてやる。これにて縛り上げる。此うち元八、弓張り提灯を出し

元八　ヤレ／＼、お手柄／＼。

三吉　どんな盗人だ。面を見てやるべい。

ト又助と顔見合せ

又助　ヤ、お主は三吉。

三吉　思ひがけない又助どんか。
又助　おきやアがれ、大きにお世話。とんだ目に遭はしやアがつた。
三吉　さうとは知らず、ハテ、氣の毒な。
勇造　町人ながら、流石名うての湯島の三吉、天晴れ〳〵。お上へ對して大忠節。この又助ことは屋敷を逐電の砌り、舊惡顯はれ、大切なる囚人。
三吉　左樣なら、あなた樣には。
勇造　この旨お上へ言上まで。
元八　すりや、科人の儀は。
勇造　御苦勞ながら、懸り合ひでござれば、しかと當所へ預け申した。
元八　ハア。
ト時の鐘になり、勇造家來向うへ入る。
ヤレ〳〵、三吉どの、御苦勞でござつた。時に、今の女中は。
三吉　ア、コレ、大事の囚人、逃がさぬやうに。
元八　合點だ〳〵。
ト時の鐘にて、向うより中間一人、赤合羽を着て、醉つたる體にて出て來り
中間　番屋の親方は居るか。角の酒屋で友達が喧嘩をして居る。ちよつと來て下さい〳〵。
元八　行つてやりたいが、大切な科人を預かつて居るから、今は行かれぬ。
中間　科人は構ふ事はない。ちよつと來て下さい〳〵。
元八　エヽ、しつこい。行かれぬと云ふに。
ト兩人、爭ふはずみに、合羽スッポリ取れる。これを知らず無理に引ッ張る
中間　早くござれ〳〵。
三吉　モシ〳〵、用があるなら行きなさい。科人の番は、おれがして居ます。
元八　そんなら、取逃がさぬやう頼み申した。
中間　早く〳〵、ござれ〳〵。
ト無理に引ッ張り、元八中間、向うへ入る。跡、合ひ方になり、三吉、又助を見て
三吉　又助どん、貴樣と知つたら、こんな事はしまいものを、今ぢやアとんだ氣の毒。
又助　なにサ、おれが斯うなるのは當り前よ。おらア疾に納める所であつたが、今日まで娑婆に居たが儲けサ。
三吉　時に、なんぞ喰はねえか。

又助　蕎麦でも、さう云つてやつてくれ。
三吉　さう云つてやりたいにも、留守居がねえ。
ト　この時、勝手にて何か音する。
又助　勝手に誰れか居るぢやアねえか。
三吉　イヽヤ、なにサ、ありやア鼠よ。
又助　鼠にしちやア、大きな音だ。
ト　兩人こなし。雨車、時の鐘。向うより金六、以前の形にて、安下駄、傘をさし出で来り、舞臺へ来て
金六　御免なさりませ。私しは通り者でございますが、下駄の鼻緒が切れました。どうぞ愛をお貸しなされて下さりませ。
三吉　アヽ、おかけなさりやし。
金六　それは有り難うございます。
ト　人の縛られて居る姿を見て
モシ、何か預け物がございますね。何でございます。
三吉　イエ、なにサ、ちよつとした泥サ。
ト　又助へ氣の毒さうに云ふ。
金六　ナニ、泥坊だと。そいつはいゝ氣味をした。この頃は大分物騒だから、その筈サ。モシ、その泥坊で話しがございます。私しは横堀の者でございますが、去る所へ掛けを取りに行きましたが、いま手元に金が無いと云つて、抵當に寄越した、代物がございますが、これはお上でお尋ねなさる品ゆゑ、お詮議にあはぬうち、此方からお訴へ申して出れば、私しに祟りはございませぬが、盗まれた人は、家も斷絶して、一生埋れ木になりませう。氣の毒な事サ。それもその筈、これを御覧じませ。此やうな結構な代物でございます。
ト　鶏を出して見せ
詳しい事は知りませぬが、黄金の鶏と云つて、御大家の寳ださうな。
三吉　ムウ、そんなら黄金の鶏と云ふは、この事か。アノ、いよ〳〵これが。
金六　なんと結構な物ではございませうか。望み手があれば、大枚の金になりさうな物。
三吉　成る程。イヤ、なんと物は相談だが、この鶏とやらを、わしに賣つちやア下さるまいか。
金六　アノ、貴様がこの品を。
三吉　外よりお上へ差上げる時は、お家の大事。
金六　エ。
三吉　サア、大事ねえ事なら、その鶏、わしに賣つて下さ

い。

金六　どうして〳〵、お訴へ申さねばならぬ代物。さりながら、いま話した通り、わしが貸した百兩の金が埋る事なら、内證で賣つてもやらうが、さもなくば、明日は早早訴へ出ます。幸ひ雨も上がつたさうだ。これは有り難うございます。

ト行きにかゝるを三吉留めて

三吉　サア、さうではあらうが、その品ばかりは、是非ともおれが。

金六　イエ〳〵、訴へて出にやアなりませぬ。

ト此うち又助、繩付きのまゝ逃げようとする。三吉うろたへ、又助を留めて

三吉　オツと、大事の囚人、逃がしちやアならねえ〳〵。

金六　ドレ、急ぎませう。

ト行くを又、此方へ來て

三吉　サア、今の話しの通り、百兩で買ひませう。

金六　百兩の金にさへなる事なら、賣つて進ぜう。

三吉　賣つて下さるか。エヽ、忝ない。

金六　代物と引換へに、サア、金受取りませう。

三吉　サア、その金は、今爰には。

金六　金が無ければ、お斷わり。この雨止みに、ちつとも早く。

ト振り切つて向うへ入る。三吉、跡見送り

三吉　オイ〳〵、待つて下さい〳〵。エヽ、コレ、それと知つたらお家の寶、見す〳〵見遁がすこの場の仕儀。いつその事に跡追ひ駈けて。イヤ〳〵、それにしても、百兩といふ金は無し。

ト思ひ入れ。この時又助、一散に駈け出さうとする。三吉留める立廻り。又助の懐より金財布出かゝりある。

この囚人は、諦らめの悪い。もう斯うなつたら天の網、預かつたはこの三吉、知つての通りこの場の手詰め。それに度々逃げようとするが、それぢやアあんまり達引がねえ。

トこの時フト又助の財布を見て

又助さん、貴様の首に掛けて居るのは、そりやアなんだ。

又助　これか、こりやア金よ。

三吉　エ。

又助　しかも、耳を揃へて小判で百兩……兼ねて手管で。

ト鼻唄を唄ふ。
三吉 ナニ〱、小判で百兩。
又助 うむよ。
三吉 エヽ、有る所には、たんとあるなア。
又助 金がいるなら、遣はねえか。
三吉 サア、知つての通りの譯ゆゑ、借りたいは山々だが
又助 同類になるのを案じるのか。おれも又助だ。そんな甘口な事をして、てめえを抱き込むものかえ。
三吉 成る程、貴様の氣性も知つて居る。そんなら金を借りるよ。
又助 心措きなく遣ふがいゝ。
三吉 忝ない。その代り、貴樣の評定の極まつた時には、跡のとひ弔らひは案じやるな。おれが先祖と同樣にして置く。それとも喰ひ抜けて出た時にやア、元金は云ふに及ばず、利息も禮金もしつかりだ。
ト首の財布を取らうとする。
又助 オツと待つたり。その前に、繩を解いてくれ。
三吉 エ。
又助 金を貸す代り、おれを逃がしてくれ。
三吉 それおやアどうも。

又助 ならねえか。そんなら此方もお斷わり。
三吉 待つてくれ〱。切端詰まつた今夜の仕儀。逃がした科は、おれが引受け。
ト繩を解いて
約束通り、サア金を。
又助 ソレ、金よ。
三吉 忝ない。
又助 とんだ目に遭つた。ドレ、ブラ〱行かうか。
三吉 ブラ〱おやねえ。早く逃げろ。
又助 エヽ、小腹がへつた所爲か、寒くなつた。
ト云ひながら行かうとする。
三吉 コレ〱、その形で行つたら、また今のやうに……
これでも着て行きやれ。
ト以前の合羽を出す。
又助 成る程、こいつはいゝわえ。
ト合羽を引ッかけ、落ちてある鞘を何心なく差して
そんなら三吉。
三吉 氣を付けて、行かつし。
又助 合點だ。
ト時の鐘になり、又助行かうとする。向うより金六出

て來り、兩人行きあひ、顏見合せ、ちよつと思ひ入れあつて、又助、行く振りして、小隱れする。金六は舞臺へ來て、何か尋ねながら

金六　モシ〳〵、爰らに鼻紙袋はござりませなんだか。

ト この聲を聞いて

三吉　ヤ、お前は先刻のお人。今お前の跡を、追ひ駈けて行く所でござりました。

金六　何ぞ用かね。

三吉　用どころか、先刻の代物を買ひませう。

金六　金が出來ましたか。

三吉　しかも、小判で、ソレ、ソレ、百兩。

金六　それはめでたい。ソレ、鷄。

ト 兩人、受取り渡しをして

三吉　モシ、お互ひに話しはこれぎり。

金六　それサ、此方も身分に係はる事……イヤ、急ぎませう。

ト 足早に向うへ入る。

三吉　先づこれで、一種は手に入つたが、あの鞘は大事の物だが、どうしたか知らん。もしや今のどさくさ、そこらに落ちては居ないか。それは跡での尋ね物。何は兎もあれ、この一品を求馬さまへ……おかんや〳〵。

かん　アイ〳〵、もう出てもようござんすかえ。

ト 合ひ方になり、奥より出て來る。

三吉　いゝどころか、喜んでくれ。てまへも知つての通り、おれが尋ねる寶が手に入つた。

かん　そりやマア、嬉しうござんすな。お前の御主人樣も、さぞお喜びでござんせう。

三吉　お喜びの段か。これさへ手に入れば、お屋敷へ御歸參なさるワ。

ト 思ひ入れの時分より又助、花道へ行き、窺ひ居て

又助　まんまと首尾よく。

三吉　ヤ。

ト 花道を窺ひ見る。又助は合羽をスッポリかぶる。木の頭。後にて「火の廻り」と用心棒、石打ちの音聞える。

ヘ、ア、夜廻りださうだ。

ト 兩人思ひ入れ。又助、向うへ入る。よろしく　　ひやうし幕

大切

本所横網小傳内の場
淺草富士祭の場

役名──女力持ち、淺妻小傳 實ハ三吉云ひ號け、淺尾。紅屋の娘、おかん。口上云ひ、八八。木戸番、藤兵衛。輕業師、彌五平。同、權七。判人、福田屋金六。蛇使ひ、おたか。小奴、駒吉。鳥居又助。湯島の三吉。盗賊、合邦太郎 實ハ冠者太郎經之。

本舞臺、三間の間、赤壁、納戸、暖簾、戸棚。よき所に神棚、臺所道具飾り、上の方、障子屋體。門口据ゑ物、路地の入り口、横網町女曲持ち、淺妻小傳が借家の門口。軒下に金六、前幕の形にて、夕立にあひたる體にて、雨宿りして居る。内には輕業師の彌五平、權七、丸裸にて、高麗屋縞の浴衣を脱ぎかけ、棹へ掛けて居る。木戸番藤兵衛、鰹を刺身に拵らへて居る。彌五平、一升徳利を持ち酒を飲んで居る。てんつゝ、雷鳴の音にて幕明く。

ト金六、耳を押へ

三人　ソリヤ、光つたぞ。

金六　うんらいぐうせいでん、桑原〳〵。

ト屈み居る。

彌五　コレ〳〵、藤兵衛、刺身は出來たか〳〵。

藤兵　いま出來るわな。ハテサテ、忙しない手合ひだ。

權七　斯うまた、天界が荒れちやア、おいらが商賣には、雷鳴は親の敵も同然だ。今の夕立にズップリ濡れた。

彌五　裸では、小傳さんが歸つた時に、恰好が悪い。なんぞ着て居さつしやいな。

權七　そこは又、おれだワ。浴衣はいくつも有るの。

ト外の浴衣を出し、着る事。

藤兵　このマア降るのに、おいらが太夫の小傳さんは、あの芝居に降り込められてござるかの。

彌五　どうして〳〵、見せ物小屋は漏つて堪るまい。イヤ又、人の氣も知らねえ、間抜けな雷鳴だ。

金六　モシ〳〵、先刻から雨止みをして居やすが、お前方は雷鳴樣を、素敵に悪く云ひなさるが、お下がりなさると悪いから、もう好い加減にするがいゝ。

彌五　ナニ、お前、雷鳴が落ちると、ひッ捕まへて、引ッ

張り物に出すわな。成らうなら爰の内へ落ちればいゝ。

金六　イヤ、とつけもない衆だ。

彌五　お前、雨をやめて居なさるなら、此方へ入りなさい。

金六　イヤ／＼、そんな内で雨をやめて、雷鳴に落ちられてはならねえ。イヤ又、この頃は出ると降られる。

彌五　エ、、臆病な人だ。そんなら斯うしなさい。この路地を入ると、稻荷樣の宮があるから、あそこへ入つて居なさい。

金六　そりや、有り難い。

權七　それとも、爰に居ても氣遣ひは無い。今に蛇女が歸ると、蛇を素敵に持つて來るから、それぢやア雷鳴の落ちる話しもねえのサ。

金六　エ、、とんだ事を云ふ衆だ。雷鳴樣より蛇は嫌ひだ。して、爰の内は何商賣をしなさる。

藤兵　淺妻小俊と云ふ女の力持ちサ。

金六　ア、、小俊さんの内か。道理で、いろ／＼な衆が居ると思つた。

皆々　向うの突き當りだ。

金六　そのお宮へ入りませう。

彌五　さうしなさい。これからは又、おいらは踊りだ。

權七　それがいゝ／＼。根太が拔けても大家の物だ。頓着はねえ。踊らう／＼。

彌五　コレ／＼。

ト空を見て

雷鳴雲から飛んだげな。

權藤　撥も太鼓も飛んだげな。

ト踊る。

金六　エ、、不氣味な手合ひだ。爰には居られぬ。

三人　臍を摑もと、飛んだげな。

ト地踊り、三人醉うて踊る。金六はこれに恐れ、捨ぜりふにて路地へ入る。この踊りの鳴り物へ雷鳴をかぶせ、雨車の音、向うよりおたか、蛇使ひの娘の拵らへにて、惣模樣の裲襠をかむり、八八、輕業の口上にて、輕業形の駒吉を負ひ、桃色の肩衣をかぶり、跡より小俊、紅縮緬板締めの襦袢、手拭の鉢卷、力持ち女の形にて、青傘をさして、兩國の芝居より夕立にあうたる歸り、裾をからげて出て來り、直ぐに内へ駈け込む。踊つて居たる三人、膽を潰し

三人　ソリヤ、雷鳴が駈け込んだワ。

八八　エヽ、雷鳴ぢやアない、大太のお歸りだワ。
三人　アヽ、小俊さんか。降るのによく歸りなさつた。
小俊　降ると云つても、また素敵になつたの。なんでも今の一つは、一ツ目あたりへ落ちた音だよ。
たか　左樣サ、大方大橋のあたりへ、お下がりなさつたかも知れない。
八八　大概な事なら、輕業小屋に居るけれど、この駒吉が怖からうと思つて、一目散に駈け込んだ。てまへ、怖かつたであらうの。
駒吉　ナニ、雷鳴が怖いものか。今度鳴ると睨み落すワ。そこは又、江戸ツ子だ。誰れだと思ふ、アヽ、つがもねえ。
彌五　成る程、栴檀は二葉。
皆々　江戸ツ子樣は違つたものだ。
權七　小俊さん、お前、濡れなさつたらう。
小俊　ナニ、駈け通しに駈けたから、濡れねえよ。
藤兵　コレ／＼、おたかや、てめえ、蛇を逃がしやアしねえか。
たか　商賣物だ。この畚に入れて、引ツ抱へて來たね。
小俊　時に、明日から駒吉が、新物の稽古は片付いて居るか。
彌五　大概は覺えやしたが、一番浚つて見ませうか。
小俊　子供の事だ。さうしてやんねえ。
八八　先づは幼なき者、支度にかゝらせまする。
ト鳴り物。おたか、三味線。權七、太鼓。藤兵衛、ちやるめらを吹く。駒吉、彌五平、身拵らへする。八八、肩衣を懸け、よろしくあつて、東西ト鳴り物打ち上げる。
高うはござりますれども、これより口上を以て申し上げ奉りまする。これに扣へましたるが、築島合羽、小竹駒吉兩人の者ども、前藝と仕りまして、輕業の一通り、香爐獅子が最初でござい。
ト鳴り物になる。彌五平、駒吉を相手に輕業の思ひ入れよろしくあつて納まる。
八八　大概、そんなものよ。時に、今日の帳面を見せな。
藤兵　合點だ／＼。
ト大福帳を持つて來る。
八八　モシ／＼、小俊さん、今日の面割りを一つに締めて、コレ／＼、十兩二分二朱ござりやすによ。その積りでござりやせうね。

小俊　さうサ、お前方の立前が、その位は溜つて居るよ。今にも入用なら、割つてやらうか。

ト小簞笥より包み金十兩を出して見せる。

彌五　そんなら、斯うしやせう。その內をマア、わしが分を割つてくんなさい。

權七　貴樣が割るなら、おれが分も勘定してもらひやせう。

八八　これサ〳〵、どうしたものだ。小俊さんに預けて置いちやア、大丈夫だわな。ナニ間違ひがあるものか。預けて置きねえ。もし間違ひがあれば、憚りながら、わしが勘定するわな。お前方はよう割りたがるワ。とんだお半長右衞門だ。

彌五　ナニ、あの子を疑ぐるものかな。その上に貴樣の請合ひ、間違つたなら、こなたが勘定しようと云ふ位な慥かな事だ。ナウ、さうぢやアないか。

權藤　さうサ、丈夫な方へ預けるがいゝわな。

小俊　丈夫でもあるまいが、預ける氣なら、預かつて置かうよ。

八八　それが好いのサ……雨は止んだが、天氣にしたいの。

たか　雨が止んだら、この子を連れて、洗湯へ入つて來よう。

駒吉　おらアおぶさつて行かう。

たか　よく我まゝを云ふぞ。

藤兵　コレ、今の酒を始めようか。

彌五　今日はてまへ、太鼓を張つたの。

權七　鰻でも買やれ。

藤兵　エ、人ぢらしな。

小俊　コレ、口上さん、蚊いぶしを仕掛けてくんな。

八八　オツと、合點だ。

たか　ドリヤ、洗湯へ行かう。

皆々　サア、酒にせう。

ト流行り唄になり、彌五平、權七、藤兵衞、奧へ入る。おたか、駒吉を脊負ひ、向うへ入る。八八、行燈を灯し、火鉢へ蚊いぶしを仕掛ける事。

八八　モシ、小俊さん、お前、今日の噂を聞きなさつたか。

小俊　イエ、何にも聞かねえの。

八八　サ、とんだ噂があるね。あの湯島の三吉といふ人が、譯は詳しく聞かねえが、盜人の同類だとやら、怪しから

ぬ事を云ひやすが、あの三吉といふ男は、お前、何か譯があるぢやアござりやせぬか。

ト小俊、思ひ入れあつて

小俊　イエ〳〵、決してわたしやア、そんな覺えはないの。

八八　エ、、よう嘘をつきなさる。わたしやアこの間、洗湯で見たよ。お前の手には、三吉女房と彫つてあるよ。

小俊　エ、、あの彫り物は、心安くした時分の、誠の浮氣が今ぢやア後悔。

八八　それぢやア、氣遣ひはないが、わしが案じられるからよ。

ト思ひ入れ。時の鐘、バタ〳〵になり、向う揚げ幕にて

大勢　泥坊々々。

ト人音する。又助、前幕の形にて、一散に駈けて出て來り、門口を入つて、シヤンと戸を締め、ホツと思ひ入れ。小俊、八八、恟りして

八八　エ、、誰れだ。恟りさせた。何處の人だ。

小俊　何の用だか、よく訊きねえな。

八八　あつたら膽を潰させたよ。お前、何處から何の御用で來なすつたえ。

又助　ハイ、御免なさりませ。今あの東小路に、病犬からしやアがつて、すんでの事に喰ひ付かうとしやしたから、どこがどう、お前さんの所へ

小俊　駈け込みなすつたか。

又助　ハイ、大きにお騷がせ申しやした。

小俊　日暮れぢやアあり、わつちやア又、何か入つたかと

ト云ひさま、兩人、顏見合せ、思ひ入れあつて

オヤ、お前は、どうやら見た顏だの。

又助　さう云ひなされば、お前も……オ、、知つた顏だ。ア、、それ〳〵、いつぞや淺草馬道の、戸澤長屋の獨り住み、繪描きの内へござつたる、以前は多賀の召仕ひ。

小俊　淺尾も今は世に落ちて、片瀬の在で濱仕事、力あるのを幸ひに、女のあるまい曲持ちの、お江戸で生れた甲斐もない、大阪下りも氣が利かないね。

又助　表の門へ墨黑に、太夫淺妻小俊とは、アノ、お前の事か。

小俊　お里が知れやす。

又助　何處にどういふ

小俊　馴染みがあらうか。

又助　知らねえ事とて
小僕　又助さん。
又助　イヤ、おつりきなものに、ならしやつたの。
八八　ア、、お前方は、近附きか。そいつは話せるの。
小僕　して、お前は矢ッ張りお屋敷にかえ。
又助　イエ、お聞きなさい。ちよつとした間違ひから、屋敷を下がつて天竺浪人、あそこに三日、爰に半日、ごろつき仲間へ附きあつて、當時の所は居候ふサ。
小僕　そんなら、お前、まだ身分の極りは附かないのか。
又助　左やうサ。この間も兩國を通りやしたが、女曲持ち小僕といふ、幟の立つたも見やしたが、よもやお前方とは思はなんだ。イヤ又、人も成行き、水の流れだ。
　　ト莨入れを出し、思ひ入れあつて
モシ、一服お振舞ひなさい。
八八　わしのをのみなさい……火付きが悪いよ。
又助　アイ、こりやア御馳走。
　　ト煙草を吸ひ付ける。
小僕　云ひなさる通り、わたしも、よもやこんな身分にやア、ならうとは思はなんだが、女の獨り身、覺えた業もないからは、警への通り藝は身を、助ける爲めの不仕合せ、小力自慢を幸ひに、勸め込まれて女の曲持ち。又助さん、ツイこんな商賣になりやした。
又助　して、お前、三吉どのといふ、亭主があつたではないか。
小僕　イエ／＼、死なれた父さんが、云ひ譯けだと聞きは聞いたが、ついぞこれまで
又助　わしは、來馬さまの所で逢つた時、夫婦者だと思つて居たが、そんなら見かけた
小僕　逢ひなさつたか。
又助　アイ、慥か主だと思つたが、もし似た者か
　　ト思ひ入れあり
モシ、小僕さん、有やうは、わしやアお前の所へ、申し憎いが御無心に來やした。どうも來憎いから、今駈け込んだのは、ありやア狂言サ。モシ、何様でも致したうござりやすから、近頃申し兼ねたが、元手を少し貸してくんなさいやし。
小僕　アイ、折角の御無心だが、この頃内は兎角、天蓋がばれるに依つて、大きに難澁サ。餘計な事も出來やすまいが、又助さん、これでお前、酒でも飲んで行つておくれ。

ト莨盆の抽出しより、二朱を一ツ出して渡す。又助、取つて

又助　こりやア、有り難うござりやす。とんだ事を申して。

小俊　なにサ、仕様もあらうが、見なさる通りだ。小遣ひにでもしなさい。

又助　イエモウ、大きにお造作サ。

ト右の二朱を莨入れへ仕舞はうとして、奥の方へ、落したる思ひ入れあつて

南無三、お志しの貳朱を奥の間へ落した。

八八　そいつはとんだ事だ。根太が悪いから、直に縁の下。待ちなさい、手傳つて疊を上げよう。

又助　お頼み申しやす。

ト捨ぜりふにて、兩人、疊を上げ、捜す事あつて

八八　待ちなせえ。見えねえの。板をめくらう。

ト手を掛ける。小俊、驚ろき

小俊　ア、コレ、そこを明けては。

八八　それでも、爰には見えねえの。

又助　そのマア、板をめくりねえ。

小俊　ア、コレ、それぢやア蚊が出るわな。

又助　跡でぶッつけて置きやすはな。

八八　それで好いのサ。

ト又助、板をめくる。小俊心遣ひ、八八、何心なくそこらを尋ねる。此うち又助は纏からげにしたる白刃を見付け、引出す。八八は二朱を見付けて

八八　コレ〳〵、爰にあつた〳〵。お前、二朱助かつた。

又助　左やうサ。貳朱も出たが、おつりきな物も出たの。

トよく〳〵見て

小俊さん、こりやアお前のしまつて置いたのかえ。

トお俊、こなしあつて

小俊　イエ、わたしやア知らない。大方そりやア、先に居た人がしまつて置いたのでござんせう。何だか怖らしい物だの。

八八　さうして、お前、そりやア鞘がねえの。そこらにあらうよ。

小俊　エヽ、お前、構ひなさんすな、いらざるお世話サ。

八八　それでも鞘が無くちやア。

小俊　ア、コレ、茶を一ツくんな。

八八　待ちねえ。煮花をして來よう。

ト合ひ方になり、八八、奥へ入る。又助、脇差を、よ

又助　く〳〵見て小俊さん、見なさい。おつりきな脇差だ。サ、其方へおしまひ。

ト差出す。小俊取つて

小俊　櫛笄なら、欲しくもあらうが、男の道具は、あんまり氣がござんせぬ。引ッ越して行つた人も、立たれて行つた跡で、尋ねるであらうよ。

又助　左やうサ。向うから取りに來ようも知れやせぬ。しまつて置いてやるがいゝ。

小俊　併し、出刃や鉈と違つて、此まゝ拔き身でも置かれやすまい。

又助　さうサ、まんざら拔き身の儘でも、見ともない。イヤ、幸ひだ。わしが爰に鞘がありやす。

小俊　エ、、お前、鞘を持つて居なさるかえ。

又助　合ふか合はぬか知らねえが、爰に一本、後家鞘が。

小俊　ドレお見せ。

又助　お間に合はうか。

ト腰に差したる、右の鞘を出す。小俊、白刃を出し、兩方より思ひ入れあつて、シヤンと納める。誂らへの合ひ方。

小俊　床の下から出た白刃、又助さんの腰にある、この後家鞘の拵らへも、それと覺えの

又助　エ。

ト思ひ入れあつて

合せて見ればしつくりと

小俊　合うたは丁度誂らへ同然。

又助　一本差しの腰ふさぎ。

小俊　何處から、お前はこの鞘を

又助　柳原なら、がらくた見世、そこらにあれば當り前、とんだ所にあつたゆゑ。

小俊　して、その鞘が、どうしてお前の

又助　身状の知れない、湯島の三吉、あの男の前からわしは

小俊　エ。

又助　巡り巡つて取つて來た。元を訊せば隅田川。

小俊　すりや、あの時の渡し船。

又助　今ぢやア、鞘が詮議の手がゝり。

小俊　もしや、古主の求馬さま。

又助　疑ひかゝつた、重なる難儀サ。

小俊　エ。

ト思ひ入れ。

又助　その後家鞘へ、こなさんの、床の下から出た白刃。

小俊　しつくり合うたは

又助　此方の仕合せ。

小俊　わたしが爲には

又助　鬼門の宿替へ。

小俊　その間違ひが大それた、科なきお方の

又助　錣刑道具サ。二朱や三朱の出入りでない、品に依つては大仕事。誠に人は正直の、頭に宿る神々の、拔差しならぬ二柱。誰れだと思ふ鳥居又助、こいつは一番、目と出たわえ。

ト思ひ入れ。小俊、思ひ入れあつて、小簞笥を明け、内より寄り金の十兩持つて來り、又助が前へ置き

小俊　又助さん、わしが内から出た白刃、云はばわたしが代物同然。鞘はお前の品ゆゑに、合せて見ればお互ひに、揃ふ一腰、わたしが方へ買ひやす程に、この十兩で賣つておくれ。

又助　そんならお前、物云はず、わしの方から出した鞘、買ふ氣で十兩、

ト金を取つて、よく〳〵見て

ようござりやす。安い物だが賣りやせう。

小俊　勘定濟めば、出入りはないよ。

又助　貸し借りねえのサ。

ト小俊、こなし。

小俊　サ、降らうも知れねえ。もうお歸り。

又助　イヤ、まだ歸られやせぬ。泊つて行きやせう。

小俊　泊められないの。

又助　なぜえ。

小俊　女主だ。遠慮しておくれ。

又助　遠慮はいらねえ。後家鞘の、その賣り主に、やもめのお前。

小俊　エ。

又助　こんたに惚れたよ。色になりねえ。

小俊　色事嫌ひサ。

又助　ヤ。

小俊　女に似合はぬ力持ち、色氣と云つちやアこれ程も、無いのがわたしが生れつき。惚れてもらつて嬉しいが、男はどうもお斷わりサ。

又助　さう云はれちやア、是非がない。そんならこれからお歸りだ。併し、歸り仕事にもう一遍、あの鞘の出所を

尋ねて見れば、湯島の三吉、こなたに縁が無いならば、遠慮はない。これからそろそろ尋ねて見ようか。

ト外へ行かうとする。小僕、ヅッと寄つて門の戸シヤンと締めて

小僕　泊つて行きな。

又助　お前餓に。

小僕　日和になつた又助さん、蚊は多いが

又助　泊めておくれか。

小僕　夜具も無いによ。

又助　浴衣をかぶつて

小僕　ごろ寝としなさい。

又助　ドリヤ、寝るべいか。

ト唄になり、又助、十兩の金を持ち、奥へ入る。小僕、殘つて

小僕　思ひがけなう床下の、しかも隱したあの白刃、惡い所へ今の口ふさぎ、仲間の衆から預かりの　あの十兩で

ト奥を見て、こなしあつて

思うて見れば求馬さま、この間違ひでさぞや御難儀。名乘つて出るにもう一度、三吉どのに逢うた上……合點のゆかぬは鞘の出所。

ト思案の思ひ入れ。奥より八八出て來り

八八　モシ〳〵、小僕さん〳〵、あのマア先刻の男が泊ると云ふが、お前、よいかえ。

小僕　あんまり泊める氣もないが、頼むに是非なく……はんに、先刻歸つたまゝ、場所着の形で、ドレ、着替へて來よう。

ト唄になり、小僕、奥へ入る。

八八　なんだか、先刻に來た奴は、イケずるい面な奴だが、ア、コレ、又居候ふとこぢつけるであらう。

ト雨車に時の鐘、吹き降りになり、向うバタ〳〵にて、三吉、裾をからげ、おかんを引ツ張つて走り出て來り

かん　モシ、三吉さん、今夜も又、辻番とやらへ行て寢るのかえ。

三吉　馬鹿を云へ。騙りぢやあるまいし。コレ、あの曲持ちの小僕と云ふはナ、てまへもこの中淺草で逢つた、云ひ號けのあの淺尾。この所にと聞いたゆゑ、切ない時の神頼み。面押拭うて頼みに來たのよ。

かん　その云ひ號けの女中さんは、いつぞやちよつと逢うたれど、それから互ひに別れ〳〵。それも誰が業、わたしが科。先度と違うて、今日はどうやら主に逢ふのは。

三吉　ハテ、大事ないワ。又うろたへて居ると、紅粉屋の婆アや手代の勘八、あい等に逢つてはむづかしい。マアマア、小俊が内へ。
かん　ぢやとゆうて、わたしや叱られはしまいかいなう。
三吉　エ、、誰れが叱るものか。
　ト兩人、門口へ來り、内を窺ひ
御免な。小俊さんは、お内かえ〳〵。
八八　アイ〳〵、誰れだ〳〵。また居候ふが來たさうな。
　ト門口へ來て
ア、、今度は若いお人に、其方に居るのは、ヤア、とんだ綺麗な姉さんだが、小俊さんに用でもあつて來なすつたか。
三吉　逢はにやアならない事があつて來やした。もし内にならば、ちよつと呼んでくんなさい。
八八　ア、、お前、爰の内へ用で來なさつたは、外の事ぢやアあるまい、その姉さんを輕業に仕込む氣だね。そいつは當りだ。キツといゝね。
三吉　マア〳〵、呼んでくんなさいよ。
八八　ホツと合點。小俊さん〳〵、ちよつとお出で〳〵。
　ト八八、奥へ入る。

小俊　アイ〳〵、どなたでござんす。此方へお入りなされませ。
　ト暖簾口より小俊、着替へて出て來る。
三吉　どなたでもない、三吉サ。
小俊　オヤ、三吉さんか。今も今とて、お前の噂を……、求馬さまのお内から、別れた儘に今日が日まで、便り音づれとてもなう、その水臭い
　ト思はずおかんと顏見合せ
オヤ、紅粉屋の娘御さんぢやアないかえ。
かん　淺尾さん、面目なうござんす。さぞかし憎う思し召しませう。
三吉　ア、コレ、口數をきくにやア及ばぬ。女は一生に、どんな日に遭はうも知れぬ。コレ、早速云はうは、この子もどうで内へは歸らぬ料簡だ。譯の分るまで、居候ふに置いてもらはずばなるまい。
かん　云はゞわたしが、内を出て、主を頼みに思ふゆゑ、連れられて來たお前のお内、かゝりに來るとは、厚皮な女子ぢやと、思ひたさんすも恥かしけれど。
小俊　イエ〳〵、そりや誰れしもある事。それに氣遣ひはござんせぬが、三吉どの、どうもお前方は、此方の内へ

は

三吉　泊め憎いと云ふ事か。

小傻　そんなものぢやわいなア。

三吉　尤もな事だ。其方は心に思へばこそ、國を隔り居ながらも、よく〳〵わしを思ふゆゑ、云ひ號けといつたばかり、この頃中まで、顔さへ知らぬ情なし男。求馬さまの事に付き、外へは行かれぬこの三吉、殊には紅屋の内を出て、歸るなら死なうとまでも娘氣の、一途に思ふを今更に、捨てゝは面が立たねえ。それだに依つて、爰の所を聞き分けて

かん　モシ、三吉さん、わたしがあつて、お前のその身の、振り憎い事があるなら、無理にとも云はぬ程に、どうぞお前のお世話で、アノわたしを勤め奉公させてなりと、モウ〳〵紅屋の内へ歸る事は、わたしや否でござんすぞえ。

三吉　サア、歸るが否なら歸しもしまいが、コレ、てまへ、この譯を聞いてくりや。知つての通り、求馬さまの御難儀の、元はと云へば、黄金の鷄、それもやう〳〵手に入つたが、その代りには又外に、降つて湧いたるあなたの一腰、悪い所にその鞘の、あつたが御難儀。

ト云はうとする。小傻、思ひ入れ。

小傻　この末にどのやうな、難儀が出來てはわたしまで、懸りや繋がる……殊に今は大勢に、顔を晒して世を渡る今の身分、必らず悪う聞かしやんすな。三吉どの、どうぞ外を頼んで下さんせ。

三吉　サ、さうでもあらうが、てまへも女の獨り身で、派手な商賣する身分。もしやは人の、サ、何もかも合點だ。こりやア折入つておれが頼みだ。

小傻　サ、その頼みが、どうも聞き憎いゆゑ。

三吉　そんなら、どうでも。

トむつとする。

かん　アレ、あのやうに云うておぢや程に、わたしを勤め奉公にやつてなりとも、お前方お二方さんながら、お身分の立つのが肝心。モシ、わたしや爰から直ぐに。

ト行かうとするを捕へ

三吉　コレサ、何處へも行く事はねえ。五分でも外へはおれがやらねえ。コレ、淺尾、アイヤ、今ぢやア力持ちの小傻。てまへ、今の渡世だから、この俵持ちもするであらうが。

ト片脇にある俵を掴み藁を抜く。内より米はバラ〳〵

落ちる。米を掴んで
コレ、古風な事だが、てめえに拾くつた譬へがある。コレ、この米だ。女子供に致るまで、押戴いて喰ふ飯は、菩薩と云へど、性はめん〳〵、命が惜しいで頂くのだ。なぜ又藁は戴かねえ。米をならせる稲も、藁となつちやア、誠に十把一からげ、草鞋草履に作られて、世界の人の足にかゝるは、女男も姿で分る。なんぼう力があつて男勝りと思つても、そこが小さい女の根性。譬へて見れば女は藁、野郎はけちでも男は米、御恩になつたお方をば、身に引受けて粒糠まで、搗き投いた上白の、水道の水の洗ひ米、三升桝の江戸ッ子が、今まで女房に騙されたと、思つて見れば損得なし。世話にやアならねえ。誰れだと思ふ、アヽ、そこ所ぢやアねえ。サア、來や。
トおかんを引立て、行かうとする。
小俊　三吉さん、待ちなんせ。
三吉　用はねえわえ。
小俊　此方にあるよ。
三吉　重ねて聞くでい。サア、來ねえ。
トまた行かうとする。
小俊　白米さん、お待ち。
ト三吉、行かうとする
ア、モシ、ちつとお待ち。上白の一粒選りの御洗米、女のわたしが留めやんした。ちつとお待ち。
三吉　どうしたと。
小俊　止めは泊めても泊めるのは、女子同志のおかんさん、三吉さんは止められぬ。元の起りは、これぢやに依つて。
ト腕を捲り、彫り物を見せる。兩人、思ひ入れ。
三吉　いつぞや、ちよつと見噛つた、腕に彫つた彫り物。
かん　三吉女房と彫つた入れ墨。
小俊　イエ、これまで露ほども、色氣噂の事もなう、主人と親のお指圖に、夫を守つて此方では、いづくに別れ住むとても、云ひ號けせしお前ゆゑ、側に居る氣でこの彫り物。一生、男は持つまいと、思はぬ人を此方ばかり、女房の文字を朝夕の、添ひ臥しと思ふゆゑ、外の男を持たぬが樂しみ。もう斯うなつては此方から、三吉どのと云ひ號けの、縁は切る、その證據は。
トあたり見廻し、蚊いぶし火鉢の火箸を取つて、彫り物へしつかと押す。合ひ方着り、小俊、苦痛の思ひ入れ。おかん、駈け寄り介抱して

かん　ア、モシ、なんでお前はその影り物。
小傻　消してしまふが、お前へ心中。女房でなけりや三吉どの、匿まひ置いても世間の手前。お前の心も濟む道理。もうこの上は、二人とも、外へと云うても、これ程もやらぬ。わたしも女の意地、心措きなう泊つてお出でなさんせえ。
三吉　三吉女房の文字を消し、おいら二人を
かん　エ、嬉しうござんす。
　トこの時、奥より又助出て來る。小傻、見て
小傻　ヤ、又助さんか。
　ト三吉、悄りして
三吉　ヤ、こなたは、爰にか。コレ、あの時鞘を持つては行かぬか。
　トこれを聞いて小傻、思ひ入れ。
又助　ア、あの鞘は貴樣の物か。
三吉　サ、求馬さまから預かつた。
小傻　すりや、あの鞘は求馬さまから
　ト驚ろく。
三吉　巡り〱て、アノ昨夜。
小傻　その鞘ゆゑに

又助　まぐれ込んだこの又助、仲人役が不足と聞き、おれが方から押賣り仲人。
三吉　わしが祝言濟んだなら、又こなさんとこの小傻、思へば昨夜のあの金が
又助　コレ、恩にかけぬよ。
小傻　ア、思うて見れば祝言に、あつて不吉な、あの後家鞘。
かん　祝言一對揃うた上で
又助　仲人になつたり、なられたり。
かん　世話を頼むは、お二人さん。
三吉　地獄で佛の仲人二組み。
小傻　花嫁さんは、差詰め思うた男を寢取つた、わたしが花嫁。
かん　誠にこれが水入らず。
又助　三國一と
三吉　謳ひませうか。
又助　花聟なり、仲人なり、此やうなしみつたれでも居られまい。幸ひ掛けたこの浴衣、こいつを借りて
　ト權七が掛けて置いたる浴衣に着替へる。
小傻　急拵らへの御亭主へ、女の方から献した杯。

ト徳利を取つて茶碗に引受け、グッと呑んで
お前へ献すよ。
ト又助へ献す。
又助　これが固めの夫婦の杯。
三吉　てまへも改め、飲んで此方へ。
かん　あなたの前で無遠慮ながら。
ト外の茶碗を取上げる。
三吉　酌も亭主が。
ト徳利を取つてつぐ。おかん、飲んで
かん　この杯は
三吉　おれへ献すのだ。
かん　そんなら憚り。
ト三吉へさす。三吉、手酌に注ぐ。
祝言ぢややら仲直り、二つ分つた杯は。
三吉　めでたく乾して。
ト両方一度にグッと飲んで
又助　これから、おれが女房の小傳。
ト小傳へ寄り添ふ。
小傳　アレ、三吉さんが見て居るわな。
三吉　此方も負けずに、仕立ての女房。

トおかんを引寄せる。
かん　ア、コレ、どうやら、わたしや。
ト恥かしきこなし。
又助　祝言済めば、この家の主はおれだよ。
小傳　マア〱、お前サ。
又助　それを聞いちやア、亭主の勝手に……コレ、小傳、あの二人を叩き出せ。
小傳　そりや又、なんで。
又助　上前取りだ。
三吉　なんと。
又助　首を元手の盗人の、上前取りのこなたゆゑ、おれが内には置き憎い。
三吉　そんなら、昨夜の始末ゆゑ。
かん　主に越度が
又助　あるから置かねえ。云ふに云はれぬ金ながら、出所悪いを合點で、借りて歩くは、盗人の、上前取りだ。それで置かれぬ。出て行きやれ。
小傳　主を上前取りとやら、その悪名を付けさんすりや、上前取らるゝお前が元締め。わたしも亭主に持ち憎い。主より先へ、こなさん出なんせ。

又助　出ろと云つたら合せ物、離れ〲と中の品を、見込んだばつかり捻ぢこんで、たうとう爰の花聟に、なり濟ましても入り聟の、引出の一腰、でんどへ出して、

　ト すつと立つて件の一腰を取上げる。小倹、留めて

小倹　ア、コレ、それでは滅多にこなさんと

又助　縁を切らぬか。

小倹　切るまい程に。

　ト 一腰を引ツたくる。三吉見て

三吉　鞘は昨夜の

小倹　そんなら、いよ〲。

又助　持參の品だ。

三吉　中心の揃ふは、ハテナア。

　ト 合點のゆかぬ思ひ入れ。合ひ方になり、路地口より金六出て來り

金六　ア、雨も止んだが、腰に挾んだ雪駄の片足が見えぬは、大方爰の内か。

　ト 門口を明け

ハイ、御免なさりませ。先程の軒下をお借り申して、雨止みを致した者でござります。大方お前の入口に、わたしの雪駄の片しを落したと存じます。尋ねに參りました。ハイ〲、御免なされませ。慥かに爰らに……ヤ、お前は昨夜お目にかゝつた、若い者だの。

三吉　さう云はつしやるは、アノ鶏を百兩に。

　ト 云はうとして思ひ入れ。

金六　サア〲、その事。サ、わしやアお前を一日尋ねて歩きやした。ハテ、好い所に居なすつた。モシ〲、遣へないの〲。

　ト 懷より前幕の百兩を出して三吉へ見せる。

三吉　コレ〲、遣はれないとは、そりや何がえ。

金六　ハテ、昨夜お前が暗がりで渡した百兩、誠に夢に駒と云はうか。むづかしいあの品を、只取られるより有りやうは、天の與へと受取つた、金は殘らず向う極、その極印は盗み物。多賀の屋敷の御用金、お觸れの廻つた極印の詮議。サ、お前に返す。どうで通用出來ねえ百兩、そんなら返して彼の品を、潔くお上へ差上げるが、わしも身晴れだ。サ、返します。昨夜の品を返して下さい。

三吉　コレ〲、何と云はつしやる。貴様に渡した昨夜の金は、多賀の屋敷の御用金、極印のある前觸れの金とな。

金六　それだに依つて、金は返す。わたしも淺草の揚場で、

女郎子供の賣買ひする福田屋金六。お觸れの廻つた極印の金、それぱつかりは遣ひやせぬ。サア、昨夜の品を返して下さい。

三吉　ドレ、見せさッし。

　ト受取り見て

成る程、こりやア金は殘らず向う梅。この金の出所は、コレ、又助どん、昨夜こなたが、ナ、ソレ。

　ト思ひ入れあつて

折角借りたこの金だが、いま聞く通りだ。これを借りてはおれが難儀だ。外にあるなら借りもせうが、こなさんにさうもあるまい。無いならこの金、貴様に返すよ。

又助　イヤ、わしが方からこなたに貸した、金は正眞正銘だ。怪しい極印の金ぢやアない。返すなら受取らうが、マア聞きな。極印金はおらア存だ。こなたの方で引替へて、極印の金をあの人に、渡して遣つたと思はるゝ。おれが金には其やうな、極印と云つちやア決して無い。返す氣ならば又助が、貸した誠の金を返しやれ。極印の金は受取らねえ。

三吉　イ、ヤ、その手を喰ふまいか。暗がり紛れ、心の急くまゝ、云ひ極めて借りた金、こなたもそこを付け込んで、通用ならぬお觸れの金を。

又助　なぜその極印のあつたのを借りた。

三吉　どうしたと。

又助　イヤサ、その時なぜ又改めぬ。

三吉　サア、改め見りやア、斯うした間違ひ、なんで出來やう。

金六　改めないは其方の不念。そのこみやりは、此方は知らねえ。わしが方から渡した黄金の鷄、キリキリと返してもらはう。

　トこの時、奧より八八、彌五平、權七出て來り

八八　モシ〳〵、小俊さん、仲間の手合の預かり金、勘定して行かうと云ひやす。あの十兩を割つてやつて下さりませ。

小俊　ア、、そんなら先刻に預かつた

權七　金は僅かな十兩でも、急にわしらは入用サ。

藤兵　丈夫なお前に預けりやア、氣遣ひはなけれども

彌五　俄にちと入用があるから、小俊さん、あの金を

皆々　渡してくんなさい〳〵。

小俊　どうで主達の、油を絞つて貯めた金、勘定しようか、明日まで待ちな。

彌五　モシ〳〵、常ならどうでもよけれでも、極印の金でごたつきの出來たこの內、もし間違ひがあつちやア惡い。モシ、どうぞ小俊さん。

權藤　勘定してくんなさい〳〵。

小俊　でも、今夜といふては、どうも割る事は。

彌五　そんなら、どうでも勘定は出來ねえか。サア、ようござりやす……コレ、口上、こなたの請合ひだ。サア、貰つてくりやれ。

權七　さうだ〳〵。請合ひはこなただ。立替へてなりと勘定してくれ。

三人　勘定しやれ。

ト八八にせがむ。

八八　いゝワ〳〵、勘定すりやア、いゝぢやアねえか。默つて居ろ〳〵……モシ〳〵、小俊さん、云はば僅かな十兩だ。サア、遣つてしまひねえ〳〵。小うるさいわな。早く遣りなさい〳〵。

小俊　エ、お前までが、同じやうに。遣つてよければ、今でも遣るが、譯があるから、明日の朝まで待つてもらつてくんな。

八八　モシ〳〵、それだといつて、聞分けの惡い手合ひだ。遣つてしまひなさい〳〵。

金六　コレ〳〵、若いの、現在借りた人が居る樣子だ。サア、その金を返して、わしが代物も返して下さい……これサ、どうでも金は返されぬか。アヽ、そんなら、こりやアどうでも、こなさん、極印の金を摺り替へて寄越したのだな。いゝワ、金は貴樣の物、代物はおれがのだ。爰にあるなら返しやれな。

ト三吉が懷へ手を差込み、件の鷄を引出し、持つて行かうとする。

三吉　エ、何をするのだ。

ト振り切る。

三人　サ、小俊さんは、金は無いかえ。

小俊　ナニ十兩ばかり。

三人　そんなら下さい。

小俊　サ、それでも爰には。

三人　無くては、濟まない〳〵。

又助　昨夜貸したる正銘の、金を返しやれ。

三吉　これより外に金と云つちやア。

又助　無いとは云はせぬ、エヽ、野郎め、なぜ摺り替へた。

三吉　どうしたと。
文助　ものした物を摺り替へて、うぬが細つた首を繋がらと思ふのか。エヽ、上前取りめ、誠の金を出しやアがれ。
　ト三吉を睹みにじる。おかん慌てゝ
かん　エヽ、コレ、三吉さん、なぜマアお前は其やうに、打擲に遭はしやんす。手出しのならぬは、よく〳〵な。
三吉　身の横しまと思へども、これが欲しさに借りた金、それが却つて。
　ト件の鷄を出す。金六、見付けて
金六　おれが代物。
　ト鷄を引ッたくる。三吉、引付ける。
三人　金を横取り。女の騙りだ。
小僕　ニヽ、云はせて置けば。
彌五　慥かに擔箚に。
　トかゝるを小僕、彌五平を捻ち上げる。
文助　上前取りめ。
　ト三吉を喰はす。ちよつと立廻つて、三吉、件の一腰を取り、思ひ入れ。

小僕　コレ、その一腰がナ、モシ、この身の誤まり、主人を思うて御主人へ、思ひがけなう大それた
三吉　ヤ。
小僕　サ、抜差しならぬ、揃うた一腰、それがやに依つて。
　ト思ひ入れ。
又助　動きは取れまい。
金六　極印無しの百兩を。
三人　わしらが仕打ちは。
小三　サ、それは。
金六　埒は明くまい。代物持つて。
　ト行かうとする。おかん、縋つて
かん　その代物の價の百兩、極印の無い、その金を、わたしが、お前へ
金六　濟ましておくれか。
かん　元の起りは、黄金の鷄、その黄金には似もやらず、砂のわたしが、この身をお前へ。
金六　わしが商賣、聞いたゆゑ、泥水呑む氣か。
かん　お世話なされて、金の代りに。
三吉　そんなら、手詰めの様子を見兼ねて

かん　御恩をお受けなさんした、求馬さまの歸參の品、首尾ようお前が取戻し、男の意氣地を立てたいばつかり、モシ、どうぞわたしを。
三吉　それぢやア却つて娘の引賣り。
小俊　お前が立つまい、お前の代り、わたしで濟まば。
かん　イヽエお前は極印の、金とも同じ腕の極印、無疵のわたしは正銘の、金の代りに、この身を沈めて。
小俊　それぢやと云うて、わたしが內から、お前はどうも渡されぬ。
かん　その義理合ひも御尤も。お內を離れて主と一緒に。
金六　相談極めるは梅堀の、わしらが內か。
三吉　そんなら、どうでも手詰めを見兼ねて。
かん　その身の代も。
　ト鷄の包みを三吉へ渡す。
小俊　娘心に。
かん　お連れなされて下さりませ。
　トつか／＼と出る。三吉留めるな、金六支へて
金六　この子は金だよ。鷄代りだ。
三吉　人の寶の入れ替へを、そんならこなたに。
かん　モシ。
　ト思ひ入れ。
金六　預かりました。
　ト思ひ入れ。時の鐘にて、おかん、思ひ入れあつて、ツカ／＼と行き、金六附いて向うへ入る。
又助　どうやら、一方は片づいた。
八八　今の娘の心意氣、あれぢやアおれも請合ひの、その十兩は立替へてやる。コレ、おれが內へ來やれ。
彌五　イヤ、主から受取らうワ。
八八　渡して遣るよ。
三人　アノ、金を。
小俊　コレ、又助さん、先刻の十兩、ちよつとお貸し。
又助　あの金か。どうしておらア遣られない。
小俊　モシ、そりやア先刻は他人向き、今ではお前の女房でござんす。夫婦の仲での分け隔て。
又助　イカサマ、さう云はれて見れば、そんなものだ。根が其方から出た十兩。女房の難儀を見ても居られぬ。ソレ、十兩貸すよ。
　ト件の包み金を渡す。
小俊　サ、お前方、これを持つてお歸り。
彌五　そんなら、これを。

ト取上げる。

小俊　持つて歸るか。

彌五　こいつは浮んだ。

藤彌　早く割らッし。

八八　十兩取つたら云ひ分あるまい。

三人　云ひ分ないのサ。それがどうした。

八八　金の請合ひ、おれが割らうワ。

彌五　こいつは理詰めだ。ソレ、十兩。

八八　四五日借りた。

ト向うへ駈け出す。

三人　ソレ逃がすな、捕まへろ〳〵。

ト三人、追ひ駈けて入る。

又助　おきやアがれ。十兩種なしになつた。コレ、三吉、極印の金は返す程に、その代りに黄金の鷄、百兩代りに。

三吉　そんなら、どうでも、金の代りに。

ト鷄を引ッたくる。三吉、その手を捕へ

又助　この鷄は、おれが預かる。不通用なる極印の、百兩は、お主に返す。

ト打ち付け、行かうとするを兩人留めて

小俊　祝言濟んだ聟さん、床入り前にお前はどこへ。

三吉　その品持つて歸るのか。

又助　歸るといふは禁句だが、ちつとの間閑かにやならぬ。それでこの場を。

小俊　開く心と見たゆゑに、是非に今宵は泊めねばならぬ。又助さん、して又、急に何の用。

三吉　どこを當途に開くのだ。

又助　どこと云つたら梅堀の、あの金六が連れて行つた、おかんが身賣りの歩一を取らうと、それで今から。

ト行きかけるを立廻つて

小俊　行きなさるなら、その品を、わたしに預けて、

三吉　お主は行くとも、黄金の鷄。

又助　イヤ、置いては氣がゝりだ。手離されぬワ、爰放せ。

小俊　滅多にお前は。

ト引留める。立廻り、三人よろしく

又助　エヽ、面倒な。

トあたりの斧を取つて三吉へ打ち付ける。この時、斧の中より蛇、大分出て、這ひ纏る。小俊、これを見て、思はず恐るゝ體。又助キッとなつて

力はあつても、流石は女、畚の内なる長蟲に、恐るゝ樣子は、噂に違はず。

三吉　浮世の人の口繩に、かゝりや繋がる身の罪科。

小僧　天命遁がれず眼前に、身は蛇責めの業苦はやがて。

又助　覺えがあるか。

小僧　エ。

ト氣を替へ、這ひかゝる蛇を捕へて、左右へ投げ捨て、ツカ／＼と行き、神棚の宮の内なる書き物を取出し、件の一腰を取つて

お主の難儀、黄金の鷄。

三吉　渡して爰を。

ト詰め寄る。

又助　エヽ、面倒な。

ト立廻つて又助、門口へ出て、ゴン／＼になり、向うへ入る。小僧、一腰下げて行かうとする。三吉、この一腰に手を掛け

三吉　主人に難儀のかゝつたこの鞘、詳しく樣子を聞かねば滅多に。

小僧　科の次第は、詳しくこれに、

ト書き物を打ち付ける。三吉、立廻つて、この書き物、バラ／＼とほぐれる。三吉、小僧を留めながら、キッと目を付け

三吉　主人の仇を恨まん爲、船中にて殺害せしは、大江の姫君、刃物は即ち求馬の差し料……ヤヽ、すりや違ひなう。

小僧　思はぬ越度に、この身の覺悟。モシ、お前の緣は。

三吉　ヤ。

ト小僧、消したる彫り物を見せて

小僧　消したぞえ。

トつか／＼と門口へ出る。權七、藤兵衛、窺ひ居て

兩人　主殺し。

トかゝる。小僧、立廻つて二人を内へ打込む。二人は三吉へかゝる。その暇に小僧、花道の方へ行き、思ひ入れあつて

小僧　おのれ又助。

トごん／＼にて向うへ走り入る。三吉、書き物を持ち、跡を追うて行かうとする。兩人、支へるゆゑ、これを踏まへて、書き物の末を見て

三吉　黄金の鷄尋ね出し、歸參を見屆け、その後私しは科人と名乘つて出で、お仕置に相成り申したく、惜しか

らぬ命を延はり居り候ふ、お役人中さまへ、求馬召仕ひ淺尾。すりや、我が身の訴人を。

權藤　三吉、うぬを

　トかゝるを見事に投げ付け

三吉　女に稱れな

　ト書き物を見て思ひ入れ。兩人、又かゝるを足下に踏みつけ、藤兵衛かゝるを俵を取つて頭をぶち込む事あつて、キッと見得。屋體囃子にて

直ぐに聖天、それより屋體囃子にてツナギ、引返し。

　　幕

本舞臺、正面、誂らへの石段。左右、棕櫚葺きの堤、上の方に石の鳥居、祭り提灯、下手に丸井戸、すべて淺草富士淺間祭禮の模樣、爰に四ツ手駕籠を擔がせ、又助、金六、駕籠舁き、引添つて居るを、小俊、駕籠に縋つて居る。屋體囃子にて幕明く。

金六　こりや、曲持ちの小俊だな。おかんを乘せたこの駕籠を、なんでこなたは遣らぬと云ふのだ。

駕舁　駕籠は、おいらが預かつた。退かつしやい〳〵。

又助　合點がいかぬ、持つて來た黄金の鷄、返せと云ふのか。

小俊　イヽヤ、そればかりぢやアない。紅屋の娘御諸ともに、わたしに返して下さんせ。

又助　いらざる女の差出口。仕事にかけた、あのおかん、われに渡していゝものか。ちつとも早く、合點か。

金六　キリ〳〵、駕籠やれ。

駕舁　呑み込みました。

小俊　イヽヤ、遣られぬ。

　ト立廻りのうち、駕籠は下座へ急ぎ入る。跡に二人、小俊を引付け

又助　邪魔をひろけば、隅田川で、姫を殺した主殺し、爰から直ぐに小塚ツ原、それを云はぬがまたしもお慈悲だ。爰をキリ〳〵歸りやアがれ。

　ト踏みとばす。小俊、足に縋つて

小俊　どうで、この身はお仕置合點、命は惜しまぬ、さりながら、その一品は。

　ト立ちかゝつて、又助が懐より、件の鷄を引出し

これが欲しさに。

　ト思ひ入れ。又助、手早く取つて

又助　うるさく吐かせば、落ちつくやうに。

ト上の方、井戸の内へ鶏を打込む。

これでふッつり諦らめろ。

ト小俊、又助をキッと捕へて

小俊　ヤ、、、今日の今まで道ならぬ、卑怯に命延はりしも、あの一品を取り得ん爲。それを失なうては、もうこれまで。

ト突き放し、ちよつと立廻り。件の一腰を抜き

身に科受けしこの刃物、是非に及ばぬ、冥土の道連れ、覺悟しや。

ト切り付けるを、三人、立廻つて

又助　ふん縛れ。

金六　合點だ。

ト立廻りよろしく、キッとなり、これより花やかなる鳴り物をかり、石段へ上がり、大タテあつて、金六、手を負うて倒るゝ。小俊、又助、立廻りして、又助が肩先を切る。この血、井戸の中へ入ると等しく、ドロ〳〵になり、吹き水盛んに、時を發して、黄金の鶏を吹き上げる。吉例の早めになり、小俊、思ひ入れ。正面、石段の上へ、合邦太郎、深編笠、大小の形にて、ツカ〳〵と出て、この體を見て、キッとなる。鶏は石燈籠の上へ飛び行く。

合邦　常に聞く、鶏に事かはり、奇異なる八聲の東天紅、合點ゆかずと、思ふに違はず、我が所持なして又助が、持ち歸つたる黄金の鶏。

又助　さう云ふこなたは、合邦太郎。

小俊　ヤ、すりやお尋ねの冠者經之。

合邦　女が忠義の心に免じ、その品持つて、少しも早う。

ト鶏を取つて投げてやる。

小俊　嬉しや、主人の難儀を助くる

ト鶏を取上げる。

又助　イヽヤ、われには。

ト立ちかゝるを、合邦太郎支へる。この時、捕り手大勢、弓張り、十手にて、バラ〳〵と取卷き

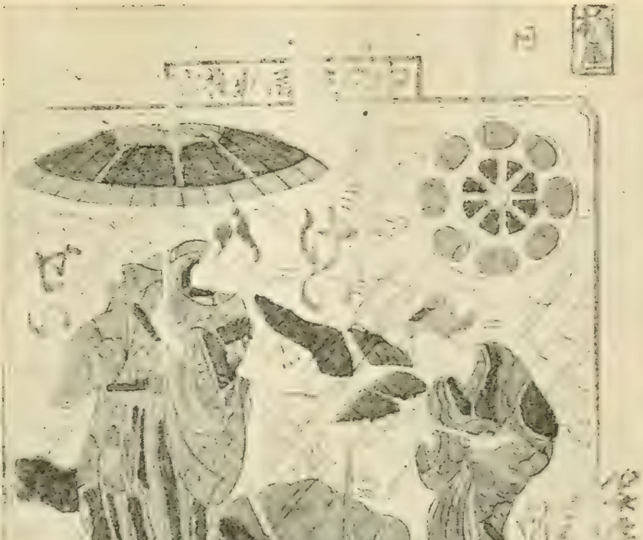
大勢　經之、動くな。

合邦　先づ今日はこれぎり。

めでたく打出し

梅柳若葉加賀染（終り）

けいせい蝦夷錦（えぞにしき）



初演絵番附表紙

けいせい蝦夷錦

序幕

安宅の關の場
近江湖水の場

役名——源義經。富樫左衛門氏綱。武藏坊辨慶。龜井六郎。片岡八郎。伊勢三郎。駿河次郎。津の井ちんくわん。佐々木六角之助。千草姫。濱名彈正。榊原丹左衛門。渡井銀兵衛。鬼輪外記。熊本將監。菅浪小助。東寺院主實ハ雷雲右衛門。舞鶴屋傳三。遣り手、おさく。傾城、高尾。同、遠山。同、葛城。同、橋立。局、萩の戸。帶刀妻、政岡。局、錦木。松前敵之助。稻葉幸藏。

造り物、正面關所の體。二間の間、二重舞臺、眞中に富樫左衛門、素袍烏帽子にて、床几にかゝつて居る。橋がゝり、逆茂木、木戸口、すべて安宅の關の模樣よろしく、幕の内より、武藏坊辨慶、片岡八郎、龜井六郎、駿河次郎、伊勢三郎、山伏の形。源義經、強力の形にて、何れも木戸外に並よく並んで居る。家來大勢立ちかゝり、喧ましう云うて居る。この見得、バタ／＼にて、幕明く。

家來　罷りなりませぬ／＼。

辨慶　お止めなさるゝは、御尤もにはござれども、先刻より申す如く、我れ／＼事は、南都東大寺の大佛殿建立の爲、東國へ罷り下る客僧ども。何卒お通し下されうならば、忝なう存じまする。

家來　イヤサ、大佛でも土佛でも、山伏は一人も通す事罷りならぬと云ふに。

六郎　そこをどうぞ、各々方の御媒介を以て。

家來　ならぬ事ぢや。

八郎　首尾よくこの關を通りまするやうに。

家來　ならぬ。

次郎　偏へにあなた方を

三郎　お頼み申す事でござる。

家來　ならぬ／＼／＼、ならぬと云ふに。

ト皆々立ちかゝる。

左衞　家來、扣へい。
家來　ハッ。
　ト皆々扣へる。
左衞　關守りたる某を差措き、かしましき奴等の……何は兎もあれ、身が目通りへ早く通せ。
家來　畏まつてござります。
　ト木戸を開き
　イザ、これへ通り召され。
　ト皆々内へ入る。並よく並ぶ。
左衞　最前よりこれにて聞けば、東大寺の勸進の客僧とな。
辨慶　仰せの如く、この度聖武天皇の勅願に依つて、南都東大寺に丈六の盧舍那佛安置あらん爲、俊乘坊重源、勅命を崇むり、日本は申すに及ばず、唐土までも押渡る覺悟。重源に參與の山伏ども。
皆々　仔細なくお通し下さりませう。
左衞　成る程、通したきものなれども、鎌倉どのゝ嚴命を崇むり、往來を吟味する富樫の左衞門氏繩。別して山伏とあらば、猶以て糺さねばならぬ。
次郎　士農工商の四民は勿論、眞如實相の兜巾を戴き
六郎　三靈瘉伽の袈裟を纏ひ
三郎　忍辱慈悲の篠懸。
八郎　勸進觀念を事とする優婆塞に
皆々　別に御詮議がござるとな。
左衞　不審尤も。今度九郎義經公、我が君のお疑ひを蒙むり、腰越より取つて返し、奧州秀衡を賴まん爲に、主從ともに山伏に姿を替へ、奧州へ下る由。賴朝公の上聞に達し、斯くの如くに關所を構へ、往來を改むるのサ。
辨慶　すりや、我れ〳〵を似せ山伏と。
左衞　なんでもない事。不審なるは後なる強力。家來、ソリヤ。
家來　ハッ。
　ト義經にかゝる。三郎、家來を支へ、ちよつと立廻りある。
三郎　こりや、なんと召さるゝ。
左衞　オヽ、その強力こそ九郎義經、召捕つて鎌倉どのへ、引き出す。
義經　ナニ、私しを義經とな。
左衞　この氏繩が眼は淨玻璃。なんと腹にこたへたか。
辨慶　イ、ヤ、こたへませぬ。富樫の左衞門は日本の僞者と

承はつたが、見ると聞くとは、イヤハヤ大きな相違。この強力めは、岡部の宿にて往來の人の袖に縋り、物乞うて居るが不便さに、笈を擔がせ參つた。此奴を義經とは、お目利き違ひの氏繼さま。

左衛　イヤサ、雪を烏と爭うても、その手で行く某でない。眞實袖乞ひに相違なくば、岡部の宿まで吟味に遣はすその間、悉く人質。

六郎　日本は愚か、唐高麗までも勸進する我れ〳〵。吟味の間べん〳〵と相待つて居られうか。

ト辨慶、義經を引きつけ

辨慶　これまでも此奴ゆゑに、關所々々で疑ひ受け、また爰にても先ツこの通り。思へば〳〵憎くき童め。いつそうぬを、

ト金剛杖振り上げる。六郎、留めて

六郎　マア待つた。

辨慶　イヽヤ、放せ〳〵。

六郎　待つた〳〵。

ト見合す。

左衛　へヽヽヽハヽヽヽヽ、聞ふに落ちねど語るに落ちると、世の諺、牛若丸の昔より付き添ふ武藏坊。

辨慶　なんと。

左衛　其方は辨慶であらうがな。

辨慶　その疑ひを受けるのも、おのれゆゑ。六功の諸佛も上覽あれ。義經ならねば我れとても、辨慶であらう筈もなし。重々憎くきこの下郎め。

トまた振り上げて打ち兼ねるこなし。

左衛　主でなくば何ゆゑ打たぬ。

次郎　おやと云うて現在

ト云はうとする。コレと辨慶抑へるこなし。

辨慶　コリヤ……うぬ、憎くい奴の。

皆々　ウン。

トまた振り上げる。皆々無念のこなし。

義經　アヽ、申し〳〵皆樣、先達樣の仰しやる通り、世に捨てられた乞食を、お情かけて下されたる、各々樣のお身の仇。野垂れ死の私しめが、義經公に似たとあつて、假にも日本の大將たる、判官樣のお名を穢せしは、この身の本望。首打つなりと搦め捕るなりと、御存分に遊ばされて、この場を首尾よくお通りなされて下さりませ。それがせめてもの御恩報じ。さら〳〵お恨みとは存じませぬ。

ト　じつと泣く。

六郎　イヤ〳〵、強力とても同じ山伏。

次郎　佛の大慈大悲は平等利益。

三郎　隔てのないが即ち佛法。

八郎　生きるとも死ぬるとも。

皆々　我れ〳〵諸共二世の同行。

左衛　三世の主君、打たれまい。

辨慶　おんあびらうんけんそわか。

ト辨慶、義經を散々に打つ。皆々寄らうとする。家來、隔つる。皆々チツと泣く。

左衛　仔細慥かに見屆け申した。勝手次第に通り召され。

皆々　ハヽ。

ト辨慶、皆々行かうとする。此うち、左衛門、平舞臺へ下りて、義經に切つてかゝる。皆々立ち戻る。辨慶、左衛門、皆々立廻りあつて、ちやんととまり

皆々　こりや、なんと召さるゝ。

左衛　子供だましのてんがう。金剛杖の打擲より、首にして鎌倉へ渡す。覺悟せい。

辨慶　すりや、最前の打擲も。

左衛　命を救ふ忠義の杖。

皆々　なんと。

左衛　眼に無念の涙が證據。

皆々　サア、それは。

左衛　尋常に義經を渡すか。

皆々　サア、それは。

左衛　但し踏みつけ繩かけうか。

皆々　サア。

左衛　サア。

皆々　サア〳〵〳〵。

左衛　いつそ。

ト切つてかゝる。いろ〳〵立廻りあつて、ドツコイと見得になる。チヨン〳〵にて、この道具廻る。返し。

造り物、平舞臺、後ろ一面の浪幕、芦原、よろしくあつて、稻葉幸藏、着流し、百日鬘にて、岩に凭れ居眠つて居る。側に、ちんくわん、立つてゐる。この見得、薄ドロ〳〵にて止まると、本釣鐘鳴る。と幸藏、目の覺めたるこなし。

幸藏　月落ち烏啼いて霜天に、滿つれば缺くる九郎義經、讒者の舌に都も假落ち、虎口の難も辨慶が、忠義の杖に

安宅の關、越えしは越路の加賀の國。爰は所も近江の湖水。それは古へ、これは現在。

トこなしあつて

ムウ。さては夢にてありけるよな。

ちん　イヽヤ、夢でない。

幸藏　ナニ、夢でないとは。

ちん　現在ぢや。

幸藏　扨は一文字にして髯長く、異様の姿を顯はせしは、狐狸の類か、化生の物か。先づうぬは何者ぢや。

ちん　常陸坊海尊が末葉、蝦夷の臣、津の非ちんくわん。

幸藏　何がなんと。

ちん　稻葉幸藏、味方せい。

幸藏　包み隱す我が本名を知ると云ひ、この幸藏に味方せいとは。

トちんくわん、幸藏が手を取り、上座へ直し

ちん　君様が先祖は、源の義經公。讒者の爲に無實の御難。蝦夷が島に押渡り、キグルミ大王と仰がれ給ひ、その子孫たるウイテクンとは、こなたの事でござるわいなう。

幸藏　すりや、某は蝦夷大王、キグルミの末流とな。

ちん　現在に先祖の恥辱を、御覧に入れしも我が仙術。

幸藏　すりや、先祖の恥辱を雪げと云ふのか。

ちん　當の敵の伊達佐々木、我が胡沙の仙術を以て、家中過半は我が味方。

幸藏　面白い。其方が勸めに從うて、先づ手始めに佐々木を亡ぼし、この江州に根城を構へ、一天四海を掌握の企ては、我が方寸の内にあり。喜べ、ちんくわん。

ちん　ハア、勇ましき我が君。萬事は堅田の隱れ家にて。ソレ、皆の者。

皆々　ハア、。

ト薄ドロ〳〵にて、大勢、蝦夷人の拵らへにて出る。

幸藏　この者どもは。

ちん　兼ねて荷擔の本國勢。方々、ウイテクンの供奉いたされい。

幸藏　ちんくわん、來やれ。

ちん　先づ〳〵。

ト唐樂になる。幸藏、ちんくわん、蝦夷人、皆々靜かに向うへ入る。返し。

造り物、平舞臺、紅葉の立ち木大分。上より紅葉の吊り枝一面に下ろす。兩方眞中三所に幕打つてある。

道具とまる。

ト眞中に舞鶴屋傳三、幇間にて、お山人形を遣うて居る。幇間二人、介錯して居る。高尾太夫、莨盆抑へ、顏を背けて居る。佐々木六角之助、衣裳羽織、大尽の形にて、葛城、遠山、橋立、傾城の形。これに凭れかかり、酒飲んで居る。遣り手おさく、酌して居る。禿大勢、傾城高尾が側に並び居る。濱名彈正、神原丹左衞門、渡井銀兵衞、鬼輪外記、衣裳羽織にて、下座に並び居る。と梅が枝早めの三味線になる。

傳三　石にせよ金にもせよ、志す所は無限の鐘。ツンテンツルガンツンテン／＼。

六角　その金爰にも三百兩。ソレ、合點か。

ト財布より小判を撒く。

彈正　心得ました。

傳三　ばら／＼と撒き散らすは、深山颪に山吹の、花吹き散らす。

ト小判を撒くゆゑ、傳三、幇間、禿、皆々小判を拾ひ、いろ／＼まんがちなる捨ぜりふ、ごつちやに云ふ。

さく　わたしや十兩拾うたわいなア。

幇間　下拙は十五兩拾うた。

傳三　おれはたつた三十七兩。

禿皆　わしらもこれ程拾うたわいなア。

六角　なんと梅が枝が金の段で、ほんまの小判を撒いてやる趣向。當つたか／＼。

傳三　イヤモウ、近年の大當りでございまする。

幇間　この御恩は、死んでも忘れぬ／＼でござりまする。

六角　サア、この勢ひ口におさく、お銚子／＼。

さく　合點ぢやわいなア。

トいろ／＼あつて

六角　太夫。

高尾　知らんわいなア。

遠山　ソレイナア。六さん、高尾さんは、何やらきつい屈託ぢやぞえ。

葛城　また例のかいたア。

橋立　もういゝ加減にして、ちやつと仲直らしやんせいなア。

六角　イヤ／＼、皆、構つて置け／＼。わいらが挨拶すると、猶圖に乘つて強うなり居る。大體根性の惡い奴ぢやない。

高尾　アイ、惡うございませう。ちつと惡うもならうてわい

な。なんぞと云ふと、酒ばかり呑んでから。

銀兵　太夫主、殿様はあのやうに御機嫌が好いのに、何が又腹が立つ。

高尾　一體氣が惡いわえ。

外記　何處らが惡い。

高尾　わしや吉原から、この國へ呼び寄せられて、今日で三十日程にもなるけれど、國では可愛らしい事云うて、人に打込まして置いて、先度から酒を呑んでは、寢間へ入れて嬉しやと思ふと、從盤になつて高鼾。せくつても起しても、他愛のないのに、目が覺めると酒々と、わしや何も面白うない。なんぼ大名ぢやてゝ、ちつと人の心にもなつて見たがよいわいな。

彈正　こりや太夫主のお尤もぢや。申し殿様、お前もうだつかずと、ちつとおしりうたがようござりまする。殿様よしの下司[illegible]らずと、あの美しい者を、かつえさすと云ふ事があるものでござりまするか。

六角　彈正、われまでが其やうに云ふ。おれもそれに如才はない。フッと都から歸りしなに、嶋原へ寄つて、この高尾の顔を見て、マア二月ばかりも逗留して、その間に食[illegible]も[illegible]合ひをしてやつた。また今度國へ呼び寄せても、相應にはたべかける。酒に醉つて面白いのを抛つて置いて、敵のやうに毎晩は、おれも息が續かんわい。

高尾　ナニ、酒ばかりぢやない。お前の心が惡いよつて、それでわたしが嫌になつたのぢやわいなア。

六角　なぜ嫌になつた。

遠山　その筈でござんす。聞さや、この國のお娘様とやら、京のお娘様とやら、云ひ號けの美しいお方があるげな。おやに依つて、モウ高尾さんが嫌になつて、それで傍へ寄らしやんせんのであらうがな。

高尾　わたしに云ひ交した事が、今さら嘘ぢやとは云はれず、面白をかしう酒にて、そろ〳〵陣を引くのであらうがな。

[illegible]　それぢやに依つて、高尾さんが腹立てさんすが、尤もぢやわいなア。

六角　ニヽ、なんぢやと思へば、千草様が事か。

橋立　それ見やしやんせいの。

六角　イヤ、こりやをかしい。あれはおれと云ひ號けぢやない。ありや親仁の女房ぢや。おれが母者人ぢやわい。

皆々　エヽ、なんと云はしやんす。

六角　さま〴〵のものに悋氣する。ありや京の花山中納言

さまと云ふ、公卿の娘で、此方の親仁へ嫁入りした、母者人を腹立てるか。

高尾　ムウ。そんならお前様の親御の奥様かえ。

丹左　それはこちらが證據ぢや。ちつとなりと形のある事なら、尻持つてやりたいけれど、こりや全く殿様のが尤もぢや。

彈正　こりや、えらう喰ひ違うたワ。

六角　何か明り立てるやうな事ぢやが、返答はどうぢや。

遠山　高尾さん、云ひ合して、なんぞ云うて〳〵、云ひ抜かうと思うたけれど、これではどうも云はれぬわいな。

高尾　わしもをかしいものになつた。

葛城　あやまらしやんせ〳〵。

六角　イヤ〳〵、遠山橋立、必らず詫び言すな。女郎の分際として、大名に云ひかけする憎くい奴の。

高尾　皆さん、詫び言して下さんせいなア。

銀兵　それこそ、こむかひにあやまつたがよいわいなア。

彈正　こちらは知らんぞ〳〵。

高尾　さうぢやてゝ、わしやどうせうぞいなア。

遠山　エ、もどかしい。口であやまらうより、ツイ抱きついたがよいわいなア。

高尾　殿さん、もう堪忍して下さんせいの。

ト抱きつく。

皆々　こりや堪らぬ。

ト外記は遠山、丹左衛門は葛城、彈正は橋立、銀兵衛は傳三に抱きつき、皆々突き倒される、とドンチヤン騒しう鳴つて、向うより、白狐一疋飛んで出て、六角之助の前に座り、皆々を拜む。皆々恟りして

皆々　オ、怖。

六角　だんない〳〵。こりや大方、犬にでも追はれたものであらう。

銀兵　今の鉦太鼓は慥かに猪狩り。

外記　エ、聞えた。御分地淺井兵庫さま。

丹左　この頃お上の厳命に依つて、白狐をお狩りなさるゝと聞いたが

彈正　さては狩り出されし白狐めぢやな。

遠山　オ、怖。あれが人を化かす狐かいなア。

橋立　ほんに氣味の惡い顏ぢやわいなア。

六角　皆騷ぐな〳〵。皆を見て拜むは、助けてくれいと云ふのぢやあらう。コリヤ狐、助けて欲しいか。

ト狐、頷く。

遠山　アレ、頷くわいなア。
傳三　コリヤ、旦那に助けてもらうたら、福はおれに授けてくれい。合點か。
銀兵　アイヤ／＼、若殿樣、私しならぬお上の嚴命。
丹左　狩り出した狐をお助けあつては
彈正　後日のお咎めあらんは必定。
外記　畜生にお家は替へられぬ。
彈正　矢張り捕へて勢子へ渡し
丹左　殺してしまふが
四人　よかろうやうに存じます。
六角　ハテ、窮鳥懷に入れば、狩人さへ助けるぢやないか。助けてやれ／＼。
皆々　早う隱してやらしやんせいなア。
六角　幸ひの人形箱、その中へ隱せ／＼。
傳三　合點でござります。
ト眞中の箱を繰り、眞中の大箱に京人形と書きあるその中へ狐を入れ、傳三、蓋をする。
六角　サア、斯うして置いたら氣遣ひないぞ。
六角　皆、追手が來ても云うてやるなよ。
四人　畏まつてござります。

ト どんちやんにて、菅浪小助、野袴、ぶッ裂き羽織、吹きそらしの笠着て、勢子大勢連れ出る。
小助　參れ／＼。慥かこの道筋へうせ居つたが。
勢子　左樣でござりまする。
小助　これは御本家の若殿六角之助さま。
六角　淺井兵庫どのゝ家來、菅浪小助。仰々しい扮裝。何事ぢや。
小助　ハッ、お聞きなされたでもござりませう。この度當今御不例に付き、お生贄に供へるとあつて、白狐を狩り出し、差上げるやうにとの、主人兵庫への勅命。それゆゑこの間より、所々方々尋ぬるところ、さて白い狐はないもの。やう／＼今日尋ね出し、見付けるや否や、この小助、爰ぞ一世の曠業と、日頃手練の弓に矢番ひ、切つて放せば誤またず、狐の鼻先射通したと、存じましたは稻村にて、誠の狐は取逃がしましてござります。
六角　オ、手柄々々。天晴れ弓勢、三浦上總も跣足跣足。
小助　イヤモウ、面目次第もござりません。併し、この道へ逃げ參つたと勢子が注進。もし御存じではござりませんかな。あの狐を射損じては、この小助の腹切り道具。

何卒傳ひ一人お助けと思し召して、若殿、何れも、御存じならばお頼み申します。
四人　イヤサ、その狐は。
六角　イヤ、知らんぞ〳〵。狐は愚か、馬にも虎にも逢うた事はない。ナウ皆の者。
傾城　さうぢやわいなア。
傳三　イヤコレ熊右衛門さん、ぢやない小助さんとやら。その狐は、慥か、アレ〳〵、あの山へ逃げて行つた。その逃げしなに、歌を一首殘して行つた。
勢子　して、その歌は。
傳三　戀しくば尋ね來て見よ和泉なる、信乃田の森の恨み葛の葉。
小助　ヤア、此奴、何を吐かす。六角之助さま、如何やうにお隱しなされても、爰へ逃げ込んだを、慥かに見屆けて參つた小助。尋常にお出しなされ。
六角　ハテサテ、知らぬと云ふに諄い事を。
傾城　脇も吟味して見やしやんせいなア。
傳三　お愛しさまや愛嬌ある。
小助　達てお隱しなさると、私しならぬ禁廷の御用。一家の主君とは云はしませぬぞ。

銀兵　ヤア、慮外な一言。一家の主君と云はさぬと云うて、なんとする。
丹左　素直に歸ればその通り、歸らぬに於ては、目に物見せるぞ。
彈正　足元のナ。サア、足元の箱のナ。サア、足元の明るいうちに、早く歸つたがよからう。
外記　四も五もない。とつとゝ箱をナ、歸られす。
小助　ムウ、成る程、歸されなれば歸らうが、しかゝつた詮議の糸口、解きほどいて繰り歸る。
四人　そりや又どうして。
小助　この箱の內、檢めて歸らうわい。
六角　イ、ヤ、この箱檢めさす事ならぬ。
小助　すりや、勅諚をもどかつしやるか。
六角　サア、それは。
小助　勢子の者、あの箱の內、早く檢めい。
勢子　畏まつてござります。
ト　雷序にて、小助、箱へかゝらうとするを、六角之助支へるを、四人、小助を支へるやうな顏にて、六角之助を蹴のめし、五人して打擲する。此うちに勢子、箱の蓋を開く。內より、帶刀の女房政岡、衣裳補襠に

て出で、四人を引退げ、小助を取つて投げる。皆々見
て愕り。

四人　ヤア、こなたは御家老帶刀どのゝ內室。

小助　ほんにこなたは政岡どの、狐と思ひの外、こりやどうぢや。

六角　ほんに政岡、こりやどうぢや。

政岡　今日は竹生嶋へお勅使、奉幣使の御馳走とあつて、大殿樣の御名代には、御臺千草の方さま。若殿もお入りなさるゝ道すがら、御遊興にて箱の內に忍び居て、始終を窺ふその折しも、御別家の御家來、菅浪小助どの、勅諚の狐狩りを傘に着て、居もせぬ白狐を隱したと云ひ立て、若殿樣を御打擲。支へる顏して四人の衆、不忠のあらまし、見た通りを夫帶刀へ告げ知らさうか。

四人　ア、モシ〳〵、今のは畢竟間違ひと申すものぢや。誤まつた事ぢや〳〵。

政岡　然らば小助どの、證據もない云ひかけして、若殿を打擲したは、外に意趣ばしあつての事か。

小助　イヤサ、それは。

政岡　但し淺井兵庫さまの云ひつけか。

小助　アイヤ、全く。

政岡　左樣でなくば、お歸りなされ。

小助　歸ります。なんの事ぢや。射つけたと思うた狐は稲村。見付けた箱の內は、思ひがけない政岡どの。これがほんの、こん悔先に立たず。思へば憎くい畜生め。どつちへうせた。者ども、狩り出せ〳〵。

勢子　心得ました。

小助　ハテ、面妖な。

ト云ひ〳〵皆々入る。

六角　オヽ、好い所へ政岡、よう來てたもつた。合點の行かぬは今の狐。いつの間に去んだやら。さうしてマア、其方は、いつの間におぢやつたぞいなア。

ト政岡、狐の身になり。

政岡　私しは誠の政岡さまではござりませぬ。只今助けてもらひましたる白狐。假に姿を顯はして、今の御難儀助けたは、只今の恩送り、猶この上に御危難あらば、蔭身に添うてお救ひ申しませう。御恩は一生忘れませぬ。おさらばでござりまする。

ト雷序になり、狐、好き所へ消える。皆々驚ろき

皆々　ハテ、面妖な。

ト向うより。



初濱の



繪番附

御母公樣、御禮參。

ト千草姫、振り袖、後より、錦木、政岡、衣裳補襠にて付き出る。本舞臺にて、ヤア、ソリヤ〳〵とうろたへて辭儀する。千草姫、上へ通る。

六角　これは母上樣、錦木政岡、ほんに政岡。ハテ面妖な。

四人　イカサマ、政岡どの。ハテ面妖な。

政岡　私しが、どうぞ致しましたかえ。

四人　なんとも致さんが、ハテ面妖な。

傾城　ほんにマア、よう似せたものぢやわいなア。

六角　あんまりで我が折れた。

千草　遠目から見れば、いかう賑はしい、羨ましい事やなう。

政岡　イヤモウ、殿樣の機嫌のよいのがようござります。あんまり御機嫌が過ぎまして、御酒のお痛みでも出ませうかと、これはかり氣遣はしう存じました。

錦木　酒は憂ひを拂ふ玉箒とやら申しますれば、強う酒を召上がられますと、内痛とやら申す事になると、典藥衆が申されました。そこらはお側の差引きに、ありさうなものでござります。

銀兵　イヤモウ、お酒の過ぎませぬやう、ナウ何れも。

丹左　始終あしらひ居りまする。

政岡　御覽じやれ。きつい醉ひやうではないかいなア。

錦木　わたしらは下戸ぢやに依つて、見てさへ醉ふやうなわいなア。

六角　これは母人には、今日の御代參、御苦勞千萬に存じます。

千草　アイ、御代參に參りました。母人樣は代參に來たわいな。しやほんに、千萬御苦勞に存じますとは、忝なうござんす。母人樣が禮云うたぞえ。

トむつとして云ふ。六角之助、生醉ひにて

六角　これはハヤ、御慇懃のお禮。シタガ、これに家中の者も居ります。また吉原の傾城ども、居ります。ひよんなお禮は、御無用になされて下さりませ。

千草　人に禮受けぬ氣なら、あなたからも、餘り慇懃らしう、禮云はぬがよいわいなア。

六角　イヤ〳〵、諸事は好い加減に執成して、コリャ〳〵、二人の者。モウ〳〵、母人では、いかう堅うて窮屈がる。好い加減に竹生嶋へ、お供申してくれい〳〵。

錦木　イカサマ、なんぼお心安うても、御親子樣の間は御

窮屈にござりませう。禮儀の御作法がお堅いに依つて、ナア政岡どの。

政岡　そんなものでござりまする。

千草　ヅッと無禮無體に、堅い〱と、堅いで押しつけてから。さうして廓の樂と云ふものは、どれぢやえ。

高尾　アイ、わたしは高尾と云うて、吉原で殿さんと深う云ひ交した者でござんす。どうで末々殿さんと、女夫になるでござんせう。お前の爲にも、わたしは嫁。慮外ながらお前は姑御樣。隨分孝行に致しませう程に、可愛がつて下さんせえ。

ト千草始、ムッとして、

千草　そんなら其方が、高尾どのおぢやの。アノ、思ふ男と女夫になり、暮らしやんす。わしに姑になれかえ。其やうに云ひたい事は云はぬものでござんす。ほんにほんに、腹が立つて〱、泣くにも泣かれる事ぢやない程にの。

政岡　イカサマ、世上に嫁姑の仲の好いはないと申しまするが、ちつとしたお詞にも、その移りはあるものでござりまするわいな。ホヽヽヽ。

錦木　モシ、朝廷より佐々木大領さまへ、下された御綸旨、なりや六角之助さまは御子息。それに連れ添へば、高尾どのは、嫁御と仰しやつても、苦しからぬ事でござります。

六角　それとも、この場で仰しやる事があらば。

ト腹切る眞似して、

ナ、それとも嫁が憎いなら、おのれ嫁、憎い奴ぢやと、仰しやつたがようござります。ナウ、さうぢやないか。

千草　サア、そんなら憎い嫁ぢや。ナア、これでようござんすかえ。

錦木　左樣でござります。

六角　そのようござんすかえが。

ト腹切る眞似する。

千草　サア〱、そんならようおぢやるか。

六角　左やう〱。

千草　ほんに、逢ひたい、顏が見たいと思うて、遠い都から來て、此やうな腹の立つ、悲しい

政岡　ハテマア、何事も仰しやらぬがようござります。

錦木　まだ竹生嶋御參詣には、間もござりますれば、出來置きましたる幕の内。ナア申し、政岡どの。

政岡　それ〱、マア、この紅葉をお眺めなされて、御酒

一献。

千草　雪月花の詠めより、現在殿様を。

六角　腹切つて死にませうか。

千草　ア、コレ申し。

六角　サア、太夫、おぢや。

高尾　そんなら申し、母御さん、皆さん。

傾城　サア、ござんせいなア。

政岡　先づ〳〵、お入りなされませう。

ト唄になり、千草姫は政岡、笹木を供にして橋がゝりよりの幕へ、六角之助は皆々を連れ、東寺口の幕へ入る。熊本將監、鍬、挟み箱、供廻りを連れ、橋がゝりより出て

將監　向うへ來る武家方は誰れぢや。

侍ひ　イヤ、つひに見馴れませぬ武士方でござりまする。

將監　元締め、中老衆ではないか。

侍ひ　左様ではござりませぬ。

將監　ムウ。

ト右のうち、花道へ幸藏、衣裳上下にて、向うより出かけ、但し供廻り付く。

幸藏　もうお出でありさうなものぢや……あれへ乗り物が見える。あれであらう。

侍ひ　左様でござります。

幸藏　誠に、あれぢや〳〵。

ト云うて居るうち、橋がゝりより、乗り物舁き、源吾、衣裳上下にて付き出る。

幸藏　イヤ、暫らくお乗り物、お待ち下さりませう。

源吾　お乗り物を止め召されたは何用ぢや。

幸藏　率爾ながら、あなたは京都東寺の、御院主様と見請けましてござります。

源吾　如何にも、京都東寺の、院主でござる。なんと致した。

幸藏　左様なら、少と申し上げたい儀がござります。御面上を願ひます。

源吾　イヤ、院主儀は、この度鎌倉より東山どのへ使せつけられ、既に當國の城主、佐々木大領どのより、おろの節を受取り立歸るやうにと、勅命を以て、わざ〳〵この地へ、參り、竹生嶋へ參詣いたし、只今大領どのゝ御本城へ罷り出るところ。御用ならば御本坊で、お目にかゝられたがよい。

幸藏　成る程、その儀につきまして、拜顔の願ひまするの

でござります。
院主　オヽ、聞いたぞ〳〵。それへ出てお目にかゝらう。
源吾　お乗り物立てませい。
　ト乗り物より院主出る。
院主　途中なれば御免なりませう。して、愚僧に對面したいと仰せらるゝ、其許のお名はなんと申す。
幸藏　イヤ、拙者儀は、當國佐々木大領が家來、熊木將監と申す者でござります。
院主　ムウ、それは、おろの鏡を預かりござる將監との。
幸藏　左樣でござります。
院主　これは〳〵、まだ御意得ませぬ。
幸藏　この度おろの鏡を差上げるやうにとの、勅命下りまして、主人大領、身に取りまして武士の面目、有り難う存じまするゆゑ、本城へ引付け差上げまするも慮外に存じ、直ちに竹生島へ持參仕り、差上げいとの儀、幸ひの道筋にお目にかゝりまして、直ぐにこれよりお渡し申したら存じます。
院主　これは〳〵、大切の御鏡、御本城へ達越し、淨めて受取りまするも、畢竟形代になさるゝ御鏡。當國の重寶は重けれど、勅が重うござる。又その寶鏡とあつて、黄金百枚を添へ、四位の少將になし下さるゝ。卽ち薄墨の御綸旨、所持いたして居りまする。
幸藏　イヤモウ、主人もその儀を願ひ居りまする。
院主　その筈〳〵。大名と申すものは、内で活計はやらるれども、兎角東山どのの殿中で、諸大名それ〴〵の位に依つて、居るも高下がござる。ハヤ、四位の少將になると、煙草盆が出ます。今までの侍從位では、成る程心外な所もあらう。イヤモウ、この度の儀に、愚僧も殊の外大悅いたした。
幸藏　先づ主人、申しつけました通り、途中ながら御鏡、お渡し申したうござります。
院主　その儀は如何やうとも。
　ト幸藏、挾み箱より蒔繪の箱を出し、院主に渡す、院主、とくと改め見て。
　見事、成る程、日本に一面の鏡と申す筈。形代になつても、天晴れ一天曇らず、清々たる光り。これぞ誠に大日如來南無金剛大藏。
　ト珠數にて拜む。
　源吾、その黄金持て。
源吾　ハツ。

ト臺に載せ、幸藏の前へ直す。院主、懷中より書付け
出し

院主 これは大領どの、四位の少將に任ずとある宣命。黄金百枚、頂戴召され。

幸藏 有り難う存じます。本城へお入り下され、その上にて主人、ゆる／＼お禮申し上げるでござりませう。

院主 直ぐに同道いたさう。

幸藏 イヤ、拙者は竹生嶋へ代參。この二品へ奉幣を捧げて歸りませう。

院主 成る程、左樣ありさうな儀。然らば御免なされい。

ト乘り物へ乘る。この間、熊本將監、床几にかゝり居て、この時

將監 イヤ／＼、先づ暫らく。東寺の御院主、お待ち下されい。

源吾 主人を呼びかけ召された、貴殿は何人ぢや。

將監 只今承れば、おろの鏡を差上げ、御綸旨黄金お渡しなされたが、その儀につき、少と御存じに入れたい儀がござります。暫らくお控へ下されませう。

院主 何にもせよ、仔細あり氣な云ひ分。源吾、暫らく控へい。

將監 そな侍ひ、ちよと御意得たい。

幸藏 拙者にか。

將監 如何にも。

ト兩人、向うへ出て

幸藏 用事とは、如何やうな儀でござる。

將監 其許の御家名は、何とやら御意なされたな。

幸藏 拙者は當國佐々木大領が家來、熊本將監。

將監 いよ／＼左樣か。

幸藏 なか／＼。

ト將監、繩捌きして

將監 大騙りめ。三寸繩に括り上げる。腕廻せ。

幸藏 何がなんと。

將監 イヤサ、尋常に腕廻せ。盜賊。覺悟せい。

幸藏 默り召され。身を盜賊騙りとは、何を以て。

將監 イヤ、盜人猛々しいと、コリヤ、大領どのゝ身内に、熊本將監とは身共が事ぢやわい。

幸藏 ヤア、。

將監 最前から、とくと樣子を糺しての上の事と、わざと控へ居つた。泥坊め、腕廻せ。

幸藏 南無三。

将監　ト逃げようとする。将監、引戻し、捻ぢつけるうち、
大騙りめ。
ト打擲するうち、源吾、綸旨も金も院主の側へ持ち
行く。
院主　ムウ。さては騙りであつたよな。
将監　国中には見馴れぬ奴。何国より入込んだ。真直ぐに
白状せい。
幸蔵　イヤモウ、フトした出来心でござります。もう御料
簡なされて下さりませ。
ト振り放し逃げうとする。源吾、留めて
源吾　おのれ、とくと有を聞き合せうせたな。常の町家へ
押入り、寝蔵に入るとは違ふぞよ。大それた事を企ん
で、よく主人を傘一本で、切り開かさうとしたなア。
院主　ハテ、見かけとは大きな相違。途方もない事の。
将監　家来、挟み箱。
侍ひ　ハア、。
ト持ち出で、内より鏡の箱出し
将監　鏡のおろの鏡、差し上げまする。
院主　成る程、黒白の違ひ。併し、箱の恰好、鏡の容體、
似てゐると云ふは、何程仕込みのある事と見える。

将監　おのれ一人の業ではあるまい。同類があらう。有や
うに吐かせ。
源吾　云うても云はす。云はいでも云はす。サア、吐かさ
ぬか。
ト叩く。
幸蔵　申し／＼、息がはずみます。暫らくおゆるされて下
さりませ。
院主　コリヤ／＼、其やうに短氣なうすな。とくと様子を
云はせい。
ト幸蔵、悄々として
幸蔵　私しはお国の堺に、手習ひの師匠を渡世いたします
者でござります。一人の母が大病、人蔘を入れねばなら
ぬと醫者の詞。壹両八百目も致す物を、なんとして、親
を見殺しにすると、血の涙を零して居りまする所へ、この
度この鏡の事を聞きますお存や、これ幸ひ、悪い事とは
存じながら、母への孝に眼眩みて、似の将監さまかござ
るとも知らず、只今の仕合せ。お腹癒せには、一分試し
に刻んでなりとも、御存分とは申すものゝ、母の事が臓
に迫りて、悲しうござります。
ト泣く。

源吾　なにを。とこぼへるとて、その手を喰はうか。大盜人めが。

院主　ハレ、不便なる事ぢやな。娑婆の外、別に地獄もなく、極樂も地獄も目のあたりとは云ひながら……ナニ將監どの、大切の鏡、かゝる途中にて輕々しう致すゆゑ、斯う云ふ災ひを起す。矢張り御本城へ參り受取りませう。持參なされ、

ト鏡を渡す。

將監　成る程。然らば左樣仕りませう。

源吾　思へば／＼憎くい奴。どうして腹癒やうな。

ト散々にして

いつそ打ち殺して。

ト刀振り上げる。

院主　コリヤ／＼、大小は差せども、出家の扶持人ではないか。血をあやしてこの度の役目が濟むか。たわけめが。

源吾　エヽ、命冥加な。

將監　然らば追ッつけ登城仕りませう。

院主　お先へ參ります。

將監　後刻御意得ませう。

源吾　お乘り物。

ト唄になり、乘り物に源吾付いて橋がゝりへ入る。將監、臆病口へ入る。幸藏、悄々と向うへ入らうとして小戻りする。橋がゝりより乘り物を吊らせ、源吾戻る。皆々ひそ／＼とこなしあつて、好き所へ乘り物下ろす。中より眼通坊、着流しにて、鏡持つて出る。源吾、非人となり、幸藏、船頭の形になる。

眼源　お頭。

幸藏　眼通坊、雲右衞門。

兩人　うまう行つた。

幸藏　シイ……鏡は。

眼通　摺替へて爰に。

ト渡す。

幸藏　コリヤ、彼の者に逢つて、この樣子をな。

ト囁く。

雲右　心得ました。

ト走り入る。幸藏、印籠出し

幸藏　眼通坊、わりやこの毒藥を。

ト渡し、囁く。

眼通　合點ぢや。

ト走り入る、幸藏、いろ〳〵思ひ入れあり。

幸藏　本城へは濱手からが近道。

トこれより刀の寝刃を合して

佐々木大領を……さうぢや。

ト尻ひッ搦げ走り入る。と雨降る。在鄕唄になり。向うより、萩の方、腰元の形、抱へ帯、状箱持ち、傘さし出る。後より、奴一人、ぱつてう笠着て付いて出て

奴　思ひも寄らぬ俄雨、さぞ御難儀でござりませう。

萩の　この月は卯雨月と云うて、得て思ひも寄らぬ俄雨に遭ふわいなう。

敵之　オヽイ〳〵。

奴　誰れか呼ぶ聲が、仕ります。

萩の　わしらを呼ぶのかいなう。

敵之　オヽイ〳〵。

ト在鄕唄になり、松前敵之助、てんちう羽織、頭巾、雪駄穿ひ、向うより出て

敵之　オヽイ〳〵、コレ、女中さん〳〵。

萩の　最前から呼ばしやんすは、わたしが事かいナア。

敵之　アヽイ、お前のこつちや。ほんに〳〵、聲のひしやげる程呼ぶのに。ちつと又、耳にも後を置いたがよいわいの。

萩の　オヽ仰山な。なんぢやぞいなア。

敵之　イヤ、仰山に云はねばならぬ。お前にちつと頼みたい事があるのぢやわいの。頼まれて下さんすまいか。

萩の　アイ、アノ、ついに見た事もないお前が、わたしに頼みたい事とはえ。

敵之　サア、その頼みたいと云ふは……云ふも憂めし、云はぬも辛し、武藏の國から、遥々上る道すがら、彼の繪に描いた近江八景、勢田の夕照、矢橋の歸帆、堅い心の石山も、ツイ打解ける比良の雪、眞白々々と固まつて、堅田の落雁、饅頭も、よい燗よりコリヤ雪見酒の眞似はならぬと、さる片蔭に毛氈敷かせ、爰で一杯樂しもうと、振りさけ見れば春日奈良酒、呑まぬうちが樂しみぢやと、引受けながら三井の晩鐘、マア好い景色と眺むるうち、粟津の青嵐さら〳〵と、吹雪に連れて山晴れの、雪は崩れてぐわら〳〵〳〵どた〳〵、すつてんころりんしやんと落ちた所が、命から〴〵唐崎の、夜ではないが俄雨、濡れしほ垂れて居りまするが、お前の目にはかゝりませぬかいの。

奴　ハテサテ、ようしやべる野郎ぢやな。さうしてそ

の、すつてんころりと落ちた時、持参の酒はなんとした。

敵之　サア、その酒も呑んでしまつたらよかつたもの。奴さんには差合ひぢやが、蔓なし犬もん、打ちみしやいでのけました。

奴　ア、、後悔さきに立たずぢやなア。

萩の　さうして、わたしに頼みたいとはなんの事ぢやえ。

敵之　ア、、お前は情を知らぬお方ぢやわいなア。

萩の　わしが情を知らぬとはえ。

敵之　ソレ、お前は傘をさいて居て、このづふ濡れを知らぬ顔してござりまするは、無頓着勝手のやうに存じまする。

萩の　これはほんに氣が付きませなんだ。その情を知ると云ふは、斯うかや。

ト敵之助に傘さしかける。

敵之　これお根元根本の、お情と申す者でござります。其所と云へば爰と悟つて、痒い所へ手の行くやう。お傘の情は六十六の骨身へ、こたへて、しんぞ命も破れ傘でござります。

奴　エ、、うまいな〳〵。

萩の　なにを。さうして、此やうにして居る形を、脇から人が見たならば。

敵之　相合傘の女夫連れ。一體この傘と云ふ物に、女夫の情が籠つてあるものでござります。

萩の　ムウ。女夫の情が籠つてあるとは。

奴　その因縁語れが、聞きたい〳〵。

敵之　申しませうとも。マア、すぼめたところお男、開いたところお女子。始めはきつしくて開き難いけれど、思ひ切つてズッと開けば、遂にはそれが馴染みにて、末上に合ひ、ぴつたり濡れを利かさうとて、身嗜みする證據は、髪に油を塗るではござりませぬか。

萩の　ほんにさうぢやわいの。して又、その中にあたる男と云ふ譬へは、どうしたものぢやえ。

敵之　ハテ、すぼめたところお男の心體。色の白い日傘、紅葉傘は若い譬へ。無器用な蛇の目傘が、上品上生の形でござりまする。

萩の　サア、お頼みの頼みは聞いて上げたが、又わたしが頼みも聞いて下さんすかえ。

敵之　イヤモウ、何者相應の御用なら。

萩の　そんなら、わたしが頼み云うた後で、明かしはせぬ

ぞえ。

敵之　なんの〱、わたしが頼む事さへ聞いて下さんすりや、どのやうな事なりと。

萩の　して、その頼みと云ふは。

敵之　あなた方樣へのお引合せをな。

萩の　左樣なら、ちよつと申し上げます。

ト これより口上あつてとまる。

サア、お前の頼みを聞いたからは、約束の通り、わたしが頼みも。

敵之　して、その頼みとは。

萩の　コレ。

ト 囁き

ナ、合點かえ。

敵之　ムウ。そんならあの、人形箱へ忍んで。

萩の　若殿樣の難儀があらば、コレ。

トまた囁く。

敵之　そりや合點ぢやが、出來過ぎた事して、皆さんに叱られるのぢやないかえ。

萩の　そりや氣遣ひさしやんすな。

敵之　お前が請合ふなら丈夫なが。

萩の　まだ何やかや詳しい話しは

敵之　紅葉の蔭で

萩の　云うたり聞いたり。

敵之　爰に長居はしくじりの元。

萩の　どなたもズラリと。

敵之　後程お目にかゝりませう。

ト 唄になり、奴連れ、入る。と六角之助、千草姫が自害しようとするを留めて出て

六角　コレ母人、何ゆゑに自害なされまするぞ。

千草　何ゆゑとは。

ト 胸倉を取り振り廻し、顏眺め

あんまりぢや〱。

ト 抱き付き泣く。

六角　コレ、其やうにさつしやると、おれが死なねばならぬ。らつちもない人ぢや。

ト 突き放す。また胸倉に取りつく。

千草　コレ、元わしやなんでござんす。

六角　知れた事、花園中納言どのゝ娘、親人へ嫁入りなされたりや母人。

千草　この國へ嫁入りせぬ先、京で云ひ交した事、覺えて

ござんすか。
六角　アヽ、そりや京へ上つてフト云ひ交し、一生女房に持たいで置かうかと……これ云ふと氣色が惡うなる。兎角は濟まぬ。
　ト酒を呑む。
千草　父樣や母樣に、わたしや佐々木六角之助さまに添ひたうござんすと願うたれば、氣遣ひすな、禁廷へ申し上げ、東山どのから媒つくで、夫婦にすると關白樣へ申し上げ、表向きからの緣組み。その時の嬉しさ、お墨付がこの國へ來て、嫁入りして見たれば、思ひがけもないお前の御勘當、大領さまへ緣付き。ほんにその時の悲しさ。直ぐに死なうと思うても、お前のお顏を見ると、死ぬるにも死なれず。辛い月日を送るのは、ひよつと夫婦になられうかと、そればかりを樂しみに、まだ振り袖に留めぬわいなア。
六角　サア、そこぢや。親人も夫婦と云ふ名ばかりで、一度も添寢を爲かれぬは、お前樣の方への心中か、但しその事を覺つたか、どうしても氣味の惡い詮索。お前に惚れて居ると云ふ譯柄は、親人と一つにござるのか、餘り心ようもないぢや。イヤ〳〵、云ふまい〳〵。親人が離緣さへなされたら。イヤ、これも云ふまい。マア、呑まにやならんぢや。
　ト酒を呑む。
千草　ソレ、その酒をしてござんするのが、わたしに心のあるのぢやと思ふ程、どうもならぬわいなア。
　ト泣く。
六角　サア、そのならぬ所を辛抱せねば、一も通らず、二も通らずぢや。
千草　コレ、見て下さんせ。
　ト起請を出して見せる。
六角　天罰起請文の事、
　ト千草姫、起請文の上で指切る。
南無三、指切つた。エヽ、聞分けのない。これ程事を分けて云うて聞かすのに。もう嫌ぢや。ふつ〳〵嫌ぢや。ア、堅意地な。
　ト云ひつゝ、酒呑んで居る。千草姫、指と起請を置き
千草　無理に押しつけるのではござんせぬ。高尾どのと云ふ許のあるお前。所詮この世で添ふ心はござんせぬ。これを筐ぢやと思うて下さんせ。さらばでござんす。
　ト死なうとする。高尾、出て留める。後へ善兵衞、拔

高尾　左衛門、弾正、出かけ見て居る。ソレ、待たしやんせ。そつくり様子が知れました。お前様の心底も見えた。

千草　高尾どの、末来はどうぞ。

高尾　末来ばかりぢやない。この世から貸すわいなア。

千草　エヽ。

高尾　賤さん、あやまりましてござんす。流石は大名、常の者なら御様子、隔つと云やしやんすを幸ひに、無茶にして抱いて寝るのに、表向きの義理を思うて、藤日向なしのお前の心その正直なに猶惚れて、ならぬと云ふ所を投けて、私しが仲人。あれ程に思うてござんす千草さまを無下に殺しては、矢ツ張りお前の御難儀。とてもの事難儀なら、睦まじう生きて居て、難儀してあげたがよい。ハテ、知れたら奥にて済みさうな事。この願ひが叶はねば、わたしも一緒に死ぬる心。賤さん、どうぞ聞き届けて下さんせいなア。

ト この間、銀兵衛、指と起請を拾ふ。

六角　す、さうぢや。よう云うた。負うた子に教へられ、浅瀬を渡るとやら。千草が死ねば、是非その詮議がなければならぬ。マア、知れるまでは何事も無事に。

高尾　其うちには又、仕様模様も。

六角　よい。其方さへ得心なら、内證は女房の千草。

千草　エヽ、そりや誠でござんすか。

六角　一つ呑んでさしや。

高尾　お酌いたしませう。

千草　高尾どの、何にも申しませぬ。忝なうござんす。

ト 呑んでさす。六角之助、受け

六角　二世をかけての夫婦ぢや。

高尾　その代りにわたしを。

六角　末来かけて変ぢや。

高尾　千草さま。

千草　高尾どの。

高尾　これから二人して。

千草　いとしがるゝもお前のお庇。忝なうござんす。

銀丹　三國一ぢや、嫁になり済ました。しやん〳〵。

六角　ヤア、わいら、聞いて居たか。

銀兵　様子は残らず承りました。雨降つて地固まるとは、この事でござりまする。

丹左　我れ〳〵が呑み込んで居りますれば、少しもお気遣ひはござりませぬ。

六角　よし〳〵。萬事頼むぞよ〳〵。
丹左　かゝるめでたき折なれば、打混じてあつさりと。
銀兵　竹生嶋にて呑みかけませうか。
六角　サア、そんなら、皆來い〳〵。
ト傾城皆々傳三、おさく、禿皆々出る。
さく　樣子はあれにて承りました。
傳三　この勢ひに打連れて。
葛城　竹生嶋への御參詣。
皆々　わたしらも一緒に送らうわいなア。
トこれより伊勢音頭にて、六角之助、千草姫、高尾、葛城、濱山、おさく、傳三、禿皆々ワヤ〳〵云うて入る。銀兵衞、一人殘り、思案する所へ、鬼輪外記、濱名彈正、黑裝束、鎖帷子、凛々しき形にて出て
外彈　銀兵衞どの。
銀兵　シイ〳〵。
ト三人、あたりを見て
若殿を嵌て上げて、千草姫と密通させ、その科でぼひまくれば、惚れて居る高尾は身が女房。
彈正　その事につれて、幸藏より貴殿へこの狀。
ト銀兵衞、取つて

銀兵　彼の似せ筆首尾よく致し、まんまと親子に致し候ふに、今に於て褒美の沙汰もなく、打捨て置かるゝ段不埒に存じ候ふ、用事あつて國へ入込み候ふ間、この返答次第、露顯いたし、ばれ仕事に仕るべく候ふ、但し金お越しなされ候ふや、一日に承り申したく候ふ、此方居所は申さず候ふ、返答聞きに參り申すべく候ふ、銀印へ、幸藏より。
彈正　この返事次第で、只は置かぬと、大猛わなつて居た事ではない。
銀兵　よいわサ〳〵。仕負せた上は、過分の褒美遣はさうと云つて置きやれサ。して、先達て盜み置いたる、佐々木家の系圖の一卷は。
外記　肌身離さず爰にある。
銀兵　巧い手番ひ。とてもの事に兩人は、これに忍び、人知れずばつさり。合點か。
兩人　合點ぢや。
銀兵　ぬかり召さるな。
兩人　早く行きやれ。
銀兵　合點ぢや。
ト走り入る。

外記　立身の發端、忝ない。

彈正　併し、若殿をばらすにこの密書。

外記　イカサマ、邪魔になるこの一卷。

彈正　屈竟の隠し所。

外記　幸ひこの人形箱。

ト幕を掛け、人形箱の蓋を取る。内に烏帽子三番叟にて、松前敵之助、立つて居る。

彈正　ヤア、この人形は何時の間に。

外記　大方、傳三めが入れて置いたに違ひはない。

彈正　扇子の代りはこの密書。

外記　鈴の代りにこの一卷。

兩人　人形、慥かに預けたぞ。

敵之　オヽ、預かつた。

外記　ヤア、人形が物云ふか。

彈正　これも矢ッ張り狐の業か。

兩人　こりやどうぢや。

敵之　ヤア、おほさえ／＼、喜びありや／＼、我がこの所より。

彈正　その密書を。

外記　その一卷を。

トちよつと立廻りあつて

敵之　外へはやらじとおんもふ。

トこれより、劍烏帽子の所作、いろ／＼あつてとまり、皆々を追ひ込み行かうとする。と萩の戸出て

萩の　人形、待つた。

敵之　ヤア、あなたは萩の方さま。

萩の　出かした松前敵之助。

敵之　奪ひ返せし密書と一卷。

萩の　この功に依つて、勘當赦して元の主從。

敵之　エヽ、忝ない。猶この上は、お館に足を留めますやう、お執成しは萩の方さま。

萩の　イヽヤ、わしよりはあなた方さまへ。

敵之　誠に、斯う云ふ不調法な私し、また勘當を受けませぬやう、江戸三界へつッ走りませぬやう。

萩の　よろしうお願ひ申します。

ト兩人辭儀する。幕。口上出て、東西々々、これが發端でござります。

ひやうし幕

二幕目　佐々木館の場

役名――石山宰相。神原丹左衛門。濱名彈正。鬼輪外記。安多利勘平。眼通坊。雷雲右衛門。熊本將監。熊本甚五兵衞。女房、錦木。千草姫。才原勘解由。佐々木六角之助。秋塚帶刀。同妻、政岡。萩の方。傾城、高尾。奴、三田平。才原大藏。稻葉幸藏。

造り物、一面の廻廊、音樂にて幕引くと、熊本將監、橋がゝりより出る。秋塚帶刀の妻政岡、向うより奴三田平、奴の形にて供して出る。兩方提灯ともさせ、よろしくある。

將監　それへござるは、秋塚帶刀どのゝ御内室、政岡どの。

政岡　熊本將監どの、今日のお役目、御苦勞に存じまする。

將監　なんの〳〵、御勅使御下向、まだ暫らく間もござりませう。ちと休息仕らう。

政岡　私しも暫らく、これにて休息いたしませう。

ト兩人、床几にかゝる。所へ才原大藏、衣裳上下、家來に提灯ともさせ出る。

大藏　これは何れも樣、爰にござりまするか。

政岡　才原勘解由どのゝ御子息、大藏どの。

將監　如何にも大藏どの、昨日はちよつと御意得ました。

大藏　これは將監さま、昨日は始めてお目にかゝりました。今日のお役目、御苦勞に存じまする。

將監　其許には昨今の儀、未だ家中の諸士へ近付きになりませんに、夜前の御苦勞。よしになされいで。

大藏　イヤ、左やうでござらん。これまで何事も知らずに暮らしたる拙者、やうやく昨日久々にて、親勘解由に名乘り合ひ、直に武家の作法、屋敷の風儀、斯ういふ儀までも一兩日に、覺えねばなりませぬ。

將監　勘解由どのには、斯樣な屈强の御子息を持ちながら、なぜこれまで屋敷へお入りなされぬぞ。

大藏　イヤモウ、それは實を申せば、親人の惡さでござります。浪人の砌り、母、拙者を産み落させ、水子を抛つて置き去り、身上拂きに當國へ有りつき、段々と、お取立てにて、今では當國の一家老。これ程立身しても、我

が子は生きたやら死んだやら、思ひ出しもせず、母も過ぎ行きましたれば、何者の悴やら、夢中に暮らして居りましたところに、ぶらりと風が構りましたか、我が子の行くへを尋ねられましたは、まだ運に叶うて、臍の緒の守り袋を證據に、やうやく昨日名乗り合ひ、直ぐ屋敷へ入りますと其まゝ、今朝は家督相續いたしてござります。初々しうござれども、マア氣丈一ぱいに働らいて見ようと存じます。萬事お指圖なされて下さりませ。

政岡　御器量と申し、締一さつぱりと致した、好い骨柄でござりまする。

大藏　斯う云ふ悴を御覧なされ、用のない時は、辷つても構はず、我が勝手な時には、俄かに尋ね廻つてこき遣はれまする。

將監　イヤモウ、一器量はキッと見えます。

大藏　時に拙者は、最早お暇申しませう。

政岡　左やうならば大藏どの。

大藏　御寮人様、後刻御意得ませう。

三人　提灯やれ。

ト唄になり、大藏、内へ入る。

呼び　お勅使様お立ち。

ト管絃になり、石山宰相、公卿の形。仕丁、錦木を連れて出る。

政岡　これはお勅使様。早

將監　御下向でござりまするか。

錦木　母御様、お勅使様の御神拜も濟みましてござりまする。直ぐに御鏡を差上げても苦しうござりますまいか。

將監　ハテ、合點の行かぬ。先達て途中にて、お勅使のお目見得いたせしは、東寺の御院主。いま見請けますれば、東帶の御姿。ハテ心得ぬ。

政岡　イヤ、將監どの。禁廷よりの御勅使が、二人あつて、よいものか。何とやら訝かしいお詞。して、その御鏡は、所持なされたか。

將監　これに持參いたしました。

錦木　左やうなれば、早うお差上げなされませ。

宰相　心元ない詞のはし〴〵。先づ何かは差措き、鏡を受取らう。

將監　ハッ。

ト箱を渡す。とくと改め見て

宰相　供せい。

ト行かうとする。

政岡　イヤ〳〵、申しお勅使様、御鏡が何と致しました
な。
宰相　おろの鏡は、唐土大宗皇帝の傳來。とくと　細を存
ぜぬ者を、使者にお立てなされうか。
将監　すりや、この鏡は　・
　ト取つて改め見て
誠に、こりや似せ物。
皆々　ヤア。
　ト惘り。
宰相　似せ物を差上げるは、鏡を惜しむ大領が計らひか。
将監　全く以て。
宰相　何にもせよ、本城へ入り、大領が返答聞かう。仕丁
ども、参れ。
　ト向うへ入る。後に皆々、思ひ入れ。
錦木　申し〳〵、預かりの御鏡が、似せ物では済みませぬ
が、云ひ譯がござりませんかいなア。
将監　嫁、倅甚五兵衛に、草を分つてなりと、鏡の詮議せ
よと云つてくりやれ。
　ト腹切らうとする。政岡、留めて
政岡　お前が今お果てなされては、いよ〳〵御鏡紛失の科
は、お子の甚五兵衛さまも遁がれますまいぞえ。
将監　東寺の院主、都よりの勅使と云うて騙る折しも、熊
本将監と名乘り、鏡を差上げる曲者。黄金百両を騙り取
らんとするゆゑ、此方の鏡を見せ、騙りめは手酷く打ち
据ゑ、御鏡は本城にて差上げる筈にして、持ち歸つたが、
すりや、御鏡は、その時擦替へられたのぢやな。一生の
誤まり。申し譯に。
政岡　あなたの云ひ譯は立たうが、殿より禁庭への申し譯
は、何となされまする……未だ間もない事、八方を立ち
切らば、この國は袋の鼠も同然。とつくりと思案をなさ
れませい。
錦木　して、その騙りの名を、何と申しまする。
将監　一人は東寺の院主、家來の名は源吾、今一人はお國
境の浪人者。
政岡　イヤ、名を證據に詮議はならぬ。
将監　すりや、如何仕らう。
政岡　面體は。
将監　残らず面は見覺えて罷りある。
政岡　ソレ、それゆゑに切腹を、お留め申しました。
将監　然らば、これより直ぐに。

政岡　濱手の番所は私しが合圖。
錦木　この通りを私しは夫へ。
政岡　甚五兵衞どのへ早う
將監　御前の儀は。
政岡　氣遣ひなされな。
錦木　見御樣。
政岡　お二人とも
將監　おさらば。
ト將監、錦木、走り入る。
政岡　側へ顔は見知つても、まさかの時は。
ト三田平を見て
三田平。
三田　ネイ〳〵。
政岡　今のを聞いたか。
ト三田平、頷く。
將監さまに追ひつきや。
三田　ハッ。
ト三田平、向うへ入る。とバタ〳〵にて、早打ち出で
早打　申し上げます。
政岡　あはたゞしい、何事ぢや。
早打　大殿大領樣を、何者とも知れず、討つて立退きましてござりまする。
皆々　ヤア〳〵。一時も早くお詰めなされませい。
ト云ひ捨て走り入る。
政岡　こりや斯うしては居られぬわいの。
ト向うへ走り入る。
返し、この道具廻る。早太鼓。
造り物、館の體。萩の方、鉢卷、長刀を突き、眞中の床几にかゝる。石山宰相、上座に立つて居る。次に才原勘解由、下に諸士、皆々弓張り提灯にて取卷き居る。鬼喰外記、安多利勘平、神原丹左衞門、濱名彈正、熊本甚五兵衞を圍ひ居る。この見得にて道具とまる。
外記　熊本甚五兵衞、動くな。
甚五　この甚五兵衞は、何ゆゑお疑ひがかゝりましたな。
宰相　才原勘解由、存じ寄らぬ天災。一家中の愁傷、推量いたした。
勘解　片時も詮議を緩めませうか。草を分つて敵を探し出しまする。

萩の　大殿様の御最期。お勅使様の手前を恐れ、泣かずに居る心の内、推量してたもいなう。

勘解　甚五兵衛、してお勅使へ差上げる御鏡は。

甚五　イヤ、そりや親将監が、先達て持參いたした。

彈正　その将監が、今に出仕せぬとあるが

甚五　イヤ、出仕いたしました。

萩の　甚五兵衛、今日お勅使様、竹生島にて将監にお逢ひなされ、お歸りの上、殿様が似せ鏡をお渡しなされたやうの御一言。鏡の預かり手は其方親子。云ひ譯の筋あらば、早う云や。

甚五　イヤ、私しは、忍びの道より仰せつけられたれば、その儀は委細存ぜず。親どもが持參仕つたに相違ござりません。

丹左　お勅使のお疑ひ、貴殿、さうばかりでは申し譯は立たん。

甚五　でも、親将監が持參いたしたに相違はない。何分親人を

外記　その将監は居るか。

ト行かうとする。

丹左　どこへ。一寸も動かれまいぞ。

甚五　ちやと申して。

彈正　御鏡を差上げるか。

皆々　サア〳〵、なんと。

政岡　その鏡は騙られました。

ト出る。

皆々　なんと。

政岡　熊本将監、持參の道にて、似せ勅使を拵らへ、盗み取つた盗賊。委細とくと相糺したる上、盗賊の詮議に遣はしました。

甚五　ナニ、御鏡を騙りめに。

ト行かうとする。

萩の　甚五兵衛、待ちや。

甚五　イヤサ、騙りめを。

萩の　其方が詮議に來やうかと、その騙りが待つて居やうか。

勘解　御驗の上は、其方は親の人質。

甚五　ハッ。

ト直る。

政岡　數日を移さず、鏡の在所尋ね出して差上げませう。

萩の　日延べ仰せつけられ下さりませうなら、有り難う存

じまする。

宰相　斯程の騷動に、六角之助はなぜ出合はぬ。

ト　ばた〳〵にて醉ひたる佐々木六角之助を引立て、傾城高尾、千草姫、皆々付いて出る。

千草　若殿、門前までお歸りなされども、斯くの通りでござりまする。

萩の　千草どの、お前は大殿樣の御代參、若殿樣には付き添ひながら、こりやどうでござりまする。

甚五　コレ若殿、御勅使も爰にお渡りなさるゝ。お家の大事が起りました。若殿樣。

高尾　コレ、氣を慥しかに持つて下さんせいなア。

六角　よいワ〳〵。迎ひ酒を熱うして、呑ましてくれい。

千草　お勅使樣の御前と云ひ、如何に正體ないと云うて、六角之助さま、あんまりお胴慾でござりまする。

六角　千草々々、爰へ來ぬかい。今日から其方は女房。高尾は手かけ。なんでもよいワ。呑め〳〵。

宰相　すりや、六角は母千草と。

竹記　實親子、不義密通でござる。

銀杏　僅かな[illegible]樣は、この起請。

ト起請を出す。

高千　ア、。コレ、それを。

丹彈　なんと、これでも不義でないか。

宰相　ハテ、重ね〴〵の不届き者ぢやなア。

ト高尾、千草泣く。

勘解　丹左衛門、彈正、若殿を門前より叩き出せ。

彈丹　心得ました。

トかゝるを甚五兵衛、立廻り、二人を投げ、勘解由に詰めかけ

甚五　勘解由、そのお跡目もない若殿、阿房拂ひにして、家が立つか。

勘解　イヤ、お跡目はある。

皆こ　して、その跡目は。

ト大藏、夜廻りの形にて出て

大藏　親人、仰せつけられた水筋、吟味いたし、家中の者どもも詮議仕れど、未だこれぞと申す、手がかりもござらぬ。

勘解　若殿、お聞きなされましたか。

大藏　イヤ、帯刀どのにも只今表にて。

勘解　イヤサ、若殿、大領樣の外腹の若殿、大藏さま、

今日よりこの佐々木の跡目、御相續あられませう。

宰相　ムウ。さては大領が切腹の作よな。屈竟の跡目。家相續いたしてよからう。

大藏　藪から棒と云はうか、今聞けば、六角之助さまは追放との事。なりや跡目がないに依つて。

勘解　大殿の御胤、この城の跡取りサ。

大藏　何やら、とか〳〵したやうなが。

政岡　才原勘解由さま、夫帶刀にも御內談なく。

勘解　大事ない。細工は流々、仕上げを見やれ。

大藏　すりや、いよ〳〵國は身が納めるのか。

勘解　跡目相續、遊ばされませう。

宰相　鏡の儀は追つての事。先づ大領は病氣と言上し、直ちに大藏に跡目も願ひ遣はさう。一時も早く都へ上り、板倉主膳を以て繼目の綸旨。直ちに持參いたしてよからう。その分心得申すべし。

大藏　有り難うござりまする。

萩の　思ひも依らぬ殿樣のお胤。

大藏　お袋でもマア母者人。隨分孝行に致しませう。

勘解　六角之助を追ひ拂へ。

丹彈　サア、お行きやれ。

大藏　ト割竹にて叩く。

振り袖の若後家は、おれが預かつて

ト寄るを萩の方、突き退け

萩の　大殿樣と云ふ夫のある身が、勅諚同然の不義。わしが詮議がある。

大藏　イヤ、身共が。

萩の　親の詞を背くのか。

大藏　あやまりました。

銀兵　傾城めらは、まだ詮議がある。身が屋敷で。

ト高尾を引き立てるを、萩の方、高尾を圍ひ

萩の　この狀、覺えがあるか。

銀兵　ヤ。

萩の　彼の似せ筆、首尾よう致し、まんまと親子に致し候ふ。名宛は銀印へ、幸藏より。

銀兵　それを。

ト寄るを、見事に投げ

萩の　ソレ、甚五兵衛。

ト甚五兵衛、立廻りよろしくあつて繩かける、

高尾　さうして、わたしは。

萩の　傾城に構ひない。追放の道づれ。

高尾　殿様の事は、必らず〳〵。
千草　頼みましてござんすぞえ。
勘解　ソレ、六角之助を叩き出せ。
千草　そんなら、おさらば。
丹頂　行きやれ。
ト叩く。
萩の　大殿様には死に別れ。
千草　三方四方の生き別れ。
政岡　今日は如何なる悪日ぞ。
勘解　家督の御祝儀。
皆々　おめでたう存じまする。
大蔵　検校ども、唄へ〳〵。
ト唄になる。
サア、若党、立ちやれ。
ト甚五兵衛、四人とちよつと立廻り、皆々この引ツ張りよろしく、返し。
造り物、一面の塀。真中に大門。秋塚帯刀、傍に家来、数多並び居る。
帯刀　者ども、大膳御逝去の事、沙汰あつては、東山どのへの聞え。お家の断絶。とくと諸士方へ申し渡したか。
家一　仰せの通り、騒ぎまするは城内ばかり。
家二　微塵も沙汰いたさぬやう、申し渡し置きましたれば、御城下はひつそりと。
皆々　静まり居りまする。
ト侍ひ一人、奥方より走り出て、
侍ひ　ハツ、奥方より秘密の御状。
ト帯刀、披き見て、
帯刀　斯うあらうと思うた壺。コリヤ、其方は。
ト囁く。
侍ひ　畏まつてござります。
帯刀　われ達は。
ト囁く。
家来　畏まつてござります。来やれ。
ト皆々入る。
帯刀　毒水を以て宿直の武士を殺し、大殿を討つた曲者の逃げ道は。ムウ。
ト思案する。雷雲右衛門、飛脚の形にて、井戸より出て、あたり見廻し、帯刀忍ぶ。と、刀に状箱を括り、向うへ走る。右のうち甚五兵衛、出かけて顔見合

す。

帯刀　ぽッかけい。

ト甚五兵衛、走り入る、ト應病口の水門より眼通坊出て、印籠を明け、水筋へ流さうとする。錦木、出かけ、顔見合せ

錦木　曲者。

ト立廻りあり、頭巾を捉へる。頭巾脱げ、眼通坊、坊主頭にて逃げ入る。

今の坊主は。

帯刀　ぽッかけい。

ト錦木、向うへ走り入る。帯刀、こなしあつて、返し。

造り物、一面葭原になり、向うに飾り船、遠目に見ゆる。[illegible]唄にて、幸藏、蘆原より出る。眼通坊、幸藏、相、立廻りあつて、殺しながら出る。この間、三田平、窺ひ居る。ト幸藏、眼通坊、蘆原の中を逃げ歩く。三田平、追ひかけながら葦屋へ入る。眼通坊、引返し、逃げ出るを、錦木出て、引き廻し

錦木　待て。大切の騷動の場所、水筋へ仕掛けたは、慥かに毒であつたらうがな。

ト三田平、見失ひ、うろ／＼出る。

眼通　オヽ、この印籠の内のは毒藥ぢや。

錦木　その毒渡して置かゝれ。

眼通　アノこれをや。うぬにはこれを。

ト切りかける。タテあつて、印籠を奪ひ合ひ、三田平、頭巾より取り、眼通坊を頭倒すなりに蘆原へ入る所へ、雲右衛門、走り出る。甚五兵衛、追ひかけ引き廻し

甚五　待て。騷動の中へ、空井戸より、[illegible]の出から慥かない。なんにもせよ、この證據渡せ。

ト三田平、蘆原より出かけ、聞いて居る。

雲右　井戸から出やうが、屋根から消えやうが、家老衆からの時[illegible]。邪魔すまい。

ト行かうとする。

甚五　その證據渡せ。

雲右　そんな事に知らんわい。

ト行かうとする。タテになり、摑み合ひのうちに三田平、證據ひッたくり行くを、兩人追ひかける。幸藏、出て、證據引ッたくり、これより月出ると、六人タテ



初演の絵番附

になる。月入ると暗がりのタテになり、いろ／＼あつて蘆原一面に引くと、海の體。幸藏一人、走り出て

幸藏 ても、ひやいな日に遭はせ居つた。おればかりぢやない、三組ほどぢやが、この状箱と。

ト内を明け、月影に讀む。三田平、後に立ち聞きする。

首尾よく大領を討ち申され候ふ事、毒薬もよく廻り大慶。こりや此方の事ぢや。宛名は稲葉幸藏どのへ、蝦夷の臣津の非。矢ッ張りおれへ來る状ぢや。すりや、今の奴等は。

ト三田平、状を引取り、又タテになる所へ、四人追ひかけ出て、六人、笠を取り合ひ、後の浪板の内へ仰向けに一緒にこけると、ポンと本の水へ入り、六人ながら水浸しになり、状を取つて引き裂き、少しづゝ持つて、花道にて、眼通坊の袖を雲右衛門捉へ、雲右衛門は幸藏を捉へ、幸藏は三田平捉へ、三田平を甚五兵衛捉へ、甚五兵衛を錦木捉へ、一時に

皆々 證據の片袖。

ト引きちぎり、一時に轉け、直ぐに走る。

幕

三幕目　佐々木館の場

役名——枚倉主膳之助。仕掛帯刀。錦木蔵五兵衛。神原丹左衛門、同女房、錦木。奴、三田平。鬼輪外記。濱名彈正。安多利勘平。蝦夷の勇王陽。才原御師由。蘇の方。寸頭大蔵。

造り物、二重屋臺、金襖、廊下口、中二階、奥の花、正面に飾りあり、御師由、帯刀、火鉢にあたりゐる。下の段に勘平、丹左衛門、帯刀とせり合つて居る。外記、留めて居る。百姓大勢、叩きかゝり居る。この見得、バタ／＼にて幕明く。

三人 退かつしやれ／＼。

外記 マア／＼、待たつしやれ。御身達は其やうに麗高に云うて、どうせうと思ふ。

勘平 どうするとは、打ち放します。

丹左 殿様より仰せつけられたる富、重家老才原御師由どの、下知。

彈正 帯刀、お身一人の捌けするは

勘平　御自分の云ひたいがいを立てうと思へは、殿の御意を背く我れ〳〵が、不調法者になる事。

丹左　サア、今云うた懸口、今一度云うて見よ。家老とは云はせませぬぞよ。

帶刀　御先代より立て置かれし御仕方の外、新法立てる事罷りならぬと云ふたが誤まりか。今一言聞きたくば云うて聞かさう。人の皮着た人面獸心。身共が目からは赤犬の寄り合ひ。大小差いた犬どもは、らつこ島へ捨ててやつたがよいと云ふ事。

皆々　その頤を切り下げてくれう。

　ト反り打つ。

勘解　マヽ、ざわ〳〵とかしましい。何を其やうに高聲に云ふ事がある。高が殿様の御意、重家老の身が下知を受けてする事に、何奴が點を打たうが、逆踊りして舞ひ上がらうが構ふ事はない。儘にして置かつしやれ。

外記　アレ、勘解由どのゝ仰せの通り、高が我れ〳〵が自分の計ひでする事ではなし、皆殿の下知。それを否と云ふ者は、後日のお咎めは知れてある。何も腹立てる事はない。

皆々　でも、あまりと申せば、

勘解　ハテ、よくござる。耳の端で蠅がブウ〳〵鳴くと思うて居やれサ。

帶刀　木に湧く蟲は、その木を食んでおのれが食とし、その木を枯らす。國の米を食んでお國の政道を崩すは、獅子心中の蟲と云はうか。秋塚帶刀のあるうちは、ビクともさす事はならん。才原どの、仕上げを見せうとお云やつたが、若殿の仕上けは何時見せる。

勘解　仕上げか。そりやお勅使御出立と入れ違うて、板倉主膳之助どの、繼目の上使に今日お入りなさるるでないか。繼目相濟んだ上の事ぢやわい。

帶刀　繼目濟んだらば、再び返らぬと云ふ高くゝりで。くくりすまひ、帶刀が見ようと契約したれば、側へ繼目が濟まうが、跡目が納まらうが、待つ時分まで待て。云ひ出す時分には黒いを白いにせうが、誰れは何奴が倅でござると、云うて〳〵云ひまくるが合點か。

勘解　まくるなりと引きつけるなりと、勝手に召され。

呼び　殿のお成り。

　ト酒宴車の三味線、太鼓になる。茶道一人、四つ這ひになり、脊中へ双六盤を載せて、萩の方、大蔵、双六打つて出る。小姓、刀持ち、侍ひ大勢附き出る。

勘解　殿様には、御機嫌よくお渡り遊ばされ

皆々　恐悦至極に存じ奉ります。

大蔵　サア、萩の方、おれが朱四のして目にのつた。貴様は朱三、朱四が出たら、抱いて寝るが合點か。

萩の　朱三が出たらどうなされます。

大蔵　そりや、どうなりとも勝手次第。

萩の　イヽエ、わたしはちつと望みがある。わたしが勝ちになつたらば、千草姫に六角之助どのを娶合せて、御苦勞ながらお前は、御隱居なされませ。

大蔵　ムウ、こりやホツとした事を云ひ出した。面白い。この賭で行かう。

萩の　御誓言で聞きませう。

大蔵　歩に首を掲げられう。

萩の　ようござりまする。賭に負けたら、お心に隨ひませう。

大蔵　抱いて寝るぞや。

萩の　隱居させまするぞや。

勘解　イヤ殿様、今日は御家督定めの御祝儀日。假にも左やうな賭は、なされぬがよくござりまする。

帯刀　萩の方さま、大殿御死去は、やうやく昨日。御遺骸取納めるや納まらず、我れ〳〵も心を痛め居りまする最中、假りにも左やうな賭は、御無用でござります。

萩の　御高恩を受けた一家中、町人百姓までも穩便を觸れ、歎きに沈む最中、時ならぬ除綿の舞ひ諷ひ。一國の大守でも、果報拙なうござなさるゝと思へば、胸は一杯になり、自らが心、推量してたもいなう。

大蔵　おれがこの國を取らねば跡目がないゆゑ、潰れるぢやないか。ナア皆の者。

彈正　左やうでござりまする。けれども大殿のお胤があればこそ、さもないと、今頃は斷絶の家潰し、我れ〳〵は天竺浪人。

丹左　身上と對替への殿様。寢た間も御恩忘れうやうはござりません。

勘平　有り難う存じ奉ります。

勘解　さう思ひ召さるるが、銘々の身の冥加と云ふもの。それも擇まへず、どこやらの侍ひは、へ、へ、大鵬の心、燕雀がなんの知らう。

帯刀　計る〳〵と心には喜べども、遂には大鵬の兩羽搏とも、ぶち落さるゝを見るやうなわい。

大蔵　云ひつけた富は、突き上がつたか。どうぢや。

帯刀　して、この富は如何いたしてお企てなされました。
大藏　コリヤ、又われが邪魔に入つたのか。
帯刀　とくと委細が承はりたい。
萩の　イヤ、そりやわたしが云ひつけた。殿樣お果てなさる丶と其まゝ、いろ〳〵の新法を立て、觸れを廻す。大藏さまの下知ならねと云へば、國主の爲が反古になるの、政道が立たぬの、これきりで國を立退くのと我まゝの有り定。それで銘々思ふ事を札に書き入れ、政道は札に書きつけた通り、御意を背くまいと云ふ契約の富ぢやわい。
大藏　我まゝとは何の事。近江一國の大名が、我まゝしたら何とする。なんのかのと云ふ奴があると、直ぐに國を捨て立退く。おれが居らぬと、この國は東山とのへ取上げられてしまふが合點か。
帯刀　お大名ぢやあの、したい事はお心任せになされたがよくござります。
大藏　帯刀、どうぢや。
帯刀　奢る者久しからず、天命に叶ふ相應と申す事さへ御存じならば、誰が違背いたしませう。
大藏　イヤ、やい、わればかり違背しさうな顏ぢや。我まゝはせぬ。萩の方の望み通り、町人百姓が願ひ、家中の者の望み。身が存じより。皆富の札に記し突き上げるが、われも札を入れるか。
帯刀　御意に從ひ、入札仕りませう。その白札、硯持て、
侍ひ　ハア。
ト札硯持つて出る。帯刀、書いて箱へ入れる。
小姓　サア〳〵、富が始まるぞや。
町人　一富が取りたいものぢやが。
小姓　早う札が聞きたい。
ト口々喧ましく云ふ。
外記　ヤイ〳〵かしましい。大事の富ぢや。無禮働らくと縛し上げるぞ。
ト皆々、富の札を打ち返し用意する。靜かなる太鼓、謠になる。
萩の　あの謠ひ鳴り物は、
帯刀　イヤ、かゝる時節に謠れあつて、大殿の追善いたす者もござりませぬ。若殿お好みの道なれば、せめて心ばかりの追善でござります。
萩の　謠ふも舞ふも法の聲、御自身に舞ひの一手の、お顏が目先にちら〳〵と。

ト後ゆるやかなる長唄になる。

大藏　ありや何ぢや。

勘解　今日のおめでた踊り。子供が舞ふのでござりまする。

大藏　こりや、よからう。朱四よ〳〵。

ト双六振る。

大藏　南無三、五一ぢや。

萩の　その石を、さうお遣ひなされては、

ト富を突き上げ

第一の富は、當國の一の宮の神主多賀彦太夫。今年は國中の神事、賑はしく致したいとの事。氏子どもへ、その旨申し渡せ。

神主　ハア、有り難うござりまする。

トまた箱を打返す。

エヽ、又一六か。思ふやうにならぬ浮世ぢやなア。

大藏　滅多にさうは行くまい。

ト取つて振る。

丹左　第二の富は、渡井銀兵衛、科を宥し、今までの通り相勤むべきものなり。

勘解　ソレ、銀兵衛をこれへ伴へ。

外記　畏まつてござります。

ト銀兵衛を引き出す。

帶刀　詮議のある銀兵衛、何者が札入れた。

勘解　イヤ、身共が入札いたした。

帶刀　罷りならぬ。詮議がある。

外記　詮議があらば後日になされ。富の表は斯くの通り、

彈正　銀兵衛との、お仕合せ。

銀兵　これと云ふも勘解由どののお蔭。エヽ、有り難うござります。

帶刀　無理に諸人を歸伏させる入札。先づこれ以て詮議の一つ。

銀兵　詮議があらば承はらうわい。

帶刀　科人赦す事罷りならぬ。

彈正　第三の富、出入りの町人木田屋忠兵衛、お國の勘定一一忠兵衛が工風の通り、相守り申すべきものなり。

勘解　その富罷りならぬ。

帶刀　ならぬとは、

勘解　その木田屋忠兵衛と云ふ町人は、東國から參つて、貴殿の用聞き、出入り致すとある。ごくにも立たぬ算盤三昧、この勘解由が拜領地、千五百石が五萬石上がる

の、誰れは啓るはの、お藏前の算用が立たぬのと、人をひつめる素町人め。
丹左　左やうでござる。我れ〳〵も見付け次第、ぶち放さうと存じて居る。
彈正　ならぬ〳〵、ならぬぞ。
帶刀　泰平の世に、謂はれざる劍戟を振ひ、表は武士のやうなれど、内證を聞かば、銘々の領分の町人百姓をせたげ、掠め取つて遊ひ十分に構へる輩。お國は困窮、家中は啓る、この理を考へ、木田屋忠兵衞へ申しつけ、筆を入れ、領の知行定めの外は、大殿の利分千石には千石、二千石は二千石、極めの通り算用いたす。品によらば、御家老でも楽一萬石極めの通り。
勘解　イヤ、素町人めが算盤の指圖は受けぬ。
帶刀　科人出す事罷りならぬ。
勘解　殺して見せう。
帶刀　忠兵衞も許して見せう。
勘解　お身が
帶刀　お身が、
二人　殺して見せう。
萩の　嬉しや、乙目の米三が出たぞ。

大藏　南無三、してやられた。
萩の　約束の通り、御隱居なされて、六角之助どのに續かすぞや。
外記　納めの富は殿大藏さまと、萩の方さまと御緣組み。御夫婦萬歳、業に納まるものなり。
皆々　千秋萬歳、おめでたうござりまする。
大藏　サア、富が上がつたからは、萩の方、抱いて寢る、さう思や。
萩の　誓言の上、双六に勝つたからは、隱居なされませ。
帶刀　科人出す事罷りならぬ。
勘解　木田屋忠兵衞許す事ならぬ。
大藏　富が當つたからは、抱いて寢る。
萩の　勝つたからは誓言の通り。
銀兵　然らば身共は。
帶刀　イ、ヤならぬ。
彈正　忠兵衞は。
勘解　イ、ヤならぬ。
大藏　云ひつけた詞は金鐵。
萩の　誓言は僞りか。
外記　何事も富の通り。

帶刀　イヽヤならぬ。

大藏　抱いて寐る。

萩の　イヽヤならぬ。

帶刀　ならぬ／＼ならぬぞ。

　トきつと詰め合ふ。

大藏　エヽ、理屈をこじる奴等ぢや。

　ト侍ひ出て

侍ひ　申し上げます。遠見仕りまするところ、最早御上使樣、門前までお越してござりまする。

大藏　ナニ、御上使門前までお入りとな。

皆々　お出迎へあられませう。

大藏　エヽ、七面倒。時に、上使出迎ひの式服を持て、

小姓　ハア。

　ト廣蓋に長上下、衣裳を載せ持ち出る。

大藏　何事も綺羅の着付け、頂戴の上下、知らしてくれう。

勘解　ソレ御着用。

　ト外記その他皆々手傳ひ、着せる。

大藏　勘解由は出迎ひの供せい。

勘解　畏まつてござります。

大藏　おてかく／＼、貴樣も、ちと手傳うたらよからうかの。

　ト萩の方に言ひ

萩の　否でも應でも抱いて寐て、存分に涙をこぼさしてやらう。そのぴんとする所が猶可愛いわい。

　ト言ひ／＼、上下を着る。

勘解　銀兵衛、式臺まで出合れせい。

銀兵　畏まつてござります。

　ト走り入る。

大藏　帶刀、改めて申し渡す仔細がある。

帶刀　御意とはな。

大藏　萩の方を[illegible]キッと申し渡したぞ。

帶刀　イヤ、その儀は、

大藏　主の詞に背くか。

帶刀　それを背いて濟むものでござりまするか。

大藏　今日からは國の主、詞を背く奴は、片端から命がないぞ。町人めら、折角うせて當の當らぬ代り、この度の祝儀に、年貢運上は今までの三層倍ぢや。

勘平　有り難う存じませい。

百姓　ハア、迷惑な事でござります。

萩の　移り變る世の有樣、この行く末は何とならうぞ。

大藏　女夫になつて子を出かすのぢや。

萩の　佛間へ入つて大膳樣へ、心ばかりの御回向申しませう。

勘解　四人ながら側を離れな。

外記　畏まつてござります。

勘解　町人ども、早く歸れ。

大藏　帶刀、今宵中に口說き落せ。

帶刀　もし御承知ない時は、

大藏　首にして見せい。

ト帶刀、物云はうとする。

四人　キツと申し渡したぞ。

ト冠せかけて云ふ。

勘解　先づ〳〵、お出であられませい。

ト唄になり、勘解由、大藏、町人、百姓、向うへ入る。四人は萩の方に附いて入る。帶刀も思案しい〳〵後より附いて入る。と眞の神樂になる。眼通坊、忍びの形にて葭がゝりより窺ひ出て、こなしあつて、前の井戸に向ひ、鯉口ちやんと鳴らす。同じく忍びの形にて、前の井戸より勇王陽、首を出し、思ひ入れあつて、兩人あたりを窺ひ

勇王　眼通坊、

眼通　津の井が家來、蝦夷の住人勇王陽。

勇王　シイ。

ト兩人あたりを窺ひ

某主從、菅家へ入込みしも、何卒先祖の仇を滅し討つて、君に國を[illegible]させん企て。其方にお頼みありし、おろの鏡は如何召された。

眼通　その鏡は、早先達て幸藏どのに渡したれば、氣遣ひない。

勇王　オヽ、手柄々々、今日の上使が味方の吉左右。

眼通　もしも味方に變ある時は

勇王　某が本國にて、習ひ覺えし國崩し

眼通　かの五十日にあまる大闘にて

勇王　城も館も將棋盤。

眼通　人馬くるめにぶつこの勝負。

勇王　して、火蓋をきる刻限は、

眼通　この井戸へ相圖の鐵丸。コレ。

ト囁く。

勇王　うまい手つがひ。

眼通　何かと首尾の間違はぬやう。
勇王　合圖を極めて。
眼通　必らずぬかるな。
勇王　合點ぢや。
ト眼通坊は寄井戸へ入る。勇王陽は向うへ悠々と入る。
この間より帶刀出かけ、始終立聞きして居る。
帶刀　すりや、彼奴等も蝦夷の廻し者。いま四海のお尋ね者、盗賊の張本稻葉幸藏を、彼れらが主君と守り立つるは……ハテナテ。いま示し合したる、津の井が家來勇王陽、大將の名はうゐて君。それは格別、館の安否は……お勅使お上りも待たず、押しかけて御上使の御入りは。ムウ。
ト思案する。とバタ／＼にて錦木、濡れながら片袖と首を持ち、本舞臺へ來てこける。
熊本甚五兵衛が女房錦木、
ト引起し介抱して
コリヤ錦木、氣を慥かに持ちやれ。女ながらも大切の詮議に行つたでないか。
錦木　帶刀さまでござりまするか。
帶刀　して、追ッかけた曲者は、
錦木　濱手で追ひつきまして
帶刀　捕へたか。
錦木　捕へました。
帶刀　して／＼、どうした。
錦木　直ぐに縄かけようと存じまするうち、外に又曲者と思しく、手強く働らきまする者二人。女の手業に心は矢竹に逸りますれども、暗さは暗し、やうやく一人手に入れまして、殘る者は
帶刀　取逃がしたか。
錦木　持つて居りまする、その狀を奪ひ取り、證據の爲、片袖を持つて歸りましてござります。
帶刀　出かした。女ながらも三品のうち、いづれにても詮議の手がかり。先づその狀を、これへ／＼、
ト引裂きし狀を出す。帶刀、三つあるを引合はして見て、
首尾次第受取り申すべく……行ひこれを根城……勝手よき方へ隱し置き、この方……行ひこれを根城、勝手よき方へ隱し置き、首尾次第受取り申すべく……扨はムウこればかりか。
錦木　奪ひ合ひましたるうち、無理に引取りましたれば、



初演の繪番附

モウそれより外は。

帯刀　まだ無いか。とくと見やれ。

　ト　いろ〳〵見て

錦木　イエ、もうございませぬ。

帯刀　これでは何も知れぬ。

錦木　申し、知れずば片袖を。

帯刀　それに手がかり。ドレ〳〵。

　ト　錦木、首の包んだる袖を出し、首を見て

錦木　ヤア、この首は[illegible]さま。

帯刀　ナニ。誠に將監どのの首。

錦木　この首がどうして。コレ、[illegible]。

帯刀　シイ……聲が高い。すりや、曲者に出合ひ、討たれたるよな。

錦木　その片袖が敵の證據。早う御覽じて下さりませ。

帯刀　この片袖が敵の證據。

錦木　アイ。

　ト　帯刀、見て

帯刀　この片袖はお身、覺えがあらう。

　ト　問ふ。錦木、見て

錦木　ヤア、こりや夫甚五兵衛どのの片袖。

帯刀　暗まぎれに親とも知らず、

錦木　そんなら甚五兵衛どのが。エ……。

帯刀　シイ……聲が高い〳〵。

　ト　うろたへ

錦木　甚五兵衛どの、ひよんな事して下さんしたな。如何に知らぬと云うて、現在の親御を。こりや、なんとせうぞいなア。

　ト　泣く所へ、甚五兵衛、片袖、狀を持ち出て、こける。

帯刀　コリヤ熊本甚五兵衛。

錦木　ヤア、こちの人。

帯刀　シイ……聲が高い〳〵。

　ト　兩人、介抱して

錦木　コレ、こちの人〳〵。

　ト　小さい聲にて呼ぶ。帯刀、耳の側へ寄り

帯刀　熊本甚五兵衛、秋篠帯刀ぢや。

　ト　甚五兵衛、氣がつく。

甚五　帯刀さま。

錦木　氣が附きましたかえ。

帯刀　して、曲者は何とした。

甚五　難なくはツつき、飛脚めが狀は此方へ奪ひ取りまし

たれども、暗まぎれに曲者は、取逃がしましてござります。
帯刀　先づその首の詮ではない。喜びやれ〳〵。
錦木　ハイ〳〵。
帯刀　甚五兵衛、お身に見せる物がある。必らず驚ろくまいぞ。
甚五　何でござるな。
帯刀　これを見やれ。
ト首を見せる。
甚五　ヤア。これは、
帯刀　シイ〳〵、聲が高い〳〵。
ト甚五兵衛うろたへる。帯刀囁き、云ひ聞かす。
大切な詮議。これにかゝつて忠義が立つか。
甚五　イヽヤ、うろたへは仕りませぬ。
錦木　コレ、舅御様は、
甚五　不敵な奴。片附けて置き居らう。
ト錦木、首を抱へる。甚五兵衛、首を見て泣きながら睨み、思ひ入れあつて
即ちこれが、飛脚めが書状でござります。
ト帯刀、取つて
帯刀　大變仕る事、成就の上評議もよく極り……當國西近江をあて……もつて奪ひ取られ候ふ。二通の寶其方……これぢや〳〵。勝手よき方へ隠し置き、此方の首尾次第受取り申すべく候ふ、行ひこれを根城、當國西近江をあて、評議もよく極り……もそつと足らぬが、もう無いか。
甚五　モウ、それより外はござりません。
帯刀　これでは雲を闇。役に立たん。
甚五　すりや、この状は役に立ちませぬか。
錦木　この状が役に立たいでは、舅御様の敵も知れず、こちの人、こりやマア、どうぢやぞいなア。
甚五　エヽ、喧ましい。頤を立てな。
ト帯刀が前へ座り
曲者めが片袖を、引捩り歸りました。これが證據になりませぬかな。
帯刀　何に寄らず……ムウ、紺の臺なし、袖下に柿色の染込みは、身が家の印。こりや中間の三田平めが片袖。
甚五　ナニ、三田平め
錦木　こちの人
帯刀　兩人、どれへ行く。

甚五　曲者は三田平。
錦木　男御の敵。
帯刀　ハテ、あはてた事を。お身の片袖は妻女が所持召さるゝ。貴殿は又、三田平が片袖。こりや、暗まぎれの間違ひ。既に今、錠木が敵の間違ひで、吐胸ついた事を、騒いて云つたではないか。うろたへる所でない。
　ト三田平、状と片袖を持ち出て行き當る。
甚五　ソリヤ、奴めぢや。
錦木　三田平か。
三田　カ、歸つた、ク、曲者、
　ト帯刀に状と片袖を見せる。
錦木　ヤ、、わが身も袖を持つて居やるか。どうで斯うあらうと思うた。
甚五　ドレ／＼、袖を見せてくれい。
錦木　出かした／＼。證據の片袖、よう、持つて戻つてたもつたな。
甚五　これは木綿の縞ぢやが。
錦木　木綿の縞は誰れでござんす。
甚五　うろたへ者。縞は縞ぢやわい。
錦木　そんなら、これも知れませぬかえ。

帯刀　トうろ／＼する。
　誠の鏡騙り候ふ事、先づは安堵。
甚五　この事ぢや。
錦木　これでござんす。
帯刀　ハテ、かしましい、控へて居やれ。忍びの術を以て奪ひ取られ候ふ二種の寶、其方……として天ケ下は掌にござ候ふ、随分出精……大領を討ち留め申すべく……出かした／＼。
　ト三田平喜ぶ。帯刀、紐ないろ／＼繼ぎ合せ、忍びの術を以て奪ひ取られ候ふ二種の寶、勝手よき方へ隠し置き、此方の首尾次第奪ひ取り申すべく候ふ。
甚五　おろの御鏡、騙り取られ候ふ事、先づは安堵。
帯刀　首尾よく大領を討ち留め申すべく候ふ、萬事もよく廻り。
甚五　大望仕る事、成就の上當國內近江あて
帯刀　あて……行ひ、これを根城、
甚五　さうぢや／＼。
帯刀　として、天ケ下は掌にござ候ふ、随分出精なされ候ふ。
甚五　サア、文句は揃うた。

帶刀　すりや、疾より寶を奪ひ、大殿を討つて、この國を根城として、謀叛を企む。
錦木　三田平、其方は愛い者ぢや。ようアノ狀を取つてお來やつたの。
三田　ト、取つて來た。
甚五　出かした。そんなら昨夜のうちに、われも居たか。
三田　イ、居た。
錦木　コレ、わしも行たが、三人ともに、よう怪我がなかつた。暗まぎれ、取りのぼしては居る、夢中で掴み合つたが、フウ、其方かいなう。
ト頷く。
甚五　流石は帶刀どのの家來程ある。愛い奴〳〵。
ト三田平喜ぶ。
錦木　申し、帶刀さま、
甚五　大方敵は知れましたか。
帶刀　肝心の宛名がない。
兩人　エ、。
ト恟り。三田平、驚く。帶刀、狀をつく〴〵見て
帶刀　勿論筆蹟と見えて、筆の腹ばかりを遣うたは、落ち散つても我が手と、見せまい爲、なりや、證據にならずこりや、何の役に立たぬ。
甚五　すりや、宛名がなうては、
ト顏見合せ、兩人ハアと泣く。
三田　ソ、、、その
甚五　エ、片輪者め。そこどころかい。
ト突き飛ばす。
三田　コ、、、コ、、、の、
錦木　エ、面倒い。とてもの事なら、宛名の所を持つて戻つたがよい。
三田　イ、、イヤ、いつそ
甚五　エ、すッ込んでけつからう。
ト蹴飛す。
帶刀　イヤ、甚五兵衞待ちやれ。三田平、これへ來い。其方が物云ひたさうにするは、曲者の名苗字、存じ居ると云ふやうな事ではないか。
三田　シ、、、マイ、、、
ト三田平、胸を叩く。
帶刀　すりや、存じて居るか。出かした〳〵。
甚五　知つて居るか〳〵。サア、その名は何と云ふ者ぢや。
三田　ハ、、、ソノ、、、。

甚五　此奴は、大切な事を吐かさいで濟むかい。
　ト振り廻す。
帶刀　ハテ、其やうにすると、猶え〻云はぬ。氣を沈めさ
　さうてや、
錦木　世界に吃りも多いが、此やうな吃りは見た事がな
　い。
甚五　いつそ唖ころなら念が晴れる。サア、云へ〳〵。
帶刀　まだいの。
　ト三田平を向うへ連れ出す。
　コリヤ三田平、して、その名は何と。
　ト三田平、いろ〳〵云はうとする思ひ入れ。
　して、曲者の名は。
甚五　その名は。
三田　イ、、、。
帶刀　ヤイ、大切の事ぢや。如何に言舌廻らぬと云うて、
　たつた一口云はれぬと云ふ事があるか。
三田　ナ、、な〻〻ば。
錦木　何の事ぢや。一つも合點がゆかぬ。
甚五　イ、、、とばかり云うては譯か解らぬ。エ、、面倒
　な奴の。

帶刀　サア、聞かねばならん。氣を沈めて云へ。どうぢ
　や。
甚五　サア〳〵、どうぢや〳〵。
帶刀　エ、、埒の明かぬ奴ぢや。
　ト蹴のめす。
錦木　お待ちなされませ。どうで云ふ事はなりますまい。
　書かして見ては。
帶刀　よく氣が附いた。早く〳〵。
　ト錦木、硯と紙を持ち出て
錦木　コレ、今のやうにしたが腹が立つなら、堪忍してた
　も。どのやうにでも大事ない。名を書いて見や。
甚五　サア、書け〳〵。
　ト三田平に筆持たす。三田平、筆を握り、よう書かぬ
　思ひ入れ。
帶刀　ツイ一筆書けやい。
　ト三田平、泣き顔する。荒神松のやうなものを書く。
甚五　エ、、埒の明かぬ。こりやなんぢや。
錦木　コレ、ほんまの字を書くのぢや。
　ト紙をあてがふ。三田平、懐へ〳〵、ぐる〳〵と墨を
　塗る。

エ、、なんぢやの。エ、、書かぬと云ふて書かさずに置かうか。

甚五　エ、、書かぬか。

帯刀　此奴、無法ぢやな。

甚五　なんの役にも立つ奴ぢやない。

帯刀　措け居らう。たつた一口吐かす事も叶はず、一筆書く事もならぬ片輪者。何ぞへ吐かしたとあつて、それが何の證據にならうぞ。斯う云ふ片輪者に、一分でも扶持をくれたは身共が誤まり、向後勘當ぢや。見るもなか／＼穢らはしい。サア、夫婦とも奥へ來やれ。

ト行かうとする。三田平、取り付く。

どうぞ云うて見るか。

ト三田平、云はうとする思ひ入れ。また云はれぬゆゑ、帯刀、蹴飛ばし

イヤ、此の片輪者め。又しても／＼、大切な詮議の妨げ、そこ立つて失せう。

ト三田平取りつき、頭振り、意地張るを

うせぬか。うせ居らぬか。

トどつかり座り、聞えぬと云ふこなし。

甚五　帯刀さまに氣色して、その顔はなんぢや、

帯刀　甚五兵衛、外へなりと抛り出しやれ。

甚五　奴め、失せう。

ト引き立てうとする。三田平、色ばるを無理に引き立て抛り出す。三田平、腰の印籠より薬を出し呑む。

錦木　アレマア悠長な。何やらねぶつて居るわいなア。

甚五　エ、、面倒な、

ト捕へにかゝる。三田平、キヤツと血を吐き苦しむ。

錦木　ヤア、アレ、三田平が血を吐いたわいなア。

甚五　誠に此奴、癲癇病みか。

ト帯刀、ツカ／＼と行て、三田平が顔を引き上げ

帯刀　惣身の熱氣、火鐵の如く、眼を吊り、紫色になりたるは、正しく毒藥。

甚五　エ、。

帯刀　コリヤ三田平、おのりやなぜ死ぬる。

三田　これが生きて居られませうか。

錦木　ヤア、三田平、其方は物を云ふか。

三田　ナニ、物を云ふ。

甚五　それ／＼、物を云ふぞよ。

三田　ほんに滿足に物云ふワ。

帯刀　そちや言舌爽かになつたな。

三田　どうしてわたしは、物を云ひまするぞ。
帯刀　心は五臓の司。舌は心の臓に續く。その五臓を毒にて引裂き、生血を吐いたれば、言舌はよく廻る筈。併しもう其方の命はないぞよ。
茜五　下郎ながら、我が國の爲に命を捨てる。
錦木　其方はあやかり者ぢや。出かしやつた〳〵。
茜五　して、その宛名は何と云ふ。
三田　稲葉幸藏さまへ、蝦夷の臣津の井より。
帯刀　すりや、稲葉幸藏と云ふ盗賊に寶を盗ませ、叛逆を企てたは、蝦夷の臣津の井。オヽ、出かした〳〵、愛い奴。よく云うたな。コリヤ、其方が忠義は立つたぞよ。
三田　エヽ、忝ない、旦那のお詞。夜前好い所へ參りかゝり、旦那の仰せ、勝鬨さまと、其處よ爰よと尋ね廻る、所は瀬田の萱原傳ひ。目ざすも知らぬ眞の闇。黒白わからぬ暗まぎれ、透かせば叢に彼の曲者。サアしてやつたと組みつけば、彼奴もしれ者振り拂ひ。逃ぐるを透かさずぼッかける。手先に密書この印籠。なんでも手がかり後日の證據と、引き破つたは敵の片袖。片輪の端に敵の宛名を聞き取つたは、天晴れ手柄と心には思へど、云はせぬどん腹の蟲めを毒ででんぐり返し、今の大事を云うたれば、もうこの世に思ひ置く事はない。旦那樣、御機嫌直され、未來までもお使ひなされて下さりませ。御兩所樣、お執成し頼み上げます。

ト泣き苦しむ。

帯刀　コリヤ、苦しくとも末期の門出に、申し聞かさう。氣を確かに持つて、よく聞けよ。

ト懐中より連判狀を出し

見えるか。當時佞人に組みしたる一家中。某一人忠臣の與力を集め、寶を詮議し、敵を討つて、今の世繼ぎを退け、若樣の詮議。この若殿にこそ仔細あれども、今は云はぬ。草葉の蔭から得と見せい。向後は先君の御取立て、身共が連判の一筆に、血判は三田平。

ト耳の側にて云ふ。三田平喜ぶ。帯刀、刀を抜き、三田平に血判さす。

三田　アヽ、有り難い。未來の土産、おりや侍ひになつた。御兩人とも、喜んで下さりませ。アヽ、忝ない。嬉しや嬉しや。

トいろ〳〵苦しみ死ぬ。茜の方窺ふ。

茜五　女房ども。
錦木　アヽ、いとしや〳〵。

ト皆々、萩の方と顔見合せ、萩の方、障子ぴつしやり。
帯刀、死骸を片付けいと云ふこなし。兩人、死骸を片
附ける。

申し、今のは。

帯刀　シイ……大殿を殺したる詮議は裏の裏。又その裏を
掻かねばならぬ。

甚五　帯刀さま。

錦木　何卒我れ／＼には

甚五　永のお暇。

帯刀　暇を願ふは親の敵、舅の仇が討ちたいか。

二人　如何にも。

帯刀　預かりのおろの鏡は取返したか。

二人　エヽ。

帯刀　帯刀が計略の時節を待ちやれ。

甚五　すりや、親の敵も。

帯刀　私しには討たれまい。

錦木　討たれまいとは。

帯刀　敵は御鏡の盗賊、國を望みと云ふしほに依れば天下
の科人。

二人　すりや、我れ／＼が手には。

帯刀　叶はぬ事ぢや。

ト兩人、刺し違はうとする。

犬死するか。

帯刀　敵は討たれず

甚五　連判へは加はらず

帯刀　功を立てい。

二人　エヽ。

帯刀　一つの功さへ立てたらば、討たしてやるまいもので
もない。

二人　して、その功とはな。

帯刀　その功は。

ト老いせぬやと「猩々」の謠になり、帯刀、兩人に囁
く。ハッと兩人、橋がゝりへ入る。帯刀、奥へ行かう
とする。萩の方、長枕持ち出て立ちふさがる。酒機嫌
のこなし。

萩の　御酒と聞く。

ト御酒と聞くと中より帯刀、そろ／＼後へ寄る。萩の
方、舞臺へ來る。

帯刀　萩の方さま、御酒機嫌でござるな。

萩の　帯刀、其方はわしを口説き落さうとて、否と云へば

首にして、大藏さまへ渡す筈ぢやないか。
帶刀　御自分樣には又、口說かれる御心底か。
萩の　其方は又、わしを首にする心底か。
帶刀　そりや御返事次第。
萩の　帶刀、返事してたも。
帶刀　なんの返事を。
萩の　惚れた。
帶刀　なんと。
萩の　どうも斯うもならぬ。いとしいわいなう。
ト取りつくを振り切り、奧へ行かうとする。
待ちや。人に大事の事を云はして置いて。
帶刀　コレ、やう／＼昨日、お果てなされた大殿樣。
萩の　昨日別れたも、後家緣づきばかりで死んだも、後家
と云ふ字に二つはない。
帶刀　こなたは醉ひ狂ひか。
萩の　醉うた。素面で此やうな事が云はれるものか。帶刀、
情ぢや、慈悲ぢや。四十前の惚れかゝつては、どうもた
るものぢやないわいの。
ト抱きつくを振り放し、胸ぐらを捕へ
帶刀　長々と云ふには及ばぬ。そつとした家中の娘、大殿
のお手がかかつて、不相應な活計。その御高恩を振り捨
てて、四足同然の振舞ひ。見下げ果てたと云はうか。侍
でない、家來でない。重ねては手は見せぬ。殿樣への追
善、眞二ツぢやぞ。不所存者め。
ト突き放す時、萩の方、帶刀が懷の連判狀の端を持つ
てこける。これはと驚ろく。萩の方、その上で指をポン
と切り、チッとなる。連判を讀む思ひ入れあつて
萩の　この男に惚れたに依つて、心中に指切つたぞや。
帶刀　アノ、この男に惚れたに依つて。
萩の　近頃押しつけがましいが。
帶刀　夫の仇が報いたさ。
萩の　氣には入るまいけれど
帶刀　肌を合はして
萩の　しつぽりと
帶刀　叶へて進ぜう。
萩の　必らず違ひは。
帶刀　刀にかけて。
萩の　エ、、忝ない。
呼び　御上使の御入り。
ト兩人キッとなる。奧より外記、丹左衞門、彈正、隱

下出て、萩の方に裲襠着せる。出端になり、向うより大藏、矢襖にて圍ひ、勘解由、濟まぬ體。主膳之助、長上下にて下馬札を持ち出る。

侍ひ　動くまいぞ。

皆々　これは。

主膳　家中の者、騷ぐな。嚴命なればびくともさせぬ。板倉主膳之助、上使の趣き、申し聞かさう。家來、引け、

侍ひ　ハツ。

ト控へる。主膳之助、上座へ通る。勘解由、始終俯向き居る。

萩の　さては板倉主膳之助さまでござりまするか。私しは佐々木大領、目をかけし萩と申す者でござりまする。今日家督定めの御上使にお立ちなされ、出迎ひましたが、大藏、何とやら合點の參りませぬやうな。憚りながら一通り、承りたう存じます。

主膳　その短刀持て。

侍ひ　ハツ。

ト侍ひ、三方に腹切り刀載せ、大藏が前に置く。

帶刀　イヤ／＼、恐れながら、何ともその意を得ませぬ。正しく大藏切腹の科。何卒一家中の者へ、あらまし仰せ下さりませうならば

皆々　有り難う存じまする。

主膳　佐々木大領事は、代々東山どのの思し召し深く、武功の家筋。然るところ京都在番に、諸大名相詰むれども、大領こと所勞と僞はり出仕なく、剩さへ國には萩と云ふ嬖におくらせ、その身は東武吉原の廓へ通ひ、高尾とやらん傾城を請け出し、當國へ連れ、惰弱なる身持ち。とくと上聞に達し、板倉主膳之助、檢使に向うた。サア、尋常に切腹召され。

大藏　イヤモ、先刻も申す通り、廓通ひも放埒も、皆六角之助。拙者はやうやく昨日から、若殿になりまして、科のありやうはござらん。

主膳　科がある。

大藏　科があるとは。

主膳　東山どのよりお預けなされし二つの寶。二つ引き龍の旗、千鳥の香爐も、紛失してあらうがな。

皆々　エヽ。

帶刀　ナニ、その事が先達て。

主膳　天知る地知る。東山どのが斯程の儀御存じなくて、日の本の政道が糺されうか。

勘解　ハア。
　ト俯向く。
大藏　そんなら寶は紛失したか。
萩の　葉を分けて詮議いたし居りまする。申し譯もない仕儀でござりまする。
主膳　その上、內侍所の形代、大內よりお望みなさるる、おろの御鏡も、盜賊に奪はれ、佐々木大領は、討たれたであらうがな。
帶刀　サア、それは、
主膳　重々の科はこの高札。當所一の宮へ、夜前勅使お成りのところ、注進あつて露顯いたした。表は下馬札、中を繰り拔き入れ置きしこの人形。東山の大將義輝公、絕命を祈る者なり、人形に釘を打ち、御大將を調伏するは謀叛の兆。科人ではあるまいか。
大藏　全くその儀は。
主膳　存ぜぬと云ふ證據があるか。
皆々　サア、それは。
大藏　イヤ、拙者は、やうやく昨日より跡目に座り、委細の事は何にも存じませぬ。お咎めは佐々木大領。
主膳　その大領は、この世に居るか。

大藏　サア、それでも六角之助が放埒を、
主膳　六角之助は跡目でない。
大藏　でも、おりや何にも知らんもの。
主膳　家の跡目を勅使に願ひ、相濟む上は大領、家國の主へ切腹仰せつけらるゝ。
大藏　おりやと云うて、これは又
主膳　國の守になつたでないか。
大藏　サア、それは。
主膳　家老ども、云ひ譯あるか。
皆々　サア〳〵〳〵。
主膳　どうぢや。
皆々　ハツ。
　ト皆々俯向く。大藏、うろ〳〵して
大藏　親仁どの、こりやどうぢや。やうやく一昨日廻り逢うて、こなたの家督ばかり讓ればよいもの、大層な慾ふつて、こんな目に遭はして、今となつて、これがどうなる。サア、云ひ譯して下され。云ひ譯さつしやれ。これたばかり好い者になつて、俯向いて居て濟むか。おれもあんまり巧過ぎたと思うた。申し、御上使へ申し上げます。私しは佐々木大領の悴ぢやござりませぬ。親にはあれ

なる
主膳　才原勘解由が情を以て、國の跡目とせし事、よく存して居る。サ、何者にもせよ、國の守になつた者。切腹さすれば寶紛失の申し譯は立つ。その上で家老ども、詮議いたして差上げい。こりや公の御政道。切腹さへすりや、暫らく御容赦下さるゝ。調伏の咎めは上使の見ぬ振り。御前よろしく申してくれう。
大藏　すりや、どうあつても、切腹せにやなりませぬか。
主膳　一國を納むる切腹。若年なれども天晴れ〳〵。
　ト大藏、投げ出する。
隙取ると、掻き首にするぞ。
大藏　ムウ。
　ト大藏こなし。帶刀、勘解由の側へ行き
帶刀　才原勘解由どの、御念願の通り、御子息切腹に極まり、さぞ御滿足でござらう。
勘解　御推量下さりませ。
萩の　そんなら初めから、其の心の切腹か。
帶刀　寶紛失より、東山どのお咎めの來るは兼ねての覺悟、それゆゑ若殿の放埒を幸ひ、追放して、こなたの子息に跡目をさせ、腹切らして詮議の日延べ。何もかも納まつた上、再び殿を尋ね出し、お國を治める忠臣を、疑うたは一生の誤まり。帶刀、兩手を突いてお詫び申す。草葉の蔭より大殿にも、さぞ御滿悦に思し召しませう。
勘解　其許を始め萩の方にも、佞姦邪智とさぞお憎しみなさらう。萬事申すに及ばず、御上使への御願ひ。お聞き屆けあつての切腹。咎めは天晴れ果報者でござります。
　ト大藏、この臺詞の切れに、キッと仰のき、一家中を見て、思ひ入れして座を占め、上を刎ね、切腹の用意し、主膳之助へ禮をして、三方を戴き、腹へ突ッ込む。皆々思ひ入れあり。
帶刀　コレ〳〵若殿樣、この世に僅か五十年、未來を助かるは經陀羅尼より、佐々木一家を取り立てる、この大功。後の名を上げ、忠孝二つに叶ふ切腹。御介錯が參つたか。
主膳　ホウ、天晴れ佐々木家の跡目、立派なる切腹。出かされた。
大藏　埋れ木の花咲く事もなかりしに、身の成り果は哀れなりけり。昔の人の切腹も、花咲かぬ身を恨みしは、尤も〳〵。
　トきり〳〵引き廻す。
帶刀　勘解由どのゝお心根、察し入りました。最早一生の

別れ。其許の手で御介錯なされたらば、若殿にも未來の

……これは御上使へ、我れ〲がお願ひでござります。

主膳 苦しうない。勝手に致せ。

勘解 お志し、辭退は却つて。

帶刀 御上使の御赦免でござる。

勘解 ハツ〲。

ト上を脱ぎかけ、大藏が後へ廻り、刀拔く。

若殿、覺悟はよくござりまするか。南無阿彌陀佛。

大藏 介錯暫らく。

帶刀 仰せ置かるゝ事でもござるか。

大藏 お慈悲の介錯、とてもの事に、親人に內分の暇乞ひが致したい。諸士の中では申し憎い。取亂しまするも本意ならず。暫らくお除け下さりませうならば、有り難う存じまする。

萩の 泣かぬ顏する親も親。惡に強さは善にも強い。最期の有樣、心を推量なされまして、何卒

帶刀 暫らく御猶豫下さりませうならば

二人 有り難うござります。

ト主膳之助、切腹をとくと見屆け

主膳 臟腑を破り引き廻したれば、早最期の間はない。云ひ殘したい事もあらう。門前にて相待ち居る。首拔を持參いたしてよからう。

勘解 ハツ、有り難うござりまする。

帶刀 諸家中の銘々、皆立去つて御上使の守護。爰へは一人も叶はぬぞ。

皆々 畏まつてござります。

萩の 未來の迷ひは總陀羅尼。

帶刀 御上使の御立ち、

皆々 ハア、。

ト合ひ方になり、主膳之助、つか〲と、帶刀、諸士を連れ、向うへ入る。萩の方、小姓勝丸連れ入る。勘解由、見送り、刀を納め

勘解 伜、よく死んだ。其方が切腹するばかりに、お家も納まる。親が忠義も立つたぞよ。

ト大藏、思ひ入れあつて

大藏 親人、有やうに云はつしやれ。

勘解 身共に云へとは。

大藏 隱さつしやるな。身共はこなたの伜と云ふは僞はり。大藏殿の胤でござらうがの。

勘解 待て。そちや血迷うて何を云ふ。

大藏　イヽヤ、あらがはれな。こなたの企みで人知れず、頸の上から取り替へた、甚吾の倅と云ふは。

勘解　コリヤ。

　トこれより兩人顏を合ひ互に詰りになり、勘解由、あたりに氣を附け、燭臺の火を見すゑら思ひ入れあつて

そもや、その事を知つて居るか。

大藏　云ふまいとは思へども、今死ぬるこの身、隔てるこなたの心を恨み、云ひますぞや。某誕生の時、こなたのお身の御内室も男子誕生。幸ひに入れ替へ置き、大子の身共は五歳まで育てられたれども後藏に隠れ、行くへなく出民に消はし、後で消したるを、母はそれを苦に病み、果て行かれたとある。身共を預りし藥次某、人となつて御やう／＼と、仔細を詳しく物語り。人情の悲しさ、六角の大判と讒されるを、聞くにつけても、アヽ羨やましや、大名の子と育つても、我れは斯う云ふ淺ましき浪人。その頭にして、六角の嫡は、佐々木の若殿と持てはやされて、榮耀榮華。おのれやれ、大名にはならずとも、所行よる武家でも奉公して、出世の花を開かんものと、思ふ所に手隙なより、先年くれし子を尋ねる。有り體に云ひ、對面いたす間もなく、家の家督と繼目の願ひ。後先考へずに家國を押領すれば、親人さては六角之助が政時、東山殿のよりのお咎めを思ひ、實もこなたが奪ひ取り、六角之助を追ひ出し、某に家督を繼がし、實紛失の科に寄せ、何らかも身共に讓り、腹切らしたその後で、紛失の實は六角之助が奪ひ逃したと申し上げて、上々の大名に仕立てる、こなたの企みであらうがの。

勘解　ハテ、詳しう委細を知つたな。それ知つた其方が、最前の時、何ゆゑ惡者へ子の事を隱し腹切つた。仔細はどうぢや。

大藏　こりや、養父への孝行。

勘解　養父への孝行とは。

大藏　聞えぬぞや、親人。氏より育ちと云へども、心は金鐵、後の親を元とする、この大藏。こなたのやうな近江一國の主を望む性根でない。この國を根城として、天が下を掌握する下企み。

　ト勘解由、キツとなる。

なんと肝にこたへやうがの。胤は佐々木にもせよ、五歳まで育てられし大恩、殊に莫大の金子を附け、養子に遣はされたれば、その餘情にて養父も養ふ次第なり、劍術武藝も皆こなたより與へられたも同然。養父の恩の元は

と云へば、矢張りこなたの大恩。なぜ斯う〳〵と打明けて、某も謀叛の一味の數に入れて下されぬか。おりやこなたの胤でなうても、眞實の親ぢやと思うて居る。こなたの爲に腹切つて死にます。未練な心を下げやしませぬ。なぜ眞實の子にはして下されぬ。親人、エヽ、胴慾ぢや。胴慾でござるわいの。

ト泣く。

勘解　如何にも。實も身が奪ひ取つた。其方の志しに愛でて、今こそ親子の因みを見せう。

ト連判狀を出し見せる。

大藏　これは。

トこの間より主膳之助、帶刀、甚五兵衞、皆々出かけ、ひそ〳〵思ひ入れ。

勘解　未來の土產に血判せい。

ト大藏、いろ〳〵思ひ入れあつて、連判狀を開き讀む。

大藏　きくるみ大王の末孫、ういてくんを守り立て、日の本掌握いたすの間、一味連判の者、大望成就の後、その功に依つて國郡宛て行ふ。一味連判神明を誓ひに立てるものなり。蝦夷の臣下、常陸坊末流、津の非ちんくわん判。

勘解　ゆうべつしべつとまくとうふひ。蝦夷八道は身共が幕下。

大藏　東山どのを調伏せしも

勘解　眼連坊に申しつけ我が計らひ。

大藏　おろの御旗、二つ引き龍の旗は。

勘解　佐々木大領を討つて捨て、二つ引き龍の旗は、コレ爰に。

ト旗を出し、見せる。大藏、旗を取つて

大藏　オヽ、お出かしなされた、津の非どの。

勘解　末期の血判、早く〳〵。

大藏　エヽ、穢ない。冥途の土產、皆ござりませ。

帶刀　殘らず樣子、相知れました。

ト手燭を差出す。彈正、丹左衞門、外記、勘平、バラバラと出て取卷く。

四人　動くな。

勘解　こりや、どうぢや。

帶刀　出入りの町人、木田屋忠兵衞、天晴れの働らき。出かした出かした。

大藏　腹一つ切つたので、二つ引き龍の旗、連判狀も、お手に入りました。

帶刀　外科南部草庵、參れ。

醫者　ハハア。

ト醫者出て、直ぐに大藏が疵を見る。

帶刀　して、疵はどうぢや。

醫者　お氣遣ひなされまするな。命に別條なく、療治請合ひます。

主膳　秋塚帶刀、天晴れの計略。東山どのへ申し上げなば、御賞美の上、猶この國は萬代不易。

帶刀　エヽ、有り難い。

勘解　大藏を木田屋忠兵衛とは、

帶刀　佐々木家の系圖、千鳥の香爐、又ぞろおろの鏡、二つ引き龍の御旗も紛失。それより種々に心を附ければ、先年おのれが伜と若君を入れ替へたる事、其方が女房、末期の遺言いたせしと腰元が白狀。

大藏　又その頃より其方が、頻りに我が子を尋ぬる由。所所方々と探せども、幼少にて行くへなく、遣はしたる若殿なれば、何國にて成長なされしとも、今に於て在所も知れず。

帶刀　これ幸ひと、面體知らぬ木田屋忠兵衛を、おのれにつきつけ、年號月日を合せ、親子の對面させたのは、汝が謀叛を見出さう爲。當家の先祖佐々木定衡、奧州高館に於て、判官義經を責め討ちし、その仇を報いんと、才原勘解由と假名し、伜を取替へ、この城を根滅として、叛逆を企てんとは、蟷螂の斧、叶はぬ事〳〵。

大藏　なんと木田屋忠兵衛が、算盤の鹽梅見たか。おのれが取替へたほんの若殿は、どこに居さつしやるやら雲を閻。そこで少分ながら、吹き替への若殿。命一つ棒に振つても、大切なお國の御用しおほせるが、大通丸の私し持ち。圓と呼ばれた大商人の手並。思ひ知つたか。

主膳　無念なか。

大藏　腹が立つか。

帶刀　口惜しいか。

大藏　ほうけたか。

帶刀　奇怪ならば切腹せよ。

主膳　但し、心を改め降參するか。

皆々　サア〳〵〳〵。

主膳　なんと。

勘解　エヽ、無念、口惜しやな。無實の罪に落命ありし、主君の恨みを散ぜんと、仕込みに仕込みし我が謀計。素町人が計略に落入つたか。奇怪やなア。よし〳〵、二品は

奪ひ取るとも、迂濶に命は落さぬ。津の井が先祖常陸坊海尊より、受け續ぎし仙術、これを見よ。

ト きつと印結ぶ。どろ／＼にて兩方の窓さす。燈皆々消えて眞の闇になる。掛行燈、消える。皆々思ひ入れ。元の通りに明るくなる。

皆々 これは。

主膳 胡沙吹いて曇りもやせん陸奥の、蝦夷には見えし秋の夜の月。

甚五 すりや、叛逆人才原勘解由。

主膳 胡沙の仙術を行へば、人を惑はし姿を隱す。

帶刀 これを消さんと思ふ時は。

主膳 水に映し月影を水器に溜め、彼れが同性の生血を注ぐ時は、忽ちこの術消え失せると傳へ聞く。

ト この間に眼通坊、窺ひ寄り

眼通 板倉主膳。

ト 切つてかゝるを拂い除けると、帶刀、突き廻し、上より取つて捻り、

帶刀 ソリヤ、甚五兵衛。

甚五 合點ぢや。

ト 立廻りにて拔刀を見て

鍔はかんとう、身は義光。こりや親將監が差し料。

眼通 南無三、うぬ。

ト 立廻りあり

甚五 嬉しや、親の敵が知れた。

眼通 もう斯うなつたら合圖の鐵丸。

ト 鐵丸を井戸へ擲り込む。排け煙硝立ち、此うち向うより勇王陽、鉢巻、白木綿にて腹を巻き、大筒を携へ、木蔭へ狙ひ居て

勇王 今が最期ぢや。

眼通 こりや、どうぢや。

ト 橋がゝりより萩の方、錦木、唐人笠を持ち出る。

萩の ゆかぬ首尾ぢや。手下の下官に紛れ込み

錦木 筒先を詰めて火蓋を切れば、その身の寂滅。

帶刀 おのれらが企みを覺り、萩の方、錦木を先へ廻して置きましたわい。

大蔵 なんと、ようしたものか。

眼通 こりや、なんの事ぢや。

勇王 もう、やたけたぢや。

甚五 親の仇。

錦木 夫の敵。

正人　思ひ知つたか。
　ト願鐵坊を殺す。
大藏　オヽ、出來ました〳〵。
主膳　二つ引き龍の旗、手に入りし功に依つて、大領が妾萩の方、東山どのより御追放。
萩の　エヽ。
主膳　勝手に國々を立廻いて、大領どのゝ敵討ち。
萩の　エヽ、。
錦木　敵討ちの御供は我れ〳〵。
大藏　道中の路用は、この忠兵衞へ。
　ト此うち銀兵衞、出て、
銀兵　萩の方。
　ト切つてかゝるを萩の方、刀をもぎ取り、銀兵衞が首ポンと切る。
帶刀　天晴れの手柄。
　ト大藏これを見て恟り。
主膳　お暇申す。
帶刀　御上使御苦勞。
　ト大藏をヂツと押へる。
主膳　ハテ、祝着千萬に
　ト扇子にて刀の柄を打つ。
存じまする。
　ト皆々辭儀する。
幕引くと主膳之助、向うへ悠々と入る。外記、彈正、幕勘平、丹左衞門、供して入るなり。

四幕目　三井寺の場

役名——平大盡實ハ名古屋十三郎。傾城、薄雲實ハ高尾太夫。傾城、遠山。同、葛城。仲居、おまん。舞鶴屋傳三實ハ雷雲右衞門。針金文七。豆腐屋お峯。津輕三平。

造り物、平舞臺、橋がゝり高砂屋、臆病口、葭簀圍ひ、茶見世の體。障子屋體よろしくあり、よき所に床几直しあり、幕の内より仕出し大勢、針金文七交り、床几に腰かけ、煙草のんで居る。この見得、すがゝきにて幕開く。

仕一　なんと四郎兵衞、三十三年目に、一度づゝのこの三

井寺のお開帳、賑やかな事ぢやないかいの。
仕二　さればいの。近年は觀音樣が、きつう跋扈なさるゝので、アレ見やしやれ、手品やら機關やら、夥しい金の落ちる事ぢやないかいの。
文七　オヽ、その手品で思ひ出した。この間の早咲京之助、イヤモウ、けうとい輕業ぢや。近いうちに大坂へ下つて、難波新地で初日が出ると云ふ事。
仕三　さう云ふ事なら、おれも大坂へ買ひ物に下つて、次手に見て來ませうわいの。
仕二　さうから云ふうち日がたける。もう皆下向せうぢやあるまいか。
仕一　さうせう〳〵。サア皆、ござれ〳〵。
トすがきになり、皆々橋かゝりへ入る。文七、後に殘り、懷より紙入れを出し
文七　ても、うまい奴等ぢや。話しに聞き入つて居る間に、紙入れを殘らず引いてこました。又よい鳥がかゝるまで、さらば一服いたさうかい。
ト床几に腰かける。また鳴り物になり、向うより豆腐屋お琴、好みの形にて出て、文七を見て
こと　オヽ、文七か。
文七　お内儀か。早う出かけさつたの。
こと　サイナウ、わしもちつと、思ひ付いた事があるに依つて。
文七　ハヽア、何ぞ新らしい趣向でごんすか。
こと　サア、その趣向といふわの。
ト囁く。
文七　こいつはゑらいわいの。時に又、わしが今朝からの仕事は、コレ。
ト最前の紙入れ、風呂敷包みより、振り袖の着物を出し、
なんと、ゑらうごんしよが。
こと　イヤモ、けうといものぢやわいの。
文七　ちつと褒めてもらはにやならぬて。
トばた〳〵にて、薄雲、向うより居流し、しどけなき形にて出で、お寺に行き留り
薄雲　心の急く者でござります。お免されませ〳〵。
ト行かうとする。
こと　コレ〳〵、其方は娘ぢやないかいの。
薄雲　オヽ、さう云はしやんすは嬶さん、好い所に、よう居て下さんしたなア。

こと　これはマア思ひがけもない。人も連れずにたつた一人、けたゝましい。どうしたのでござんすぞいなア。

薄雲　サイナア、聞いて下さんせい。殿様のお庇で、一旦廓の苦患は遁がれたれども、姉様が知つて居やさんす通り、殿様ゆゑに嶋原へ、薄雲と名を變へ、二度の勤め。あの雲右衛門といふ侍ひ客が、抱かれて寝いと嫌らしい事の有り儘。振つて〳〵振りつけたりや、この頃は身請けの相談。廓にあるにもあられん悲しさ。仲居衆を頼んで、どうやら斯うやら、脱けて出て、この體裁。コレ姉様、どうぞ好い思案を出して下さんせいなア。

こと　成る程、さう云ふ事なら道理々々。氣遣ひしやんな。この姉が呑み込んだ。コレ、大船に乗つたやうに思うて居やいの。

文七　お内儀があゝ云はんすからは、落ついて居たがよいわいの。

ト此うち亭主才兵衛、親方にて出て聞いて居る。

才兵　イヤ、滅多には落つかさんわい。コリヤ薄雲、おのれマア、太い奴ぢやぞよ。ようも〳〵手附けを取らして置いて、廓を脱けて出居つたな。連れて去んで雲右衛門さまに手渡しせねば、おれが立たん。サア、うせい。

ト引き立てうとする。お琴留めて

こと　親方さん、待つて下さんせ。

才兵　ムウ。こなたは薄雲の姉、お琴どん。さてはこなたも共謀で、やらしたのぢやの〳〵。

文七　コレ親方、あんまりツカ〳〵もの云はしやんな。そんな悪い臺詞するやうな、姉御ぢやないわいの。

才兵　云ふなやい〳〵。共謀でない者が、なんで又この姉が呑み込んだと云うた。四も五もない。連れて去ぬ。うせい。

ト引立てようとする。

こと　身請けしませう。

才兵　ヤ。

こと　妹はわしが身請けしよする。

才兵　こりや面白い。雲右衛門さまへ遣らうと云ふ身の代は、七百兩なれど、所詮調達出來はすまい。おれも同じくば、あれが好いた方へ遣りたい。ハテ、身請けの立つ金なら、いつそ元金の三百兩。こりやおれが料簡したが、後とも云はず、サア、今受取らうかい。

こと　成る程、尤もな御料簡。その手附け、受取つて下さんせ。

ト財布を投げ出す。才兵衞、取り上げ見て

才兵　ムウ。こりやたつた百兩。

こと　サア、後金貳百兩は、どうぞ暮合ひまでに拵らへませう程に、それまで待つて下さんせ。

才兵　如何にも、その程の事は待つてやる。その代りに、暮れ六ツがゴンと鳴ると、直ぐに金受取りに來るぞや。

こと　念に及ばん。合點でござんす。

才兵　姉、さらば。

ト橋がゝりへ入る。

薄雲　姉さん、忝なうござんす。

ト拜む。

こと　姉妹の事ぢやもの、世話せいでなんとせう。コレ文七、其方はこの子を連れて、あの掛け茶屋へ暫しが間。

文七　酒でも呑んで待つて居やんしよ。

薄雲　そんなら姉さん、お前も一緒に。

こと　マア、先へ行て待つて居や。

文七　薄雲さん、ごんせ。

ト唄になり、文七、薄雲連れ、葭簀の内へ入る。あと合ひ方。お琴、こなしありて

こと　若殿樣と云ひ交はした妹高尾、お情ゆゑに請け出され、廓の苦患を助かつて、ヤレ嬉しやと思う間もなう、お家の騷動、若殿樣も親君も、淚々のお身の上。夫に代りてお二人をお匿まひ申しても、常から心よからぬ父さんの、目顏を忍ぶ心使ひ。殊に夫は主命の身の上。何を云ふにも女の手一つ。金の才覺詮方盡きて、義理ある大事の妹なれど、不便ながらも二度の勤め。名も薄雲と改めて、一日二日と暮すうち、金が要る／＼と、父さんはせがましやんす。女の際に恐ろしい、盜み取りもお主の爲。難儀の上に重なる難儀、降つて湧いたる妹が身の上。暮るゝと云うても僅かの間。

トいろ／＼思案のこなしありて

大枚の貳百兩、どうしたものであらうなア。

トまた思案して、

一寸延びれば尋とやら。アヽ、どうぞならうぞ。

ト唄になり、お琴、よろしくこなしありて入る。鳴り物入りの合ひ方にて、向うより葛城、遠山。おまん、仲居の形。禿連れ、舞鶴屋傳三、幇間にて出て、花道の好き所に並び

禿　申し太夫さん、もう爰が三井寺さんでござんすかえ。

傳三　さうぢや〳〵。最前からぶらぶら歩いたので、ほつとりと草臥れた。
まん　オヽ、仰山。それ程の道でもないに、なんぢやぞいなア。アレ、あの向うの葭簾囲ひが、わたしが出店。サアサア、早うお出でなされませ。
葛城　そんなら皆様。
遠山　サア、ござんせいなア。
　ト また鳴り物になり、本舞臺へ並よく並び
まん　申し、太夫さん方、廓を離れた隠居がてらの私しが出店、好い所でござりませうかな。
葛城　ほんに、廓と違うて、野邊の景色を見晴らし、面白い所ぢやないかいなア。遠山さん。
遠山　サイナア。もの侘びた向うの一つ家。ほんにけうといものぢやわいなア。
傳三　一つ家にもの侘びたとは、遠山さまは茶の氣があると見えますわいの。どうでお床の一儀も、大方茶日がお好きでがなござりませう。
葛城　なにを。阿房ばかり云はずと、早う平さまを迎うてござんせんかいなア。
傳三　オヽ、さうぢや。忘れた。ドレ、お迎ひに行かんとてづか〳〵と走り出で。
　ト 花道角へ行く。
オヽ、向うへ見えるは、平さまぢや。オヽ、イ〳〵。
大盡　オヽ、イ〳〵。
　ト 在鄕唄になり、向うより大盡、衣裳羽織にて出る。
傳三　アヽ、お大盡さま、遅い〳〵。君様方のお待ち兼ね。マア〳〵、これへと請じける。
大盡　マア〳〵、待ちやれ〳〵。上方は襟付きを見る所ぢやと聞いて置いた。イザ、襟付きを拵らへてくれよ。
傳三　心得ましてござります。
　ト 大盡の襟を傳三、いろ〳〵つくる。
大盡　ゑいか〳〵。
傳三　通襟つけてござりまする。
　ト 大盡、襟を損はぬやうに、つくりつけた體にて、やう〳〵と眞中へ直る。
遠山　平さん、今ござんしたか。
大盡　アイ。
葛城　待ち兼ねて居たわいなア。
まん　申し、平さん、大盡と云ふものは、其やうに襟を大切にせいでもよいわいなア。

葛城　もう免して上げやんせう。こちら向かんせいなア。
大盡　そんなら皆が、襟つきを見申されたか。
傳三　もう皆、御覽じましてござりまする。
大盡　ア、嬉しや。首の骨一本助かつた。
まん　イヤア、平さま、この傳三さんへは、せつ〳〵花をお遣りなさるげな。どうぞ私しにも、ちつとおくれなされませ。
大盡　花と云ふ物遣る事は、よく知つて居る。皆並べ〳〵。
傳三　ソリヤ、花を下さるゝぞ。
まん　エヽ、忝なうござります。
ト大盡、ひんれぢ紙を、兩方の袂より二つ出して兩人の前に置く。
大盡　輕少ながら、ちよいと花ぢや。
二人　エヽ、忝なうござります。
ト戴き、
傳三　貳朱か一分か。先づ〳〵生體拜見いたさう。
ト開けて見て
ヤア、こりや、ぢやうせん玉ぢや。
まん　ほんにさうぢや。こりやマア、どうでござりまするわいなア。

大盡　なんと、うまい花であらうがな。
傳三　イエ、花と云ふ物は、斯うした物ぢやござりません。
大盡　ハテ、なんでも物を遣るが花ではないか。
まん　左樣ぢやござりません。あなたの持ち合してござるそのきんを花に、おくれなされませいなア。
と大盡、彼ぐら押へ、
大盡　無體千萬、これを遣つては命がない。
まん　ハテ、そのきんではござりません。なんでも物の買はれる、世界の寶の金が欲しいのでござります。
大盡　エヽ、待て〳〵。
ト胴亂より小判を出し
わいらの金と云ふは、この事か
二人　ハイ、その金さまの事でござります、
大盡　これを遣る事は知つて居るが、はづみがなければ、どうやら遣りにくい。
遠山　イカサマ、拍子拔けして、お前も遣り憎うござんせう。
葛城　いとしほなげに、お前もお草臥れでござんせうなア。奧へござんせ。
大盡　そんなら奧へ參らうか。

ト行かうとする。兩人とめて

傳三　アヽ、奥へお出でなさるゝはづみに、どうぞその花を。

大盡　奥へ行くに、何にもはづみはないが。

まん　そのない所を、はづみにして、どうぞ下さりませ。

大盡　よいワ。それ程に云ふ事なら、遣らぬも不便。併しながら、この小判は拾兩。大盡とも云はるゝ者が、五兩位の端下金を遣り惜い。遣らうせう。これはとんと斯う堅めて置いて、誰れなおれなど遣らうわいの。

皆々　こりや、ようござんせうわいなア。

大盡　サア小判十兩ぢや。サア、今ぢやぞ。この小判拾兩、誰れに。

二人　おれに。

大盡　ヘかこ。

ト小判を持ち逃げて入る。傾城、禿皆々附いて入る。

二人　そりや手が惡うござりまする。

ト追ひかけて入る。

ト唄になり、津櫓三平、野袴にて出る。後よりお琴走り出て、三平に行き當り、目を廻す。

三平　南無三、行き當つて目を眩したさうな。コリヤヤイ、こりや名を知らねば呼び生けやうにも。

ト云ひ／＼印籠より氣つけを出し、いろ／＼あり

コリヤ、行き當つた女子やい。

トいろ／＼介抱する。お琴、氣がつく。

氣が附いたか／＼。

トお琴。三平を見て

こと　お侍ひ樣、わたしやどうぞ致しましたかえ。

三平　身に行き當つて目を廻した。てもさても、難儀をかけた事ではある。イヤモ、あつたら顏を汚させた事ぢや。

こと　ハア、そりやマア、いかいお世話をかけましてござりまする。とつと私しが氣の急くまゝに、後先も見ずにお前に行き當つて、捨て置いて行かしやんしたら、定めて死ぬるでござんせう。シタガ、いつそ今の時、氣が附かずに死んだらようござんしたもの。ト泣き泣き氣が附いて、アヽ、心元ない事でござんす。

三平　ムウ。お身は何ぞ身の上に、氣遣ひな事があるか。

こと　お近附きでもないあなたに、知らぬ長物語りでござんすが、私しにはお年寄られた母樣がござりまする。わたしが兄樣は、身の上稼ぎの爲、人手代に雇はれて參られましてござりまする。私しには夫もござります。母樣

はこの近在に獨り居られまする。この江戸の兄様が、ほんそ子でござりまして、江戸へ參られまするや否や、案じ煩らひにふら〱煩らうて、お年の上、人蔘がなければ、藥が盛られぬげにござります。私しは女子の事なり、江戸へその様子を云うて遣りましたれば、江戸の兄様も傷寒にて、九死一生ぢやと朋輩衆からの返事が、この間來てござんす。母様の煩ひの上、病氣と聞いて、この間よりわたしが煩はぬばかりに案じまするところに、今日江戸からの早打ちが來ましてござんす。私しは物を書く事がならず、懇ろな所へ行て、この狀を讀んでもらはうと、氣は急きまする。あなたに行き當り、目がまうたさうにござんす。ひよつとこの狀の中に、兄様が死なしやんした様子が書いてあつたら、母様の命もござんすまい。さうした時には、わたしや何と致しませうと、狀を讀まぬ先から、案じ過しが

　ト云ひ〱泣く。

三平　ハテ、それは難儀な身の上ぢやなア。兎角浮世に死ぬと云ふは定まつた事なれども、今始めてのやうに思ふものぢや。身も年寄られた母が一人ある。身につまされて、その母の心がいとしい。

こと　御推量なされて下さりませ。兄様がひよつとした事があると、この狀に書いてあるを母様に見せたら、直ぐに臨終でござんす。ちよつとこの狀を讀んで聞かして下されませ。ハテ、死なさんしたと書いてあつたら、是非がない。母様に隱して、一日なりとも、養生さしたうござんす。この狀どうぞお讀みなされて下さりませ。

三平　イカサマ、その様子では、大病人の側で危ない狀は讀まれまい。ドレ、身共が讀んでやらう。

こと　それは忝なうござります。

　ト文箱を出す。三平、取つて封を切る。

こと　どう書いてござります。

三平　ハテせわしない。サア、聞きやれ。

　ト讀む。

わざと四日飛脚を以て申し入れ候ふ、先十五日の夜、同じく十九日に届き申し候ふところ、私し大傷寒にて、朋輩衆方より、返事申され候ふ由、やうやく昨日心づき讀み入り候ふ……マア、この文體では息災な。

こと　ヤレ、嬉しや〱。

三平　母様の病氣驚ろき入り候ふ、殊に人參を用ひられ候ふ事、女子の身の其許、心遣ひ察し入り候ふ、我れらに

成り侍り、この上の看病頼み入り候ふ、手前病氣になくば早速上り、せめて看病いたしたく候へども、病氣の身の上、百里隔たりしこそ是非なく候ふ、併し此方の病氣、次第に快氣と存じ候ふ間、母様には息災のやうに御申し置き、萬事看病偏へに賴み入り候ふ、猶又御申し越し下され候ふゆゑ、金子貳拾兩遣はし申し候ふ、御受取り下さるべく候ふ、又々後より仕合せ次第、金子上し申すべく候ふ、母へもよろしく御申し上げ下され、未だ病中ゆゑ、あら／＼かしく、三月十八日、わたや新助、わたやお雪さま。

こと　ヤレ／＼、嬉しや／＼。そんなら氣色は次第にようござんすなァ。

三平　この分なれば、江戸の方に氣遣ひはない。兎角阿母に其方、隨分孝行しやれ。

こと　日頃三井寺の觀音さまへ參るお蔭で、息災な便りを聞きまして、忝ない。早くこの事を、母様に云うて喜ばしませう。

三平　オヽ、年寄りには好い事を早う聞かしたがよい。

こと　お侍ひ様、忝なうござりまするが、申し、今のを下さりませ。

三平　ヤ。

こと　今の貳拾兩の金を下さりませ。

三平　今の貳拾兩とは。

こと　ハテ、兄様の江戸から、おこしてくれました、その貳拾兩の金を下さりませ。

三平　女、我が目通りで封を切り、狀を讀んで、直ぐに返したその文。箱の中に金は初めから無かつたぞよ。

こと　でも、貳拾兩遣る程に、受取れとなア。お前、讀んで下さりました。

三平　サア、成る程、狀には貳拾兩と書いてあれども、金は無い。

こと　それおやどうにもなりませぬ。大切な金でござんす程に、戻して下さんせ。

三平　ヤイ／＼、粗相云ふな。二腰を手挾む身共、その貳拾兩程の金を取るやうな武士とは違ふ。われが讀んでくれいと云ふゆゑ、成る程封に切つて、狀に讀んだれども、貳拾兩の金は知らぬ。

こと　イヤ、さうは云はれませぬ。貳拾兩の金を遣ると云うて來たその封を、お前が切つて、お前が狀を讀んで、貳拾兩受取つたとあるからは、ハテ、貳拾兩の金、下さ

りませ。

三平　ムウ。すりやその金を出さぬうちは、身共をどつちへもやらぬと云ふか。

こと　アイ、どつちへもやるこつちやござんせぬ。

三平　ムウノ\。

　ト懐より捕り繩を出し、繩捌きして

サア、騙りめ、腕廻せ。

こと　ア、コレ、滅相な。貳拾兩の金を騙つた上、又わたに繩をかけるのか。

三平　吐かすまい、此奴。主人よりの大切の御用仰せつけられたるゆゑ、忍びの歩行と容赦すれば、似せ筆を以て貳拾兩の騙り事。その手で行く身共でない。併しながら、うぬが詞、狀の表、その江戸表にある兄新助を吟味は遣はし、いよ/\其方が母も病氣ならば、品に依つて騙られくれう。サア、其方が宅へ案内いたせ。

こと　エ、。

三平　但し、母が病氣は僞はりか。

こと　サ、それは。

三平　似せ筆の科人、繩かけうか。

こと　サア。

三平　案内するか。

こと　サア/\/\。

三平　よもや居宅へ同道は叶ふまい。

こと　ハア。

　ト俯向く。

三平　斯う見受けるところが、なか/\騙りを渡世に致す女とも見えぬ。今コレ騙られたと云ふでもなければ、品に依り宥免いたす事もあらう。女、有やうに白狀しやれ、

こと　顯はれましたからは、なんのお包み申しませう。私しが夫は、様子あつて牢舍の身。嬉しい親の口寄せ、まだその上に、大恩を請けましたお方について、今宵夜中までに、貳百兩と云ふ金がなければ、お命にかかはる一大事。女の身の悲しさは、才覺の仕様は無し、悪い事とは知りながらこの仕儀。まだ天道様のお庇で、お情深いあなたに見顯はされましたは、わたしが仕合せ。どうぞ命ばかりは、お助けなされて下さりませ。

三平　身は斯様な詮議には來ぬ。併し、道ならぬ科人は天道に逆らひ、無法者に出逢うては、却つて命を果すものぢや。重ねてキッと嗜なんだがよい。

　ト小判三兩ほど抛りやる。

女「縁あらば重ねて逢はう。
ト唄になり、三平、向うへ入る。あと合ひ方。お琴こなしあり。
こと　コヽ、忝なうござります。アヽ、危ない事。又わしもわしぢや。あんな立派な人を釣りかけて、とつと取り持つ蔓ぢやあつた。アヽ、好い鳥が來ればよいが。
ト此うち向うより雷雲右衛門、衣裳が粗にて、ウロウロ出て
雷右　エヽ、いま／＼しい。どつちへふけり居つた知らぬ。
ト云ひ／＼行き過ぎる。
こと　申し／＼。
雷右　呼びかけたは身共が事か。
こと　アイ、なんぢややら、息急き／＼と、マア、休んで煙草でもあがれいなア。
雷右　イヤ、おらはそんな機嫌ぢやない。どこへうせた事やぢ知らぬ。
こと　お前は何處ぢやえ。
雷右　身は野田ぢや。それが何とした。
こと　わたしもその近所ぢやが、大事なか、送つて上げうかえ。

雷右　なんだ、送つてやらう。
ト お琴が顔を覗き
そりやハヤ、送る氣なれば、送られても見たいが。
こと　つんとわしや、送る氣、送る氣ぢやぞえ。
ト 懐へ手を入れる。
雷右　こりや何とするのぢや。
こと　あんまり手が冷たいに依つて。
雷右　手が冷たけりや、おれが鼻紙袋をとらへる筈か。
こと　サアそれはな。
雷右　そんな事してよからうかい。
こと　コレ料簡さしやんすな。盗みするやうな者ぢやござんせんぞえ。
雷右　證據見せうか。
こと　證據があるかえ。
雷右　こりやなんぢや。
ト上着の袖より振り袖を引き出す。
雷右　上には脇詰め、笄わげで、この下に着て居る振り袖が騙りの證據。
こと　イヽエ、こりや妹に買つたのぢやわいなア。
雷右　何を騙りめが。

ト帶引きほどく。

こと　コレ〳〵、こりやなんとさしやんすぞいなア。

雷右　ソレ見居つたか。下のも大方騙つてうせたのであらう。身共を何者ぢやと思ふ。代官所の下役、かゝる賤しき場所に、うぬがやうな騙り巾着切りの吟味に歩くのぢや。併し、女の事、命ばかりは助けてくれう。アノ大盜人めが。

ト唄になり、雷右衛門、こなしありて、着物小判を取り、戴き走り入る。あと合ひ方。

こと　なんの事ぢやぞ。よう〳〵貰うた二兩の金、着物一つしてやられた。物した物を物ぢやなア。

ト大盡と女形出る。

葛城　平さん、今のお大坂の彥八でござんすかえ。

大盡　あれが彥八、こちらが萬歲、話しはどうでも彥八ぢやぞえ。

遠山　今笑うた話しを、ろく〳〵に聞かなんだが、ありやどう云ふのでござんすえ。

大盡　ありや斯うぢや。丁度わが身達のやうに、太夫が野遊びに出て酒に醉うて、池へはまつたと思や。どうも仕やうはなし、うつら〳〵して居た所へ、馴染みの客が通りかゝつたに依つて、コレ八さま〳〵、上げて下さんせ、上げて下さんせいなア、と頼んだれば、その八が紋日の事かと思うて、此方は忿がしい事がある、上げてやる事はならぬ、身上がりをせいと云つた、そこで太夫がぬからぬ顏で、さうとは知らいで損つたわいなア。

葛城　何を云はしやんすやら。

ト笑ふ。この間お琴、床几に腰かけて居て。

こと　申し〳〵、お前方は、島原の女郎さまでござんすかえ。

遠山　アイ。

ト お琴を見て笑ふ。

こと　サア、腰掛けて煙草あがりませ。わしやお前方のやうな人にお近附きになつて、物が云うて見たいと、常住思うて居りました。爰はわたしが近附きで大事ないが、酒一つ上がつて下さりませぬか。

葛城　平さま、あの女中を見やしやんしたかえ。

大盡　イカサマ、先刻にから見て居るが、こなさん、どこぢや。

こと　わしや矢橋の者でござんす。

大盡　ハ、ア、おれが思うたとは違うた。頭は女房、顏は

娘、定めて東三條の黒雲邊の人であらうと思うた。

遠山　わたしらに近附きになりたいとは、町方にも變つた女房方がある事でござんす。お近附きにならう。なんと爰へ、平さん、寄らしやんせぬか。

大盡　イカサマ、面白さうな女中。一つ呑まうよ。

こと　あなたは、どなた樣でござんすかえ。

葛城　平さまと云ふ、心安いお客さんでござんす。

こと　これはしたり、お前方と逢はしやんして、わたしらがやうな端女子はお氣に入るまい。

大盡　味な事云ふ人ぢや。自體、女子と西瓜は、地が旨うござる。サア、酒にせう〳〵。

ト銚子、杯持つて出る。

遠山　そんならお近附きの爲に、わしから呑んで上げませう。

ト呑んでさす。

こと　お前のお名はえ。

葛城　わたしや柏屋の葛城、爰に居やしやんすが、竹村屋の遠山さんと云ふわいなア。

遠山　近附きになつたからは、折り〳〵廓へもござんせえ。

こと　ほんにお二人とも、可愛らしいお名ぢやなア。シタガ、マア、この杯は、お前に上げませう。

葛城　わしへなら押へようわいな。

こと　そんならお前、お相なされて下さりませ。

遠山　初手から手元とも云はれまいし。

ト呑む。

城城　一つ呑ましやんせえ。

こと　こりやお見事ぢやわいな。わたしも一つ呑まざなるまい。

遠山　こりや酒がゆくかえ。

こと　深うは堪えねど、一つは。

ト呑む。橋がゝりにて「打出し替り〳〵」と云ふ。

遠山　アレ〳〵、平さま、壬生狂言が替りでござんす。あれ見せて下さんせいなア。

葛葛　ほんに平さま、わたしやあれが好き。見たうござんす。見て來う。

大盡　おれもあれが好きぢや。サア〳〵、こなたもござらぬか。

こと　お前方お出でなさるゝなら、わたしも參じませう。

大盡　ドリヤ、行て見て來う。

ト大盡、飛んで出る。皆々入る。お琴、大盡が刀を隠

す。大盡、橋かゝりより戻り、うろ／＼尋ねる。

こと　お前は何ぞ見えぬ物があるかえ。

大盡　アイ。イヽエ。何も見えぬ物はごんせぬ。ハテ、面妖な。

ト尋ねる。

こと　なんぞ落さしやんせぬかいな。

大盡　イヽエ、落すやうな物ぢやござんせぬ。

こと　こりや誰れがのぢや知らぬ。てもさても味な物を拾うた程にの、落した奴は粗相な奴ぢや。よい／＼。いつその事、川へ持つて行て流してしまはう。

ト大盡、後より術なき思い入れ。おかしき振りにて附き歩く。

大盡　申し／＼、女中さん。

こと　なんでござんす。

大盡　それを落した者の、在所が知れた。

こと　そりや、どれに居られまする。

大盡　ハイ、これに居られまする。

こと　エヽ、お前かえ。

大盡　ハレ、面目次第もない。

こと　ほんに、私しなりやこそ大事なけれ。

大盡　好い腹切り道具でござります。

こと　お侍ひ様がどこの國にか、刀を忘れるといふ事があるものか、壬生狂言なら、どりや／＼と囃ましやんせ。

大盡　以後はキッと申しつけますでござりませう。それ、此方へ下さりませ。

こと　欲しうござんすかえ。

大盡　それがなけりや去なれんでござります。

こと　エヽ、やつてやらうまで。

ト脇差取らうとするを、あちらこちらへやる。大盡、やう／＼と捕まへ

大盡　又しても／＼粗相な。おれが傍にヂッと附いて居ればよい。ハイ、忝なうござりまする。

ト刀を持ち行く。お琴、脇差を持つて居る。大盡知らずに身ばかり持つて引く。

こと　ア、申し、鞘が／＼。

ト大盡、術ながる。

お前は身ばかりで行かしやんすかえ。

大盡　抜身で大道は通られませぬ。

こと　イカサマ、抜身は提げては行かれまいわいなア。

大盡　引き抜いたなりでは參られぬ。とてものお情に、鞘



初演の繪番附

を下さりませ。
こと　サア。あげう程に、そこから爰へ差しやんせ。
大盡　アノ、これを爰へ差すのでござりまするかえ。
こと　アイナア。
大盡　これは近頃、不作法ながら、然らば御免なりませう。
　ト　お琴、鞘を持つて居る。大盡、刀を構へ
穴を動かさずヂッとしてござりませ。
　ト　いろ〳〵して、お琴、引ッたくり
こと　あべ。
　ト　持つて逃げる。
大盡　コレイナ〳〵。折角今の程、おれにきもせをやかして置いて、そりや胴慾でござります。そしてお前、酒に酔うておやさうなの。ア、コレ、鐺が堪らぬ。これは又、うたてな容が取れた事ぢや。
こと　うたてくば抱いて寝てもらはう。
　ト　帯を解く。
大盡　こりや、何とするのぢや。
こと　惚れた。
大盡　ヤ。
こと　惚れやんしたわいなア。

大盡　アノ、たつた今見て。
こと　イヽエ、この間廓へ行かしやんすのを見て、どうも斯うもならぬ程。それでわざと今日爰へ来て、待つて居たのでござんす。否ぢやあらうが、不行ながら、抱いて寝て下さんせいなア。
大盡　談合せう。おれも先刻から、すつたのこつたの云うて居るは、なんぞの拍子もあらばと思うて居たッシヤが、男はないかや。
こと　なんの男のある者か、女の身で大膽な、此やうな事が云はれるものぢやごんせぬ。男の無いと云ふ證據には、そぐはぬ振り袖、此やうな借り着をして、恥も構はず爰へ来たは、せめてわたしが心のたけをば云はうばかり。可愛い事のと思うて下さんせ。
大盡　すりや、眞實おれゝ其やうに思うて下さるか。
こと　眞實お前を思うて居ると云ふ、これが證據。
　ト　指を切る。
大盡　ハアイ、指切りぢや〳〵。
　ト　うろたへる。お琴、思ひ入れあり
こと　よく〳〵の事ぢやと思うて下さんせ。
大盡　ついぞ今まで、それ程に女子に思はれた事がない。

そんなら、おれと女夫事して下さる氣か。

こと　ハテ、お前さへその氣なら、わたしが心中は見せて置きました。

大盡　迷惑なやうな、忝ない事でござる。

こと　そんなら、二世かけてのこちの人。

大盡　女房とも。

こと　オ、嬉し。

ト抱きつく。文七、この間より出かけて、この時兩人を捕へ

文七　間男、見附けた。

大琴　エ、。

ト恟り。お琴、ハアと泣く。大盡、そろ〳〵逃げようとする。

こと　これ〳〵、何處へ行かしやんす。

大盡　エ、、ちよと後架へ。

こと　卑怯な。怖い事も何にもない。ヂッとして下に居やしやんせいな。

大盡　ハイ。

ト下に居る。

文七　斯ういふ事を仕出かすからは、こりや、ハヤ、覺悟でもあらうが、わりや太い手強い女なア。

ト大盡、又そろ〳〵逃げる。

こと　ハテコレ、下に居やしやんせいの。

大盡　ハイ。

文七　但し、この針金文七が、男の立てやうがあるか。

大盡　そりやこそな。

ト逃げうとする。

こと　ハテ、下に居やしやんせいなア。

ト大盡、うろ〳〵する。

文七　女房ども、後の納まりは、わりやどうせうと思ふ。

こと　暇下さんせ。夫婦の縁切つて下さんせ。去られたうござんす。

大盡　コレ〳〵〳〵、今こなたに尋ねたりや、男はないと云うて。そんならあなたは、こなたのお連合ひか。

こと　男があると云うては、定めて側へも寄せて下さんすまいと思うて。シタガ、いま暇取つて見せまするわいなア。

大盡　男のある身が、おれに惚れたと云はしやつては、立ちますまいがの。

文七　女め、品に寄つたら、美しうこの場を濟ますまいも

のでもない。また出やうが悪いと、重ねて置いて四つにする。さう思へ。

大蔵　段々尤もでごんす。斯う云ふ形な所へ来て見て、殊に女の際に指切つて、盲目が見ても間男ぢやが、微塵も不義はござらぬ。男がないと云うてぢやあつたさかいで、ツイエ、、壬生狂言に行たらよかつたもの。

文七　コレ〳〵、云ひ譯には及ばぬ。こなた様に不義はない。

大蔵　そりや嬉しうござります。

文七　シタガ、掛り合ひ、そこが災難、彼奴を殺す段になりや、一人は殺さぬ。

大蔵　それが嫌でござりまする。

文七　女め、人の害ねぬやう、おれが顔の立つやう、云ひ譯せい。

大蔵　コレ〳〵、大切の所ぢや。こなたの云ひ譯に依つて助かるか殺すか、一人と思へど二人の命。随分と云ひ譯を云うて下され。

こと　ハテ、死ぬるからは、こなさんと一緒に死んで、未来で添ふが楽しみぢやわいなア。

大蔵　ハテサテそれが悪い。死ぬる気なら先へ行つて待つしやれ。おれはゆる〳〵後から行きませう。

こと　文七さま、腹が立ちませう。夫の身で、これに増したるはござんすまい。シタガ、不義しても半分は、こなさんがいとしさゆゑ。

文七　ヤ、なんと。

こと　お前には隠して居るが、丹波の父さんは牢舎してござんす。

文七　ヤ。

こと　父様の田地、古来より一つ、或る所に樋があつたを、何心なうその樋を取らしやんしたげな。古来より水の論議の上で、父様の誤まりになつて、牢舎さしやんしたといなア。その樋さへ元のやうにして、水筋を立てさへすれば、助からしやんすとの事。その樋を元の通りにさしたけれど、何と云ふにも大枚の事。こなさんに云うて苦にさして、金の出来ると云ふでもなし、所詮わたしが身一つ捨てさへすればよいと、殊にあなたは田舎より出て来て、大分のお金を遣ひ捨てしやんすと聞いて、指切つて惚れましたは、金の無心を云うて、父様の命助けたさ、この身を、ずた〳〵に刻んでなりとも腹を癒て、あなたの命に別条ないやうにして上げて下さんせ。その代りに

金の無心を云うて、父様を助けて上げて下さんせいなア。

ト泣く。大盡、つまらぬ顔して聞いて居る。文七、いろ〳〵思ひ入れありて、杯とさんを持ち、前へ直る

文七　女房ども、呑め。サア、マア、呑め。

トお茶をこなしありて

女が杯でござる。戴いてやつて下され。

ト大盡、膽を潰す。

マア、戴かしやれ。

ト無理につぐ。大盡、いろ〳〵こなしありて

これ肴でござる。

ト指を箸にて挾みやる。

大盡　ハ、ア、これ下さるのか。

文七　戴かつしやれ。

大盡　ついぞ指喰べた事はござらぬ。

トこれよりいろ〳〵ありて、指を呑み込み、ふつく。

文七　只今お聞きの通り、泥頭附甲斐ない夫を持ちまして、彼奴も不仕合せ。近頃無心でござれども、あの女が氣に入らつしやるまい、なれども女房に持つなりとも、又どうなりともなさられ、女が願ひ、金子を貸して下さりませ。借りましたと云うて、つい濟しまする當もござりませねども、文七が足手の奉公は仕らう程に、金を貸して下さりませ。

大盡　ハテ、餘儀ない事でござる。して、なんぼ程要りまする。

文七　コレ、金はなんぼ程あればよい。

こと　アイ、二三百兩要るげにござんす。

ト大盡、着物着替へ、行かうとする。

文七　イヤ〳〵、コレ、何處へござる。

大盡　たくさんさうに貳參百兩、なりませぬ。

文七　御尤もでござる。金持たしやれた身の上でも、いとど金は大切な物でござる。貳百兩と申せば大分の金。イヤ、然らば金の儀は申すまい。女房が指、戻さつしやれ。

大盡　エヽ。

文七　イヤ、主のある女に指を切らせた事が濟むか。金の無心は申すまい。女房が指を戻して下され。

大盡　それは無體な。食ひとむなうてならなんだけれど、今の指は呑み込んでしまひました。ないもせぬ物を戻せとは。

文七　指がなくば金か。
大盡　サアそれは。
こと　コレ〳〵、わたしや命は捨てゝ居る。因果な所へござんしたと、諦らめて下さんせいなア。
文七　これは迷惑な事ぢや。
大盡　否でござるか。
　ト血相する。
こと　出しませう〳〵。どうぞ十兩で。
文七　なにを。十兩や二十兩で、指を切らるゝものぢやござんせぬわいなア。
文七　あの通りでござる。
大盡　エヽ、ひよんな指を喰つてしまうた事ではある。
こと　こちの人、千も萬も要らぬ。わしを早う殺して、不義の相手はあなた、存分にして下さんせ。覺悟は極めて居ります。
文七　どうで命を捨てずば、親の命は助けられまい。
　ト拔いて切らうとする。
大盡　ヤヽ、コレ、先づ待たつしやれ。棚から落ちたと思うて、五十兩で料簡しや。
文七　女房ども、何とする。

こと　まだ餘ツぽど間がある。一飛びに飛ばずば、サア、首を切らしやんせ。
文七　覺悟はよいか。
　ト振り上げる。
大盡　サア、七十兩ぢや。
こと　まだ〳〵。コレ、切らしやんせ。
文七　南無阿彌陀佛。
　ト振り上げる。
大盡　コリヤ、百兩ぢや。
こと　そろ〳〵値がようなつた。切つた〳〵。
大盡　百五十兩では。
こと　貳百兩なけりや、どうもならぬわいなア。
大盡　一文もまからぬか。
こと　早う殺して下さんせ。
大盡　よい。貳百兩遣らう。
二人　エヽ。
大盡　ソレ貳百兩。
　ト懷より出す。
文七　近頃無體なと思し召さうが、命を助ける貳百兩。當塔の御建立より、遙か優つて御善根でござります。

大盡　これは痛み入りまする。もうわたしは、お暇申しませう。
こと　このお禮は、重ねてゆるりと申し上げませう。
大盡　段々の御馳走の上にも、指下され、いから充滿仕つた。
こと　もうお出でなされまするか。
大盡　ハレ、慘い目に遭うた事かな。
ト叫になり、這がゝりへ入らうとして、高小屋に隱れる。あと合ひ方。本釣り鐘。お琴文七、顏見合せ、
文七　お琴さん。
こと　文七。
文七　まんまと首尾よう。
こと　身請けの金、
ト薄雲、走り出て、
薄雲　姉さん、ありやもう入相。わたしが身請けは
こと　氣遣ひしやんな。ソレ、貳百兩。
薄雲　エヽ、嬉しうござんす。
文七　この上は一時も早う、薄雲さんの廓の諸拂ひを。
こと　そりや合點ぢや。サア、二人ともにおぢや。
ト行かうとする。大盡出て立ち塞がり
大盡　待つた。
こと　ヤア、お前は。
文七　最前の田舍客。
大盡　高尾さん、お久しうござります。
薄雲　さう云ふお前は。
大盡　いつぞや江戸の吉原で。
薄雲　ほんに殿樣に意見して。
大盡　勘當請けし名古屋十三。
琴文　その又お前が。
大盡　首尾よう騙られました。御褒美にどうぞ、勘當御赦免を。
三人　そんなら。
ト大盡、三人を拜む。

ひやうし幕

五　幕　目　　豆　腐　屋　の　場

役名――佐々木六角之助。千草姫。津輕三平。同奴、關助。茶の子勘兵衛。酢川土左衛門。影潮九右衛門、すつぽん獣左衛門。雷雲右衛門。針金文

七。同女房、おるい。傾城、薄雲實ハ高尾。豆腐屋權兵衞。同娘、お琴。同弟、銅吉。浮世渡平。

造り物、平舞臺、向う赤壁、納戸口、兩方、中二階、障子屋體、橋がゝり、門口、豆腐屋の看板あり、茶の子勘兵衞、どてら上下にて、胡座かき、大きな煙管にて煙草のんで居る。豆腐屋權兵衞、世話親仁にて、娘お琴を繻にて叩かうとして居る。下女おるい、近所の娘おきわ、おやす、振り袖にて、とも〳〵に留めて居る見得。バタ〳〵にて、幕明く。

三人 マア〳〵、ようござんすわいなア。

權兵 イヤ〳〵ようない。彼奴、叩き殺してしまふ。

るい 申し、旦那さん、お前のやうに、さう無下にいとしほな氣に其やうに云うたものぢやござりませぬわいなア

きわ マア、堪忍さしやんせいなア。

權兵 イヤ〳〵、聞かん〳〵。アノぶき〳〵とした體を見込みに、敷金を持つて來た聟の勘兵衞。祝言をさせうと思うて、此やうに近所の娘御達を狩り集め、サアと云ふ段になつて、嫌ぢやと吐かして事が濟むか。おのりや、あの敷金が欲しうはないか。慾知らずめが。

こと コレイナア父さん。

權兵 なんぢややい。

こと お前もマア、一體滅相な。碌に人に合點もさせず、聟ぢやの祝言ぢやのと、これはマア、わたしには浮世渡平と云うて、歴とした

權兵 その男の渡平は何處に居る。

こと エ、。

權兵 なんぢや知らぬか、百日程前に、思ひがけない代官所から引ッ縛りに來て、もし打つたれば、ばれうも知れぬ渡平。その響きで此方の商賣も上つたり。男どもは皆暇やつて、今ではこのおるい一人居の食ひ損を入れ合さう、われにも不自由をさすまいと、豆腐屋が思案で敷金持つて來る、聟取つたが、なんとした。

こと サイナア。それぢやに依つて三百五兩、お前に不自由させまいと、これまで

權兵 そりや、取らいで。親ぢやもの。

こと 其やうな無理な事。

權兵 無理であらうが、道理であらうが、其所が親の高下ぢや。

こと 縁組みばかりは、親の儘にになりませんわいなア。

樣兵　おのれ、儘にしたら、どうする。

こと　好かん男は嫌ぢや。

樣兵　イヤ、さう吐かしやア、

　ト　また箒振り上げる。

女三　マア〳〵、ようござんすわいなア。

　ト　留める。勘兵衛、鼻吹叩き

勘兵　親仁どの、こりやどうだ。手前も茶の子勘兵衛と云はれては、人に知られた男ながら、妾のお娘にや疾から惚れて居るけれど、浮世渡平と云ふ男のある身。どうぞ仕様はないかと、こなたに話したれば、気遣ひすな、渡平はいつまでも居りやせぬ。娘お娘は親次第、聟金さへ持つて来るなら、女夫にしてやらうと云はれるゆゑ、おれも嬉しや、一旦の云ひがゝり、屋台家財ぶち殺して、聟金にして持つて来て、嫌ぢやと云はれては男が立たない。サア、親仁どの、立てゝ下はれ。立てゝもらひませう。

樣兵　サア娘、あの通りぢや。否応云はずと祝言せい。

こと　嫌でござんす阿房らしい。渡平と云ふ男のある身を知りながら、嫁に来るとは、お前も餘ッぽど阿房らしいわいなア。

勘兵　なんぢやい。餘ッぽどは餘ッぽどの馬鹿ぢやと云ふのか。おれも茶の子の勘兵衛と云はれては、光りばかりぢやたい。常でも人が喜ぶ、行く先で飲酒をしひたげ、何處でも逃げくは、よしの屑のない男。鈍な事は聞いて居ぬぞ。

女三　ホヽヽヽ。

　ト　皆々笑ふ。

勘兵　ヤイ〳〵、うぬら、何がおかしい。頬がまち、擲り歪めうか。

樣兵　假初めにも、けら〳〵と、否でも應でも親が祝言さすのぢや。おるい、その杯銚子を持つて來い。

るい　イヱモウ、酒はござんせぬ。

樣兵　おのれ、祝言に酒が無うてよいものか。無けりや、一走り取つてうせう。

るい　アイ〳〵。

こと　コレ〳〵、おるい、酒取つて來る事はないぞ。

るい　アイ〳〵。

樣兵　おのれ、うせんと箒の相伴さすぞよ。

こと　おるい、酒取つておぢやつたら、聞かんぞや。

るい　アイ〳〵。

權兵　キリ〳〵と失せんと、腰骨をどづき惱ますぞ。
ろい　オヽ怖。ドレ、一走り行つて來うか。
やす　お琴さん、わしやモウ、去んで參ぜうかえ。
きわ　わたしも、ちよつと歸つて來うえ。
勘兵　エヽヽべら〳〵と。キリ〳〵去にやァがれ。
兩人　オヽ怖。
ろい　サアヽござんせ〳〵。
　ト娘達、歸る。歩き出て
歩き　親仁どん。內にか〳〵。
權兵　歩きの源兵衞、なんの用ぢや。
歩き　イヤ、會所まで急に來いと、お宿老の云ひつけぢや。サア〳〵早う。
權兵　エヽ、面倒な。ツイ留主など云うて置いてくれ。
歩き　ハテサテ、なんとあらうと、好い事ぢや程に、早う早う。
權兵　好い事とは耳寄りな。そんならお琴、おりやちよつと行て來うわい。
こと　アヽコレ、父さん、この聟さんも、一緒に連れて行て下さんせ。
勘兵　イヽヤ、おりや敷金に屋財家財賣つてしまうたりやほんなしの花聟。親仁の戾るまで、奧へ行て祝言の居催促ぢや。
權兵　そんなら、一走り行て來る。
勘兵　祝言の杯するか。
權兵　得心して敷金をあたりまするか。
勘兵　權兵衞どん。
權兵　聟どの、娘、流れて行く金ぢや。思案しや。
　ト唄になり、權兵衞、歩きの源兵衞を連れて、向うへ入る。勘兵衞、こなしあつて、納戸へ入る。あと合ひ方になる。お琴、こなしあつて、橋がゝりの中二階より、千草姫を連れ出て上座に直し
こと　誰れあらう花園中納言樣のお息女、若殿のお後を慕ひ、思ひも依らぬ埴生のお住居、さぞ御窮屈にござりませうなア。
千草　あの人の云やる事わいなう。一旦云ひ交した六角之助さま、自らゆゑにお上のお咎め。其方の世話でこの家にござれば、一緒に暮らすも同然と思へば、此やうな嬉しい事はないわいなう。
こと　幸ひとよい人絶え。いつものやうにして、殿樣にお逢ひ遊ばせや。

ト傍への衝立を眞中へ直し、納戸より、佐々木六角な
連れ出る。

六角　お琴、それへ行ても苦しうないか、

こと　大事ござりません。其やうに離てばかりござつては、氣の晴ばれ。外に誰れも見る者はなし、ちよつとこの衝立を取つて。

千草　六角之助さま、お顏が見たうござりますわいなア。

六角　イヤコレお琴、必らず衝立を取つてたもるな。銀兵衞が企みとは云ひながら、一旦千草と名の付いた千草の前、假にも夫婦の約束せしは、酒の云はせし六角之助が誤まり。それゆゑにこそこの落浪、今さらどうも顏合はして居。

千草　そんなら、どのやうに申しましても。

六角　この世では、結ばれませぬわいなう。

千草　おやまア云うて、そりや又あんまり。

ト振りつく。

六角　ハテサテ、諄い事を、

ト六角之助、千草を振り放し、ツイと入る。千草、いろ／＼あつて

千草　ハアヽ。

こと　お道理でござりまする。母御と名の付いた千草さま、戀路の習ひ。ツッと辛氣な事でござりまする。

ト合ひ方にて、お琴の弟銅吉、やつしにて、手に萩の花と竹の皮包みを持ち、氣抜けのやうにして出る。おやす、おきわ、兩方の手を引き無理に連れて出て

やす　お琴さん、銅吉さんを連れて戻つたぞえ。

きわ　わたしも銅吉さんを連れて參じたぞえ。

こと　オヽ、おやすさん、おきわさん、よう銅吉を連れて戻つて下さんした。コレ銅吉、今朝不意と出て、今まで何處へ行て居やつたぞいなう。

やす　まだ何處へやら云うておやあつたけれど

きわ　無理やりに連れて戻つたのぢやわいなア。

こと　さうして、其方の手に持つて居やるのは、なんぢやぞいなう。

銅吉　アイ、これは土產。

こと　ヤア。

銅吉　わしが此やうに、うか／＼歩くのも、ソレ、いつやら奉公先を藪入りして、石山詣りの戻り道にの、殿樣の御參詣。さんざめかすその中に、なんぢややら知らぬが、いかい事簪さいたおやまの女中。ても美しい。あんな女

子もあるものか、男に生れた一生に、あのやうなるお山さんを、女房に持つて見たいと、思ふのが惚れたと云ふものか。そウ〳〵、阿房らしい事ぢやが、片時も忘れず、起きても寝ても、そのお山の顔が、ちら〳〵。矢ッ張り斯うして居ても目の先を放れず、もしどう云ふ事で顔見る事もあらうかと、それで毎日々々うか〳〵。丁度あのお姫様と殿様とが、同じ此方の内に居ながら、顔さへ合す事がならぬとは、さぞ悲しかろ、女夫になりたからうと、わしが身につまされておいとしい。せめて暫しのお慰みに、この餅は殿様へのお慰み。この菊の花は、お姫さんが御覧じやつても、物紛れにでもならうかと、持つて戻つた土産でござります。

こと　ほんにマア、其方がよく〳〵お二人様の事を思ひやりやこそ、ようお土産買うておぢやつたなう。

やす　ほんに可愛らしい菊の花。折角戻らしやんしても、眺めるしがなうては仇花。枯れぬ先に、わたしが活けて置かうわいなア。

　トあたりの手水桶へ活けうとするを、おきわ、引ッたくり

きわ　コレイナア、まんがちな。鋼吉さんが折角持つて戻らしやんした土産は、わたしが活けて上げるわいなア。

やす　イエ〳〵、今の話しを聞けば聞く程、眞實なお人。直ぐなこの花は、わたしが手活にするわいなア。鋼吉さん。

きわ　サア、そんな眞實な花ならば、どうぞわたしも活けられたいわいなア。

やす　イエ〳〵、わたしが。

きわ　イエ〳〵わたしが。

こと　アヽ、コレイナア、折角お前方が活けうと云うて下さんしても、肝心の花が卑賤。これがほんの、ひしやらの花。

千草　自らが心に引き比べ、ほんにいとしい事ぢやわいなう。

勘兵　お琴〳〵。

　ト内より呼ぶ。

こと　アレ又、先刻の入り聟め。見付けられては何かに邪魔。マア〳〵、あなたは納戸の内へ。お姫様は元の二階へ。

やす　鋼吉さんは、わたしが奥で。

きわ　イヤ〳〵、わたしが連れて行くわいなア。

千草　そんなら、お琴どの。

こと　マア〳〵、お出でなされませ。

ト唄になり、千草姫、東の屋台へ入る。おやす、おきわ、鋼吉が手を引き、無理に奥へ引ッ張り入る。お琴、見送るこなしの所へ、勘兵衛出て

勘兵　お琴〳〵、コリヤお琴。

こと　アイ、エ、、恟りするわいな。

勘兵　われが恟りより、おれが恟り。鰯網へ大鯨、七里うかお出世の綱。こりや、腰揉まねばならぬわいやい。

こと　なんぼ腰揉まさんしても、わしや金輪際、嫌ぢやわいなア。

勘兵　嫌ぢやとは胴慾な。ソッとこなさんを見初めてから、寝ても覚めても寝ても、思ひ忘れぬ戀の闇。鐵砲ぢやないが眞實眞實、先度流行つた砂持ちにも、どうでお前が心よう、くツつり抱かれて寝ますやう、守り給へ稲荷様、お前とんとこ〳〵と、コレこの肩の荷物箱、情な御積。何百荷擔うたやら、数も限りもあらぬ涙、雨さぬ日とてはごんせぬわいなう。哀れ不便と思し召し、抱かれて寝る心はないか。コレ、どうぢやいな〳〵。

こと　エ、しつこい。寄らんすな〳〵。

勘兵　これ程に云うても、得心せにや、いつその自棄ぢや。幸ひあたりに人もなし、無理取りにしてなりと、抱いて寝にや置かんのぢやぞ。

こと　ア、コレ、滅相な。無體な事さしやんすな。

勘兵　サア、そんなら本心で抱かれて寝るか。

こと　そんな事は知らぬわいなア。

勘兵　知らんと云や無理取りぢや。もうどうも堪らぬ。ちよつと爰で〳〵。

ト抱きつく。お琴、無理に放さうと、いろ〳〵せり合ふ所へ、清右衛門、向うより出て内へ入る。

清右　サア〳〵〳〵、めでたいぞ〳〵。ゑらめでたぢやゑらめでたぢや。

ト云ひ〳〵内へ入る。勘兵衛、取違へて清右衛門に抱きつき、顔見合せ

勘兵　エ、、貴様ぢやないわい。

清右　なんぢや、貴様ぢやない。町々の束ねをする宿老の口吸うて、どうするのぢや。

勘兵　エ、、忌々しい。宿老の口ぢやと思うて誰れが吸ふものぞ。

トゑづく。

清右　わりやマア、ちと手水も遣へ。エヽ、きつい口熱。
勘兵　思ひ出しや思ひ出す程、エヽ、阿房らしい。
こと　ほんに好い所へお宿老さん、なんと思うてお出でなされましたぞいなア。
清右　コレ〳〵、喜ばつしやい。渡平が助かつて、牢から出たぞや。
こと　エヽ。
清右　なんと、嬉しいか〳〵。
こと　なんと仰しやります。アノこちの人が、牢から出られましたかえ。
清右　アレ〳〵、向うへ戻る〳〵。
ト云ふうち向うより、浮世渡平、科人の形、小手縛りに遭ひ、代官藤右衛門、家來大勢連れ、後より、權兵衛、半兵衛、長蔵、本八、町人の形にて付いて出る好き所にて、家來大勢。
家來　下に居ろう、
ト渡平、ヂッと下に居る。
清右　みんな下に、居やつしやれ〳〵。
家來　われも下に居い。
清右　ハイ、居りましてござりまする。

藤右　イヤナニ渡平、當六月下旬、寶藏へ曲者忍び込み、大切なるお家の重寶、千鳥の香爐紛失。その盗賊は其方なりと自身の白狀。それゆゑに牢舍申しつけしに、御家老秋塚帶刀さま、お心入れを以つて、其方が科を赦し、出牢仰せつけられる、有り難う存じませい。
渡平　有り難う存じます。
藤右　分けて御内意の趣き、とくと其方は承知であらうな、
渡平　赦りまじき科を、御赦免下さるゝ大恩。何かさて渡平めが命にかけて。
藤右　それ聞いて安堵いたした。最早身共は立歸らう。
渡平　御苦勞樣でござります。
藤右　家來、供せい。
家來　ハア。
ト唄になり、藤右衛門、家來連れ入る。
こと　こちの人。
渡平　女房どもか。
こと　よう戻つて下さんしたなア。
ト抱きつく。
渡平　マア〳〵、其方も達者で、めでたい〳〵。
こと　わたしが達者なよりは、お前の顔が見られまいかと、

それが案じられて。

トしやくり上げて泣く。

渡平　イヤ、モウ〳〵、道理〳〵。おれも牢の中で、其方や親仁さんや、團吉が事ばつかり思うて居た。親仁さん、お前さんも御無事で、おめでたうござります。

權兵　イヤ、おりやおまめでない。

半兵　渡平どの、みんな見合して迎ひに行たぞや。

長藏　おれも迎ひに行た。

清右　オヽ、おれも行た〳〵。

渡平　オヽ、これは御苦勞樣、向ひの灰平さん、玉鋒屋の長藏さん、隣の本八さん。

ト皆々の顏を見て、ヂッと泣く。

清右　オヽ、尤もぢや〳〵。併しマア、めでたい〳〵。

半兵　この灰平には、向ひ同志の事なり、こりやマア、どうなる事ぢやと、常住案ずると云ひ暮して居りました。

長藏　イヤモウ、此方の奴も、はもをこそげ〳〵、こなさんの事ばつかり。

本八　イヤモウ、この鶴井本八も、あけ先のお客で、お前の事を聞はるゝに、ほつと困りました。

清右　さうして、案じたよりはきつい太りやうぢやぞや。

渡平　何を仰しやりまするやら。

清右　イヤモウ、身共もこの大津八丁町の束ねを古う致して、片さごや清右衞門と云へば、隱れもない事知りさるに依つて、冬向き芝居がくれば、狂言の作もして遣はすぢや。

渡平　そんなら矢ツ張り樂屋入りでござりまするか。

清右　ほんに、中の樂屋が事づけして居た。

渡平　いま樂屋では何が流行ります。

半兵　いま樂屋で流行る物は、歸しものと楊弓。

清右　いま町で流行る物が鯔。

長藏　先度は砂持ちがえらう流行つたが、ア、見せたかつた。

渡平　イヤ、見せる次手に親仁樣、わたしが牢を出る時に、粹つた物を貰ひましたて。

權兵　ムウ、そりや何を。

渡平　こんな物を。

ト下駄を見せる。

權兵　ヤア、こりや伽羅の

渡平　知つてござりまするか。

ト權兵衞、こなしあつて、

權兵　イヽヤ。
清右　牢で下駄を貰ふとは。
半兵　なんと云ふ心であらう。
長蔵　下駄らう。
本八　らう下駄。
清右　マア、なんでも下駄を預けられうより増しぢや。時に早う髪月代して、町へ早う顏出ししたがよい。
渡平　その顏出しよりは、あなた方へ御無沙汰のお詫わり。舅どの、どうぞ。
權兵　エ、滅相な。そりやア娘がよからう。
こと　何を云はしやんすやら。お年役ぢや、お前云はしやんせ。
權兵　又そんな無理な事云ふわい。なんの年寄りぢやて、若いてゝ、斯う寄つた者は親子なり、女夫なり、從弟かかみの一家中。おれは年寄り、性急な清右衞門は事を仕損じた。申し譯は三人一緒に。
ト これより、口上あつてしまふ。
清右　なんと、これで落ちついたであらう。もうこちらも去にませうわい。
半兵　歸りませうとも。コレ、渡平どの、明日はこなたの好きの網舟と出かけませう。
長蔵　なんでも將棋さしに行かにやならん。
本八　定めて大久であるでござりませう。
清右　そんなら渡平どの、親仁どの。
權兵　知らんわいの。
皆々　アノ嬉しさうな顏わいの。サア、ござれ〳〵。
ト唄になり、皆々しかじか捨ぜりふあり、橋がゝりへ入る。
こと　ようお出でなされました。お靜かにお歸りなされませ。サア〳〵こちの人、めでたう祝儀の濟んだ祝ひに酒も上げたし、近所へも禮に。マア、風呂へ入るなりと、月代剃るなりとさしやんせいなア。
渡平　イカサマ、そんならさうしてたも。さうして最前から、其處に煙草のんで居るお人は、ついぞ見馴れぬ人ぢやが、ありや誰れぢや。
勘兵　イヤ、おりや聟。
權兵　ヱ、コレ聟。イヤ、向ふの空家へ宿替へして來た近所のお客ぢや。
こと　ナニ、ゐゝ口な。あのお方は今日、此方の家へ聟。

勘兵　サア、伜の宮家へ宿替へして、追ツつけ配る茶の子の勘兵衛、見知つて置いてもらひませう。

渡平　イヤモウ、そりやお互ひ。

勘兵　今日牢から出た浮世渡平どの。

渡平　勘兵衛どのとやら。

勘兵　こなさんにも取込みさうな。

渡平　マア、月代でも剃つた上。

勘兵　互ひに縛りと。

渡平　後に逢ひませう。サア嬶、おぢや。

こと　アイ。

ト唄になり、渡平、お琴を連れ納戸へ入ると権兵衛、手を組み思案する。勘兵衛もこなしあつて

勘兵　こりや親仁どん、詰らぬ物になつたぞや。

権兵　なんにも詰まらぬ事はない。あの渡平めは入り聟、侍ぼいまくらうと偽な奴。そのソレ持つて居る敷金さへおれにたもるなら、今でも渡平は追ひ出し、娘は貴様の女房に遣るわい。

勘兵　エヽ、忝けない。

権兵　オツと喜ぶまい。マア、その敷金から致さうかい。

勘兵　サア、その敷金は。

権兵　敷金は。

勘兵　爰には無い。

権兵　ヤア。

勘兵　サア、あると云うたは、早う祝言がしたさ。有りやうは。

権兵　茶のないらうか。

勘兵　違ひなし／＼。

権兵　なんの事ぢや。茶に酔はされてばつかり居るわい。

勘兵　イヤ、それでもまんざらない事は云はぬ。心当りはキツとあるぢや。

権兵　さう云へば雲に仕掛けがある。して、心当りとは、どんな事ぢや。

勘兵　サア、さる侍ひに頼まれて、その衒妻の質さへ見付けたら、五十両や百両は。

権兵　それも又、糠喜ばしぢやないか。

勘兵　ハテ、おれも茶の子の勘兵衛ぢやわいの。

権兵　よい。もうこの上は金は板こき金見た上で、相談せうわい。

勘兵　面白い。これから一走り行て、敷金だけした、あて来う。

權兵　オヽ、敷金さへ拵らへたら
勘兵　その時は否應なしに。
權兵　聟どの。
勘兵　舅どの。
權兵　と云ふも金次第。
勘兵　追ツつけ
權兵　待つて居るぞや。
勘兵　ドレ、敷金の工面をせうかい。
ト唄になり、勘兵衛は向うへ、權兵衛、こなしあつて奥へ入る。ト向うより、津輕三平、旅装束の形にて出る。後より、奴の關助、針金文七を眞中に取込み、關助、喧ましう云うて出る。おろい、酒樽持ち、取支へ出る。
文七　申し／＼、ちつと爰を緩めて下さりませ。
關助　何を此奴が太い野郎め。お旦那への申し譯。うせううせう。
ろい　申し、奴さん、マア／＼、御料簡なされて下さりませいなア。
文七　親方にさへ逢つたらば、その紙入れは戻しますわいの。

ろい　あのやうに申されまする。どうぞ御料簡なされて下さりませ。
三平　さう云ふ、わりや誰れぢや。
ろい　この人の女房でござりまする。
關助　なんだ。わりや、此奴が下衆ぢやなア。コリヤ、われも聞け。あらう事かあるまい事か、昨日お旦那が、[illegible]らくおらに紙入れをお預けなされたを、大切に致し、お晝休みの間に、皆暮れ紛失。確かにおのれが昨日店先に、うろ／＼してけつかつたが、紛失の後、どつかへやらうせあがつて、詮無い方こりやお旦那へ、申し譯がないから、腹かッさばいて申し譯と、直ぐに魂ひに手をかけた所を、お旦那のお情ゆゑに、やう／＼命を拾つて今日のお供。どうぞしておのれをと、心がける目ぶくら、向うの酒屋の門口で、この女めとぼしやく／＼。おらが顏を見るや否や、闇雲に駈け出す所を、とッ捕まへたは、まだこの奴めが武運の強さ。旦那の前にて白状させ、紙入れを取返し、御不興のお詫びをするのだ。サア、此野郎め、昨日の紙入れ、出せ／＼。出さないか、どうた。
ろい　サア／＼／＼、御尤もでござります。申し、お侍ひ様、どうぞお情には、お助けなされて下さりませ。お[illegible]

み申しまする。
三平　コリヤ〳〵、あのやうに云へば、紙入れさへ戻るなら、もう料簡いたして遣はせ。
関助　エヽコレ、旦那のお腹が重いゆゑ、赦して遣はすぞよ。して、わいらが宅は何處だ。
るい　イヽエノウ、傍でござりまする。
文七　國も親方も、傍でござります。マア、親方に逢つて來る間。
関助　さう吐かして詮議させ、この場を逃げうとは、ヤ、太い奴め。サア、一寸も待たぬ。今出せ〳〵〳〵。
三平　コリヤ関助、紙入れを無事に返さうと云はるゝ。マア、緩めて遣はせいす。
関助　おやと申して、此奴。
三平　ハテ、喧ましい奴。
関助　関助、急き込んで居りまする。ヤイ、お旦那の有り難い御意ゆゑ、緩めくれる程に、とつとと取つてうせあがらう。
文七　ハア、左様ならば、おいとの間、お待ちなされて下さりませ。サア、嬶、來い。
ト　おるいを連れ、内へ入る。

親方、内にか。
るい　お家様、今歸りました。
ト　内へ入る。お琴、出る。
文七　親方々々。
こと　けたたましい。誰れぢや。
文七　おれぢや。文七ぢや。針金でごんすわい。
こと　おるい、戻りやつたか。文七、なんぞ好い事でもあるか。
文七　イヤ、仕事ぢやない。昨日の紙入れの尻が來て、侍ひめに捕へられ、命から〴〵。その紙入れを戻して下んせ。
こと　それは鈍な事ぢやたう。併し、中の金は貰ひますと斷わり云やつたか。
るい　イヤ、そんな事を聞くやうな、侍ひぢやごんせぬ。
文七　わつと物云うたら、直ぐにばつさりぢや。その斷わりも、こなさん、云はんせ〳〵。
こと　ハテ、商賣にして居て氣の叶はぬ。よい〳〵、わしが逢つて斷わり云はう。コレおるい　マア、内へ入れたがよい。ドレ、紙入れを出してやらうか。
ト　内へ入る。

ろい　申し、お侍ひ様、此方へお入りなされませ。

關助　なんだ。お侍ひ、お旦那に入れとは憎くい奴の。おのれらが内へ、お旦那がお入りなされうか、穢はしい蛆虫め。よい／＼。身共が入り、紙入れをば受取り、お旦那へ申し譯に。

　ト云ひ／＼内へ入る、

ハレ、商賣柄に似合はぬ綺麗な居なし。

文七　その筈でごんす。人の物を只取つて來る商賣ぢやに依つて、ぐう／＼と延びます。ハヽヽヽ。

關助　何を笑ふ。おかしくないぞ。

ろい　マア、お茶お上がりなされませ。

　ト茶碗持つて出る。

關助　茶も水も所望にない。コリヤ、何時まで待たすのぢや。早く出さないか。どうだ。

　トお琴、納戸より紙入れ五ツ六ツ持ち出し

こと　コレ釘金、昨日からの仕事は、慥かに六つぢやつたの。

文七　アイ、紙入れは六つでごんす。

こと　サア、この内か。彼方に見せましや。

　トおろい、文七が前へ持ち行く。

ろい　この内か。御覽じませ。

關助　お旦那の紙入れは、羅紗の蔦の紋の銀金具が打つてある。そりやこそ／＼。これだ／＼。うぬ、どうするか待つて居れ。お旦那、紙入れを取返しましてござります。

三平　紙入れさへ戻らば、もう當人は赦してやれサ。

關助　イヤ、左樣ではござりませぬ。重ねての見せしめでござれば。

三平　ハテサテ、穩便に致せと云ふに。

關助　エヽ、命冥加な盗賊めだな。

こと　これはマア、誠に結構な御料簡でござりまする。紙入れさへお戻し申しまする上は。

　ト云ひ／＼、顔見合せ。

ヤア、あなたは昨日のお侍ひ様。

三平　すりや、彼れらが頭と云ふに、其方か。

こと　ハイ。

三平　昨日の騙りと云ひ……ハテ、世の營みは、さま／＼ぢやなア。

こと　ハイ、やう／＼この頃からの、取付きでござりまする。

文七　イヤモウ、取付きでは、大抵無骨な人ぢやござりませぬ。ハヽヽ、イヤ、そんなら私しは、もうお暇申しませう、関助、今夜はまん直しに、夜廻りに出ようわい。

トお琴、術なきこなし。

こと　コレ又、必らずおごい働らきしやんなや。

ろい　怪我せぬやうに、戻らしやんせえ。

こと　なんしか、わが身も付いて行きやいの。

ろい　そんなら、さう致しませう。

文七　奴さん、これにござりませ。ドリヤ、働らきに行かうか。

ろい　サア、行かしやんせ。

ト唄になり、文七、おろい連れ入る、関助、呆れて

関助　ハテ、あんまりで呆れるわい。

こと　あなたと顔を合はしましては、面目もない昨日の始末。申し訳もござりますれば、苦しうなくば、マア、これへお通りなされませう。

三平　然らば許しやれ。

ト関助、入るなと云ふこなし。目交ぜする。

ハテ、苦しうないわい。

ト内へ入る。

こと　お金まで下され、昨日の御意見、用ひませぬも云ふに云はれぬ、深い様子のござりまする事なれど、ツイ明らさまにお見開きなされては、女子の身で大それた奴と思し召すも、お恥かしうござりまする。

三平　イカサマ、様子ある儀と存じたゆゑ、昨日の仕儀、大方主夫の為と云ふやうな儀でござらうが、して、こなたの夫は。

こと　ハイ、浮世渡平と申しまして。

三平　すりや今日出牢召された、浮世渡平と云ふが、こなたの男か。

こと　夫の出牢、よう御存じでござりまするわいなア。

三平　如何にも、その渡平に用事あつて、わざ／＼これへ参つた拙者。その渡平の女房。

ト心意気あり、両人こなし。

家来、身はこれに今暫らく、用事もあれば、其方は旅宿へ帰り、身が帰宿を待てサ。

関助　ハイ、アノ、すりやお旦那は爰に。

三平　ハテ、苦しうない。早く帰れ。

関助　畏まつてござりまする。

ト入る。

三平　して、渡平は在宿かな。
こと　ハイ、今の先、歸られましたは歸られましたけれど、髮月代やら何かの用意で。
　トぐづ／＼云ふ。
三平　然らばこれにて相待たうわい。
こと　エヽ、それでは夫へ。
三平　アイヤ、某は、渡平どのに用事あつて參つたばかり。騙りの詮議は又脇道。
こと　すりや、夫にお逢ひなされても。
三平　昨日の仕儀は何事も。
こと　アノ、知らぬお顏で。
三平　如何にも。
こと　それ聞きまして
三平　安堵をしやれ。
こと　エヽ、お嬉しうござりまする。
三平　然らば暫時、あれにて休息。
　ト二階へ上がらうとする。
こと　アイヤ、穢くとも奥へ。
三平　アノ奥へ。
こと　ハイ。
三平　イヤモ、何處でなりとも。
こと　お侍ひ樣。
三平　お内儀、後刻逢ひ申さう。
　ト眞になり、三平、納戸へ入る。
こと　昨日金を騙られて下さんした、情あるあのお侍ひ。此方の人に用とは、もしわが身の上……イヤ／＼、露ある武士の詞に、よもや違ひもない誓言の金打。シタガ、なんの用であらうぞ。
　トこなしある。向うより、才兵衛、親方の形にて、薄雲を駕籠に乘せ、連れ出て、門口へ來て
才兵　權兵衛どの、内にか。來たぞや／＼。
　ト權兵衛、内より出て
權兵　誰れぢや／＼。けたゝましい。
才兵　内に居やしやるか。サア、駕籠舁き込んでもらひませう。
駕籠　ハイ／＼。
　ト内へ舁き込むと、權兵衛、悧りして
權兵　ヤア、こりや滅相な。誰れぢやぞいたう。
才兵　ハテ、おれぢやわいなう。
權兵　ヤア、こなたは薄雲が親方どの。この間と云ひ、又

ござつたか。ハア、また娘が行くへは知れぬか。

才兵　イヤ〳〵、さうした事ぢやない。めでたい事ぢやめでたい事ぢや。

權兵　イヤモウ、そのめでたいには複りたものぢや。マア、たんでござるぞいなう。

才兵　なんとは郎ちこの駕籠ぢや。サ、太夫、爰へ出いサ。早う〳〵。

ト駕籠の垂れを上げると、薄雲、出て

薄雲　父さん、お久しうござんす。

權兵　ヤア、娘、わりや、なんとして戻つたぞ。

こと　娘か。よう戻りやつたなう。

薄雲　姉様、お陰で今戻りましたわいなう。

才兵　彌にどん、身請けが濟んで連れて來た薄雲。なんとめでたからうがの。

權兵　ほんに、こりやめでたい。戻りさへしたら、何時金にせうと儘ぢや。マア、誰れが身請けしました。

こと　わたしが身請けしましたわいなア。

薄雲　父さん、わしや廓を駈落ちしたを、引戻されて難儀の所、姉さんの情で、身請けしられて戻つたわいなア。

權兵　ムウ、娘、そんならわれが。

こと　アイ、駈落ちした妹が身の上。もし凶事でもあつてはと、どうやら斯うやら金拵らへ、身請けしてやりましたわいなア、

才兵　コレ姉御、太夫は慥かに渡しましたぞや。

こと　しつかりと受取りました。

才兵　そんなら、おりやモウ去にませう。

權兵　こりや、早々で茶さへ進ぜぬ。

こと　ようお出でなされました。

ト親方、駕籠を連れ、橋がゝりへ入る。

薄雲　姉様、だん〳〵のお世話、忝なうござんす。

こと　なんの禮を云ふ事がある。頑ない時から人中へ出て苦勞ばつかりしやつた其方。どうぞ苦患が助けたいと、日頃から姉が念願、これ程嬉しい事にないわいなう。

薄雲　サア、一旦身請けも濟んだわたし。二度の勤めも殿様のお爲。早う逢はして下さんせいなア。

こと　オヽ、逢はさいで、なんとせうぞいなう。

權兵　娘が云ひ交したのは、お尋ねの佐々木六角。姉よ、わりや知つて居るか。

ト　お琴、ぎつくりして

こと　イ、エ。

権兵　それに又、逢はしてやらうとは。
こと　それはな。
権兵　それは。
こと　サア、何處にござるか知らぬけれど、尋ね出して逢はさうと云ふ事ぢやわいなア。
薄雲　そんなら、お行くへは知らしやんせぬかいなア。
こと　サア……マア、知らぬわいなう。
権兵　エヽコレ、どうぞ在所が聞きたいなう。
こと　父さん、お前は又、なんで在所が聞きたいえ。
権兵　イヤサ、おれが聞きたいは、オヽ、あれに逢はしてやらうと思うて。
こと　ハテ、娘思ひでござんすなア。
薄雲　久し振りで戻つたわたし。母さんの御位牌にも。
こと　それ〳〵、わしも一緒に其方を連れて、佛壇の母さんに自慢せうか。
薄雲　そんなら父さん。
権兵　ゆるりと休め。後に逢はう
こと　サア、おぢやいなう。
ト唄になり、お琴、薄雲を連れ入る。権兵衛、残り、こなしあつて
権兵　なんでも姉めが、おれに隠して、六角之助を匿まうて居るに違ひはない。どうぞ此奴を詮議して、褒美をせしめたいものぢやが。
ト思案して居るうち、向うより、雷雲右衛門、侍ひの形、奴、段助、付いて、勘兵衛も付いて出て来る。
雲右　勘兵衛、好い所で逢つたなア。
勘兵　私しも今、お前様を尋ねに行く所でござりまする。
雲右　段助、いよ〳〵この内へ、薄雲太夫を付け込んだに相違ないか。
段助　イヤモウ、奴めが黒い眼で、キッと睨んで置きました。
雲右　然らば、この家へ案内いたせ。
勘兵　アヽ、申し〳〵、雲右衛門さま、そんならお前様がお出でなさるゝ所は、この権兵衛が所でござりまするか。
段助　権兵衛であらうが、蒟蒻であらうが、引ッ捕へて件の吟味、なされませ〳〵。
勘兵　幸ひぢや。私しも彼處へ、今、行く所でござります。
雲右　ムウ、其方は又何しに。
勘兵　サア、お前様に請合つた薄雲が詮議、尋ね出したら

幅望み次第との事。その金を敷金の當にして、この内へ聟入り。ハテ、娘さへしめりや、理詰めで薄雲もお前の手に入れる道理。マア、約束のお金を、五十兩ばかり、今下さりませ。

雲右　何を馬鹿な、小澤山さうに……イヤマア、それも薄雲さへ、手に入らば、その時は、どうなりと致して遣はさう。

勘兵　必らずその詞違へて下さりますな。

雲右　ハテ、よいワ。武士の詞に二言はない。

勘兵　そんなら丈夫な仕事ぢや。お前はマア、暫らく爰に控へてござりませ。

ト雲右衛門、段助の兩人を待たせ、勘兵衛、内へ入る。

勘兵　親仁、内にか。

權兵　オ、勘兵衛、敷金の工面出來たか。

勘兵　誰れおやと思はんす、業の子勘兵衛ぢやわい。入金が出來いで來るものか。

權兵　そんなら合せうか。

勘兵　サア、貴公さま、こちらへお通りなされませ。

ト雲右衛門、ヅッと入る。權兵衛、顏見合せ

權兵　ヤア、あなたは藤崎雲右衛門さま。

雲右　權兵衛、其許が宿はこれか。

權兵　左樣でござります。マア〳〵、お通りなされませ。

勘兵　ハア、そんなら雲右衛門さまは、權兵衛どのとお近付きか。

雲右　近付きの儀か、身共等が大將、津の井ちんくわんどのの家來。

權兵　シイ。壺にも喰さぬ私しが本名、密かに〳〵。

雲右　權兵衛、何かは差措き尋ねたいは、先達て其方が盗み取りし千鳥の香爐。この程は分けて詮議嚴しいか。

權兵　お氣遣ひなされますな。この裏手の玉川の流れ、人知らぬ石中へ、親方が朝夕の衛で、しめ込んであれば知れてからが、取出される事ぢやござりません。

雲右　それで落ちついた。時に權兵衛、あの傾城薄雲と云ふは。

權兵　ありや、私しが娘でござります。

勘兵　サア、娘の薄雲に、雲右衛門さまが首つたけ。

雲右　幸ひ同心の其方。何卒娘薄雲、身共にたもるまいかと云ふ事。

權兵　イヤモ、何國の沙汰もこれ次第。

雲右　金銀には事かゝぬ雲右衛門、如何程でも其方の望み次第。

權兵　有り難い。金にさへなる事なら、今直ぐにでも進ぜます……イヤ、薄雲よ、娘よ。
薄雲　アイ〳〵。
ト納戸より出て
父さん、なんの用でござんすえ。
權兵　其方へ用は外でもない……ソレ、連れてござりませ。
ト薄雲を突き出す。
雲右　サア、來い。
ト手を取る。
薄雲　こりや、雲右衛門さん、なんとさしやんす。
雲右　何をとは、嶋原へ突出しのその夜から、通ひ詰めた雲右衛門。振つて〳〵振りつけ、身請けの相談を聞くが否、よう駈落ちひろいだな。
薄雲　駈落ちしたは間夫への心中。嫌なお客は振り通すが、勤めの意氣地でござんすわいなア。
段助　お旦那様、四も五もござりませぬ。親權兵衛に貰うた上は、連れて去んで御祝言。
勘兵　この勘兵衛は仲人役。
權兵　金と娘と引換へに。

雲右　否でも應でも連れて去ぬ。薄雲來い。
薄雲　オヽ、嫌ぢやわいな。
段助　お旦那、手ぬるい。引ッかたげてお歸りなされ。
薄雲　ア、コレ、無體な事さしやんしたら、[illegible]を噛いてえ。
權兵　大事ない。親のおれがする事、構はずと連れてござりませい。
薄雲　アレ〳〵。
ト薄雲、いろ〳〵逃げ廻り、中二階へ走り入る。主人續いて中二階へ追ひかけ入る。段助、障子越しに二階より見事に抛り出される。二階の障子開くと、淺平、男達の形。雲右衛門、勘兵衛を一緒に落ち上げ、煙草のんで居る。
勘兵　アイタ、、、コリヤ、骨が碎ける。兩方はづむか、どうするのぢや。
雲右　コリヤ、[illegible]な。なんとする。
淺平　イヤ、なんともせんが、この淺平が居る所へ、斷わりなしに踏ん込み、逆ねだりするお侍ひ。マア、其所へ出てゆつくりと、逢ひやんせうわい。
ト兩人を突き放し、煙草盆提げ下りて來る。兩人、氣な

呑まれし思ひ入れ。

勘兵　コレ、雲右衛門さま、夫の渡平ぢや。

雲右　ナニ渡平。例へ渡平にもせよ、千平にもせよ、親に貰うた薄雲を、連れ歸るに、なんの事。

段助　ヤイ、渡平とやら、卑怯千萬な。思ひかけなうずでんどう。骨に生別れさそうとは、推參千萬。弓矢八幡、びやくらいこくらい。

渡平　エヽ、喧ましいわえ。この渡平の女房が、三百兩出して身請けした薄雲。只連れて去なう。其やうなアタ巧い事は、マア、この渡平がさすまいワ。

雲右　權兵衛、一旦くれうと云つた薄雲。コリヤ、どうするのぢや。コリヤ。

權兵　ハテ、ようござりまする。私しが仕樣がござりまする。

ト權兵衛、思ひ入れあつて、尻絡げ、片肌脫ぎ、鉢卷して

權兵　ヤイ、紺た渡平の思知らずめ。ヤイ、大枚の金になるお薄雲めを、僅かの敷金で入り聟さらし、朝夕ふんすんふんすんと、馳走し揚げ代せうかい。まだその上に、百日の上にむしうつて、娘からかゝり人まで、只喰ひ潰さして置いたと思へ。その入れ合せせうと思うて、敷金持つた聟を取らうと思や、おのれが牢から出さつて、なんぢや、薄雲やるまい。コリヤ、高が入り聟、退けば他人。眞實の親のおれ樣が遣らうと云ふに、なんで又邪魔さらしやがる。

渡平　イヤ、全く邪魔は致しませぬ。

三人　邪魔せぬものが、なんで又。

渡平　薄雲が立て金は三百兩、お侍ひ樣、金に事缺かぬが定なら、耳を揃へて三百兩、今爰で受取りませうか。

雲右　ヤア。

渡平　お聞きの通り、御恩になつた親仁樣、ちつとなりとも儲けて進ぜたい。苦しうなか三百兩、妹と引替へにして下さりませ。

雲右　イヤサ、その金は。

渡平　そのお金は。

雲右　サア、金は。

渡平　ござりませぬか。無いか。無くば、マア、薄雲を遣る事も、ならぬやうなものでござりませうかい。

權兵　イカサマ、こりや聟どのが尤も。なんでも娘は金と引替へにするがよい。

渡平 親仁様、これぢやに依つて邪魔したが、お前、お腹が立ちますするか。
權兵 サア、それは。
渡平 迂闊に渡平が粗相もござりますまい。
勘兵 雲右衛門さま、そんならお前、金が澤山にあると云うたは。
雲右 どうぞして薄雲が、手に入れたいばつかり。
段助 お旦那の出來心ぢやわい。
權兵 エヽ、忌々しい。せめてお琴めが敷金なりと、勘兵衛どうぢや。
勘兵 雲右衛門さま、サア、背中に腹ぢや、褒美の金は。
ト雲右衛門、勘兵衛の方を見て吐息つく。
そんならアノ、褒美遣らうと仰しやつたは嘘か。
雲右 エヽ、喧ましい。まだ薄雲は手に入らぬわい。
勘兵 何を云うたて〻金も無い擧句に。
トぼやく。
權兵 そんなら敷金の才覺もならぬか。
ト勘兵衛、怨めしさうに雲右衛門を睨めて吐息つく。
そりやこそ、また難儀ばせ。
渡平 お侍ひ。サア、身請けの金は、どうでござります。

雲右 イヤサ、何を云うても金は途中。
渡平 待ちませう。
雲右 ヤア。
渡平 お定まりの夜半の鐘まで、身請けの金、待つてやりませうわい。
雲右 エヽ、猶豫忝ない。
渡平 併し、夜半の鐘がゴンと鳴つたその時には、斷わらぬが合點か。
勘兵 どうやら、[illegible]の押し勝手が違うたが。
權兵 そんなら約束の敷金も、
勘兵 とてもの次手ぢや。夜半の鳴るまで。
權兵 待つてやる。
渡平 夜半の違はぬやう。
雲右 そりや、この方に如才はない。
權兵 おれもまゝ直しに、奥へ行て一寢入り。
勘兵 エヽ、コレ、現在生れたお琴が手に入る敷金。
雲右 薄雲が身請けの金。
段助 お旦那の恥辱も金。
雲右 四百四病の病より。
勘兵 貧程さて辛い物は。



初演の繪番附

三人　ないわいやい。
　ト泣く。
權兵　エヽ、忌々しい。なんの事ぢや。
渡平　きり〳〵金を才覺せんかの。
三人　サア、するわい。
權兵　エヽ、忌々しい。
　ト三人を抛り出す。
三人　こりや又あんまり。
　ト權兵衞、門の戸ぴつしやり。
權兵　ようごんした。阿房らしい。
　ト唄になり、權兵衞、ぼやき〳〵奥へ入る。三人ムウと手を組み、思案して、三人騷き合ひ入る。後にて、渡平、いろ〳〵思案して
渡平　寶紛失の科を、身に引請けて今度の入牢。直ぐに死罪にもなるべき所をば、命助かつたも帶刀さまのお情。その時密かに仰せつけられたは、千鳥の香爐詮議の證據は、この伽羅の下繪。また追放の若殿のお身の上、くれ〴〵とのお頼み。命助かつた恩返し、忠義立てるもこの時と、戻つて見れば思ひがけない、お二方を女房が、お世話申すは天の與へ、香爐の詮議、慥かにそれとは思へども、證據なければ迂濶にも……ハテ、なんとしたものであらうなア。
　ト云ふ所へ、お琴、出て
こと　こちの人、ちやんと爰へ來てかいなア。そしてお前は戻り〳〵、月代したり風呂へ入つたり、お前、飢じうはないかえ。茶々漬でも上げうかいなア。
渡平　イヤまだ、何も食ひたうもないが、お二方に、なんぞ上げましたか。
こと　アイ、イヤモウ、何を上げましても只、太夫に逢ひたい、殿樣に逢ひたいと泣いてばつかり。
渡平　イヤモウ、色の世の中ぢやて。
こと　お前あの、色の世の中ぢやと云うて、わたしや久しう側へ寄らす、アノ、牢の中にも女中さんがあるかえ。又らつちもない事など出かけはせなんだかえ。
渡平　何を阿房ばかり。
こと　イエ〳〵、さうぢやござんせぬ。マア、何處もかも改めて見て。
　ト懷中へ手を入れ、嫌らしうする。
渡平　ア、コレ、何しやる。こそばいわいの。
こと　でも、改めて見にや氣が濟まんわいなア。

渡平　ハテ、そりや晩の事ぢやわいやい。

こと　アノ、誰れもあたりに居やせんぞえ。

渡平　これはしたり、晝中ぢやわいの。

こと　アノ、納戸は暗いなア……エヽ、こちの人、コレイナア、納戸は暗いぢやないかいなア。エヽ、辛氣やなア。

渡平　なんぢやいの。

こと　それぢやに依つて、女子はないかと云ふのに、あつたな。こりや、あつたに違ひはないわいな。

渡平　阿房らしい。いろ〳〵の事を云ひ出すわいの。イヤ、女房ども、おりや與で、味いな物を拾うたわいの。

こと　ムウ。何を拾はしやんした。

渡平　これ見や。こんな物。

ト最前の紙入れを出して見せる。

こと　エヽ。

渡平　わりや駭りなしたか。盜賊になつたたな。如何に貧苦に迫ればとて、女の身のあるまじい盜人騙り。現在連れ添ふ男の顏に、泥を塗る不屆き者。エヽ、おのれはなア。と叱りはせぬ。女房、よく盜人になつてくれたなア。

こと　エヽ、なんと云はしやんす。

渡平　あゝ云ふ氣な男どの。よもや得心で、お二方を匿まひ負ふせる事はなるまいに、ハテ、合點の行かぬと思ふ矢先に、浦雲が身請け、親仁樣への心付け、斯うならうてなんとせう。女房、夫が手を仕へて禮を云ふ。出かした。過分な。嬉しいぞよ。

ト拜み〳〵泣く。お琴、大泣きして

こと　さう云うて下さんすりや、千倍でござんす。斯う云や甘へて云ふやうなけれど、この六月にお前が云はしやんす事にや、以前のお主、佐々木六角之助さま、お家騷動の元は寶の紛失。盜賊が知れねば、日延べの願ひは叶はぬ。何卒暫らく盜賊になつてくれまいかと、帶刀さまのお頼み。御恩を送るはこの時と、喜ばしやんすを聞いて喫り。留める間もなうお前は牢舍。こりやマア、なんとなる事ぢやと、泣いて暮らす折も折、不思議に若殿樣お姫樣に巡り合ひ、夫の忠義を立てるは爰と、お供はして戻つたけれど、知つての通りの父さん。わつぱつさつばを云はさぬやうに、口塞げの金の蔓。おるいが夫の文七と、云ひ合しての騙り事。妹の身請けも、どうやら斯うやら、金拵らへた三百兩。怖い切ない恐ろしい、術ない峠の山も、お前に話して褒められうと、思ふ間もないこの白狀。お前の男を捨てさせたも、みんなわたしが鈍

なから。渡平どの、堪へて下さんせ。堪忍して下さんせいなア。

ト大泣き。この間に表へ醉川の土左衛門、すつぽん馱左衛門、かんちの金左衛門、髭剃りの九右衛門、盗人の形にて、門口に窺うて居る。

渡平　サア〳〵、もうよい。尤もぢや〳〵。舅どのへ聞えても悪い。モウ〳〵、泣き止め〳〵。

こと　お前其やうに云うて下さんす程、せんぐり涙が出て、根ツから泣き止まれるこつちやござんせん。

トないぢやくりして泣く。

渡平　サア〳〵、道理ぢや〳〵。命を的の騙り事も、お主へ忠義。おれへの貞節。ようマア騙りになつてくれたなア。

ト土左衛門、門の戸ガラリと開け

土左　様子は聞いた。皆合點か。

馱左　合點ぢや。

四人　女め、覺悟。

ト皆々懐劍逆手に振り上げる。渡平、お琴を圍うて

渡平　コリヤ、うぬら、何をさらすのぢや。

九右　何ともせん。われが女房は騙りぢや。

金左　盗人ぢやに依つて、ばらすのぢやわい。

渡平　盗人をばらすと云ふ。おれのらの姿も知れた盗賊、一目見ても知れてあるわい。

土左　オ、、好い推量。おりや醉川の土左衛門と云ふ、巾着切りの大將ぢや。

馱左　オ、、おれが名はすつぽん馱左衛門。

金左　かんちの金左衛門。

九右　髭剃りの九右衛門と云ふ

四人　名の高い、しらぢやわやい。

渡平　その又わいらが、女房をなんとするのぢや。

土左　面妖、この頃は仲間の得手が少いと思へば、あの新米の仲間はづれ、美しい嬌妻ぢやと油斷さして、いがめるは、はい油ではんべや。

馱左　こちらの仲間の妻徒ぢやゆゑ。

四人　貰ひましに來たのぢやわやい。

渡平　成る程、尤もぢやが、これには段々様子のある事。如何にも貴様達の商賣の邪魔をしたは、此方が悪いが、高が女子の後先なし。どうぞ料簡して下され。料簡にあづかりたい。

土左　エ、、知らんわい。

ト渡平を蹴る。
こと　こりや、こちの人を。
　ト渡平、引き廻して
渡平　コリヤ、奥には御両所。
四人　ヤア。
渡平　イヤサ、お年寄りの御両親に聞かしては、どうもおれが済まぬに依つて、十重の膝を八重に折つて。
駄左　コリヤ、そんなで料簡するのぢやないわい。
　ト蹴倒す。渡平気色する。
四人　なんぢや／＼。
渡平　オ、、重々の不調法。どうぞ無事にこの場の納まるやう。
土左　料簡つけてくれいか、
九右　よいワ。とこ吠え廻つて頼む事なり、料簡つけてやらうわい。
渡平　そりや忝ない。して、その料簡は。
四人　仲間入りせい。
渡平　ヤア。
土左　イヤサ、仲間入りさへすれば、まだこの上に居座つて居て、符牒も遣る。今までの事は料簡してやるが、なんと女夫ながら、仲間入りする心はないか。
渡平　イヤサ、それは。
　トじつと思案する。
駄左　不得心か。
金左　成る程、ばれる時には一蓮托生。つい應とも云はれまい。よいワ。この上の料簡つけて
九右　仲間へ扱ひの金さへ出しや、料簡せうわい。
渡平　して、扱ひの金は。
四人　耳を揃へて二百両。
渡平　ヤア。
土左　サア、後とも云はず今爰で
四人　受取つて行かうわい。
徳兵　イ、ヤ、金出す事も仲間入りも、さす事ならぬぞ。
　ト奥より出る。
こと　ヤア、お前は父さん。
徳兵　娘、わりや大きな事を拵らへ出したなア。我が心一つぢやあるまい。大方聟どのと云ひ合せ。さう云ふわいらを、片時此方の内に置いて、親にまで首綱のかゝる事はならぬ。サア、聟どの、娘を連れて、キリ／＼出て行つてもらひませうぞ。

こと　父さん。
權兵　なんぢや。
こと　エヽ、お前はなう。
權兵　なんぢや〳〵。親に向うてしろなまこ。おれをどうぞする心か。アノ不孝者めが。
こと　コレ、あの薄雲はお前の爲には。
權兵　知れた事、娘。
こと　イヽヤ、娘ぢやない。お主ぢや。
權兵　ヤ、なんと。
こと　わしやお主の名は、なんと云ふか知らぬけれど、幼ない時からお前が、鐘吉郎とも預かつて、成人さすと吉原へ賣り渡し、流れの里に憂き艱難。お主の子なり義理ある妹、どうぞ勤めを引かしたいと、思へど金の才覺ならず、思ひついての騙り事も、身の慾にするのぢやない。妹が爲は巡り〳〵て、矢ツ張りお前の爲。三方四方の爲と思うて、女子の身で大それた、ひよんな事してこの場の納まり。わたしやどうせう、なんとせうぞいなア。
ト泣く。
金左　お主達が因果物語り聞きにや來ぬ。
駄左　仲間へ入るか。金出すか。返事しや。返事は

四人　どうぢやい。
權兵　ごくにも立たぬ世迷言。以前は兎もあれ、今は三人ともに、おれが子に違ひない。うぬらがこんな氣になりさらしたも、皆われが入れ根性。矢ツ張り牢に居ればよいもの。出ると其まゝ斯う云ふ難儀。エヽ、思へば〳〵腹の立つ。さうして、いろ〳〵の物、牢の中から貰うてうせた。その下駄は、いつぞおれが。
ト渡平が懐中へ手を突ツ込み、下駄を引き出す。渡平、それをとかゝるを、ちよつと立廻りにて、思はず以前の大和風呂へ燻べる。兩人、ハツと驚ろく。このキツカケにこの唄、合ひ方、千鳥の啼く聲する。權兵衛、惘り。渡平、お琴、思ひ入れあつて
こと　今の千鳥の啼く聲は、
渡平　慥かに懐。
・トちよつと權兵衛と立廻りあつて
權兵　コリヤ、渡平、何する。
渡平　イヤサ、ちよつと懐を。
ト立廻りにて留める。
權兵　イ、ヤ、おれが懐には何にも無い。こりや、盗みがしたらいで、親の懐の物までも渡平、わりや念がけるの

ぢやなア。
渡平　オヽ、念がけにやならぬ千鳥の啼く聲。帶刀さまの頼みの盜賊。
ト行かうとする。お琴、引き廻して
こと　コレ、捕へて見れば男は親、わたしが爲には現在父さん。
渡平　ヤ、なんと。
こと　この場で詮議さしやんすと、夫婦の縁が切れまするわいなア。
渡平　斯うなつたりや、夫婦の縁も。
こと　サア、さう云ふお前の男氣ゆゑ、この詮議に、わたしに預けて下さんせ。恩に着せるぢやないけれど、これまでの辛抱。サア、眞底ないこの功に、免じてどうぞ。
ト拜む。
渡平　如何にも、暫しの猶豫は夫婦のよしみ。男どのゝ心さへ改まれば。
こと　嬉しうござんす……父さん。
權兵　なんぢや。
こと　親子のよしみ、娘可愛が定なら、あの衆達に貳百兩の金遣つて、この場の出入りを濟まして下さんせ。
權兵　さま〴〵の事を吐かす。うぬらが盜みすりや、なんで又。
こと　ハテ、子の罪は親のかゝりうち。
權兵　サ、それぢやに依つて、うぬらは勘當。
こと　勘當はたつた今、騙りの科はこの間から。すりや、矢ツ張り罪はかゝりうち。
權兵　ヤ。
渡平　但し、懷の內、吟味しぬかうか。
權兵　サア。よい〳〵。挨拶もする。貳百兩も出す。
こと　そんならわたしらを勘當する事も。
權兵　もう止めぢや。勘當しやせん。これでわいらが十分であらう。
こと　サア、そんなら早う挨拶してしまはしやんせ。
權兵　エヽ、忌々しい。する程の事がへこたこぢや。コリヤわいら、もうよい。おれが挨拶ぢや程に、早う去ね。おれが好いやうにして置かうわい。
土左　そんならよいか。こなさんが呑み込みか。
權兵　ハテ、よいと云ふのに。
四人　こなさんがよけりや、去なうわい。
權兵　渡平、これでよいか。

渡平　ハテ、早い改心のさせやうぢやなア。
こと　ハテ、もう得心さへさしやんしたら、ようござんす。
權兵　ドリヤ、おれも奥で一寢入り。コリヤ、わいら去ね。
四人　そんなら、お頭。
權兵　ヤア、コリヤ。
ト云ふなと云ふ事目交ぜする。
四人　イヤ、親仁どん、さらばでごんす。
權兵　皆ようごんした。
ト唄になり、權兵衛、奥へ入る。四人は橋がかりへ入る。
こと　こちの人、よう堪忍して下さんした。よう料簡して下さんしたなう。
渡平　帶刀さまに請合うた、千鳥の香爐の詮議は、思ひがけない鬼權兵衛。もし荒立てば寳の破却、荒立てられぬ寳の詮議。ハテ、なんとしたものであらうなア。
ト云ふ所へ三平出かけ
三平　イヤ、渡平どの、それにござるか。
ト兩人、顏見合せ
渡平　ヤア、あなたは板倉主膳さまの御家來、津輕三平さま。
三平　出牢の樣子承り、早速參上。
渡平　先づはこなたも御健勝で。
三平　貴殿にもお變りない體。
渡平　して、今日のお出ではな。
三平　少と其許に折入つて、お頼み申す仔細がある。
渡平　して、その仔細はな。
ト三平、懷より繪姿を二枚出し
三平　この兩人を、出さつしやれ。
ト渡平、お琴、取つて開き見て
渡平　年の頃は二十三四、中肉にして色白く、佐々木大領の子息六角之助。
こと　この一枚は、年の頃は十八九、色白くして瓜實顏、吉原の傾城高尾、今の名は薄雲。
渡平　こりや、若殿の人相書。
こと　こりや妹の繪姿。
渡平　して、若樣には何科あつて、繪符を以て。
こと　二人は御詮議なされまするな。
三平　佐々木六角之助どの、遊興に長じ、吉原の傾城高尾を、過分の金子を以て請け出し、國の寳を盗賊に奪はれ、剩さへ親大領に云ひ譯けの千草姫と密通。畜生同然の行

ひ。
ト此うち、両方の障子屋体より、千草姫、六角之助、聞いて居る。納戸より、渡琴、出かけ、立聞きして居る。爰にて、千草姫、六角之助、ツカ〳〵と下りて

六角　主人千草姫どのゝ家来渡平、其方に尋ぬる。六角之助、縄目の恥に及ばんより、今切腹するを見物いたせ。
ト既に切腹せうとするを渡平留めて

渡平　これ申し御短慮な、お待ちなされ。

千草　イヤ、六角之助さまに科はない。密通の云ひ訳は、自らが今爰で。
ト自害せうとするをお琴留めて

こと　コレ、早まつた事をなされまするな。

六角　イヤ、云ひ訳はこの六角。

渡平　コレ待つた。

千草　イヤ、密通の科はこの千草。

渡平　コレ待つた。

こと　ハテマア、お待ちなされませい。

渡平　代々伝はる佐々木のお家、無實の汚名にやみ〳〵と。

こと　今自害なされては、身の明りが立ちませぬが。

渡平　佐々木の正統断絶して、御奉行が立ちまするか。

こと　畜生の名を取つても、お果てなさるゝお心か。

渡平　女夫の者がこれ程に

こと　忠義を尽す心根を

渡平　思ひやつて御切腹

こと　御生害を

渡平　お止まりなされて

両人　下さりませいなア。

六角　志しは嬉しけれども、生きて居てはどうも。

三平　イヤ叶はぬ。召捕つて立帰れと、主人の仰せ。尋常に縄かゝれ。

渡琴　ヤ、なんと。

三平　とサア、爰に御座なさるゝならば、申さねばならぬ所なれども。

渡琴　エヽ。

三平　お行くへ知れねば、是非に及ばず。

渡琴　そんならこの場を見遁がして。

三平　イヤ、代りに立てるは高居が御姿。

こと　妹には又何科あつて。

三平　科の仔細はこの守。

三平　この守は蝦夷錦。

こと　その守を妹が科とは。
三平　五枚笹を織り込みし蝦夷錦は。
渡平　いつぞや津の非が物語り。
三平　兄弟の子に分け與へしと云ひしは、即ちこの蝦夷裂れ。
こと　そんなら妹を捨てたる親は。
三平　蝦夷の寵臣、津の非ちんくわん。
渡琴　エ、。
三平　コリヤ、二人を助くるこの守。功の立つやうな事か、有りさうなものおやぞよ。
渡平　ナニ、お二人を助くる
こと　功とはな。
三平　胡沙吹かば曇りもやせん陸奥の、蝦夷には見えで秋の夜の月。
渡琴　して又蝦夷の心はな。
三平　津の非が行ふ薄雲の結界、これを消さんと思ふ時には、秋の夜の月を移せし清水、彼れが同性同體の、男女の血潮を濺ぐ時は、忽ちに妖術滅すと聞く。その片割れはな……その守。
渡平　が今一人の男子の血潮が。

三平　調へる工風が肝心。
こと　どうぞそれまでの御容赦。
三平　長うは叶はぬ。
ト三平、二枚の片袂を取つて、最前の衝立の兩端へ鎹にて縫ひつけ、水手桶に活けてある花を取つて眞中へ出て
行くへ知れざる二人の片袂。二人へ分けて情を掛ける。
渡平　して、有無の返事の
こと　刻限は。
ト三平、右の花を取出し
三平　所に在せし仁類の古歌。野路の玉川を詠えて
渡琴　色なる浪に
三平　月の宿るが返事の決着。
六角　でも、千鳥の香爐の在所も知れず
千草　不義の悪名も雪がれねば
三平　實の詮議も懸念も
渡平　磨き清むる玉川の
こと　水も濁らさぬ御夫婦に
三平　なるかならぬか工風はこの花。
渡琴　お返事キッと。

三平　相待ち申す。

ト唄になり、三平、こなしあつて入る。と薄雲、走り出て

薄雲　最前からの様子は聞きました。そんならわたしは、津の井とやらの娘で、お前様とは敵同士。でも何時までもお側を離れる事は、嫌でござりまする。

千草　自らとても、どうぞ親子の悪名消え、生きるとも死ぬるとも、お側に置いて下さりませいなア。

六角　すりや、この身の放埒ゆゑ、国の騒動、親人の御最期。千草殿とは親子の懸名、云ひ交した高尾は敵の娘。宝の行くへ。なんとも今宵中に知れぬ時は、先祖へ不孝、家の断絶。死ぬるにも死なれぬとは、エヽ、こりやマア、なんとせう。どうした因果な身の上ぢやぞいなう。

ト大泣き。この時、銅吉、出かけて、薄雲を見て恟りし、また嬉しき模様、いろ／＼あつて、好き所にて、ツカ／＼と走り出て、薄雲を引き離し

銅吉　オヽ、さうぢや／＼。逢ひたかつた／＼。

ト抱きつく。薄雲、恟り振り放し

薄雲　オヽ、これは誰れぢやぞいなア。

ト銅吉、また取りついて

銅吉　誰れぢやとは胴慾な。この日頃、逢ひたい／＼と思うたお山さん、爰で逢うたは神佛の引合せ。コレ、どうぞ女夫になつておくれ／＼。

渡平　こりやマア、なんのこつちや。

こと　コレ銅吉、其方が惚れた傾城と云ふは、アノ高居が事か。

銅吉　高居か知らぬが、あのさんに惚れたのぢや。コレ、渡平さん、姉さん、常々その惚れた女子が知れたら、女夫にしてやらうと云はんした。アレ／＼、來て居る來て居る。サア、早う女夫にして下さんせ。

渡平　すりや、現在の妹とも知らず……ムウ。

ト思案する。

こと　兄弟一つに育たぬゆゑ、様子知らねば妹に、惚れたを無理とは思はねど、何萬何千ある女子の中で、添ふに添はれぬ妹、あれ程に戀ひ慕ふと云ふは、可哀や／＼。

ト泣く。六角之助、この間にうつとりとなる思ひ入れあつて

六角　なんぢや。可愛い。何が可愛い。その可愛い嫁は母者人。親仁様に首がない。獄門にかけい／＼。ハ、、、ハ、、、。

渡平　申し、それは何を御意なされまする。
こと　今の三平さまのお詞、正直な突き詰めたお心から、
ハッと思うて。
薄雲　そんたら、お氣が狂うたかいなア。
こと　エヽ、つッとモウ、時も時、折も折。
渡平　大事の場所で、エヽ、お情ない。
千草　コレ申し、千草でござりますわいなア。
薄雲　コレ申し、高尾でござんす。見違えて居さしやんすか。
千薄　正氣になつて下さんせいなア。
六角　なんぢや。正氣になれ。そんならおのれらは、鬼どもぢやな。鬼にしては白鬼ぢやな。白鬼め、寶を返せ寶を返せ／＼返せやい。
ト泣く。
銅吉　コレ姉さん、渡平さん、常々惚れた女子が知れたら、女夫にしてやらうと云はしやんしたは嘘か。
こと　これは又情ない。コレ、最前から云ふ事、なんと聞きやる。あの高尾は、現在の其方の妹ぢやぞや。その妹と、なんとマア。
渡平　イ、ヤ、この渡平が女夫にする。
こと　エヽ。
銅吉　アノ、女夫にして下さりまするか。
渡平　女夫にせいでなんとせう。銅吉……ようわりや高尾に惚れたなア。
銅吉　アイ。ゑらう惚れて居やんす。
渡平　オヽ、よう惚れた。出かした。おれが請合つて夫婦にする。喜べ／＼。
こと　コレ、こちの人。そりや何云はんす。生さぬ仲でも銅吉は、アノ高尾と。
渡平　サア、現在血を分けた兄妹ぢやに依つて、この渡平がお念願。女夫にして遣はすのぢやわやい。
六角　女夫事よかろ。おれもせう／＼。サア／＼、嫁入りぢや嫁入りぢや。こりやおかしい。嫁が泣くか。われも泣くか。泣き上戸ぢやなア。こりやけうとい。ハヽヽ、ハヽヽヽ。
千草　サア、その嫁入りの間違ひゆゑ、現在兄妹は偕に置きながら、添ふ事ならぬ男子の縁。
薄雲　敵の娘でも、こちや知らぬ事ぢやに依つて、矢ッ張り女夫でござりまするぞえ。
銅吉　サア、渡平さん、早う女夫にして下さりませ。

渡平　如何にも、たつた今祝言さゝう。
こと　コレこちの人、意見もして下さんしさうなお前が、共に戀の取持ちをさしやんすは。
渡平　一旦銅吉に請合うた詞、立て抜くが渡平の氣性。
こと　そりや、兄弟と知らぬ昔し。知つて取持ちさしやんしては、
渡平　神代の昔は皆兄弟。一旦渡平が請合つた詞は金鐵。幸ひ、お身……イヤサ、この身に代つて仲人は、女房、われに言ひつけたぞ。
薄雲　嬉しうござんす。畜生になる縁者は、この高尾が嫌ぢやわいなア。
こと　さうぢや。其方は矢ツ張り殿樣の側に。
渡平　イヽヤ、置く事ならぬ敵の娘。若殿に成り代り、この渡平が緣切つた。
薄雲　エヽ。
渡平　女房、其方、暇やつた。
こと　エヽ。
渡平　サア、二人とも、元の夫婦になりたくば、高尾は銅吉と祝言せい。女房は仲人役。頼みの印はこの一本。
こと　アノこの萩を。

渡平　折惡い若殿の狂氣。油斷のならぬ男の底意。月の出潮も近づく節は、この身一つに重なる難儀も、解き負ふせるはこの萩の謎。女房、しかと預けたぞ。
こと　なんぢや知らぬが、むづかしい萩の謎々。もしこの謎が解けたらば。
渡平　今までの替らぬ夫婦。高尾どのも夫婦にさす。
薄雲　エヽ、嬉しうござんす。
渡平　お琴、謎の返事がこの身の落着。返事を奥で、待つて居るぞよ。
ト唄になり、千草姫、六角之助の手を取る。六角之助、振り切り奥へ入る。渡平、こなしあつて付いて入る。薄雲ハアと泣き落す。銅吉、後にいろ〳〵こなし。合ひ方になる。
銅吉　姉樣々々。早う祝言さして下さんせぬかいの。
薄雲　姉樣、こりやマア、なんとしたらようござんすぞいなア。
こと　殿樣と添ひたくば、銅吉と祝言せい。元の女夫になりたくば、兄弟女夫の仲人せいと、無理な事ばつかり。日頃男氣な、非道な云はぬこちの人。この萩の花を判じ物とは。

銅吉　姉さん、早う祝言がしたい。どうもならぬ。コレ妹と
サア、祝言せう。おぢや／＼。
ト手を取る。
薄雲　エヽ、つッとモウ、兄さんだてら、自堕落な。そん
な嫌ぢやないわいな。なんでもマア、殿さんのお側へ。
銅吉　イヤ／＼、やる事ならぬ／＼。
薄雲　エヽ、モウ、邪魔して下さんすないなア。
ト納戸へツイと入る。
銅吉　姉さん／＼、妹は奥へ行つたか、だんないかえ。さ
うぢや。おれも一緒に。
ト行かうとするを、お琴留めて
こと　銅吉待ちや。コリヤ何處へ。
銅吉　何處へと云うたら妹に引ッついて居やんすわいの。
こと　コレ、其方はあの高尾とは、肉親の血を分けた兄弟
おやぞや。
銅吉　兄弟なんぢやいな。他人さへ女夫になるもの。兄弟
女夫にならいでかいな。
こと　そんなら、どのやうに云うて聞かしても。
銅吉　惚れた／＼／＼。どうもならぬわいなう。
こと　可哀やなア。幼ない時からおかしい蟲で、版古でも
燈籠でも、これを買はうと思うた事を、替へぬ氣性。フ
ッとあの子を見染めた一念で、最前も近所の娘達が、花
に准へて仕掛けて見ても空吹く風。我が思ひ詰めた女よ
り、外に女子は無いものゝやうに、一筋な心が可愛い。
ト泣かうとして
と云うて添はしては畜生。添はねば夫婦の縁も切れ果て
る縁のこの花。ハテ、どう云ふ心であらうなア。
銅吉　そんなら、どのやうに思うても、妹には添はれませ
ぬか。
こと　御殿樣の相方なれば、高尾はお主同然ぢや。
銅吉　大事ごんせん。
こと　アノ、現在の兄弟でも。
銅吉　たんともない、
こと　マア、それ程にまで。
銅吉　コレ、堪忍して下さんせ／＼、／＼。
ト泣く。
こと　エヽ、因果な惡縁ぢやなう。
ト　お琴、思案して、髮に針を刺しあるこなしにて抜き
取り、無姿な銅吉が帯に縫ひつけて
まだ其方には意見もあれど、心の急くはこの場の[illegible]、奥

でとつくり思案の間、其方は爰に。

銅吉　イヤ、わしも一緒に高尾が側へ。

　ト行かうとする。

こと　それ〳〵、其方が今、無理に奧へ行くと、戀と血筋に絡んだ縫で、高尾の姿が切れ損じるが。

銅吉　エヽ。

こと　サア、可愛く思ひやる妹の、繪姿が切れ破れても大事ないか。コレ、その繪姿が切れ損じると、其方の縁も切れるぞや。この上は思ひ切つて、兄弟仲よう一緒に暮さうとも、無理に縁の絲を切り、兄弟ばら〳〵にならうとも、其方の心一つぢや程に、とつくりと思案をして、銅吉、後に逢ふぞや。

　トお琴、絲を持ち、思案のこなしにて奧へ入る。銅吉殘り、獨吟になる。うろ〳〵奧へ行かれぬ思ひ入れあつて

銅吉　エヽ、なんのこつちやいの。姉さん、折角逢ひ逢うたあの傾城、常から添はしてやると、嘘云うて騙して、今さら思ひ切れとは。あんまり氣強い。胴慾ぢや〳〵、胴慾ぢやわいなう。

　トまた獨吟になり、銅吉、よろしくあつて

エ、コレ、奧へ行きたいけれど、それではこなさん、繪が胴切りになるに依つて、それで奧へよう行かんぞや。これいなう、その美しい顏形に、只さへ拔けかゝつたおれが魂ひ。みな其方へ拔いて取つて、いま此やうになつて居る、おれを不便な事ぢや、可愛い事ぢやと、たつた一度、抱いて寢て下され。コレ、どうぞ頼みます、拜みます。これ程云ふのに返事のないは、エヽ、この殿さんへの心中ぢやの。コレ、殿さん、お前もお姉さんと云ひ、妹まで、二人、三人あるこつちや。どうぞ高尾を、わしに貸して下さんせ。情ぢや、慈悲ぢや、コレ申し。物云うて下さりませ。物云うて下さりませいなう。

　ト泣く。この間、權兵衞、後へ出かけ、窺ひ居る。

權兵　氣遣ひすな。銅吉、親が許して添はしてやる。

　ト針を拔く。

銅吉　ア、コレ、その針が拔けると姉さんが。

權兵　大事ない。針が拔けても親が添はす。おれが女夫にするわいやい。

銅吉　エヽ、そりやマアお前、ほんまの事かえ。

　ト權兵衞、脇差拔り出し

權兵　切つてしまへ。

銅吉　切れとは誰れを。

權兵　あの氣狂ひの若殿を。

銅吉　エヽ。

權兵　あの若殿があるうちは、われが戀は叶はぬぞよ。

銅吉　そんなら、若殿さへ殺してしまへば。

權兵　妹は、ずる／＼べつたり。

銅吉　その後では、わしと高尾と。

權兵　親が許して女夫の杯。

銅吉　エヽ、嬉しうござんす。

權兵　一時も早う、ばらしてしまへ。

銅吉　して、若殿は。

トこの時、奥より、雲右衛門勘兵衛、六角之助と薄雲を引立て出る。お琴、千草姫、出て來る。

雲勘　その若殿は、コレ爰に。

千草　さうはさゝぬ。

トいろ／＼こつちやの立廻り。六角之助、見て

六角　ハア、、角力取るか／＼。おれも取るぞ／＼。

銅吉　若殿々々。

ト六角之助にかゝる。

こと　さうはさゝぬ。

勘兵　お琴、われを。

ト抱きつく。

雲右　薄雲われを。

ト抱きつく。

こと　さうはさゝぬ。

ト引退ける。この立廻り、すべてごつちやにて、好き所へ渡平出て、勘兵衛、雲右衛門、兩人を投げる。此うち、お琴、銅吉を引退ける。六角之助は狂うて向うへ入る。千草姫、薄雲を振り切り走り入る。薄雲、追ひかけうとするを、銅吉捕へる。薄雲、振り切り向うへ走り入る。銅吉、追ひかけうとするを、渡平、捕へる。銅吉、振り切り追ひかけ入る。渡平、行かうとするを權兵衛、捕へる。お琴、權兵衛を引き放す間に、渡平向うへ追ひかけ入る。この後を勘兵衛、雲右衛門、慕ひ入る。權兵衛、行かうとするを、お琴、立廻りのうち、前の流れへ香爐を投り込む。お琴、權兵衛を引き離し詰め寄せ

こと　コレ父さん。お前はたう。

トこれにて、返し。この道具廻る。この間靜かなる本釣り鐘。

造り物、一面の萩、舞臺中三百本ばかり、玉川の流れ、所々に岩、蛇籠のあしらひ。しめやかなる合ひ方。蟲の聲。本釣り鐘幽かに撞いて、向うバタ〳〵にて、薄雲、薄暗がりの心にて逃げ出て

薄雲　エ、、つッたモウ、殿様やお姫さんは見失ふ。暗さは暗し、歩いても〳〵萩の花ばつかり。こりやマア、どつちへ行たらよいのぢやぞいなア……殿様いなア……お姫様いなア。

トうろ〳〵尋ねるうち、向うバタ〳〵にて、銅吉、走り出て、薄雲に行き當り、兩人、恟りして顏見合せ

薄雲　ヤア、お前は。

銅吉　尋ねたお山。もう放しやせん〳〵。

トしがみつく。

薄雲　ア、、これいなア。マア、放して下さんせ。コレ、お前とわたしとはな。

銅吉　兄弟合點。

薄雲　畜生ぢやぞえ。

銅吉　畜生合點。

薄雲　コレ、わたしには。

銅吉　殿様のある事は知つて居る。

薄雲　エ、モウ、それでも嫌ぢやわいなア。

ト銅吉、しがみつく。

銅吉　たつた一度、抱いて寢て下さんせ。兄が賴む。妹さん、コレ拜む。一生恩に着るわいなう。

薄雲　エ、、嫌ぢや〳〵。嫌ぢやわいなア。

ト銅吉、キッとなり

銅吉　そんならどうでも嫌ぢやな。エ、、可愛さが餘つて憎さが百倍。それと云ふも若殿ゆゑ。さう聞いては戀の仇。われも若殿も殺してしまふ。

薄雲　エ、。

ト慄ふ。

銅吉　サア、それが嫌なら、若殿の事、思ひ切るか。

薄雲　エ、。

銅吉　但し、おれと抱かれて寢るか。

薄雲　エ、。

銅吉　殺さうか。

薄雲　サア。

銅吉　サア〳〵〳〵。どうぢやぞいなう。

ト抱きつく。

薄雲　銅吉さん、堪へて下んせ。

ト銅吉を突き倒し、萩の茂みへ逃げて入る。銅吉、追ひかけ、いろ／＼萩の中にて立廻りあつて、好き所にて薄雲をポンと首切る。仕掛けにて薄雲倒るゝ。とバタ／＼にて渡平、走り出て、薄雲が死骸に爪づき、首を月影に透かし見て。

渡平　ヤア、こりや高尾が首。こりや何者が。

銅吉　おれが殺した。

渡平　ヤア、わりや銅吉。そんなら高尾は。

銅吉　戀の意趣にて、おれが切つた。手次手に若殿めも。

ト行かうとするを渡平、突き廻し

渡平　生け置れぬ若殿の仇。銅吉覺悟。

ト切りつける。これよりいろ／＼立廻りにて、トヾ銅吉を切る。銅吉、切られながら逃げる事あつて、トヾ渡平、首を搔かうとする。此うちチョン／＼にて萩の茂みより、絹張りの月、舞臺一面あるをセリ上げる。

銅吉　コレ兄者人、たつた一言。

渡平　ヤア、未練な奴の。

ト搔き首にする。渡平、首を持ち

戀ゆゑとは云ひながら、淺ましいこの有樣。

ト襟目より狀を出し、こなしにて

ナニ、書置の事……ナニ／＼、心足らぬ私しを、これまで御夫婦の御不便、身に餘り嬉しく存じ奉り候ふ、いつぞや石山にて見初め候ふ傾城は、私しが妹と聞いて悩り、ふつつり思ひ切り候へども、只悲しきは御夫婦の御難儀、若殿姫君のお身替りに、幸ひ似寄りの妹、私し所詮添はれぬ惡縁、生き存らへて詮ない命、死んで御恩を送りたく、わざと若殿樣を切らうと云うて、御夫婦のうちのお手にかゝり候はんかと、覺悟極め申し候ふ。恐惶謹言。渡平さま、お琴さま、銅吉より……そんなら女夫の者に忠義を立てさゝう爲、得心の上の最期であつたか。さうとは知らいで、むごたらしう。臨終に云ひ置きたい事もあつたであらうに。可哀や／＼。

ト泣く。お琴、萩の茂みより走り出て、銅吉が首に取りつき

こと　こちの人、銅吉が健氣の最期。よう褒めてやつて下さんしたなア。

渡平　そんなら其方も最前から。

こと　樣子は聞いて居りました。最前の判じ物、萩と櫻とは紛らはしい容と云ひ年恰好、丁度似合ひの銅吉高尾。

渡平　お身替りに首討つて、その生血は胡沙の妖術挫く種にと、最前兄弟女夫にせうと云うたも、それを取る爲に殺さん手段。其方は津の井が家來の娘。七人の子の讐へもあればと、謎をかけたは、心を引き見ん爲ばかり。

こと　わたしも斯う云ふ、立派な銅吉が心と知つたら、何もかも打明けて、云ひ聞かしてやつたらよかつたもの。

渡平　敵の縁が柳になり

こと　此やうにむごたらしう

渡平　不便の最期。

こと　可哀や〳〵。

ト泣く。月段々にセリ上がる。二人の血汐、川へ流るる。この蛇籠より水氣立つ。千鳥の香爐顯はれる。ト薄ドロ〳〵にて、千鳥の聲する。雨の音、月に村雲かかる。始終ドロ〳〵にて、三平、傘にて出かける。兩人キツとなり

こと　こりやコレ最前の千鳥の香爐。

渡平　思はず知らず月蔭の、水に兄弟の血潮が流れ。

三平　敵を亡ぼす卽ち前表。

こと　ヤア、あなたは三平さま。

三平　コリヤ。

ト三人、あたり窺ふこなしにて、

幕

大切　五變化所作事の場

役名━━高松中將氏村。大炊宰相常種。淺井兵庫。家來、軍次。同、兵内。白狐の化身。

造り物、一面の通り御簾屋體、その中に一間の御簾屋體、少し前へ出してこの雨端に、高松中將、大炊宰相、束帶姿にて立つて居る。眞中に淺井兵庫、衣裳上下にて座つて居る、臆病口の方に軍次、衣裳麻上下にて、橋がゝりの方に兵内、同じ形にて、並び居る。この見得、幕の内より

呼び　淺井兵庫參内。

ト天王立にて幕引く。

氏村　宣命の趣き餘の儀にあらず。この度帝御願の事ましまして、內裏の南に當つて

常種　宇賀の御魂の神靈を、勅諚あるに依つて

氏村　御神の使はしめたる白狐の尊體を、普く尋ね求むる

につき、先達て江州佐々木家へ勅宣下ると雖も、佐々木
大領不慮の横死。
常種　家を繼ぐべき六角之助も出國。依つて同性たる淺井
兵庫、佐々木の家名相續の儀、奏聞に及ぶところ、三品
の寶物差上、白狐の神鏡を狩り出して奉れよ。それにて
御沙汰あらんとの勅命。
氏村　高松中將氏村。
常種　大炊宰相常種。
兩人　承つて斯くの如し。
兵庫　綸命の趣き、委細畏まり奉る。白狐の儀は先達て狩
り得て候へば、常盤小助と申す者、粗忽の働らきにて取
逃がすとは申せども、遠からんうちに捕り得ん爲
兵内　江州一國の山林は勿論
軍次　美濃若狹の端々まで、遠見を付け置きましてござれ
ば
兵庫　追ッつけ獻上仕るでござりませう。
氏村　奏聞せん。先づ今日は退出いたしてよからう。
三人　有り難う存じ奉ります。
ト管絃になり、氏村、常種、別れ入る。
兵庫　ナニ兩人。して申しつけた一品は。

兩人　即ち持參仕つてござります。
兵内　この釣り臺を以て、首尾よう白狐を取り得ましても、
三種の寶がなければ、佐々木家相續の儀は、
兵庫　オヽ、サ、二つ引き龍の旗、千鳥の香爐はあるにもせ
よ、大切なるおろの御鏡なくては、六角之助、如何やう
に思うても、跡目相續叶はぬ〳〵。さるに依つて某が、
先達て奪ひ置いたるこの一品。
ト鏡を出し
これさへあれば、江州一國は、掌の内にある。我れは
これより關白家へ參つて、この御鏡を以つて内奏せん。
兩人　然らば我れ〳〵は仰せに從ひ
兵庫　白狐を取り得る手配が肝要。
兩人　兵庫さま。
兵庫　兩人、用意。
ト管絃入り合ひ方になり、兵庫、橋がゝりへ入る。兵
内、軍次好き所へ直し
兵内　狩り出でたる者は、江州佐々木家の家臣、何某と申
す者でござる。
軍次　この度、大内の勅命にて、白狐の神鏡を取り得ん爲
と存じて、斯くの如く計らうてござる。

兩人　これよりは爰にて、彼の狐を釣らうと存ずる。

ト倒れやけになり、眞中の御簾卷き上がる。と薄ドロドロにて、官女、御簾屋臺の眞中へセリ上がる。兩人、ウンとこける。これより所作になる。

うた〽古事の、昔思へば秋きぬと、目にはさやかに見ゆれども、風の音にもながめてし、月のまに〳〵晴れやらぬ、雲井の雁の假初めに、かづきのあまの肌にそふ、見るはみるめか、うら恥かしや、今日の月から馴れ合ひの、浮木の龜と思ふ身は、いつ愛着の雲晴れて、くち木の思ひ増すもがな、その泡沫の夢破れ、几帳に含む野分けさへ、重きろの綱みはて、和歌の心を留木のたもと、花よ紅葉よ月雪もあゝら〽よしなやくはたくなるらん。

ト引拔き、猿廻しになる。

〽めでたや、まさるめでたいは、しんゑんの奉納なんぞは、夢に見てさへよいとや申す〳〵、花のやかざりのな花出で、心の駒に、おゝゆるさぬ手綱を引きしめ〳〵て、〽ヤアさて土手の景色、また勝あつゝ、よい氣分でサン櫻のはんなりな、〽君が命を長生殿に、不老門の前にはおあそびたや。

兩人　ヨウ〳〵〳〵。けうといものぢや。

兵内　イヤモウ、なか〳〵面白かつたが、猿廻し、また此やうな事ではあるまい。まそつと面白い事があらう。さうぢや〳〵。もそつと奥の、面白い事をして見せい。

猿曳　イヤモウ、さして替りました事もない猿の狂言。譯の知れたものでござります。

兵内　誠に、ハヤ、譯の知れぬ物を見ては、猿の狂言、さるがうとは云へど、最前から見物して、おれはイヤハヤなか〳〵及びたえた事であつた。

軍次　サア、氣の拔けぬうちに、早く見せい〳〵。

猿曳　左樣ならば、お目にかけませうか。又お目にかけますからは、わたしも身祝ひと、いつぞお初徳兵衛の祝言に致しませう。お前はお初、あなた徳兵衛。サア〳〵、早う御祝言。

〽お猿はめでたやな、聟入り姿ものつしりと〳〵、コレ、さりとは〳〵のふほよほ〳〵あろかいな、さんな又あるかいな。

オ、オ徳兵衛さんござんせ。あんまり聟さんの來やうが遲いに依つて、嫁御さんが顔まつかいにして腹立てゝ居やんすわいな。コレ、お初さん、聟さんが杯したいと云うてぢや程に、機嫌直して杯を頂かんせ、コレ〳〵〳〵。

〽戴くのほよほのふさんな又あろかいな。
コレ〳〵鞘さん、足で杯さすと云ふやうな、つれない事があるもんかいな、それでは嫁御さんが戴かんせんわいな、ひくらずとほんまにさいてやらんせ、さうぢやさうぢや〳〵〳〵〳〵、そこでお初が。
〽戴いたものぢや、コレ戴くのほよほのふ杯をさんな、又あろかいな、嫁御の髪もころりとせい〳〵、エ、又あろかいな、さんた又あろかいな、起きたら互ひに抱きつきやれ、オ、それで機嫌が直つたぞ。
きやつ〳〵。
〽エ、あろかいな、さんな又あろかいな、くるりと返つて立つたりな、コレ立つてくれ、コレ〳〵立たしやませ次手に日和も見てたもれ。
軍次　合點ぢや。
ト行かうとする。ドロ〳〵にて兩人、悶絶してこける。引拔き、娘にて出て
〽常磐木の、替らぬ春の八重一重、早咲き初むる梅が香や、室にはあらぬ紅梅の、花可愛ゆらし鶯の、妻乞ひ名のみ妻鳥や、いとしほらしし筑波根の、おぼこ育ちのかいしよげに、ひいや二つや都の錦、色増して、思ひ初めたる戀衣、とは云へ結ぶの神さんへ、お前にまかす妹背川、深いとやら淺いとやら、譯さへ知らぬわしなれば、どうか斯うかと思ひ草、誰れにか見せんこの花の、振りよき品よき品の梅、拍子取り〳〵手まりむめ、落ちてこぼれるはらり〳〵、ちら〳〵ぱつと可愛ゆらし。
〽云はず語らぬ我が心、亂れし髪の亂るゝも、つれないは只移り氣な、どうでも男は惡性者。
〽櫻々と謳はれて、云うてたもとのわけ二つ、勤めさへ、只うか〳〵と、どうでも女子は惡性者、東育ちは言葉なものぢやえ。
〽わしが古郷は河内堺本和泉に信田、尋ね來て見よ松原、花の都はおたつ狐に、六條與九郎どのから、むろは播磨に、それがほんの色ぢや一いこう三い四、姫路おさかべ近江月の輪、伊勢の久井にしなひこほふず、大和古川が源九郎狐、語る心は誠ぢや、可愛ゆらしさの花娘。
ト引拔き姿になり
〽實にや藥と菊の水、同じ流れはおちこちの、老を養ふ瀧川の、眺めはいづれ面白や、暫し休らひ居たりしが、山時鳥おとづれて、今一聲の聞かま欲し、休む重荷に肩をかし、冴けき月に影映す、八十島の波の花も、咲き遊

る山路をやう／＼に、そろ／＼と辿り／＼て歩み行く。

〽わしが若い時やな、なん／＼難所の山までも、如何なる海川なりとも、ほんに／＼千里一飛び、今ではさりとは杖がなければならぬえ。

〽なん／＼難所の山でも、如何なる海川なりとも、ほんに／＼千里一飛び、今ではさりとは／＼杖がなければならぬえ、今は歸らぬ我が宿へ。

トどろ／＼にて消ゆる。ト橋がゝりより、兵庫、出て來て

兵庫　コリヤ／＼兩人。して申しつけたる白狐は、手に入つたか。どうぢや／＼。

軍次　されば、その儀でござりまする。命を限り働らきますれども

兵内　業刀の不思議に依つて、いろ／＼と姿を變じ

兩人　なか／＼我れ／＼が手に合ひませぬやうにござりまする。

兵庫　ヤア、手ぬるい／＼。千變萬化に惱ますとも、何程の事あらん。某が所持したる御鏡の威德に依つて、彼れが通力自在を拔き、手捕りにせんは瞬くうち。今にも形を顯さば、早速我れに告げ知らせよ。

兩人　左樣ならば、兵庫さまにも。

兵庫　中の口にて暫らく休息。

軍次　顯はれ出でなば早速注進。

兵庫　兩人ともに、ぬかるまいぞ。

兩人　畏まつてござります。

ト兵庫、臆病口へ入る。兩人こなしあつて

兵内　軍次。

軍次　兵内。

兵内　兵庫さまの詞を力。

軍次　今度はわれも。

兵内　其方も

軍次　必らずぬかるな。

兵内　合點ぢや。

トひしぎになり、兩人、ツカ／＼と向うへ行かうとする。ト向うより、雀踊りの形にて出る。

〽上野飛鳥は東の名所、今日九重の八重櫻、かをる淺黃に吉野櫻に、清水音羽に瀧櫻、これは／＼と櫻より、可愛らしさの稚兒櫻、姥櫻ふたん櫻、サアよい／＼櫻の花盛り、見事に西も東も花の浪。

〽秋の景色は、色もよい／＼よい子の紅葉笠、人がさす

るなら小雨降る、秋の景色は色もよい〳〵よい子の紅葉笠、人がさすなら小さめ降る夜は、オ、辛氣々々、面白や。

〽なか〳〵布は色ます晒しのや、晒して振りを見せまいらせう〳〵。

〽さつさ車の輪が切れて〳〵、いづれ思ひはどなたへもどなたへも。

〽晒す細布手にくる〳〵と、晒す細布手にくる〳〵と、賤が伏家へいざ歸らん。

ト兵庫出て、立廻りにて鏡を奪ひ取り、捕つて押へる。

ト口上出て、先づこれまで。打出し。

幕

けいせい蝦夷錦（終）

濃紅葉小倉色紙



澤村訥升の俵原隼人

濃紅葉小倉色紙

發端　狐狩の段

役名──笹原左京之頭。小倉兵右衛門。千倉沖右衛門。上田喜多八。大澤新吾。大垣三郎。向井金左衛門。篠原隼人。

造り物、平舞臺、薄原、廣野の體。東西淺黄幕、正面奥深く、後ろ高く、田畑の書割り、天井との取合せ、見切り、霞、遠山、隨分綺麗に、舞臺先、本松、これらへ傚ひ、取合せよろしくあるべし。幕の内より、笹原左京之頭、大將にて、獵場の拵らへ、吹きそらしの陣笠、狩裝束にて、正面の床几にかゝり居る。前髪の小姓二人、一人は槍を持ち、一人は弓矢を持ち、左京之頭の後ろ、左右に控へ居る。西の方に、小倉兵右衛門、上田喜多八、狩裝束、大小にて、並び居る。その次に、勢子二三人、並び居る。東の方に、千倉沖右衛門、大澤新吾、大垣三郎、同じ形、勢子大勢並び居る。幕の内より、ドンチャン、鹿狩りの鳴り物、割り竹にて舞臺を叩く音、アリャ〳〵聲にて、幕明く。

兵右　今日の御遊獵、天氣快晴にて、一入のお慰み

沖右　恐悦至極に

皆々　存じまする。

左京　ホヽ、方々の進めに依つて、今日の狩倉、近年の鬱散。併しこの所は、都近き廣野にて、猿、狸は勿論、鼬狸さへ稀れなるは、獲物のほど覺束なし。但し、別段に存じ寄りあつての事なるか。

兵右　ハアヽ、御意御尤もに存じまする。仰せの如く外の獸、これ無しと申せども、要の森、彼處の茂みに、狐多く住居いたす。殊に千歳功經る白狐、この所に住む由、昔より云ひ傳ふ。彼の白狐は通力ありとて、鐵砲一つ打つ者なし。例へ通力ありとも高が畜生、君の勇威を以て狩り取り給ひ、彼れが皮を剝ぎ取り、御陣羽織に用ひ給ふものなれば、自然と殿の勇猛を、隣國に觸れ知らす道理。御威勢益々盛んならん。この儀、如何思し召しまする

な。

左京　ホヽ、面白し〳〵。彼の白狐に如何なる働らきありとも、我が手練を以て討ち取らんに、何條事のあるべきや。方々、その分心得てよからう。

大勢　ハア、。

ト勢子一人、走り出て

勢子　申し上げまする。兼ねて仰せ付けられましたる狐、只今向うの森より、狩り出しましてござりまする。

沖右　殿、お聞きあられましたかな。

左京　ホヽ、出かした〳〵。隨分餘所へ、逃がさぬやう、足場好き所へ狩り出させい。

兵右　ソレ、各々には彼處に赴き、勢子を下知して、遠巻きにして狩り立てられよ。早く〳〵。

皆々　心得ました。

トどんちやんにて、皆々東西へ別れ入る。

左京　兵右衛門、沖右衛門は、この所に遠見いたし、獲物も心を配つてよからう。我れはこれより彼處に赴かん。者ども、續け。

大勢　ハア、。

ト左京之頭、勢子多勢引き添ひ、臆病口へ走り入る。

跡に兵右衛門、沖右衛門、殘り、あたりを見廻し

沖右　兵右衛門どの、兼ねて貴公の大望に合體せし某なれば、今日の催ふしも、何かは知らねど、お指圖に任せ、大殿をそゝり上げてはござれども、一圓合點が參らぬ。貴公はなんぞ、様子のある事でござるかな。

兵右　成る程、合點の行かぬは御尤もでござる。何を申すも火急の事ゆゑ、委細申し合せも致さなんだが、仔細と云うて別儀でもござらぬ。大殿左京之頭どのを倒さふ工面、いろ〳〵勘考なしたれども、我れ〳〵を始め一味のうちより、手を出しては後日の妨げ。それにつけ、フト存じ附いた今日の狩倉。勇猛強氣を[illegible]に、一[illegible]の大殿なれば、自身に狩り場を廻られるは治定。そのどさくさ紛れはあは好くば、誰れとも知れぬ流れ矢にて、仕負ふせたれど重疊。もし又無事に歸宅せらるゝとも、彼の白狐を殿の手に討ち取らすれば、千歳を經て神通不思議の獸ゆゑ、死んだ後にも仇を爲さんは必定。すりや、狐の恨みで、災ひは目のあたり。どちらでなりとも取り外さぬ工夫。様子と云ふは、右の次第でござる。

沖右　天晴れ妙計。併し、大殿はその手でやりつけても、跡に兄弟の若殿あれば、滅多に此方の自由にはなります

きい。若黨も仕舞らて取る、御工風がござるかな。

兵右　それも勘考いたし置いた。弟の采女之助どのは、取るに足らぬ馬鹿者なれば、此方の腹心の者を側に附け置き、廓通ひにそゝり上げ、下地の馬鹿にしんにうかけて、極上々の馬鹿に仕上げ、遊所の入用、一兩を百兩と大部に附け出して、その餘分は此方の用金に貯へ、何もかも采女之助どのにかぶせて仕舞へば、是非とも勘當せらるるは定の物。

沖右　出かした。

兵右　まだその上に、彼奴を誑に使うて、讒をしてやる手段もござる。

沖右　采女之助どのは、それでも行きませうが、肝心の總領、左門之助どの、此奴、猿利巧の走った、一筋繩では行かぬ相手。これは如何でござるな。

兵右　如何にもその儀に就いて、いろ〳〵と思案致し、宮詰へ、尖を入れて聞き合せしところ、朋輩どもの在所のうちに、腰元を勤めし女がござる。彼の女も左門之助どのにちッと惚れて、なか〳〵他の者の心には隨はぬと申す事、とく〳〵聞き出してござる。これゆゑその三吉野を金にて此方へ引上げ、大臣のお遊り、差出し置き

ました。然れば大殿が如何ほど口説かるゝとも、三吉野が隨ひませぬ。所で彼れこれするうち、左門之助どの入國せらるれば、思ひがけなう彼の女に出逢ひ、燃え杭に火が附き易く、始めの囁き縒りのどよめきと、遂に大殿の耳へ入る時、手廻りの女に嚮導せしなぞと、尾に鰭附けて讒言すれば、一徹者の大殿、手打ちか又は勘當かさしてしまへは後腹病まず、その後は何事も思ふ儘。

沖右　誠に貴殿は楠木まさり、智謀計略、感心感心。

兩人　ハヽヽヽ。

ト ばた〳〵にて、左京之助、近習を連れ、勢子大勢、附き添ひ、腰掛口より走り出て

左京　ヤア〳〵、兩人、それに居るか。

兩人　ハア。

ト平伏する。

左京　只今向うの森蔭にて、彼の白狐を附け出したり。逃がさぬやうに、廣野の足場よき所へ狩り出させよ。手分けして勢子の者どもに下知を傳へよ。早く〳〵。

兵右　ハア、畏まりました。ヤア〳〵、勢子の者ども、外の獣に目をかけず、彼の白狐を此の御手近く狩り出せよ。

沖右　皆々油斷なく、急げ〳〵。

勢子　ハア、。

ト皆々、割り竹にて、舞臺を叩き立て、臆病口と橋がかりへ、別れ入る。とアリヤ／＼のかけ聲、ドンチヤン、鹿狩りの鳴り物にて、正面の田畑の遠見の心にて、小さい狐、東の方へ逃げ出る。子供の勢子、割り竹にて、追ひ出す事いろ／＼あるべし。

兵右　アレ／＼、御覽あられませう。あの狩り立てるが件の白狐。殿の御手練、拜見仕りたう存じまする。

ト此うちに、遠見の狐、西の方へ走り入る。勢子も追うて西の方へ入る。

アレ、西の茂みへ追ひ出したれば、追ツつけこの所へ狩り出すは治定。ソレ、殿へ、お手槍を差上げられよ。

小姓　ハツ。

ト前髮の小姓、槍を左京之頭へ渡す。左京之頭、槍を取り

兵右　殿、物の見事に、遊ばせ／＼。

左京　云ふにや及ぶ。

ト槍をしごき、身構へして待ち受ける。と狐、臆病口より走り出て、橋がゝりの方へ行く。兵右衛門、沖右衛門、向うへ廻つて道を塞ぐ。その間、勢子二三人、花道へ廻つて居る。狐また花道へ逃げる。勢子、追ひ返す。狐、本舞臺へ戻る。あちこち逃げ廻るを、左京之頭、槍にて追ひ込む事、二三度あるべし。狐、橋がかりの松の根元へ、追ひすくめられて、蹲む。左京之頭、槍を取り直し、狐を突かうとする、トばた／＼にて、橋がゝりより笹原隼人、上下、股立ち、大小にて、走り出て、兵右衛門、沖右衛門を押し退け、左京之頭の槍の向ふへ立ち塞がり、先づ暫らくと留める。左京之頭、槍を構へ、隼人を振り放し、狐にかゝるを、隼人、左京之頭を引留め、手を捕へ、

隼人　先づ／＼／＼、待たせられませう。

ト左京之頭を正面まで押し戻して、キツと留める。この間に、兵右衛門、沖右衛門、心遣ひのこなしにて、これに續いて舞臺の眞中まで出、左京之頭の西の方に控へてゐる。花道の勢子は、これに驚ろいて、臆病口へ入る。この時、白狐は、花道へ走り、中程にて、本舞臺へ辭儀をしたり、拜んだり、いろ／＼嬉しきこなしにて、向うへ入る。

左京　何者かと思へば笹原隼人、何ゆゑに我が遊獵を妨げる。

伴人　これは恐れ多き御仰せ。何しに君の御遊業を妨げ奉らん。併し、御遊業も様々あつて、詩歌猿楽なんどは貴人の持てあそび物。それになんぞや、重き御身を軽々しく、只一匹の獣を狩らんと、取締りなき廣野に、供をも具せず駈け廻り、もし御身に凶事ある時は、家中は勿論國百姓まで、闇夜に燈火を失ふの歎き。國主たる御身柄に似合はざるの御行跡。君子は危ふきに近寄らずと申す本文もござれば、何卒お晴なる遊にされ、お身持ちを改め下さらば、有り難う存じ奉りまする。

ト左京之頭、少し困つたこなしにて、槍を小姓に渡し、床几に腰かける。

早きすれば兵右衛門どの、源右衛門どの、その外いづれもお供に致されながら、斯やうた儀を御諫言申し上げられぬは、如何はしう存じまする。

兵右　これは伴人へのお諫めも覺えぬ。治世に亂の忘れざるは武士の嗜み。御狩初めの御遊業にも、武道を心がけさせられ、家中の武藝を試み給ふ太守の御器量。殊に狩倉は戰場の駈引き同然。彼の右大將頼朝公、富士の裾野に数勢を催ふし給ふも、大將の身持ちに非ずと申さうか。和田畠山を始め、智仁の良臣数多ありとも、これを諫めしと云ふ事を聞かず。然れば只今の御遊獵を、あながち御不行跡とも申されまい。

伴人　ハヽヽヽ。それは時節が違ひ、場所が違ひます。左樣なる儀を俗に杓子定規と申す。なぜと申すに、頼朝公の時分には、亂やうやく治まりて治の始め、平家の殘黨木曾の餘類、爰彼處に隠れ忍び、時を計る時節。諸侯の心もまち／＼なれば、わざと危ふきに居て、危ふきを遁げる大將の發明。さるに依つて曾我兄弟、工藤を討つて後、大將の本陣に切り入つたれど、事なく納まりしは、兼ねての備へのあるに依つて。今日の體たらくを見るに、假寢の構へもなく、御休息も野原の床几。一筋の流れ矢なぞのある時は、何を以て何を防がん。

ト兵右衛門、ぎつくりとする。

殊にこの所は、都近く、猿猴の類も見えず、僅かに狐を見附けたばかり。お供と云へば家中の諸士五六人。百姓の人足を追ひ使うて、これが戰場の駈引きになりますか。田畑を荒す惡獣を狩り取るは、耕地の助け、下を憐れむ仁政の一つとも云ふべきなれども、農業の忙しき時節をも、辨まへず、百姓を人夫に狩り取り、五穀不熟の基と云ひ、狐狩りに田畑を踏み荒し、民の歎きを思はぬ行跡。

これでも武士の心がけか。取分け毛色白き狐は、千歳の功を経て、自然と神に通ずる霊獣、国家の守りともなるべきものを、無益の慰みに命を取るは、災ひを招く道理。

ト左京之頭、成る程と云ふこなし。兵右衛門、これを見て、諫言を用ふるなと、目顔で仕方する。

是非とも今日の御催ふしを止められ、一刻も早く御歸館あられませう。偏へに願ひ奉りまする。

ト平伏する。左京之頭、気を替へ

左京　ヤア、何は兎もあれ、主の非を数へ不興を取らするは、不忠にてはあるまいか。達て諫言せば、手は見せぬぞ。

隼人　国家の為、君の為、一命を惜しむ隼人にあらず。お手打ちにはお心任せ。是非とも御歸館あらせられませう。

ト左京之頭、刀を抜かうとする。隼人、身を摺り寄せる。橋がゝりより、バタ／＼にて、高井金左衛門、羽織、野袴、大小にて走り出て、左京之頭を留める。

左京　ヤア、留めたな金左衛門、そこ放せ。

金左　ハア、御立腹の段、御尤もに存じますれども、家柄と申し、年来勲功少なからざる笹原隼人。何卒お怒りを留められ、彼れが助命の儀を願ひ上げ奉りまする。

左京　ムウ。討ち放す奴なれども、金左衛門が願ひに任せ、命は助ける。併し、屋敷に押籠め、厳しく閉門申し附けよ。目通り叶はぬ。そこ立つてうせう。

隼人　ナニ、閉門仰せ附けられるとな。主人の仰せ、如何やうの儀も違背は仕らねど、某君の御前を遠ざかつては、お身の上心元ない。是非々々諫言、お聞き届け下さりませう。

ト左京之頭の方へ進み寄る。左京之頭、また刀に手をかける。金左衛門、これを留めて

金左　アイヤ／＼、隼人どの、一旦の諫めは臣下の役、强いては君の御機嫌も如何。諫めを立るは折もござらう。先づ今日は

隼人　おやと申して。

ト隼人、猶も、左京之頭の方へ詰め寄る。兵右衛門、いつそ切つてしまへと、目顔にてけしかける。左京之頭、おこつく。金左衛門、留める。皆々、引張り、よろしく、チョン／＼にて

幕

口明

住吉濱邊の場

役名──笹原左京之頭。笹原左門之助。笹原采女之助。松倉三左衞門。坂部平馬。上田喜多八。大垣三郎。藤田貢。大澤新吾。月本兵馬。山口玄蕃。千倉油右衞門。近藤主税。今井軍治。庄屋、太作。玄海灘龍助。南京の八平次。月本源次郎。隼人妹、夕霧。腰元、早瀬。傾城、三吉野太夫。向井金左衞門。

造り物、平舞臺、後ろ淺黄幕、上手に鳥居、玉垣、下手に折らへ松、その前に少し浪うね。後に大屋形出る事ある。と百姓大勢前を待ち、攻め寄らうとするを、上手に松倉三左衞門、坂部平馬、着附け上下にて、これを留めてゐる。ドンチヤンにて、幕明く。

兩人　コリヤ／＼、百姓ども、待て／＼。

百一　イヤ、こなた達、達て妨げしやると、誰れ彼れの容赦はないぞ。

皆々　オヽ、さうぢや／＼。皆寄つて、突け突け。

ト兩人、留めるを、構はず、竹槍を持ち、喧ましう云ふ。

平馬　コリヤ、其やうに申しては、事が解らぬ。仔細を申せ。

三左　達て聞き入れなくば、手は見せぬぞ。

兩人　どうぢや。

百二　イヤ、どうの斯うのはない。攻め寄せ攻め寄せ。

皆々　アリヤ／＼。

トこれにて、鉦太鼓打ち込む。と百姓皆々アリヤ／＼にて、竹槍にて無二無三に突きかゝる。ト兩人、刀を抜き、皆々入り亂れ、立廻る。月本源次郎、前髪にて凜々しく、着附け上下にて、出て、その中へ割つて入り、百姓寄るを、留めて

源次　コリヤ、百姓ども、先づ待て。

トこれにて、ちよつと分けて

御兩所にも、こりや何事でござる。先づお待ちなされお待ちなされ。

兩人　イヤ、お放しなされ／＼。

百皆　エヽ、構はずと、突き殺せ／＼。

ト また百姓、竹槍にて突きかけるを、源次郎、留めて

源次　百姓ども、待てと云うたら、マア、待たぬか。

百三　待ても凄まじいわい。この侍ひも同類ぢや。搆はずと、突け〳〵。

百皆　アリヤ〳〵。

ト また突きかゝるを、源次郎、突き退け

源次　ヤア、聞分けのない百姓めら、この月本源次郎が、申す事を聞き入れなくば、一々に打ち放さうか。

皆々　エヽ、搆はずと、突け〳〵。

ト 留まらず又突きかゝる。と源次郎、刀を抜かうとする。この時、下手より、庄屋太作、出て、百姓を留め

太作　コレ、待たうぞ〳〵。

ト 源次郎を見て、留め

先づ〳〵お待ち下さりませ。

ト 源次郎、意氣込むを

お腹の立つは、重々御尤もでござります。みな百姓どもが悪うございます。どうぞ私しに免じ、御料簡の下さりませ。

百一　コレ、庄屋どの、搆ふ事はない。そこ退かんせ。

皆々　エヽ、退かつしやれ〳〵。

ト また行かうとする。

太作　コリヤ、待てと云つたら、マア、待たんかい。

百二　そりや、待つ事は待つけれども。

太作　おれが好いやうにする。おれに任せて置きや。

皆々　よいかや〳〵。

太作　コリヤ、今お越しなされたお侍ひは、月本源次郎さまと云つて、大殿様のお小姓であつたが、今では御近習役のあなた様ぢやわいなう。

百三　そんなら、あの前髪様が

百四　月本源次郎さまか。

太作　オイナウ。

百五　さうとは知らず、大きな粗相を致しました。

百一　お庄屋様、そこを好いやうにお頼み申します。

太作　そんなら、あやまつたがよい。

トこれにて、百姓皆々、竹槍を下に置き、手をつかへ

イヤ、申し、源次郎さま、只今百姓どもが、あなた様とも知らず、無禮を致しまして、定めてお腹立ち、何事もあの衆達の粗相。

百一　どうぞお赦しなされて下さりませうならば

太作　ハイ〳〵

皆々　有り難う存じまする。
源次　斯う見たところが、其方が一村の庄屋と見えるが、さうか。
太作　ハイ、左樣でござります。
源次　すりや、其方が百姓どもに成り替り、あやまると云ふのか。此方に別に料簡の致さぬと云ふ事はないが、これはほんの云ひがゝりと云ふものぢや。其方達も聞き屆けてくれゝば、身も喜ぶ。
皆々　それは有り難う存じます。
源次　して、其方達は竹槍を持つて、この御關所に向ひ、とつぱさつぱ申すには、樣子ならうてはならぬ。その仔細は、どうぢや。
百一　シヤリ、流石は御近習役を、お勤めなさるゝ程あつて、違うたものぢや。
百二　マア、第一男が好く
百三　御發明で
百四　理が解つて
太作　なんと、百姓衆、斯うはどうあらう。今日は引から
おやあるまいか。
百一　滅法な事を云はんすわいなう。
百二　此まゝで去んでは事が解らん。
百三　イヤ／＼、滅多に
皆々　去なれぬ／＼。
太作　これはしたり、悪い合點の人達ぢや。今日は都よりお勅使のお入りと云ひ、殊さら若殿樣の御入國で、お取込みぢや。マア、今日は引いて又、明日にでもお願ひに上がれば、いま御挨拶なされたあなた樣の、お頼みも立つと云ふものぢや。但し、おれが云うた事は、無理か。どうぢやの。
百一　成る程、こりや庄屋どのゝ云はるゝ通り
百二　マア、今日は此まゝに歸りませう。ナウ、皆の衆。
皆々　さうしませうわいの。
太作　そんなら承知か。イヤ、申し、左樣なれば先づ今日は
皆々　引きまするでござりまする。
源次　なんと申す。こりや、身が挨拶いたせしゆゑ、引くとや。先づ以て身も過分。
皆々　左樣ならば源次郎さま。
源次　庄屋、百姓ども、行きやれ／＼。
皆々　エイ／＼オウ。

トこれにて鳴り物、打ち上げる。わや〳〵云うて、下手へ入る。

三平　エヽ、憎い百姓めら。

源次　ハテ、高が土民の事、マア、ようござる。して、貴殿達には、何用あつてこの所へ。

三左　若殿釆女之助さま、御遊興のお迎ひの爲め。

源次　若殿左門之助さま、御入國のお出迎へはなうて、釆女之助さま御遊興のお出迎へとは。

兩人　ヤ。

源次　ハテ、御大儀千萬な。

ト向うより、釆女之助、嫌らしき若殿の拵らへ、酒に醉ひ、浮かれて、遊山船の模樣の拵らへにて、不首尾の體。小松屋宗七附いて出る。側に仲居、帮間、禿、皆皆船の綱を引いて、後より喜多八、三郎、兵馬、玄蕃、貢、新吾、着附けの上に練りの浴衣を引ッ張り、船を押して出る。この模樣、祇園囃子にて、隨分賑やかに

釆女　コレ、宗七々々、其やうな顏をせずと、ちつと浮かれてはくれぬぞやい。

宗七　私しもきつう船に醉うたら、氣分が惡いございまする。

釆女　なんぢや、氣が惡いか。そんなら船から上がつて、土を踏まうか。

宗七　イエ〳〵、其やうにもござりませぬ。

釆女　そんなら、どうしたらよいのぢや。コレ、わが身に賴んである、太夫の返事を聞くまでは、滅多に外へはやらぬ。

宗七　こりや又、困つたものぢや。

ト宗七、こなしある。

平馬　これは〳〵若殿樣には、お船遊山でござりまするか。

三左　怪しからぬ面白い事でござりませう。

釆女　三人の者、迎ひ大儀。サア〳〵、宗七、向うへ行て、わつさりと呑み直さう。

ト宗七の手を取る。と宗七、困つた思ひ入れ。

又しても〳〵、其やうな、辛氣な顏をしやるかな。氣を浮き〳〵と持つてくれい。歩くが否なら、矢ッ張り船でそやして行かう。サア、綱を引いて船を出せ〳〵。

平馬　帆を十分に追風もよし。

三左　思ふ廓へ漕入り。

釆女　さしづめ我れらは宗七の、機嫌を取り揖。

皆々　先づは向うへ、ようそろ〳〵。

トまた鳴り物になり、禿、仲居、幇間、綱を引く。敵役の諸士皆々、後より船を押す。これにて本舞臺へ來る。ト采女之助、船より出て、宗七の手を取り

采女　サア〱、これから酒にせう〱。

幇間　こりやようござりませう。サア〱、仲居、幇間、毛氈を敷いて、酒盛り〱。

女皆　アイ〱。

ト幇間、仲居、船より毛氈を持ち上がつて、好き所に敷く。と土器、杯、いろ〱並べ

仲居　ソレ、お銚子ぢやぞえ。

禿　アイ……。

ト陽氣に返事する。

買　サア〱、若殿樣。

敵六　先づ〱あれへ。

采女　サア、さうせう〱。宗七、おぢや。一つ呑まう。

宗七　イヤ、私しは

ト辛氣なこなし。

幇間　これはしたり、宗七どの、これは如何な事でござる。

三婦　若殿樣の御意ぢや。ちつと行て、機嫌を取らつしやれ。

六人　サア、ちやつと〱。

ト敵役皆々、寄つて、采女之助の側へ押しやる。

采女　ハテ、爰へ來いやい。

宗七　こりや又、困つたものぢや。

采女　なんの困る事がある。一つ呑め〱。氣が發散するわいやい。

ト杯をさす。

宗七　酒はちつとも

采女　酒は否か。否ならもう止しにしや〱。此やうに其方の機嫌を取るも、三吉野の仲立ちを頼まうが爲ぢや程に、よいやうに其方に頼んだぞよ。コリヤ、仲居ども、宗七が一向悄げてゐるに依つて、おれが心が面白うない。其方達が寄つて宗七の、氣を慰めてくれ〱。

仲居　コレ、宗七さん、お前はなんで其やうにして居やしやんす。氣を浮き〱持つて下さんせいなア。常からあののものと、云うてゐるぢやないかいなア。

仲二　幸ひ若殿樣のお許しが出た。

仲一　どうぞわたしが願ひを叶へて

兩人　下さんせいなア。

ト仲居兩人、宗七に抱きつく。宗七、忌々しい顏して、

突き退け
宗七　ニ、嫌らしい。そんな機嫌ぢやない。
沖右　ヨウ〱、宗七の色事師め。
散六　惚れられて様〱。
宗七　エ、必らず側へ寄るまいぞ。
ト突き退ける。
仲雨　エ、素氣なやなう。
トこの時、源次郎、釆女之助の側へ行つて
源次　若殿様へ申し上げます。最早兄御左門之助さま御入國なされば、御遊興をお止め遊ばしては如何でござりまする。家中の思惑もござりますれば、御遊興を暫らく穏便に遊ばされ、お館へお歸り遊ばされませう。
釆女　オヽ、誰れかと思へば、源次郎ぢやないか。其方が側にゐる事を、とんと知らなんだ。コリヤ、仲居ども、源次郎に酒を呑ませ〱。
兩人　アイ〱。
ト銚子杯を持ち、源次郎の側へ行かうとする。
源次　控へて居らう。
ト睨む。
兩人　オヽ、怖。

トぢつと控へる。
源次　若殿様、拙者はちつとも食べませぬ。殊さら今日は院使のお入りとござれば、何卒御歸館の儀を
釆女　イヤ、歸る事はならぬ。
源次　なんと御意なされまする。
釆女　側へ院使がお越しなされうとも、兄者人が歸られうとも、構ひはせぬ。いらざる諫言いたすな。夫んでよくば、其方歸れ。
源次　これは如何な事でござりまする。それでは
釆女　それではとは、なんぢや。若輩者の分際で、予に意見するのか。まだ早い。達て諫言を返さば、許さぬぞ。
源次　何、この身は、どのやうになりましても、御諫言申し上ぐるが臣下の役。何卒あなた様のお心に、叶ひますするやうになされて、お館へ
釆女　又しても〱、屋敷へ去ね〱と云ふけれど、これがなんと去なれるものか。よう思うて見たがよい。屋敷へ歸ると、親人や母上へ、斯う手を突いて、四角四面にせねばならぬ。それがお嫌々。うたての付ひ。それを打捨て、可愛い太夫を側へ置き、仲居藝子を引連れて、惡所浮世は斯うしたものよ。

ト刀を三味線にして
ツヽテン／＼。なぞと洒落るものぢや。なんと其方も其やうな、堅い事を取捨てゝ、コリヤ、粋になれ／＼。
ト他愛なく云ふ。此うち宗七、こなしあつて、源次郎と顔見合せ、當惑のこなし。
兵馬　コレサ／＼、源次郎どの、其許が其やうに、いきせき謂つて申されても、御酒宴の場所なれば、お聞入れはあるまい。
喜多　御諫言を申さずとも、ちと粋になつて
玄蕃　廓通ひなどして、三日も四日も居續けして
三郎　太夫狂ひがよいぞや。
若者　貴殿はまだ御若輩なれば、粋な事は知るまい／＼。
貝　身共が教へてくれう。仲居幇間ども、源次郎どのを
藤六　もてなせ／＼。
仲居　アイ／＼、畏まりました。
ト皆々側へ寄つて
幇間　なんと立派な好い前髪樣。
花車　わたしや斯う云ふ前髪樣と、女夫になりたいわいなア。
仲居　さうして、どうさしやんすえ。
花車　ハテ、夜も晝もつけづめにするわいなア。
皆々　ハヽヽヽ。
仲一　コレ、申し、其やうな四角四面にせずと、ちと廓へもござんして
仲二　若殿樣の御機嫌を取り
幇間　その上では又、どうなりともなりまする程に、マアマア、御酒でも呑んで、大酒なされませ。
喜多　コリヤ／＼、皆源次郎どのに、酒を進めよ／＼。
幇間　申し／＼、旦那、マア／＼、御酒一つお上がりなされませ。
女皆　サア、申し、酒を呑ましやんせいなア。
ト喧ましう云ふ。
源次　エヽ、かしましいわえ。
トこれにて、皆々、恟り。
女皆　アレ、叱つておやもの。
幇間　これは御免。
ト源次郎、皆を睨んで
源次　さてはうぬ等が寄つてかゝつて、若殿樣を馬鹿にさらしたな。アノ茲な、狐どもめが。
幇間　クワイ。

ト狐の眞似をする。

源次　まだ〳〵さらすかい。

ト刀に手をかけうとするを

三郎　これは源次郎どの、どうしたものでござる。あれ等が申す事を、取り上げるは野暮でござる。

新吾　氣を鎭めて、一つ

敵六　呑まつしやれ〳〵。

ト敵役皆々、銚子を突きつける。

源次　先程も申す通り、拙者、酒は嫌ひでござる。

三郎　その呑めぬところを

貢　拙者が酌で

ト兩人、源次郎にかゝる。

源次　それには及ばぬ。

ト兩人を、見事に投げる。

敵三　所を身共が

敵二　相手を

ト皆々、かゝる。

源次　氣狂ひ水は、望みにござらぬ。

四人　そこを

トまた立廻つて

源次　イヤ、手酌に致す。

ト四人を、見事に投げる。采女之助、刀を拔かんとするを、宗七、よろしく留めて

宗七　若殿樣、こりや、なんとなされまする。

采女　四人の者を手籠めにした、あの源次郎を

宗七　申し、其やうに短氣をお出しなされますると、三吉野どのは、お心に隨ひませぬぞえ。

采女　そんなら、手討ちは止めぢや。

ト下にゐる。六人、起き上がりて

六人　うぬ、源次郎め。

ト行かうとするを

采女　コリヤ、抑へて居らうぞ。

六人　エヽ、忌々しい。

ト六人、抑へる。宗七と源次郎、顏見合せ

宗七　源次郎さま。

源次　宗七どの。

兩人　困つたものぢや。

ト兩人、當惑のこなし。この時向うより、三吉野、裲襠にて、牡丹の花を持ち、酒に醉うたるこなしあつて出る。後より禿大勢、附き添ひ、この鳴り物にて、好

き所に留まつて

三吉　この花誰れに。

香太　その花わしに。

三吉　わしの子にや遣らぬ。この花誰れに。

香太　この花はたこ。

三吉　花の子にや遣らぬ。

香太　わたしに／＼。

ト性しなう云ふ。トこれにて、本舞台へ来る。

喜多　これは太夫どの、最前より若殿様のお待ち兼ね。

貫　サア／＼、早う。

皆々　お側へ／＼。

三吉　ドレ、お側へ行かうか。

ト合ひ方になり、宗七の側へ座る。ト采女之助、腹を立て

采女　エヽ、忌々しい。おれが側へは来ずに、宗七の側へ寄つて、エヽ、腹の立つ。われがやうな奴は

ト刀に手をかけうとするを、宗七、こなしあつて

宗七　これはしたり、若殿様、どうした事でござります。皆さまの申しまする通り、御短気な事をなされまするとお ます。

ト三吉野が心に随はぬと云ふこなしにて云ふ。

采女　オッと、承知々々。

ト刀を下に置き

それは承知ぢやが、太夫が根から物を云やらぬ。さうして、なんでおれが側へ来て来れぬのぢや。

ト甘へて云ふ。

宗七　これはしたり、太夫どの、若殿様の側へ、早う／＼。

三吉　わたしやお前の側が、離れともないわいなア。

宗七　これはしたり、それではわしが

ト術ないと云ふこなし。

マア、お側へ行たがよい。申し、お喜びなされませ、三吉野どのは、疾から得心でござりますぞえ。

采女　ヤア／＼、なんと云やる。そんなら太夫は、身が心に随ふと云ふか。これと云ふも、皆こなた様ぢや。南無宗七大明神様。

ト手を合して、拝む。

三吉　コレ、宗七さん、それでは

宗七　ハテ、何事もわしが胸にある種に、黙つてゐたがよいわいなう。

ト目で抑へる。三吉野、こなしあつて

采女　さうぢや〳〵。黙つてゐたがよい。太夫、サア、爰へおぢや。
三吉　エヽ、知らぬわいなア。
宗七　ハテマア、お側へ行たがよい。
三吉　オヽ、辛氣。
　ト不承々々に、采女之助が側へ座る。
　斯うでござんすかえ。
　トこなしあつて云ふ。
宗七　それがよい〳〵。
采女　コレ太夫、一體わが身は聞えぬものぢやぞや。これ程に思うてゐる者を嫌ふとは、あんまりつれないと云ふものぢや。其方にかゝつて、院使様のお入りでも、親人の勘當なされても、おりや構ひはせぬ心中男。コレ、餘り憎うはあるまいがな。
　ト三吉野に抱きつく。
三吉　エヽ、知らぬわいなア。
　ト突き退ける。
采女　うぬ。
　トまた刀を抜かうとする。
宗七　申し、今のおぢやがな。

采女　オツと、承知。
　ト刀を下に置き、三吉野の膝に靠れる。
三吉　オヽ、しつこ。
　トこなしある。宗七、目で押へる。三吉、こなしあつて
　申し、采女様。
采女　ヤア〳〵。
　ト嬉らしう云ふ。
三吉　わたしのやうな不束な者を、それ程までに云うて下さんす心根が、嬉しいわいなア。
　トわざと嬉らしう云ふ。宗七に、斯うしたらよいかと云ふこなし。
宗七　申し、さぞお嬉しうござりませう。
采女　こりやモウ、どうも堪らぬ。
三郎　若殿様、さぞお嬉し。
玄蕃　アノ茲な
六人　色事師め様。
采女　擽てない〳〵。
　ト扇を顏に當てる。源次郎、見惚れ
源次　先程よりこれに聞いて居れば、餘りのみだら。宗七

どいも皆なましやれ。御意見申す事はさて措き、殿をうつけに召さるゝか。町人と云ふものは、ハテ、賤しいものぢやなア。

ト腹立てゝ云ふ。

宗七　これには段々。

三吉　様子のある事。

ト云はうとするを、押へて

源次　同じ穴の狐めら、黙つて居らう。

トきつと云ふ。両人、こなしあつて

宗七　申し若殿様、あれほど源次郎さまも申して居られますれば、先づお館へ

三吉　どうぞお聞き届け下さりませ。

采女　ハテ、大事ない。打ッちやつて置け。

源次　イヤ、打捨てゝは置かれませぬ。お聞入れないとて、此まゝ帰りませうか。お聞入れなくば若殿様とて、御容赦に仕りませぬぞ。

喜多　黙れ、聞いて居れば餘りの雑言。

三郎　只今のは拙者が誤まりでござると、あやまればよし。達て逆ければ、其まゝには

六人　置かぬぞよ。

源次　妨ぐれば、なんと致す。

玄蕃　どうするの斯うするのと。若殿様、如何計らひませう。

采女　エヽ、おのれは〳〵、しつこう吐かす源次郎め。おれが云ひ附けぢや、打つて〳〵打ちのめせい。

六人　心得ました。

ト六人、かゝらうとするを

源次　なんと。

ト睨む。

新吾　なんだ〳〵。その面はなんだ。

貢　若殿様の云ひつけぢや。手向ひ致さば、お館へはお帰りないぞ。

源次　サア、それは。

玄蕃　それはとは。

ト源次郎を引きつけ

喜多　よくも御酒宴の妨げをひろいだな。

三郎　うぬがやうな奴は

六人　斯うして〳〵

ト六人にて、源次郎を打つ。

新吾　いつそ

ト新五、銚子にて、源次郎が額を割る。

源次　サア、若殿樣、この體になされますれば、御存分でございませう。サア、早く御歸館を

ト源次郎、額より血流るゝを、合點行かぬとして、額を撫でゝ見てこなしあつて

こりや又あんまり

六人　なんとした。

源次　こりや、モウいつそ

ト刀を拔かうとする。この時、沖右衞門、上下にて、出る。

沖右　これサ源次郎、待たつしやれ。

源次　イヤ、お放しなされ。武士たる者の眉間を

沖右　ハテ、御立腹は御尤も。なんと云うても、若殿樣は御酒機嫌。

源次　若殿樣なれば構はねど、大勢寄つて

沖右　ハテ、それとても若殿樣の御意、若殿のお打ちなされたも同然。主人に打たれしは恥辱にあらず。殊さら今日は、若殿樣にも御入國なれば、何事もこれに免じて

ト宥める。源次郎、こなしあつて

源次　イヤモウ、何も無念口惜しいとは存じませねど、若輩者と侮つて打擲あつて

沖右　それも若殿の御酒機嫌ゆゑ、何事も拙者にお任せあつて

源次　すりや、こなた樣が若殿樣に

沖右　とくと御諫言申し上げて、直さまお屋敷へ

源次　お供なし下れうか。

沖右　追ッつけそれへ。

源次　然らば社内にて、相待ち申す。

沖右　暫時お控へなされ。

源次　左樣なれば沖右衞門どの。

沖右　源次郎どの。

兩人　後刻

源次　御意得ませう。

ト唄になり、源次郎、無念のこなし、氣を替へ、入る。

沖右　サア／＼、何事も拙者にお任せなされて、暫らくお待ちなされや。

トこんな事云ひ／＼、采女之助を見て

サア、若殿樣、手數は拂ひ退けました。

新五　これからわつさりと

六人　呑み直さうぢやござりませぬか。

采女　サア／＼、さうせう／＼。

三吉　よい所へ、沖右衞門さま、ようお越しなされて下されました。

沖右　某共もあれに控へ居つたが、双方に怪我のないうちと、立出でましての御挨拶。

宗七　先づは納まりまして

三吉　心が落ちつきましたわいなア。

采女　おれも落ちついた。ナウ、太夫。

ト側へ寄る。

三吉　つッとおう

采女　辛氣なか。おれも辛氣な。

仲居　これはきつう座が滅入つて來ました。

皆々　ちと陽氣にやりませうかい。

采女　サア／＼、酒にせう／＼。

ト皆々、酒宴になる。トこの時、向うより、夕露、振り袖娘にて、後より玄海灘龍助、角力取りの拵らへにて、大太鼓、角力取り唄にて

龍助　オ、イ／＼。申し／＼。最前からこれほど呼びますに、聞えませぬかえ。

夕露　誰れぢやと思うたら、龍助ぢやないかいなう。

龍助　さうしてあなたは、どれへお越しなされまする。

夕露　聞いてたも。母様が御病氣の願籠めに、住吉様へ參詣をせうと思うて

龍助　それはマア、御信心な事でござりまする。

夕露　さうして、其方は

龍助　イヤ、私しも住吉様へ、參らうと存じまして。それは丁度好い道連れでござります。御一緒に參りませうかい。

夕露　さうしてたも。

龍助　サア／＼、お出でなされませ。

トこれにて本舞臺へ來て、龍助、酒盛りを見て

これは怪しからぬ騒ぎでござりまする。

夕露　サア、參詣しませう。

龍助　サア、お越しなされませ。

ト夕露、行かうとするを、沖右衞門、夕露を見て

沖右　天晴れさても好い器量。若殿様は玄人、拙者は又、素人の白歯娘を

ト沖右衞門、夕露に抱きつきかける。

夕露　こりや何をなされまする。

ト突き退ける。

沖右　なんとも致さぬ、よい事を

ト又かゝるな、龍助、眞中へ入る。沖右衛門、抱きつく。

龍助　おらは玄海灘の龍助と云ふ角力取りぢや。その娘御は笹原隼人さまのお妹御、婬らな事なさると免しませぬぞ。

エ、、わりやなんだ。

ト宗七、これを聞いて

宗七　左様なればあなた様が、隼人さまのお妹御とな。

夕霧　ハ、、左様でござります。して、あなたは

宗七　私しは小松屋宗右衛門が悴、宗七と申します者。あなたの兄御隼人さまには、段々御恩を受けましたわたしら親子。思ひがけない、これはしたり。

采女　サア、太夫おぢや。

三吉　そりや何處へ。

采女　ハテ、知れた事、抱いて寐る。

三吉　嫌いなア。

ト振り放す。

沖右　申し〱若殿様、あなたは三吉野太夫を、お締めなされ、拙者はこの娘を

喜多　我れらは仲居どもを

六人　念佛講に

采女　拍子を合して

皆々　取つてくれう。

ト狐釣りの合ひ方になり、采女之助は三吉野を捕まようとする。沖右衛門は夕霧にかゝる。龍助、支へる。六人、仲居どもを追ひ廻す。皆々手を引き、あちこち引ッ張り、此うち宗七は、三吉野の手を引き、上手へ入る。夕霧、よき程に、逃げて入る。仲居、禿、皆々、これも入る。采女之助、沖右衛門、皆々、顔見合して

皆々　エ、、なんの事ぢや。

ト皆々、追うて入る。ト宗七、上手より走り出る。この時宗七、草履の鼻緒を切る。

宗七　エ、、南無三鼻緒が切れた。

ト面倒なと云ふこなし。

モウ〱、とんとあのやうに、若殿様のほたへには困る。滅多無性に、あちらへ引ッ張りこちらへ引ッ張り、着物も下着も皺くちやになつた。

ト着物の皺を延ばして

鼻緒は切れるし、邪魔ながら直しと出かけにやならぬわ

え。

トぼやき／＼、懐より紙を出して、紙撚してゐる。ト三吉野も出て

三吉　このマア宗七さんは、どこへ行かしやんしたやら。

ト爰ひ／＼出て、宗七を見て

宗七さん、爰にゐやしやんすか。大抵捜した事ぢやないわいなア。

宗七　エヽ、そこどころぢやないわい。

ト構はず、鼻緒をすげて居る。

三吉　お前は何をして居やしやんすぞいなア。

宗七　こなたにかゝつて、あちらへ引ッ張られ、こちらへ引ッ張られ、着物は皺くちやになるし、コレ、草履は此やうに、鼻緒が切れてしまうたゆゑ、直しと出かけてゐるのぢや。

三吉　つッともう、そんな事はせずと、捨てゝしまはんせいなア。

宗七　エヽ、滅相な事を云ふ人ぢや。其方も冥加を知らぬ人ぢや。この草履を捨てゝしまうたら、なんにもならぬ。斯う鼻緒をすげて置けば、一二年は丈夫に履かれるわいなう。

ト鼻緒をすげ、履いて見て

これで巧いものぢや。

三吉　えらい始末人ぢやなア。

ト顔見合して

両人　ハヽヽヽ。

ト両人、笑ふこなしあつて、あたりを見て

宗七　三吉野どの。

三吉　宗さん。

ト大きな聲する。

宗七　コレ。

トあたりを見廻し、こなしよろしく、合ひ方になり

三吉　コレ、宗七さん、最前は釆女さまに、あんな事云うて、嫌で／＼ならぬわいなア。

宗七　ハテ、大事ないぢやないか。

三吉　イエ／＼、わたしや、あのやうな嫌らしい、根性の悪い人に隨ふ事は、嫌ぢやわいなア。

宗七　そんならこなた、若殿様と女夫になる事は嫌か。

三吉　若殿様と女夫になりたいゆゑ、嫌な事も辛抱してゐるのぢやわいなア。

宗七　それに又釆女さまを

三吉　わしの若殿様と云ふのは、左門之助さまぢやわいなア。

宗七　ハア、、すりや、兄御の若殿様か。

三吉　知れた事いな。あの猿見るやうな釆女さまに、誰れが隨ふものかいなア。

宗七　それで様子が解つた。

三吉　何が解つたえ。

宗七　ハテ、この間から、若殿様と女夫にして下されいと頼みながら、釆女さまを嫌ふは、とんと合點が行かなんだ。

三吉　そりや若殿様違ひぢやわいなア。

宗七　それなれば、よい〳〵。

三吉　どうぞお前のお世話で、若殿様と女夫になるやうに

宗七　して、若殿左門之助さまと、これまで譯でもあつたと云ふやうな事か。

三吉　斯うばかりでは合點が行きますまい。わたしが都に勤めをしてゐた時、始めて御酒宴の席にお招ぎ、それより御縁の端となり、つい云ひ交す其うちに、お國元より急のお使ひ、去なねばならぬと仰しやるを、今暫らくと、お留め申すに申されぬ、御大切のお身の上、互ひに暇乞ひもなう、殿様はお國へお歸り。わたしが思ひ、あるにもあられず、それから殿様の跡を慕うて來ましたところ、大殿様がお招きなされて、あのゝものゝと云はしやんすけれど、若殿様に逢はるゝ事ぢやと、辛ひ辛抱してゐるも、若殿様と女夫になりたいばつかり。譯と云ふは、この通りでござんす。どうぞお前のお世話にて、女夫になられるやうにして下さんせいなア。

宗七　成る程、さう云ふ事なら、わしが一命に替へても、若殿様に添はして進ぜう。

三吉　エ、、嬉しうござんす。さうして又、難儀な事が出來たわいなア。

宗七　難儀な事が出來たとは。

三吉　大殿様が身請けして、屋敷へ連れて去ぬると仰しやるわいなア。

宗七　ナニ、大殿様が、そなたを身請けすると仰しやるか。

三吉　アイナア。親方に手附けを渡して、直ぐに後金を渡して、わたしを女房にするといなア。

宗七　なんぢや、手附けの金を渡して、後金を渡すと仰しやるか。

三吉　アイナア。

宗七　こりや、むづかしいわい。

三吉　サア〳〵、早う思案をして下さんせいなア。

宗七　其やうに忙しなう云うたとて、思案も何も出るものぢやないわい。

三吉　大殿様の方へ行かねばならぬやうになつたら、わたしや生きて居やせぬぞえ。

宗七　エヽ、滅相な事。こなたを殺して堪るものか。

三吉　そんなら、早う女夫にして下さんせいなア。

宗七　サア、ソノ、女夫にせうと云うたところが、金づくなり、金はありながら養子の身の上。こりや困つた事ぢや。

ト思案のこなし。

三吉　コレ、どうぞ早う、好い思案をして下さんせいなア。

ト忙しなう云ふ。ト手を組んで

宗七　ウウッ。

三吉　早う〳〵。

宗七　ウウッ。

ト思案して、

オヽ、出た〳〵。

三吉　出たかえ〳〵。

ト大きな聲して云ふ。宗七、悄りして

宗七　エヽ、引込んでしまうた。

三吉　エヽ、なんぢやぞいなア。オヽ、辛氣やなう。コレ、早う思案して下さんせいなア。

ト宗七、いろ〳〵思案しても出ぬゆゑ

宗七　所詮思案は、今と云うては出ぬ。

三吉　そんなら、大殿様の方へ行かねばならぬかえ。

宗七　滅多に外へは遣らぬ。マア、わしが思案もあれば、何事も任して置かんせ。

三吉　若殿様と女夫にして下さんすかえ。

宗七　ハテ、よいと云ふに。

三吉　エヽ、嬉しうござんす。

ト拜む。

宗七　コレ、若殿様と譯のある事、誰れにも云はぬがよいぞや。

三吉　そりや、合點してゐるわいなア。

宗七　矢張り人目は、わしと譯あるやうに見せかけて、合點か。

三吉　アイ。

宗七　マア、それまでは、わしが色。

三吉　宗七さん。
宗七　おゝや。
　ト唄になり、三吉野の手を引き、上手へ入る。ト沖右衛門、六人の敵役、出て
六人　沖右衛門どの。
沖右　コレ。
　ト押へる。ト序の舞になる。
新吾　まんまと首尾よう采女之助めは、放埒者に仕立て上げた。
沖右　阿房どのを玉に使ひ、小倉の色紙を盗ませ置きしも、一つの方便。
六人　して、その色紙は
沖右　馬鹿殿に渡しあれば、いつなりとも此方の物。
六人　天晴れ。
沖右　御院使のお入りの時、紛失なさせば、差詰め左門之助は切腹。
新吾　さうなれば、貴殿が菅原家も
沖右　身共が物。さうなつたらば、お身達も
六人　立身出世。
沖右　邪魔な年人は閉門。まつた小松屋宗七めが、三千両の用金積んだ船へ忍ばせ、三千両の金子を奪ひ取りたいものでござる。
三郎　その役目、身共が勤めませうかな。
沖右　イヤ／＼、家中のうち、一人にてもならねば、金子紛失の時、疑ひかゝるは知れた事。
喜多　と云つてその役目を、仕負ふせる者なくては
六人　ハテ、どうがな。
　ト皆々、思案のこなし。
沖右　好い思案がある。
新吾　ナニ、好い思案がござるか。
六人　ござるか。
沖右　南京の八平次に申し附けるが最究竟。
六人　イカサマ、彼奴が大屈竟。
沖右　彼れに申しつければ、先づ一方に片附いたる。只善とも悪とも知れざるは、小倉兵右衛門。
喜多　彼奴が所存を見抜き、善ならばぶつ殺し
沖右　悪なれば味方に附けん。其方達も萬事心な
六人　心得ました。
　ト皆々、こなしある。トこの時、下手の松の陰より、南京の八平次、頭手の胴丸、頭の頭巾にて、欠伸をする。

皆々寄り、走り行て、八平次を引出し

沖右　ヤア、大事を聞いたうぬ。

新吾　不便ながら

六人　貫ッ二つ。

ト沖右衛門、皆々刀を抜かうとする。

八平　コレ、待たんせ〳〵。

沖右　ヤア、憎い奴。ソレ、打ちとめさつしやれ。

六人　心得ました

ト刀を抜かうとする。八平次、うろたへて

八平　コレ、待たんせ。おれぢや〳〵。

沖右　ヤア、顔を隠せしは、曲者に相違あるまい。

六人　覚悟いたせ。

八平　マ、片手落ち。コレ、おれぢやと云ふに。

トこれにて、頭巾を脱ぐ。

沖右　そちや南京の八平次。

六人　八平次。

八平　おれぢやと云ふのに。

沖右　頭の瓶に

八平　一命を棒に振らうとした。

六人　危ない事の。

ト皆々、刀を納める。

沖右　時に八平次、其方に頼みがある。聞いてくれうか。

八平　イヤモウ、れきまにさへなれば。

沖右　頼まれるか。

八平　ハテ、命と引替へぢや。

沖右　小気味のよい奴。

八平　追従云はずと、して、その頼みは

沖右　外の事でもないが、小松屋宗七が三千両の金子を、積んだる船へ入り込み、それを盗んでくれまいか。

八平　すりや、三千両の金を

ト大きな声して云ふ。

六人　コレサ、大きな声ぢやなア。

トこの時、八平次、声を潜め

八平　盗むのか。

沖右　仕負ふせてくれるか。

八平　掴まれませう。

沖右　先づ以て忝ない。

八平　さうして、云はぬ事は聞えぬが、首尾よう仕負ふせた時は、褒美はずつしり。

沖右　そりや承知いたして居る。

八平　して、宗七の船は。
沖右　住吉の高燈籠の遙か下。
八平　繋いであるか、
皆々　神力丸。
　ト大きな聲にて云ふ。
八平　お前達も大きな聲ぢや。靜かに云はんせ。すりや、神力丸に相違ないか。
皆々　如何にも。
八平　ようごんす。命に替へて、仕負ふせて見せませう。
沖右　必らず仕損ぜぬやう。
八平　こなん達と一緒に思うてか。云うてもおくれな。そんなぢやない。コレ、貧乏ゆるぎも、さすこつちやごんせぬ。
皆々　そんなら八平次。
八平　サア、マア、行かんせ／＼。
沖右　いづれも、ござれ。
　ト唄になり、皆々、上手へ入る。
八平　コレ、褒美の金、忘れまいぞや。よいかよいか。よいかいなう。先づ金儲けの書ぢや。首尾ようやッつけたら金儲けぢや。こりや大分、拍子まんが直つて來たわい。
　ト八平次、笑壺に入るこなし、バタ／＼するゆゑ、向うを見て
ヨウ／＼向うへ來るは、最前ちよつと見た娘ぢや。幸ひあたりに人はなし、爰で締めてこまさう。
　ト我が形を見て
併しながら、この形では、色事師とは見え憎い。
　ト側の手拭を拾ひ
よい物が落ちてあつた。幸ひこの手拭で
　トかぶつて
斯うしたら。うまい／＼。
〽來るか／＼と濱へ出て見れば、ナウ、濱にや松風音ばかり、ナウ、ヤトカケナウ。
　トこの唄にて、いろ／＼おかしみになる。と向うより夕霧、走り出て
夕霧　こりやマア龍助は、何處へ行きやつたやら。
　トあたりを見て
こりや、きつう遲うなつた。また母樣のお待ち兼ねであらう。さうぢや／＼。
　ト行かうとする。八平次、後より抱きつく。

エヽ、誰れぢや〳〵。惡い事をしやんないなう。
八平　イヤ、惡い事はせぬ、よい事をするのぢや。
夕露　エヽ、一體誰れぢやいなう。
八平　誰れでもない、浪ぢや〳〵、浪でも女浪ぢや。
夕露　エヽ、何をするのぢや。つツともう、惡い事をしやんな。
八平　其やうに情ない云ふものぢやない。そもじに云ふ事がある。ちよつと爰へ來たまはれ。
　ト振り袖を持つ。
夕露　アレエ。
八平　アレもすさまじい。マア、下にゐや。其方は嗜慾なものぢやなう。最前爰に居つた時、あの端から見てゐてさてもさても、あのやうな美しい者が、又とあらうか、せめて男と生れた果報に、一口なりとやつたら、未來永く浮かむであらうと、爰へ來るのを待つてゐた。あんまり恥かしさに、顏を隱して待つてゐました心根を、推量して、ちよつと口々。
　ト口を吸はうとするを、突き退け
夕露　しつこうしやると、聞かぬぞや。
八平　聞かぬと云うて、どうなさる。嚙みなさるか。サア、嚙み。齒形を入れておくれ。いつそ嚙み殺しておくれ。
　トまた行かうとする。夕露、逃げ廻る。八平次、振り袖を持つて
オツと、止まつた。オヽ、嬉しい。
　ト唄のやうに云ふ。
夕露　アレエ、誰れぞ來ていなア。
八平　イヤ、滅多に誰れも來ぬわいなア。どうぞ一挺小波と、前はどう〳〵立波や。
　ト抱きつく。
錦波。
　ト夕露をこかして、乘らうとする。夕露、八平次を突き退ける。
さても荒波や。はね廻されて息のうち波。コレ、大抵の仲かいなア。此やうにせずと、ちよつとわしが思ひを
　トまた夕露を追ひかける。夕露、逃げうとする時、侍ひ一人、出て
侍ひ　八平次はこれに居るか。沖右衞門さまの御用。ちやつと來やれいサ。
八平　エヽ、そこどころかい。
　ト突き退け行かうとする。侍ひ、留める。此うちに夕

露逃げて入る。

侍ひ　コリヤ、待て〳〵。

侍ひ　早う行かぬかい。

ト無理に押しやる。

八平　エヽ、惡い所へ、來いでも大事ないのに、忌々しいなア、返す〳〵も取逃がしたか。アヽ、殘り惜しやなア。

ト侍ひ、無理に連れて入る。ト上手バタ〳〵にて、三吉野、逃げて出る。ト左京之頭、刀を拔き、出る。沖右衛門、敵役の諸士六人、その外仲居、太鼓、附き、早笛にて

沖右　大殿樣には、先づ〳〵

皆々　お待ちなされませう。

左京　留めるな〳〵。憎い女め、予に從はぬのみか、我れにつれなく當る三吉野、予が手にかける、覺悟いたせ。

新吾　御立腹は御尤もなれども、高が傾城賣女の儀なれば

貢　彼れらが申すを、誠と思し召さるゝは、大きな不覺。

皆々　とくとお心を、お鎭め

喜多　あられませう。

左京　高が傾城は賣り物ゆゑ、彼れらが申すを取上げるではなけれども、予を馬鹿にひろいだ女、切りさいなまねば腹が癒ぬ。察するところ、外に情夫あつてと覺ゆる。サア、その云ひ交せし者の名を云へ。サア、吐かし居らう。

ト急いて云ふ。

三吉　隱し男も、なんにもござんせぬ。あなたはわたしが嫌おやに依つて、お返事は致しませぬ。斷り申すがお腹が立つなら、サア、わたしを切るなりと突くなりと、存分にさしやんせいなア。

左京　チエヽ、

ト左京之頭、おこつく。

仲一　コレ、太夫さん

仲二　それではお前

三吉　なんでござんすえ。嫌おやに依つて嫌と云ふに、なんとしたぞいなア。

左京　すりや、どうあつても、情夫の名を云はぬか。

三吉　知りませぬ。

ト皆々を引退け、三吉野を切らうとする。三吉野、身を突きつける。皆々支へる。左京之頭、三吉野を追うて行く。ト向うより、左門之助、着附け、ぶツ裂き、

吹きさらしの陣笠、後より近藤主税、今井軍治、近習の拵らへにて、附き出る。左門之助、三吉野を突き廻して、圍ひ、左京之頭を見得よく留める。左京之頭、見て

左京　そちや左門之助。

左門　親人。

ト この時、三吉野、左門之助の顏を見て

三吉　ヤア、あなたは

ト云はうとするを

左門　尾籠な女め、すさり居らう。

ト きつと云ふ。

左京　女め、うぬを

ト また切らうとするを、左門之助、留めて

左門　先づ〳〵

ト これにて、左京之頭を留め、三吉野を圍ひ、これにて
ギリ〳〵と本舞臺へ來てよき程に

お鎮まりあられませう。

ト突きやる。

神右　あなたには若殿左門之助さま。

皆皆　只今御入國で

皆々　ござりまするか。

左門　家中の者ども、無事でめでたい。

皆々　ハア、。

ト平伏する。

左京　左門之助、何ゆゑ予が手打ちにする三吉野太夫を妨げ致す。

ト きつと云ふ。

左門　親人、こなた樣はなう

ト左門之助、キッと顏を見て云ふ。

左京　なんと。

ト双方きつぱり極る。

左門　この度家の納まりに附き、都へ參り、首尾よく相勤めしところ、犬守兵庫より我れへ來りし書面を、見ると等しく暇の願ひ。直さま歸國。然るに三日以前に着岸いたし、忍び〳〵樣子を聞けば、親人の御身持ち、殊に都より隨從のお入り、それになんぞや酒色に耽り、身には綾羅錦繡を纏ひ、大酒に長じ、コレ、こなた樣に引替へ、この左門之助は、始めての入國に、世上の沙汰を思ひ、鷹狩りに姿を變へて入國いたせしも、家の納まりを存ずるから。それになんぞや、社内に於いて劍戟を打ち振り、

氣狂ひ同然。これ程までに家の大事を存ずる拙者。少しは不便と思し召し、御遊興をお止まり下さりませうならば、この上もなき親人の賢慮。サア、お止まり下されう。

左京　なんと申す。餘り費えがえらいから、この親に慎めと云ふのか。

左門　何卒お聞き届け下されうならば、

左京　如何にも其方が意見、承知いたした。今日から身を慎み、廓通ひは止めに致さう。

左門　すりや、拙者が詞をお用ひあつて

左京　その代り身に取持て。

左門　そりや何を。

左京　それなる三吉野を。

左門　エ、。

左京　取持つならば、この後フツツリと、廓通ひは止めに致す。

左門　サア、その儀は。

左京　その儀とは……さては三吉野と腐れ合うてゐるな。

左門　全く以て。

左門　さうでなくば取持つか。

三吉　コレ、申し、必らず

ト左門之助が袖を持つて云ふ。左京之頭、左門之助へこなしあつて

左京　ヤア、親を差措き、予が心をかける三吉野と、密通いたし居る憎い奴の。

ト左門之助を切らうとする。三吉野、留めて

三吉　イヤ、若殿様が何も知らしやんした事ではござりませぬ。皆わたしが方から

ト云はうとするを

左門　コリヤ、何事も申すな。

左京　いよ／＼怪しい。うぬ。

ト左門之助に切つてかゝるを、三吉野、留める。この時宗七、出て

宗七　その不義の相手が違ひました。

新吾　そちや小松屋宗七。

貢　不義の相手が

喜多　違うたとは。

左京　して、その不義の相手は

皆々　何者ぢや。

宗七　イヤ、三吉野どのゝ不義の相手は、小松屋宗七、ハ

イ、私しでござりまする。

左京　コリヤ、宗七、それでは

宗七　ハテ、默つてござりませ。

三吉　コレ、宗七さま。

ト云はうとするを

宗七　これはしたり、ナ、ソレ、最前云うたは爰ぢや。こなたが物を云ふと、どこからどう通つて、誰れが難儀にならうも知れぬ程に、默つて居たがよいわいなう。

ト押へて云ふ。

三郎　ナニ、不義の相手は

玄蕃　小姓頭宗七。

神右　聢、こりやお手討ちになされずばなりますまい。

左京　如何にも。覺悟いたせ。

ト刀を抜き、宗七を切らうとする。

左門　イヤ、お手討ちになれば、この左門之助をお手討ちに

宗七　イヤ、不義の相手はこの宗七。

三吉　私しを

左門　この左門之助を

宗七　お手討ちに

三人　なされませう。

ト三人爭ひ、首さし延べる。

左京　誰れ彼れの容赦はない。覺悟いたせ。

ト三人目がけ、切らうとする。皆々、マア〳〵と取りさへる。此うち金左衞門、上下にて出て

金左　大殿、暫らく

左京　なにを。

ト切らうとするを、三人隔ひ、左京之頭を見得よく留める

金左　お待ちあられませう。

神右　こなたは向井

皆々　金左衞門どの。

左京　金左衞門、こりや、なんと致す。

金左　大殿、こりや如何なる儀でござります。今日は院使のお入りと云ひ、殊に若殿樣初めての御入國に、荒々しきこの振舞ひ。高の知れたる女儀にかゝつて、命を果すとは上への恐れ。先づ劍戟をお納めあられませう。

左京　生け置かれぬ奴なれども、院使のお入りと云ひ、殊に左門之助の入國、社參の穢れ、命は助けくれる。

トこれにて刀を納める。

とは云へ、憎くき。
ト また行かうとする。
金左 先づ大殿には、御神前へ御入りあつて、めでたう御酒一献。
左京 如何にも左やう致さう。左門之助、神前へ参れ。
左門 有り難う存じまする。
左京 サア、皆の者。
金左 大殿には、先づ
皆々 入らせられませう。
ト唄になり、左京之頭、三吉野を睨み、上手へ入る。左門之助、家役皆々、仲居皆々、入る。左門之助の近習二人は、下手へ入る。三吉野、宗七へ、よいかえと云ふ事をして入る。宗七、残り
宗七 金左衛門さま。
金左 宗七。
ト合ひ方になる。
金左 只今は如何やうになりまするかと、案じて居りましたが、事無難に、私しの身にも何事なく納まりましたも、あなたのお庇。エヽ、有り難う存じまする。
金左 なんの〳〵、禮には及ばぬ。若氣と云ふものは誰れしも同じ事ぢや。それはさうと、明日、日和もよくば、出船を致すつもりか。
宗七 左様でござりまする。先に小平次に積み置きましたが、日和を見次第に直さま、請けまする積りぢやさうにござりまする。
金左 それは大儀。其方は宿へ帰り、何かの用意を致したがよからう。
宗七 左様なれば私しは、お暇申しまするでござりまする。
ト唄になり、下手へ入る。跡を見て
金左 若年なれども發明な奴。末々は小松屋の名跡は、氣遣ひないわい。
トこの時、バタ〳〵にて早瀬、振り袖、腰元にて、氣忙しく出かけ、文箱を持ち、金左衛門を見て
早瀬 ハア、旦那様、これにお越しなされまするか。
金左 そちや腰元早瀬。あはただしい、何事ぢや。
早瀬 宮澤十内さまより密事の御状。
トこれにて、ツカ〳〵と傍へ来て、文箱を出す。金左衛門、取つて、開き、口の内にて読み、機嫌よく思入あつて、氣を替へ

金左　大儀であつた。あたりへ氣を附けい。
早瀬　ハツ。
ト早瀬、あたり見廻しゐる。此うち金左衞門、印籠、矢立にて、返事認め、文箱へ入れ
金左　コリヤ、この書面を十内どのへ、しかと手渡し致せ。
早瀬　ハツ。
ト文箱を取り、行かうとする。
金左　コリヤ〳〵。
早瀬　ハツ。
ト下にゐる。
金左　必らず人に見られぬやうに、行け〳〵。
早瀬　畏まりました。
ト向うへ走り入る。と金左衞門、向うを見て
金左　十内どのよりおこしなされし、この密書の文體では、お家の重寶小倉の色紙は、疾より紛失。
ト懐より二十四文字を出し
今一幅の二十四文字は、我が手にあれども、一品の小倉の色紙なくては、院使への申し譯。
トこの時、近習一人、窺ひ出て
近習　金左衞門、うぬ。
ト切つてかゝるを、立廻つて、見事に投げ
金左　ムウ。
ト向うを見て、手を組む。よろしく　　幕

二つ目

笹原館の段
高燈籠の段
住吉濱の段

役名――笹原左門之助。笹原釆女之助。左京之頭妻、漣。萩の戸姫。岩倉右近。朝日の局。千倉沖右衞門。小倉兵右衞門。大澤新吾。藤田貢。大垣三郎。上山喜多八。月本兵馬。山口玄蕃。松倉三左衞門。坂部兵部。今井軍次。近藤主税。石田主計。月本瀬次郎。神主、榊勝守。庄屋太作。玄海灘龍坊。腰元、早瀬。南京の八平次。小松屋宗七。岸田久我助。犬守兵庫。傾城、三吉野。船頭、鳥の小平次。

造り物、二重、金襖、通し欄間、幕明く。

ト二重上手に、萩の戸、姫の形、相引にかゝり、次に朝日の局、裲襠にて、相引にかゝる。岩倉右近、長上下にて相引にかゝりゐる。漣、奥方、裲襠にて、左門之助、上下。采女之助、若殿の拵らへ、下の上手に千倉沖右衛門、大澤新吾、藤田貢、大垣三郎、上田喜多八、月本兵馬、山口玄蕃、松倉三左衛門、坂部兵部、各々上下、下手に近藤主税、石田主計、立役の諸士二人、この模様、天王立にて、道具納まる。

漣　お勅使様には、遠路の波濤

皆々　お役目御苦労に、存じ奉りまする。

朝右　方々、出迎ひ大儀。

皆々　ハツ。

ト皆々、平伏する。

朝日　即ちこれに渡らせ給ふは、足利の姫君萩の戸さま。妾ことは姫の乳人、朝日の局。

右近　拙者は岩倉右近と申す者。

朝日　して、方々の姓名はな。

漣　私し事は當家の主、左京之頭が妻、漣。

左門　左京之頭が倅左門之助。

采女　同じく采女之助。

沖右　諸士頭、千倉沖右衛門。

新吾　大澤新吾。

喜多　上田喜多八。

貢　藤田貢。

玄蕃　山口玄蕃。

兵馬　月本兵馬。

三右　松倉三左衛門。

兵部　坂部兵部。

三郎　大垣三郎。その外一家中の者ども。

漣　お出迎ひに出まして

皆々　ござりまする。

左門　して、御上使の趣き、何事でござりまするや、とくとお聞かせ下さりませうならば

皆々　有り難う存じます。

ト皆々、手を支へる。

朝日　上使の趣き余の儀に非ず。武將へ差上げる當家の重寶、小倉の色紙。

右近　漢國渡來の二十四文字、

朝日　右二品を、武將へ差上げよとある上使の趣き。

右近　急ぎ二品を差上げてよからう。

左門　ハヽア、家の重寶二品とも、只今差上げまするでござりませう。

沖右　すりや、二品の寶を

皆々　御上使様へ。

左門　如何にも。

皆々　ハテナア。

ト沖右衛門、敵役皆々、顔を見合せる。

左門　コリヤ、沖右衛門、寶を上使へ差上げるを、何ゆゑ胡亂と思ふ。

沖右　ヤア。

左門　イヤサ、大切の寶、紛失でも致したと云ふのか。

沖右　全く以て。

左門　それに又。

沖右　イヤ、これはなんでござります。

ト詰まつたるこなしにて

こりや賢うでござります。二品の寶を御上使へ差上げなさるゝゆゑ、そこで、それはよくござると存じまして、そこで、今のやうに申しましたのでござりまする。

左門　すりや、寶を御上使へ、差上げるゆゑ、今のやうに申したのか。

沖右　なか〳〵、左様でござりまする。

左門　それにしては仰山な、尋ねやうぢやなア。

朝日　早時刻が延びる。早く差上げよ。

漣　ハッ。只今差上げまする。

左門　誰ぞあるか。二品の寶を御上使様へ、御覧に入れよ。

小姓　ハッ。

ト小姓二人、色紙の箱、二十四文字の箱を持ち出で、色紙は朝日の前へ、二十四文字は右近の前へ置き、退る。

漣　ハヽア、笹原家の重寶、二十四文字。

左門　小倉の色紙、イザ、御覧

兩人　下さりませう。

朝右　すりや、これが笹原家の重寶。

ト朝日、右近、箱を明けて見て、恟り

朝日　小倉の色紙

右近　二十四文字、

朝日　こりやコレ

兩人　似せ物。

ト左門之助、漣、恟り。

左門　すりや、二品の寶は
左漣　似せ物とな。
右朝　如何にも。
左漣　ホイ。
　ト兩人當惑。
沖右　恐れながら、如何にお若き御上使樣とて、似せ物を差上げると云ふ事もござるまい。御覽違ひでがなござりませう。ドレ、拙者が拜見。
　ト中を見て
誠に、こりやコレ眞赤な似せ物。いづれも、御覽なされ。
　ト皆々へ見せる。
新吾　成る程、こりや似せ物。
沖右　家の寶紛失いたさば、武將への申し譯に、若殿樣、御切腹をなされずばなりますまい。
喜多　左樣でござる。寶が無くては御上使への手前。
沖右　差詰め切腹は知れた事。
皆々　サア、若殿、申し譯がござるか。
　ト漣、懷劍を拔き、自害せうとするを、左門之助、留めて
左門　イヤ、母人、お待ちなされ。寶紛失の申し譯ならば拙者が切腹。
　ト懷劍を取り、腹を切らうとする。
萩の　左門之助、待ちや。
左門　でも、寶紛失の申し譯。
　トまた切らうとするを
萩の　いま腹を切つて死にやつたら、云ひ譯は立たうが、寶が出るか。
左門　エヽ。
萩の　命を全うして寶の詮議、また自らが願ひも
　ト云はうとして
自らが殺しはせぬ程に、マア／＼、待つて
左門　でも。
萩の　たもいなう。
　ト左門之助に、いろ／＼こなしあつて云ふ。
沖右　イヤ、御上使、如何ほど御前頂なされても、寶が出ぬうちは若殿には、御切腹なされねばなりますまい。兎やかう申しまするも、お家の大事を思ふゆゑ。但し、云ひ譯でもござりまするか。
　トこの時、内より、月本源次郎
源次　その申し譯はござる。

沖右　ナニ、云ひ譯が
皆々　あるとな。
源次　うせう〳〵。
　ト源次郎、神主榊勝守を引立て出て
　下に居ろう。
　ト下に置く。沖右衛門、勝守を見て
沖右　ヤア、其方は
勝守　こなたは
　ト云はうとするを、沖右衛門、コリヤと目で押へて
沖右　コリヤ、麁相吐かすな。
勝守　イヽヤ、コレ、おれぢやわいの。
　トまた行かうとするを、沖右衛門、押へ、いろ〳〵あつて
沖右　コリヤ〳〵、ついぞ見た事もない神主め。知らぬぞ知らぬぞ。
勝守　それでも、こなた
沖右　イヤサ、爰で何を云うても、場所が悪い程に、なんにも云ふな。
　ト押へて云ふ。
勝守　なんの事ぢや。

　トじつとなる。
源次　ヤイ、神主め、何者に頼まれた。サア、眞直に白状いたせ。
沖右　コリヤ〳〵、神主め、例へどのやうな責苦に遭うても、なんにも云ふな。うぬ、吐かしたら命がないぞ。
源次　イヤ、沖右衛門どの、貴殿は、この神主御存じでござるか。
沖右　如何にも。
源次　ヤ。
　ト沖右衛門、云ひ替へて
沖右　知りませぬ。
源次　御存じないか。
　ト顔を見て
ハテナア。なんでも此奴を詮議したれば、寳の在所も何もかも知れさうなもの。ヤイ、神主め、何もかも有やうに申せ。サア、何者に頼まれた。吐かせ。
勝守　どのやうに仰しやつても存じませぬ。
源次　死太い奴の。一應では吐かすまい。
　ト刀を背中へ差込み
サア、これでも吐かさぬか。

トきつと責める。
勝守 アイタ、、、。
ト苦しむ。
源次 サア、苦しくば吐かせ。
勝守 どのやうな目に遭うても、知りませぬ。
源次 死太い奴、サア、吐かせ。
勝守 知りませぬ。
源次 これでもか〳〵。
トいろ〳〵責める。
勝守 ア、モシ、コレ、申します〳〵。ちつと緩めて下さりませ。
源次 吐かすか。
勝守 云ひまする〳〵。
トこれにて源次郎、刀を抜く。
源次 サア、吐かせ。
勝守 斯うなつたれば、何もかも申しまする。その譯と申しまするは
ト云はうとする。沖右衛門、小柄を手裏劍に打つ。勝守死ぬ。
源次 沖右衛門どの、詮議の種のこの神主めを
沖右 手にかけたはお家の爲。
源次 なんと。
沖右 あの神主めが口走つて、どこからどう縺つて、誰れの難儀にならうも知れぬ。そこを存じて只今の仕儀。
源次 すりや、神主めを手にかけられしは、お家の爲の忠義とな。
沖右 如何にも。
源次 それほどお家を大事、主人を大切と思はるゝ貴殿が、何ゆゑに若殿に切腹を勸め召された。
沖右 ヤ。
源次 ハテ、天晴れの忠臣ぢやなア。
トこれにて沖右衛門、眞面目になる、
朝日 先程より餘程の隙入り。して、二品の寶は。
朝右 受取らうか。
諸左 サア、その儀は。
右近 上使に立つたる我れ〳〵を、侮つての儀か。
諸左 全く以て。
朝日 然らば云ひ譯あるか。
兩人 サア、それは。
朝右 サア。

沖左　サア。
四人　サア〳〵〳〵。
右近　両人。
朝日　なんと。
両人　ホイ。
ト両人當惑。源次郎も俯向く。沖右衛門、敵役六人、笑壺のこなし、いろ〳〵あり
沖右　サア、若殿、早く御上使へ
六人　云ひ譯さつしやれ。
トきつと云ふ。この時、戸屋より
兵庫　待つた、その申し譯、それへ參つて仕らう。
沖右　すりや、申し譯を
兵庫　當家の家老犬守兵庫、申し開き仕らん。
ト序の舞になり、兵庫、上下にて、病中のこなし、病ひ鉢卷にて、花道眞中に直る。
左門　そちや犬守兵庫。
沖右　誠に犬守兵庫どの。
右左　病中の身として引籠り、お許しもなきに
貞　大切の御上使のお成り
皆々　寶紛失の場所へ無禮の振舞ひ。

沖右　方々。
玄三　ハツ。
ト両人、兵庫の側へツカ〳〵と行て
玄蕃　兵庫どの
三左　立たつしやれ。
ト両人、兵庫の手を取る。兵庫、両人の顔を見て
兵庫　先達てより病氣に冒され、引籠り居りしが、今日上使のお入りと云ひ、若殿樣御入國、思ひがけない寶の紛失、聞くと等しく駈けつけしこの兵庫。
玄三　立たう。
ト両人、かゝるを、立廻つて
兵庫　病中ながら、御前へ推參いたせしも、寶の申し開き致さん爲。
ト両人を見て
御上使樣の御前にて、立ち騒いで尾籠千萬。押へて居らう。
ト両人を投げて
無禮の長髮、眞平御免。
ト本舞臺へ行かうとするを、両人、留めるを、突き退け

漣　ハア、御免〳〵。
ト本舞臺へ來て、兩人を見事に投げて
御免下さりませう。
ト下にゐる。兩人もヂッと扣へる。
犬守兵庫。
兵庫　ハッ。
漣　先達てより病氣に依つて、引籠りし其方、思ひがけない寶の紛失、よきに其方を賴んだぞや。
兵庫　思ひがけなきお寶の紛失と承り、驚ろき入り奉る。さりながら、兵庫斯く參るからは、拙者にお任せあつて、お心安う入らせられませう。
漣　何事も、よきに賴むぞや。
兵庫　ハッ。
朝日　さては其方が、當家の家老犬守兵庫。
兵庫　ハッ。これは〳〵御上使樣には、御遠路の御發駕、御苦勞千萬に存じ奉ります。疾にもお出迎ひ申す筈なれども、病氣にて引籠りありしところ、寶紛失、家の大事と存じまして推參。病中の長髮、御免下さりませう。
沖右　イヤナニ、御家老職。すりや、其許が、寶の詮議を召さるゝぢやまで。
兵庫　おんでもない事。
沖右　然らば御家老の捌きを、拜見の致さう。ナウ、いづれも。
新吾　イカサマ、我れ〳〵も後學の爲なれば
敵皆　拜見いたさう。
兵庫　いづれも、お聞きなされ。我れ斯う云ふ事もあらんかと、小倉の色紙は疾より似せ物を拵らへ置き、寶藏へ入れ置きしを、誠の色紙と思ひ、奪ひ取つた奴がござる。なんと、うつけた奴もあるではござらぬか。
ト此うち沖右衞門、敵役皆々、さてはと云ふ思ひ入れ、いろ〳〵ある。この時、采女之助、色紙を出して
采女　すりや、まんまと、奪ひ取つたと思うた色紙は、似せ物であつたか。エヽ、忌々しい。
ト何心なく打ちつける。兵庫、色紙を見て
兵庫　ハッ、御上使樣、小倉の色紙を、お受取り下さりませう。
ト朝日の前へ置く。沖右衞門、采女之助、顏見合せ、皆々、恟り。
采女　ヤア〳〵、そんなら今のが誠の色紙であつたか。又

一ぱいやり居つたな。エヽ、腹が立つ。
餘ッぽどおれは阿房ぢやわい。
ト我が額を叩く。
朝日　して、又、一種の
右近　二十四文字は
兵庫　それも只今差上げまする。今暫らくの間
トあたりを見て
大切ない寶の紛失、お家の大事にかゝはるゆゑ、病中の
某でさへ相詰め居るに、この席に小倉兵右衞門の見え
ぬは。
トこの時、上手の内より
兵右　イヤ、小倉兵右衞門、疾よりこれに扣へ居りまする。
ト兵右衞門、上下にて出て
ハツ、御上使樣には、御苦勞に存じまする。
ト平伏して
これは〳〵兵庫どのには、先達てより病氣にて、引籠り
ありしが、今日の御出仕、御苦勞に存じまする。拙者先
刻より、お次に相詰め居りましたが、其許が寶の詮議、
さゝへ、こさへ申すは無禮と存じ、それゆゑ罷り扣へ居り
ました。

兵庫　左樣な儀でござつたか。先づは其許にも御健固で
兵右　其許にも御全快
兵庫　お互ひに喜ばしう
兩人　存じまする。
トこの時、下手より、太作、庄屋にて、百姓大勢連れ、
出て
皆々　ヘイ〳〵、御免下さりませ。
太作　ヘイ、イヤ、申し、御家老樣へ申し上げまする。先
程あなた樣のお屋敷へお願ひ申した通り、どうぞよろし
う
皆々　お願ひ申し上げまする。
兵庫　われ達が願ひ、承知いたした。暫らく控へ居よ。
皆々　ヘイ〳〵。
ト皆々、扣へる。
兵庫　兵右衞門どの、改めてちよつと御意得たい。
兵右　アノ、拙者に。
兵庫　なか〳〵。
ト合ひ方キッパリとなり、兩人、前へ出てよろしく
兵右　イヤナニ、兵庫どの、拙者をお招きなされたは、何
事でござる。お上使へ差上げる今一種の、寶紛失いたし

たゆゑ、どうぞして詮議いたしたらよいかとの、拙者へ
の御相談でござるか。左様でござらう。

沖右　御家老職が寶紛失の詮議とは、天晴れの御家老ぢや
なァ。

敵皆　ハヽヽヽ。

ト笑ふ。

兵庫　默らつしやれ。犬守兵庫は當家の家老、汝等如きに
云ひ聞かさうか。馬鹿な事を。

兵右　然らば拙者へ、なんの御用で

兵庫　コリヤ〳〵、百姓ども、殘らずそれへ出て、先程身
が屋敷で申した通り、一々申せ。聞き屆けてくれう。

太作　ヘイ〳〵。サア〳〵。お許しが出た。皆ヅッと向う
へ、出やしやれ〳〵。

皆々　ヘイ〳〵、御免下さりませ。

ト太作、百姓、ワヤ〳〵云うて、向うへ出る。兵右衞
門、見て、恟り。

兵右　ヤイ〳〵、うぬ等の分際で御上使の御前、殊にお許
しもなきに、慮外な奴等。殊さら今日は館も取込みなれ
ば、早う歸れ。

ト太作、皆々、叱られ、もぢ〳〵して、頭を掻いてゐ
る。

早う歸れ。エヽ、歸らずば、打ち放すぞよ。

ト刀に手をかけ、急いて云ふ。皆々、怖がり、立たう
とする。

兵庫　コリヤ〳〵、苦しうない。下に居れ下に居れ。

兵右　早く歸れ。

ト急き込んで云ふ。

兵庫　これは御短慮千萬。先づ〳〵彼れらが願ひを、一通
りお聞きなされサ。

ト宥める。兵右衞門、エ、要らざる事をと、いろ〳〵
こなしある。

コリヤ、百姓ども、怖い事もなんにもない。ズッと出て、
有やうに申せ。どうぢや、どうぢや。

太作　ヘイ〳〵、左様ならば、申し上げるでござりませ
う。ハイ、私しは一村を預かり居りまする、庄屋太作と
申しまする者でござりまする。この度お上よりの申し渡
されには

百一　岩を穿ち、大池小池を埋め、殘らず田地にして

百二　運上金を差上げいとの仰せ。

百三　その大池小池を潰しましては

百四　田地へ水を取る事がなりませぬ。

百一　それでは畑が日焼けになりまして

百二　また日焼けになりましては、運上を差上げる事がなりませぬゆゑ

太作　何卒大池小池を潰しまする事は、御免なされて下さりませと申しましたれば

百三　腹をお立てなさりまして、それでは田地が少ないと、お聞き届けがござりませぬのみか

百四　運上金を差上げませぬ者は

百一　水牢を仰せつけらるゝとござりまするゆゑお願ひ

百二　どうぞ池も潰さず

太作　水牢にも入りませぬやう

百三　村の者が無難に納まりまするやう

百一　お上のお慈悲を持ちまして

百四　これまでの通りになりまするやう

皆々　よろしうお願ひ、ヘイ〳〵

太皆　申し上げまする。

ト此うち兵右衛門、一々こたへ、いろ〳〵こなしある。

兵庫　それは甚だ無體な儀。して、その儀を申しつけしは何者ぢや。

太作　ハイ、其お侍ひ様と申しまするは

ト云はうとする。兵右衛門、うぬ、吐かしたら打ち殺さうと云ふ事をするゆゑ、百姓皆々、怖がつて

兵庫　サア、その云ひつけたお侍ひは。

太作　お侍ひ様は

兵庫　誰れぢや、何者ぢや。

皆々　あれにござる。

ト兵右衛門、睨む。

太作　兵、兵

ト云ひ憎さうに

兵右衛門さまで

皆々　ござりまする。

ト兵右衛門、これにて、いろ〳〵こなしあり

兵庫　すりや、兵右衛門どのとな。

ト兵庫、兵右衛門の顔を見て

ハテナア。

トこなし。

兵右　斯やう仕りまするがお家の爲、主人へ忠義でござりまする。

兵庫　ナニ、主人への忠義とな。

兵庫　されば、町人百姓ども、金銀に飽き滿つれば、榮華に誇り野心を企む。そこを存じて、彼れらに課役を申しつけたは、大殿樣の遊所通ひ、また左門之助さま御入國、何やかやのお物入りも多く、少しばかりは拙者が働らき。

兵庫　なんと云はつしやる。然らば餘り物入りゆゑ、彼れらをせたげ、其お役に立て召されたか。流石は小倉兵右衞門どの、兵庫驚き入りました。なか／＼の大忠義、お出かしなされた。

ト扇を開き、兵右衞門を煽ぎ褒める。

して又、大池小池を潰させし儀はな。

兵右　すべて山添ひと申すものは、猪、狼なぞが、夜になれば出まして草を喰ひ、或る時は池へはまり、田畑を荒らし、甚だそれで難儀いたします。そこを思うて拙者が計らひ。

兵庫　すりや、狼なぞが出まして、池へはまり、畑を荒らしまするゆゑ、百姓どもの難儀を御推量あつて、池を潰させ召されたか。

兵右　なか／＼左樣サ。

兵庫　それは兵右衞門どのには、誰れも頼まぬ事を、いかいお世話を

兵右　ヤ。

兵庫　なさるゝたア。

ト なじつて云ふ。兵右衞門、無性に扇にて煽ぐ。

それはそれで解りましたが、して、百姓どもよりお受取りなされた、金子の高は。

兵右　その金子の高は

ト云ひ憎さうにして

金子の高は、さうぢや、千五百兩受取りました。

兵庫　して、その金子は、如何召された。

兵右　その金子は、若殿樣の御遊興、何やかやの入用に殘らず要りました。

兵庫　そりや、怪しからぬ奢りの沙汰でござるの。

兵右　若殿采女之助さまはお大名、斯ほどの金子をお遣ひあつても、さのみお咎めもなりますまい。

朝日　イヤ、采女之助どのへ、武將どのよりお咎め。

采女　ナニ、私しへお咎めとな。

朝日　未だ部屋住みの身として、數多の金子を遣ひ、身持ち惰弱不届きとあつて、切腹申しつけよとある上意。

采女　エヽ。
両人　サア、采女之助、云ひ譯なくば切腹いたすか。
采女　サア、それは
左近　但し、身共が介錯せうか。
采女　エヽ、滅相な。
朝日　云ひ譯あるか。
采女　サア
朝日　サア
朝采　サア〳〵〳〵。
朝日　なんと〳〵
采女　コリヤ、兵右衛門、こりや、どうせうぞいやい。
　ト兵右衛門に云ふ。兵右衛門、兵庫に悟られまいと、目で押へる。采女之助、いろ〳〵こなしあつて
もう自暴ぢや。私しの命にかゝはりまするゆゑ、何もかも申しまする。三吉野に惚れましたは、わたしなれども、金はあの兵右衛門が取つて、わたしの自由にさゝず、さうしてそれ程に金を遣ひました覺えはない。また廓通ひさしましたも、皆兵右衛門が指圖でござりまするからは、どうぞわたしが命をお助けなされて、あの兵右衛門に腹を切らして下さりませ。申しお上使樣、お願ひ申し上げまする。
　ト采女之助、身に火が附くゆゑ泣いて云ふ。此うち兵右衛門、いろ〳〵ある。
兵庫　若殿、よう仰せられた。それで一部始終が解りました。あなたの疑ひ晴れました。
　ト采女之助、少し落ちついた思ひ入れ。兵右衛門の側へ寄つて
サア、兵右衛門、あの通りぢや、世事にうとい若殿を玉に遣ひ、金子は如何召された。
兵右　默れ兵庫。最前より云はして置けば、出るまゝのたわ言。采女之助さまはお大名の懐子、如何程入用あつたやら、御存じあらうか。イヤモウ、何を云うても愚かしい若殿ゆゑ、お側に居つても、それは〳〵、大抵や大方の心苦勞な事ではござらぬわい。
兵庫　すりや、其許がお側にあつて、若殿をそゝのかし、共々に踊り狂ひ、若殿を馬鹿に仕込み、金子を横取りして、若殿に塗り附ける其方が企みか。
兵右　如何にも。
　ト思はず云ふ。
兵庫　すりや、金子は殘らず虚妄いたしたか。

兵右　ヤ。
兵庫　譯も答へぬに蛙は口から、自身の白狀。サア、最早汝、如何ほど能辯を以て云ひくるめても、淨玻璃の鏡にかけて、見え透いてあるわい。
兵右　ムウ。
トぎつくりこなし。
すりや、身共が、この金子を虛妄いたしたと云ふのか。
兵庫　但し、虛妄いたさぬと云ふ、申し譯でもあるか。
兵右　サア、それは。
庫兵　サア。
兵右　サア。
兩人　サア〳〵。
兵庫　コリヤ、病中なれども犬守兵庫、汝等如きの詞企みに乘らうか。何を馬鹿な。
トきつと云ふ。兵右衛門、いろ〳〵こなし。
兵右　さう吐かしやア、いつそ。
ト拔かうとするを、留めて
兵庫　コリヤ、なんとするのぢや。イヤサ、誰れを切る。
兵右　うぬを切るわい。
兵庫　この兵庫は、手もあり足もある。うぬらが手に合はうか。
兵右　ところを。
ト兵右衛門、刀を拔き、兵庫に打つてかゝるを、ちよつと立廻り、兵右衛門、刀を打ち落される。トまた小刀にて切つてかゝるを、立廻り、又これも打ち落され、兵右衛門、ウロ〳〵する。と沖右衛門、後より、兵右衛門に、刀を拔き渡す。兵右衛門、取つて、又かゝりよろしく立廻つて、兵庫に打ち据ゑられる。沖右衛門敵役皆々、うぬと、刀に手をかけうとする。兵庫、何をと睨むゆゑ、皆々、ギツと扣へる。兵右衛門は當てられ片膝へ倒れる。ト兵庫、よろしくある。
太作　ア、嬉しや、どうならうかと、きつう案じて居りましたに、無難に濟みまして
百皆　嬉しうござりまする。
兵庫　コリヤ百姓ども、委細の儀は身が承つた。今日譯を糺し遣はす筈なれども、折惡しう御上使のお入りと云ひ、お館の取り込み。明日にても身が屋敷へ參れ。ときに御前へ、申し上げて、計らひ遣はす。先づ今日は、歸れ歸れ。
百皆　畏まりましてござりまする。

太作　なんと皆の衆、御家老様ほどあつて、けうといもの
ぢやないか。
百一　それに引替へ、あの侍ひめは、悪い事した罰が當つ
て、あの態。
皆々　よい氣味な。
ト　わや〳〵云ふ。
源次　コリヤ、姦ましい。早く歸れ〳〵。
太作　左樣なら、よろしうお願ひ申しまする。
皆々　おさらばでござりまする。
ト　いろ〳〵捨ぜりふ云ひ〳〵、下手へ入る。と後合ひ
方。
右近　先程より餘程の隙入り。して、今一種の二十四文字
を
右朝　受取らうか。
兵庫　サア、二十四文字は
右朝　なぜ差上げぬぞ。
兵庫　サア、その儀は
右朝　此まゝに歸らうか。
兵庫　サア

右朝　サア
三人　サア〳〵〳〵
右朝　返答は
右近　なんとぢや。
金左　今一種の二十四文字、お渡し申しませう。
ト　金左衛門、二十四文字を袱紗に包み、持ち出て、上
手へ通り
當家の二十四文字は、即ちこれに。
沖右　二十四文字は紛失と思ひしに、すりや
ト　皆々と顔見合せ
敵皆　ハテナア。
金左　二十四文字は紛失せしと、一家中へ云ひ觸らせしは
僞はり。身が所持いたし守護仕る。イザ、お受取り下さ
りませう。
右近　當家の重寶二十四文字。
朝日　小倉の色紙。
兩人　二品とも、慥かに受取つた。
朝日　寶受取る上は、妾は最早立歸り
右近　右の樣子を言上せん。
兵庫　先刻より何かと餘程の遲刻。御上使樣にも御意届、

先づ奥殿へ御座あつて

左門　遙かの海路を御覧あるも、一入御一興。源次郎は次に參つて、御家來衆をもてなせ。

源次　畏まりました。

朝日　姫君樣には奥殿にて、日頃の思ひを

萩の　左門之助とかや。

ト萩の戸、朝日と顔見合せ、恥かしきこなし。

朝日　ハテ、御前進ばさずと

右近　然らば方々

左門　御上使樣には、先づ

皆々　入らせられませう。

ト唄になり、萩の戸、左門之助の顔を見てゐる。朝日、奥へ連れ入る。右近、上手へ入る。漣、采女之助・金左衛門、沖右衛門、敵役の諸士、皆々奥へ入る。源次郎は下手へ入る。跡に左門之助、兵庫、殘り、あと合ひ方。

左門　兵庫、家の寶物紛失せしを、其方が忠節に依つて無難に手に入れ、御上使の御前首尾よく相濟みしも、全く其方の働らき、過分。

トあたりを見て

それにつき其方に、改めて聞かす仔細あり。

兵庫　アノ、拙者めに。

左門　兵庫、近う。

兵庫　ハツ。

ト合ひ方替る。兵庫、左門之助の前へ出る。

左門　我れ都へ赴くその砌り、其方が書面到來より、三日以前に着いたれども、若殿のお身持ちよろしからず、密かに姿を窶して入國いたせしところ、若殿身持ち、家中の我まゝ、惡事を企む小倉兵右衛門、憎くき奴、討ち果たす奴なれども、我が初めての入國に、家來一人にても召抱ふべきお道なるに、家中の善惡を糺すには如何と思ひ、命は助け置く。其方密かに意見の加へ、善心に歸へるやう云ひ聞かせてよからう。

兵庫　ハア、冥加に餘る御情け、とくと意見の加へ、善心になりまするやう、云ひ聞かせまするでござりませう。

ト此うち下手より、今井軍治、近藤主税、上下にて出て

軍治　最早日も暮れに及びますれば

主税　お濱御殿へお越しあられませう。

トこれにて左門之助、ズツと立つて、花道際にて

左門　犬守兵庫。
兵庫　ハッ。
　ト側へ寄る。
左門　コリヤ、くれ〴〵も兵右衛門へ、承知か。
兵庫　とくと承知仕つてござりまする。
　ト左門之助、兵庫を見て
左門　櫻木を、眺きて見れば花もなく、などかは春の
　ト空を見て
容にこそあれ。
兵庫　エ、。
　ト左門之助、氣を替へ
左門　犬守、さらば。
　ト唄になり、兩人附き添ひ、向うへ入る。兵庫、向うを見て、若いが發明な、と云ふこなしをして
兵庫　ドリヤ、御前へ參らうか。
　ト唄になり、奥へ入る。下手より沖右衛門、喜多八、新吾、貢、玄蕃、三右衛門、月本兵馬、兵部、三郎、皆々黒羽二重にて、頬冠り、尻からげにて、兵右衛門に息を入れ、介抱する。兵右衛門、氣の附きしこなし。
沖右　氣を慥かに持たつしやい。

皆々　兵右衛門どの。
　ト兵右衛門、起きて
兵右　いづれも。無念な。
皆々　お道理だ〳〵。
兵右　口惜しいわい。
　ト無念のこなし。
沖右　この上は、兵右衛門どのゝ無念を晴らさん。
皆々　御尤も。
沖右　いづれも、ござれ。
　ト皆々、奥を目がけ、駈け行くを
兵右　ヤレ、いづれも、血相變へて、何所へ。
皆々　ハテ、知れた事。奥へ踏ん込み
沖右　犬守兵庫を
兵右　ハテ、心の逸るは尤もなれども、劒術無双の某でさへ、なんの苦もなくこの有樣。それに貴殿達が討ち取らうとは、飛んで火に入る夏の蟲。
皆々　でも。
兵右　ハテ、まだ〳〵外に工風もある。先づ先づお待ちなされ。
　トこれにて、皆々戻つて

皆々　ナニ、兵庫を討ち取る工風とな
兵右　イヤ、身共が恨みは犬守兵庫でない。
沖右　ナニ、兵庫を討ち取らず、外に討ち取る奴とは
皆々　そりや何奴を。
兵右　身が討ち取る奴は
　トあたりを見て
コレ。
　ト囁く。
沖右　すりや、左門之助を
皆々　たんだ一討ち。
　ト大きな聲して云ふを
兵右　コレ。
　トあたりを見る。ト暮れ六ツの鐘鳴る。
皆々　最早暮れ六ツ。
沖右　幸ひ今宵は二十三夜。
兵右　して、左門之助は
沖右　お濱御殿へ。
　ト此うち兵右衛門、上下を脱ぎ、尻からげして
兵右　すりや、お濱御殿とな。
　ト上手の槍を見て、押取り
幸ひのこの槍。忍び入るには丁度宵闇。
新吾　日頃の本望。
喜多　今宵のうち。
兵右　然らば、いづれも。
皆々　兵右衛門どの。
兵右　續かつしやれ。
　ト槍を提げ、皆々を連れ、向うへ走り入る。ト上手より、金左衛門、出て
金左　兵右衛門が今の振舞ひ、若殿のお身の上。
　トむゥとこなしあつて、向うへ走り入る。と奥より、三吉野、出て
三吉　左門之助さまは、何處にゐやしやんすやら。
　トちよつと思案して
大方お濱御殿へお越しなされたか。なんでも左門之助さまに。さうぢや／＼。
　トこれも向うへ走り入る。と奥より釆女之助、嫁らしき形にて出て
釆女　三吉野々々、太夫々々。太夫は何處へ行きやつた。さては兄者人の、在所を尋ねて行つたのであらう。なんでも太夫の跡を。さうぢや／＼。太夫やい／＼。

ト云ひ〳〵、向うへ走り入る。と下手より、玄海灘の龍助、出て

龍助　なんでも三吉野を引ッかたげて、殺らすが最屈竟。采女之助めが邪魔すりやア、打ち放して。さうぢや〳〵。

ト尻からげして、これも走り入る。下手より源次郎、出て

源次　今のは玄海灘の龍助。若殿采女之助さまのお身の上。こりや斯らしてはゐられぬ。彼奴に追ひつき。さうぢやさうぢや。

ト同じく向うへ走り入る。と兵庫、出て

兵庫　心々に駈け行く有樣。

トあたりを見て

今宵のうち。

ト笑を含み、よろしく見得にて、チヨン〳〵。返し

造り物、高二重、上手、障子屋體、下手落間、上手下、柴垣、前に松の木、下手にも柴垣、兩方とも人隱れる事ある。と沖右衛門始め、敵役の諸士、向うより、火繩を打振り、本舞臺へ來る。とバタ〳〵にて、兵右衛門、槍を提げ、出る。道具納まる間、袖の露の唄になつて、道具とまる。

皆々　兵右衛門どの。

兵右　いづれも、必らずぬかり召されな。

皆々　心得ました。

ト右の唄にて、兵右衛門、上手の柴垣へ忍ぶ。と沖右衛門皆々、下手の柴垣へ忍ぶ。と向うより金左衛門、探り〳〵出て、障子屋體へ入る。ト向うより三吉野、出る。後より采女之助、龍助、源次郎、矢張りこの唄にて、探り出て、本舞臺へ來る。と龍助、三吉野、采女之助、源次郎、探り廻つて、暗がりのおかしみの立廻り。三吉野は下手へ、探り〳〵行く。と龍助、三吉野の帶を捕まへる。三吉野、振りほどき、探つて、逃げて入る。と采女之助、龍助を三吉野と思ひ、帶を捕まへる。龍助、振り放し、采女之助の前を蹴る。采女之助、苦しむ。此うち龍助、三吉野の跡を探り入る。と源次郎も探つて、采女之助に行き當る。これにて采女之助、氣の附くこなし。おかしみあつて、探り入る。源次郎も下手の柴垣へ入らうとする時、内より沖右衛門、敵役皆々、出て、源次郎を突き廻す。このキッカケにて、八島になる。これより皆々を相手に、源次郎、

面白き立廻り、御工風あるべし。トヾ皆々を追ひ廻し、下手へ追うて入る。唄止む。ト上手より兵右衛門、出て、槍をしごき、上手の障子の内を窺ひ、よしとて突ツ込む。ト障子明け、この物音に左門之助、手燭を持ち出て

左門　怪しの物音。

ト手燭を上げ、見込む。ト兵右衛門、槍引拔き、また槍を捻つて、左門之助目がけ、突き留めんとする。と金左衛門、左門之助、突き廻す。兵右衛門、左門之助を突かうとする拍子に、金左衛門の脇腹を突く。金左衛門、腹を抱へながら、左門之助に氣を附ける。左門之助、これはと、介抱せうとする。金左衛門、手燭の火を消す。兵右衛門は、慥かに手應へ、うまいと云ふこなし。左門之助、あたりに心を配る。金左衛門、左門之助の身の上、曲者はと窺ふ。三方よろしく見得にて、チョン／＼。返し

造り物、向う浪幕、上手、高燈籠、下手に板松、所所にあり、すべて住吉濱邊の模樣、所知入りにて、道具とまる。

ト上手より、行列出る。後より乘り物三挺、侍ひ四人附き、出る。

右近　乘り物、立てい。

皆々　ハヽア。

ト乘り物立てる。と中より右近、出て

右近　者ども大儀。

皆々　ハア、。

ト平伏する。

右近　予はこれより住吉の、濱の景色を眺め、ゆる／＼と歸館せん。

皆々　然らば、我れ／＼もお供を

右近　イヤ、予はちと隙取れば、其方達は殘らず屋敷へ歸れ。左京之頭はじめ、誰れ／＼へも、よろしく傳へてくれい。

皆々　畏まりました。

右近　サア／＼、行け／＼。

皆々　ハア。

ト皆々、上手へ入る。ト後の乘り物より、[illegible]日、萩の戸も出て、あたりを見る。ト高燈籠より、兵庫、黒羽二重、目出し頭巾にて出て

右近　兵庫さま。
右朝　まんまと首尾よう。
兵庫　コリヤ。
ト　これにて、凄き合ひ方になる。
三人とも首尾よう仕負ふせて、大儀々々。
三人　もうようござりますか。
ト三人、胸を撫で、あたりを見て、朝日、裲襠、着附けを脱ぐ。と、下は世話女房の形。右近も上下衣裳を脱ぐと繼ぎ〳〵の形になり
右近　まんまと首尾よう仕負ふせましたのでよいが、悪う行たら、この首はころり。オヽ、怖やの〳〵。
朝日　時に兵庫さま、なんとお勅使の工合は、なか〳〵玄人でござりませうがな。
右近　私しが上使の塩梅、台詞の云ひ廻し、とんとほんまのやうにござりませうが。
朝日　此やうな命がけの事を致しまするも、御褒美が欲しさでござりまする。
右近　どうぞ申し、お約束のお金を
兩人　申し。
兵庫　如何にも、首尾よう仕負ふせた其方達に、褒美をくれいでなんとせう。
兩人　それは有り難う存じます。
兵庫　して、二品の寶は
右近　菅原家の重寶、漢國渡來の二十四文字。
朝日　小倉の色紙。
兩人　イザ、お受取り下さりませう。
ト渡す。兵庫、取つて、開き見て
兵庫　紛れもなき小倉の色紙。エヽ、忝ない。
朝日　して、私しどもの
右近　御褒美は
兵庫　褒美をくれう。近う參れ。
兩人　ハイ〳〵。
ト兩人、兵庫の前へ出る。
兵庫　その褒美は
本人　御褒美は
兵庫　まッ斯う。
ト朝日、右近を、ポンと切る。萩の戸、慄ふ。ト怖い事はないと云ふ事をする。萩の戸、慄うて、兵庫の袖を持ちゐる。
下郎は口のさがない者、斯うして置けば後日の難もなし。

よし／＼。
トこの時、沖右衞門、尻からげ、頬冠りして出て
沖右　犬守兵庫さま。
兵庫　そちや沖右衞門。喜べ、笹原家の重寶二十四文字、
小倉の色紙は我が手に入つた。
沖右　天晴れ妙計。
ト兩人の死骸を見て
これは。
兵庫　下郎は口のさがないもの。餘人が知らば大望の妨げ
不便ながらも
沖右　成る程、御尤も。
兵庫　コリヤ、沖右衞門、この二品は汝に預け置く。しか
と守護いたせ。
ト渡す。
沖右　慥かに預かりました。
兵庫　まつた其方は、金左衞門が屋敷へ立越え、隼人千草
媒の祝言を致させ、得心なれば
ト懷より連判を出し
その連判に合體のさせ、得心なくば人知れず、討つて捨
てい。

沖右　すりや、金右衞門を
兵庫　コリヤ、必らずぬかるな。
沖右　心得ました。
兵庫　早く行け。
沖右　ハツ。
ト走り行く。兵庫、向うを見て
兵庫　それもよし。
ト萩の戸、慄うてゐる。
コリヤ、怖い事はない。其方が身に凶事はない。また汝
が兄の兵右衞門に、云ひ合す事もあれば、兵右衞門が屋
敷へ、さうぢや。
ト萩の戸の手を引き、向うへ入る。ト向うより、早瀬、
前幕の状箱を持ち、出る。後より新吾、尻からげ、頬
冠りにて出て
新吾　コリヤ、待て、
ト抱きとめる。
早瀬　コリヤ、なんとしやる。
新吾　イヤ、なんともせん。金左衞門より十內へ行く密書。
此方へ渡せ。
早瀬　イヤ、この密書、滅多に渡す事ならぬ。

新吾　イヤ、渡せ。
早瀬　女と侮り理不盡しやると、爲にならぬぞ。そこ退いて通しや。
新吾　イヤ、滅多に通さぬ。此方へ渡せ。
早瀬　ならぬ。
新吾　なんと。

ト文箱を引ッ張る。内より狀出る。互ひにこの狀にて、立廻り、ト狀、中程より切れる。新吾、早瀬をちよつと當て、走り入る。と早瀬、起きて、狀を見て

早瀬　南無三、いづくまでも。

ト向うへ、凛々しく走り入る。チヨン／＼返し

造り物、高燈籠を上へ引き、浪幕落す。と一面の大手になる。上手、薄原を出す。道具とまる。

ト向うより新吾、狀を持ち、走り出る。後より早瀬、走り出て、新吾を突き廻して

早瀬　大切なるその狀、此方へ渡しや。
新吾　うぬにうまく／＼渡さうかい。
早瀬　渡しや。
新吾　ならぬ。

トまた兩人、立廻り、いろ／＼ある所へ、下手より、岸田久我助、脚袢、草鞋、奴の拵らへにて、提灯を持ち、出て、兩人に行き當る拍子に、提灯落す。この三人、面白き立廻り、いろ／＼ある。と上手の薄原より、龍助、出て、四人、だんまりの立廻りになる。隨分面白くあるべし。よき程に龍助、新吾を切る。あと三人また立廻り、土手の上へ上がり、三人、危ふき立廻り、ト龍助、久我助の足を切る。久我助、悸りし、思はず早瀬を下へ突き落す。久我助、上にて、足を抱へ、刀を龍助に見せる。龍助、これにて及び腰に、刀を振り上げる。と早瀬、花道へ辷つて行く。この見得、よろしく、チヨン／＼。返し

造り物、中の手、下に小浪幕、上手に薄原、浪うれ、小船一艘つなぎある。船場の模様、浪の音にて、道具止まる。

ト向うより宗七、合羽、三尺帯、船に乘ると云ふ拵らへ、小風呂敷を持ち、後より手代、小松屋と云ふ弓張り提灯を持ち、外に手代三人、各々千兩箱を持ち、妙見の合ひ方にて

手一　申し若旦那、今度は大切のお役目、隨分御機嫌よう、早うお歸りなされませ。
四人　申し、お歸りを待ちまする。
宗七　この度の役目は、大切なる御用ゆゑ、どうで戻りも隙がいるであらう、留守中は親仁樣や母者人の事を、其方衆に頼んだぞや。
手二　イヤモウ、内の事はお氣遣ひなされまするな。
宗七　それで安心したわいの。
手三　時に申し、若旦那、船場は
手四　あれぢやアござりませぬか。
宗七　オヽ、彼れこれ云ふうち、もう來たわい。
四人　サア、參じませうか。
宗七　サア〳〵、おぢや〳〵。
ト本舞臺へ來て
手一　申し、根から船が見えませぬ。
手二　向うに着けてゐる小船を呼びませうか。
宗七　オヽ、あれを呼んでたも。
四人　畏まりました。
ト四人、聲を上げ
手三　神力丸やアい。
與吉　オヽイ。
ト返事する。
三人　神力丸やアい。
與吉　オヽイ。
ト返事しい〳〵、小船より出て、宗七を見て
これは小松屋の若旦那ぢやアござりませぬか。只今でござりまするか。
宗七　こりや與吉どの、御苦勞ぢやの。さうして兄者人は
與吉　ハア、親方は慥か、元船に乘つて居られましたが、なんでござりまするぞ。
宗七　今日金を積まうと思うて來たが、日和はどうであらうと、ちよつと尋ねに來たのぢや。
與吉　左樣でござりまするか。ちよつと親方に尋ねて見ませう。
宗七　大儀ぢやけれど、ちよつと尋ねて下んせんか。
與吉　畏まりました。
四人　こりや御苦勞ぢやなう。
與吉　なんのお前樣。暫らくこれにお待ちなされませ。
ト船を押して行く。
宗七　コレ、治助、わが身は大儀ながら、小平次どのが宿

に用があつて、行かしやつたも知れぬ程に、ちよつと見て來てたも。

手一　畏まりました。

　ト下手へ入る。與吉、舟を漕ぎ戻つて

與吉　申し〳〵若旦那樣、先刻にまで元船に居られましたが、なんぢや買ひ物があるとて、陸へ上がられたげにござりまする。

宗七　そんなら兄者人は陸へか。

與吉　鈍な事でござりまするな。

宗七　イヤ〳〵、大事ない。手代どもを見せにやります。

三人　船頭さん、大きに御苦勞。

與吉　左樣なれば暫らくお待ちなされませ。もう歸られませう。私しは元船へ參ります。用があるなら陸から呼んで下さりませ。

　ト云ひ〳〵、押して行く。

宗七　これは困つたものぢや。なんでも兄者人に、日和の事を尋ねたいものぢやが、何處へ行かしやつたやら。

三人　申し、私し達が見て參じませうか。

　ト三人、金箱を持ち、行かうとする。

宗七　コリヤ〳〵、見に行くのに、金箱を擔げて行く事はない。それは爰に置いて行きや。

三人　イエ〳〵、大事ござりませぬ。

宗七　ハテ、餘り仰山な、置いて行きや。

三人　左樣なら暫らく、見てゐて下さりませ。

宗七　よし〳〵。

三人　ドリヤ、見て參じませうか。

　ト金箱を宗七の上手へ置き、皆々、入る。

宗七　大儀ぢやなう。コレ、宿をよう見て來てたも。大事ない程に、靜かに行きや。

　トいろ〳〵捨ぜりふあつて

マア、あいらが見に行てくれたればよし。時にあいらの歸るまで、斯うして立つてもゐられまい。この金箱の側で番と出かけて、ドリヤ、一服いたさうか。

　ト提灯を下に置き、金箱の側へ腰をかけ、煙草のみゐる。ト向うバタ〳〵にて、三吉野、走り出て、宗七に行き當たり

アイタヽヽヽ。誰れぢや〳〵。

三吉　ハイ、御免なされて下さりませ。心が急きましたゆゑ、大きな粗相を致しました。お免しなされて下さりませ。

宗七　人に行き當ると云ふ事があるものか。

ト兩人、よろしく捨ぜりふ云ひ〳〵、顏見合せ、宗七、提灯で、よく〳〵見て

三吉野どのぢやないか。

三吉　お前は宗七さん。逢ひたかつたわいなア〳〵。

ト取りつく。

宗七　エヽ、けたゝましい。なんぢやいなア。

三吉　コレ、云はねばならぬわいなア。宗七さん、親方さんがわしを連れて戻つて、外からも身請けの客があると云はしやんす。斯うなつたら、わたしや生きても死んでもぢや。どうぞ思案をして下さんせいなア。

トこの間、八平次、矢張り浪子着て、小船に乘り、陸へソツと上がり、三千兩の金箱を取る。と龍助、八平次より金を受取り、船へ積み、兩人、うまいとして、船をソツと出し、入る。宗七、三吉野の事にて、これを知らず

宗七　思案と云うたところが、今でも風がようなると、直さま出帆せねばならず、今となつて金の工面も出來ず、こりや、困つたものぢや。

ト當惑のこなし。

三吉　そんなら若殿樣と、女夫にはなられぬかえ。

宗七　なられぬ事はなけれども、何を云うても金づくなり、斯うなつてからは、思案も何も出る事ぢやない。

三吉　さうぢや。

ト宗七の脇差に手をかける。

宗七　これは、よう死にたがる人ぢや。

三吉　爰を放して下さんせ。

宗七　イヤ〳〵、放して堪るものか。

三吉　それでも若殿樣と女夫になられぬからは、生きて詮ないこの體。それぢやに依つて

トまた死なうとする。

宗七　コレ、若殿樣と夫婦にすれば、死ぬるには及ばぬではないか。

三吉　そりや夫婦になられゝば、なんの死にたい事があらうぞいなア。

宗七　そんならマア、待つたがよい。

ト脇差を放して

滅相な。この脇差で

ト咽喉を突く眞似をして

とやつたら直ぐに命が

ト身構ひなして、思はずこの時、上手の金箱の在りし所を見て

ヤア、こりやコレ、今まで爰にあつた三千兩の金が

トそこらを見て、ウロ〳〵して

今まで爰に置いてあつた小船がないと云ひ、すりや、いま話しのうちに奪ひ取つて、爰に繋ぎし船に乘せて行たか。

ト狂氣のやうになつて

あの金が無うては、親仁樣の御難儀と云ひ、修繕がならねば、大殿樣への申し譯。こりやどうせう、どうせうぞい。

トうろ〳〵し、トゞべつたりへたり、こなしある。

三吉　コレ、宗七さん、どうぞさしやんしたか。どうさしやんしたぞいなア。

ト三吉野、金の事は知らず、氣を揉み、いろ〳〵と介抱する。宗七、心附き、金の事を三吉野に知らすまいと、氣を替へ

宗七　イヤ、なんでもない。氣分が惡いゆゑぢや。何も案じる事はないが、三千兩の

ト思はず云ふ。

三吉　エヽ。

宗七　イヤサ、何も案じる事はない。

トこの時、下手より、手代、ワヤ〳〵云うて出て

手一　若旦那樣、さぞお待ち兼ねでござりませう。方々を探しましたが

手二　小平次さまは見えませぬ

四人　やうにござります。

宗七　それは、いかい大儀であつた〳〵。

トそわ〳〵してゐる。

手三　さうしてあなたは、きつうお顏の色も惡うござりまするが

四人　若旦那樣、どこも惡うはござりませぬか。

宗七　ヤ。

ト悄り、これにて氣を替へ

イヤ〳〵、どこも惡い事はない。さうして斯うしてたも。おれはちと爰に用がある程に、わが身達は直ぐに爰から去んでたも。

手四　左樣なら最前の金を

四人　船へ積みませうか。

ト四人、行かうとする。宗七、悄りして、金を見せぬ

やうに、我が身で隱して

宗七　イヤ〳〵、もう追ッつけ船頭が、元船へ積む程に、もうよい〳〵。早う去んでくれ去んでくれ。

手一　左樣でござりますけれども、用心も惡うござります、氣にかゝりますれば、船まで送つて參じませう。

四人　さうしませう〳〵。

トまた行かうとする。

宗七　これはしつこい。よいと云ふのに。おれが詞を背くのか。

四人　なんの左樣では

宗七　さうでなくば、早う去にや。

四人　左樣ならば歸ります。

手二　隨分船中御無事で

四人　お早うお歸りなされませ。

宗七　オヽ、早う戻る程に、親仁樣や母者人の事を

ト愁ひのこなしにて云ふ。

手三　そりや、お氣遣ひなされまするな。

手四　御機嫌ようお越しなされませ。

ト四人、行かうとするを

宗七　コレ、待ちや〳〵。

四人　ハイ。

ト戻る。

宗七　御用でござりまするか。

宗七　わが身達は大儀ながら、この女中送つてたも。

手一　ハイ、畏まりましてござりまする。

四人　サア〳〵、女中さん。

ト三吉野、宗七の顏の色の惡いと、最前よりのいろいろの素振りを見て

三吉　宗七さん、お前の顏の色と云ひ、なんぢや、きつう案じるわいなア。

宗七　ハテ、何も其やうに案じる事はない。若輩の事はわしが胸にある程に、案じずと必らず短氣な、心なぞ出して下さるなや。

ト三吉野、頷く。

三吉　それぢやと云うて

トまた行かうとするを

四人　サア〳〵、お出でなされませ。

ト無理に三吉野を連れ入る。

宗七　コレ、何も案じる事はない程に、必らず短氣な事をせまいぞや。三吉野が案じるも無理でなし。

ト云ひ〳〵、上手にありし金の事を思ひ、この金がなければ、どうもならぬと云ふ事、いろ〳〵こなしあつて、あたりを見て、提灯の火を消し、ハア、と泣く。
ト蟲の音、凄き合ひ方になり、島の小平次、船頭の拵らへにて出る。宗七、誰れも居らぬと思ひ、こなしあつて
アヽ、この身ほど因果な者があらうか。幼少の砌りに捨子となり、宗右衛門どのに拾はれ養育せられ、人となり、今は小松屋へ養子の身分、何一つ不自由なく、然るにこの度大切ない、三千兩の廻船の役目を受け、思ひがけもないこの災難。詮議せうにも、はや船の行くへは知れず、と云うて此まゝ内へも歸られず、こりやマア、どうしたらよからうなア。
ト泣く。小平次、初めは餘所事に聞いたなれど、一つ一つ身に當り、いろ〳〵悟りのこなし。
さうぢや。例へ三千兩盗まれぬにもせよ、一旦男と見込み頼まれた、三吉野どの身請けの金、養子の身ゆゑ金の工面もならず、所詮神佛に見放されし、この宗七が身の上、生き長らへては恥の恥、死ぬるが殿樣への申し譯。義理のある親仁樣、まつた三吉野どのへの、云ひ譯とは云ふものゝ、今相果てなば親仁樣のお歎き、義理ある兄の小平次どの、さぞ憎う思し召されてのお恨み。不孝の罪はお免されて下さりませ。生き長らへては不孝の上塗り。人に見咎められぬうちに、さうぢや。
ト脇差に手をかける。

小平　待て。
ト宗七、小平次が顔を見て
宗七　あなたは兄者人、不孝の申し譯。
トまた死なうとする。
小平　委細の樣子は殘らず聞いた。
宗七　それぢやに依つて
小平　死ぬるに及ばぬ。
宗七　でも。
小平　ハテ、待てと云うたら、マア〳〵、待ちや。
宗七　でも、三千兩の。
小平　金は無うても仕樣がある。
宗七　ナニ、仕樣があるとはな。
小平　義理ある弟が身に迫るは、眞水と潮の生死の境、これが見捨てゝゐられうか。
ト脇差を引ッたくる。と合ひ方になる。

十五の時から船に乘り、十七の年から船頭となり、破船は元より、三八月にも、只の一度も日和を見損なうた事もない、神力丸の小平次なれど、義理ある弟が身の難儀、こりや、見事に難船をさせにやアならぬわい。

宗七　エ、。

ト悔り。

小平　今宵の潮は九ッ七分、この日和を見かけて船を出し、二三里も漕ぎ出して、岩の鼻へ船を乘りかけ、梶綱切つて船頭諸共難船すれば、海賊に金を取られたと云ふではなし、大切ない御用金も、海の藻屑となつたと聞き、大殿樣への云ひ譯も立ち、養父の家安穩で、浪風立てずに船を割る、爰が思案の河口ぢやわい。

宗七　すりや、沖の小嶋で破船させ

小平　弟が命を助け船。

宗七　すりや、難儀を引受けて

小平　義理も情も　弟が可愛さ。

宗七　それ程までに

小平　義理の二字には替へられぬわい。

ト兩人泣く。トこの時、バタ〳〵するゆゑ

宗七　あの物音は

小平　見咎められては何かの妨げ

宗七　兄者人。

小平　弟、おれに任して、マア、來い。

ト早き唄になり、下手へ入る。バタ〳〵にて、敵役皆皆、出て

沖右　して、八平次に申し附けた、金子の儀は如何なされた。

喜多　さればサ、安否が早く聞きたいものでござる。

兵部　それはさうと、急に客が來つて參つた。

玄蕃　降らねばよいが。

ト云ふうち、大雨降り、雷も鳴る。

三右　ヨウ〳〵、こりや、この大雨では困つたものぢや。

三郎　こりや、怪しからぬ雷ぢや。

ト皆々、うろたへ、着物を脱ぎ、頭へかつぐ。新吾、向うを見て

新吾　ヨウ、こりや、怪しからぬ時化になつた。

ト玄蕃も海を見て

玄蕃　アレ〳〵、外の船は一艘も出ぬに、時化を見かけて、船が一艘出るワ。

皆々　ドレ〳〵。



坂東彦三郎の小平次

ト皆々見て

喜多　ありや慥かに小平次の船ぢや。すりや、三千兩の金は、恙なう船に積み込んで、時化を見かけて船を出したのか。

兵部　この時化を見かけ船を出すとは、途方もない奴もある者ぢや。

三郎　いつそこれより傳馬へ打乘り、あの金を此方へ、奪ひ取らうぢやござるまいか。

皆々　左樣仕らう。

ト矢張り大雨、大雷鳴る。

こりや、どうもならぬ。

ト皆々うろたへ、いろ〳〵あつて、下手へ入る。チヨン〳〵。返し

造り物、浪幕切り落す。ト向う、一面の切拔きの海、見事に灯入り、眞中よき所に大岩ある。花道、舞臺前、浪幕上げる。紋佽通り一の手、二の手、三の手と、浪幕張り、棧敷前、捌き返る。と浪になり、正面の棧敷、帆かけ船通る。よき程にこの船、難船の模樣、よろしくあるべし。大雨、大雷にて、道具とまる。

ト小平次、遠見の子役、湯がけ、脚絆、牡丹絞りの襦袢に金を包み、これを背負ひ、岩の上へ上がり、水を吹く。此うち矢張り船何艘も出て、しきりに大雨、大雷。子役、息を吹き、身揺らへして、また海へ飛び込む。ト雨車、止む。上手より薄原突き出す。

淨瑠璃〽蘆を押分けへし分けて、現はれ出づる島の小平次。

ト淨瑠璃にて、小平次、薄原より出て、水を吹き、耳へ入りし水を拂ひ、ホッと息吹き、あたりを見て、薄原より、糧米櫃を出し、中を明けると、宗七ある

宗七　兄者人。

小平　弟。

宗七　まんまと首尾よう

小平　契約の通り。

トこの時、敵役の諸士六人、小船に二人づゝ乘つて、船二艘乘り出し、皆々、陸へ上がり

六人　その糧米櫃を

ト六人、糧米櫃を取らうとする。小平次、やろまいと、新吾、貢、喜多八、相手に立廻り。月本兵馬、三郎、

玄蕃の三人、糧米櫃を船へ乘せ、櫓を押さうとする。小平次、やるまいと、三人を投げる。船より三人を、上へ抛り上げ、船に乘らうとする。三人、支へるを、振り放し、船へ小平次乘る。ト新吾も附いて來る。楫はず、小平次、櫓を上げ、上の五人、船の綱を切る。と五人、其まゝこける。新吾、小平次にかゝる。片手にてこれをボンと切る。海へこけ込む。浪烟り見事に立つ。これに楫はず櫓を押して

〽飛ぶが如くに、急ぎ行く。

ト三重、よろしく。

幕

三つ目

向井邸の段
鯉賣りの段
隼人邸の段

役名——向井金左衛門。千倉沖右衛門。藤田貢。上田喜多八。奴、今平實ハ南京の八平次。腰元、早枝。小松屋宗右衛門。小鮒賣り源五郎。岸田久我助。妹、夕霧。隼人母、眞弓。道具屋八兵衛實ハ早見新吾。古手屋五郎兵衛。手代、佐助。笹原隼人。

造り物、二重舞臺、金襖、上手、障子屋體、下手、屋敷塀、二重の上に沖右衛門、着附け上下にて、刀を拔きかけ居る。渚、奧方にて、これを留めて居る。下手に源次郎、着附け、上下、凛々しき拵へにて、貢、喜多八の手を捻ぢ上げ、この見得よろしく、バタ〳〵にて、幕明く。

沖右　犬守さまの上使に立ちたる沖右衛門。
貢喜　我れ〳〵を、なんとする。
渚　イヤ、全く、お手向ひはしませねど、餘り理不盡をなさるゝゆゑ。
源次　それゆゑ、ちよつとお留め申します。
ト沖右衛門、貢、喜多八を、一時に突き放す。
貢喜　うぬ、いつぞ。
トかゝるを
沖右　コリヤ〳〵、待て。
喜多　ちやと云うて
貢　餘りの慮外。
沖右　ハテ、彼れらは無益、扣へて居らう。

ト目で押へる。

貢喜　エ、、命冥加な。

ト押へる。

沖右　それは内證。我れ〳〵來りしは、犬守さまよりの使者。

源諸　ハア。

ト兩人、手を支へる。

沖右　して、金左衞門どのは、いづれにござる。

諸　ハア、金左衞門はこの程より、不快にて引籠り居りますゆゑ。

源次　何卒拙者へお使者の趣き

諸　仰せ聞けられ下されうならば

諸源　有り難う存じまする。

沖右　ヤア、默れ。大切なる使者の趣き、若輩者と云ひ、女童に云ひ聞かさうか。金左衞門病氣ならば、病床へ參つて

諸　これは又、聞分けのない。病氣と申しまするに、何しに僞はりを申しませう。女なれども金左衞門が妻、何卒私しへ

沖右　然らばいよ〳〵、病氣に相違ないぢやまで。

諸　何しに僞はりを

源諸　申し上げませう。

沖右　よい。病氣とあらば是非がない。犬守さまより使者の趣き、申し聞けん。耳の孔をさらへて、よく聞かつしやれ。

源諸　ハア。

沖右　先達て千草姫さまと、笹原隼人と祝言の整させいと、再々申し遣はすところ、未だなんの沙汰もなく、然ると ころに似せ病氣を構へ、引籠り、野心あるとのお疑ひ。さなくば隼人を手にかけるや。祝言さすか。二つに一つの返答聞き歸れとある、兵庫さまよりの御意。

諸　すりや、祝言調はねば、隼人さまの命をとるとな。

沖右　まつた兵庫さまのお疑ひは、心得がたきは金左衞門、二心あるに相違なし、とくと實否を糺せよとある。病氣と云ひ立て引籠り居るは、こりや、虚病に相違ないわい。

源次　全く以て虚病に非ず。

諸　夫に限り、二心のあらう筈もなし。

喜多　如何程に陳じても、叶はぬ證據に、先達て住吉社參の折から、十内よりの密書、見ると其まゝ返事を認め、腰元早瀨に渡せし事、よく見て置いた。

沖右　察するところ三千兩の金子、難船とは僞はり。金左衛門、十内と心を合せて、企みしに相違あるまい。
源次　全く以て。
喜貫　然らば十内より送りし密書は。
渚　すりや、夫が
沖右　なぜ金左衛門は出迎ひせぬ。
渚　何を申しても病氣なれば
三人　病氣は僞はり。
　ト きつと云ふ。
渚　また夫が病氣、二心と云ふには
源次　なんぞ慥かな
兩人　證據ばしあつての儀かな。
今平　その證據は、これにある。
　ト 今平、奴の形にて、出る。
渚　そりや新參の
源次　下郎の今平。
今平　おつと愕りであらう。おりや兵庫さまの家來、南京の八平次と云ふ者ぢや。兵庫さまの仰せには、金左衛門が屋敷へ入込み、とくと實否を糺せよとの仰せ。それゆゑ下郎となつて入込み、金左衛門が性根は見拔いてあるわい。
　ト 兩人、愕り
沖右　サア、これにも返事があるか。
兩人　サア、それは
三人　奥へ踏ん込まうか。
兩人　サア
三人　サア
皆々　サア〳〵〳〵
三人　なんと。
　ト 源次郎と顏見合せ、當惑のこなし。渚、思ひ入れあつて
渚　成る程、とくと實否を糺しまして
源次　幸ひ臺所にお金役、小松屋宗右衛門も參り居りますれば
渚　金子の紛失
源次　とくと吟味の致し
渚　夫の心底も糺しまして
源次　暫しの御容赦
渚　偏へに願ひ
兩人　奉ります。

沖右　成る程、暫時の容赦は致しくれろ。
八平　して、祝言の返答は。
渚　それも追ッつけ。
沖右　糺すおやまで。
源次　先づそれまでは奥の間で
沖右　暫時の休息。
八平　おらは爰にて張り番せうわい。
沖右　喜多八貢は立歸つて、この由を申し上げい。
喜貢　すりや、お館へ
沖右　早く〳〵。
喜貢　ハツ。
ト兩人、走り入る。
沖右　然らば奥方。
渚　沖右衛門どの。
源次　先づ
源渚　お入りなされませう。
ト唄になり、源次郎は下手へ入り、八平次は殘り、あたりを見廻す。と奥より沖右衛門、出て
沖右　八平次。
八平　沖右衛門さま。

沖右　コリヤ。
トあたりを見廻し
八平次、この家へ入込み、金左衛門が心底、とくと見屆けたか。
八平　兵庫さまの仰せにて、奴今平と姿を變へて、入込みしところ、案に違はぬ金左衛門が胸中。なんとも合點が行かぬ。
沖右　千草姫隼人と祝言いたさせんと、氣を急くも、兵庫さまの御思案あつての事。金左衛門に申しつけたれども、病氣と云ひ立て引籠り居る。遂て祝言を取急がずば、密かに討つて捨てる所存。まつた得心なれば、この判形へ荷擔のさす計略、今宵は滅多に動かれぬわい。
ト思案のこなし。
八平　時に沖右衛門さま、お前に云はねばならぬ事があるぞや。
沖右　ナニ、身共に申す事とは。して、その仔細は。
八平　エヽ、仔細も五さいも凄まじいわい。コレ、いつやら、なんと云はんした。宗七が三千兩を積んだ船へ忍び、その金を奪ひ取つてくれとの頼み。何か命がけ、海の中の仕事、なんでもこいつは仕負ふせたら、一廉の褒美と

それを當に、命がけの仕事を頼みながら、一文も下されぬは、沖右衞門さま、お前は胴慾な人ぢやなう。

沖右　オヽ、そりや、尤もぢや／＼。八平次、改めて其方に頼みがある。

八平　エヽ、なんぢや。命がけの事をしても褒美もくれず、また頼みがあるとは。

沖右　其方の性根を見込んで、改めての頼み。この儀を首尾よう仕負ふせば、先の褒美を十倍増し。

八平　イヤモウ、金にさへなる事なら、頼まれまいものでもないが、先の褒美はくれもせず、とんと今時は、何をしても掛けになつて、行き惱いわい。

ト頭を搔いて云ふ。沖右衞門、見て

沖右　成る程。

ト沖右衞門、懐より色紙を出して

ソリヤ、褒美をくれう。

ト渡す。八平次、色紙を取つて

八平　こりや、なんぢやの。

沖右　それこそは笹原家の重寶、小倉の色紙と云うて、大切なる品なれども、金子を渡すまでは、其方へ預け置く。役目を仕負ふせなば金と引替へ。

八平　なんぢや知らぬが、金を取るまでの質物か。マア、預かつて置きやんせう。

ト懐へ入れる。

して、又こなんの頼みは。

沖右　その頼みは

トあたりを見て、こなしある。と序の舞になる。

その仔細は外の儀でもない。笹原左門之助が御菩提所、三岸寺へ御佛參の歸るさ、御廟を拜する時、明神山に忍びゐて、左門之助を討取つてくれ。

八平　ヤア、なんと云はんす。すりや、左門之助が御廟所を拜む所を、明神山に忍びゐて、ヅドンとやつたらよいのか。

沖右　如何にも。この儀を仕負ふせるか。

八平　ヘヽヽヽ、そりやなんでもない事ぢや。

ト沖右衞門、よしとして、懐より種ケ島を出し

沖右　然らば、この鐵砲を以て、心得たか。

八平　氣遣ひさんすな。さす事ぢやない。

沖右　夜に入れば山路は分らず、晝のうちから忍びゐて

八平　そんならこれより

沖右　ちつとも早う。

ト八平次、行かうとして

八平　コレ、今のはよいかや。

沖右　ハテ、よいと云ふに。

ト、コリヤ鐵砲を隱して行けとする。八平次、鐵砲を懐へ入れ、これでよいとして

八平　そんなら直ぐに。

沖右　早う行け。

八平　合點ぢや。

ト花道へ走り入る。最前より、早枝、振り袖にて、腰元の拵らへにて出て、兩人の話しを聞いてゐて、見附けられては惡いとして、上手の鎧櫃の内へ隱れる。沖右衛門、うまいと云ふ思ひ入れにて、向うを見て、早枝も矢張り鎧櫃を明け、見て居る。此うち兩人、思はず顔見合せ、沖右衛門、愕り。早枝もちやつと隱れる。と沖右衛門、ツカ／＼と行て、鎧櫃より早枝を引出す。

早枝　コリヤ、なんとなされまする。

沖右　なんとするとは、うぬ、一大事を聞いたる女、生けては置かぬ。覺悟せい。

ト沖右衛門、刀に手をかけ、切らうとする。

早枝　申し／＼、全く私しは、なんにも聞いた覺えはござりませぬ。お免しなされて下さりませ。

沖右　ヤア、吐かすな／＼。それに又、何ゆゑ鎧櫃の中に隱れゐたぞ。

早枝　サア、それは。

沖右　サア。

早枝　サア。

兩人　サア／＼／＼。

沖右　ヤア、面倒な。

ト沖右衛門、刀を抜き、早枝を切らうとする。早枝、逃げる。この時、奥より、金左衛門、着附け上下にて出る。早枝を圍ひ、沖右衛門を留めて

金左　コリヤ、なんとなさるゝ。

ト沖右衛門、金左衛門の顔を見て

沖右　ヤア、貴殿は金左衛門どの、お退きなされ。

金左　イヤ、滅多には退きますまい。退きますれば早枝は忽ち最期。すりや、此方の迷惑。

沖右　ヤ。

金左　委細の譯は存ぜねども、高の知れたる女の事。拙者に免じて、御料簡を下されい。

ト突き放す。

コリヤ／＼、早枝、其方が悪い。女の分際で斯やうな所へ、參ると云ふやうな事があるものか。サア／＼、奥へ參れ。

ト金左衞門、鎌にて、奥へ行けとする。沖右衞門、睨み居るゆゑ、早枝、怖がり、もど／＼する。

ハテ、行けと云ふに、

トきつと云ふ。

早枝　ハイ／＼。

ト怖々奥へ入る。沖右衞門、始終早枝を奥へやつては一大事が洩れると、いろ／＼氣を揉むこなしあつて、氣を替へ、金左衞門の前へツカ／＼出で

沖右　金左衞門どの、イヤサ、金左衞門、今日兵庫さまより、使者に立ちたるこの沖右衞門。笹原隼人と千草姫との祝言も打捨て、病氣と僞はり引籠り居る貴殿の心底、剩さへ一大事を聞いたる女を、手にかけるを

金左　お留め申すは、身が二心ないと云ふ證據サ。

沖右　とは又どうして。

金左　さればサ、一大事を聞いたる女を手にかけらるれば、後日に知れまいとの思し召しなれども、天知る地知る、悪事千里を走るの諺。

沖右　なんと。

金左　そこを存じて拙者が計らひ。

沖右　然らば御祝言の儀は。

金左　それも今宵の夜半までに。

沖右　延引なれば兵庫さまの仰せ、笹原隼人が首を打つて、差上げよとの仰せ。

金左　すりや、祝言が延引なさば

沖右　隼人が一命。

金左　それも夜半の

沖右　鐘を合圖に

金左　先づそれまでは

沖右　屋敷へ歸つて相待ち申す。

金左　お使者、御苦勞。

沖右　キツと詞を、番ひ申した。

ト唄になり、沖右衞門、笑壺のこなしにて、下手へ入る。跡に金左衞門、いろ／＼こなしあつて

金左　隼人どのと千草姫との縁組み、度々の催促。祝言を致さずば、夜半までに隼人どのゝ命。祝言さゝうにも、姫君には御得心はなし。と云つて此まゝに打捨てなば、科

もなき隼人どのを、討つ事はならず。尋ねて祝言さゝうにも、姫は得心なく、それを達つて勧むれば、生きてはござらぬ、こちらを思へばあちらが、ハテ、どうがな。

　トちよつと思案のこなし。

所詮今宵につゞまる、この金左衛門が命。

　トこの時、口幕にて突きし疵、痛むこなし。

先達てお濱御殿にて、若殿目がけて突きかけし、槍の切尖、身をかはして我れを貫く。曲者の詮議、祝言の取繕ろひ、ハテ、どうしたものであらう。

　ト金左衛門、當惑のこなし。奥より、渚、出て

渚　申し、犬守兵庫より無體の使者、あなたは、どう遊ぼすおつもりでござります。

金左　ハテ、どうと云うたところが、今宵につゞまる祝言に、殆ど困り居るわい。

　ト兩人、思案のこなし。奥より、早枝、出て

早枝　金左衛門さま、これにござりまするか。

　ト金左衛門、これに構はず、思案のこなし。

金左　どう思ひ廻して見ても

早枝　お姫様がどうあつても、隼人さまと祝言する事は否ぢやと仰しやつてゞござりまする。

　ト云ふ。金左衛門、早枝の來たりし事も知らず、一心にいろ／＼工風のこなし。

金左　夜半と云うても最早間もなし

早枝　申し、金左衛門さま。

　ト云へども、矢張り思案のこなし。早枝も金左衛門の顔を見て、これは聞えぬのぢやと云ふ思ひ入れにて

申し／＼、金左衛門さま。

　ト大きな聲して云ふ。

金左　これは何事を申す。悔りするわい。

　ト云ひ／＼、早枝の顔を見込んで、こなしあつて

オヽ、コリヤ、奥、奥。

渚　ハイ／＼。

金左　喜びや。好い思案が出た。

渚　ナニ、好い御思案が出來たか。して、その御思案は。

金左　思案と云ふは

渚　御思案は

金左　この早枝。

　ト早枝を姫の代りにして、祝言をさすと云ふ事をする。渚も頷き、こなしあつて

渚　すりや、この早枝を

早枝　エヽ。
ト早枝、悔りするを、押へて
金左　奧へ來い。
ト早枝の手を取り、奧へ入る。渚、後より入る。と小松屋宗右衞門、着附け、羽織にて、出て
宗右　暫らくこれにて休息仕らうかい。
ト宗右衞門、煙草盆を取つて、煙草をのみ
いま聞いて居れば、無體の使者の樣子。どうぞして金左衞門さまの御難儀を、お救ひ申したいものぢやが。アヽ、どうしたらよからうなア。
ト煙草をのみながら、思案のこなし。奧より金左衞門出て
金左　宗右衞門、この度三千兩の金子紛失にて、定めて心配であらうな。
宗右　これは金左衞門さまでござりまするか。思はざるこの度の災難。それにつけ、あなた樣にも、兵庫さまよりの御難題、さて御當惑でござりませうが、申し、隼人さまを迎へて參りませうか。
金左　なんと申す。すりや、隼人どのを
宗右　委細を承りましたところが、あなた樣の御心勞を思ひ計つての事。少しばかりのわたしが働らき。
金左　然らば隼人どのを迎へ歸るとな。エヽ、忝ない。して、隼人どのゝ屋敷は
宗右　そりや、私しが、よう存じて居りまする。
金左　そんなら大儀ながら
宗右　これより直ぐに
ト尻からげして、行かうとする。
金左　コレ、密かに〳〵。
ト「ハア」と云うて、尻からげ下ろして、あたり見廻す。兩人、この見得、よろしく、チョン〳〵。返し
造り物、一面の屋敷塀、眞中ほどに塀の破れ、これより人の出入りあり、この塀隨分さびたる體、しんとしたる合ひ方にて、道具とまる。
ト花道より、笹原隼人、黑羽二重に編笠にて、浪人の袖乞ひの拵らへにて出る。と町人、屋敷の拵らへにて、子供大勢出て、隼人を取卷き
子一　コレ、見さつしやれ。いつもの謠屋どのぢや。
子二　コレ、小父さん、いつもの通り、謠を謠うて下されぬか。

皆々　小父さん〳〵。
隼人　アイヤ、今日は相休み、また明日にてもお聽かせ申しませう。
子三　イヤ〳〵、謠を謠はんと
子四　皆寄つて
皆々　爰を通さん〳〵。
隼人　これは又迷惑な。
　ト此時、下手より、町人二人出て、隼人を見て
町一　イヤ、申し、これが彼の噂の謠屋でござります。
町二　ハアン、そんなら町中で評判の高い、謠屋どのか。
町一　申し、なんと一つ謠うてもらはうぢやアござりませぬか。
町二　こりや、ようござりませう。
　ト隼人の側へ行て
町一　なんと謠屋どの、一つおいらに聽かして下されぬか。
隼人　イヤ、只今も子供衆にお斷はり申す儀。今日は相休み、また明日にてもお耳へ入れませう。
町一　さうぢやあらうが、折角わしらが頼み。
二人　どうぞ聽かして下され。
隼人　是非とも今日は、御免下さりませう。
町一　其やうに云はんすと、達てと云ふも氣の毒。
町二　そんなら又今度、聽かして下されや。
町一　なんと、仁體のよい謠屋どのぢやアござりませぬか。
町二　時に、もう歸りませうか。
隼人　ござりまするか。
兩人　また聽きに參りまするわい。
町一　サア、これを進ぜませう。
　ト兩人、隼人へ錢をやる。隼人、取つて戴きしを見て、感心のこなし、向うへ入る。ト子供も
皆々　わしらも謠を謠うて去にませう。
　ト子供、よろしく並んで、この謠は、源左衞門常世の閑居の謠なり。よろしく謠うて入る。隼人は跡を見送り、本舞臺へ來る。ト合ひ方、止む。
隼人　只今歸るさに、子供達が謠ひしは、佐野の常世が閑居の砌り、鉢の木を焚き、後に本領安堵。それに引替へ、某は、淺ましきこの姿。ア、是非もなやなア。
　トしつぽりとする。
悲しみあれば又、喜びもあるやらん。

ト紙を替へて
いま道にて求め歸りし
ト懷より竹の皮包みを出し
落しもやらず、御酒の肴は調ひしが、今一種の膳部の足らず、ハテ、どうがな。
トちよつと思案のこなし。この時、上手より、源五郎、小鮒賣りの拵らへにて、荷を荷ひ、内より
源五　小鮒や〱。
ト内にて云ふ。この聲にて、隼人、塀の破れへ入る。
とこの時
〽鯉や鯉〱、小倉町中賣り歩く、鮒泥鰌もろこはいざこ。
トこの唄にて、源五郎、出る。
鮒や鯉〱、小鮒や〱。
ト花道へ行かうとする。
隼人　コリヤ〱。
ト源五郎、振返り、あたりを見て、ウロ〱してゐる。
コリヤ、爰からぢや。
ト塀の破れより出る。

源五　最前から呼ぶやうなけれど、聲ばかりで體が見えぬゆゑ、ウロ〱してゐたが、途方もない所が内ぢやな。
隼人　ハヽヽヽ。
源五　して、お前の買はんすのは、なんぢや。早う云はんせ、忙しいわいなう。
ト隼人の顔を見て
斯う見たところが、見苦しうもない顔ぢやが、こなさんのその風體では、買はんす物は爰らぢやあらう。
トはいざこを見せる。
隼人　イヤ〱、身共が求めんは、左樣な品ではない。生鯉が求めたいが、その品はあるか。
源五　死鯉はごんせぬ。皆生きた鯉ぢや。生きた鯉ぢや。
隼人　サア、その生きたのが望みぢや。して、その鯉はどれにある。
源五　エヽ、こなさん達の手こさいには合ひ難い。よしにしたらよいのになア。
トぼやき〱、いろ〱捨ぜりふにて、見せる。
サア、これが生きた鯉ぢや。マア、爰らは負けてやつたところが、ざつと九百ぢや。

隼人　すりや、代物は九百文とか。

源五　なんと、えらい値ぢやあらうがな。こなさん達の買ふ魚ぢやない。エヽ、商ひにもならぬに、えらう隙が入つた。ドレ、廻つて來うか。

ト行かうとするを

隼人　マア〳〵、待ちやれ〳〵。

源五　まだかいなう。

隼人　如何にも、求めてくれう。

源五　エヽ。

ト惘り。

隼人　求めう。暫らく待て〳〵。

ト懷の紙入れより、錢百二三十出し

イヤ、今日は勝手が惡いから、明日にも身が屋敷へ參つたら、今日の不足を倍にして遣はすから、この鳥目にてその鯉を、此方へ賣つてくれやい。

源五　エヽ。

ト惘りして

途方もない事云ふ和郎ぢや。九百の鯉を百二三十に負けてくれ。その代りに屋敷へ來れば、今日の不足を倍にしてくれう。滅法な無茶な事を云ふ人ぢや。餘り呆れて物が云はれぬ。コレ、この鯉はの、作り物ぢやごんせぬぞや。こなんのやうな人に相手になつてゐたら、日が暮れるわいの。

隼人　それは無理ではない。明日にても屋敷へ參らば、よきに致してくれう。

源五　何處の屋敷やら知れもせぬ人に、マア、止しにしやんせうわい。

隼人　さうぢやあらうけれど、折角買ひかけた事なれば

源五　イヤ、買うてもらはいでも大事ない。

ト荷を持ち上げる。

隼人　これは片意地な〳〵。

ト荷を持つ。

源五　コレ、荷が引ツくり返るわいの。

隼人　どうぞこれにて

ト錢を源五郎の手へ載せる。

源五　否ぢやわい。

ト錢を打ちつける。

隼人　そこをどうぞ。

源五　これはしつこい。

隼人　すりや、どうあつても

源五　エヽ、知らぬわい。

〽鯉や鯉〳〵、小鮒や〳〵。

　トまた出の小倉町の唄になり、向うへ入る。ト隼人、跡を見て、錢ひ拾ひ

隼人　イカサマ、價の相違、こりや負けぬも道理、無理ではない。併し、コレ、御酒のお肴は調ひしが、今一種の膳部の足らず。ハテ、どうしたらよからう。

　ト此うち下手より宗右衞門、返し前の形にて、出て、見てゐる。隼人、跡を見て

ア、餘程日もたけたわい。定めて兩人が待ち兼ねてゐるであらう。膳部の足らずば又、工風もあらう。さらば母上の御機嫌を伺はうか。

　ト隼人、欠しいなりとして、唄もしんみりの唄にて、隙の破れへ入る。宗右衞門出て、跡を見て、ほろりとして、壁の破れを覗き、なんでも今の鯉鮒に追ひついて、あの鯉を買うて、隼人の内へ持つて行かうと云ふ思ひ入れをして、尻をからげて、源五郎の跡を追ふ思ひ入れ、よろしくあつて、入る。チヨン〳〵。返し

　造り物、二重、破れ壁、上手、障子屋體、すべて荒れ屋敷の體、下手、塀破れ、草なぞ生え、障子も破れ、下手の方、二つ竈、走り、手桶、すべて臺所廻りの小道具、かんてき、藥鍋、いろ〳〵並べ、よろしくある。と上手に、夕露、振り袖娘にて、元結ひをひねり居る。ト下手に、久我助、莚の上にて、片足を括り、奴の形にて、錢差しを綯ひ居る。この見得よろしく、妙見の合ひ方にて、道具とまる。

久我　イヤ、申し、夕露さま、其やうに精をお出しなされますと、お氣が盡きませう。ちとお休みなされませ。

夕露　イヤ〳〵、わたしはなんともないが、其方は足の痛いのに、其やうに仕事に精出しやると、また足の痛みが出る程に、もう止しにしやいなう。

久我　エヽ、滅相な事仰しやりませ。高の知れたこの足の疵、足が痛いとて手を休めまするは無駄。わたしの事は打ツちやつて、お前樣、お手が痛みませう、もう止しになされませ。

夕露　なんのいなう、其方と一緒に、元結ひを捻るが、樂しみぢやわいなう。

久我　エヽ。

夕露　サイナア、いつぞや住吉へ參つて遲うなつたを、其

方が迎ひに來てたもつた、その道でのその怪我。わしやもう氣の毒でならぬわいなう。

久我　ア、、勿體ない事仰しやります。お前様はお主、そのお迎ひに参りましてのこの怪我、それを其やうに思し召して下さるは、結局わたしは罰が當ります。又この怪我は愚か、この後どのやうな事がござりましても、主人の事なら本望でござりまする。

夕露　其やうに云うてたもる、親身な其方に、なんのかのと目顏で知らしても、知らぬ顏をしてたもるは、わが身は胴慾ぢやわいなア。

ト泣く。久我助、こなしあつて

久我　これはしたり、どうしたのでござります。お前様は主人、私しめは家來、高の知れた下郎。

夕露　コレ、その下郎々々と云やるが、なんぼう歴とした侍ひでも、心が賤しければ下郎も同然。姿は賤しうても、其方のやうな優しい殿御が、又と二人あらうかいなう。久我助、一生の願ひぢや程に、どうぞわしが思ひを

久我　あなたのお志しは、有り難うござりますけれど、親も許さぬ不義いたづら、この事がもし阿母様や、御主人のお耳へ入らば、不義の科にてお定まりのこの首はコロリ。オヽ、怖やの〳〵。

夕露　すりや、どのやうに云うても、聞いてはたもらぬかや。

久我　お前様のお志しは、お嬉しう存じますけれども、今と云うては

夕露　コレ、久我助、そりや聞えぬ、胴慾ぢや。恥かしい女の口から、あられもない事を云ひ出して、それを聞いてたもらねば、生きては居られぬ。いつそ死なうか。

久我　ア、コレ、申し、滅相な。

夕露　いつそ、さうぢや。

ト側にある出刃庖丁にて、死なうとする。

久我　これはしたり。

ト引ツたくり

エヽ、危ない。

ト云ふうち、久我助が持つてゐる鍔差しを取つて、上へ上がり

夕露　コレ、久我助、この鍔差しが欲しくば、爰へ來てたも。

久我　エヽ、鍔差しは要りませぬ。

夕露　要らぬかや。

久我　ハイ。
夕露　要らねばよいが、追ッつけ兄様がお歸りなされて、妹は仕事をしてゐるに、其方は遊んでゐやると叱られたら、知らぬぞや。
久我　ほんに、御主人がお歸りなされたら、お目玉ぢや。コレ、申し、その錢差しを、此方へおくれなされませ。
夕露　これが欲しくば、ちよつと爰へおぢや。
久我　それでも追ッつけ御主人のお歸り。
夕露　ハテ、大事ないわいなう。
久我　申し、おなぶりなされずと、おくれなされませ。
夕露　爰へおぢや。
久我　それぢやと云うて。
夕露　これかや。
久我　申し。
ト取りにかゝる。ト夕露、久我助の手を取り、上へ上げる。夕露、抱きつかうとするを、後の衝立を取つて、眞中へ直し
ヤア、これより此方へお寄りなされませ。
夕露　これや隱さしやいなう。
久我　これには兩方の因縁、滅多には取られませぬ。

夕露　つッともう。
ト夕露、辛氣な思ひ入れ。久我助、下へ下りようとする。夕露、衝立を取らうとする。この事いろ〳〵あつて
アレ、兄さんが
久我　ナニ、御主人が
ト久我助、これはとうろつく拍子、夕露、抱きつく。
トこの時、向うより隼人、着附け、袴にて、右に德利を提げ、花道よき所にて
隼人　あれには母人のお越しなされぬ樣子。定めて御寢なされてござるのであらう。
トこれにて本舞臺へ來る。ト兩人、抱きついてゐるを見て、これはと後へ戾り、また來ても矢張り抱きつき居るゆゑ、行つたり戾つたり、これは困つたと云ふ思ひ入れにて、よき程に
アハン〳〵。
ト咳拂ひする。これにて兩人、恟り、ちやつと退く。夕露は錢差しを綯ひ、久我助は元結ひをひねり〳〵
兩人　只今お歸りなされましたか。
ト隼人も、惡い所へ戾つて來たものぢやと云ふ思ひ入

隼人　れあつて只今歸つた。

兩人　サア、あれへお越しなされませ。

ト隼人、上へ通る。久我助、夕露に、これぢやに依つて止しになされませと云ふ事をして、夕露もこなしあつて、もじもじ手を突いて

夕露　して、兄上樣には

久我　今日は、いづれから、どれへお越しなされました。

隼人　餘り屋敷に居るも氣詰まりさに、天滿宮へ參詣の致したが、それは〱賑はしい怪しからぬ人通り。歸りがけに幸ひ、川並玄宅方へ立寄りしところ、仲間の者ども打寄り、諸商人の話し、幸ひと其方の病氣の事を尋ねしところ、それは賣藥がよろしからうと申すゆゑ、歸りに求めて歸りしが、この藥價は十六銅と記しあれども、効目は日本一とある。隨分粗末にせぬやう、服してよからう。

ト久我助に渡す。

久我　エ、、有り難う存じまする。

隼人　又この德利は、出入りの吳服所、紙屋勘兵衛より母への見舞ひとして、粗酒一獻母人へ差上げたいが、御寢なつてござるか。

夕露　ハイ、今すや〱と

久我　お寢みでござりまする。

隼人　して、御膳を差上げたか。

久我　何を差上げましても

夕露　お上がり遊ばさず

隼人　すりや、御膳もお上がり遊ばさぬとな。よい、又お目が覺めたら差上げたがよい。

兩人　畏まりました。

トこの時、障子屋體より

眞弓　ナニ、隼人が歸りしとな。

隼人　すりや、母人には

眞弓　ドレ、それへ行て逢ひませう。

ト眞弓、裲襠にて、一間より出て來る。

隼人　これは母人には、お休みなされませぬか。

眞弓　忰が聲を聞いて、なんの寢てゐられやう。

隼人　先づは母人には、御機嫌の御尊顏の拜し、如何ばかり有り難う存じまする。

眞弓　隼人、毎度の見舞ひ、過分にござる。

隼人　これは有り難き母人のお詞。屋敷を立退き當屋敷へ、

お伴ひ申し、お側に附き添ひ居る者は殘らず遠ざけ、妹、久我助、拙者三人お側にあつて、膳部の拵らへ何やかやとお目にかけまするは、御病氣本腹いたさせませうが爲。いま末秋に至り、芒尾花も咲き揃ひ、草茫々と生ひ茂る有樣。妹、久我助、風雅の景色ではないかい。

久我　怪しからぬ

久夕　風雅でござりまする。

　ト三人顔見合せ、閉門にて淋しき暮らしを風雅と僞はり、母へ孝行の思ひ入れ、いろ／＼ある。

眞弓　イヤモウ、片詰まつた屋敷に居れば、病氣の障り。母の心を推量して、此やうな晴れ渡つた屋敷に居れば、心もよいが、其方達の忠孝、天道さまも御照覽あつて、母の御氣もやがて本腹しませうわいの。オヽ、三人とも、嬉しうござるぞや。

　ト三人、顔を見て、いろ／＼こなしある。

隼人　時に母人、今日天滿宮へ參詣の仕り、歸りがけに出入りの町人、錢屋勘兵衛へ立寄りしところ、母へ見舞ひとして粗酒一獻。母人、お上がりなされませぬか。

眞弓　それは忝ない。後に食べませう。

隼人　然らば、お枕元へ直して置きませう。

　ト側へ置く。

兩人ども、母へ御膳を差上げぬか。

兩人　只今差上げまする。

眞弓　イヤ、まだ空腹にはござらぬ。

隼人　然らば、これにて御膳部の拵らへ、御覽なさるゝも御保養。兩人とも御膳部の、用意々々。

　ト夕露、釜の下へ火を焚き附ける。久我助、足の痛むこなしにて、俎板を出して、大根を切り、また味噌を摺つたり、ごつてごていろ／＼とよろしくある。膳部の魚が足らぬゆゑ、夕露と久我助、顔を見合し、困つたこなし。隼人、これを推量して、懷より竹の皮包みを出し、夕露へ渡す拍子に、隼人の懷より紙袋を落す。久我助、ソツと拾ひ、片脇へ寄つて、中を見て、恟り、氣を替へて、味噌を摺る。隼人、火鉢へ藥鍋をかけ、團扇でこれを煽ぐ。この模樣よろしくあるべし。

　ト向うより、道具屋八兵衛、古手屋五郎兵衛、出て來り、ズツと入つて

兩人　來たぞや／＼。

　トこれにて隼人、兩人を見て、恟り。衝立を立て、母に見せぬこなし。

隼人　イヤ、これは誰れかと思へば、出入りの道具屋八兵衛、古手屋五郎兵衛、よくお來やつたな。

ト母に聞かしては惡いと、横柄に云ふ。

兩人　イヤ、ようは來ぬ。惡う來たのぢや。

ト喧ましう云ふ。隼人、こなしあつて

隼人　イヤサア、惡い揚句の日和なれば、營みの保養に參つたか。さうか〳〵、オヽ、さうであらう。

ト兩人を押へ、母へ聞えては惡いとする。

喜ぶぞよ。

ト押へる。

八兵　なんぢや、喜ぶ。こちらは、なんにも喜びやせんぞや。

五郎　イヤ、おいらは、なんにも喜ばんでえすぞ。

八兵　サア、貸した物を、

五郎　取りに來たのぢや。

ト隼人、押へても聞かぬゆゑ、うろ〳〵こなし、ちよつと氣を替へて

隼人　イヤ、申し、母人へ申し上げまする。これへ參り居りまするは、出入りの古手屋、又は道具屋。何か珍らしき品でござりまするゆゑ、求めてくれいと申し來ました。如何計らひませう。

眞弓　折角の頼みなれば、求めてやりやいの。

隼人　然らば左樣仕りませう。併しながら、母人がこれにお越しあつては、申す儀も申し難うござりまする。暫時の間を御退出の儀、願ひ奉りまする。

眞弓　そりや、兎や角もさうしませう。

隼人　然らば母人

眞弓　夕露、久我助、隼人も後刻。

ト唄になり、上手へ入る。ト兩人、堪へ兼ねて、尻からげ、鉢卷、片肌脱ぎ、隼人の前へ行て

五郎　コレ、隼人どの、なんぢや。いま聞いて居れば、出入りの町人ぢやの

八兵　なんぢや、珍らしい物を持つて來たのと、まだこの上に、おいらに、うんてきなを食はすのか。さうはならんワ。

五郎　コレ、なんぼうこなんが、仁體らしい事云やつても、そりや行かぬ。サア、今まで待つてやつたら、もうちよつとも待たれぬ。サア、今返せ。今取るのぢや〳〵。

八兵　サア〳〵、お前さんが其やうに仰しやるのも尤もぢや。又わたしが云ふのも無理ぢやござりますまいかな。

貸したのはお前ばかりぢやない。わたしも貸しました。ちとわたしにも、云はして下さりませ。

五郎　さうぢや〳〵、お前さんも、グツと仰しやれ〳〵。

八兵　サア、申し、さりとは〳〵、コレ、隼人どの、こなたはなう〳〵。いつやらの事であつたが、おれがこなさんの屋敷の外を通つたところが、滅多無性に呼び込むゆゑ、なんでも奥々の内ぢや、えらい儲け口ぢやと思うて立戻つては見たが、聲はしても姿は見えぬ、なんでも怪しい、狐か狸かと思うたが、壁の破れからこなたが出て、コレ、てん屋どの、ちと内々で賣りたい物があるゆゑ、買うて下されぬかと相談が出來て、一つ買ひ二つ買ひ、つい馴染になつて三つ目には、爰の門を通つたところが、どうぞこなたに頼みがある、ちと急に入用があるに依つて、お前のお世話で、黒羽二重の着物と袴を、貸して下されぬかと云はんすぢや、見たところが賤しからぬ人ぢやと思うて、直ぐに貸してやつたが、それが病みつきぢや。

五郎　それ〳〵、また此方の門へ來て、店にある刀を見て、でもさても、好い刀ぢや、それを損料で貸して下されぬかと云はんす、内は何處ぢやと尋ねたれば、まツ斯う斯うの屋敷ぢやと云はんす。止しにせうかと思うたけれど、商賣なり、否とは云はれぬ男づく。涙を流しての頼み

八兵　そこを呑込み、ついウンと

五郎　ほつかり貸した

八兵　羽織、着物、袴まで

五郎　刀、印籠、紙入れから

八兵　貸してやつたが

五郎　代物は戻さず

八兵　損料もおこさず

兩人　イヤ、明日來いの、明後日來いのと、蜘蛛か紺屋を見るやうに

八兵　一體こりや、おいらを

兩人　どうするのぢや。

隼人　成る程、あなた方の仰せは、一つも違はぬ。代物も返さず、また損料も上げませぬゆゑ、お腹の立つは一々無理ではござりませぬ。また今のやうに申しましたは、母の手前を存じましたゆゑ、幾重にも御免下されい。

五郎　イヤ、否ぢや。今のやうに横柄に云うたは、母者への手前で云うたら、料簡もせまいものでもないが

八兵　して、おいらの代物、損料は

隼人　長うとは申しませぬ、明日一日
五郎　イヤ、一日は愚か、半時でも待つ事は
隼人　そこを何卒
兩人　くどいわいの。
隼人　すりや、どのやうにお頼み申しても。ホイ。
ト當惑。久我助、夕露もこなし。この時下手より、佐助、手代の形、羽織にて、提げ手箱、文箱を持ち、出て
佐助　イヤ、申し、ちとお頼み申しまする。
久我　どうれ。
佐助　笹原隼人さまは、これでござりまするかな。
久我　如何にも。笹原隼人はこれぢやが、いづ方よりお越しなされた。
佐助　イヤ、私しは小松屋宗右衛門が手代でござりまする。この品を後室樣へのお見舞ひ。生鯉一獻、外に文箱も
トずつと出す。久我助、取つて見て、上の書附けを見て
久我　生鯉一獻、外に金子五十兩、御母公樣への御見舞ひ。
ト半分讀みさして、こなし。五郎兵衛、八兵衛、悔りして、そろ／＼尻からげ下ろし、肩を入れ、鉢卷を取つて、いろ／＼こなし。久我助、隼人の前へ出て
ハツ、殿樣、小松屋宗右衛門方より生鯉一獻、外に金子五十兩、御母公樣へのお見舞ひ　笹原隼人さま、小松屋宗右衛門……斯くの通りでござりまする。
隼人　そりや此方ではあるまい。
久我　エヽ。
隼人　屋敷違ひであらう。
佐助　でも、塀の破れより、出入りのお屋敷と承りまして
隼人　例へ此方の屋敷にもせよ、禮を受ける覺えはない。
久我　そりや先達て
隼人　默り居らう。
佐助　でも、折角
隼人　ハテ、歸れと云ふに。
トきつと云ふ。佐助、うぢ／＼して、折角持つて來た物ゆゑ置いて行かうとする。隼人、睨むゆゑ、持つて行かうとする。ト久我助、渡さぬゆゑ、いろ／＼この事、何遍もあつて、トヾ隼人、久我助をキッと睨むゆゑ、不承々々に渡す。佐助、詰まらぬ顏をして、入る。跡に八兵衛、五郎兵衛、この體を見て、こなしあつて

五郎　コレ、隼人どの、ゆかりのない人に金子は貰はぬ。おいらが借りを借つて置いて、それでこなた、濟むかいなう。

八兵　イヤ、濟むかいなう〳〵。

ト嚴しく云ふ。隼人、默つてゐるゆゑ、兩人、腹を立て

五郎　エヽ、忌々しい。これ程云ふのに物も云はず、但し、耳でも潰れたか。

兩人　コレ、隼人どの。

ト車輪になつて云ふ。ト隼人、そろ〳〵袴、大小、印籠、紙入れ、羽織も脱ぎ、兩人の前へ出して

隼人　約束の金子は、明日相渡すであらう。

トぢつと云ふ。兩人、恟りして、八兵衞、こなしあつて

八兵　申し古手屋どの、ちよつと。

五郎　アヽ、わたしに。

八兵　お隙は取らしませぬ。

五郎　ハテ〳〵。

ト兩人、下手へ寄つて

八兵　時に古手屋どの、今の仕儀を御覽なされたか。五十兩の金を、只やらうと云ふのに貰ひもせず、あのやうに押し默つて、わたしが貸した品を出して、約束の金は明日渡すであらうと申して居られまするが、どうなされまする。

五郎　イヤ、わたしおやとて、お前樣のお待ちなされますのに、待たぬと云ふのではなし

八兵　そんなら、待つて進ぜませうか。

五郎　いつその事、さうしませうか。

八兵　サア、そんならお出でなされませ。

ト兩人、隼人の側へ行て

時に隼人どの、こなたのその立派な侍ひ氣を、下拙拜見いたし、殆ど感心仕つた。今日は去んで進ぜませう。

五郎　こなたの心に恥ぢて、只遣らうと云ひたいけれど、それでは、こちらが鼻の下が干上がる。コレ、必らず明日、間違はして下さるなや。

隼人　ハテ、念には及びませぬわい。

兩人　そんなら隼人どの、明日逢ひませう。

ト唄になり、兩人、捨ぜりふ、えらい侍ひぢやが、錢がなけりや、侍ひでも役に立たぬと、兩人、云ひ〳〵入る。跡しんみりの合ひ方になり、久我助、夕霧、隼

人の側へ寄つて
久我　申し、殿様。
夕露　兄上様。
久我　アヽ、いかい御苦労をなされまするなア。
夕露　今の兩人の者へ、明日とお請合ひなされました
久我　其お心當りは
隼人　ハテ、よいと云ふに。
兩人　でも、その御心配が
隼人　さのみ案じる事はないわサ。
ト隼人、傍向く。兩人、顔見合して、ほろりと泣く。
ト橋がゝりより、宗右衛門、湿し前の形、尻からげして、手に鯉の手桶を提げて出て
宗右　ちよつとお頼み申しませう。
久我　今日は屋敷は取込みなれば、歸らつしやれ。
宗右　左様ではござりませうが、ちとお願ひの者でござりまする。
久我　ナニ、願ひとは。
宗右　ハイ、其お願ひは、この品でござりまする。
ト先刻の鯉の入りし桶を出す。久我助、中を見て
久我　こりや先程小松屋宗右衛門方より、御母公様へお見舞ひのこの生鯉、これを願ひとは
宗右　ハイ、わたしは只今、これへ參りました、手代どもの受け判の者でござりまする。あなた様へ持たして遣はしました鯉が、どうした事やら、道で鯉が上がりましたぢや。そこで上がつた物を差上げましたゆゑ、お受けなされぬのぢやと、親方がきつう喧ましう申されます。これは全く使ひの業ぢやあらうとござりまして、使ひに參りました若者の粗相になりまして、暇が出ました。暇が出まするは是非がござりませぬが、請け判のわたしが、きつう迷惑でござります。一人と思へば二人三人の難儀になりますれば、何卒この鯉をお受けなされうならば、手代も歸參しますと云ふもの。どうぞこの儀を、お願ひ申し上げまするやうにござりまする。
久我　成る程、尤もなる願ひ。今日はお屋敷は彼れこれと取込みなれば、明日にも身がよきに、この儀を披露の致しくれう程に、先づ今日は、持つて歸れ／＼。
宗右　サア／＼、其お取込みの所へお願ひ、誠によくせきの儀でござりますれば、どうぞそこへ
久我　今日は叶はぬ。
宗右　すりや、どうあつても

久我　早う持つて歸れ。

宗右　ア、是非がござりませぬ。

ト桶を擔げて、すご〳〵行かうとするを

隼人　コリヤ〳〵。

宗右　ハツ。

トつか〳〵と來て、坐つて

御用でござりまするか。

隼人　その品、受納いたしてくれう。

宗右　すりや、お受けなされて下されうとな。

隼人　如何にも。

宗右　ア、ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。これでわたしも、立ちもますると云ふものでござりまする。定めてこの通りを申しましたれば、喜びまするでござりませう。エ、、有り難う存じまする。左樣なれば一時も早う、この譯を申しまして、喜ぶ顏を見まするでござりませう。左樣ならば、お暇申しまする。

トほた〳〵喜び、行かうとする。

隼人　コリヤ、待て〳〵。

宗右　まだ御用がござりまするか。

隼人　兩人、御膳部の拵らへはよいか。

久我　御膳は調ひましたが

夕露　肝心のおなまとお汁が

隼人　ア、困つた事がある。久我助はあの通りの病氣、心に任せぬ

ト思ひ入れ。宗右衛門を見て

幸ひそな者、なんとこの鯉を、調味してくりやるまいか。

宗右　これは殿樣のお詞とも覺えませぬ。斯やうな事は、一向に不得手な私しなれば、この儀ばかりは

隼人　イヤ、その不調法が此方の望み。大儀ながら

宗右　左樣ならばこの所で

久我　爼板代りはこの文臺。

隼人　サア、早く〳〵。

宗右　ハイ。

ト合ひ方變る。宗右衛門、前へ出て、鯉を出して、出刃にて鯉の腹を裂く。ト中より五十兩出る。これを見せぬやうに隱して、摺鉢の中へ入れる。隼人、チッと見てゐる。宗右衛門、鯉を洗ひ、隼人の前へ直し、下手へ下がつて

鯉の水洗ひは致しました。跡はあなたで、よいやうにな



澤村訥升の隼人



河原崎國太郎の夕霧

されませ。
隼人　オヽ、大儀であつた。成る程、鯉は此方にてよきに致す。その鯉の腹綿を持ち歸れ。
宗右　なんと仰しやります。
隼人　中に仕込みし五十兩の金子。
宗右　エヽ。
隼人　金子は此方に望みない。
宗右　エヽ。
隼人　小松屋宗右衛門。
宗右　エ、エイ。
ト恟り。
隼人　オヽ、過分なぞよ。
トこれにて、きつぱりとした合ひ方になる。
これまで手を替へ品を替へ、閉門の某に、貢がんず其方の志しは過分なれども、この金子を借用いたしては、武士の義を忘るると云ふもの。そこへ心の附かぬは、町人の魂ひ。
宗右　そりやお詞ではござれども、この金子を御用にお立てなされ、何時にてもお返しなさるれば、恩にもひらにも着ぬ道理。

隼人　ゆかりなき町人には、衣服大小は借用いたせども、宗右衛門、其方ゆゑ借用は猶ならぬ。
宗右　そりや又、どう云ふ仔細で。
隼人　今この金子を借用するは易けれども、閉門を受けてより、町人を引入れ、金子の借り受け、露命を繫ぐ淺ましいと、名もなき奴等の口の端にかゝるが恐はしく、まつたこの金子を借り受け、返濟の出來ざる時は、恩義かかり、町人に貢がれたと云はれては、武士が立たぬ。
宗右　左樣なれば申しまする。既に以てお上の缺所にもなるべき、私しの體。いま小松屋宗右衛門を相續いたし、安樂に暮らしまするは、あなた樣のお蔭。すりや、私しには大恩あるあなた樣。
隼人　母に與へし生鯉なりや、此方にこそ大恩ある
宗右　これは片意地な。左樣なれば、その金子も、御母公樣へ。
隼人　默り居らう。閉門は受けても笹原隼人が母、町人づれに金子を受けうか。母の胎内出でゝより、非義非道をなさず。人の笑ひ譏りをいとはずば、斯程に貧苦は致さぬわい。
久我　その又、潔白なお前樣が、これは覺えがござります

るか。

ト最前の紙袋を出す。隼人、懐を見て、吻り。

隼　ヤア、それは。

久我　斯ほどまでの艱難を、なされまする殿様

ト合ひ方變る。

これが荻原家の御家門のなされまする、お身持ちでござりまするか。毎日々々衣服改め、御母公様へのお見舞ひ、最前も最前とて、古手屋道具屋の悪口雑言、却つて押黙つてござるは、御母公様への御孝行と、思し召してゞござりませう。この下郎は側に聞いて居りまして、無念で口惜しうてなりませぬ。申し殿様、なぜにこの下郎に打明けては下さりませぬぞ。この事宗中へ聞えたば、愚者は譏り、心ある者に褒めも致しませうが、母御様のお顔は、どこで立ちまする。如何に腑甲斐ない者ぢやとて、何事の御相談にも、相手になされて下さりませぬとは、餘りお胴慾でござりまするわい。

宗右　最前も最前とて、御門前で下賤の者に、手を突いて頭を下げ

久我　世にある時のつゝを米、それにも足らぬ手一合

夕露　聞きなさる、お心根を、思ひ計り

宗右　事を分けてのお願ひ

久我　何卒お心を取り直し

夕露　マア、この金子にて何事も

宗右　母御様へは猶孝行

久我　少しは又お心の

夕露　おいさめあるやう

宗右　申し殿様

夕露　兄上様

久我　どうぞ

三人　この儀を

ト三人、隼人の顔を見てゐる。

隼人　ヤ、愚か／＼、心恥なき時は身は泥土に埋むとも、何をか苦にせん、何をか勞せん。この上如何やうなる辛苦ありとも、家の大事に較ぶれば、九牛が一毛。

宗右　それ程お家の大事を思し召すなら、この宗右衛門が相談に、お乗りなされませぬか。

隼人　ナニ、相談とは。

宗右　いま犬守兵庫は、お家を押領せんと專らの企み。さすれば若殿左門之助さま、お身が危ないでござりませうがな。

隼人　なんと。

宗右　サア、これが相談でござりまする。千草姫さまは元は犬守兵庫が姪、姫君の爲には實の伯父。まだ聟君も定まらず、然るところに先達て、金左衛門さまの屋敷へ兵庫の使者として、千倉沖右衛門來り、あなた様と千草姫と、祝言させよとの使者の趣き。これを立ち聞き致しました私し。然るに金左衛門さまの仰せには、汝隼人どのお屋敷へ參り、隼人どのを迎へて來れとのお頼み。それゆゑ今日私しが、參りましたは右の譯。あなた様がお家を大事と思し召すなら、姫君と御祝言遊ばして、隙を見合はし兵庫を討取りなば、お家も納まり、若殿様のお身もつゝがなく、國家は萬歳萬々歳。めでたう納まるこの相談は、申し、どうでござりまする。

隼人　そりや惡からう。

宗右　とは又、何ゆゑな。

隼人　されば、千草姫と祝言なさば、姫は兵庫の姪、兵庫は伯父、あれ見よ笹原隼人は兵庫と因みを結び、身の出世を思ふなぞと、世の人口は防がれぬ。

三人　すりや、この儀も

隼人　いつかな變ぜぬ。

トきつと云ふ。三人、顔を見合して

宗右　夕露さま、久我助どの。

久我　宗右衛門どの。

三人　ハア、。

ト三人、當惑のこなし。この時、障子屋體より、眞弓、出て

眞弓　隼人、勘當ぢや。

隼人　母人、何ゆゑ、拙者を勘當とは。

眞弓　生れついたる片意地者、母が心に叶はぬ。いづくへなりとも立つてうせう。

隼人　すりや、最前からの様子は

眞弓　オ、。

ト云はうとして

イ、ヤ、なんにも知らぬ。

隼人　それに又、勘當とは

眞弓　餘り孝行過ぎるゆゑ。

隼人　なんと仰しやる。

眞弓　其方がやうな片意地者は、七生までの勘當ぢや。また家を立て夫を持たすは夕露、其方を母が側へ置けば、まさかの時に母に心を引かされて

ト云はうとして
イヤ、母ではない、赤の他人。他人なれば御主人へ忠義を盡し、命を構はず義を金鐵に、これも構はぬ事ながら、人の笑ひ譏りをいとふやうな事では、大望は心元ない。勘當なれば何所へなりとも、緣附きするなりと、これも構はぬ、勝手次第。
ト餘所事のやうに云ふ。と隼人、心意氣あつて
隼人　御勘當、承知仕つてござりまする。
眞弓　すりや、承知か。
隼人　ハア。
ト思ひ入れあつて
勘當を受けたれば、母へ引きるゝ心もなし。コリヤコリヤ、宗右衞門、其方が申せし、金左衞門が屋敷へ參るであらう。
宗右　すりや、お聞き届けあつて、千草姫と御祝言を
隼人　オヽ、サ。
宗右　オヽ、お出かしなされましたな。
ト喜ぶ。
隼人　併し、金左衞門が屋敷へ參るに、この丸腰では
久我　イヤ、その儀は拙者が好きに計らはん。ヤア〳〵、早見新吾、參れ。
八兵　ハア。
ト八兵衞、着付け上下にて、大小を持ち出る。
隼人　そちや道具屋。この體は。
八兵　道具屋と見せしは、早見新吾。
久我　新吾、大小。
新吾　ハツ。
ト新吾、久我助へ大小を渡す。と久我助、凜々しく差して、上手へ座る。
夕露　久我助どのも
四人　この有樣は
久我　オヽ、御不審な御尤も。下郎になつて入込みしは、鎌倉よりの隱し目附け、岸田久我助と云ふ者。鎌倉にて貴殿の風評よろしからず、依つて御内意を受け、下郎となつて入込みしところ、聞きしに相違、主人へ忠節、母へ孝行。篠原隼人どの、誠に感ずるに餘りあり。驚ろき入つた貴殿の心底。猶この上にも、忠勤を勵まれてよからう。
隼人　ハア、すりや、こなたが、岸田久我助どのであつたよな。拙者が身持ちよろしからざるに依つて、鎌倉より、

下郎となつて入込み、我が所存を糺さんが爲。さうとは知らず、淺ましき儀をお目にかけ、お恥かしう存じます。

久我　それは格別、鎌倉表にての噂には、大切なる三品の寶紛失との儀。いよ／＼左樣でござるかな。

隼人　如何にも三品の寶紛失なれども、心當りの儀ござれば、追ッつけ詮議を遂げまして

久我　差上げ召さるゝか。

隼人　例へ何處にありとても

久我　草を分つて尋ね出し

隼人　お家の納まり。

久我　もし手に入らぬその時は

隼人　命に替へて

久我　それ程までに

隼人　心は鐵石。

久我　天晴れ。

隼人　ハア、それにつけまして、久我助どのへ一つのお願ひ。

久我　ナニ、某に願ひとはな。

隼人　今卒、妹夕露と、祝言の致し下されい。

眞弓　お心には染まずとも

夕露　ハイ／＼、申し、久我助さま、どうぞわたしがお願ひを、お聞き屆けあつて

三人　願ひを叶へて下さりませ。

久我　義を見てせざるは勇みなし。成る程、申し受けませう。

隼人　すりや、お聞き屆け下されうとな。妹、嬉しいか。

夕露　ハイ、此やうな嬉しい事はござりませぬわいなア。

隼人　母人にも、お嬉しうござりませう。

眞弓　母も嬉しうござる。ソレ、隼人、ちやつと

隼人　ハッ。ソレ、妹。

夕露　ハイ／＼。

隼人　用意。

夕露　アイ／＼。

ト夕露、嬉しきこなし。宗右衛門、共に、德利、杯出し、夕露、嬉しき思ひ入れにて、呑み、久我助へ、宗右衛門、渡す。と呑み、よろしくある。

宗右　ア、、めでたい／＼。内でも聟入り、外でも聟入り。御縁の定まる最上吉日。

眞弓　隼人、その杯これへ。

隼人　憚りながら母人へ。

ト皆、吞んで

眞弓　隼人、めでたう。

隼人　ハッ。

ト隼人、吞んで、杯を納める。トしんとなる。

眞弓　オヽ、めでたい〳〵。時に取つてのこの鯉魚は、至つて覺悟のよいものゆゑ

久我　潔き武士に例へ

眞弓　彼の唐土の王祥が忠義に替へ

隼人　例はゞ白水の上たりとも

宗右　寒氣晴れし其うちに

夕露　もしも大事に及びなば

久我　障るを待たで打倒つて

隼人　この鯉の濱燒となり

眞弓　膳部の蓋で食するとも

隼人　命を的の忠義の一心

眞弓　天晴れ、出立。

隼人　然らば此まゝ

ト立たうとする時、五郎兵衞、隼人の前の金を取らうとするを、

五郎　その金を

ト取らうとするを、上より下へ投げる。また行かうとするを、程よく、久我助、ポンと切る。

隼人　見事。

ト膝を叩く。眞弓、宗右衞門、出來たとする。夕露、久我助の刀を拭ふ。この見得双方よろしく

幕

四つ目

向井屋敷の段

三岸寺の段

明神山の段

役名——笹原左門之助。向井金左衞門。月本源次郎。腰元、白菊。同、葉末。千草姫。腰元、早枝。金左衞門妻、渚。小松屋宗右衞門。岸田久我助。妹、夕露。千倉沖右衞門。大澤新吾。月本兵部。藤田貢。三岸寺住職。南京の八平次。大守兵庫。米山の三吉狐。笹原隼人。

造り物、一面の屋敷塀、上手に出入りの屋敷門、合ひ方にて、幕明ける。

ト向うより月本源次郎、着附け上下にて、出る。門内より腰元白菊、葉末、外に腰元二人附き出て、源次郎と行き合ひ

白菊　ヤア、月本源次郎さま。

葉末　あなたは、いづれへお越しなされまする。

源次　誰れかと思へば白菊葉末、其方達も、こりやいづくへ。

白菊　姫君の仰せには、この度伯父御の仰せに依つて、笹原隼人と祝言せねばお怒り強く、それゆゑ祝言をせねばならず

葉末　夫を持つ事は否々と無理ばかり。お側にゐる私しども迷惑。

白菊　お姫樣の仰せられます事は、外に見染めた殿御がある。その殿御と云ふは、町中へ編笠を着て、謡を謡うてお越しなさるる殿御を、尋ねよとの仰せ。

葉末　それゆゑ斯やうに方々と尋ねに行きましても、其お方に尋ね當らず

白菊　どうぞお姫樣の戀人の在所を、尋ねませうと存じまして、參りましたのでござりまする。

源次　すりや、其方達にもその詮議をせよとな。某もお姫樣の仰せを受け、その編笠の謡を謡ひ歩く人を、尋ねよとの仰せゆゑ、方々と尋ぬれども、今に出合はず、難儀な役目を受取つて、迷惑の致すおやて。

葉末　それは、あなた樣にも、御苦勞さまにござります。さりながら、此まゝ歸りましたれば

白菊　お姫樣がお得心はなされまい

四人　こりやマア、どう仕りませうぞいなア。

源次　ハテ、どうと云うたところが、先づ知れるまで、尋ねずばなるまい。何を云うてもこの永の日を、うろうろと尋ねて居られもせず。ハテ、困つたものぢや。

トこなしある。ト門の内より、腰元一人、出て

腰三　申し、源次郎さま、これにお出でなされますか。

源次　あはたゞしい、何事ぢや。

腰三　金左衛門さまより、あなた樣へ、急の御状。

ト源次郎、心急くこなし、開き見て

源次　ナニナニ、申し遣はし候ふ姫君の戀人の、謡曲の在所も知れ候ふ由、承り候ふまゝ、お歸りなさるべく候ふ。また今宵中に隼人どのと、御祝言も相調ひ、委細の儀は貴面の後、お話し申すべく候ふ。

ト讀みさして

ムウ。すりや、尋ね人の在所が知れしとな。さりながら心得ぬはこの書面。先刻金左衞門どのよりの仰せには、右の謡屋を尋ねよとの仰せに、今また笹原隼人どのと、祝言の取り結びあるとは、何とも合點のゆかぬ。

白菊　何は格別、マア、お屋敷へ、お歸りあつたその上で

源次　イカサマ、その上にて事を計らはん。

門人　源次郎さま。

源次　マア、來やれ。

ト草唄になり、皆々、門內へ入る。チョン／＼。返し造り物、二重、金襖、上手、障子屋體、下手、屋敷塀、草唄にて、道具納まる。

ト上手に、隼人、着附け上下にて、金左衞門も上下、下手に渚、裲襠。宗右衞門、羽織にて、下手に平伏してゐる。

隼人　金左衞門、今日の饗應、過分に存ずる。

金左　これは有り難きお詞。先刻よりさぞお待ち兼ね。只今姫君をこれにて。奥、ソレ、早く。

渚　畏まりました。誰れかある。姫君をこれへ。

腰元　サア、姫君樣、先づ／＼これへ、お越しあられませう。

トこれにて酒宴車になり、早枝、白の振り袖、裲襠、綿帽子にて、腰元引連れ、出て、隼人の側へ座つて

金左　サア、姫君樣の御座も定まる。この上は御祝言を取急がん。

渚　ソレ、腰元ども、お杯の用意。

腰元　ハア、。

ト三方、銚子出す。ト早枝、恥かしきこなしにて、呑み、隼人へさす。隼人、呑んで、金左衞門の前へ置く。

隼人　金左衞門。

金左　ハア。

ト金左衞門、呑む。白菊、銚子持つて、入る。

先づ祝言納まり、おめでたう存じまする。千秋萬歳の千箱の玉を奉る。ハ、、、、。

宗右　御祝言もめでたう納まる上は

腰元　姫君樣にも、お嬉しうござりまする。

早枝　此やうな嬉しい事はないわいなう。

ト姫のやうに云ふ。此うち奥より

千草　嫌ぢや、嫌ぢやわいなう。

白菊　マア／＼、ようござります。

千草　イヤ／＼、聞かぬ／＼。

ト千草、いとけなき形にて出る。白菊、葉末、腰元、附いて出る。

葉末　マア／＼、お腹をお立てなされませずと、お氣をお鎭め遊ばされませ。

千草　イヤ／＼、なんのこれが氣を鎭めてゐられう。なんで其方衆は、自らを騙しやつた。

腰元　何を私しどもが、お騙し申しましたえ。

千草　騙しやつた／＼。

皆々　何をお騙し申しましたぞいなア。

千草　其方衆は自らに、なんと云やつた。

皆々　なんと申しましたえ。

千草　あなたが焦れてござる、殿御を尋ねると云やつて、なんで尋ねもせずに其やうに、自らが云ふ事を聞きやらぬぞ。

白菊　あなた樣の御意を聞かぬではござりませぬが、源次郎さまと所々方々を、尋ねましても知れませぬもの。

金左　コリヤ、腰元ども、これに聟君も嫁君もござるのに、騒がしい。奥へ伴ひ、立てい。

葉末　おやと申しまして、お姫樣が

皆々　御無理ばつかり

ト云はうとするを

金左　コリヤ、姫樣とは誰れが事。腰元ども。千草姫は即ちこれに。

皆々　エヽ。

金左　御祝言も相濟めば、イザ、お姫樣の綿帽子を取る。

ト綿帽子を取る。早枝の顏を見て

隼人　すりや、それが千草姫とな。

金左　姫君でござりまする。

隼人　ハテ、聞きしに相違の

四人　エヽ。

隼人　ハテ、千草姫であつたよなア。

金左　お氣に叶ひませぬか。

隼人　ずんと氣に入つた。

四人　エヽ。

隼人　隼人が妻。

早枝　アノ、わたしを

隼人　二世かけて夫婦の誓ひ。

ト云ふ。早枝、恥かしきこなし。

千草　エヽ、なんぢやゝら、皆そちらで合點して、自らには相手にならず、コレ、渚、腰元ども、早う彼の殿御に逢はしてたもいなう。
ト渚、腰元共々、いろ〳〵とこなし、顏見合はして、あちら向く。
エヽ、なんぢややら。これほど云うても相手にならぬのは、エヽ、腹が立つ〳〵。さうして今聞いて居れば、めでたい祝言がある。アタ忌々しい。
ト嘸ましう云ふ。いろ〳〵思ひ入れあつて、トヾ思はず作人を見て
ヤア、。
ト恟りして
オヽ、あなたぢや〳〵。
トまた顏を見たり、姿を見たり、いろ〳〵あつて
オヽ、矢ッ張りさうぢや。オヽ、あなたぢやわいなう、あなたぢやわいなう。
葉末　申し〳〵、これは何を御意遊ばしますぞいなア。
ト いろ〳〵嬉しきこなし。
白菊　申し、お心をお鎮め遊ばしませ。
四人　申し、お[illegible]。

千草　エヽ、何を云やるやら。其方衆こそ心を慥かに持ちやいなう。コレ、其方衆に、この間から話した、見染めた殿御は
トまた作人の顏を見て
あなたぢや〳〵。あなた、よう來て下さりましたなア。
渚　すりや、お姫樣の、お見染め遊ばした殿御と云ふは
ト金左衛門の顏を見る。押へて
千草　サア〳〵、これから祝言ぢや〳〵。コレ、腰元ども、早う祝言をさしてたもいなう。エヽ、斯う云ふ事なら、髮も結うて置かうのに。コレ、衣服を早う着せ替へさせてたも。此やうな嬉しい事はない。コレ、腰元ども、早う自らが衣服を持ちやいなう。
ト狐憑きのやうに、立つたり居たり、いろ〳〵ある。
腰元皆々、うろ〳〵する。
エヽ、氣の附かぬ腰元ども、何をうろ〳〵してゐやる。
コレ、渚、早う祝言をさしてたもいなう〳〵。
ト渚も金左衛門が目で押へるゆゑ、金左衛門の方へ寄つて
エヽ、其方も輩か。そんなら、其方にも頼まぬ。
トまた作人の顏を見て

ようマア御無事で、お出でなされましたなア。

ト餘念なう、側へべつたり座る。

隼人　金左衛門、この女は。

金左　イヤ、この女は

ト詰まつて

イヤ、これは、ナニ、狂人でござりまする。

隼人　ヤ。

金左　この女は、見染めたる者を戀ひ慕ひまして、それより思ひ詰めました、戀氣狂ひでござる。

千草　エヽ、金左衛門、なんぢや。自らを氣狂ひぢや。さう云ふ其方が氣狂ひぢや。さうして最前から、仔細のある事ぢやと聞いてゐたが、なんぢや、早枝がわしが殿御の側へ寄つて、舌たるい有り條。エヽ、腹の立つ〳〵。いつそ

ト早枝を引き退けうとするを、金左衛門引き退け

金左　これはしたり、姫君

ト云はうとして

アレ〳〵、あの如く辨まへなきが、氣狂ひに僞はりなし。

千草　エヽ、腹の立つ。コレ、金左衛門、覺えてゐや。

トずつと隼人の前へ來て

申し、あなた樣、此やうに苦勞を致して居りまする。お前樣に逢ひたいばかりに、腰元ともにお在所を尋ねさし、ほんに自らが、祈らん神も佛もござりませぬ。その引合はせか、嬉しうお顔を

トまた行かうとする。早枝、留めて

早枝　コレ、申し、必らず側へ寄つて下さりますな。大事の自らが殿御。

千草　エヽ、殿御もすさまじい。推參な。下がりや〳〵。

ト金左衛門、諸々いろ〳〵とこなしある。

隼人　ハテ、狂人と云ふ者は、譯もない者ぢや。如何程申しても、ついぞ見た事もない女。知らぬぞ。

千草　エヽ、あなたまでが其やうに仰しやる。わたしはよう覺えて居りまする。ソレ、いつぞや自らが屋敷の門前を、編笠を着て謠を謠うてお出でなされたを、わたしやよう覺えて居りまする。

ト何氣なう云ふ。ト隼人は元より、宗右衛門も、これは惡い事を云ふと、いろ〳〵こなしあつて、手拭にて首筋の汗を拭いたり、いろ〳〵ある。

サア、もう斯う申しますからは、もう何處へもやりは致

しませぬ。早う自らと祝言をして下さりませ。コレ、申し、拜みますわいなア。

ト拜む。

隼人　ハテ、狂人狂へば、不狂人ぢやなア。

ト睨らす。

金左衛門、見苦しい。

金左　成る程、先刻より何やかやと御退屈、奥へお通りあつて

宗右　座敷を替へて、姫若様とお床入り。

早枝　オヽ、嬉し。

ト喜ぶ。千草、腹立て、行かうとするな

腰元　コレ、申し。

ト千草を留める。早枝を引き退け、また行かうとするを、宗右衛門、留めて

宗右　コレ、マア、黙つてござりませ。

千草　エヽ。

ト腹立てる。

隼人　さんなら、金左衛門、皆の者。

金左　[illegible]若様には

千草　これさ、又[illegible]

隼人　トまた行かうとするを

早枝。

早枝　ハイ。

ト思はず返事する。

隼人　千草。

千草　ハイ。

ト千草、返事する。隼人、氣を替へ

隼人　サア、來やれ。

千草　ハア、。

ト泣く。ト名古屋帶の唄になり、隼人、早枝の手を取つて入る。渚、金左衛門、千草を見て、こなしあるを、金左衛門、睨むゆゑ、是非なく入る。宗右衛門も、こなしあつて入る。腰元にも、奥へ行けと云ふゆゑ、皆入る。跡に金左衛門、奥へ行かうとするを、千草、ちよつと捕まへる。金左衛門、道理ぢやと云はうとして、姫を顯はしては惡いと、おれが胸にあるとして、奥へ行かうとするを、また捕へて、泣く。振り切り、行かうとするを、また捕まへて離さぬゆゑ、無理に振り切る拍子に、こける。ア、勿體ないとして、氣を替へ、思ひ切つて奥へ入る。あと矢張り獨吟。千草、こ

けながら泣き、いろ〳〵獨吟に合はして、よろしくあるべし。よき程に、獨吟とまる。

金左衞門、そりや胴慾ぢや〳〵。これ程までに戀ひ慕ひ、焦れてゐる者を、あの腰元早枝と、アタ穢相な祝言さして、まだその上に寢さすとは、餘りむごい、聞えぬわいなう〳〵。

トまた行かうとする。獨吟に合はして、よろしくある。

また隼人さまも隼人さまぢや。千草か早枝か、ちよつと見ても知れさうなもの。あなたに添ひたいばつかりで、これ程までに戀ひ慕うて居るものを、コレ、自らが心が知れぬかいな。エヽ、さうぢや〳〵、これから奥へ行て、誠の千草は私しでござりますと打明けさして、早枝に鼻明けさしてやらうより外はない。さうぢや。

ト行かうとして

イヤ〳〵、淺はかな女ぢやと、ひよつと愛想を盡かされたら、これまで盡せし女の操も水の泡。と云うて此まゝ寐さすもむやくしい。こりや、どうしたらよからうなア。

トこなしあつて

どう思ひ廻して見ても、斯うしては居られぬ。靜かに忍んで、オヽ、さうぢや。

ト獨吟になり、この道具、下手へ引く。ト右三間の前側、練張り障子はめあり、上手、障子屋體、道具とまる。ト千草、障子の內より窺ひ居る。とバタ〳〵にて、上手障子引拔く。內に隼人、血相をして、行かうとして居る。早枝、これを留めて

早枝　マア〳〵、お待ち下さりませ。

隼人　ヤア、退け〳〵。

早枝　イエ〳〵、お前樣がお尋ねなさるゝ、一大事をお話し申しませぬゆゑ、お腹立ちは御尤もなれども、此まゝ打捨て歸らうとは、そりやお胴慾、例へ枕は交さずとも、祝言すれば、あなたはわたしが殿御。わたしはあなたの女房。

ト矢張り名古屋帶の唄、早枝、いろ〳〵おかしみある。此うち千草、聞いてゐる。

隼人　ヤア、穢らはしい。

ト振り放し

コリヤ、千草、それほど夫を慕ふ心があれば、身が云ひつける儀があるか、なんと。

早枝　あなたの御意、命にかゝはりましても
隼人　聞き届けるか。
早枝　ハイ。
隼人　先づ過分。今宵、某をこの屋敷へ連れ来たりしは、金左衛門が心に一物あるに相違なし。その仔細知りつらん、包まず申せ。
早枝　イエ〳〵、全く以て金左衛門さまの心に、左様の儀は
隼人　左様でなくば、外に仔細は
早枝　サア、その仔細は
隼人　様子はどうぢや。

トきつと云ふ。早枝、泣く。

申さぬとすれば、夫婦の縁を切らうか。
早枝　ア、申し、それは。
隼人　然らば、有體に申しや。
早枝　サア、それは。
隼人　命にかけて聞くと云つたでないか。
早枝　サア、それは
隼人　サア
兩人　サア〳〵

隼人　どうぢやい。
早枝　ハア、。

トこの時、一間より千草

千草　その仔細は、私しが申しまする。
隼人　ナニ、其方が云ひ聞かさうとか。
千草　ハイ、ちよつと爰を明けて下さりませ。
隼人　ドレ。
早枝　コレ、申し。
隼人　然らば申すか。
早枝　サア、それは
隼人　エ、、面倒な。

ト行かうとするを、留めて

早枝　成る程申しませう。
隼人　すりや、云ひ聞かすとや。それでこそ隼人が女房。オ、、出かす〳〵。サア、早く〳〵。
早枝　ハイ、その仔細と申しまするは、笹原隼人があつては何かの妨げ、どうぞ千草姫と祝言させ、色に心を許させて、討つて捨てよと大守よりの使者の趣き。金左衛門さまお聞きなされずば、殿へ悪しざまに申し上げ、又その上に一味徒黨の連判へ、血判せよとの無理難題。是非

に及ばず祝言を、させませうと受合ひしが、姫君はあなたを見染め、外の殿御は否ぢやと仰しやるゆゑ、姫の代りになりました私し。まだその上へに犬守が企みには、若殿樣御祝膳の時、御膳部へ毒藥を仕込み、殺す手筈。

隼人　ヤア。

ト恟り。

早枝　その手で行かずば、若殿樣御佛參の時、明神山の彼方より、飛び道具を以て討ち取る手段。

隼人　ヤア〳〵。

早枝　南京の八平次と云ふ奴に、云ひ附けしを立ち聞き致し、必らず人に申さば、命がないとの口留めなれども、あなたのお身の上が大事ゆゑ、これと申しまするも夫が大切さ。必らず見捨てゝ下さりまするなえ。

ト隼人、こなしあつて

隼人　ムウ。すりや、我れをこの家へ引入れしも、手にかけん結構よな。若殿を毒殺、それで行かずば飛び道具にて討ち取らんとは、重々憎くき犬守兵庫。

ト向うを見詰め、空を見て

ムウ。最早御佛參に間もあるまじ。打捨て置けば若殿のお身の上。ちつとも猶豫はならぬ。これより直ぐに

ト行かうとするを

早枝　コレ、申し、私しは

隼人　一旦契約いたすれば、盡未來まで變らぬ夫婦。

早枝　左樣なら、わたしも一緒に

隼人　ヤア、足手纒ひ、そこ退け。

ト突きのけ、行かうとするを、また取りつき

エヽ、面倒な。

トちよつと當てる。トうんとこけるを見て

まゝよ。

ト行かうとするを、千草、取りつき留めるを、これも當てる。こける。氣を揉んで、行かうとする時

金左　ヤレ、待たれよ。

ト奥より出る。

隼人　金左衞門、心も急けば

金左　ヤレ、すりや、血相變へて何處へ、

隼人　ハテ、知れた事、お家に仇する奴原を

トまた行かうとする。

金左　イヤ、血氣に逸るは猪武者。危ふし危ふし。

ト隼人、ツカ〳〵と戻り、上手に金の猫あり、これをポンと切る。

隼人　まッこの通り。
ト猫の割れを見せる。
金左　すりや、大守を
隼人　隼人が忠義は、先づこの通り。
金左　ホヽオヽ、天晴れ〳〵。
ト金左衛門の息使ひを見て
隼人　金左衛門殿、なぜ拙者に打明けさつしやれぬぞ。
金左　何がなんと。
隼人　イヤサ、今宵につゞまる貴殿の絶命。
トきつと云ふ。金左衛門、さてはと云ふこなしあつて
金左　流石の勇士、御推量の上は包むに及ばぬ。まッこの通り。
ト肩衣刎ねる。腹帯しめゐる。この時廊下より、宗右衛門、渚、出て
両人　この有様は
ト愕り。
金左　ヤレ、騒ぐまい。先達て社参の行列、若殿左門之助さまを目がけ、突きかゝつたる槍は外れて斯くの通り。
渚　すりや、重病での御悩み、たゞ明らさまに、仰しやつては下さりませいなア。
ト泣く。
金左　ヤア、未練千萬。御主人のお身替りになつて相果つるは、武士の面目、今さら歎く場所ではないがや。
両人　ハア、。
ト渚、宗右衛門、泣く。隼人もこなしあつて、金左衛門、懐中より書面を出して
金左　コリヤ、妻、この書は汝へ形見、我が相果てし後にて開き見よ。
渚　すりや、この一書を
金左　宗右衛門々々々々。
宗右　ハア〳〵。
金左　この一書は其方へ
宗右　ナニ、拙者へも
金左　云ひ聞かす事もあれども、詳しき事はその一書。
宗右　しつかりと受取りました。
金左　我れにお濱御殿にて、突きかけし槍の主は、小倉兵右衛門。
渚　すりや、敵と云ふは、小倉兵右衛門であつたよな。
ト意氣込む。ト隼人もこなしあつて
隼人　ハア、、いつまで悔んでも返らぬ繰り言。打捨て置

くにはあらねども、差當つたる主家の大事。お家の納まりはこの隼人が、一命に替へても、寶の詮議仕る。金左衛門、心殘さず、臨終を清く召され。

金左　エ、、忝ない。

ト喜ぶ。ト八ッの鐘鳴る。隼人きつとなつて

隼人　最早八ツ。

金左　我が爲には無常の鐘。

宗右　ちつとも猶豫はならぬ

渚　お家の大事

隼人　寶の紛失。

宗右　在所は正しく

三人　寶の盜賊。

ト三人、意氣込む。

金左　コレ、、壁に耳、密かに〳〵。

ト金左衛門、こなし。

三金　とは云ふもの〻。

金左　未練な事を

隼人　今宵は幸ひ二十六夜

金左　吳服橋を眞一文字

宗右　清水の辻堂左へ取り

渚　菩提所までは餘程の道程。

金左　近道行けば凡そ十町。

隼人　一時遲れは暫時の不忠。

金左　ちつとも早う。

隼人　然らば此まゝ。

ト行かうとする。この時、忍び一人出て、うぬとかゝるを、激しく立廻り、ポンと切る。

おさらば。

ト向うへ、走り入る。

金左　ハテ、勇ましい。

ト跡見送る。金左衛門、こなし、よろしくあつて、こける。ト兩人、取りつき

兩人　ハア、。

ト泣き落す。チョン〳〵。返し

淺黃幕かぶせる。とバタ〳〵にて、上手より久我助、走り來たる。また下手より、夕露、走り出て、行き當る。

夕露　ヤア、あなたは久我助さま。

久我　夕露。して、隼人どのゝ在所は知れたか。

夕露　金左衛門さまの屋敷より、お立退きなされたと聞きましたゆゑ、尋ねますれど、とんと知れませぬ。
久我　我れとても聞くや否、駈けつけたれど、行くへは知れず。何は兎もあれ、別れ〳〵に在所を
夕露　心得ました。
久我　早う〳〵。
ト久我助は上手へ、夕露は下手へ入る。ト向うより早枝、長襦袢、ひしごき、しどけない形にて、走り出る。
ト上手より千草、走り出て、行き當り
早枝　ヤア、あなたは姫君様。申し、隼人さまは、どれへお隠しなされました。あなたはよう御存じでござります。サア、早う仰しやりませ。
千草　エ、、何を云やる。自らは隼人さまの在所を尋ねんと思うて來たのぢや。なんの自らが知らうぞ。わが身が知つてゐやるなら、有やうに云うて聞かしやいなう。
早枝　イヤ〳〵、お隠しなされな。サア、仰しやれ。
千草　其方云や。
早枝　あなた仰しやれ。
千草　わが身云やいなう。
早枝　仰しやらぬと
ト千草を叩かうとする。千草も亦叩かうとする。この模様、おかしみ、よろしく
千草　わが身が其やうにしやると、から
ト千草、早枝の手を噛む。
早枝　アイタ、、、。お前様はえらい齒ぢやなア。其やうに手籠めになされますと、わたしも意地ぢや。金輪際、隼人さまはわたしが夫ぢや。必らず相手になつて下さりますな。
千草　イヤ〳〵、どのやうに云やつても、隼人さまの女房は自らぢや。
早枝　なんぼう其やうに仰しやつても、わたしが祝言しましたれば、どこまでも隼人さまの女房。
千草　祝言しても、誠の千草は自らぢや。ほんの女房と云ふは、この千草。
早枝　イヤ、わたしが
千草　自らが
ト又立廻り、おかしみあつて、トゞ千草なちよつと當てる。
早枝　コレ、そんなで行くのぢや、ハイ〳〵コレ、ないわいなア。

ト走り入る。ト千草、起きて

千草　コレ〳〵、早枝、待ちや〳〵。さうぢや、なんであらうと、隼人さまのお行くへを。さうぢや〳〵。

トこれも走り入る。チヨン〳〵。返し

造り物、淺黃切り落す。ト筋違、上手へ寄つて四つ足の、出入りの門、すべて菩提所三岸寺の模樣。所知入りにて、道具とまる。

ト向うより行列、よろしくあり、乘り物に左門之助、着附け上下、後の乘り物に兵庫、後より沖右衞門、新吾。兵部、貢、その外諸役の諸士、上下侍ひ、家來大勢、殘らず上下股立ちにて、隨分人數大勢あるべし。よろしく並ぶ。

沖右　最早これがお菩提所の御門前、いづれも急がつしやれ。

大勢　心得ました。

ト皆々、乘り物に附き、行かうとするを、戸屋より

隼人　いづれも、暫らく〳〵。

沖右　若殿の御佛參を妨げるは

皆々　何奴なるぞ。

隼人　御佛參、暫らくお止まり下されませう。

新吾　あの聲は閉門受けし

皆々　笹原隼人。

沖右　お構ひなくとも、お乘り物を、早く早く。

皆々　ハツ。

ト皆々、急ぎ行かうとする。

隼人　暫らく〳〵。

ト隼人、上下股立ちにて、出て、皆々を引き退け、乘り物の前へ、手を擴げ、立塞がり

この乘り物、一寸もやる事罷りならぬ。

沖右　ヤア、誰れかと思へば、閉門の笹原隼人。

新吾　閉門の身を以て、若殿の御佛參を止むるは、慮外な奴、早く

皆々　立て。

隼人　イヤ、立たぬ。閉門の受け、御佛參のお止め申すは、お家の大事を思ふゆゑ、汝等しきの知る事ならず。閉居の身を何で御諫言申すからは、又この上のお咎め、お手討ちは覺悟の前。サア、お乘り物、一寸なりとも、やらるゝものならやつて見よサ。

沖右　ヤア、小癪な一言。いづれも、お構ひなくとも、お

通しなされい。
皆々　心得ました。
ト行かうとする。
隼人　イヤ、ならぬ。
兵衛　すりや、いよ〳〵お乗り物を止むるか。
皆々　見事汝が
隼人　とんでもない事。
皆々　サア
隼人　サア
皆々　サア
隼人皆　サア〳〵〳〵
皆々　何を小癪な。
ト皆々、反り打つ。隼人、意気込む。
左門　乗り物立てい。
皆々　ハア、。
ト乗り物立てる。ト皆々も控へる。中より左門之助、菊附け上下にて出る。ト隼人、下手へ下がる。各々上下にて、よろしくある。
左門　そちや閉門の隼人。
隼人　ハア、若殿樣、今日の御佛參、甚だ危ふし。今づ今日は御帰館あつて、然るべう存じ奉りまする。

左門　コリヤ〳〵、隼人、そりや何事を申す。今日の佛參を止むるは、危ふき事ありと、主人を大切に思ふ其方。左門之助承知いたし居るが、先づ今日は、歸れ〳〵。
隼人　イヤ、歸りませぬ。閉門の身を以て、御諫言申す上は、お聞き届けなくば一命は捨て物。何卒この隼人がお願ひ、お聞き届け下されて、今日の御佛參、お止まり遊ばされて、御歸館の儀を、偏へに願ひ奉りまする。
沖右　コリヤ〳〵、隼人、閉門の蒙むり、殿へ向つて慮外の一言。
兵衛　要らざる諫言なさずとも
新吾　似合うたやうに人の門へ立ち
沖右　食ひ餘りを貰ひ
兵衛　命を全うして
沖右　その身の[illegible]ぬやうに、早くこの場を
皆々　早く歸れ〳〵。
隼人　ハヽヽヽ、汝が心に引比べ、人を損ふ今の一言。笹原隼人が魂ひとは、違つてあるわい。
ト兵庫を見て
云はぬぞや、申さぬぞや。あらはで云へば血で血を洗ふお家の大事。何事も申さぬぞや。

トちよつとこなしあつて
イヤサ、云はぬぞや。
ト兵庫、素知らぬ顔をして居る。
サア、若殿様、是非今日の御佛參は、危ふい〳〵。サア、早くお座敷へ
ト氣を急いて云ふ。兵庫、ホツとして
兵庫　ヤア、默れ隼人、最前よりこれに聞いて居れば、出るまゝの雑言。今一言云はゞ、頭骨切つて切り下げるぞ。この犬守兵庫がお供を致す、今日の御佛參を怪しむは、汝が胸に一物あるに相違ない。何が斯う見たところが、そちや狂氣いたしたなア。イヤサ、氣が狂つたと云ふ事。ア、若いが氣狂ひとは、ハテ、不便千萬な。ハ、、、ハ。
隼人　如何にも狂氣いたした。氣が狂つた。心が狂へば、如何やうな事を申さうやら知れぬぞや。
ト氣を替へて
ハア、彼れらにお構ひなくとも、サア、早く御歸館。
左門　默れ隼人、事を分けて申すに、佛參を妨げ、予が詞を背かば、手討ちにするぞ。
トきつと云ふ。隼人、前へズツと出て

隼人　サア、若殿。
ト首さし延べる。
左門　なんと。
隼人　今日の御佛參お止め申すに、お聞入れなき時は、お手討ちは覺悟の前。
左門　ヤア。
隼人　是非御佛參とあらば、この隼人をお手討ちになされ、その上にての佛參。さなくばこの座は、動きやア仕らぬぞ。
左門　サア、それは
トこなし。
イヤ、滅多には手にかけぬ。
隼人　とは又何ゆゑ。
左門　曇りなき、身は晴れて行く……構はずと此まゝ、
ト行かうとする。
兵庫　アイヤ〳〵、若殿、此まゝにお越しあるは、忠義一圖の笹原隼人が詞も無足。今日の御佛參にはお止めなされ。
左門　でも、此まゝ
兵庫　達て御佛參あらば、隼人を手にかけお越しなされ。

左門　ヤア、。
ト留り、こなし。
隼人　サア、若殿、お手討ちになされ。
左門　それぢやと云うて。
兵部　コレサ、若殿、閉門の笹原隼人が、御諫言をお聞きあつて
新吾　兵庫さまの仰せ、我れ〳〵が詞をも、お聞入れはござらぬか。
左門　全く。
皆々　左樣でなくばお手討ちに。
左門　サア、それは
沖右　御勘當あるや。
左門　なか〳〵。
兵庫　さなくばお手討ち。
左門　それは。
皆々　サア。
左門　サア。
皆々　サア〳〵〳〵。
ト兵庫、皆々と顏見合はせ、こなしある。左門之助、氣な皆へ、こなしあつて

左門　覺悟はよいか。
兵庫　サア、お手討ち。
左門　南無阿彌陀佛。
隼人　イヤ、成佛いたさぬ。死んでも魂魄君の守護。
ト首さし延べる。ト左門之助、刀を拔き、可哀さうなと云ふこなし。
サア、若殿。
皆々　お手討ち〳〵。
ト皆々、口々と云ふゆゑ、是非なく
左門　是非に及ばぬ。
ト思ひ切つて、ポンと切る。
兵庫　この死骸は、三昧へ打捨てい。
左門　思へば不便な。
兵庫　イヤ、殿のお立ち。
皆々　ハア、。
ト左門之助、死骸を見て、いろ〳〵こなしあつて、内へ入る。兵庫、まんまと巧いと云ふこなし、敵役と顏見合はし、笑壺の思ひ入れにて、入る。とバタ〳〵にて、久我助、夕露、兩方より走り出て來て
夕露　久我助さま。

久我　夕露、して、隼人どのは。
夕露　慥かに爰へ。
　ト夕露、隼人が死骸を見て
　ヤア、こりやコレ、兄さん。
　ト久我助も見て
久我　誠にこりやコレ隼人どの。エヽ、何者の仕業。いま一足早く駈けつけなば、斯くやみ〳〵とは、エヽ、コレ、残り多い。
夕露　悔んで返らぬ事。せめて、死骸を
久我　夕露。
夕露　久我助さま。
両人　エヽ、口惜しい。
　トこなし。この時、下手より、捕り手、出て、
捕一　ヤア、隼人が死骸に涙をかけるは、所縁の者に相違ない。ソレ、討つて取れと兵庫さまの御意。ソリヤ。
捕皆　ハアヽ。
　ト取巻く。
久我　さては犬守兵庫が仕業とな。せめてもの隼人どのゝ追善、うぬら一々討つて捨てる。覚悟ひろげ。
捕一　者ども、ソリヤ。
　トかゝるを、ちよつと當て
久我　夕露、ぬかるな。
夕露　心得ました。
　ト捕り手、總がゝりになつて、立廻り、よろしくあつて、皆々を追うて入る。ト千草、走り出て、死骸を見て
千草　ヤア、こりやコレ隼人さま。こりやマア、どうせうぞいなア。
　ト泣く。ト以前の捕り手、出て
捕一　ヤア、怪しの女、討つて取れ。
捕皆　ハツ。
　ト捕り手、千草を引立てうとする所へ、源次郎、走り出て、無二無三に投げ、千草を囲ひ
源次　コリヤ、うぬら、なんとするのぢや。
捕一　ヤア、此奴も紛らはしい奴。ソリヤ。
捕皆　ハア。
　ト源次郎、凛々しく、面白き烈しき立廻り、トヾ千草を囲ひ、どつこいと見得になり、チヨン〳〵。返し。
　造り物、平舞臺、正面、大模様の金襖、上手に大床

の間、大掛け物掛けあり。但しこの掛け地壁、人の出入りの明き穴あり。舞臺前、花道、黒塗り高欄上げる。木魚入りの合ひ方にて、よろしく道具とまる。

ト花道より左門之助、長上下、後より沖右衛門、新吾、その外近習の上下侍ひ大勢附き出る。と上手より、三拝寺住持、緋の衣の拵らへ、後より、雲才、頓才、二人附き出る。皆々、左門之助を見て、平伏して

住持　若殿様にはお早き御佛參。先づ〳〵。

左門　これに〳〵お住持、出迎ひ御苦勞千萬。

住持　これは有り難う存じ奉る。左門之助さまを始め奉り、各々には、イザ先づこれへ。

沖右　イザ、若殿樣。

新吾　先づ〳〵あれへ。

皆々　お通りあられませう。

ト左門之助、本舞臺へ行かうとする時、薄ドロ〳〵にて、隼人、幽靈の姿にて、左門之助の前へセリ上げる。左門之助、見て、恟りする。こなしある。ト皆々、左門之助の顔を見て

皆々　若殿樣、如何遊ばしました。

ト皆々、不思議さうに顔を見て、云ふ。

左門　すりや、其方達の目には見えぬか。

皆々　何を御意なされまする。

左門　すりや、見えぬとな。

ト左門之助、皆々を見て、我れより外に見えぬかと云ふこなしあつて

ハテナア。

トこの時、隼人、消える。ドロ〳〵止む。左門之助、又々よろしくこなしあつて

ハテ、心得ぬ。

皆々　イザ、先づ。

ト左門之助、衣紋繕ろひ

左門　方々。

ト前後に氣を附け、静々と上手にかゝり、よき所に直る。

住持　ソレ、小姓ども、お茶を持て。

小姓　ハツ。

ト小姓二人、煙草盆、高茶臺に茶を持ち出る。左門之助の前へ直す。

住持　粗茶一服、イザ、召上がられませう。

左門　加減もさぞかし。

ト茶碗を取上げ、呑まうとする時、ドロ〳〵にて、茶碗落す。皆々、恟り。

住持　お茶を取替へい。

左門　イヤ〳〵、苦しうない。

ト合點の行かぬ思ひ入れ。

住持　然らば、御配膳を申し附けませう。

ト立たうとするを

左門　イヤ〳〵、まだ望みにない。

トよろしく思ひ入れあつて

ナニ、お住持には、暫らくこの席を

住持　アノ、手前に。

左門　其方達も、暫時の間遠ざけい。

皆々　ハツ。

住持　左樣ならば後刻。

皆々　御意得ませう。

トこれにて皆々、心殘して入る。左門之助、あたりをとくと見廻し、隼人は居ぬかと、いろ〳〵見るに、ドロ〳〵にて、左門之助の前へセリ上げる。左門之助、キツと見て

左門　そちや隼人、其方が忠義に依つて、予が佛參を止めしは身を思ふゆゑ。それを知りつゝ我が手にかけしは、犬守始め佞人どもが勸め、是非なく手討ち。定めて我れをつれなき者とも恨みんが、コリヤ、堪へてくれ。まつた某は他家より養子、賴みに思ふは其方一人。相果てし其方より、手にかけし我が心は、マア、どのやうにあらうと思ふぞ。この上は其方の心ゆかしには、身が手づからの追善供養、懇ろに勤め得さす。これを土產に、未來迷はず成佛いたせ。南無阿彌陀佛〳〵々々々々。

ト手を合す。ト隼人、平伏して居る。

斯ほどまでに云ひ聞かすに、予が詞を違るは、不忠であらう。

トきつと云ふ。隼人、恨めし氣に左門之助の顏を見て

隼人　不忠とはお情ない。若殿のお身の上、危ふしと申し上ぐるは、お家の大事、若殿のお身の上。我れこの世にあつては何かの妨げ、若殿のお手にかけさせ、今日の御佛參の砌り、御配膳に毒藥を仕込み、その企みが運ぶ時は、御佛參御拜禮の砌り、明神山より飛び道具を以て、討ち取る手筈でござるわいの。

ト左門之助、聞いて、恟り、こなしあつて

サア、その事を告げ奉らんと思へども、お側に附き添ふ佞人ども、申す事も申されず、幸ひの隙を窺ひ、申し上ぐる右の次第。お家を押領せんず大守兵庫。若殿、必らず御油断遊ばすな。

ト固く度々億ろく。いろ〳〵こなしあつて

左門　すりや、その事を申さん爲であつたか。我が命危ふしと聞きしゆゑ、今日の伴參を止めしか。さうとも知らず、現在我が手にかけて

ト泣き、殘念のこなしいろ〳〵ある。

コリヤ、堪へてくれよ。堪忍してくれいやい。かゝる忠義の家來を持ちながら、閉門と云ひ、手にかけると云ふも、これも定まる過去の因緣。コリヤ、隼人、命を捨ての其方が忠節、閉門赦し、主從三世ぢやぞよ。

隼人　エヽ、勿體ない。そればかりが未來の土產。はやこの事を申したれば、お別れ申さん。

左門　すりや、もう其方は

隼人　若殿樣のお身の上に凶事なきやう、魂魄はこの世を去らず、危ふき事あらばお知らせ申さん。

左門　それ程までに。

隼人　若殿樣、

左門　さらば。

トどろ〳〵にて、消える。左門之助、氣拔けの模樣、よろしくこなしあつて、トドへたり、あたりを見て、氣を替へ、しやんとする。ト下手より、住持、皆々、出て

住持　最早御配膳の刻限。ソレ、小姓ども。

小姓　ハツ。

ト小姓、配膳を左門之助の前へ置いて、下がる。

住持　イザ〳〵、召上がられませう。

沖右　殿樣、イザ〳〵。

ト皆々、手を支へ、平伏する。

左門　然らば

トこの時、左門之助、隼人が云ひし毒藥はこれぢやとして、似せ病氣の模樣にて、箸を落して

アイタヽヽ。

トきつう惱むこなし。皆々、愕り。

住持　ヤア、こりや若殿樣が

沖右　ナニ、若殿樣には、御病氣か。

住持　ヤアヽ、御病氣とや。

皆々　何は然れ、奥御殿にて

トこれにて皆々、立ち騒ぎ、介抱して、奥へ連れ、入る。ト跡、凄き合ひ方になる。ト床の間の掛け物、落ちる。ト兵庫、上下にて、刀を持ち、出て、あたりを見て

兵庫　ムウ。イヤ左門之助が苦しむ有樣、正しく毒藥の効目。ハテ、爭はれぬものぢやなア。その上、兼ねて邪魔になる隼人めは、千草姫と祝言させて、取込まんと思ひしに、これへうせしは夏の蟲、詞企みで手討ちにさせた。この上は金左衞門は我が味方。まつた笹原家の重寶、二十四文字は我が手に入る。小倉の色紙は沖右衞門に渡し置く。さすれば二品の寶なくては、笹原家斷絶。まつた左門之助さへ相果てなば、大殿は我れ次第。大願成就今宵のうち。アラ、嬉しや、喜ばしやなア。

トを喜びのこなしある。ト上手より、諸士出て

諸士　兵庫さま、これにござりまするか。

兵庫　あはたゞしい、何事ぢや。

諸士　ハア、若殿樣の仰せには、急病さし發り、佛參の儀は代參にて相勤め、その役目は兵庫さま、お勤めなされとの仰せでござりまする。

トさては毒にて苦しむと云ふこなしにて、思ひ入れあつて

兵庫　なんと云ふ。すりや、病氣ゆゑ、今日の御佛參の儀は、身に申し附けいと御意なされたか。

諸士　ハイ。

兵庫　ムウ。

トちよつと思案して

して〳〵、御容態はどうぢや。お顏の色は。

諸士　お顏の色はいつもの通り。何も外に變りし事はござりませぬ。

兵庫　ヤア、ナニ、お顏の色もいつもの通り、お心も惡らないとか。

諸士　左樣でござりまする。

兵庫　ハテ、心得ぬ。その筈ではないが。もうくたばる時刻ぢやが。

諸士　エヽ。

兵庫　イヤサ、草臥れのお疲れでがなあらう。よいワ〳〵。然らば某も只今それへ、推參仕ると申し上げてくれい。

諸士　然らば御名代の儀は、よろしうござりまするか。

兵庫　マヽ、それはよいわサ。

諸士　左様ではござれども、しかと申せとの儀。
兵庫　然らば御名代の儀、承知仕つたと申し上げい。
諸士　ハツ。
　ト行かうとする。
兵庫　コリヤ〳〵、いよ〳〵お氣は慥かなか。
諸士　ずんとようござりまする。
兵庫　ムウ。ハテ、心得ぬ。また若樣に變りでもあらば、早速に知らせ。
諸士　畏まつてござりまする。
兵庫　行け〳〵。
諸士　ハ、ア。
　ト行く。跡見て、合點の行かぬこなしにて
兵庫　ハテ、心得ぬ。膳部に坐りし上は、忽ち毒の効くべき筈。それに健やかにあるは、もし膳番の失念か。但し寺僧のうちより内通か。ハテ、心ならぬ事ぢやなア。
　ト思ひ入れある。ト上手より、沖右衛門、出て來て、あたりを見廻し
沖右　兵庫さま、これにござりまするか。兼ねて申し合はせし事も啄の嘴。左門之助には最早歸館。こりや、如何思し召すな。

　ト云ふに、一心に向うを見詰め
兵庫　拜せで叶はぬ廟參を延引させ、某に名代を云ひつけ、歸館するは。ムウ。
　ト思案する。
うち　殿の御歸館。
大勢　ハア、。
　ト所知入りになる。恟りして
兵庫　すりや、左門之助は最早歸館とや。エ、、折角企みし今日の佛參の計略。みす〳〵歸すか。エ、、殘念やなア。
　ト花道へ行く。と沖右衛門も同じく附いて行く。
とあつて若殿の云ひつけなれば、廟所へ參らずばなるまい。
　トまた本舞臺へ、兩人、戻り
イヤ〳〵、迂濶に廟所へ參りなば、左門之助と心得、彼の八平次めが、二つ玉にて狙ひなば、この身の大事。
沖右　左樣々々、大切ないお身の上。こりや、迂濶に代參はなりますまい。
兵庫　差當つて兵庫が當惑。
沖右　廟所へ參りし體にもてなし

兵庫　歸館いたすが上分別。
沖右　イヤ〳〵、それでは、兼ねて申し合はせし明神山に
兵庫　待ち設けたる八平次なれば、手ぐすね致して火蓋を切り
沖右　今や遲しと待ち兼ねて
兵庫　計り負ふせしと思ひしが、却つて左門之助に計られ
沖右　毒藥の事も皆ぐれはま。
兵庫　それを身共が知るものかい。
沖右　何は兎もあれ、一先づ御歸館召され、何かの手番ひ。
ト兵庫の顏を見るうち、兵庫はいろ〳〵、思案の間違うたと云ふ思ひ入れ。沖右衞門は合點の行かぬ思ひ入れにて、兵庫が袖を持ち
申し、兵庫さま、申し、申し、兵庫さま。
トこれにて兵庫、心附き、袖を拂ひ
兵庫　エヽ、こりや、一向益體ぢや。
ト刀を突き、思ひ入れある。返し
造り物、正面に藁屋、兩方袖山、松の吊り枝、兩方薄原、山幕、すべて山番の模樣、捨て松よろしく、在鄉にて、道具とまる。

ト三吉狐、山番の拵らへにて、松茸を門口に並べありて、仕出し、東西より出て、稻荷山のなアの唄にて、よろしく
仕一　こりや見事な好い松茸ぢや。
仕二　なんと、土産に買うて去にませうか。
仕三　これはなんぼでござるの。
三吉　ハイ、皆書きつけてござります。
仕三　ほんに書いてあるワ。そんならこの二十四文のを下され。
仕一　おりや、これにしませう。
仕二　これを買うて去んだら、嬶めが喜ぶであらう。
仕三　此方の嬶はこの松茸より、親の讓りの生え拔きの松茸が好きでござるわいなう。
仕二　何を云はしやるやら。
皆々　ハヽヽヽ。
仕三　コレ、親仁どの、錢を爰へ置きますぞや。
仕一　サア、去にませうか。
皆々　サア、ござれ〳〵。
トこれにてワヤ〳〵云うて、在鄉にて、入る。
三吉　今日は賑やかな事であつたわい。

ト松葉の錢を集めて

エ、コレ、人通りはあるが、とんと賣れぬ。エヽ、これでは水も呑まれぬわい。

トこんな事を云ひ〳〵、そこらを片附けて、内へ入る。圍爐裏に火を焚き、つる鍋うちかけ、雜炊を煮てゐる。

ト合ひ方になり、向うより八平次、前幕の形にて、手に鐵砲を持つて、居眠り〳〵出て、立ちどまり

八平　エヽ、なんの事ぢや。沖右衛門さまのお頼み、今日左門之助が佛參、御廟所を拜禮の所を、間道口から二つ玉。それで今朝から待つてゐるのに、なんの沙汰もないは、これや、なんでも變であつたと見える。沖右衛門さまも沖右衛門さまぢや。それならそれと、ちよつと知らしてくれたがよいに

ト空を見て

なんぢや。もう日も暮れる。昨夜から寢んのとで、眠たいただるいが一時になつて來た。こりや、狐に騙されてゐやせんのか。得てこんな時に、よう狐や狸に騙されるものぢや。

ト眉毛に唾をつけなぞして、あたりを見て

さうしてなんぢや、宵から暗い晩ぢや。何處が何處やら知れぬ。なんでもえらう腹が減つた。犬の椀でもあつたら食ひたいものぢやが。アヽ、ひだる。えらう蟲がかぶるわい。

ト云ひ〳〵、向うの小屋の火を見附けて

ハア、向うに火が見えるワ。

トちよつと思案して

ハアン、ありや山番と見えるわい。マア、なんであらうと、向うへ行て尋ねて見よう。さうぢや〳〵。

ト云ひ〳〵、あたり見廻し、少々氣味惡いこなし、本舞臺へ來て

オヽイ、山番どん。

三吉　オヽイ。

ト返事する。

八平　山番どん。

三吉　オヽイ。

ト八平次、返事するを聞いて

八平　オヽイと云うてけつかるわい。うまい〳〵。

ト小屋の側へ來て

オヽイ、山番どん。

三吉　オイ。

八平　ア、ナア、おりや山路に踏み迷うて、難儀な者でごんすが、どうぞ何も後生ぢや、今夜だけ爰に泊めて下さんせぬか。

三吉　なんと云はんす。道に迷うて難儀する。そりやマア難儀でごんせう。

八平　御推量なされなされておくれなんせ。

三吉　イヤ、内と云うて寐る所はないが、それでも大事なくば

八平　イヤモウ、どんな所でも大事ごんせぬわいの。

三吉　イヤ、不自由さへ構はしやんせねば

八平　それは忝ない。そんなら泊めて下んすか。

三吉　サア、マア、この火の側へごんせ。

八平　ヤア、有り難い〳〵。許さんせや〳〵。

ト八平次、無性に喜び、草鞋を脱ぎ、火の側へ寄り

ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。ア、、しんどい事であつた。ヤレ〳〵。

ト足を伸ばし、いろ〳〵あつて、あたりを見て

ハテ、、斯う見たところが、こなんはやもめと見える。定めて氣樂な事でごんせうなう。

三吉　イヤノ〳〵、モウ不自由でなりませぬ。

八平　イヤ、なか〳〵氣樂でよいものぢやて。時に山番どん、おりやこなんに頼みがある。

三吉　なんでごんす。

八平　イヤ、外の事でもない。昨夜からちつと譯があつて、いつそ腹が減つて、物も云はれんが、モウなんでも大事ないが、わしに食はして下んすまいか。

ト云ひ憎さうに云ふ。

三吉　なんぢや、昨夜から食はずぢや。それは定めしひだるからう。と云うたところが飯はなし、こなんの食ふやうな物はないが、困つたものぢや。

八平　コレ〳〵、なんでも大事ない。ひだるい時にむもたい物なし、なんでも大事ごんせぬ。食ひさへしたらよいぢや。

三吉　こなんの食ふやうな物はないが、松茸雑炊はあるが、どうぢや。

八平　なんぢや、松茸雑炊ぢや。そいつはえらぢや。なんと一杯、振舞うて下んせぬか。

三吉　イヤモウ、別に旨い物ぢやなけれど、大事なくば食はんすか。

八平　大事ないとも。そんならよんで下んすか。

三吉　サア／＼、喰はんせ。
八平　そりや忝ない／＼。
　ト三吉、椀に雑炊を盛つて
三吉　サア／＼、たんとある程に、替へさんせ。
八平　ア、、有り難いワ／＼。そんなら御馳走にあづかり
　ませう。
　ト無性に喰んで
イヤモウ、こりやモウ、どうも云へぬお加減ぢや。
三吉　サア、替へさんせ。
八平　まだ替へても大事ないかの。
三吉　遠慮せずと食はんせ。
八平　厚かましいが、そんなら、まそつと。
　ト椀を出す。三吉、山盛りに盛つて
三吉　サア／＼。
八平　こりや、毎度憚り。
三吉　斯う見たところが、こなん、ちよんぺいも行けると
　云ふやうな恰幅。
　ト酒を呑む眞似をする。
八平　その酒は大好き。常は飯より大好きでごんす。
三吉　そんなら、おれが寢酒に除けてあるが、一杯呑まん
すか。
八平　それは何よりの御馳走。アノ、命の親の、アノ、爰
な粹め。
　ト滅多無性に追從してゐる。
三吉　サア、雑炊を替へさんせ。
八平　これは／＼
　ト出す。また盛つてやる。
三吉　燗をせうか。
八平　イヤ、冷がよろしい。もう、そんなに構うて下んす
な。
三吉　そんなら何もないが、ゆるりと呑まんせや。
　ト八平次、雑炊を前に置き、茶碗に酒を注いで、呑ん
で
八平　甘露々々。イヤモウ、こりやモウ、どうも堪らぬ堪
らぬ。御馳走御馳走。
　ト手酌にて呑み
オヽ、下ります／＼。強いお酒ぢや。ハヽヽヽ。これは
毎度お慮外。えらう醉ひが廻つて來たぞ。
　ト茶碗を下に置き、雑炊を見て
ヤア、御馳走ぢやア栗と松茸、精進の肴に雑炊の吸ひ物。



坂東太郎の八平次



澤村訥升の隼人

イヤモウ、こりやモウ、どうも堪らぬ。人にはのりつね、我れは野狐。ハヽヽヽ。

ト戯れて、浮かれ、いろ〳〵おかしみよろしくあつて

時に御亭主、先づ今日は、なんとお禮を申してよからうやら。其許は身共が爲には命の親、既にかつえて死ぬるを、此やうに御馳走と云ひ、御酒まで頂戴仕り、怪しからぬ醉酊。ハツ〳〵、このお禮はキツと云ふぢや。さう心得てゐられよ、コレ、親仁。

ト横柄に、酒に醉ひ云ふ。

イヤモウ、斯うしたところは、とんと茶屋へ行てゐるやうな心持ちぢや。とんとお茶屋ぢや。茶屋の女郎衆が手で招く。

ト唄を唄ひ、いろ〳〵浮かれる。此うち三吉、煙草のみ、笑ひ〳〵見てゐる。

サア〳〵、もうお取りなされ。サア、これからはお床入りぢや。來いよ〳〵。足を揉めよ。えらう醉うたぞ〳〵。御免下され、他愛々々。

ト現になつて、こけ、鼾を掻き、大の字なりにて寢る。

三吉、見て

三吉　オヽ、なんぢやゝら云ひ〳〵寢入られた。さうして、尻からげも下ろさず。

ト側へ寄つて

コレ、風を引くぞや。尻からげも下ろしたがよい。

ト尻からげを下ろし、酒臭いと云ふこなし。

えらう醉うたの。昨夜から食はずとは、こりやえらいわい。

ト八平次、滅多無性に鼾を掻く。

こりや、きつう草臥れたと見えるわい。

ト小さい石を持つて來て、枕にさし

サア、枕もして、ゆるりと寢やんせ。

ト玉を出して向うへ捨て、筒をこぢて歪め、八平次の返し前に沖右衛門より受取つた、色紙を取り出し、頂き、こなし。三吉、下手のよき所の、セリ穴へ下りる。

トこの道具、取返し、小屋前に返る。ト八平次も前へとんぼ返りにて、前へ出る。ト兩方より薄原突き合はす。ト向うの山幕切り落す。遠見に[illegible]の社あり、舞臺先、萩、薄、秋草取り合はせ、野菊隨分綺麗にあるべし。八平次、狐憑きの模様にて、前へ出たまゝへたり居る。ト薄原より、隼人、早替りにて、上下股立ちにて、ズツと出る。狐火數多見事にある。蟲の音の合

ひ方。

隼人　ハテ、心得ぬ。昨夜金左衛門が屋敷を立退き、犬守兵庫が企みを聞き、御菩提所三岸寺へ趣き、御諫言を申し、若殿にお手討ちに遭ひし某。それに、この所へ參りしは、ハテ、心得ぬ。

ト あたりを見て、こなしあつて

爰は畑置の三昧なるに、何ゆゑこの所へ來りしぞ。

ト 合點の行かぬ思ひ入れ。この時、下手の切り穴より、狐一匹出て、隼人を見て、ハア、と云ふこなしにて、平伏する。隼人、キッと見て

ムウ、我れを惑はさん爲にこの有樣。斯くなり果つれば畜類までに。エヽ、口惜しやなア。うろたへぬ武士の魂ひ。目に物見せてくれん。

ト 刀に手をかけ、切らうとする。この時、狐、こなしあつて、隼人へ物云ふ事する。

ヤヽ、ナニ。

ト 耳を寄せて

全く其許樣に仇なすに非ず。先達て大殿樣狐狩りの折柄、狩り出され、既に命を取らるべきを、其許樣のお慈悲にて、命を助かりし米山の三吉狐。

ト 聞きさして

すりや、其方は、その時命を助けし米山の三吉狐よな。

ト また囁く。耳を寄せて

その時の御恩を報ぜんと存じますれど、畜類の淺ましさに、これぞと云ふ御恩を還るべき折なく、然るにこの度聞き出せしお家の大事。

ト 聞きさして

ナニ、お家の大事を告げんとや。

ト 囁く。聞くこなし。

ヤヽ、ナニ、犬守兵庫が企みにて、若殿樣のお身の上を聞き、御菩提所へ馳けつけ、命危ふしと見るや否、若殿樣へ御諫言申し上げ、お手討ち蒙むり、お身替りになりしは、この三吉狐が計らひ。ホウ

ト 膝を叩かうとする。また囁く。

すりや、我れ相果てしと思ひしは、さては汝が身に成り替りしよな。

ト 喜ぶこなし。また囁く。

ヤヽ、御配膳の折柄、御膳部に毒藥を仕込み、まつた明神山より飛び道具を以て、討取る手筈を若殿へ告げ奉りしも、この三吉狐が計らひ。お家を押領する大惡人は、

犬守兵庫。まつた家の重寶二十四文字は、彼奴が所持仕る。また南京の八平次が懷中に所持せし色紙を奪ひ取り、お手渡し申し上げん。まつたこの者は、兵庫が惡事に合體して、明神山より飛び道具もて、若殿を討ち奉らんとせし奴。先づ大切なる小倉の色紙

トこの時、差し金にて、色紙を宙にて、隼人の手へ渡す。隼人、取つて、頂き、見て

誠に紛ひもなき小倉の色紙。ハア、。

ト頂く。この聲を聞いて、八平次、いろ〳〵愕り、やう〳〵氣の附きしこなしあつて

八平　なんぢや、色紙

ト懷を搜し見て

ヤア、、懷に色紙がないと云ひ

トふつと氣が附き、そんなら狐に騙されたのぢやなと云ふ事をして

エ、〳〵。

ト咽喉をさすつて

エ、。

隼人　ハア、、有り難し、忝ない。色紙は我が手に入りしと云ひ、二十四文字の在所も知れ、若殿のお身も恙なく、我が身も全く、これ正しく三吉狐が計らひゆゑ。エ、、思へば憎くき犬守兵庫、お家の叛逆。それに引替へ、人も及ばぬ汝が働らき、お家の礎、エ、、忝ない。

トこの時、八平次、窺ひ寄つて

八平　その色紙を

ト取らうとかゝるを、見事に投げ、足に踏まへ

隼人　畜類には

ト起き上がるを

ア、、惜しきものぢやなア。

ト隼人、狐を褒める。八平次、苦しむ。これにて狐、喜ぶ。この見得よろしく

幕

五つ目　八幡前の段　松原の段

役名——菊谷雅次郎。小松屋宗右衛門。同倅娘、お松。眞重の五四六。丹波の五郎。當りの七。母、お竹。雲助、じばの六。同、月夜の吉。同、またけの三。同、げんこつ八。女房、お梶。島の小平

次。

造り物、淺黄幕、上手に鳥居、玉垣、下手に葭簀圍ひの茶店、床几二脚出し、在郷にて、幕明く。

ト仕出し、出て

仕一　サア、八幡さまへ參詣しませう。

皆々　ござれ〳〵。

ト皆々出て、茶店へ腰かける。トお雛、振り袖、前垂れ、襷がけ、盆に茶碗を載せ、持ち出て

ひな　ハイ、お茶を上げませう。

仕二　時にお娘は、いつ見てもほた〳〵と、愛のある娘ちやなう。

ひな　また擽てなさるわいなう。

仕二　イヤ〳〵、擽てはせぬ。イヤ、又このあたりで、二人とない美しいものぢや。

仕三　茶々よりお前のぶんぶくと沸いた、旨い茶が吞みたい。

仕一　こなたもきつい好きなア。

皆々　ハヽヽヽ。

仕二　時に、詣りませうかい。

仕三　イヤモウ、娘の顏を見たら、八幡さまより有り難い。

仕一　そんな事云うて又嬶に、かぶりつかれうと思うて。

仕三　病犬かなんぞのやうに。

仕一　そんな事云はずに、マア、八幡さまへ參つて來てから戻りに。

仕二　そんなら、さうしませうかい。

仕三　娘御、そんなら、茶の錢は爰に置きます。

ひな　早うお歸りなされませえ。

仕三　早う戻らいでなんとせう。

ト寄らうとするを

仕一　エヽ、嗜なまんかいなう。

皆々　サア、ござれ〳〵。

トわや〳〵云うて、鳥居へ入る。跡お雛、そこら片附け、手桶を見て

ひな　こりや水が切れたわいな。今は人絶え。ドリヤ、汲んで來うか。

ト唄になり、入る。ト庭神樂になる。ト向うより眞重の五四六、博奕打ちの形、後より丹波の五郎、當りの七も同じ形にて、喧ましう云ひ〳〵出て

五郎　コリヤ、五四六、待て〳〵〳〵。

ト これに構はず、五四六、本舞臺へ來る。と兩人、突き廻して

コリヤ、五四六、待てと云ふに。最前から聲の枯れる程呼ぶのに、われが耳へは聞えぬかい。

兩人　待ちやアがれ。

ト五四六を兩方より圍ふ。

五四　エヽ、喧ましいわい。そして、おれを呼んで、なんぞ用があるか。

五郎　なんぞ用があるかも凄まじいわい。コリヤ、わりや忘れたか。いつやらの事ぢやあつた。オヽ、さうぢや。後の月の九日の晩ぢや。當りの七が照りぢや依つて、來てくれんかと云ふゆゑ、行て見りやア、われも組んで居る。その時われが云ふには、コリヤ、五郎よ、明日の晩には戻す依つて、持つてゐりやア貸してくれいと吐かすゆゑ、二言なしに五十五貫と云ふ物を貸してやつたぞよ。おれもそれがけちになつて、ずぼらぼんと負けてしまうた。約束の明日の晩催促すりやア、イヤ、明後日まで待て。それから明後日。四五日二十日と待ちぼうけにさらして、とうどしまひには返さぬのみか、おれに逢うても斷わりも吐かさぬは、今日はなんでもかでも取るのぢや。サア、五十五貫、サア、いま戻せ。

五四　エヽ、喧ましいわい。コリヤ、よう物を思うて見い。借り貸しに應對づくぢや。おれが錢が無いゆゑ返さぬのぢや。

五郎　オヽ、返さぬのぢや。

五四　それ程よう呑み込んでゐながら、今返せと云ふは、われが皆無理ぢや。

五郎　コリヤ、貸した錢取るが、なんでおれが無理ぢや。それ吐かせ。

五四　ようしやくる奴ぢやな。コリヤ、今返す錢がありやア借りはせぬ。返す錢が無いゆゑに借りたのぢや。皆われが無理ぢや。

五郎　コリヤ、七よ。あんた白業を吐かしやアがる。コリヤ、聞いてくれ。貸した物を今返せと云ふおれが無理か、また返さぬが無理か。どつちが理屈ぢや。

七　ハテ、知れた事ぢや。皆われのが尤もぢや。コリヤ、五四六、さうして又、おれがせりふはどうするぞ。

五四　ハテ、二人ながら、錢の出來るまで借りぢや。

兩人　なんぢや、錢の出來るまで借りぢや。

五四　それとも、わいらが貸した物を、取れるなら取つて

見い。
五郎　七よ、あゝ云ふ事を吐かすわい。
七　よいワ。われがおこしなされにやア
兩人　オヽ、斯うして取るワ。
ト兩人、五四六の胸倉を取る。
五四　エヽ、何をさらすのぢや。役にも立たぬ事を。
ト振り放す。三人、叩き合ひ、いろ〳〵ある。ト下手より、お笘、婆の拵らへにて出て、この體を見て
とま　コリヤ、マア、何をするのぢや。
ト三人の喧嘩の中へ、割つて入る。
コリヤ、危ない。マア、何をせり合ふのぢや。
ト留めるを、構はず摑み合ひ、トヾお笘をこかし、上へ乘つて、むさんこに叩く。
アイタヽヽ。
トこれにて三人、恟りして、お笘を起して
三人　ヤア、こなたはお笘婆さまぢやないか。
とま　お笘婆も凄まじい。人を滅多無性にどやして、こりや、一體どうしたのぢや。
五郎　コレ、婆さま、聞いて下んせ。この五四六に盆の上で、五十五貫貸した錢も戻さず、自棄を吐かすに依つて、それで五四六を
兩人　ぶちのめすのぢや。
とま　成る程、こりや尤もぢや。五四六が惡い。また貴樣達もどやしては惡い。ハテ、貸し借りは應對づくぢやないか。口で云うても濟む事ぢや。
兩人　それでも、あの餓鬼めが、貸した物も戻さず、自棄を吐かすゆゑ。
とま　ハテ、よい。それもおれが斯う物云ふからは、貴樣達に損はかけぬ。おれに任して、四五日待つてやらんせ。
五四　コレ、拋つて置かんせ。
とま　まだそんな事を云ふわい。
兩人　もし四五日して返さん時は
とま　ハテ、おれが好いやうにしてやるわい。
兩人　そんなら、よいかの。
とま　サア、よいと云ふのに。
トこの時、上手より、軍次兵衛、代官にて、出る。後より、庄屋伊兵衛、家來を連れ、出て
軍次　コリヤ〳〵、其方達に申しつける儀がある。これへ出い。
三人　ハイ〳〵、アノ、私しどもへ。

軍次　申し聞かす儀、餘の儀にあらず。この度、千草姫と云ふ者、笹原左門之助と縁組を嫌ひ、隼人と云ふ浪人に戀ひ焦れ、然るところその隼人相果てしより行くへ知れず。この姫を詮議し差上げなば、褒美は望み次第たるべし。似寄りの者にても心當りあらば、訴へ來れ。

とま　左樣ならば、そのお尋ね者の千草姫とやらを尋ねましたれば、御褒美を下されませうとな。

軍次　如何にも、褒美の金子望み次第。キッと申し渡したぞ。

三人　ハイ／＼、畏まりましてござりまする。

軍次　また外村々にも申し渡さん。庄屋、案内。

伊兵　ハイ／＼、斯うお出でなされませ。

軍次　家來、供せい。

ト神樂になり、軍次兵衛、伊兵衛、家來連れ、入る。

とま　コリヤ／＼、わいら、せり合ふ所ぢやないワ。今お尋ね者を詮議して差上げたれば、褒美は望み次第ぢやといやい。

七　なんでもその姫を見附けたれば、直ぐに褒美ぢや。

五四　時に、此うち一人でも見附けたれば、コリヤ、褒美は四ツ割ぢやが、合點か。

とま　そりや知れた事。

五四　マア、祝ひ事に、一つ打たうか。

とま　こりやよからう。

三人　ヤア、シヤン／＼、も一つせい、シヤン／＼、祝うて三度、オシヤ／＼シヤンのシヤン。

ト手を打つ。

とま　サア、來い／＼。

ト神樂になり、四人、上手へ入る。と向うより、雅次郎、半合羽、股引、脚絆、旅がけの形にて、花道よき所にて

雅次　もう何時であらう。彼れこれ七ツ下がりでもあらうか。

トこれにて本舞臺へ行かうとする。と後より

雲助　オ、イ、待たんせ／＼。

トじばの六、月夜の吉、またけの三、げんこの八、四人、雲助の形にて、出て

コレ／＼、待たんせ／＼。

ト云ひ／＼出る。雅次郎、構はず本舞臺へ來る。ト四人、雅次郎を突き廻して

コレ、親方、待たんせと云ふのに。

雅次　最前から身を呼んだは、其方達か。
四人　さうでごんす。
雅次　して、身共を呼びしその用は。
六　外の事でもごんせぬ。おいらが馬に乘つて下んせ。
雅次　イヤ〳〵、身共は馬は望みにない。
四人　馬が否なら、駕籠に乘らんせ。
雅次　駕籠はふらついて、身共は嫌ひだ。
吉　駕籠も馬も嫌ひなら、酒手を置いて
四人　行かんせ。
雅次　馬にも駕籠にも乘らんに、酒手置けとは。
八　コレ、お侍ひ、一杯呑まして下んせ。
三　イヽヤイノ〳〵、爰まで附いて來た駄賃に
四人　一杯呑まして下んせ。
　ト雅次郎、こなしあつて
雅次　成る程、尤も。
　ト懐より、二朱一つ取り出し
　持ち合はせがないゆゑ、これを取つて置いてくりやれ。
　ト出す。六、取つて
六　なんぢや、こりやたつた二朱一つぢや。皆見たか。最前から爰まで附いて來たのが、二朱一つぢやといやい。
四人　なんぢや。二朱一つぢや。
六　イヤ、お侍ひ樣、イヤ、お侍ひ、イヤ、侍ひ。
　ト云ふを、雅次郎、キツと見る。
　なんぢや〳〵、なに睨みさらすのぢや。コリヤ、よう聞けよ。爰まで貴樣に附いて來たのが、たつた二朱一つかい。こんな目腐れ金は、欲しけりやア、我れにこますわい。
四人　アノ、茲な、しみたれめ。
　ト二朱を打ちつけ、雅次郎を蹴る。
雅次　先刻より詞甘く申せば、附け上がる、こゝな、泥坊めら。
　ト刀に手をかける。
吉　刀をひねくり廻して、どうさらすのぢや。
四人　おいらを切るか。面白い、サア、切れ〳〵。
　ト尻まくりして
　爰から。切れ〳〵。
　ト體を突きつける。
雅次　こりやモウ、うぬらが命も寢腐つたわい。
四人　サア、切りやアがれ。

雅次　さら吐かしやア。

ト雅次郎、刀を拔かうとする。皆々、あはてゝ、拔かさぬやうに、蒔ざつぱにてかゝる。雅次郎、これを引ッたくつて、立廻りある。と向うより宗右衛門、羽織、脚絆がけにて、提灯を持ち、お松、娘の形にて、紅木綿の脚絆にて、出て來る。この間、雅次郎、四人を上手へ追はへ入る。

まつ　申し祖父様、父様や母様の內は、まだ遠いかえ。

宗右　もう近い。さうして、わが身は、しんどかろなア。

まつ　イヽエ、父様や母様に逢うて、この金を渡して、喜ばしやんすのが、わしや嬉しいわいなア。

宗右　オヽ、さうぢや〳〵。必らず落すなよ。

まつ　アイ〳〵、合點でござんす。

宗右　サア、行け〳〵。

トこの時、バタ〳〵にて、雅次郎、四人を相手に、立廻りながら出て、この時、雅次郎、ちよつと當て、宗右衛門と顏見合せ

ヤア、あなたは

雅次　こなたは

四人　なにを。

トまた立廻つて

雅次　こなたは小松屋宗右衛門どの

宗右　菊谷雅次郎さま、この有様は。

雅次　されば、ちと御用あつて、この所へ參りしところ

四人　なにを。

ト又かゝる。よろしく立廻つて、トゞ四人を當てる。

宗右　これは。

雅次　イヤ、暫時の間。

宗右　して、あなたの御用の旅行は。

雅次　それはこの度、姬君のお行くへを尋ねよとの仰せを受け、所々方々を尋ねしに、このあたりにお忍びましますと由聞きしゆゑ、それゆゑ先づ當社へ參詣いたしてと、參りかゝりし途中の狼藉。それゆゑにこの有様。

宗右　左様でござりまするか。私しも參りかゝりまして、恟り致しましたが、先づあなた様にも、お怪我がなうて、めでたうござりまする。

雅次　して、こなたには。

宗右　この度宗七が災難、何卒お疑ひも晴れまするやうと、八幡さまへ立願。

雅次　それは何よりの事。して、宗七どのは

宗右　暫らくの間、世間の思惑を存じまして、雛小平次方へ、預け置きましてござりまする。
雛次　オヽ、それはよくござる。何につけても命が物種。イヤ、身共も心が急けば
宗右　あなた様にも隨分御無事で。また途中で今のやうな惡者ども。コレ、必らず御油斷なされまするなえ。
雛次　承知仕る。然らば宗右衛門どの
宗右　左樣ならば、雛次郎さま
雛次　お別れ申す。
ト唄になり、雛次郎、鳥居の方へ入る。
まつ　コレ、祖父樣、早う父樣の所へ、連れて行て下さんせいなア。
宗右　オヽ、連れて行てやる。マア、何は然れ、八幡さまへ參つてから。サア、マア、來い／＼、
ト此の時、四人の雲助、出き、宗右衛門を突き廻して
四人　コレ、待たんせ。
宗右　コリヤ、わりさま達は、なんとするのぢや。
六　イヤ、なんともせぬ。その小びつちよの持つてゐる物が欲しい。
四人　此方へ渡せ。
ト宗右衛門、愕りして、お松を圍ふ。
まつ　怖いわいなう。
宗右　コリヤ、何も怖い事はない。おれに引きついてゐい。
トじつと氣を替へ
コレ、こなさん達は、そりや何を云ふのぢや。あんな子供がなんの、金を持つてゐて堪まるものか。こりや金ぢやない。オヽ、さうぢや、握り飯ぢや。そんな物は持つてゐやせぬ。そこ退きや。
ト行かうとする宗右衛門を引き退け、お松を捕へる。
まつ　アレ、怖いわいなう。
吉　喧ましう云ふな。サア、親仁、斯うしたら此方の物ぢや。得心して金を渡せばよし、さもなくば捻り殺して、金を取らうか。
宗右　エヽ、滅相な。
六　そんなら金を渡すか。
宗右　サア
四人　サア
皆々　サア／＼／＼
四人　エヽ、面倒な。

ト四人、お松の懐を金を取らうとする。やろまいとする事、いろ／＼あつて、トヾ宗右衛門、脇差を抜く。四人、これを見て、逃げて入る。宗右衛門、追うて入る。ト跡にお松、うろ／＼して

まつ　祖父様いなう／＼。

トうろ／＼する。ト上手より、六、出て、お松の首に掛けた金を見て

六　オヽこりや金ぢや。

ト懐へ手を入れうとする。お松、ちやつと退き

まつ　アレエ。

六　なんでも金ぢや。天道のお當てがいぢや。エヽ忝ない／＼。コリヤ、姐よ、小父が惡い事は云はぬ。爰へおこせ。

まつ　怖いわいなう。

六　怖い事はない、おこせ。

ト無理に手を入れ、取らうとする。お松、振り放し、砂を拋る。六の目へ入る。

アイタヽヽ、こりや、目へ砂を入れ居つた。エヽサア、早うその金をおこせ。

まつ　アレエ。

ト逃げ歩く。六、目を押へながら、追ひ廻す。トヾお松、下手へ逃げて入る。六、後より追ひかけ入る。と

チョン／＼、返し。

造り物、淺黄幕切つて落す。上手、薄、よき所へ、人出入りする稲叢、向う黒幕、但し黒蓋、凄き蟲入りの合ひ方にて、道具納まる。

トお松、懐を押へ、走り出る。

まつ　祖父様いなう／＼。

トうろ／＼捜し、入る。と六、追ひかけ出て

六　エヽ小びつちよめは、どこへ逃げやがつたか知らぬ。

ト探つて、捕へ

コリヤ、小びつちよぢや。コリヤ、怖い事はない、小父ぢや小父ぢや。

トまた逃げうとするを、六、口を押へて

喧ましう云ふな。怖い事はない。この金を小父にくれると、われが好きな物買うてやる程に、爰へ出せ。

まつ　否ぢやわいなう。

六　エヽ惡い合點ぢや。好い物を買うてやる程に、小

父に預けて置きや。
まつ　否ぢやわいなう。
六　エヽ、片意地な小びつちよめ。早う出さぬと痛い目に遭はすぞよ。サア、それでも出さぬか。
ト薪ざつぽにて叩く。
まつ　痛いわいなう。
トお松、隙を窺へ、振り切り、逃げる。六、うろたへ
六　ヤア、また逃げさらした。小娘めと云ふものは、手ばしこいものぢや。
ト薪ざつぽ叩き廻す。お松、逃げる。六、うぬと追ひかける。トゞお松、稲叢へ逃げ込む。
この稲叢へ
ト稲叢へ入らうとする。中より、六を切り返す。
ハアヽ。
ト六、廻り、出る。ト本釣り鐘、合ひ方、替つて、中より、島の小平次、丹前に簑を着て、頬かむりして、財布の紐を口に啣へ、お松は財布の紐を手に持ち、付いて出て、向うへ連れ出て、財布を撫でて見て
小平　こりやコレ、凡そ百兩。
ト六、起き上がつて

六　その金を
ト取りにかゝるを、ポンと切り、この刀引く途端に、お松へ當る。其まゝこける。小平次、恟りして
小平　南無三、手が外れて。いづれの誰れかは知らねども、手詰めになつたこの金、暫らくおらが借りましたぞや。
トこなしあつて、拝む。ト足音するゆゑ、金を懐へ入れ、刀の鞘を捜せど知れぬゆゑ、頬冠りを取り、これに巻き、差して、行かうとする。
宗右　孫やい〳〵。
ト宗右衛門、呼び〳〵、氣狂ひのやうになつて、捜し出る。小平次、摺れ違ひ、花道へ行く。向うよりお徒、世話女房の拵らへにて出て、小平次に行き當り
かち　こちの人ぢやないか。
小平　女房どもか。
かち　今夜の首尾はえ。
小平　上首尾ぢや。
トこの時、宗右衛門、探り〳〵、提灯にて、お松を見て
宗右　ヤア、こりや、孫めが。
ト恟りする。小平次、提灯へ石礫打つ。ト提灯落ちる。

ト宗右衛門、また悔り。お梶、行かうとする。コリヤと云ふ心にて押へる。宗右衛門、死骸を抱いて

孫やい〳〵。

ト呼び活ける。この見得、三方よろしく、　幕

六つ目　小平次内の段

役名――富澤十内。金左衛門妻、渚。小平次女房、お梶。同母、お笘。小松屋宗右衛門。同一子、宗七。庄屋、太作。年寄り、五郎兵衛。船頭、綱七。同、灘八。同、笘六。千草姫。宗七女房、お早。小倉兵右衛門。船頭、島の小平次。

造り物、平舞臺、納戸、赤壁、上下とも、障子屋體。神棚、下手、丸太格子。隣柿の木の唄にて、幕、開く。

ト婆お笘、箒にてそこらを掃き居る。娵お早、襷がけにて膳、椀を拭き居る。女房お梶、神棚へ造酒徳利を供へ居る。この模様よろしくある。

とま　エヽ、又しても〳〵、間があると、二人ひッつくがな。マア、一體今日は、なんぢやと思うて居る。今度、小平次が、三千兩の船が難船したお咎めで、小平次は牢舍ぢや。命も危ふいと思うて居たが、云ひ譯も立つて、今日戻るのぢや。そこで、家内の祝ひ事に、内を掃除して、仲間の衆へ、喜び酒を進ぜるのに、それにくだ〳〵、する事はせずに、いちやついたり、引ッついたり、エヽ、忌々しい、けたいが惡い。

はや　コレ、母さん、其やうに云はしやんすけれども、わしも最前から、精出して居たので、餘りしんどさに、休んで居るを、其やうに呟ましう、云はしやんす事はないわいなア。

とま　エヽ、又しても〳〵、つべこべと、ようしやべる衒妻め。おのれのやうな奴は、どうしてくれう。

ト箒にて叩かうとする。

かぢ　コレ申し、危ない。もうようござりますわいなア。

とま　エヽ、放しやいなう。

ト行かうとするを、お梶、止めて

はや　コレ、お梶さん、止めずと置いて下さんせ。母さんの腹の癒えるやうに、さして下さんせ。

とま　エヽ、まだあのやうに、親に口答へ。コリヤ、なんぼうおのれが、口悧巧に吐かしても、おのしらは、小平次の足かぢりぢや。又、小平次も小平次ぢや。養子にやつた者を、なんぢや、ちつと樣子があると云うて、あゝ云ふ

　ト宗七を指さして

あのやうな、ごくに立たずの喰らひ拔きを、內へ連れて戾つて

　ト又お梶を見て

エヽ、どこの馬の骨やら、牛の骨やら知れもせぬ者を、內へ踏込んで……喰ひ潰しども養うて、なんの役に立つ事ぢや。キリ〳〵拋り出したがよいわい。

はや　コレ〳〵母さん、其やうに、拋り出す〳〵と云はしやんすけれど、爰は、兄さんの內ぢやぞえ。出て行つてよくば、お前が出て行かしやんせいなア。

とま　なんぢや、この親を拋り出されるなら、拋り出して見い。

はや　出て行かしやんせ。

とま　おのれ、出て行け。

　ト摑み合ひ、せり合ふ。宗七、お梶、止めて

かぢ　マア〳〵母さん、ようござりますわいなア。これはしたり、お早さん、どうしたものぢやぞいなア。常々から、母さんの心は、知つてゐやしやんすぢやないかいなア。

宗七　申し、お前さんのお腹立ちは、御尤もではござります。もうどうぞ、御料簡なされて下さりませ。

とま　エヽ、構うて下さるなや。あのやうな、役に立たずは、わしが又、ちつと、意見をしてやる。そこ退かしやれ。

かぢ　マア〳〵、ようござりますわいなア。

はや　お梶さん、此まゝ拋つて置くと、又しても親甲斐に、無理を云はしやんすゆゑ、わしが又ちつと、意見をするわいなア。

　ト行かうとするを

宗七　これはしたりお早、どうしたものぢやいなう。好い加減にしやらぬか、わが身が、なんのかのと云ふと、いつもわしやお梶さんの事が出る。

はや　サア、それぢやに依つて。

宗七　サア、それなれば、默つて居ても。明らさまに云やると、わしは、爰に居られぬ。

　ト宗七こなしあつて
母者人のお腹立ちは、御尤もでござります。これから隨
分、野良もかはかず、又、お前樣には、孝行に致します
るゆゑ
かぢ　只今のは、みな惡うござりまする。
宗か　どうぞ、御堪忍をなされて下さりませ。
　ト兩人、泣いて詫びる。
とま　そんなら、なんと云やる。これから、野良もかはか
ず、精出して孝行するゆゑ、もう料簡して、くれと云ふ
のか。
宗か　どうぞ、御料簡を。
とま　エヽ、お早めが口答へと云ひ、こなた衆の不働き、
料簡のならぬところなれど、今日はめでたい喜びゆゑ、
料簡してこます。この後は、聞く事ぢやござらぬぞや…
…コレ、今のやうに云うたは、嫁女を思ふゆゑぢや程に、
惡う聞かしやるなや。
か宗　エヽ、有り難う存じます。
はや　母さん。
とま　なんぢや。
はや　エヽ、お前はあまり。
　ト行かうとするを
宗か　これは又、しつこい。
　ト押へる。
とま　なんぢや／＼。びこしやこさらすが最後、おのれが
庇ふ二人の奴等を、ぼい擲るぞよ。ムウヤレ、忙しやの
忙しやの。
　ト云ひ／＼立つて、向うを見て
この又、小平次めも、もう戻りさうなものぢやが。
　ト捨ぜりふにて、内へ入り
サア／＼のら達、掃除も濟んだら、膳も椀も、みな直し
たらよいわい。
宗か　ハイ／＼。
　トそこらを片付ける。
とま　ヤイ／＼娘、われも奥へ行て、何やかやの、用意を
して置け。
　ト云へど、お早、返事せぬゆゑ
エヽ、又おのりや、拗ねさらすか。土性骨を、嬌め直し
てやらうか。
　ト行かうとするを、兩人、止め
宗か　ハテマア、もうようござりまする。

ト止めるを、振り切り、簪で叩かうとてるを、止めて、お早に、奥へ行けと云へど、立たぬゆゑ、無理に連れて、二人、奥へ入る。跡にお笘、いろ〱捨ぜりふあるうち、向うより渚、旅の形にて出て、門口へ來て、内へ入らうとすると、お笘、お早と思ひ、叩かうとする。

とま　ヤア、こなさんは。

渚　私しは、旅の者でござります。

とま　その旅の者が、此方の内へござつたは。

渚　最早、暮れに及びましたれば、お宿の御無心。

ト　お早、奥より出て、渚の顔を見て

はや　ヤア、あなたは。

渚　ヤア、其方は。

はや　思ひがけない。

ト　云はうとして、お笘の居るゆゑ、押へて

渚　イヤ、知らぬ〱、ついに見た事もない女中。

はや　それでも。

渚　ハテ、どこにどう云ふ、掛りがあらうやら知れぬ程に、必らず麁相云はしやるな。

ト　押へて

ハテ、麁相な、人ぢやなう。

はや　ハテマア、似たお人も、あるものぢやなア。

ト　お早、思ひ入れよろしくあるを、お笘、見て

とま　なんぢややら、ごて〱とした、物の云ひやう……コリヤ娘、一體、あの人は、近づきか。

はや　ハイ。

ト　云はうとするや、渚、押へる。

イヽエ、知らぬお方。

とま　アヽ嬉しや、それでちつと落ちついた。また居候ふが來たかと思うて、大抵心遣ひぢやなかつた。そんなら、いよ〱お客ぢやな。

はや　どうぞ、泊めてあげて下さんせ。

渚　オヽ、それ〱、いま申しまする通り、何卒今宵の一宿を。

とま　オヽ、泊めませいでかいなア〱。サア〱これへ、お越しなされませ。

ト　渚、ズツと入り、上手に住ふ。

コリヤ、お茶を上げいよ。

渚　イヤ〱、お構ひ下されますな。

とま　構はねばなりませぬ。サア〱、お茶を上げませう

……コリヤ、お煙草盆を上げぬかいやい〳〵。コリヤ、娘、娘、エヽ、氣の付かぬ、事ではあるわい。

ト煙草盆を前に置き

コリヤ娘、おれは奥へ行て、何やかやの、拵らへをせにやならぬ程に、お客様も、奥へ連れまして行て、飯も上げて、隨分氣を付けよ。

トまた表へ出て

このマア小平次は、もう戻りさうなものぢやが、何をして居る事やら。

ト内へ入り

コリヤ娘、いま云うた通りに、お氣を付けよ〳〵。

ト云ひ〳〵奥へ行かうとして

コリヤ、飯も上げて、風呂へも入れまして、よいか〳〵、コリヤ、飯も入れて、風呂も上げませや……オヽ、しんど。

ト云ひながら奥へ入る。ト後、合ひ方になり、お早、渚の前へ手を支へ

はや　奥様、おなつかしうござります。

トこれにて、渚、ズッと立つて、奥へ行かうとする。

これは奥様、お詞もござりませぬは、成る程、御勘當を受けました私しなれば、詞も交さぬとの、思し召しでござりませう。この度、殿様の御最期と承はりまして、女でこそあれ、敵は何處、如何なる奴かは存じませねども、草を分けて詮議し出し、旦那様の御無念を、晴らさんと存じ居ります。この上のお情には、どうぞ御勘當を。

渚　赦す事はならぬ。

はや　エ、

渚　一つの功の立つまでは。

はや　すりや、一つの功さへ、立てたれば。

渚　その時こそは、元の主從。

はや　エヽ、忝ない。

渚　マア、それまでは。

はや　旅の女中。

渚　サア、御案内。

はや　斯うお越しなされませ。

ト唄になり、兩人、氣味合ひあつて、奥へ入る。

〽沖に見えるは肥後さまのえ、それ〳〵船よ、紋は九ッ、九曜の星。

トこの唄にて、向うより庄屋太作、年寄り五郎兵衛、後より小平次、續いて、船頭藤六、苫六、綱七、梶六、

みな〳〵花道、よき所に立ちとまり

船四　コレ〳〵、ひよろついて

庄屋　怪我を、せまいぞや〳〵。

小平　滅多にこけて堪るものかい。

綱七　時に、お庄屋様もお年寄り様も、今度は大きな、お世話さまでござりました。

五郎　イヤ〳〵、なんの禮には及ばぬ。おりや、こんな世話をするが、大好きぢや。また、外の者と違うて、ナウ太作どの。

太作　オヽ、それ〳〵、日頃から、正直正道な小平次、早う済むまいと思うたに、思ひがけなう済んで、この庄屋も喜び。

五郎　定めし、こなた衆も、喜びであらうなう。

灘六　イヤモウ、友達中のこの小平次、思ひがけない今度の災難。

綱七　首尾よう済みましたも、あなた方のお蔭。

船四　有り難うござります。

太作　ところで、めでたう、年寄りがきついはずみで、どてつぺんから、足の先まで酔うたてや。

小平　そこで私が、ひよろつくと云ふものぢや。これはこれは、どなた様にも〳〵、大きに御苦勞になりまして、有り難うござりまするでござりまする。喜び居るでござりまする。

太作　イヤモウ、小平次も、嬉しいと思うたからで、ゑらう酔うたな。

船四　酔うたな〳〵。

小平　イヤ、醉ひは致しませぬが、顔が、クワツ〳〵として、足が、ひよろつくばかりぢや。

灘綱　ゑらい負け惜しみなア。

皆々　ハヽヽヽ、ヽヽ。

灘六　時にお庄屋、お年寄り様、爰は往来。マア、小平次が内へ。

五郎　とても事に、小平次を、送つてやりませう。

太作　内へ入るや否や、小平次がゑらう嬶をば、久し振りの褒め〳〵を、算用するであらう。アノ茲な畜類め。

灘六　また庄屋さまの、例の悪口か。

五郎　時に、行きませうか。

五人　お庄屋様。

庄屋　身に附いて、斯う參れ。

ト思ひ入れにて云ふ。皆々

皆々　ハ、ハ、、、、、、。

ト内へ入り

太作　サア〳〵、戻つたぞや〳〵。

ト云うても、誰れも内に居ぬゆゑ

なんぢや、こりや、誰れも居ぬ。用心の悪い事ではあるわい。

小平　ドレ、あなた方へ、私しがお茶を。

ト立たうとするな

太作　ア、イヤ〳〵、打ッちやつて置いた〳〵。

ト自身に茶を酌み、盆に載せて

サア〳〵、お茶ぢや〳〵。

皆々　これはお庄屋様、憚りでござりまする。

トみな〳〵呑む。

網七　時に小平次、早速尋ねたい貴様の事。

灘六　われが生れは、この島の生れゆゑ、そこで、島の小平次。

笘八　これまで、どのやうな大じけがあつても、只の一度、仕損ぜぬ、船頭仲間で船玉と、名取りの小平次。

梶六　思ひがけない、今度の難船。

網七　これにはなんぞ、様子のある事。

灘六　コレ小平次、その様子を、おいらに聞かして

四人　くれぬかい。

小平　わいらも、船頭を渡世にしながら、味な事を尋ねる奴等ぢや。別になんの、難船をさしたい事はないが、そこが、彼の雷の長生ぢや。

船四　ナニ、雷の

皆々　長生とは。

小平　ハテ、天災と云ふ事ぢや。

船四　何を云ふぞい。

トこの時、庄屋、大きな聲して、手を打ち

太作　ムウ、さうだ。

ト皆々、恟りして

皆々　エ、、恟りするがな。

船四　庄屋どん、どうぞさつしやつたか

太作　イヤ〳〵、外の事ではないが、金儲けの手ぢや。

五郎　なんぢや、金儲けの相談ぢやとは、そりや、耳寄りぢや。

五人　して、その話しは。

太作　今日、お代官様の仰せには、大守兵庫と云ふ、家老があるぢや。その娘とやらの云ひ號け、なんとやら云ふ

人ぢやわい。
トちよつと考へて
ムウ、さうぢや、祝言を嫌ひ、隼人と云ふ浪人者、在所
を尋ねに行たといなう。
皆々　ハテナア。
太作　その犬守とやら云ふ人の、娘の姫を尋ねて、連れて
行たら、褒美は、望み次第との事ぢやが、なんと、好い
相談であらうがの。
ト此うち小平次、居眠り居る。
悦六　それは、好い金儲けの相談ぢや。
太作　まだ〳〵、ある〳〵。
皆々　まだあるか。
五郎　こなた、ゑらう買ひ込んだの。
太作　住吉の道に、生ひ茂つた、松の木があるワ。その松
の隣に、稲村があるぢや。その稲村の中から、毎晩、追
剝が出て、人を惱ますげな。
皆々　ハテナア。
太作　昨日の晩にも、女の子が、金を持つて居たを、切り
殺したげな。
皆々　惡い奴なア。

太作　そこで、お代官樣の仰しやるには、その追剝に、繩
をかけて、連れて出たら、これも亦、ゑらい褒美ぢやと
いなう。
トこの話しのうち、小平次、こなしある。
皆々　そりや、巧い事ぢやなア……時に小平次、こりや、
好い金儲けぢやが、この相談は、どうあらう。
ト矢張り居眠り居るを見て
綱七　これはしたり、小平次、しゆんだものぢやなア。
皆々　目を覺ませいやい〳〵。
ト搖り起す。小平次、こなしあつて
小平　オイ〳〵。
ト起きて
皆さん、最前から、なんぞ面白い話しでもござりました
か。
五郎　エヽ、何を云ふぞい。最前からの話しを、こなたは、
聞かぬか。
小平　イヤ、聞いたか聞かんかは、知りませぬが、あんま
り眠たさに、ついトロ〳〵とやつてのけました。どなた
も、お免しなされませ。
太作　聞かねば、云うて聞かさう。斯うぢや。お尋ね者の

姫と、また人を殺して金を取つた、追剝に繩をかけて、
お上へ差出したら、ゑらい褒美の金になるとの事ぢやわ
いの。
五郎　この相談に乘らば、褒美は、分け取り。
灘六　榮燿榮華は、心任せに。
梶六　旨い物は、喰ひ次第。
綱七　この相談は
皆々　どうぢや。
小平　そりや、好い發種ぢや。
皆々　ナニ、好い發種とは。
小平　ハテ、措かんせと云ふ事ぢや。
皆々　また口合ひかい。
小平　モウ／＼、其やうな非義非道な事は止しにして、隨
分神佛を祈つて、未來を助かるやうにするが、この身の
爲。
太作　若いのに、ゑらう無常氣になつたなう。
年寄　そんなら、非道な事は、取措いて
綱七　小平次を見習うて
灘六　神佛を、信心せうわい。
五郎　時に、餘ッぽど長話しをしました。もう、歸りませ
うか。
船四　そんなら、わしらも送りませう。
太作　それは、御苦勞々々。
　ト行かうとする。
小平　これは、どなたさんも、なんの愛想もござりませぬ。
マア、御酒一つ、お上がりなされて下さりませ。
太作　イヤ／＼、また今度、馳走になりませう。それまで
は、預けて置きます。
小平　左やうなら、今日はだん／＼と、お世話になりまし
て、有り難うござりまする。
太作　なんのいなう。
小平　左やうなら、お庄屋、お年寄り樣、皆の衆。
船四　そんなら、小平次。
小平　ようござりました。
皆々　さらばでござる。
　ト唄になり、皆々、入る。
小平　これは／＼、どなたも、何もお構ひも申さず、大き
に、御苦勞さまでござりました。
　ト云ひながら、内へ入つて
ヤレ／＼、アヽ、嬉しや／＼、誠に思ひがけない今度の

心遣ひ。めでたう済んで、ヤレ嬉しやと思うたら、ぶらう疲れが出て、足も腰も、痺れるやうな……やつとまかせ。

ト座り、あたりを見て

幸ひの人絶え。

ト粮米櫃を開かうとする時、お苫、出て、顔見合せ、こなし。

ぶらう草臥れたわい。ドリヤ、一寝入りせうか。

とま　オヽ、コレ／＼小平次、いま戻りやつたか。

小平　オヽ、母者人。

とま　コレ小平次や、早速こなたに、云ふ事があるわいの。

小平　云ふ事とは、そりや、なんでござりまする。

とま　コレ、金儲けの相談ぢやわいの。大守兵庫と云ふ人の娘、千草姫と云ふのがあるげな。其方、知らぬか。

ト小平次、思ひ入れあつて

小平　ハヽヽヽ。何を母者人が、けたゝましい。其やうなお姫様を、知らうやうがござりませぬが、それが、どうしました。

とま　サア、その千草姫と云ふ娘が、このあたりに、うろついて居るげな。この娘を、お上へ連れて行つたれば、一廉の褒美ぢやげな。なんと、詮議して、訴人をして、わが身と二人、褒美を二つ山にせうぢやないかいなう。

小平　わしは、左やうな事は知りませぬ。

とま　知らぬゆゑ、云うて聞かすのぢや。金儲けぢやが、どうぢや。

小平　かけ構はぬ余所の事、拋つて置いたが、ようござりますわい。

とま　そんなら金儲けは、否か。

小平　果報は、寝て待てぢや。

ト寝ころぶ。

とま　エヽ、これはしたり、果報は、目の前に見えてあるのに……コレ、小平次いの／＼。

ト小平次、よく寝入る。

コレ、小平次、起きやいなう。コレ、それが否なら、まだ外に、好い金儲けがある。それはの、人を殺して、金を取つた、盗人があるげな。それでも大事ない、訴人したら、金儲けぢやないか。小平次々々々。

ト云うても、起きぬゆゑ、さし足にて粮米櫃を開けようとする時、小平次、寝返る。これに吃りして、飛び

退き、思ひ入れあつて、また櫃の側へ寄り、開けようとする時、歩き出て

歩き　イヤ、婆樣、庄屋どのが、こなたを、急に呼んで來いと仰しやる。サア、早うござれ。

とま　エヽ、そこどころぢやないわい。

歩き　それでも、庄屋どのが、いま連れて來いと、云はしやつたわいの。

とま　いま行くけれど……ちよつと爰に。

トまた櫃の側へ行かうとする。

歩き　サア、マアござれいなう。

ト無理に引ッ立て、入る。後、合ひ方になり、小平次、起き上がり、あたり見廻し、こなしあつて、粮米櫃を開け

小平　定めし、御窮屈にござりませう、先づ〳〵これへ。

ト千草姫、出て

千草　出ても、大事ないかや。

小平　大事ござりませぬ。誰れも居りませぬ。御ゆるりとなされませ。サア、先づ〳〵これへ。

トあたりを手拭にて拂ひ

御窮屈にござりませうな。

千草　ほんに、いつぞや隼人さまの御最期より、所々方々とさまよひしを、思ひがけなう其方に出逢ひ、それより、淺からぬ夫婦の心遣ひ。なんと禮を云うてよからうやら、死んでも、忘れはしませぬ、嬉しうござるぞや。

小平　これは又、どうしたものでござりまする。あなた樣の御親父樣には、御恩を受けたる私し。今あなた樣の御難儀を、お世話申さいで、なんと致しませう。ちつともお氣遣ひなされますな。コレ、私しの商賣の、大船に乘つたやうに、思うてござりませ。

千草　エヽ、嬉しうござる。それにつけても、たゞ心にかかるは、隼人さまの御最期。只の一度も枕を交さず、別れたかと思へば、自らは、いつそ死んでしまひたいわいなう。

小平　これはしたり、隼人さまの御最期。モウ、せう事がござりませぬ。ない昔ぢやと、お諦らめなされませ。

トこの前よりお早、出かけ居て、この時出て

はや　姫君樣、お久しうござりまする。

ト小平次、恟りして、千草姫を隱す。

イヤ、私しでござりまする。

ト千草姫、お早を見て

千草　其方は、腰元の早瀬。
小平　ムウ。すりや、妹とお姫樣は。
はや　わたしが傍には、お主樣。
小平　すりや、其方も。
はや　兄樣も。
千草　思ひがけない。
小平　變つた所で。
三人　これはしたり。
　ト三人、よろしく思ひ入れある。
はや　委細の樣子は、承はりました。姫君樣には、いかい御苦勞をなされましたなア。
小平　其方も、姫君がこれにござるので、定めし、嬉しからうな。
はや　イヤモウ、如何なされたかと、案じてばかり居りましたに、ようマア御無事で、お出でなされましたなア。
千草　この上ともに、其方衆を、頼むぞや。
はや　オヽ、お世話申さいで、なんと致しませう。
千草　それは、嬉しうござるわいなう。
小平　時に妹、お姫樣へ、お膳を差上げい。
はや　アイ〳〵。そんなら奥へ行て、御膳の拵らへを、致して參じませう。
小平　早う〳〵。
はや　アイ〳〵。
　ト唄になり、入る。この前、お苫、戻り、門に窺うて居る。
小平　ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。妹が、御膳の拵らへを致しまする間、御窮屈なれど、人目にかゝらば、お身の上。又々、暫らく。
千草　よきに其方を、頼みますぞや。
小平　ハテ、ようござります。先づ〳〵。
　ト千草姫を忍ばせ、蓋をして
斯うして置けば、見咎められる氣遣ひはない。ドリヤ、奥へ行て、夜食の扶持に、ありつかうか。
　ト唄になり、入る。お苫、内へ入つて、あたりを見て
とま　いま表で聞くとも知らず、小平次めが、千草姫を匿まひ、この粮米櫃へ。
　トあたりを見て、こなしあつて
さうぢや。この櫃を代官所へ。
　ト櫃に手をかけ、持たうとして、重く、動かぬこなし、いろ〳〵あると、奥よりお早、膳を持ち出て

はや　コレ母さん、お前、何をして居やしやんす。
　　トお笘、知らぬゆゑ
　コレ、母さん〳〵、コレ、母さん。
　　ト脊中を叩く。
とま　エヽ、憫りするわい。
はや　お前、爰に、何して居やしやんす。
とま　ヤア。
　　ト憫りして
　イヤ、おれが、爰に居るのが。
はや　爰に居るのはえ。
　　トお笘、詰まつた思ひ入れにて、お早が持つて居る膳を見て
とま　コリヤ娘、その膳は、誰れに喰はすのぢや。
　　ト憫りして
はや　エヽ。
とま　イヽヤサ、誰れに喰はすのぢや。
はや　アノ、これかえ。
とま　それは。
はや　これは。
　　トこなしあつて

　オヽ、わしが。
とま　なんぢや。われが喰ふのぢや。
　　ト膳を見て
　途方もない奢りぢやな。われは、孝行な者ぢや。どうぞ、この膳は、母さんに喰はせい。
はや　エヽ、滅相な。こりやお前に、喰はす事はならぬわいな。
とま　なんぢや、おれに喰はす事はならぬ。不孝な奴等ぢや。悪い事は云はぬ、おれに喰はせ。
はや　ならぬわいなア。
とま　おこせいやい。
　　ト取りにかゝるを、渡すまいと、いろ〳〵せり合ふと、奥より宗七、出て、中へ入る。これにてお早、奥へ入る。続いてお笘、追つて入る。跡に宗七、残りて
宗七　なんの事ぢや。とんと氣狂ひの沙汰ぢや。
　　トこの時お早、奥より出て
はや　エヽ、とつとモウ、母さんの意地の悪いには、困るわいなア。
　　ト膳を持つて、座る。
宗七　えらう、せり合うてぢやなア。

はや　エヽ、誰れかと思へば、宗七さま、爰にかいなア。お前、また爰に居るなら、居ると云うてくれたがよいに、お前も意地の悪い。

　ト抓る。

宗七　アイタヽヽヽ。

はや　誰れに、逢ひたいえ。

宗七　ハテ、逢ひたい人に逢ひたい。

はや　それでお前、わたしへ、済むのかいなア。

　トこの時、奥よりお眷、出て、様子を見て居る。

宗七　済むも済まんも、お前の心に、問うたがよい。

はや　コレ宗七さん。

宗七　なんでござります。

はや　エヽ、お前はなア。

宗七　わたしかえ。わたしは幼少の時に、小松屋へ養子に行て、今度ちと様子があつて、今は兄者人の掛り人。その親を以て、其方とは兄弟。

はや　エヽ、とツともゥ、その兄弟も、誠の兄弟ではないゆゑ、女夫になつても、大事ないぢやないかいなア。

宗七　さればなア、どうあらうやら。

　ト少しザつとせしこなし。お眷、側へ摺り寄つて

はや　コレ宗七さん、もう堪忍しておくれいなア。

宗七　そんなら、あやまつたか。

はや　アイ。

宗七　そんなら、堪忍してやらうぞ

はや　一體お前は、聞えぬお方ぢやぞえ。

宗七　なんで、わしが聞えぬぞ。

はや　お前は、あの三吉野さんと、譯があらうがな。

宗七　もう悋氣をするか。

はや　せいぢやいなア。

宗七　成る程、これには譯がある。

はや　その譯と云ふはえ。

宗七　その譯は。

　トあたりを見て

コレ。

　ト囁く。

はや　ムウ。そんなら……それで、落ちついたわいなア。

宗七　おれも、落ちついた。

　ト引き寄せ、懐中へ手を入れる。

はや　オヽ、こそばい。

宗七　追ツつけ、子を拵らへねばならんぢやないか。

はや　さうなつたら、嬉しいけれど。
宗七　女房ぢやぞや。
はや　こちの人。
　ト抱きつく。この前よりお筈、後で前の膳を取つて、喰つて居る。この時、飯を咽喉につめて
とま　ム、ウ。
　ト反り返る。兩人、これにて恟りして
はや　アレ、母さんが。
宗七　ソレ、水を持つておぢや。
　ト膳を見て
はや　エヽ、この膳をたべてからに、つツとモウ。
　ト宗七、土瓶の口から茶を呑ます。お早、腹立てるこなしにて
エヽ、腹の立つ〳〵。
　ト云ひ〳〵、脊中を叩く。これにてお筈、咽喉の通りしこなし。お早、宗七、奥へ入る。
とま　ア、嬉しや〳〵、すんでの事に、飯と心中をせうとした。オヽ、術なや〳〵。
　ト糧米櫃を見て
なんぼ術なうても、これさへあればよい。

　ト持たうとして
こりや、余ほど重たいわい。誰れぞ、來てくれぬかいなア。ヤア、ウンとこな。
　トまた持たうとして、へたり
こりや、おれ一人ではゆかぬわい。オヽ、さうぢや、此まにして置いて、代官所へ、注進して來う。さうぢやさうぢや。
　ト裾を引ツからげ、思ひ入れあつて、下手へ入る。ト暮れ六ツ、鳴る。
〽既にその日も暮れ近く、納戸の内より小平次は、何か思案の一工風、お主の身の上思ひやり、辛き浮世も苦にならず、行燈の灯をかき立てゝ。
　ト小平次、奥より出て
小平　いま奥で話しを聞けば、母者人が何かの樣子を氣取つたわい。こりやモウ、この家にも置きまされぬわい。まさかの時は、女房が姫君に、よう似たを幸ひに、ムウ。
　トこの前よりお梶、立ち聞きして居る。
とは云ふものゝ、町人の娘、よもや得心をしをるまい。こりや、一思案、せざならぬわい。
〽小首かたむけ一思案、女房お梶は夫の側にさし寄つて

かぢ　こちの人、小平次どの。
〽傍に恟り、そらさぬ顔。
小平　誰れかと思へば、そちや女房。いつの間に。
かぢ　最前から、爰に。
小平　すりや、様子は残らず。
かぢ　アイ。
〽アイとばかりにさし俯向き、暫し詞もなかりしが。
エヽ、聞えませぬ、こちの人。なぜそれ程の事なれば、連れ添ふ女房に、明かして云うて下さんせぬ。そりやお前、聞えぬわいなア、小平次どの。
〽そもやお前と斯うなつたは、なみ大抵の事かいな。二人が仲におまつと云ふ、子までなしたる深い仲、例へいづくの浦にても、一緒に夫婦二世の縁。それほど思うて居る者を、隠して下さんすとは、聞えぬわいなア／＼。
〽夫を思ふ女房の、貞節顔に顕はれたり。
小平　よしなき縁に繋がれて、辛苦のありたけ。まだその上に、お主の恩。
かぢ　お役に立てゝ下さんすか。
小平　アノ、命をや。

かぢ　アイナア。
小平　女房ども、なんにも云はぬ、嬉しいぞや。
かぢ　わたしが心の疑ひは、晴れたかえ。
小平　疑うて隠したは、おれが悪かつた。料簡してたも。
かぢ　なんのいなア。ほんに、それでわたしも、落ちついたわいなア。
〽理なき仲とぞ見えにける。神ならぬ身の預かりし、孫のおまつを先立てゝ、魂ひ抜けてうと／＼と、翼もがれし羽抜け鳥、やう／＼こなたに立ちどまり。
ト宗右衛門、出て
宗右　なんでも、このあたりぢやが……一軒、二軒、三軒目と、爰ぢや／＼。
〽爰ぢや／＼と門の口、立ち寄つて聲ひそめ。
御免なされませ。ちと物を尋ねたうござります。
かぢ　ハイ／＼、どなたでござります。
宗右　アノ、船頭の小平次どのは、こなたでござりまするかな。
かぢ　ハイ、成る程、小平次は、これでござりますが、どなたでござりまする。此方へ、お入りなされませ。
宗右　それなら、小平次どのゝ内でござりますか。アヽ、

ヤレ〳〵……イヤ、私しは、お梶が、知るべの者でござ
ります。
かぢ　ハイ、お梶は、私しでござりまする。どなたぢや。
此方へ、お入りなされませ。
〽何心なら門の戸明けて、顔見合せ。
宗右　ヨウ、わりや、娘ぢやないか。
かぢ　お前は。
〽と云ひたさは一ぱいに、心の内では飛び立つばかり、
夫の手前を思ひやり、不承不承に。
お前は父さん、折角ござんしたけれども、今日はちつと、
内は取込んで居る程に、また今度、出直してござんせい
なア。
宗右　ヱ、、おのれとした事が、折角尋ねて來たものを、
今日は去ねとは、胴慾ぢやわい。マア〳〵、内へ入つて
から。
かぢ　これはしたり、父さん、聞分けのない。マア、今日
はよしにして、また今度、ござんせいなア。
宗右　そんなら、どうあつても、去なねばならぬか。
かぢ　マア、去んで下さんせいなア。
トこの間、小平次、思案の思ひ入れ、いろ〳〵あつて
小平　お梶、表にござるは、誰れぢや。
かぢ　誰れでもござんせぬわいなア。
小平　マア、どなたぢや。
ト立つて見て
ヤア、お前は舅どの。お梶、わが身も、どうしたものぢ
や。折角お越しなされたのに、なぜ内へ入らせませぬの
ぢや。いま聞けば、今日は去なしやれのと、折角ござつ
たものを、愛想もなう、去なすと云ふ事があるものか……
……イヤ、大事ない〳〵。貧乏人の小平次、大身代の舅ど
の、疎遠にしたも、ちつと樣子あつての事。申し〳〵舅
どの、大事ござりませぬ。マア〳〵此方へ、お入りなさ
れませ。
宗右　そんなら入つても、大事ござらぬかた。
小平　サア〳〵、お入りなされませ。
宗右　そんなら娘、入つても、大事あるまいの。
かぢ　あのやうに申されすまる事なれば、マア此方へ、入
らしやんせいなア。
宗右　そんなら、御免なされや。
小平　サア〳〵、これへ〳〵。
〽夫の詞に心の嬉しさ、宗右衛門も打通り。

先づは聟どのにも、御機嫌のお顏を見まして、ナウ、女房ども。

かぢ　サイナア、父さんは、持病の癪が發りはせぬかと、常住、案じて居ましたわいなア。さうして、父さん、喜んで下さんせ。わたしら夫婦ながら、それは〳〵、達者で過ぎて、居ますわいなア。

小平　イヤモウ、疾にもお尋ね申します筈ではござりますれども、親の許さぬ忍び合ひ、あなたの手前、世間の思惑も、如何と存じまして、御無沙汰いたしました段は、お免しなされて下さりませ。それはさうと、此方の事ばかり申して、コレお梶、お茶を上げませぬかいの。

かぢ　アイ〳〵。

〽香煎こぼして酌んで出る、心の花香茶の花香。

父さん、お茶、上げませう。

宗右　ムウ。構やるな〳〵

ト宗右衞門、こなしあつて、茶を取る。

小平　時に聟どの、先づその斷りは、娘をあなた樣へ、お預け申しましたが、定めし、あなた樣のお世話でござりませう。惡あがきを致しますので、お前の手に合ひませず、大きに御厄介でござりませう。

かぢ　コレイナア、こちの人、そりや、云はいでも知れたわんぱく者。父さんも初孫ぢやと思うて、可愛がつて下さんせうなア。

〽云はるゝ心の苦しさは、胸に釘打つ如くなり。

小平　そして、おまつも、連れてお出でなされたか。何をして居やるやら

ト表の方を見て云ふ。宗右衞門、いろ〳〵こなし。

かぢ　また惡あがきがなして、居るのぢやあらうぞいなア。

小平　久しう來ぬゆゑ、内を忘れ居るであらう。

かぢ　道草をして、はぐれはせぬかいなア。父さん。

小平　彼奴とした事が、何をして居る事やら。

かぢ　こちの人、ちやつと見て來うかいなア。

小平　オヽ、さうぢや〳〵。

〽お梶は立つを引き止めて。

宗右　イヤ〳〵お梶、尋ねに行くには及ばぬ。孫は疾から、來て居るわいなう。

かぢ　アレ、父さんの惡洒落な。早う顏見せて、くれたがよいのに。

小平　すりや娘は、疾から來て居りますか。さうとも知ら

ず、ちよつと心遣ひをさして居たわい。
かぢ　さうして、おまつはえ。
小平　どれに居りまする。
宗右　サア、その孫はの。
かぢ　娘はえ。
宗右　孫は。
かぢ　エヽ申し、ちやつと
兩人　聞かして下さりませ。
宗右　その孫は……コレ爰に。
〽脊中に負ひし小風呂敷、夫婦が前に差出せば、合點ゆかずと風呂敷取上げ。
小平　この品を、娘とは。
〽手早くほどいて取出す着物。
この着物を、
かぢ　娘とはえ。
宗右　其方夫婦が、早う逢ひたい〳〵と云やる孫は、死んだわいなう。
兩人　エヽヽヽ。
〽聞いて驚く小平次夫婦、余りの事に詞も出ず、暫し呆れて居たりしが、やう〳〵に胸を押へ。

小平　舅どの、娘おまつは、死にましたとは、そりや又、どう云ふ譯で。
かぢ　コレ父さん、默つて居ては分らぬ。どう云ふ譯で、おまつは死にました。譯を聞かして下さんせ。コレ申し、父さん。
〽急き込む女房、小平次引きのけ。
小平　コリヤ待て。われが其やうに思ふも、無理ではなけれどな、親仁樣にも如才があらうか。マア、心を鎭めて、とんと樣子を、マア默つて聞いてゐい。
かぢ　アイ。
小平　マヽヽヽ、心を鎭めてゐい。
ト小平次こなしあつて
申し舅どの、死んだとばかりでは分りませぬ。その仔細を、お聞かせなされて下さりませ。
〽詰めかけられて宗右衞門、胸押鎭め、どつかと坐り。
宗右　思ひがけない孫が最期、驚ろくは尤もなれど、心を鎭めて、聞いて下され。
ト合ひ方になり
この度倅宗七が、御用金三千兩の難船、宗七に疑ひかゝり、是非に及ばず、先づ疑ひの晴るゝまでと、こなたに

預け、何卒宗七が災難を、助かるやうにと、八幡様へ願參り、その次手に、久しう逢はぬ孫を連れて、こなた衆にも逢はさんと、百兩の金を持たして來る道々、孫めが云ひ居るには、コレ祖父さん、今日は父さんや母さんに、逢ひに行くのか、この金を上げて、喜ばしやる顔を見たい嬉しいと、何がいそ〳〵先に立つて行き居る、コリヤコリヤ、その金を、われが持つて居て、落すと悪い、よしにせいと、云へども聞かぬわんぱく者、ア、まゝよ、彼奴が心任せにと、持たして行く道で、盗賊どもが金を見つけ、その金をおこせと吐かす。孫めに怪我をさしてはならぬと、威しの一腰、投げばあはてる盗賊ども、ごつちやになつて逃げ行く時、たうどう孫めを見失ひ、アア、怪我はしをらぬか、何處へ行き居つたと、あちらこちらと尋ぬれども、孫は見えず、南無三、孫を見失なうては、折角兩親に、逢はうと思うて來たものを、此まゝではならぬと、何が氣狂ひのやうになつて尋ねるところが、松の茂つた下に、稻村がある。なんでも命かぎりとて、提灯で捜す足元に、孫が死骸。これはと抱いて介抱して、藥を服ませどその甲斐もなう。祖父は、あるにもあられればこそ、いつその事に死んでしまはうとは思うたれど、イヤ〳〵、この事をこなた衆夫婦へ、知らせし上と、すご〳〵來たも、どうぞ孫めの、敵を取つてもらひたさ。その敵と云ふは、コレこの鞘。

　ト手拭にて刀の鞘を巻きあるを、出して

この鞘を握りつめて居たわいの。孫の敵、聟どの、敵を取つて下され。話しをするも、この胸が突ッかけて、苦しうござる……ア、、可哀さうな事を、しましたわいなう。

〽ワッとばかりに撲と伏し、前後正體なき居たる。小平次始終の話しを聞き、心に覺えの昨夜の仕儀、さては娘であつたかと、迷ふ心に證據の鞘。

小平　ムウ。すりや、この鞘を握りつめて。ムウ。

　トこなしあつて

アノ、この鞘を。

かぢ　そんなら昨夜の。

　ト云ふを押へて

小平　コリヤ、なんにも云ふな。

かぢ　それぢやと云うて。

小平　コリヤ、うろたへ者めが。

〽呵りつけられ、それぞとも、云ふに云はれぬこの場の

仕儀。形見の着物手に取上げ。
かぢ　コレおまつ、其方が大きうなつたら、祖父さんが、逢はしに來て下さんすと、その日の暮らしは苦にならず、思うた事も、みな仇事になつたわいなア。
宗右　斯う云ふ事の知らせにや、孫めが滅多無性に、兩親に逢ひたがつたが、大方、蟲が知らしたのであらう。死ぬる事なら疱瘡も、輕うせいでもよい事を、ならう事なら、この祖父と、なぜ替つてはくれぬぞいやい。日頃の信心もいらぬわい。エヽこの世に、神も佛もないかいやい。
かぢ　オヽ、道理でござんすわいなア。
宗右　娘。
かぢ　可愛い事を
宗右　したわいなう。
〽親子手に手を取り交し、歎くを道理と小平次も、胸に磐石血の涙、やう〳〵に溜息つき。
小平　アヽ、誠に、老少不定とは云ひながら、お年寄られた舅どのに、心遣ひのさせて、死んだ娘は不孝者。娘が敵、傍へいづくに居りませうとも、尋ね出しあなたのお恨み、我れ〳〵が娘の敵、やはか討たいで置かうか。コリヤ女房、何をめろ〳〵。マア、何は然れ、舅どのを奥へ連れまして、お氣休め、早う〳〵。
かぢ　其やうな、無理な事を云はしやんす。わたしが心も、ちつとは思ひやつて下さんせいなア。
小平　これはしたり、われまでが、其やうな事を云うては、猶親仁様のお歎き。早うお伴ひ申しや。
宗右　オヽ、それ〳〵、いつまで悔んでも、還らぬ事。コリヤ娘、せめては孫めが迷はぬやう、奥の佛間でお念佛を。
かぢ　其やうな事を云はしやんすと、猶悲しいわいなア。
宗右　そんならよいワ。おれが念佛申してやらう。われも一緒に、奥へ來い。
かぢ　アイ。
宗右　まだ、めろ〳〵と泣き居るわい。泣くなと云ふに。
かぢ　それでもお前、泣かしやんすもの。
宗右　どこに、おれが泣いて居る。おれは、泣かぬ。われも泣くな。
かぢ　アイ。
宗右　泣くない。
かぢ　アイ。

宗右　泣くなと云ふに……矢ッ張り泣いて、居をるかな。
ト泣く。
小平　ア、、思へば〳〵、この着物が、取りも直さず位牌となり。
宗右　生は死の元
かぢ　七難九危しと、云ふものを
宗右　たつた七つで
小平　無常の風に
三人　南無阿彌陀佛。
〽涙々に六つの袖、顔を背けて一間なる、佛間へこそは入りにけり。後見送りて小平次も、堪へ〳〵し溜め涙、ワッと叫びて搗と伏し、歎き半へ來かゝる月本、息を切つて驅け來たり。
ト源次郎、向うより出て
源次　小平次どの、一大事でござる。
小平　ナニ、一大事とは。
源次　小倉兵右衛門、姫君の詮議に只今爰へ。
小平　すりや、兵右衛門が。
源次　して姫君の、お身の上は。
小平　ムウ……コレ。
源次　すりや、この糧米櫃を。
小平　合點か。
源次　心得ました。
〽隙し合して源次郎、奥の間さして忍び入る。程もあらせず數多の捕り手、ばら〳〵ぱつと押取卷き。
ト源次郎、糧米櫃を脊負つて奥へ入る。捕り手大勢出て小平次を圍む。
小平　こりや、狼藉な、なんとなされまする。
捕手　ヤア、其方に詮議の筋あり。尋常に、繩にかかれ。
小平　イ、ヤ、繩かゝる覺え、曾てなし。又、理不盡に、繩をかけうなどゝなさるが最後、お役人とは云はせませぬ。詞の甘いうちに、キリ〳〵お歸りなさればよし、さもなくば、何奴此奴の容赦はないぞ、何を、ちよこ才な。
〽尻ひッからげ、身構へたり。
捕手　うぬ、手向ひ致すか。
ト息込む。
兵右　者ども、引け。
トこの時、捕り手、引くと、兵右衛門、野袴、ぶッ裂きにて、ズッと上手へ通る。小平次、思ひ入れあつて

小平　あなた樣は。
兵右　身共は、小倉兵右衞門と云ふ者。
小平　その兵右衞門さまが、手前に、何用あつて。
兵右　姫君のお迎ひ。
小平　なんと御意なされます。
兵右　犬守兵庫どの、姫君、千草姫を匿まひし由、兵庫どの、大きに喜び、この度、某に迎ひくれよとの仰せ。小平次とやら、定めし其方の心勞であらう。過分々々。先づ、一禮は追つての事。早く連れ歸らん。早々これへ、出してくりやれ。
小平　このお侍ひ樣は、何を仰せられますやら。高が私しは船頭、左やうな大身のお姫樣とやらを、匿まうた覺えはござりませぬ。外を御詮議なされませ。そりや、間違ひ〳〵。
兵右　ヤア、默れ。詞を下げ、申し入るゝに聞入れないな。
小平　イヤモウ、存じました事なれば、申しませうが、知らぬが證據でござりまする。
兵右　死太い奴。達てあらがはゞ、家内を家搜しするが、それでも知らぬか。
小平　存じませぬ。知りませぬ。
兵右　此奴に構はず、家内を、家搜し致せ。
捕手　ハッ。
ト奧へ行かうとするを、小平次、皆々を見事に投げて
小平　家搜しさす事、罷りならぬ。
兵右　うぬ、武士に向つて、手向ひか。
小平　オヽ、手向ひぢや。理不盡になさるゝと、お侍ひとて、容赦は致しませぬぞ。
兵右　ヤア、憎い奴。構はずと、繩打て。
捕手　ハッ。
トかゝるを、立廻り、此うち兵右衞門、捕り手二人を連れ、奧へ行かうとすると、奧より渚出て
渚　こりや狼藉。なんとなされます。
兵右　怪しい女、討つて取れ。
捕手　ハッ。
ト渚にかゝるを、ちよつと立廻り、トヾ顏見合し
渚　こなたは。
兵右　そちや、金左衞門が女房、渚。
トちよつと思ひ入れあつて
さてこそ〳〵。其方がこの家にあるからは、千草姫を匿

まひあるに相違ない。コリヤ家來ども、家搜し致せ。

捕手　ハツ。

ト渚を引き退け、行かうとするを、小平次、支へて、見事に投げる。

兵右　ヤア、又してもく、憎い下郎め。

小平　あばら家なれども、小平次が住家。理不盡に家搜しさす事は、マアならぬぞ。

兵右　意外な奴、いつそ。

ト兵右衞門、刀に手を掛けうとする。

十内　ヤレ兵右衞門どの、暫らくお待ちなされい。

ト富澤十内、野袴、ぶツ裂きにて、入る。

兵右　こなたは。

渚　兄上樣。

兵右　十内どの。

小平　先づく。

十内　罷り通る。

トこれにて上手へ通り、兵右衞門と居並ぶ。

兵右衞門どの、今日のお役目、御苦勞千萬。

兵右　お互ひでござる。

小平　して、十内さまが、私し方へお越しなされたは。

十内　其方に、吟味があつて。

小平　アノ、私しへ。

十内　如何にも……それは追つて。して、妹がこれへ參りし、その仔細は。

渚　ハツ、私し、これへ參りしは、兄上樣へお願ひ。

十内　敵討ちの、願ひであらう。

渚　すりや、その事を。

十内　疾にも承知いたし居る。その願ひは叶はぬ。

渚　エ、、、、。とは又、なぜでござりまするな。

十内　夫金左衞門の敵が、相知れたか。

渚　敵と云ふは、小倉兵右衞門。

兵右　ヤイく、默り居らう。此奴、血迷うて、さまぐの馬鹿を盡すがな。ハア、、さては夫、金左衞門、最期ゆゑ、氣が狂うたか、よし敵が、身共になつてやるまいものでもないが、跡目の立つべき、者があるか。

渚　サア、それは。

兵右　身共を討たぬか。

渚　エ、。

兵右　討たぬか。

渚　エ、。

兵右　滅多には討たれまい。あの、馬鹿な奴わい。ハヽ、ハヽ。

ト諸、こなし。十內、思ひ入れあつて

十內　某、今日參りしは、大切なる、三千兩の金子の儀について、わざ〳〵罷り越したる十內、敵討ちとは、そりや內證の儀。差當たつたる三千兩の詮議。小平次、いよいよ難船いたせしに、相違ないぢやまで。

小平　今日、お代官へ參り、其お咎めも濟んで、歸りましたこの小平次、何しに僞はりを申しませう。

十內　然らば後刻、とくと破船の樣子を。

小平　成る程、その夜の樣子を、詳しくお聞かせ申しまして、お疑ひを、晴らさせませう。

兵右　サア小平次、姫君を早くこれへ出さぬか。

小平　これは又しつこい。先程も申しました通り、知らぬと云ふに、相違はござりませぬ。

兵右　いよ〳〵知らぬな……よいワ。家來ども、先刻の訴人の者を、これへ。

捕手　ハツ。

ト立たうとする。お苫出て

とま　コリヤ小平次、もう叶はぬ。姫を匿まうた事を、眞直に云うてしまへ。

小平　コレ〳〵母者人、そりや、何を云ふのぢや。おりや、そんな事、覺えはないぞ。

とま　隱すない〳〵。慥かな證據は。

トあたりを見て

ヤア〳〵、最前まで爰にあつた、粮米櫃を、何處へやつた。

トうろ〳〵して云ふ。

十內　家來ども、その婆めに、繩打て。

捕手　ハツ……腕、廻せ。

とま　エヽ、滅法もない。わしぢやござんせん。コレ、あちのぢや〳〵。

ト小平次をと云ふ。

十內　ヤイ、僞はり者め、小平次が、覺えないを知りながら、褒美が欲しさに、お上を僞はる憎くい婆めが。其奴ぶち括れい。

捕手　ハツ。

ト十手にて叩く。

とま　アヽ、御免々々。

ト奥へ逃げて入る。

小平　サア、お侍ひ様、これで私しへのお疑ひは、晴れませうがな。
兵右　疑ひは晴れた。
十内　イヽヤ、まだ晴れぬ。
小平　なんと。
十内　汝が弟、小松屋へ養子に來りし宗七こと、大殿のお相方、三吉野と不義密通の致せし事、お聞きに達し、引立て參れよとの御意。
小平　すりや、弟宗七めが、殿のお相方、三吉野と。
十内　ムウ、狂ひ居る事、身共もよく存じ居る。サア小平汝、宗七を、これへ出せ。
　ト この時、宗七、奥より出て
宗七　イヤ、小松屋宗七、これに居りまする。
兵右　うぬは宗七、ハテ、無事であつたな。
小平　ヤ、弟、われはなア。現在、大殿のお相方の太夫どのと、不義をするとは、エヽ、見下げ果てた人非人ぢやなア。
宗七　コレ兄者人、これには、だん〳〵様子のある事。
　ト この時、奥よりお早出て
はや　その三吉野さまと、譯のない事は、わたしが、よう存じて居りまする。
　ト 云ふを、宗七、押へ
宗七　コレ〳〵、何にも云やるな。
兵右　エヽ、兩人の詞、合點が行かぬ。その仔細を云へ、仔細は、どうぢや。
宗七　サア、その仔細は。
兵右　早く吐かさぬか。
宗七　サア、それは。
十内　コリヤ〳〵宗七、三吉野が事を、存じ居るは、この十内只一人。サア〳〵〳〵、早く申せ。
宗七　成る程、この事を申し上げますれば、若殿様の御難儀と、包み居りましたが、只今兄者人の我れを人非人とのお詞で、云はねばこの身が立ち行かず。
　ト ちよつとこなしあつて
是非に及ばず、明らさまに申しまする。若殿様が、云ひ交してござる三吉野どのに、大殿、深く心をかけ、いろ〳〵なされても三吉野は心に從ひ奉らず、又、若殿と三吉野どのと、譯ある事が相知れなば、大殿の御立腹。所詮、若殿を生けては置き給はず。それゆゑ、三吉野どのと云ひ合せ、不義の相手はこの宗七と、云ひ觸らせし

譯はこの通り。今日まで包みしが、是非に及ばず右の譯。申し、兄者人、仔細と申すは、この通りでござります る。

十内　ホウ、天晴れ〳〵、若殿へ對しては大忠義。十内、感心の致したぞよ。

小平　すりや、三吉野どのと、譯ありしやうに見せしは、若殿のお身を、引受けん爲であつたか。ムウ、出かした出かした。それでこそ、小平次が弟、出かしたなア。

ト　この時、奥より宗右衛門出て

宗右　イヤ、申し、十内さま、何卒金左衛門さまの、敵討ちの儀は。

皆々　なんと。

宗右　金左衛門さま、御臨終の際に、奥樣へと、私しへの御遺言。

渚　その時、私しへはこの一書。

宗右　拙者へも、この書面。

渚　心ありげな、夫の遺言。

十内　遺言とあらば、開き見やれ。

宗右　ハツ。

ト　開き

渚　書き殘し候ふ一通、我れ、先達てお濱御殿に於て、若殿を目がけ、突きかけし鑓、急所にかゝり、無念ながら、一命の果し候ふ。

宗右　たゞ心にかゝるは、一人の悴あり。我れ、若年の砌り、奥女中に手をかけ、懷姙となり、月滿ちて男子出生、母は産後の惱みにて、この世を去る。

渚　それよりその男子、家中の思惑を憚り、不便ながら小平次が親、宗右衛門が門へ捨子となし、年月經て成長せしは宗七、何卒無緣にても宗七を、無事に取立て、跡目を繼がせ下されたく候ふ。

宗右　この儀を、くれ〳〵も頼み入り候ふ。たゞ迷ひの種となり候ふゆゑ、富澤十内どのへも、先達て密書に認め、頼み置き候ふ。この儀、くれ〳〵も好きに取計らひを、草葉の蔭にて、拜見仕るべく候ふ。宗右衛門どのへ、金左衛門。

渚　渚どのへ、くれ〳〵頼み置くべく候ふ。

ト　皆々、恟り、いろ〳〵こなし。十内、思ひ入れあつて

十内　金左衛門どの、奥女中に手をかけ、出生せしは宗七。

宗右　そんなら、この宗七であつたか。

はや　今の今まで
小平　我が弟の宗七と
宗七　神ならぬ身は
渚　知らぬも道理。
宗七　思ひがけない
渚　親子の對面。
小平　誠に、燈臺、元暗し。
六人　これはしたり。
〽双方一度に顔見合せ、呆れ果てたるばかりなり。
ト兵右衞門、いろ〳〵思ひ入れある。
小平　して、金左衞門どのゝ敵は。
渚　我が夫の御遺言。
はや　敵と云ふは
宗右　小倉兵右衞門。
宗七　すりや、敵は、兵右衞門であつたよな。
渚　夫の仇。
はや　旦那様の御讐敵。
宗右　お主の御無念。
小平　この上が助太刀。サア、立ち上がつて
皆々　勝負々々。

〽遁がさぬ勝負と、詰めかけたり。
兵右　コリヤ、待て〳〵。この敵討ちは、ならぬぞならぬぞ。
渚　ヤア、待てとは卑怯な。
皆々　後れたか。
兵右　イヤ、後れはせぬが、敵討ちが、餘り性急ぢや。
皆々　なんと。
兵右　成る程、斯うなつたれば、是非に及ばぬ。殘らず、云うて聞かさう。うぬらの云ふ通り、お濱御殿にて、手にかけたは、この兵右衞門。
皆々　さてこそなア。
兵右　コリヤ、其方達の志しにめでゝ、討たれてやりたいものなれど、今日は大切の役目、もし某が身に凶事あらば、うぬらが家は、斷絕ぢやぞや。
渚　例へ家は斷絕なすとも、遺恨重なる夫の敵、此まゝに歸さうか。
宗七　サア、立ち上がつて
皆々　勝負々々。
十内　コリヤ待て。この敵討ちは、今はなるまい。
皆々　とは又、なぜ。

十内　成る程、金左衛門が敵なれども、今日は、大切なる役目を蒙むりござる、兵右衛門どのに指でもさゝば、家は断絶。この十内も、切腹せねばならぬぞよ。
皆々　それぢやと云うて、
十内　ハテ、盲亀の浮木、優曇華増りの、時節があらう。
皆々　でも。
十内　マヽ、控へて居やれ。
皆々　エヽ、口惜しや。
〽歯噛みをなして無念の涙、兵右衛門は笑壺に入り。
兵右　ハヽヽヽ、コリヤ、大腰抜けの金左衛門め、それそれに余類の大馬鹿ども、現在、敵を目前に置きながら、討つ事ならぬと云ふは、ハヽ、不便な事な。アハヽヽ、ハ。ハテ、笑止千萬……ヤイ小平次、千草姫を匿まひながら、よくも身共を騙かつたなア。うぬがやうな奴は、いつそ。
ト息込むな
十内　イヤ、とくと實否を、糺した上にて。
兵右　成る程、それも尤も。
十内　小平次、奥へ参つて、詮議の残りし、三千両の申し譯。
兵右　千草姫の詮議。
小平　破船の樣子も
十内　糺すは奥で。
渚　現在、手に入る
皆々　敵をば。
ト行かうとするを、小平次、止め
小平　然らば、御両所様。
十兵　小平次、案内。
小平　斯うお越しなされませ。
ト唄になり、十内、兵右衛門、宗右衛門、奥へ入る。小平次、後へ思ひ入れあつて、續いて入る。跡に宗七、お早、渚の三人、残り、爰へお梶、出て
宗七　コレお早、エヽ、口惜しいわいなう。
はや　お道理でござりまする。
かぢ　氣遣ひなさるな。工風がござります。
三人　ナニ、工風がござりますとはな。
かぢ　その工風は。
ト囁く。雨人、思ひ入れあつて
宗七　すりや、小船に忍んで。
渚　縁の下に隠れ居て。

宗七　一つ鉦にて
はや　下よりグッと
清　兵右衛門を。
かち　コレ、必らず仕損せぬやうに。
三人　心得ました。
かち　首は金げおや。
三人　これより直ぐに。
かち　ちつとも早う。
三人　ハツ。
ト宗七、下手へ、清、お早、上手へ、バタ〳〵と行かうとするを
おち　コレ、静かに〳〵。
〽顔し合せて三人は、別れ〳〵に忍び行く。
ト三重にて、廻し。
造り物、舞台二重。上手、障子屋體。下手、浪板、小船一艘、出る事ある。正面、納戸、押入れ、但し人の出入り、上手下、柴垣、但し納戸の下に糧米櫃、置きあり、道具、よろしくとまる。
〽内の一間に窺ひて、ぬつと出でたる我慢の姿。

とま　小平次の隙を窺ひ、まんまと爰へ忍んで來たが、なんでも爰らに、粮米櫃が。
〽あたりうろ〳〵熊鷹眼。
さてこそ、粮米櫃。
〽うまい〳〵と探り寄り、蓋押し開けんとする所へ、出合ひ頭に小平次が。
ト小平次出て、お苫を當てゝ倒れる。櫃を開けると、千草姫、出て
千草　其方は、小平次。
ト云ふを押へる。この時、柴垣の内より源次郎、出る。
小平　コレ。
ト囁く。
源次　すりや。
小平　よく〳〵。
源次　ハツ。
〽ハツと心得月本は、一間の内へ忍び入る。あたり見廻し小平次は、首筋摑んで母、お苫、其まゝ投げ込み蓋びつしやり、姫の手を取り暫し忍ばす押し入れの、戸を立て切つて一工風、素知らぬ顔で煙草盆。
小平　ヤレ〳〵、今日ほど草臥れた事はない。ドレ、一服

せうかい。

〽煙草すつぱ〱すつぱの魂ひ、一間の内より兩人立ち出で。

ト十内、兵右衛門、出て

十内　小平次、爰に居つたか。

〽聲に怖り畏まり。

小平　これは〱御兩所様、何もお構ひ申し上げず、眞平御免下さりませう。

十内　なんの〱。先刻より、其方を尋ね居つたわい。

兵右　それは格別、先刻、貴殿が申されし三千兩、破船の儀はな。

十内　小平次、サア、その夜の次第

兩人　只今、聞かうか。

小平　さらば、お話し申しませう。

十内　して、その夜の次第は。

兵右　難船の様子

兩人　具さに、聞かん。

〽いざや聞かんと詰め寄る兩人、お早は忍ぶ縁の下、それと見て取る宗七が、隙を窺ひ血氣のはやり男、こなたはイザと摺り寄る二人。

小平　イザ、難船の次第、お話し申さん。そも、當三月二十日、追風にて、出船に好き折柄と、鳴戸を浮けましたは戌の刻、宵闇なれども星月夜、霧島も幽かに見え、風はよし、帆を充分に卷き上げて、さんざめかして走る船。津々崎の外れへかゝる頃、俄に變る早手風、雨空に一面眞暗がり。さつと篠つく一そばへ。

〽帆綱も控へばくる〱、船は四五遍、鳴戸の沖の水煙り。縁の下には妹お早、これぞ恨みの兵右衛門、ぐつと貫く氷の刃、小平次の高股かけて突き通す。苦痛を隱す剛氣の小平次。

ト小平次、貫かれて苦痛を隱し

南無三方と、楫柄取り。

十内　なぜ又、地方へ寄せざりしぞ。

小平　そこはぬからぬこの小平次、拳も砕けと金剛力。

〽押せどしやくれど叶はゞこそ、船に引かれてゆら〱ゆら。

五人の水子も一生懸命、帆綱を控へ、柱に登り。

〽組んづ轉んづ揉み合ふうち。

おも楫。

ト此の時、兵右衛門、宗七が鐵砲を持ち居るを見て

兵右　あれは。
小平　おも楫、取り楫。
〽爰を先途と働けども、叶はぬ運の天災に。
潮打ち込んで、船人ともに。
〽底はばつたり舳をかけ、一度に砕け覆へる。
荷物は元より、船頭水子も、浪間にざんぶと、飛び込みましてござりまする。
〽苦しさ隠す物語り。
兵右　それはそれにもして遣はさうが、なぜあの糧米櫃は、残しあつたぞ。
小平　イヤサ、あれは。
兵右　なんとだえ。
小平　ハ、、、、〳〵、ありや、この間、鼠が入りましたに依つて、取替へようと存じまして、それゆゑ、残し置きました。
兵右　如何様にあらがうても、もう叶はぬ。なんにもせよ、この糧米櫃を。
ト行かうとするを
小平　イヤ、この糧米櫃を開ける事は、罷りならぬ。
兵右　然らば、嫌を出すか。

小平　サア、それは。
兵右　この糧米櫃を。
小平　滅相な。
兵右　サア。
小平　サア。
両人　サア〳〵〳〵。
兵右　面倒な。
ト兵右衛門、小平次を突き退け、駈け寄りて、蓋を取ると、中よりお筈、出る時、宗七、兵右衛門を狙ひ打つと、お筈に中る。
とま　ハア、。
〽非道の報いの二つ玉、心地よくこそ見えにけり。
皆々　これは。
兵右　なんでも、この押入れ。
ト行かうとするを、小平次、突き廻し、押入れより千草姫を出して首打つ。
皆々　これは。
〽これはと驚き立ち騒ぐ、兵右衛門は笑壺に入り。
兵右　小平次、出かした〳〵。この褒美には、匿まうた科を免しくれる。この通りを兵庫どのへ。十内どの、拙者

は、お先へ罷り歸る、おさらばでござる。
〽さらば〳〵と兵右衛門、後をも見ずに足早に、屋敷をさして立歸る。跡にお早はあらぬ思ひ。
はや　コレ兄さん、堪忍して下さんせ。兵右衛門と思うて、突き當てたは、お前であらうとは、こりやマア、ひよんな事を、しましたわいなア。
〽縋り歎けば十内も、涙を拂ひ居直つて
十内　ヤア小平次、大切なる千草姫の御首を、討ち奉りて出かし顔。さう云ふ心とは露知らず、心を許せしは、一生の誤まり。エヽ、おのれはなア。
〽怒りの顔色一間より、宗右衛門も馳け出でゝ、小平次で前にどつかと坐し。
宗右　コレ聟どの、こなたに限つて、姫君を討たうとは夢にも思はなんだわいなう。
はや　コレ兄さん、ひよんな事を、して下さんしたなア。
小平　いづれも、お氣遣ひなされな。姫君は御安體。
十内　ナニ、姫君には
皆々　御安體とな。
小平　只今、お逢はせ申しませう。源次郎どの、姫君を、これへ。

源次　ハア。
〽ハアと答へて源次郎、姫君伴ひ立ち出づれば、これはと恟り顔見合せ、喜び合ふぞ道理なり。
十内　姫君のお身恙なきは、先づは安堵。
諸　さりながら、いま討つて渡した、姫君は
皆々　ありや、何者。
小平　今、首を討つて渡せしは、小平次が女房、梶でござりますわい。
皆々　ヤア〳〵〳〵。
宗右　すりや、娘は死んだか。アヽ、孫と云ひ娘まで、可哀い事をしましたわいなう。
小平　舅どの、其お歎きは御尤も。コレ、おまへが孫は、知れました。
宗右　ナニ、孫が知れましたか。
小平　その臍緒と、この刀と、合はして見さつしやれ。
ト宗右衛門、取つて、合はして見て、思ひ入れあつて
宗右　こりやコレ、この臍緒と、しつくり合うたは、
ト思ひ入れあつて
すりや、孫は。
小平　この小平次が、手にかけました。

皆々　ヤア〳〵。

〽ヤアと驚ろくその場の仰天、なに思ひけん小平次は、刀押取り脇腹へ、ぐつとばかりに突き込めば。

十内　コリヤ小平次、そちや、氣が狂うたか。

〽云ふに小平次息をつぎ、十内が顔を打守り。

小平　氣が狂うたかとは、お情ない。先刻のお詞に、姫君お聞遂させ、大殿のお怒り強く、暫らく匿まひ置けよとのお頼み、それゆゑ女房お梶を、姫君のお身替り。源え　さつた某は、裏へ廻り、壁を切り抜き、姫君を伴ひし、小平次どのゝ指圖。

小平　母を奥へ入れ置きしは、詐人さすまい當座の口どめ。紛れや兵右衛門と思ひ、突きかけしは、お早が貞心。まつた宗七が筒先の、狙ひ外らして打たせしは小平次。惡と云へど、義理ある母、血は分けねども親殺し。

〽情に引かゝるとも、非道にならぬこの身の罪、刃で死す若身の本望。

性根、宗七を世に出さんと、心に思はぬ非義非道、集め集めし此百両、昨夜取つたる百兩は、現在、男の志し。

〽かねて覺悟の身にかゝりしぞや。

たゞ不便なるは、女房お梶、さがなき母と我れへの氣がね、娘と女房が最期も、我が最期もこの刀、同じ刃で死ぬるのも、定まる業と諦らめて、コリヤ。

〽堪へてくれよ女房と、敢へなき死骸に取り付いて、打歎けば宗右衛門。

宗右　オヽ、道理ぢや〳〵。コレ聟どの、必らず死んで下さるな。コレ、氣を慥かに、持つて下されや。

小平　イヤ〳〵、この體では、所詮生きられぬ、我が命……コリヤ妹。

はや　アイ〳〵。

小平　跡に殘りし男どのに、隨分孝行してくれよ。くれぐれも頼んだぞよ。

〽頼む〳〵の一言に、お早はワッと泣くばかり。宗七は刀押取り。

宗七　さうぢや。

〽既に自害と見えければ、十内これはと押し止め。

十内　ヤレ待て宗七、いま其方が相果てなば、父金左衛門の敵、まつた、跡目相續する者があるか。

宗七　それぢやと云うて。

十内　其方を殺さうとて、義理ある母を殺させ、我が身に引受くる小平次が志し、この十内が心を無足にするか。

宗七　サア、それは。
十内　死ぬる場所ぢやない。うろたへ者めが。
小平　十内さまの仰せの通り、あなたを殺さうとて、夫婦は元より、可愛い子まで、殺しは致しませぬわいなう。
宗七　兄者人、それ程までに。
小平　誰れあらう、あなたは、金左衛門さまの御子息。
諸　とは云ふものゝ、淺ましいこの姿。
小平　これも定まる、身の成行き。
早源　思ひ廻せば廻す程。
宗右　若木に先立ち、老木は殘る。
十内　生者必滅。
千草　思へば果敢ない
小平　アヽ、有爲轉變の
皆々　有樣ぢやよなア。
　へ互ひに手に手を取り交し、涙なみだの村時雨、落ちて水増すばかりなり。十内は涙を拂ひ。
十内　コリヤ小平次、宗七が身の上は、ちつとも氣遣ひすな。この十内が、一命に替へて、兵右衛門を討たせ、再びめでたう向井の除目。コリヤ、心迷はず、成佛いたせ。
小平　エヽ、忝ない。

　トこの時、船頭、出て
船頭　聞いた〳〵、姫の身替りの樣子、何もかも注進する。さうぢや。
　へ駈け行くを、どつこいさせぬとお早が手練。
十内　ホウ、天晴れ〳〵。敵へ味方の母親と、一つでないと云はず語らぬ、其方が手並。オヽ、出かす〳〵。
　トこの時、太鼓、かすかに聞える。
皆々　あれは。
小平　姫君を討手の奴ばら、見咎められては、お身の上。先づ姫君のお供を、早く〳〵。
千草　この體を見捨てゝ、なんと行かれるものぞいなう。
宗右　涙をかけて下されますると、結句忠義も、無足になります。
小平　お構ひなくとも、ちつとも早う。
千草　それぢやと云うて。
小平　皆も早う。
皆々　ハテ、先づ〳〵。
　ト矢張りドン〳〵打つ。ト千草姫、十内、こなしあつて、下へ下がり、思ひ入れあると、諸々、宗七、お早、源次郎、通ひ道へ並び、諸々、手を合はす。小平次、

立ち上がらうとするを、灘六、綱七、捕り手の形にて出て

兩人　捕つた。

トかゝる。小平次、兩人を相手に、ちよつと立廻る。

皆々　おさらば。

トト、綱七を踏まへ、灘六の刀を引ッたくり、綱七、灘六を切り倒して、その上へ跨がつて、腹へ刀を突ッ込み、引き廻す事、よろしくある。

小平　いづれも、おさらば。

〽さらば〳〵と別れの聲ともろともに、敢へなく息は絶えにける。

トこの見得、三重にて、よろしく

幕

切　幕

笹原館の段

役名――笹原左門之助。犬守兵庫。千倉沖右衛門。小倉兵右衛門。千草姫。金左衛門妻、渚。小松屋宗七。岸田久我助。傾城、三吉野。大館勘解由實ハ笹原隼人。

造り物、平舞臺へ一面の屋體塀、後ろ黑幕。夜廻りの割り竹、拍子木の音にて、幕明く。

ト橋がゝりより奴一人、弓張り提灯を持ち、足輕一人、木綿合印附きの單衣羽織、菖蒲革の木綿袴、大小にて、拍子木打ち、出る。臆病口より同じ出立ちにて出て、眞中にて行き合ひ

足一　これは〳〵、夜廻り御苦勞に存じまする。

足二　お互ひでござる。

足一　この度、當お館には、何かお取込みがござる樣子。犬守兵庫どのより、夜番嚴しく仰せつけられてござる。それゆゑ仲間どもばかりでは如何と存じ、自分に夜廻り致す事でござる。

足二　拙者とてもその通り、兎角油斷なきやう、心を附けるが我れ〳〵の役目。

足一　左樣でござる。

足二　然らば、お別れ申しませう。

足一　後刻御意得ませう。

ト兩人、辭儀して、東西へ行き違ひ、別れて入る。と蟲の音、しつぽりとした合ひ方。更けたる模樣。向う

隼人　より笹原隼人、黒き羽織、野袴、大小、兜頭巾にて、龕燈提灯を持ち、静々出る。西の通ひ道より、諸、小松屋宗七、同じく黒き衣裳頭巾、提灯を持ち、出る。兩方、本舞臺にて行き合ひ、隼人、龕燈を上げて

隼人　小松屋宗七でないか。

宗七　ハツ、これは隼人さま、あなたはいづれへお越しなされまするな。

隼人　犬守兵庫を詮議について、館の結構、萬事の備へを、見合せん爲。して、其方達は何用あつて。

宗七　御存じの通り、親の敵の小倉兵右衛門、當館に忍び居る由。

諸　折を見合せ、本意を遂げたさ。

宗七　私しどもの心の内

兩人　御推量下さりませ。

隼人　ホウ、一途に逸るは尤もなれども、兼ねて犬守に一味の兵右衛門。いま館へ踏ん込んで狼藉せば、多勢に無勢、本望遂げぬのみならず、犬守に用心させては、實詮議の妨げとなり、大殿若殿のお爲にならず。例へ首尾よう打ち負ふせてからが、孝養にはならんぞよ。

兩人　エヽ。

隼人　サヽ、それゆゑに心を碎き、十が九つ工風がつきたれば、夜の明け次第姿を變へ、館へ入込み、事調はゞ、久我助を以て告げ知らさん。今暫らく辛抱いたせ。

兩人　段々のお情、有り難う存じまする。

隼人　禮には及ばぬ。合圖の刻限までは、必らずともに早まるな。

宗七　然らば、これより立歸つて

隼人　イヤ、宿元まで歸るに及ばぬ。この近邊に知らせを待ち

宗七　先づそれまでは、何かの用意。

隼人　隨分人に見咎められぬやう。

諸　心得ました。

隼人　密かに行きやれ。

兩人　ハア。

ト諸、宗七、さし足にて、橋がゝりへ入る。隼人、跡を見送り、龕燈を上げて、屋敷の様子を窺ふこなし、よろしく、チヨン／＼にて、道具廻る。

造り物、三間の間、二重舞臺、金襖、彫り物の欄間。西の方、塗り骨の障子屋體、橋がゝり網代塀、すべ

て笹原家上屋敷の體。奴二人、庭の掃除してゐる。

奴一　なんと、八内、掃除も大方しまうたでないか。

奴二　オヽサ〳〵。それにつけて、此お屋敷の大殿様は、御遠慮とやらで引込んでござる。また若殿様は御病氣ぢやげた。何かそこぞぶと、味な樣子ではないかいやい。

奴一　さうサ。何事も大守さまの計らひで、今では大守さまが殿様のやうなてや。これには、なんぞ樣子のある事だんべい。

奴二　まヽ、お氣の好い、御器量のよい、お慈悲深い若殿様だが、お氣の毒な事ぢやてた。

奴一　如何にもさうなれども、何を云つても二合半のわれやおらが、どのやうに思つたとて、蚤の息が届く事もあるまいわな。

奴二　ムヽ。其の蚤の息で思ひ出した、部屋で一合引ッかけべいか。

奴一　それが何より肝心だ。

奴二　サア〳〵、來やれ〳〵。

ト兩人、箒、手桶を持ち、橋がゝりへ入る。と千倉沖右衞門、上下大小にて、出て

沖右　兵右衞門どの〳〵。どれにござる。

ト小倉兵右衞門、奥より出て

兵右　これは沖右衞門どの。あはたゞしい、何事でござる。

沖右　イヤ、今日俄の御上使とござつて、只今知らせがござつたが、何も氣遣ひな儀はござるまいか。

兵右　されば、火急な御上使は、合點が參らぬ。

沖右　何事でござらうぞ。

兵右　何事にもせよ、兵庫どのへ、その樣子を申しませう。

沖右　急いで御相談下されい。

兵右　イヤ、貴殿も御一緒に參られい。

沖右　然らば左樣

ト二人、奥へ行かうとする。ト障子屋體より

兵庫　イヤ〳〵、これへお出でに及ばぬ。それへ出て御相談申しませう。

ト大守兵庫、上下、大小にて、出る。

兵右　兵庫どの、只今お聞きの通り、火急の御上使は、如何の儀でござらう。

沖右　兼ねて入魂に申し通じたる、諸侯のうちなれば、氣遣ひはござらねども

兵右　上使の人柄に依つて、銘々どもの身の上ではござるまいか。

兵庫　なにサ〱、心配するには及び申さぬ。

兵右　でも、足利の御前伺候のうちには、當家に因みの大名も多くござれば、それを語らひ、當家譜代の者ども、如何やうの事を計らんも知れず

兵庫　それゆゑにこそ、大殿は寶の紛失を云ひ立て、押籠めあれば、座敷牢同然。また若殿は病氣と云ふを幸ひに、これとても閉居の身。大殿若殿を上使に面談させねば、例へ上使が如何やうの事云ふとも、臨機應變、この時の模樣次第で、よろしく返答いたす事は、某が胸中にござる。もし又大事を企んで、狼藉に及ぶとも、大殿若殿を擒に致し置けば、まさかの時の人質。指さす事も出來ませぬ。

兩人　如何にも。

兵庫　何分上使の樣子を聞いた上にて、事を取計らひ申しませう。

兵右　兎角貴殿を頼みに存ずる。

兵庫　ちつとも氣遣ひ致されぬがよくござる。落ちついてござれ〱。

ト向う戸屋より、御上使のお入り、と云ふ。

イザ、出迎ひませう。

ト三人、花道際に並び、手を支へ

御上使樣には、イザ、先づ此方へ

皆々　お通り下さりませう。

ト太鼓、謠にて、大館勘解由、赤面、上使の形、赤地の肩附け、黑天鵞絨の上下、足袋、朱鞘の大小、すべて敵役の拵らへにて、向うより出る。後より麻上下徒立ら、大小の侍ひ二人、遙か後より岸田久我助、足輕の形にて、ぶッ裂き、股立ちにて、附き出て、花道に立ちどまつて

勘解　足利の御使ひ大館勘解由、上使の役目。

ト兵右衞門、沖右衞門、顏見合せ、こなしある。

兵庫　これは〱、遠路の御上使、御苦勞千萬に存じ奉りまする。イザ、先づお通り下さりませう。

勘解　然らば。

ト勘解由、二重屋臺障子屋體の際にて、床几にかゝる。平舞臺に兵庫、兵右衞門、沖右衞門、並ぶ。その次に麻上下の侍ひ、並ぶ。久我助、橋がゝりの臺際に控へる。太鼓、謠、打上げる。

して、お選びの方々は

兵庫　當家の執權、犬守兵庫。

兵右　諸士頭、小倉兵右衞門。
沖右　千倉沖右衞門。
兵庫　御上使お迎ひの爲
三人　罷り出でましてござりまする。
勘解　當家中にて、聞き及んだる小倉兵右衞門、千倉沖右衞門とは、其方達よな。
兩人　ハア。
勘解　面を上げい。
　ト兩人、少し仰向く。ト勘解由、兩人が顏をキッと眺めて、思ひ入れあり
ムウ、イカサマ、人品と云ひ、並々ならぬ骨柄ぢやな。イヤ、それは格別、當館の主、笹原左京之頭、子息左門之助、親子とも、何ゆゑ出迎ひは致されぬな。
兵庫　ハテ、主人左京之頭こと、先達て禁庭より勅命下り、家の重寶を失ひし申し譯、遠慮閉居いたし居りまするやうにござりまする。
勘解　當家の重寶は先達て紛失のところ、兵庫、其方が働らきにて、尋ね出せしと聞いたが、又ぞろ紛失いたしたとな。
兵庫　先達て勅使院使と僞はり、來りし曲者に奪ひ取られ申し譯もなき仕合せにござりまする。
勘解　一旦失ひたる寶を、其方が工風して取返しながら、また奪はれしを詮議も致さず、今日まで等閑に打過ごせしは、ハテ、悠長な家老職ぢやな。
　ト兵庫、ぎつくりする。勘解由、氣を替へて
して、左門之助は。
兵庫　家の騷ぎに心を痛め、病氣さし發り、引籠り居りまする。
勘解　代々當家の執權と聞き及ぶ、笹原隼人は如何いたした。
兵庫　先年病死いたしましたれば、後役を勤めまする兵庫めに、嚴命の趣き、仰せ下されうならば、有り難う存じ奉りまする。
勘解　勅命の寶、紛失いたしたならば、早速に言上に及び、遠慮も閉居も、上のお指圖を相待つべきところ、私しが計らひは、お上へ對し不敬の至り。まつた子息左門之助病氣とあれば、その段早々に申し上ぐべき筈なるに、お屆けも申さず、我まゝの致し方、萬事を計らふ犬守兵庫、不屆きであらうぞ。
兵庫　家の大事に前後を忘れ、行き屆きませぬ段、眞ッ平

御高免、希ひ奉ります。

勘解　誤まつて改むるに憚る事勿れ。後悔いたすとあれば、追つての御沙汰。先づ差當つて今日の上意、謹んで承れ。

兵庫　ハ、ア。

ト平伏する。

勘解　清原左京之頭が家來、小倉兵右衛門、並びに千倉沖右衛門、右兩人が者ども、武邊は勿論、諸事に馴れたる由、お聞きに達し、この度足利家御直參にお引上げなされ、御臺所お附き役儀仰せつけらるゝ間、この工風を以て、よろしきやう相働くに於ては、追ひ〳〵加増立身なし下されんとある。嚴命の趣き斯くの通り。有り難くお受け申されてよからう。

兵庫　ハア、存じがけなき御意を蒙り奉ります。委細主人左京之頭へ申し聞かせ、追つてお受け申し上ぐるでござりませう。

勘解　イカサマ、家來の其方、一存に決定もなるまじ。併し、追つてお受けと申すやうな、猶豫のある儀ではないぞよ。今日直ちに右の兩人を、登城いたさせよとの嚴命。某は又、他に御用の儀もあれば、一人これに止まり居れども、召連れし侍ひ衆は、將軍家御直參なれば、これに路次の警護を致させるやうと、密らかな仰せ渡されなれば、延引してはお上の思し召しも如何なれば、まつたお上の御用も立ち、首尾よく相勤めなば、左京之頭が身の爲にも悪しかるまじ。心得違ひなく、早速お受け申し上ぐるやう、とく〳〵申し聞けてよからう。

兵庫　委細承知仕つてござりまする。從つて不束な御饗應申しつけ置きましてござりますれば、暫らく奥殿へ、お通り下さりませうならば、有り難う存じ奉りまする。

勘解　成る程、某も長途の疲れ、暫時もてなしにあづかるでござらう。

兵庫　ソレ、小姓ども、御上使の御案内。

ト「ハア、」と、振り袖、衣裳、上下の前髪の小姓、出て、座る。

勘解　然らばいづれも。

ト勘解由、立ち上がる。

兵庫　先づ、入らせられませう。

ト兵庫、兵右衛門、沖右衛門、辭儀する。小姓、先に立ち、障子屋體の内へ入る。勘解由、附いて入る。上下の侍ひ、久我助、橋がゝりへ入り、跡に兵庫、兵右

衞門、沖右衞門、殘り、兵庫、手を組み、思案してゐる。兵右衞門、沖右衞門、あたりを見廻し、二重舞臺へ上がり、兵庫の左右に座る。

兵右　兵庫どの、只今の上使の口上

沖右　貴殿は如何思し召さるゝな。

兵庫　願うてもなき上首尾でござる。

兵右　すりや、拙者を足利家へ、お渡しなさるゝ思し召しかな。

兵庫　如何にも。貴殿ことは、兼ねて敵と附け狙ふ奴がござる。併し、その相手は女なり、若輩者、取るに足らざる奴でござれども、何者か荷擔いたし、如何なる謀り事を構へんも知れずと存じ、固く他行を留め置きましたが、今日の御上使。貴殿を足利家のお直參となる時は、外から指もさす事はなりませぬ。また隨分足利の將軍に取入り、御前體を繕ろひ置けば、某が年來の大望に、一つの便りを得たと申すもの。尤も、今日の路次の間、少々心元なく存ずる筋もあれど、足利家の直人が警護と云ひ、沖右衞門同道とあれば、只今以て氣遣ひない。安心して行かつしやるがよくござる。

兵右　成る程、拙者身分は、それでよくござれども、跡には貴殿只一人、上使に立ちたる大館勘解由、只者ならぬ面魂ひ、もし變事のあつた時は

兵庫　ナニサ、例へ鬼神にもせよ、附き添ふ者は皆歸し、一本立ちの上使勘解由。何程の事やある。當館に在り合はす者は、下部までも我が味方、大船に乘つたやうに思うてござれ。

兵右　併し、何より大切なるは彼の二品の寶。この儀は如何でござるな。

沖右　イヤ、その儀は拙者が申しませう。二品のうち、定家の色紙は、先達て某が預かり、人知れず腹心の者に、守護いたさせてござる。また異國渡海の二十四文字は、大守どののお手にあれば、何事も此方の思ひのまゝ。

トこの時千草、姫の形にて、屋體の障子少し明け、窺うてゐる。

兵庫　その二十四文字は、某疾より奪ひ取り、肌身離さず所持したれども、今日上使に立ちたる大館勘解由、如何にしても心得ねば、兼ねて用意いたし置きたる拙者が部屋、二重壁の内に隱し置けば、猫にも知らさぬ大丈夫。

ト千草、これを聞いて、頷く。

只この上は足利家の御前鎧を、取繕ろふが何より肝心。
兵右　して、その取繕ろふ樣子はな。
兵庫　大殿親子を事に准へて押籠め置けば、近日千草姫を以て、笹原家の相續、跡目の願ひを立て、その上、女の儀なれば、某が後見仰せつけられるに於いては、立てうと伏せうと心のまゝ。
兵右　併し、千草姫を、此方の幕の内へ取込む手段は
兵庫　あるとも〳〵。あの千草姫と云ふは、もと某が實の娘でござる。
兩人　ヤア。
ト驚ろき、千草、聞いて、驚ろく。
兵右　して、その仔細は。
兵庫　某若年の時、召仕ひの女に手をかけ、懷胎せしを幸ひ、女にとくと云ひ含め、手廻りへ差出し、色を以て大殿を蕩らし、產み落せし娘を大殿の胤と、云ひ觸らし置いたは、斯やうの役に立てん爲。
ト千草、これを聞き、口に手を當て、泣く。また氣を替へて、ツイと入る、障子さす。
兵右　それは重疊。然らば、これより發足の用意いたしませう。

兵庫　何事も手ぬかりなきやう。
兩人　心得ました。
ト兵庫、正面の襖の内へ入る。兩人は橋がゝりへ入る。ジャン〳〵と半鐘鳴る。小姓二人、燭臺に灯をともし、持ち出て、好き所へ置く。
勘解　犬守兵庫はいづれに居る。
ト云ひ〳〵、障子屋體より、勘解由、出る。立役の衣裳に替へる。但し、顏と髮は初めのまゝなり。兵右衞門、沖右衞門、橋がゝりより出て
沖右　御上使樣、御用でござりまするかな。
勘解　ホウ、兩人、先刻より餘儀の參入り、お受けの儀は如何いたす。犬守兵庫をこれへ呼びやれ。
兵右　ハア、兵庫ことは、只今領分より訴訟の者參つて、聞き糺し居りますれば、恐れながら、暫時御免なされ下されませう。
沖右　先刻仰せ下されし上意の趣き、左京之頭へ申し達しましたるところ、委細畏まり奉る由申し上げよと、我れ我れ兩人へ、申しつけましてござりまする。
勘解　ナニ、嚴命の次第御承知とな。先づは重疊。然らばこれより發足しやれ。

両人　何時なりとも出立仕るやうにござりまする。
勘解　勘解由が供の者参れ。
　ト「ハア」と、大勢出る。
　コリヤ〳〵、某は今少し御用あれば、これにて隙がいるであらう。其方どもはこの両人を、足利どのゝ御前へ案内いたし、後刻某が迎ひに参れ。
侍ひ　ハア、畏まりましてござりまする。イザ、御両人、御案内いたしませう。
兵右　然らば勘解由さま、後刻御前にて御意得ませう。
勘解　サ、行きやれ〳〵。
　ト麻上下、股立ちの侍ひ二人、先に立ち、次に兵右衛門、沖右衛門、後よりハッピ股立ちの侍ひ三人、並よく並び、静々と向うへ入る。勘解由、跡を見送り、頷き居る。橋がゝりより久我助、窺ひ出て
久我　お旦那、お首尾は、如何でござりまするな。
勘解　オヽ、久我助か。先づ一方は片附いた。其方はこれより宜く計り、彼の者どもと申し合し、手ぬかり無きやう取計らへ。合點か。
久我　委細承知仕ってはござれども、あなた様には
勘解　此方は今一色い、大事なる御用あれば、後より歸館するであらう。
久我　然らば下郎めは、お側に附き添ひ、何かの御用を。
勘解　イヤ〳〵、萬事三吉に申しつけ置きたれば、後の事は氣遣ひない。兎角案じらるるは向うの首尾、其方参つて力を添へよ。
久我　左様ならば、これより直ぐに。
勘解　急げ〳〵。
久我　ハア。
　ト向うへ、走り入る。
勘解　ムウ。
　ト手を組み、思案して居る。ト雷序の鳴り物になり切り穴より、焼酎火、出る。ト勘解由、これを見て、側へ寄り、耳を傾けて、云ふ事を聞くこなしある。
　ナニ〳〵、無事大殿は囲みを通がれ、我が隠れ家へお供せしとな。ナニ、お家の重寶二十四文字も、今に某が手に入るとな。ハヽア、有り難し〳〵。して、若殿様の御身の上は。ナニ、松の間の廊下を過ぎて、乾の間の離れ座敷に、押籠めあるとな。よし〳〵。ア、コリヤ〳〵、その儀ならば其方が行くには及ばぬ。御在所さへ知れたれば、如何やうにしてなりとも、某がお伴ひ申すであら

う。只氣遣はしきは小松屋宗七、敵討ちの一條、首尾殘る所なく調べ置いたれども、なんと云うても女と云ひ、町人の宗七。大敵の兵右衛門、討取らん事も覺束なし。敵討ちの場所に至り、人知れず守護いたしくれよ。萬事滯りなく成就せば、誠に上なき大功なれば、國家の守護神と仰ぎ、官を授け、社を建て、長く尊敬するであらう。ナニ、これより敵討ちの場所へ赴かんとな。この所には某どもを殘し、某に力を添へんとな。行き屆きたる働らき、過分過分。

　ト祝ふこなし。雷序早めて、燒酎火、消える。

ハテ、愛い奴ぢやなア。

　トよろしく、道具返し

二重舞臺、西へ引込む。一面の平舞臺、向う黒幕、前、奥藏口より橋がゝりまで、一面に青竹の朝鮮垣、いつもの門口の所に、木戸あり。向うより兵右衛門、沖右衛門に、侍ひ附き添ひ出る。

兵右　今日は快晴と申し

沖右　なか／＼よい天氣でござる。

　ト花道、中程まで來る。ト後よりバタ／＼にて、奴一人、走り出て

奴　先づ／＼お待ちなされませう。沖右衛門さま、一大事でござりまする。

　ト沖右衛門、驚ろき、振返つて

沖右　ナニ、一大事とは。

奴　先刻お役人と見えて、大勢此方の屋敷へござつて、何か御詮議の筋ありと仰せられ、踏ん込んで家捜しせんとあるゆゑ、主人留守中の事ゆゑ、お斷わり申せしところ、なかなかお聞入れなく、お座敷お居間は申すに及ばず、御金藏の錠捻ぢ切り、お廚へのお金まで、持ち歸りましてござりまする。

　ト云ふうち、沖右衛門、何遍も吃りする事あつて

沖右　すりや、三千兩の金子まで。こりや斯うしてはゐられぬワ。奴、續け。

　トうろたへて、向うへ走り入る。ト奴も附いて入る。

兵右　ハテ、怪しからぬ大變。なんともハヤ心許ない。

侍ひ　イヤ／＼、何は兎もあれ、御登城お急ぎなさるゝがよくござりまする。

兵右　イカサマ、途中に待つても居られまい。然らば參りませう。

ト立ち直り、本舞臺の方を見て

行く先、往來の道筋に、見馴れぬ圍ひを致せしは、ハテ、合點の行かぬ。

侍ひ　イヤ、拙者ども先刻この所を通り、圍ひの事を尋ねましたるところ、氏神の社造營につき、公儀より御免を蒙むり、大工小屋をしつらひましたとの事。こなた樣には公用にて、お通りなさるゝ事なれば、苦しうござらぬ、木戸開かせて、お通りなさるゝがよろしうござる。拙者計らひまするでござらう。

ト本舞臺、木戸際へ行き

ヤア、この小屋の者ども、只今公用のお役人のお通り。木戸を開いて通しませい。

人足　ハア。

ト人足のやうなる者出て、木戸開く。

侍ひ　イザ、お通りなされませう。

ト侍ひ、辭儀する。兵右衛門、木戸の内へ入る。侍ひ、上下の侍ひ、[illegible]す。[illegible]の侍ひ、木戸口に控へる。正面へ開く。兵右衛門、臆病口の方へ行かうとする。[illegible]口より、渚、宗七、白裝束、敵討ちの形にて、ズッと出て

諸　ヤア、小倉兵右衛門、年頃の鬱憤。

宗七　敵討ちの勝負々々。

兵右　足利の嚴命に依つて、只今登城の兵右衛門、慮外いたさば逆磔刑だぞ。

宗七　ヤア、愚か〳〵。勘解由さまの計らひで、汝と勝負を決せん爲、大工小屋と僞はり、敵討ちの場所をしつらひ、疾よりこれに待ち受けたわやい。

兵右　ヤ、、、、すりや、某を欺かつたか。

侍ひ　足利のお召しと云ひしも拵らへ事。誠は汝を誘き出し、斯く計らはん爲ばかり。最早遁がれぬ。尋常に勝負勝負。

兵右　さう吐かしや破れかぶれ、勘解由を始め、何奴も此奴も、しやうてくれん。先づ一番にうぬら兩人、兵右衛門が刀の引導、それへ直れ。

ト下げ緒外し、襷にかけて、身拵らへする。渚、宗七、進み出て

諸　向井金左衛門が後家、渚。

宗七　同じく悴宗七。親

渚　夫の敵、

兩人　イザ、參らう。

ト兩人、刀を拔き、立ち向ふ。

兵右　ヤア、知れた事を、愚圖々々と云ふにや及ばぬ。一緒にうせう。

トこれにて三人、タテになり、渚、宗七、薄傷を負うて、危ふくなる。兵右衞門、刀を振り上げてかゝる。ドロ／＼にて、兵右衞門の後へ、燒酎火出て、兵右衞門、戾さるゝ模樣にて、刀を取落す。南無三と差添を拔かうとする。渚、走り寄つて、右の腕を切り落す。宗七、左より肩先を切りつける。これにて兵右衞門、倒れる。兩人、左右より取つて押へ

渚　夫の敵。

宗七　親の敵。

兩人　思ひ知つたか。

ト兩人、一度に、止めを刺す。上下の侍ひ二人、お手柄お手柄と、扇にて煽ぐ。道具廻る。

本舞臺正面、一間の二重舞臺、綺麗なる數寄屋建ての亭座敷、藁葺き屋根、三方廻り椽、殘らず障子たてある。西の方、網代塀。東の方、正面杉戶、松の繪。前欄間附き、大座敷に通ふ廊下の模樣。道具納まる。

ト亭座敷の正面の障子、開く。ト内に左門之助、若衆の形。結構なる蒲團の上に、脇息にもたれ、眠つて居る。切り穴より三吉野、傾城の形、派手なる衣裳、裲襠にて、セリ上げる。左門之助、フツと顏を上げて、三吉野を見る。三吉野、走り寄つて

三吉　逢ひたかつたわいなア。

ト取りつく。網代塀、引上げる。太夫座を突き出す。これより景事、納まる。ト三吉野、切り穴へ消える。左門之助、うつとりとして、蒲團の上へ、べつたりへたる。チヨン／＼にて、前の障子、さす。太夫座、亭座敷ともに、西の方へ引込み、東にあつた廊下、西の方になる。正面、三間、二重舞臺、大座敷の體。正面、大襖にて、松の繪。欄間。松の彫り物なり。松の繪の衝立ある。橋がゝりより、隼人、前後を窺ひ、立ち出る。

隼人　これが松の間、向うが廊下、その向うが乾の亭。若殿はあの一間は、ムウ。

ト立ちとまる。一間バタ／＼するゆゑ、隼人、衝立の影へ隱れる。ト西の亭座敷より、左門之助、景事の形

にて、廊下を傳ひ、大座敷へ走つて出て、あたりを見廻し

左門　三吉野々々々、三吉野はいづれへ行たぞ。ムウ。すりや、今のは夢であつたか。

ト思案のこなし。橋がゝりより、千草、走り出て

千草　ヤア、あなたは若殿様、幸ひの所。サア、お出でなされませ。

ト左門之助の手を取り、引立てる。

左門　ア、コレ、わしを何處へ連れて行くのぢやぞいなう。

千草　何處と云ふ事はござりませぬ。あなたを爰へは置かれませぬ。なんであらうと、お出でなされませ。

左門　ぢやと云うて譯も云はず。

千草　サア、譯は道々お話し申します。急いで行かねばなりませぬ。サア〱。

ト無理に左門之助を引張り、花道の方へ行かうとする。隼人、ツカ〱と出て、兩人の手を捥ぎ放し、眞中に立つて

隼人　千草姫、久しいなア。

ト千草、ヂツと隼人を見て、恟りし

千草　ヤア、あなたは隼人さま。慥かにお果てなされたと聞きましたが、こりや、どうでござりまする。

トうつとりと、隼人の顏を眺めてゐる。

左門　誠に隼人。又この所へ形を顯せしは、我れを諫める所存か。様子はどうぢや。

ト少し氣味惡きこなし。

隼人　ホヽ、驚ろきは御尤も。先達て君の手をかり、相果てし體に見せ、その後形を顯せし體にもてなし、諫言を奉りしは、その日の急難をお知らせ申さん爲。誠は死せざるこの隼人。死せしと見せて惡人ばらに心を許させ、忍び〱にお家の納まり、寶の詮議に心を碎き、今日この館へ上使となつて入込みしも、皆これ三吉狐が通力の働らきにて、相好を變へ、犬守はじめ、荷擔の奴原が眼を眩ましたれば、隼人と知る者一人もなし。我が君を誘ひ出し奉らんと、この所へ來て見れば、思ひがけない千草姫の振舞ひ。先年、某に心をかけしと云ひ寄りながら今また若殿をそゝのかし、おのが魔道へ引入れんとする、見下げ果てたる惰弱の女め。

ト千草を睨みつける。千草、ちよつと泣いて

千草　成る程、其お疑ひは無理ならねど、まだわたしが心

を御存じないか。お胴慾に存じまする。いつぞやフッと見初めてから、どうぞあなたに添ひたいと、いろ〳〵に心を砕く其うちに、思ひがけなきお手討ちにて、お果てなされたと聞いて恟り、悲しさ辛さ、その時自害と思うたれど、イヤ〳〵、例へお手討ちに遭はしやんしても、殿様大事お家大事と、忠義一途のあなた様、冥途とやらへお出でなされても、矢ッ張りお家の事を、案じてござるであらうもの、どうぞ一つの功を立て、それを土産に冥土へ行たら、女夫になつてもらはうと、心を盡せど女の手業、何を斯うとの思案もなく、うろ〳〵今日まで暮らせしが、最前始めて聞いた寶の在所、お家の仇、ヤレ、嬉しやとそうやうに、寶を奪ひ、それを若殿様にお手渡し申し、この家を落しましたらば、ムッ出かしたと未來から喜ばしやんすであらうかと、苦勞をするも、隼人さま、お前に褒められたいばかかりでござんすわいなア。その證據は、これ見て疑ひ晴らして下さりませ。

ト懐より、袱紗包みの巻き物を出し、隼人に渡す。隼人、受取り、開き見て

隼人　これこそ紛ふ方なきお家の重寶、二十四文字。チエエ、忝ない。

ト頂き

この一品さへ我が手に入らば、お家の納まり、若殿の御出世。コレ、偏へに姫が貞心の働らきゆゑ。コリヤ、喜ばしいぞよ。

千草　ハア、嬉しや。そのお詞を聞けば本望。この世に思ひ置く事なし。隼人さま、おさらばでござりまする。

ト懐劔出し、自害する。隼人、左門之助ともに恟り。

隼人　ヤア、思ひ叶ひしその上に、何ゆゑの生害なるぞ。

千草　様子語すも面はゆい。お恥かしうござりまする。わたしは元大殿様の胤にあらず、悪人の犬守兵庫が、讐の娘でござりまする。

両人　ヤア。

千草　犬守兵庫、始めより謀叛の兆しあるゆゑに、おのが手にかけ懐胎したるを押し隠し、大殿のお湯殿に差上げ、若殿を押鎮め、自分の事を跡目に立て、お家を奪はん結構と、始めて聞いて情なや、例へどのやうに思うても、添ふ事ならぬ敵の血筋と、思ひ諦らめての自害。隼人さまが冥途にござつて、跡から行くと思ふなら、死ぬるにも力があらうに、御無事なお顔を見ながらも、喜ばれぬ因果な身の上。いとしいお方を浅ましに置き、一人未來へ

行たとても、なんの當なき一人旅、うろ／＼迷ふでござりませう。御推量なされて下さりませ。

隼人　ホウ、切なる其方が志し、忘れは措かぬ。例へ敵の刃なりとも、命終れば血筋も切れて、未來永劫隼人が妻、心殘さず成佛せい。

千草　エヽ、忝なうござりまする。申し、隼人さま、あなたにも隨分御機嫌よう、百年千歳の御壽命まで、未來へお出でなされたら、その時添うて下さりませ。もう、お暇申しまする。お名殘り惜しや。

ト懷劍を拔く。ばつたりこけ、死ぬる。

兩人　不便の最期を遂げたるよなア。

ト隼人、左門之助、共に手を合す。しつぽりとなる。

道具廻る。

犬守兵庫、居間の體。三間の二重舞臺、西の方、一間、床の間、大廣物掛け軸かけある。東へ續き、世話襖、橋がゝり柴垣、取合せよろしく、二重舞臺眞中に兵庫、上下にて、立つて居る。

兵庫　ハテ、心得ぬ、分野の有樣。

ト空を眺め、こなし。仕掛けにて、星落ちる。前なる井戸より、掛け焔硝燃える。兵庫、平舞臺へ下り、ツカツカと向うへ出て、井戸を見下ろし、また空を眺めて

我が運命を司る客星地に落ち、光りを失ひしは。ハテ、忌はしき天災ぢやなア。

トきつと空を眺め、また井戸を眺めする。思案すると、橋がゝりより、沖右衛門、走り出て

沖右　兵庫どの、これにござるか。一大事でござる／＼。

兵庫　千倉氏、一大事とは。

沖兵　拙者先刻、兵右衛門どの同道にて、參りたる留守の屋敷へ、何かは知らず、大勢の狼藉者、家探しを致し、貯へ置きし彼の金子を、奪ひ取りしとの注進。途中にて聞くと其まゝ、引返して見れば最早後の祭、こりや、どうしたものでござらう。

兵庫　ムウ。合點の行かぬ不意の狼藉。

沖右　イヤ、まだござる。只今これへ參るお次にて承れば、千草姫がお家の寶を持つて、行くへ知れずと取り取りの噂。

兵庫　ナニ、千草姫が。何にもせよ。

ト二重舞臺へ上がり、床の間の掛け軸を外すと、壁二



坂東彦三郎の犬守兵庫



澤村訥升の笹原隼人

重にて、その中を改め、大きに惘りし

こりやコレ、寶が紛失。すりや、千草姫が……エ、、血
筋と思ひ心を許し、飼ひ犬に手を咬まれしか。ハテ、殘
念やなア。

沖右　用金は取られ、寶は紛失。兵右衛門が身の上も心元
ない。こりや斯うしては居られぬわやい。

ト駈け出す。ト奥の間より

隼人　ソレ、盗賊を取逃がすな。

ト聲かける。ト向う戸屋の内より、久我助、立派なる
衣裳、上下にて、十手を構へ、走り出て、花道の眞中
にて、沖右衛門を支へ、少し立廻りあつて、沖右衛門
を取つて押へ

久我　捕つた。

ト繩かけ、本舞臺へ引いて來る。隼人、出て

隼人　ヤア、盗賊の犬守兵庫、それに荷擔の沖右衛門、兩
人ともに覺悟せよ。

兵庫　其方は先達て、お手討ちに合ひし笹原隼人。無事の
姿は、こりやどうぢや。

隼人　ホ、、先達て死せしと見せしも、先刻この館へ上
使となつて入込みしも、千歳功經る白狐の働らき。其方
達が眼をくらませしは、某とは見えまい／＼。事十分に
計り負ふせ、小倉兵右衛門は程よき場所まで誘き出し、
小松屋宗七に敵討ちをさせたわやい。

兩人　ヤア。

隼人　まつた、それなる沖右衛門が、留守中を改めさせし
に、貯への金子に一兩々々、小松屋の極印あるは、正し
く佐吉にて紛失の三千兩。その盗賊は沖右衛門、今日召
捕つたれば、是利家への申し譯相立ち、金右衛門が實子
たる宗七を以て、跡目願ひさせん爲。かゝる悪事の元の
根ざしは、犬守兵庫。其方が娘の千草姫、汝が悪事を見
限り、何もかも白狀して、寶を某に渡し、自害して相
果てたわやい。その讐を食みたから、その方を罰す道理。
寶の盗賊、犬に等しき犬守兵庫、非常に繩かゝれ。

兵庫　ヤア、口惜しやなア。併し、大殿親子を虜としたれ
ば、まさかの時の人質、うぬら、悪く働らき立てなば、
大殿若殿の身の上なるぞ。

隼人　默れ／＼。白狐の通力にて、御親子ともに囲みを遁
がれさせ給ひ、早先達て某が隠れ家へ、お供申したわや
い。

兵庫　よし／＼、人質は取返さるゝとも、當館に居合す者、

中間小者まで皆我が味方。剰さへ一本立ちの錆貫隼人。見事、兵庫を搦め捕るかよ。

隼人　云ふにや及ぶ。其方が力と頼む當家の人數は、悉く利害を以て降參させ、背く奴原は捕へ、其方に從ふ者一人もないわいやい。その上に、味方なしと思ふは不覺。目には見えねど影身に添ひ、白狐の神の守護する隼人、汝等如きが自由になろうか。

兵庫　さう聞かしや、もう破れかぶれ、刀の目釘の續くだけ、死人の山だぞ。

隼人　ソレ、者ども、大守兵庫を取圍め。

ト下より、ハアと云うて、捕り手七八人、舞臺の前際へセリ上がる。この捕り手、眞白い襷の半纏なり。

兵庫　ヱヽ、今までなかりしこの人數は、これも野狐めがほててんごうよなア。この上は大守兵庫が死物狂ひ。狐もろとも皆殺しだ。覺悟せよ。

ト刀を抜いて、構へる。

隼人　ソレ、廣場へ追ひ出し、疵つけぬやう搦め捕れ。

捕手　ハアヽ。

トよろしくタテあつて、サア〳〵とタテしいしい、橋がゝりへ入る。

隼人　イデ、某は若殿の御供し、稲荷の神前へ參詣せん。久我助は沖右衛門を引立てい。

久我　ハヽア。

ト二重舞臺、兩方へ引込む。

向う一面の淺黄幕、橋がゝりより、絞り白張りの禰宜、御幣を持ち、出る。後より玉の紋の高提灯、銘々に思ひ附きの祭禮の形。

祭一　てうさや〳〵。

祭二　千秋樂おゝや、萬歳樂おゝや。

ト囃し〳〵、臆病口へ入る。この人數、一二三通り繰返して、隨分大勢の體。トゞ人數殘らず西へ入りしまふ。

ト淺黄幕切つて落す。向う奥深に、稲荷の社、左右玉垣、その前に高提灯の人數、大勢立ち並ぶ。正面に紅網張りの大鳥居。三吉稲荷大明神の額あり。これより鳥居の笠木ばかり見せて、隨分多くあるべし。舞臺正面の鳥居を見物に見せるやう。東の方に兵庫、大岩の形にて、擬勢してゐる。この前に玉の捕り手、取卷いてゐる。鳥居の西の方に左門之助、隼人、久我助、立つてゐる。

隼人　ヤア、兵庫、所詮遁がれぬ汝が運命、卑怯の働らき未練々々。

兵庫　もう是非に及ばぬ。

ト刀を取り直し、腹へ突ッ込む。前なる捕り手、皆々セリ下げる。

隼人　惡人亡びて、お家の納まり。

左門　めでたし〳〵。

隼人　この場はお立ち〳〵。

ト打出し。

幕

花菖蒲佐野八橋

（はなしやうぶさのゝやつはし）



初演絵番附の表紙

花菖蒲佐野八橋

序幕　江の島辨財天の場

役名――北條義時。熊田軍八。衣笠三木之進。稻田豐前。松浦右門。米村刑部。弓削新左衞門。玉琴姫。醫者、蒔庵。腰元、お國。同、お園。禿、しげり。大工、與五作。玉淵限之丞。勇介女房、お菊。佐野次郎左衞門。

造り物、平舞臺、向う浪幕、眞中、葭簀張りの煮賣り茶屋、一間の障子屋體、江の島屋といふ紺の水引き暖簾をかけ、この後へ、輕業の小屋の後を見せ、下座の方、首抜き店の飾りつけ、上座の方、石の鳥居の半分、この續き、覗きのからくり、幕の内より眞中の屋臺に、熊田軍八、前垂れ、襷、置き手拭にて、火鉢にかゝり、田樂を燒いてゐる。松浦右門、料理人にて、鯛を料理してゐる。三木之進、下男にて、味噌を摺つて居る。お國、外腰元三人、仲居の形、赤前垂れにて、仕出しを呼んで居る。下座に蒔庵、醫者の拵らへ、三方に藥を並べ、松井源水の心にて、口上ひれつて居る。荒木玄蕃、奴にて、反魂丹の箱を抱へ、賣つてゐる。上手には米田刑部、稻田豐前、からくりの口上云うて居る。所々に床几を並べ、すべて江の島正遷宮の體。仕出し大勢、行き違ひ、この見得、神樂の中へ輕業の鳴り物にて、幕明く。

女皆　お休みなさつてお出で。おでん上がつてお出で。

ト口々に云ふ。

刑部　ソレ、向うに見えるが、藝州嚴島の景色、ハイ。

蒔庵　お立合ひ樣は御存じの松井源水、常見世は江戸淺草廣小路、出るは反魂丹と齒磨き齒藥。ソレ、奴、賣つて參れ。

玄蕃　ハイ〳〵、サア、反魂丹でも齒藥でも、錢は要らず、遠慮なしに持つてござらつしやい。

豐前　サア、題が替りますれば、京都四條河原涼みの體、ハイ。

ト右のせりふ、ごつちやになつて、仕出し皆々、東西へ別れて入る。

右門　なんと、軍八。ではない、軍藏、太郎、參詣も透いたではないか。

軍八　さうだ〳〵、この間に一服やらかさう。

玄蕃　親方、ごうせいにしやべつたら、咽喉がひいひいと云つて堪へられぬ。

毒庵　一休みして、茶でも呑むがいゝ。

軍八　田樂の燒立てゞ、酒宴と出かけよう。女原も、皆爰へ來たり〳〵。

女皆　アイ〳〵。

ト始終右の鳴り物にて、皆々酒宴になる。向うより北條義尙、浴衣がけ、おちよぼからげ、鉢卷して、與五作、木綿やつし。しげり、禿の形にて、駕籠に乘つて出る。

義尙　相棒、肩ぢや。

與五　オツと、合點ぢや。

ト肩を替へる。二足三足出て

義尙　それ〳〵、肩ぢや。

與五　オツと、承知ぢや。

ト右の通り、花道で、何遍もする。此うち本舞臺、右門、玄蕃、腰元にしなだれる。皆々、嫌がり、逃げ歩く。

義尙　そこらで肩ぢや。

與五　これはしたり、さう杖ばかりしてゐては、土槇の參宮で、果てるものではない。

義尙　でも、痛くてどうも堪へられぬ。

與五　もう立場だ。早くやつたり〳〵。

ト舞臺へ來て、どつさり下ろす。

玄蕃　二人ながら、早かつた。

腰一　見れば可愛らしい娘御を乘せてござんしたが、何處のお子でござんすえ。

三木　イカサマ、悧口さうなあまつちよだ。爰へ出ろ〳〵。

しげ　アイ〳〵。

ト駕籠より出る。

毒庵　ヤア、わりや八橋が禿、しげりではないか。

しげ　アイ、今日は花魁の云ひつけ、お前さんに用があつて

毒庵　ア、コリヤ。

ト押へる。

しげ　サア、皆さんと連れ立つて、お宮遙しに參つたものを、お二人さんが無理無體に、駕籠へ乘せ、振り廻して歩いておや。大抵怖い事ではなかつたわいなア。

澤庵　こりや、しげりが云ふが尤も。素人と云ふも愚か、隱れもない鎌倉の執權、北條時賴公の御舍弟義尙さま。

豐前　相棒と云ふは、お氣に入りの大工與五作、思ひつきの施行駕籠。

有門　國取り大名の代れ／＼まで、斯く下賤に姿をやつし

軍八　[illegible]の施行所は、神武以來ない圖の趣向。

しげ　ほんに皆さんの變つたお姿、とんと合點が行かぬわいなア。

義尙　その筈／＼。コレ／＼、三木之進、今日の役割りを讀み聞かして、しげりめに肝を潰さしてやれ。

三木　畏まりました。

　ト役割りの書付けを開き

「[illegible]の權に、北條小四郎太夫の義尙。

與五　アヽ、かゝ／＼、いくら目が永いと云つて、それ聞いてゐちやア堪らない。よさつしやれ／＼。

義尙　黙らつしやい、それは後へ廻し、下部この江の島の辨財天は、我れ／＼が氏神、この度者たちに[illegible]成就、遷宮の賑やかしに、施行駕籠の思ひつきは、神をいさむる身共が信心。

有門　信心も氣が強い。誠は參詣の中へ交つて、美しい小娘を、ちよろまかさうと云ふ謀り事。

義尙　エヽ、それをあらはに云ふ事か。默れ默れ。

澤庵　その小娘の次手に、しげり、われはな。

　ト今は惡い、後にと云ふこなし。

しげ　アイ／＼、合點でござんす。そんなら澤庵さん。お宮へ參つて來るがえゝ。

澤庵　アヽ、コリヤ。

しげ　皆さん、後にえ。

　ト澤庵へ心意氣して、鳥居の内へ入る。

與五　時に、今朝から余ッぽどこたへてゐたら、腹な虫めが、ぐら／＼云ふ。

豐前　又わつさりと田樂酒。

義尙　打混じて、始めたり／＼。

軍八　アイ／＼。ソレ、お客だぞや。

女皆　アイ……。

　ト女皆々、ちろり、取肴など運ぶ。てんつゝになり、向うより在所女、笠、杖を持ち、後より同じく在所[illegible]

仁、藁苞を背負ひ、出る。

親仁　コリヤ、お琴〱、其やうに、ほか〱歩いて、はぐれたらどうする。もつと靜かに行けやい。

娘　それでも人さんが、田舍者ぢやと思うて、立ちどまつて見さんすに依つて、恥かしうござんすわいなア。

親仁　後の滅るものぢやなし、見たがる奴には見せてやるがいゝよ。

ト云ひ〱本舞臺へ來る。

娘　お前は、さぞしんどうござんせう。ちつと爰らで休みなさんせ。

親仁　オイ〱、サア、われもかけい。

ト兩人、下の端の床几にかけ

姐さん、田樂で一合下され。

腰二　アイ〱。

トとざん、ちろりを持ち行き、親仁、手酌で、グイと呑み

親仁　アヽ、えいワ。旨い〱。

ト玄蕃、娘を見て

玄蕃　あれ見さつしやい、美しいではないか。

義倘　ドレ。

ト見て

彼奴等は歸されぬ。與五作〱〱。

與五　ハイ〱。

ト側へ寄る。

義倘　ソリヤ。

ト娘を教へ、爰へ連れて來いと云ふこなし。

與五　合點だ〱。

トこちらへ來る。神樂になり

コレ、お娘、あなたが何やらわが身に、尋ねたい事があると仰しやる。お側へ行かつしやい。

娘　ついにお近附きにもならぬお方の側へ行く事は、わしは否でござんすわいなア。

與五　さう云はずとも、ちよつとだ〱。

ト無理に手を取り、引ッ張つて來る。親仁、これを知らず、酒に戯れてゐる。

娘　わしや恥かしうござんす。

ト逃げようとするを、與五作、無理に突きやる。娘、義倘にこけかゝる。立退かうとするを、袖を捕へ

義倘　どつこい、滅多には逃がさぬ〱。コレ、わが身に問ひたい事がある。下に居や。

　ト無理に抱き寄せて、何やら囁く。
娘　其やうな事は存じませぬわいなア。
義衛　その知らぬ所が、猶好もしい。コリヤ。
　トまた囁く。
三人　こりや、堪へられぬ。
　ト右門は腰元一、豐前は腰元二、玄蕃は腰元三に、抱きつく
女三　なんぢやぞいなア。
　ト突き飛ばす。親仁、酒を呑みしまひ、
親仁　お琴は何處へ行つた。娘よ〳〵。
　トあたりを見廻し、この體を見て、大きに悔りし
　コレ〳〵、人の大事の娘を、斷わりなしに、どうするのだ。
　ト寄らうとする。軍八、隔てゝ
軍八　どうするとは、土百姓のわれが娘、北條家の若殿、小四郎君のお目に入つたは、娘が仕合せ。其方が果報。有り難い事だと思つて、見ぬ顔を致して居れサ。
親仁　なんと云はつしやる。すりや、あの和郎が、時頼さまの弟御
四人　北條小四郎義衛さまだ。

親仁　ト親仁、こなしあつて
　姫君には日頃の御念願相叶ひ、聟君へ始めての御對面、さぞ御滿足にあらせられませう。
娘　自らが喜び、推量してたもいなう。
皆々　なんの事だ。
親仁　御不審は御尤も。
　ト薹笠より、大小を出して、頭巾を取り向うへ出る。
　拙者事は、花山の中將道廣が雜掌、弓削新左衛門と申す者。即ちそれなる玉琴姫、兼ねてよりのお云ひ號け。お輿入れ延引ゆゑ、姫君には只管に若殿を慕はせ給ひ、姿をやつしお供せしも、御内祝言を調へん爲。何卒御結納の印たる、北條家の御寶、龍釣瓶の茶入れを賜はり、この場にて内々ながら、お杯の取交し、偏へに願ひ奉ります。
玉琴　不束ながら、お心には入らずとも、遙々慕うて參りしを、御不便に思し召し、二世を契りのお杯、皆の衆、よきに賴みますわいなア。
義衛　志し忝ない。幸ひ龍釣瓶の茶入れは、奉納の茶の湯興行せんと、別當方へ預け置けば、刑部どの、御苦勞ながら

刑部　心得ました。
ト上へ入る。
春庵　この上は取敢へず、略儀ながらも三々九度。
軍八　女中衆、お酌〳〵。
女皆　畏まりました。
トちよつと杯事あつて
與五　千秋萬歳。
皆々　おめでたう存じまする。
ト菖蒲、茶入れの箱を持ち、出て
刑部　茶入れ、改めてお受取り召され。
新左　ハッ。
ト改め見て
相違なき御茶入、確かに受納仕る。
軍八　御内證首尾のお杯、相濟みました上からは
與五　彈み切つてござるお姫様の初物を、ちよつと一切れ。
義衛　でも、それは、余り早急。
與五　これお彼の、下世話に申す、鰯網で鯛とやら。
玄蕃　イザ、申し、お姫様。
兩人　サア〳〵、お越し遊ばしませ。

ト神樂になり、義衛、玉琴姫が手を引き、一件皆々、鳥居の内へ入る。春庵、三木之進、軍八、殘り、こなしあつて
三木　春庵老、兼ねて主人彈正さまより、仰せつけられし一大事。
軍八　コレ、大切たる密事の相談、他聞へ洩れては事の破れ。
春庵　聞た御内意の彼の毒藥。
トそれと甲太鼓打込む。三人、愕り。幽かに絲返りの鳴り物になる。
軍八　心に蟠りがあるゆゑに、さしてもない事に、びく〳〵致す。
三木　して、その毒藥は。
ト春庵、懐中より、香包みを出し
春庵　砒霜斑猫は云ふに及ばず、あらゆる毒藥を調合して、練り上げたるこの丸き物。一度口へ喰べた者は、心血を吐いて忽ち落命。
三木　主人彈正義村公、大望の思ひ立し、北條時頼、畠之助なんど、あはよくば宗尊親王をも亡き者にし、武將の位お存ませんず結構。

ト神樂きびしく打ちかける。また悧りして飛び退き、[illegible]せ

軍八　エヽ、忌々しい。また肝を潰させ居つた。

毒庵　何を隠すも實は道中、人目に立たぬ爲めに、三木之進さまには、この毒藥。

三木　さ、さ、御主人へ差上げて、御褒美は追つての沙汰。

ト此の見得にて、三木之進、鳥居の内へ入る。毒庵、あたりを見廻し

毒庵　幸ひの好き天氣、其所へ密かのお話し。

軍八　身共とてもおてまへに、申し聞かす仔細もあり、

毒庵　マヽ、これへ／＼。

ト兩人、一緒になり

して、御相談の子細とは。

軍八　その様子と云ふは。

ト此の時よしげり、出て來る。この時

しげ　毒庵さん。

ト兩人が眞中へ入る。大きに悧り。

兩人　ハテナ。

ト飛び退く。しげりもこの聲に悧りして

しげ　アレエ。

ト逃げようとする。

毒庵　エヽ、何奴だと思つたら、しげりめか。

軍八　今日ほどビク／＼する日はない。

しげ　お二人さんの聲で、わたしも悧りしたわいなア。

毒庵　わりや娘が使ひに來たのぢやな。

しげ　アイ、八橋さんがお前に逢うて、この金を渡せとの云ひつけでござんすわいなア。

ト懷紙包みの金を渡す。

毒庵　オヽ、よく持つて來てくれた。忝ない忝ない。

軍八　八橋々々と云ふは、萬字屋の八橋が事か。

毒庵　面目ないが、わしが、實の娘でござりまする。

ト云ひ／＼、右の金を、紙入れへ入れるはずみに、藥包みを二つ落す。軍八、拾ひ、書附けを見て

軍六　井守樂、ハテ、こりや珍しい藥名だの。

毒庵　それは俗の俗に云ふ、井守の黒燒と云ふ物サ。

軍六　ハア、すりや、これは惚れ藥だな。

毒庵　和合の井守を引分け、これをよく黒燒にして、赤い包みは雄の方を、惚れてゐる女に渡し、白包みの雌の方は、此方へ持つてゐると、女めが氣を惡くして、べたべたと來る、奇妙不思議の妙藥サ。

軍八　さう巧く行けばいゝが、物は試しだ。コリヤ、しげり、ちよつとこれを持つて見ろ。

ト赤い包みを渡す。

しげ　アイ、これを持つて、どうでござんす。

毒庵　毒庵が妙術、効驗の見える所だ。

ト和らかなる合ひ方になり、軍八、びりびりと慄ふ。しげり、軍八をヂッと見て

しげ　小父さん、わたしやどうやらお前さんが、いとしいやうにござんすわいなア。

ト軍八に寄り添ふ。

軍八　身共も、われが可愛くつて〳〵、こりや堪へられぬ。

ト抱きついて、押しころばさうとする。毒庵、淌りして

毒庵　滑稽な。このいたいけな者をやらかしては、そりや牛裂きに合はすやうなものだ。

軍八　でも、こりや堪へられぬ。

ト引寄せるを

毒庵　オッと、どつこい。

ト毒庵、両方の包みを取つて

なんと奇妙か。

軍八　こりやア不思議だ。なんと、その薬を、身共に賣つてはくれまいか。

毒庵　望みとあれば、代物次第。

軍八　ハテ、身が望みさへ叶つた上は

毒庵　しつかり價を

軍八　皆まで云ふまい。承知々々。

ト二包みを取り

毒庵　しげり、われには、まだ用がある。

しげ　そんなら、お前と御一緒に

毒庵　サア、おちや〳〵。

ト輕業の鳴り物になり、毒庵、しげりを連れ、鳥居へ入る。軍八、こなしあつて

軍八　サア、しめた。斯う云ふ妙藥が手に入れば、常から惚れてゐる北條の腰元お露に

ト云ひ〳〵、うか〳〵行きかける。向うよりお露、屋敷腰元の形、日傘をさし、奴を連れて、思案しい〳〵出て来り

ため　昨日お文の様子では、大方今日はこの江の島へ、お出でなさる事もあらうか。

軍八　この赤い包みを、騙して渡す。向うからてたく＼／と
お出でる。
ため　お目にかゝりて何やかや、お話し申す事もあり
ト云ひ＼／、眞中へべつたり、お爲が日傘、軍八が頭
へ當る。
軍八　アイタ＼／＼／、こりや、どうしやアがる。
ため　ハイ＼／、お免しなされて下さりませ。不調法でご
ざりまする。
ト顏見合せ
軍八　おぬしア腰元のお爲でないか。
ため　ヤア、軍八さん。
ト入れ違うて、逃げようとするを、キツと捕へ
軍八　どつこい、我れに逢ひたうて＼／、と云ふは外でも
ない。コリヤ＼／＼／。
ト右の赤い包みを出し
御遷宮につき、別當から出る此お守り、これをわが身に
遣らうと思うて、今持つて行く所ぢや。
ため　御題目は有り難うござんすが、わたしやあの法華宗、
それで外のお守りは持ちませぬわいなア。
奴　どうぞ、私しに頂かせて下さりませ。

軍八　うぬに惚れられてつまるものか。
奴　どうぞおくれなされませ。
ト無理に取らうとする。
軍八　忌々しい奴だ。
ト頭を張る。
奴　アイタ＼／＼／。
ト逃げて入る。
軍八　折角おれが思ひ思うて、頂いて置いたお守りだ。ち
よつとなと持つてたも。
ト無理に懷へ入れようとする。
ため　エヽ、否でござりますわいなア。
軍八　ハテ、さう云はずと。
ト持たせる。
ため　アタしつこい。
ト持つて、向うへ逃げる。軍八、ちやつと取上げ
軍八　これはしたり。
ため　知りませぬわいなア。
ト揚げ幕へ、逃げて入る。
軍八　コリヤ、待て＼／。
ト追ひかけ入る。始終輕業の鳴り物になり、鳥居より

豐前、刑部、玄蕃、右門、出て

右門　玄蕃どの、稲田氏、日頃三浦御親子の企てに一味の我れ〳〵。

豐前　事首尾よく成就いたせば、立身出世は思ひのまゝ。

玄蕃　それにつけても、三浦氏の妨げとなる源左衛門常世。

刑部　彼奴を科に得て落す、好き分別がありさうなものだが。

　ト向うバタ〳〵、神樂打ちかける。トお袖、屋敷者の拵らへ、ぶッ裂き羽織、一本差しにて、左にて軍八を捩ち上げ、右にお爲が手を引き、ツカ〳〵と出て來り

軍八　アイタヽヽ、女郎め、コリヤ、身共を、なんと致す。

そで　ホヽホヽヽヽ、これはまた御山な。女中を捕へて途中の狼藉、見兼ねてちよつと挨拶を

　トほぐして、見事に取つて投げ

致したのでござりまする。

軍八　ハテ、痛い挨拶だ。

玄蕃　頭は女、形は男、なんとも怪しいうぬが格好。全體うぬは

四人　何者だ。

そで　佐野源左衛門常世が譜代、舟橋勇介が女房、袖と申す者でござりまする。

豐前　ハヽア、勇介とやらが女房は、女に稀な力量手利き。

刑部　今巴と鎌倉中に、噂のあるは其方だな。

そで　この度の御選當、昵近外様の末々まで、家に譜代の家來を以て、警護の役目と兼ねてのお觸れ。小身の源左衛門、譜代の者と申しては、舟橋勇介只一人、折惡しう主用にて、都方へ火急の使ひ。是非に及ばず夫の名代、あられもないこの姿。お恥かしう存じまする。

軍八　ヤイ、女郎め、如何に住でお行いたとて、當時鎌倉の出頭たる、三浦が家來の藤田軍八、手篭めに致しても大事ないか。

そで　ずんと苦しうござりませぬ。

軍八　なんと。

そで　非常を戒す警護の役目、不淨を避むる御社内にて、見苦しい女中へ狼藉。但してお前ばかりは、理不盡をなされても、お家の掟が立ちまするか。

軍八　サ、それは。

そで　夫へましたは、わたしが不調法でござりまするか。

軍八　サア、それは。

そで　この様子をお前の御主人、三浦さまへ訴へませうか。

軍八　サア、それは。

それそ　申し、どうでござりますぞいなア。

ト背中を、柔らかに叩く。軍八、ちやつと體をすくめ

軍八　ハテ、よくしやべる女だなア。

ト白丁の宮奴、出て

宮奴　皆々様、奉幣の刻限でござりまする。

右門　いづれも、神前へ相詰めませう。

豊前　軍八、おてまへも、イザ、同道。

軍八　イヤ、私しは、暫らくこれに

ト[illegible]。

そで　お前を爰に置きますと、皆へに申す猫に鰹節。

軍八　それ、爰に持参の[illegible]あたりへヤッ張つて、

アイタヽヽ。

ト爰を抱へる。

そで　昔様なら何ながら、お手を取つて上げませう。

軍八　イヤサ、それでは

そで　ハテ、御神前には[illegible]ませぬ。

ト逆手に取つて、グッと捻ち上げる。

軍八　コリヤ〳〵、免して下され〳〵。

そで　サア、女中さん、お前も一緒に。

ため　思ひも依らぬ、いかいお世話。

そで　先づ、なんにも云はずと……いづれも様。

四人　イザ、神前へ。

そで　先づ。

トぐつと捻ち上げる。

軍八　アイタヽヽ。

そで　お入りあられませう。

ト神樂になり、お袖、軍八を引立てながら、皆々鳥居の内へ入る。この時軍八、紫の包んだる赤包みを、落して入る。矢張り右の鳴り物にて、向うより玉淵眼之丞、上下にて、金二百兩を臺に載せて、うや〳〵しく捧げ出る。後より佐野次郎左衛門、着附け、袴、深編笠にて、出て來り

次郎　アイヤ〳〵、それへござるは北條家の御家來、玉淵眼之丞どのではござらぬか。

ト眼之丞、立ちとまり

眼之　お聲はどうか承つたやうなが

次郎　イヤ、拙者でござる。
ト編笠を取る。
眼之　どなたでござる。
ト次郎左衛門が額の側へ、我が額を突きつけ
これは源左衛門どの、御舍弟、次郎左衛門どの、先づ以て御安泰。
次郎　其許様にも、御無事の體。
眼之　元來拙者老眼と申し、殊に至つて近目ゆゑ、お見外れ申した。眞平〱。
次郎　イカサマ、さぞ萬事御不自由にござらう。
眼之　御推量下されい。
次郎　少とおてまへに、折入つてお話し申す儀もござれば
眼之　幸ひの折柄。
次郎　あれなる床几へ參りませう。
眼之　ハア、床几がござるかな。
ト額へ手を當て、透し見て
見えます〱。
次郎　先づ〱、お越しなされい。
ト兩人、本舞臺へ來て、眼之丞、床几へ行き當り
眼之　どつこい。
トちよんと腰をかけ
サ、お掛けなされい。
ト次郎左衛門と同じく掛け
次郎　眼之丞どのには、金子を持參の體。さては造營の御用でござるかな。
眼之　イヤ、左樣ではござらぬ。近々我が君宗高君、奧州武隈の松、御上覽あるべき上意。即ち同國中田川は、日本無双の早瀨ゆゑ、舟橋をかけ渡し、自由に通路いたすが先例。
ト此うちお鶴、後へ出かけ、次郎左衛門を招く。次郎左衛門、氣の附かぬこなしにて、煙草のみ居る。お鶴、辛氣と、紙を揉んで、次郎左衛門に當てる心にて、眼之丞に當てる。眼之丞、愕りして、あたりを見廻す。
次郎　して、如何でござるな。
眼之　右舟橋の請負ひは、貴公の御舍兄源左衛門常貴どのの取持ちにて、當所の町人、植木屋文藏、この度の御用を承る。
ト お鶴、及び腰にて、次郎左衛門が背中を叩かうとして、思はず眼之丞が頭を、扇にてびつしやり。次郎左衛門、矢張り氣の附かぬ心にて

次郎　イカサマ、承り及んだ舟橋の請負ひ、北條家より文藏へ、拝借金千兩。

眼之　今日は吉日なれば、別當方へ文藏を召寄せられ、お金二百兩、若殿より直々に、御拝借あるべき筈、拙者金衞の備でござるゆゑ、これまで持參いたしたのでござる。

ト此うちお爲、次郎左衞門、顔見合せて、お爲、扇にて招く。次郎左衞門、眼之丞が頰ぺたへ、燒け煙管をあてる。

アツ〳〵〳〵。

ト次郎左衞門、愕りして

次郎　これは粗忽を致した。御勘下されい。

眼之　怪我過ちはまゝある事、苦しうござらぬ。

トこの紛れに、お爲、次郎左衞門が手を取上げ、上座の方へ連れて行く。眼之丞、あたり見廻し

次郎左衞門どの〳〵。

次郎　これに居りまする。

ト上座より云ふ。

眼之　てまへ、それに何をなされてござる。

次郎　ヘイ、イヤ、神職齋宮どのと、内談の儀がござる。暫らくお控へ下されませい。

眼之　おゆるりとお話しなされい。

ト次郎左衞門、上座の端へ連れて行て

次郎　お爲、其方はどうした事。とんだ所へ出て來て、愕りさせたわえ。

ため　サレバイナ、今日は奥樣の御代參やら、また若殿樣の御口上。ひよつとあなたと間違つてはと、心遣ひを致しましたわいなア。

眼之　ハテ、齋宮どのには、優形な事だな。

ト次郎左衞門、愕り。

次郎　もそつと其方へ〳〵。

トまた上座へ連れ行き、床几へかけ

先づ其方は都生れ、花山家の雜掌、弓削新左衞門どのに仕へし、北山治兵衞の娘との事か。

ため　樣子あつて母樣諸とも、この鎌倉へ參りまして、今では北條家へお宮仕へ。

次郎　コレサ、そんな話しは取措いて、斯う云ふ首尾は又たまさか。もそつと此方へ寄つたがよい。

ト手を取つて、引寄せる。

ため　それでも、あの親仁が見てゐるわいなア。

次郎　大事ない。彼奴は近眼だ。
眼之　ハア、くつさめ。
次郎　眼は近いから、耳は遠い。心遣ひをするには及ばぬ。
　　トお爲、首にかけたる守りより、起請を出し
ため　これを見て下さりませ。
　　ト次郎左衛門、取つて開き
次郎　こりや起請ではないか。
眼之　見たぞ。見附けたぞ。
次郎　眼之進どの、何を見附けさつしやれた。
眼之　イヤサ、先程より、襟元がみじ／＼致すゆゑ、探りましたら、コレ、虱を見附けました。
次郎　飛んだ事を云はるゝゆゑ、びく／＼致すはえ。
　　トお爲、こなしあつて
ため　わたしが心はそれが證據、あなたも必らず
次郎　一旦誓うた武士の契約、違變いたしてよからうか。
ため　エヽ、嬉しうござりますわいなア。
　　トびつたりと抱きつく。
眼之　抱きついたな。
次郎　ヤア。

　　トちよつと別れる。
眼之　女虱と男虱と、武士の襟元で出合ひの親しみ。慮外者め。
　　トひねり殺すこなし。お爲、手を取り
ため　まだ何やかやしつぽりと、お話しも致したけれど
次郎　目先にちら／＼、邪魔な雜人めし。
ため　神職様の小座敷で
次郎　積る話しを、云うたり聞いたり。
ため　次郎左衛門さん。
次郎　お爲、おおや。
　　ト神樂になり、次郎左衛門、お爲を連れて、鳥居の内へ入る。引道へて、お國、出て
くに　眼之丞さま、これにござりますか。若殿小四郎さまのお待ち兼ね。別當方へお越しあられませう。
眼之　承知いたした。只今それへ。次郎左衛門どの、御談が濟んだらば、御同道申さうか。
くに　申し、あなた、そりや何を仰しやるのでござりまする。
眼之　次郎左はそれに居られぬか。
くに　イエ、どなたも居てゞはござりませぬ。

隈之　あの鳥居の内のはなんだ。
くに　おりや、金精の木でござります。
隈之　ムウ、植木と人間と間違ひしは
くに　エヽ。
隈之　近眼の誤まりだな。
ト中腰になり、金を大事に、高々と鳥居の内へ入る。
くに　何の事だやら。とんと訳が知れぬ。
ト云ひながら、最前の軍八が落して入つた赤い包み紙を見附け
何やら達に、變つた物が
ト取上げ、見て
なんでもこれは密書ださうな。好い物を拾うたわいの。
いつの間にやら、隈之丞さま隈之丞さま。
ト呼び／＼、鳥居へ入る。引違へに、與五作、奥より出て来り
與五　アヽ、退屈や／＼。兎角下戸と云ふものは、酒の座敷ではキツとする。相模灘を見晴らして、茲で一服と出かけようか。
ト床几へ腰をかけ、煙草のむ。てんつつになり、向うより軍八、刀の柄に状箱を括りつけ

飛脚　エイサツサ／＼。
ト走り出て、本陣茶屋へ来て
コリヤ／＼、若い者、もう何時だ。
與五　されば、まだ四ツ半、九ツにはなりませぬ。
飛脚　思つたより早く参つた。ヤレ／＼、づない汗を掻いた。ドレ、一服吸つて行くべい。
ト刀を下に置き、床几へかける。
與五　飛脚は、どれからどれへござるのだ。
飛脚　身は京都今出川宰相どのより、當地へ密書のお使ひだ。
與五　して、鎌倉は、いづれへござりまする。
飛脚　即ち
ト云はうとして
イヤ大切なる密使なれば、参る先は申されぬ。
ト與五作、こなしあつて
與五　聞き及んだ悪公家どの、密書の使ひとあるからは、どうで碌な事ぢやア。
飛脚　ヤア。
ト與五作、氣を替へ
與五　イヤサ、おてまへ様は、下戸か上戸か。

飛脚　ハテ、異な事を問ふ男だ。

與五　なる口なら、一杯振舞はうと思つて。

飛脚　そりや有り難い。酒と聞いては目のない男だ。

與五　待たつしやい。

ト　たんぽ、茶碗、肴鉢を、一緒に持つて出て

御遷宮の施行酒。遠慮なしにやらつしやれ。

飛脚　これは〳〵、好い所へ參り合せ、思ひがけない御馳走にあづかる。然らばお辭儀なしに頂きまする。

ト注いで吞む。與五作、捨ぜりふ云ひながら、刀をソツと取つて、狀箱を開き

與五　上書きは上とばかり。

ト封を切り、讀みかける。

飛脚　若い者、お前も一つ。

ト振返り、見て

ヤア、わりや大切のその御狀。

ト與五作、ちやつと後へ隱し

與五　イヤ、端の所を見たばかりサ。

飛脚　うぬ、とんだくらひ坊め、その御狀開封しては、御主人へ云ひ譯がない。何にもせよ、此方へ返せ。

與五　イヤ、ヤ、ならぬ。

飛脚　なんと。

與五　合點の行かぬこの密書、滅多には返されぬ。

飛脚　さう云ひやア、うぬ。

ト取りにかゝる。立廻つて

與五　この樣子、常世さまへ。

ト駈け出す。

飛脚　どつこい、ならぬ。

ト引き戻す。神樂早めにて、兩人、狀を奪ひ合ひながら、立廻りあり、鳥居の内へ入る。引違へて軍八、最前の二百兩を持つて、出て來て

軍八　親仁めが近眼を幸ひ、まごついて居る間に、ちよいと占めた二百兩。こやりコレ北條家の軍用金、悪くねえ奴だ。

トにつこり笑ひ

先づこれは、たぼ〳〵と致して置いて

ト懐へ納める。お爲が持つてゐた起請を出し

腰元のお爲が、次郎左衛門へ遣るこの起請。これを證據に二人の奴等を、不義の科に取つて落す。

ト云うて居るうち、お爲、起請を尋ねる心にて

ため　面妖な。滅多に落さうやうはないが。

ト云ひ〳〵、出て來る。軍八、ほふと抱きつく。

軍八　サア、占めたワ〳〵。

ため　ヤア、軍八さま、アタしつこい、又かいなア。

軍八　その股から起つた臺詞。こりやどうも堪へられぬ。

ため　アタ穢らはしい。否ぢや〳〵。

ト突き退けて、逃げ廻ると、軍八、追ツかけ廻る。ドドお袖、障子の内へ逃げて入る。軍八、續いて駈け込む。直ぐに障子引拔く。ト内にお袖、莨盆扣へ、簪にて、煙管の雁首をさらへて居る。

軍八　うまい。

ト思はず抱きつく。お袖、片手業取つて、投げる。軍八、引繰りして

ヤア、われは

そで　ヤア、軍八さんとやら、又しても〳〵、狼藉な。なんとなさんす。

軍八　ヤア、たつた今この内へ

そで　どうしたと云はしやんす。

軍八　これは妙だ。そんなら慥かに

ト鳥居の方へ行かうとする。次郎左衞門、出て、突き廻し

次郎　これは熊田軍八どの。

軍八　佐野の舍弟次郎左衞門。

次郎　そわ〳〵と何事でござるな。

ト軍八、右の起請を、思はず床几の上へ置く。お袖、取つて、平舞臺へ下りる。

軍八　あの女は、おてまへの召使ひでござるか。

次郎　誠に其方は下女の袖。

そで　若旦那樣。

ト軍八、こなしあつて

軍八　次郎左衞門どの、あの女郎め、手討ちにさつしやれ。

ト此うちお袖、思ひ入れあつて、屋體の端に張つてある、早流しの看板をめくり、起請をソツと摺り替へて置く。次郎左衞門、こなしあつて

次郎　袖、それへ出よ。

そで　ハツ。

次郎　うぬ、憎い奴だぞよ。お指圖の通り、この場に於て、手にかける奴なれども、高の知れたる女わらべ。殊には又、鳥居先にて血をあやすは神への恐れ。軍八どのへの申し譯に、これより直ぐに暇をくれる。

そで　エ、。

次郎　イヤサ、主持たぬ身の氣散じに、誰れ人に慮外せうか、何者に無禮があらうか。外へ祟りは少しもかゝらぬ。ナ、合點が行たか。

ト軍八を尻目にかけ、呑み込ます。お袖、思ひ入れあつて

こて　成る程、お暇頂きましてござりまする。

次郎　心得たらば、早く立て〳〵。

こて　ハツ。

ト合ひ方になり、惜々花道へかゝり、よき所にて、チツと下に居て

軍八さま、ちよつとそれへ出さつしやつて下さりませ。

軍八　なんと。

こて　ちとお願ひの筋がござりまする。

軍八　アノ、身共にか。

こて　御苦勞ながら

ト軍八、本舞臺へ出る。次郎左衛門は床几にかけ、眞中に莨のみながら、見てゐる。

軍八　女郎め、詫びの願ひなら罷りならぬぞ。

こて　イヤ、あながち左樣でもござりませぬ。

軍八　して又、身共へ願ひとは

こて　憚りながら私しと、眞劍の勝負なされて下さりませ。

軍八　ヤア、。

こて　あなたのお詞只一つで、お主樣には見捨され、立歸る方もない身の上。どの面提げて夫へ云ひ譯。せめて見事にお手にかゝるか、但しあなたをすつぱりと

ト軍八、慄ふ。

サア、女を相手に眞劍勝負、御仁體にもと思し召さうが、お侍ひ樣のお情づく。また斯う申し出しますからは、否とあつても一寸も、いつかなその場は立たしませぬ。覺悟極めて尋常に、相手になつて下さりませいなア

トしか〳〵と、本舞臺へにじり寄る、軍八、慌て、

軍八　これはしたり、さりとては短氣な女だ。急くな、騷ぐな。待て〳〵。

ト次郎左衛門に向ひ

次郎左衛門どの、あの女、今までの通り召使うて遣はされい。

次郎　相成りませぬ。當時出頭第一たる、三浦どのゝ御家來へ、無禮いたす不敵な女め、此まゝ召使うてはお祟りが怖うござる。こりや女、暇を遣はし、高みから見物

いたす所、拙者が實の弟でござる。

軍八　ハテサテ、それは野州瀧千萬。只今貴公の仰しやる通り、高の知れた女故に、赦してやるお情でござる。

次郎　すりや、御自分の無禮者めも、料簡なされて遣はさるゝか。

軍八　佐野軍八は瀧口大臣、左樣な儀にはかゝりませぬ。

次郎　重々憎い奴なれども、御自分の寛容に免じ

軍八　赦してやつて下さるか。

次郎　袖、これへ來よ。

そで　ハッ

ト本舞臺へ出る。

次郎　料簡ならぬ場所なれども、御挨拶ゆゑ今は赦す。軍八どのは瀧口大臣、お禮申せ、お禮申せ。

そで　段々有り難う存じます。

ト樂屋、バタ〳〵にて、三木之進、お國を引立て、お閑、その他、女中々、東へ出る。

くに　コリヤ、お國どのを

皆々　なんとなさんす。

三木　不淨を淸むる神事の場所にて、不義働らいたこの女郎め。

ト突き放す。

くに　して、その不義の相手と云ふは。

三木　外でもない、それに居る佐野が弟、次郎左衛門。

次郎　イヤ〳〵、三木之進どの、身に覺えなき不義の虚言。

三木　云ふな〳〵、別當の小座敷にて、兩人乳繰り合つてゐるを、高い鼻で嗅ぎつけて、黒い眼で睨んで置いた。先づこの女めから先へ

トかゝらうとする。お袖、ツツと寄つて、三木之進を引き廻して

そで　見たとばかりは証拠の讒言、詮議の種にはなりますまい。

三木　オヽ、さうだ。

ト最前の書付けを持つて出る。お國、軍藏を見て、ビリ〳〵と慄ひ

くに　コレ、申し、軍八さん。

軍八　なんだ。

くに　わたしやお前に、あのな

軍八　ヤア。

くに　惚れましてござんすわいなア。

ト抱きつく。

軍八　そのしやツ面で、忌々しい。

ト突き飛ばす。

くに　そのしやツ面とはお胴慾。どうした昧な縁ぢやヽら、お前のお顔をフッと見ると、わたしや身も世もあられぬわいなア。

ト軍八、思ひ入れあつて

軍八　ハテ、心得ぬ。今只ならぬ聲音を聞くと、身共忽ち心動いて。

くに　アレ〳〵〳〵。

軍々　ソレ〳〵〳〵。

ト兩方より側へ寄り、ぴつたりと引ッ附く。三木之進、引退けて

三木　エヽ、見苦しい、なんの事だ。馬鹿盡さずと不義の證據を

軍八　實に誠、誤つたり、抜差しならぬこの一通、腰元のお爲が、次郎左衛門へ送る起請。

ため　ヤア、それを

ト寄らうとする。

三木　動きやアがるな。

ト引きつける。

早く開いて、詮議さつしやい。

ト軍八、書附けを開けようとする。お袖、キッと押へ

そで　軍八さん、待たしやんせ。

軍八　また邪魔をするかやい。

そで　萬に一つもこの書附けが、起請でない時には

軍八　我れ〳〵が不調法、存分に相成らう。

三木　この三木之進とても相違いたせば

兩人　首をくれるワ。

そで　キッと詞を番ひましたぞ。

ト次郎左衛門、お爲、顔見合せ、心遣ひのこなし。軍八、書附けを開き

軍八　中條流月水早流し。ヤア、これは

三木　馬鹿々々しい、何を云はつしやる。

ト引ッたくり

代三百文、二月目六百文、三月目九百文。ヤア〳〵〳〵ヤア、こりや堕胎藥の看板。

軍八　たつた今まで……ハテ、面妖な。

トお國、こなしあつて

くに　どう思ひ直しても、深山烏や野寺の猫、我が夫猫は

知ると云ふ。
軍八　まして戀しい妻の顔。
くに　見るに心も呉竹の
軍八　アレ／＼／＼。
くに　ソレ／＼／＼。
ト兩人、双方より寄つて、引ツつく。お袖、蘿明きの息杖を取り、ツッと寄つて、お園を引退け、軍八をぶちのめす。お園、來る所を、ちよつと當てる。三木之進、それをと寄るを、裾を拂つて、二人をりう／＼と打ち据ゑる。この時お園は赤い包み、三木之進は香包みを落す。
三木　女郎め、また武士を
兩人　打たやすがつたな。
そで　打つたばかりおやでござんせん。お前方の此お首は、こりやわたしが物ぢやぞえ。
ト思入にて、首級を撫でる。兩人、エ、と竦む。
申し、若旦那様、お邪魔ながらお二人のお首を、ちよいと切つておしまひなされませ。
ト大島左衞門、向うへ出て
次郎　イカサマ、初めからの約束なれば、よしない殺生とは思へども、お首を申し受けずばなるまい。
ト刀に手をかける。
軍八　ア、これサ／＼、重々の不調法。
三木　武士が土邊に兩手を突き
軍八　頭を下げてお詫び申す。
三木　命ばかりは
兩人　お助けなされて下されい。
次郎　袖、如何いたしたものであらう。
そで　サレバイナア、斯う見たところがお二人とも、余り滿足なお首でもござりませぬ。
兩人　左様々々。
次郎　此方へ申し受けたところが、なんのお役にも立つまいから、各々の胴體へ、暫らくお預け申して置からか。
軍八　暫らく／＼と仰しやらずと、長うお預かり申しまする。
トこなし。バタ／＼にて、侍ひ、鳥居より出て
侍ひ　御遊獵の刻限とあつて、諸大名、裏道より、相詰められてござりまする。
次郎　はや田獵の時刻とな。
侍ひ　早くお越しあられませう。
次郎　ナニ、袖、身共は直さま御狩のお供。其方は跡に殘

り

トお縫を教へ、軍八を見て

心得たか。

そで お氣遣ひ遊ばしまするな。承知いたして居りまする。

次郎 いづれも、お先へ。

ト辞儀になり、氣を急き、向うへツツと入る。お縫、跡見送り

ため お袖さんとやら、思ひも依らぬ

そで ア、申し、必らず物數仰しやるな。何事も皆、わたしが胸に。

ため よいやうに頼みますぞえ。

トお袖、お関を見て

そで いとしほさうに、お関どのを

トちよつと活を入れる。お関、ウンと心付き

イヤ、お二人さん、さぞお腰が痛みませう。次手に撫つて上げませう。

三木 イヤ、それには及ばぬ。懲りた〳〵。

トお関、氣の抜けたやうになつてゐる。

そで コレ、お関どの、しつかりとさんせいなう。

くに 夢に夢を見てゐるやうで、心で心が儘ならぬわいなア。

ため まだお前には何やかや、話したい事もあり

そで 別當さまへ參りませう。

皆々 そんなら一緒に

ため お袖どの。

三軍 思へば〳〵。

ト立たうとして、

アイ〳〵、、、。

そで ホヽヽ、サア、參りませう。

ト辞儀になり、女皆々、お関、お袖、鳥居の内へ入る。跡で兩人、顔見合せ

三木 軍八、なんと、手ひどい目に遭つたではないか。

軍八 顔の皆が[illegible]らからうなりました。

ト鳥居より、壽庵、出て來り

壽庵 御兩所、こりや何の體でござる。

三木 壽庵老、なんと、打つ手によい計はあるまいか。

壽庵 あるとも〳〵。

トこなしあつて、呼子を吹く。以前の新左衛門、下部を連れて出て

新左　毒庵どの、娘が世話に使つて、してやつた酒肴の茶入れ。慥かにこなたへ渡しまする。

ト渡す。

毒庵　大儀であつた。褒美の金。

ト渡してやる。

新左　忝ない。サア、娘、來い。

ト引ッ立てる。

玉琴　父さん、どうぞま一度、今のお方に

新左　それに逢はして堪るものか。

玉琴　それでもわたしや

新左　うせいと云ふに。

ト玉琴、跡を振返り／＼、新左衛門に引立てられて、向うへ入る。

毒庵　徳利の茶入れを幸ひに、北條家を滅ぼす工面。

二人　兎角邪魔なは源左衛門、手短かに討取る手段は。

軍八　その分別は、コレ

ト囁く。

三木　オヽさ、田野の歸りを待ち受け

軍八　手前の首に申しつけ

三木　小陰から只一打ち。

軍八　お先へ參る。

ト行かうとして

サア、ないワ／＼。

トあはてる。

毒庵　何がどうした。

三木　最前拾つた、蘭の焚き物。

ト[illegible]が落して入つた香包みを見付け

あつたぞ／＼。

ト懐へ入れる。

毒庵　それは重疊。

軍八　早くござれ。

三木　合點だ。

ト行かうとして、ピリ／＼と慄うて、軍八に引ッつく

軍八　コリヤ、何をする。

三木　イヤサ、これは

軍八　ハテ、馬鹿々々しい。

ト突き飛ばす。

三木　ハテ、面妖な。

ト三木之進、後ろ髪引かるゝこなしあつて、向うへ入る。

軍八　これもよし。猶この上の密談は
毒庵　道々密かに
軍八　毒庵老。
毒庵　軍八どの。
軍八　來やれ。
ト禪樂になり、兩人、向うへ入る。とバタ／＼にて、與五作、飛脚、狀を奪ひ合ひ、出る。お袖、眞中へスッと出て、引ッたくる。
與五　ヤア、姉者人。
そで　弟、與五作。
與五　心得ぬその一通。
飛脚　それを。
トかゝるを立廻りて、胸倉を締め上げ
そで　讀んで見や。
ト捻る。與五作、取上げ
與五　ナニ／＼、お望みの神息の長刀、先達て奪ひ取り、相渡し候ふ上は、その節約諾の條々、相違なく賴み上げ候ふ。以上。
そで　して、その宛名は
與五　破れてあれば
そで　詮議の手蔓は、コレ、この
ト飛脚を見る。飛脚、目を剝出し、死んでゐる。
與五　南無三、ふつと。
そで　ハテ
ト手を放すと飛脚、バッタリこける。チョンと木の頭。與五作、狀をすつぽりとかぶる。お袖、死骸へ指さし
殘り多い。
トきざみにて
幕

二幕目　霞ヶ丘[illegible]野の場

役名――[illegible]、宗高君。三浦[illegible]司義村。三浦荒次郎義高。北條義時。原田六郎。前田[illegible]、青木主膳。松浦右門。米村刑部。熊田軍八。司備六内。佐野次郎左衛門。佐野源左衛門常世。

造り物、通しの二重[illegible]、蹴込み草土手、見付け[illegible]、黄菊、板橋、よき所に松の木、人の登る仕掛け。右の二重の眞中に、宗高公、[illegible]の[illegible]、[illegible]、[illegible]小手、

虎の皮のむかばき、太刀を佩け、烏帽子にて、中啓を持ち、高床几にかゝり居る。殿立ちの侍ひ、朱の長柄をさしかけて居る。小姓、小太刀を持ち、後に扣へる。左に三浦義村、ぶッ裂き、馬乗り袴にて、中床几にかゝる。右に北條小四郎、ぶッ裂き狩衣、股引、次に須田六郎、同じ形。稲田豊前、荒木玄蕃、秋浦右門、米倉刑部、同じ拵へにて、双方に別れ並び、平舞臺上の方に、三浦荒次郎、同じくぶッ裂き、股引にて、陣笠を着て、高床几にかゝり、弓を突ッ張つてゐる。下の方に佐野源左衛門常世、次郎左衛門、同じ形、弓を持ち、並ぶ。鷹匠、勢子の者、後に控へる。賑かなる大小の鳴り物にて、早笛、引返す。

義村　我が君の御前へ申し上げまする。今日の御遊獵、天氣も晴朗、一入のお賑み。斯く申す彈正とて、若手の面々が獲物の甲乙も見申したく、まつた御機嫌伺ひかたがた、これまで伺候仕つてござりまする。

宗尚　老人の大儀さゝ、我れいやしくも勅に依つて、武將の位に就くと雖も、執權たる時頼は、當春より都在番。其方有職の司として、門外の政治を取行ふ。予は大内にて人となり、武夫の道に疎ければ、彼れらが弓矢を試みて、導きともなさんが爲に、僅かに催ふす今日の遊獵。方々、誠心を盡してよからう。

荒次　ハッ、こは有り難き君の御賢慮。治に居て亂を忘れざるは、これ卽ち武門の常。

小四　就中佐野氏には、先祖源三位賴政より、代々傳はる射術の家柄。

六郎　殊に親父兵衛には、養由をも欺く名人。御兄弟の手練の程もさぞあらんと、奥床しう存ずる。

源左　こは思ひ依らざる仰せ。御存じの如く、父兵衛、先年聊かの誤りに依つて、親子諸とも御不興を蒙むり、舊領佐野の庄に引籠り、浪々の身と罷りなりしを、時頼公の仁心にて、やうやくに御免の上意。斯く再勤は致すとも、小身外樣の我れ〳〵兄弟。田舍手業の隱されず、御賞美の御意にあづかり、却つて赤面仕つてござりまする。

次郎　兄常世申す如く、武藝未熟の我れ〳〵なれば、各々の後に隨ひ、雀一匹鳩一羽、少しなりとも御手柄の、御相伴を仕りたうござりまする。

豐前　イカサマ、それは、好い心掛け。お鷹狩は太平の戰

場。

右門　別してそれにござる荒次郎どの、御親子の忠義を受け繼ぎ

刑部　重ね／＼手練の弓矢の稽古。今日の御遊にも、天晴れ高名あるは必定。

玄蕃　御兩人とも、義高どの丶お手柄にあやかるやうに、神佛でも精出して、祈らつしやるがようござる。ナウ、各々。

三人　左樣でござる。

義村　コリヤ、いづれも、人も無げに、そりや何を云ひ召さる。尤も侍めも日頃より、弓馬の稽古怠りなく、申しつけてはござれども、若輩の荒次郎。佐野氏兄弟には、なんとして、及び難い儀でござる。

荒次　併し、武器を用ゆるまでもなく、當時三浦が領分には、小鳥なぞは羽を縮め、拙者が一眼睨むや否、バタリバタリと落ちるでござらう。ハヽヽヽ。

豊前　御意の通り。

四人　おうらやましい儀でござる。

　ト云ふ。バタ／＼にて、軍八、股引にて、出て來り

義八　小四郎さま、これに入らせられるか。一大事出來仕つてござりまする。

義時　三浦の家來鎌田軍八、義時に一大事とは。

軍八　先刻社の境内にて、花山どのの雜掌、弓削新左衛門と名乘りましたは、元は駒六と申す昔の何木なりと、心得顯仕つてござりまする。

義時　ヤヽ、すりや、實…を、噂り來らんず穩であつたか。ホヽ、ホイ。

　ト當惑のこなし。

六郎　小四郎どの、もと鎌倉の茶入れと申すは、右大將頼朝公より、御家の先…どのへ、勳功の賞として、下し賜はりし門…の…、在家の習守と云ひ、申し譯の筋はござるか。心を鎮めて御思案あれ。

　ト義時、こなしあつて

義時　その申し譯は、頼う

　ト刀に手をかける。

次郎　アイヤ／＼、御短慮めされな。寳紛失の罪人は、斯く申す拙者でござる。

皆々　なんと。

次郎　今日社の別當に於て、茶の湯興業、名器は即ち、義時どのより拙者が、サ、…左衛門がお

預かり申してござる。さすれば紛失はこの身の科。不調法の段、恐れ入りましてござりまする。

ト源左衛門、少し急いて

源左　ナ、、なんと云ふ。大切なる北條家の御寶、よもや汝が

次郎　サ、、、隱すより顯はるゝはなしと、父を始め我れ我れまで、君の御勘氣蒙りしを、斯く再勤仕るは、北條家の御仁惠。せめて大恩の百分一、報ずるは今この時。イヤサ、報ずべき時節もなく、却つて御舍弟たる義高どのゝ御難儀を引出し、お家の寶を失ひしは、拙者が武運の盡きたるところ。如何やうとも御刑罰、仰せつけられ下さりませう。

源左　ムウ。天晴れの不屆き者、親人この由お聞きあらば、さぞ……云はうやうもない人外めが。

[illegible]次　賴朝公より下し置かるる、國源の名器を失ひしは、君を輕んじ、執權職を蔑ろにせし次郎左衛門。親人、この場の御政道は。

義村　縛り首も討つべきなれども、輕く行ふ仁政を以て、即刻切腹申しつける。[illegible]が情の裁斷。よもや批判はござるまい。

次郎　刑罰極まる次郎左衛門、切腹仰せつけらるゝは、武士の冥加に叶ひし仕合せ。御苦勞ながら兄者人、御介錯下されい。

源左　云ふにや及ぶ。最期を清う。

次郎　ハツ。

ト宗高へ一禮して

我が君、各々。おさらば。

ト刀に手をかける。

宗高　あれ止めよ。

義村　次郎左衛門、待ちやれ。

次郎　イヤ、この期に及び

六郎　君の上意。

次郎　ハツ。

ト平伏する。

宗高　少[illegible]なれども名家の血筋、殊に又、器物の爲に、命を斷つは仁政に非ず。生害には及ぶまい。

豊前　して、國法

四人　御政道は

源左　兄たる源左衛門、其方に任す間、私しなく計らうてよからう。

次郎　ハア、。
ト手を突く。
實に栴檀は二葉よりと、御幼年にましませども、下を憐れむ御仁德。
次郎　五臟六腑に徹しまして
兩人　有り難う存じ奉りまする。
ト源左衛門、改めて次郎左衛門を連れ、出て
源左　弟、、勘當だ。
次郎　ナニ、此まゝに御勘氣とな。
源左　御助命の君の御恩、必らずともに忘れまいぞ。
次郎　心魂に徹し、承知仕つてござりまする。
荒次　軍八、帶劍の取上げい。
軍八　ハツ。兩腰を渡しやれ。
ト次郎左衛門、大小を拔いて、渡す。
源左　改めて勘當の印。
ト我が刀を差出す。
次郎　すりや、其お刀を
源左　浪人の帶劍は、先君お定めの御掟。
次郎　ハツ。
ト兩手に受け
これが兄弟一世のお別れ。
ト額を見て、ヂツと泣く。
源左　早く立て。
次郎　ハツ。
ト刀を持つたなりに、ツイと向うへ走り入る。トヒヨになり、向う揚げ幕の上より、鶴一羽、羽を延ばし、本舞臺をさして飛んで來る。荒次郎、弓杖を突き、これを見込む。
荒次　あれ見られよ方々。丹頂の白鶴、羽に逆ひ、羽を伸して飛び來るは、今日の弓矢の先觸。ハ、、面白し／＼。
六郎　源左衛門々々々々、あの鶴射て取り、高名仕れ。早く／＼。
源左　畏まつてござりまする。
ト弓矢を持つて、立ち向ふ。荒次郎、ツカ／＼と寄つて、傍にて、キッと押へ
荒次　荒次郎が射術の試み。源左衛門、そちや妨げなさるな。
源左　六郎どのゝ指圖と云ひ、手前は仕損ぜぬ。御免あれ、
ト刎ね退けて、また射はうとする。
荒次　ハアテ、身共が
源左　イヤ、拙者が

両人　小癪な事を
　ト詰め寄せる。
六郎　両所ともに君子の争ひ、頼もし／＼。この上は白鶴を掛け的として、弓の甲乙試し見るも、武道の嗜み。
宗高　両人、早く。
両人　ハツ。
　ト白鶴の吊り物。両人、東西へ立ち別れ
源左　荒次郎どの
荒次　源左衛門
両人　イザ、射らう。
　トきつと狙ひを定め、双方一度に兵と放つ。荒次郎の矢ははづれ、源左衛門の矢は発矢と中る。荒次郎、ぎつくり。鶴バッタリ落ちる。両人、ツカ／＼と寄つて、双方一度に、鶴に手をかける。
源左　義高といひ、拙者が得物に手をかけて、こりや、なんと召さるゝ。
荒次　サア、これは
源左　如何なさるゝ。
　ト荒次郎、こなしあつて
荒次　当世、それやいよ／＼、御身の獲物か。

源左　論より證據は、この矢尻に
　ト抜かうとするを、荒次郎、留めて
荒次　源左衛門、お身先達て、父義村へ願ひ出でたる事があらうが。
源左　なんと。
荒次　例へ惣領に飾るとも、本領安堵の御教書なければ、家名を高くは寝られまい。だに依つてこの獲物は、この荒次郎に
　ト低う云ひ、くれうと云ふこなし。
有職の両として、鎌倉山に立ち並ぶ、御近外様の大小名お身上は、立てようと伏せようと、親人の心のまゝ。コリヤ、御教書は望みにないか。イヤサ、身共と獲物を争ふは、諺に云ふ雉子と鷹狩。火急な場所ゆゑ矢筋を見損じ、心得違ひで争ふか。心を鎮めて返答おしやれ。ド、どうだ。
　トいろ／＼こなしあつて、云ふ。源左衛門もチッと思ひ入れあつて、
源左　成る程、射術未熟の源左衛門、家の為に矢筋を見損じ、貴殿と獲物を争ひしは、重々の不調法。
荒次　ムウ。すりや、得心が参つたか。

ト源左衛門、鶴に立ちたる矢を抜き取り、落ちたる荒次郎が矢を取上げ、グッと刺し通し

源左　武骨の段は、眞平御免下されう。

荒次　なんの〳〵、君を始め各々までも、身が矢筋と見給ふほど、行かれたは天晴れ手柄。

ト右の鶴を提げて、眞中へ持つて出て、矢を抜き取り、六郎に渡す。

六郎へ申す。三浦荒次郎義高と、矢尻箆深にえりつけあれば、身が高名と云ふ證據明白。

トまた義村に突きつける。

如何やうに引提されても、一の鏑物は拙者でござる。この鶴を記録に記し、今日の手柄にあやかるが、武士の冥利と申すもの。

ト鶴を宗高が前へ直し、元の所へ戻り

我が君、御見覧下されませう。

軍八　こりや斯うなくては叶はぬ所。何にど射術の家筋でも、若殿のお拳には、なんとして及ばぬ事。

刑部　さうとも〳〵。それを兎や斯う爭ふは、雀の羽叩き。

玄蕃　黙つてその身の恥辱となる。近頃以て笑止千萬。

右門　源左衛門、お身は無分別に侍ひだわい。

義村　これはしたり、又しても〳〵、知れた事を申さるゝ。尤も間近とは申しながら、手づから馬の鼻を遮り、鶴の側に身命を顧ず、手をはせつた源左衛門。斯やうた席へお出やつては、うろたへらるゝは尤も〳〵。ナニ、常世どの、お若いから、目先に心が附かいで、さりとては氣の毒。老人が悪い事は申されぬ。この後とても、ちよか〳〵と、余り出過ぎぬやうにさつしやい。イヤ、なか〳〵氣丈な若者だわい。

ト源左衛門、ヤッと思ひ入れあつて

源左　御芳志の御意見、能く承知仕つてござりまする。

宗高　原田六郎。

六郎　ハツ。

宗高　今日の賞として、予が差替へ、お使れに與へよ。

六郎　畏まつてござりまする。

義村　コリヤ〳〵、常世、我が君より御褒美とあつて、お刀拜領の上意。ソレ、有り難く頂戴。

荒次　當座の面目。ハツ。

ト六郎、刀を取つて差出す。

宗高　イヤ、その一腰は、常世に得さす。

荒次　ヤア。

六郎 ト義村と顔見合す。源左衛門どの。近う。
源左 ハツ〱。
ト向うへにじり出る。
六郎 上日の見る所も、君御一人の御明察。謹んで頂戴召されし。
ト源左衛門、つか〱と寄つて、両手をかけ
源左 重々の御仁恵。
ト宗高をヂッと見て
エヽ、有り難い。
トはら〱と泣く。ドン〱と五ツの太鼓、鳴る。
義衡 はや申の刻、我が君には、御帰館あつて
皆々 然るべう存じ奉りまする。
六郎 確は宗高どの。
小田 お供揃へ。
皆々 ハツ。
ト静かに大小の鳴り物にて、宗高、先に、義村、義衡、六郎、豊前、右門、刑部、玄蕃その外行列皆々、花道へ並ぶ。荒次郎、不承々々に花道の角まで行く。源左衛門、裾を控へ

源左 荒次郎どの、只今お約諾申せし儀を
ト荒次郎、プッと顔を背ける。
弾正どのへ好きに御推挙。
ト荒次郎、振り放さうとするを、キッと捕へ
偏へに願ひ奉りまする。
ト荒次郎、むごく拂ひのけ
荒次 御帰館。
皆々 ハア、。
ト鳴り物になり、皆々静かに向うへ入る。源左衛門、跡見送り
源左 荒次郎が今の振舞ひ。もしや
ト縁側の小さ刀を見て
身共を怨んで、約束を変替へすまじきものにもあらず、追ひついて、今一應。ムウ。
ト行かうとする。此うち白妙大助、羽織、袴、能役者の拵らへにて、上座より出かけ
大助 イヤ、源左衛門どの、暫らく〱。
ト源左衛門、キッと立ちどまる。
先づ〱お待ち下されませう。
源左 御身は能太夫白妙氏。



初演の



繪番附

大助　先刻より參りかゝり、木蔭に於て、萬事つぶさに。
源左　兼ね〴〵御邊の取持ちゆゑ、変はりを結ぶ三浦親子。
大助　あなた樣のお手柄を、無禮に奪ひし三浦の若殿。
源左　家の大事を思ふがゆゑに、わざと獲物を讓りしところ
大助　恩を仇なる惡口雜言。
源左　彼奴に追ひつき、實否を糺し
大助　約束違變いたすならば
源左　是非に及ばぬ絕體絕命。
大助　サア、御尤も、さりながら、近頃慮外ではござれども、一應も再應も、御堪忍なさるゝが、第一には御孝行。また三浦兵衞さまにはその以前、御恩を受けしこの大助。また三浦へは妹が、緣に依つて出入りの拙者。懇望あるあの三本、彈正さまへお讓りあらば、御教書は早速に、申し下されうして相違さんと、かたがたの約束なれば、大切なる御寶藏なれども、梅松櫻の鉢の木を、お讓りなされ下されうならば、御教書のお取持ち、憚りながら大助が、命に替へて仕りませう。お聞き届け下さりませ。
源左　懇志の段、忝ない。實意ある御邊の推擧、詞に任せ秘藏の三木、三浦家へ差上ぐるでござらう。
大助　すりや、お聞入れ下さるとな。これで安堵いたしましてござりまする。
ト此うち、忍び一人、小筒を提げ、松の木へ上がる、枝の茂みより、本雀バッと立つ。暮れ六ッの鐘。
源左　ハテ、心得ぬ。
大助　あの鐘は早暮れ六ッ。
源左　諸鳥塒に歸るべきに、却つて高く飛び去るは中し。
大助　ト上手の松を指さしする。源左衞門、小柄を拔いて、エイと打つ。忍び、轉んで下り、直ぐに小筒にて、打つてかゝる。源左衞門、開き落す。忍び、一目に向うへ逃げて入る。大助、ソレと行かうとする。源左衞門、手早に小筒を取上げ大助を上手へ引き廻し、揚げ幕へ向け、火蓋を切る。[illegible]の音、ズドンと鳴る。と大助、耳を塞ぐ。チョンと木の頭。源左衞門、向うを見込む。大助、胸撫で下ろす。キザミにて

幕

三幕目

三浦義村館の場
建長寺法會の場

役名——三浦義村。同妻、萩の井。三浦荒次郎義高。衣笠三木之進。須江彌惣次。大工、與五作。篠田軍八。原田六郎。松浦右門。荒木玄蕃。稲田豐前。米村刑部。信横和尚。勇介女房、お袖。佐野源左衛門常世。

造り物、二重舞臺、見附け、結構なる屋敷、襖の方、押入れ、木地木目塗り椽、極彩色花鳥の繪、東の落ち間、後へ寄せて建仁寺垣、この前、牡丹の花壇、花盛りの體、柴垣、手水鉢、石燈篭、双方とも切り戸、よき所に小箪笥、花机へ直しある。幕の内より本二重、上の方に義村、褥に居り、莨のみながら、梅松櫻三木の鉢植ゑを眺めてゐる。三木之進、着附け、袴にて、折を取散らし、小判の包みを明け、金を改めて居る。彌惣次、同じ形にて、硯箱を扣へ、下書きを認め居る。五ツの時計、大小のあしらひにて、幕明く。

三木　大佛主膳どのよりの五十金、安達采女どのの七十金、昨夜平山より御音物の三十金、都合百兩包みに纏めましてござりまする。

義村　ナニ、平山よりは三十兩か。大枚の地面拜領の願ひを頼みながら、僅かばかりの音物。こりや、日限を引延ばして、もそつと取つてやらずばなるまい。マア、よいワ。其ままにしまつて置けサ。

ト彌惣次は書きしまひ

彌惣　この趣きで、よろしからうと存じまする。

ト差出す。義村、眼鏡かけ、つくづく見て

義村　この下書きのうち、去春三浦彈正どの、お指圖を以てと云ふ、この文をば容赦するがよからう。他は此まゝにて認めさせ、明日館へ差出すやう、次手に禮金の事も、とくと申しつけよ。

彌惣　承知仕つてござりまする。

ト三木之進、金を直す。彌惣次は下書きを消して、手箱へしまひ、平舞臺へ下りる。義村、長煙管持ち、鉢植ゑを觀りながら

義村　ハテ、心得ぬ。三木ともに段々と木勢も薄くなる。

もしや枯れるのではあるまいか。これはハヤ困つたものだわい。

彈正　元來この鉢植ゑは、源左衞門常世が秘藏。先達て北條どの、諸國行脚の折から、枝を剪つて焚火となす。

三木　その恩賞とあつて、歸國の後、源左衞門を召歸され、三ケの庄を賜はる印と、この三木を下し置かるゝ。

彈正　御主人これを熱望あるは、この三木に附け置かるゝ加賀に櫻田、越中の櫻井、上野の松ケ枝と、三ケの庄を召し放し、主人の御領地になさんが爲。

義村　コリヤ、靜かに〳〵。

ト合ひ方になり、上手より萩の井、衣裳、裲襠にて、駒下駄を穿き、軍八、附き添ひ、出て、切り戶を入らうとして、この體を見て、ヂッと控へる。

われ達が申す如く、時頼在職の留守を幸ひ、思ひ立ちたる親子が大望。

三木　修驗者岩修院に申しつけ、時頼調伏の祕法を行ひ、六面の札箱に、彼奴が人形を封じ込み、當館の乾の角に三尺掘つて、埋め置いたれば、都に於て自滅は追ッつけ。

ト萩の井、恟りのこなし。軍八、悪い事を云ふと云ふ思ひ入れ。

彈正　別して大工奧五作に仰せつけられ、奧殿の御普請、職人は殘らず手板返し。近日宗尊親王のお成りを願ひ、城之助を始めとして、一人も殘らず討果し。

ト萩の井、吐息つく。軍八、頭を掻く。

義村　汝等を始め、軍八は、腹心の者なれども、心がゝりは奧萩の井。彼れが弟二階堂は、忠臣無二のねじけ者。萬事奧に知らさぬやう、隨分ともに心を附けよ。

ト萩の井、軍八をキッと見る。軍八、術ながる。

三木　御意の通り、何かにつけて、道立てを仰しやる奧樣。

彈正　事成就いたすまで、暫しのうちお下館へ、押籠め參らすがようござりませう。

萩の　そりや誰れを。

三彈　奧方萩の井さまを。

萩の　其方達が位にもなるまいぞ。

ト切り戶を、ズッと入る。

兩人　ヤア、奧樣。

トぎよつとする。

萩の　三木之進、彈正、邪魔な所へ來ましたわいなう。

ト六ひ〳〵、二重へ上がり、座に着く。三木之進、もじ〳〵して

三木　これは〳〵奥様、只今もあなたのお噂。お慈悲深いと我れ〳〵始め、一家中の者の喜び。

萩の　ア、コレ〳〵、その輕薄、取措かつしやい。切り戸の外で一部始終、

彌惣　すりや、今の話しの樣子

軍八　殘らずお耳へ、筒拔けでござる。

彌三　ヤア。

ト眞面目になる。萩の井、こなしあつて

萩の　殿樣、この三本の鉢の木は、佐野家の秘藏とは、誰れ知らぬ者もござりませぬ。それに又、何ゆゑこれに。

義村　イヤ、これは、ナニ、物だてサ。

軍八　その儀は拙者が申し上げませう。

ト向うへ出る。三木之進、思はず立ち上がり、女の身振りにて、軍八に引ッつく。

軍八　三木之進さま、こりや、なんとさつしやります。

三木　イヤサマ、貴方はわしに引ッついて、どうしやる。

軍八　ハテ、御前の樣子

三木　なにさ、其方が

軍八　エヽ、退かつしやりませ。

ト突き飛ばす。三木之進、キッとなる。

三木　ハテ、面妖な。

ト下に居る。向うより奴、出て來り

奴　申し上げまする。大工與五作が姉、また今日も、弟に逢はせくれよと推しての願ひ。如何計らひませうな。

彌惣　毎日々々同じ繰言。御用繁らば歸しくれんと、申し聞けて、ぽッ歸せ。

奴　畏まつてござりまする。

ト引返し、向うへ入る。萩の井、こなしあつて

萩の　その女が願ひより、外に一つの妾が願ひ。

義村　夫婦の仲に改めて、おことが身の願ひとは

萩の　お聞き屆け下さりませうか。

義村　して、その仔細は。

萩の　只今お目にかけませう。

ト裲襠を取り、上着の肌を脱ぐ。下は地味なる木綿やつし。

彌惣　思ひかけなきお姿は

萩の　申し、あなたのお目には、なんと見えまする。

義村　されば、狂氣の體と思はるゝ。

ト貫のむ。

萩の　サア、その氣狂ひも、一人は狂はぬゆゑ、あなた、以前のお身の上を、よう思し召して御覽じませ。

義村　云ふに及ばぬ。徒歩仲間の成り上がりサ。

萩の　いま有職の司となり、美々しい威勢も誰が蔭ぞ。我が君樣の御厚恩。又この衣服は、荒次郎が實の母御、お篤の方の昔の古着。平常肌身を放さぬぞえ。

義村　身共と悴へ意見の爲か。

萩の　高木風に折らるゝ譬へ。まだその上にこの程は、勿體ない、淺ましい

義村　コリヤ、女の存じた事ではない。差出ずと控へて居やれ。

彌惣　イヤ／＼、恐れながら、奧樣のお諫め、餘り一途にでござりまする。

萩の　彌惣次、其方は、この萩の井を、見事下館へ押籠めてたもるかや。

彌惣　エ、。

萩の　忠臣な家來を持ち、此やうな嬉しい事はないわいなア。

彌惣　ヘイ、。

ト向うバタ／＼にて、お袖、凛々しき形、奴二人に兩手を取られながら、ツカ／＼と出て、花道にキッと留まる。

奴一　慮外な女。

奴二　退れ／＼。

兩人　退り居らう。

そで　サア、そこをどうぞお情に、殿樣へお取次。

ト立廻つて

偏へにお願ひ申し上げまする。

三木　瀬左衞門が下郎たる、角橋勇介が女房袖。

軍八　さてはこの程より噂にある、與五作が姉と云ふは

そで　ハイ、私しでござりまする。

奴兩　立たう。

ト引立てようとするを、拂ひのけ

そで　御普請の御用につき、お館へ上がりまして、日數も丁度五十日餘り、なんの便りもせぬ弟、手荒い職は致しますれど、小さいからの病身者。藥の上から親に別れ、この姉が手一つで、育てましたあの與五作。一人不便に存じまして、どうか斯うかと案じながら、御主公の身の上なれば、何事も心に任せず、打ツちやつて居りました

ぞ、この頃の夢見の悪さに、どうぞ逢はせて下さりませと、この間から五度三度、御門前から追ひ返され、今日は是非とも推してのお願ひ。

奴雨　なにを。

トもゝ立ち、立ち塞がつて、

そで　御承知なき奴には、女の事とお免しなされ、どうぞ一目弟に、お逢はせなされ下さりませうならば

ト両方へ投げる。

ハイ／＼、有り難う存じまする。

彌惣　門の前をも憚らず、イケぞんざいな不敵の女め。軍八、ソレ。

軍八　心得ました。

ト行かうとする。また三木之進、飛びつく。

また引ッつきにござるわい。

三木　さう云ふ其方が。

軍八　エヽ、嫌らしい。

ト突き飛ばす。しやんとなつて

三木　ハテ、頑固な。

萩村　往来の邪魔、早く引ッ離せ。

軍八　ハツ。

ト行かうとする。

萩の　軍八、待て。

軍八　イヤ、無禮なる下司女め。

萩の　兄弟は他人の始まりとは、道を知らぬ下世話の譬へ。弟を思ふ姉の慈悲、さうなうて、なんとせう。其方の心を察しやり、與五作には自らが、追ッつけ逢はせてやる程に、氣遣ひなせぬがよいぞや。

彌惣　アイヤ／＼、奥樣。與五作は大切なる、御用も未だ終らぬうち、彼れめに御逢はせなさるゝ儀は

萩の　ハテ、妾が詞になに無理。但し姉弟を逢はせれば、其方達が勝手にならぬか。

彌惣　全く以て。

萩の　出過ぎずと、控へて居やうぞ。

彌惣　ヘイ／＼。

ト後へ寄る。

萩の　イヤナウ、袖とやら、其方が尋ねておぢやつた與五作、腰元どもに云ひつけて、與五作へも傳へてやらう。其所から奥へ行き、暫しの間待つて居や。

そで　すりや、お聞入れ下されまして。エヽ、有り難う存じます。

義村　今日は建長寺にて、頼朝公の御年回。御代香は倅が役日。身は未だこれにて君の御用。萬事粗略なきやうに、其方、申しつけてよからう。

萩の　ハイ、畏まりましてござりまする。

そで　左様たら私しも、お指圖に甘へまして、暫らくお次へ參りませう。申し、お奴様、精腹揉んで、いかい御苦勞。ゆるりと休んで下さんせえ。

奴爾　ハテ、仕合せた女だなア。

ト向うへ入る。萩の井、こなしあつて、立ち上がり

萩の　申し、殿。上見れば、及ばぬ事の多かりき。

義村　ヤア。

萩の　笠着て暮らせ、おのが心に。

義村　ハテ、行きやれと云ふに。

トきつと云ふ。

萩の　袖とやら、後に逢ひませう。

ト合ひ方になり、萩の井、心殘して奥へ入る。

そで　ハイ／＼、どなたも、お許しなされませえ。

ト云ひ／＼、本舞臺へ來て

軍八さんぢやござりませぬか。ほんに、先頃は

ト云はうとする。

軍八　ア、、コリヤ／＼、なんにも云はずと、早く／＼。

そで　アイ、ほんに、わたしとした事が、後先構はずツカツカと。オ、、これは殿様、エエ、お有り難うござりまする。

ト辭儀して

ドリヤ、參りませうか。

ト唄になり、いそ／＼として、下座へ入る。跡皆々、顔見合せ

三木　とんだ所へ奥様がござつて、誠に手に汗を握りました。

彌惣　殊に與五作が姉の袖は、源左衛門が身内の者。

軍八　もし一大事を覺られては、蟻の穴より堤の崩れ。こりや、如何いたしたがようござりませう。

義村　苦しうない、大事ない。大事を察した奴原に、男女に限らず一人も、生けてさへ歸さねば、洩るゝ事はなけれども、兎角身が心にかゝるは、源左衛門が家に傳はる、采圖に等しき射術の傳書。今にも他見にかゝる時は、義村が素性顯れ、匹夫下賤も人の謗り。能太夫を騙し込み、三木は取り上げしが、傳書を首尾よく取り得るまでは、枕を高く夜が寢られぬ。ハテ、なんとしたものであらう

そ。

三木　その傳書の儀に就いて、腹心たる經景どのと、詮じ置いたる儀もござれば、追ッつけ手に入る。お心易く思し召されい。

義村　それ聞いて先づは安堵。大切なるこの鉢植ゑ、三木や借らせし三國頌も故郷。奥庭へ直し置き、出入りの植木屋文藏を召し寄せ、手入れの儀を申しつけよ。

三人　畏まつてござりまする。

ト三人、鉢植ゑを一つづゝ持つ。また軍八、三木之進、引ッつゞく。

兩人　ハテ、面妖な。

ト唄になり、三人、奥へ入る。跡に義村、こなしあつて

義村　譜代の願書と云ひ、板返しの謀り事、仕損ずべきとは思はねども、萬一成就せぬ時は、手始めの思案は君を讒殺。これとて古へより、前車の覆るを後車の戒め。

ト下手より、香包みを出し

南蠻秘法の蠱の焚き物。この蠱香を試みるは、ハテ。

トきつと手を組み、思案のこなし。合ひ方になり、上座より與五作、大工の形、ひよろ／＼と出て

與五　奥樣の御用とは、何事ぢや知らぬ。

ト義村を見て

これは殿樣、それにお入りなされまするか。

義村　其方は大工與五作。

與五　何か奥樣の急御用、ちよつとお次へ

ト行かうとする。

義村　コリヤ、待て／＼。幸ひの折から、云ひ聞かす仔細がある。サヽ、許す。近う近う。

與五　へイ／＼。

ト下に居る。

義村　ムヽ、與五作、其方一人の働らきにて、大切なる密事の普請、首尾よく出來いたせし心勞、何程か過分々々。

與五　有り難いお詞にあづかります。むづかしい仕掛け物、どうやら斯うやら今日手放れ。

義村　永々の心遣ひ、休息いたさせたきものなれども、心願の仔細あつて、奥庭に勸請せし、摩利子天の小社の修覆、大儀次手に片附けてはくれまいか。

與五　とても勤めかゝつた御用、手足の苦勞はいとひませねど、天部のお宮を拵らへますれば、垢離でも取つて體を清め、潔齋するが大工の作法。

義村　これも尤も。潔齋いたすまでもない。身を清むるには有り合せしこの名香、五體へとくと焚きとむれば、不淨を拂ふ香氣の徳。

與五　その名香で體を清め

義村　直さま細工に取りかゝり

與五　首尾よう成就いたしたならば

義村　褒美の金は望み次第。

與五　何を致すも浮世づく。力一杯やらかしませう。

義村　必らず片時も油斷なきやう。

與五　夜を日に繼いで仕上げませう。

義村　出かした。堅い奴。

　ト ちやん／＼と、時計の四ッ鳴る。

與五作、申し渡したぞよ。

　ト唄になり、義村、靜々と奥へ入る。跡に與五作、こなしあつて

與五　せつかちな殿様なれば、急に仕事にかゝらずば、御機嫌が惡からう。マア、この香で、身を清め

　ト香盆を取つて來て、火入れにて、香を焚き、ちよつと聞き、顔をしかめ

こりや、とんと強い薫りぢや。目から鼻へ突き拔けて、堪へられるものぢやアねえ。

　ト其傍な、花壇の方へ押しやり

この香氣へ頭突込まれ、段々の不便のうち、嚏一つする事もならず、さぞ難儀な細工にてあられう。

　ト云ひながら、袖にて煙りを除けるこなしあつて

さりとては惡い匂ひぢや。胸がむか／＼して、えづきが來さうだ。

　ト火入れを覗き

ア、嬉しや。どうやら斯うやら立ち切つてしまうた。

さらば改めて、宮の細工にかゝらうか。

　ト奥へ行かうとする。

そで　ハイ／＼、いかいお世話でござりまする。ちよつと逢うて參りませう。

　ト云ひ／＼、下座より出る。

與五　ヤア、お前は、姉貴ぢやないかいの。

そで　オヽ、さう云ふは與五作ぢやないか。アヽ、嬉しや。マア、顔見たので落ちついたわいなう。

與五　お前、マア、なんと思うて爰へ、ござつた。

そで　弟、ほんにわが身はなう。如何に、マア、若いと云うて、あんまりな人ぢやぞや。三年までの御無沙汰、暫

しのうち便りませぬと、上がりやつたは後の月、十日立てど二十日になれど、便り一つしやらぬゆゑ、案じまいものかいなう。折悪う勇介どのは、上方へ御用のお使ひ。知りやる通り無人な屋敷、わし一人して打つてた案うたり、門入りの人をわざ／＼頼み、様子を尋ねてもらうても、埒かも解らぬ片便り。どう云ふ事やらこの間は、頻りに夢見が悪いゆゑ、お使ひに出た次手、御用の暇に毎日々々、御門前まで尋ねに来れども

ト此うち與五作、毒の廻るこなし、いろ／＼なり、お袖、フッと見て

コレ／＼、弟、其方は何とぞしやつにか。與五作、コレ、どうしたぞいなう。

ト物凄き合ひ方になり、花壇の牡丹、花も葉も、仕掛けにて、ハラ／＼と散る。お袖、恟りして

ヤア、今の今まで美しう、咲き揃うたこの牡丹が、一時に散ると云ひ

ト與五作、苦しむ。

與五作が苦痛の體。

ト與五作、血を吐く。思ひ入れ。

ヤア、こりや、血を吐いたな。

トきつと介抱して

心得ぬこの場の體、様子があらう、様子を云や。

ト與五作、物の云はれぬこなしにて、流るる血汐を指につけ、舞臺へ書く。お袖、これを見て

ヤア／＼、すりや、そなたを頼む幸ひに、この屋形へ入込んだも、源左衛門さまのお指圖ぢやの。

ト與五作、頷き、また書く。

ムウ。して、館の乾の方に、埋めありしと云ふその品は

ト與五作、六面の箱を出し、渡す。

そんなら其方は初めから、生きて再び戻らぬ覚悟。オヽ、出かしやつた。其方が命を捨てたゆゑ、手に入つた證據の一品、旦那様へ差上げるが、お家のお爲。家の爲。とは云ふものゝ、廣い世界に、はしをり鏡の姉弟。これがこの世の、

ト與五作、がつくり落入る。

可哀や／＼。

ト泣き落す。

呼び　お供揃へ。

ト　お袖、キッとなる。

そで　ありや、若殿出仕の知らせ。一時も早う御主人さまへ。

さうぢや。

ト身拵らへして、行かうとする。内より

萩の　彌惣次、あれ止めよ。

彌惣　ハツ。

ト彌惣次、股立ち凛々しく、ツカ／＼と出て、お袖を突き廻し

女郎め、動くな。

ト立ち塞がる。お袖、上へ行かうとする。襖をガラリと明け、萩の井、薙刀を持ち、ツカ／＼と出て、石突きにて、突き廻す。

そで　奥様、こりや私しを、なんとなされまする。

萩の　夫の大事を知つたる其方。此まゝ生けては歸されぬ。

そで　エヽ。

彌惣　土壇の用意。

奴雨　ハアヽ。

トきつぱりとした合ひ方になり、奴二人、土俵を持ち、出て、舞臺の眞中へ土壇を築き、水桶を直し、扣へる。此うち彌惣次、下げ緒を外し、襷にかけ

彌惣　とても遁がれぬうぬが命、覺悟してそれへ直れ。

そで　すりや、この場で、私しを

彌惣　奥様のお指圖だワ。

トお袖、思ひ入れあつて

そで　弟と云ひ、この身まで、道ならぬ無成敗。様子を聞いたがわたしが因果、如何にも命は捨てませうが、たつた一つのお願ひは。

萩の　イヽヤ、云ふ事も聞く事もない。者ども、ソリヤ。

奴雨　ハツ。

トつか／＼寄つて、引立てようとする。

そで　こりや、なんとする。

奴雨　土壇へ直れ。

トお袖、キツときめ

そで　ホヽホヽヽヽ、この場になつて卑怯未練に、逃げも走りも致しませぬ。見苦しい、扣へなさんせ。

ト云ひながら、千鳥に取つて投げる。奴、逃げて入る。

彌惣　早く直らう。

そで　ヘイ。

ト鼻打ち拂ひ、立派に、向うへ出て、土壇へどつさり腰をかける。此うち彌惣次、刀を抜き放し、水をかける。

そで　サア、すつぱりと遊ばしませ。

彌惣　好い覺悟、今が最期だ。
　トつッと寄つて、刀を振り上げる。お袖、その手を、キッと捕へ
そで　イヤ、こなさんの手にはかゝりますまい。
彌惣　ヤ、、なんと。
そで　試切りは御成敗、お手討ちは武士の作法。女なれども佐野の身内、南條源介が女房袖、奥様のお手討ちならば、首さし延べて覺悟なれども、いろ〱武士のなまくら刃金。わたしが身にはかゝりたくないなア。
　ト突き放す。
彌惣　方途もない惡口雜言。その頭を
　ト引ッ外して切つて行くを、手頸を取つて、丁と受け
そで　及ばぬ手向ひ。
彌惣　小癪な女め。
　ト立廻つて、キッと留める。萩の井、ツッと寄つて、彌惣次を突き廻し、すくひ切りに、ポンと切り倒す。
そで　これは。
萩の　與五作が命の下手人。
そで　エ、、
　ト萩の井、お袖が手を取つて、切り戸の外へ突き出し

萩の　人の見ぬうち、早うこの場を
そで　すりや、此まゝに
萩の　命は助けた。
そで　エ、、有り難い。
萩の　情は人の爲ならず。必らず大事を
　トお袖、懷中鏡を出し、簪を拔いて
そで　申さぬ金打。
　ト打ち合す。
萩の　早く行きや。
そで　ハッ。
　トつか〱と花道へ行き、振返り
そで　不便や弟、
萩の　志しが、無足になるがや。
　トお袖、思ひ切つて
そで　おさらば。
　トつゝと向うへ、走り入る。
萩の　誰れぞ來い。
奴南　ハア、。
　ト出る。
萩の　見苦しい死骸、片附けい。

奴雨　ハッ。

ト死骸を舁いて、入る。と引違へて、上座より軍八、走り出て來り

軍八　御主人様、大殿様々々々々。

ト義村、提げ刀にて、奥より出て

義村　軍八、あはたゞしい、何事なるぞ。

軍八　奥殿の御普請成就の今日、一々とくと改めしところ、初めの手段に事變り、與五作が異心と相見え、板返しの謀り事相違。御賢慮如何でござりまする。

義村　さほどの事にナニ敗亡。計略は外にさま〴〵。

軍八　兎角邪魔なは源左衛門。

義村　幸ひ今日の代香。

軍八　建長寺よりの歸り道。

義村　小松の蔭に潜伏して

萩の　すりや、源左衛門常世どのを

義村　有無を云はさず

ト種が島を取つて、軍八の方へ投げつけ

たつた一打ち。

軍八　然らば拙者は

義村　必らずぬかるな。

軍八　畏まつてござりまする。

義村　行け。

軍八　ハッ。

ト一散に向うへ入る。義村、跡見送り

義村　マヽ、これもよし。この上は宗高め、時頼兄弟、城之助、一時に滅ぼす手段。

ト萩の井、キッと詰めかけ

萩の　殿、エヽ、あなたはなア。

ト義村、それに構はず、刀を突く。チョンチョンと木を入れる。

義村　ハテ、何とかな。

ト思ひ入れ、[illegible]のこなしにて、道具、廻る。

造り物、平舞臺、正面二間、後へ寄せて結構なる金はりつけの佛壇、この中、眞中に、從二位先右大將源頼朝[illegible]と記したる、雲形の見事なる大位牌を直し、金[illegible]、[illegible]、供物を、高かく盛り上げ、前に二色の打敷きをかけ、花瓶に一對の蓮の佛花、燭臺立て、金襴の戸張り、[illegible]の紫幕を打ち、東西、大棟引立て、房附き、双方の柱に、聯

黄地、白地の暖簾をかけ、すべて禪寺の飾りつけよろしく、經机に香爐の香爐直しあり、正面に燒香を飾り、和尚、紫紺、七條の袈裟、まうすを冠り、拂子を持ち、見物へ後ろ見にて、讀經の體。伴僧六人、鐃鈸、太鼓、鈴、花皿、それ〴〵の役にて、三人づつ差向ひに、双方に並ぶ。この見得、右舞臺の鳴り物にて、道具納まる。

ト和尚、立つたり座つたり、三拜のこなしあつて、禮盤より下りる。伴僧、經机を正面へ直す。和尚、皆々を連れ、花道の角へ出迎ふ。ト音樂になり、向うより荒次郎、熨斗目、長上下にて、次に六郎、右門、玄蕃、豊前、刑部、各々上下にて、花道へ並ぶ。

荒次　當寺の住職、假藉和尚、お迎ひ親靑。

和尚　ハツ、今日當建長寺に於て、右大將賴朝公、三百回忌の御法事。修業終りし上は、御燒香あられませう。

ト荒次郎、和尚へ會釋して、經机の前へ座る。禮拜をして、上へ通り、燒香にかゝる。皆々、花道に扣へる。

和尚　原田六郎どの。

六郎　ハツ。

ト燒香して、荒次郎、上へ座る。

和尚　松浦右門どの。

右門　ハツ。

ト右の通りあつて、下座へ座る。

和尚　荒木玄蕃どの。

玄蕃　ハツ。

和尚　米村刑部どの。

刑部　ハツ。

和尚　稻田豊前どの。

豊前　ハツ。

ト右の通り、一人づゝ燒香する。

和尚　北條家の御代香、佐野源左衞門どの。

源左　ハア、。

ト矢張り音樂、生け殺しにて、源左衞門、長上下、小さ刀にて出て、燒香のこなしありて、下座の方に、向うへ出て、座る。和尚、佛前の供物を捧げ出て、荒次郎が前へ直し

和尚　靈前のお供物、御配分あられませう。

ト元の座へ戻る。荒次郎、こなしあつて

荒次　今日の尊靈と、仰ぎ奉るは賴朝公、奢る平家を攻め亡ぼし、御父、義朝公の仇を報し、帝の宸襟を安んじ給

ふ。

六郎　源家再興の基を起し、萬民を撫育ましますがゆゑ

右門　星霜積つて三百年、今日の只今まで

玄蕃　豐かに治まる一天四海、鎌倉山の星月夜、海内は云ふに及ばず

刑部　蝦夷が千島の果までも、武德に靡く今この時

豐前　この程、御追福の爲とあつて、非常の大赦行はれ、國主領主は云ふに及ばず、昵近外樣に至るまで、官位昇進、或ひに御加恩。これ全く尊靈の威德、法の燈火、大俗の我れ〴〵まで、しんしん肝に

皆々　銘じましてござりまする。

和尚　各々樣の御意の如く、佛法の盛んなるは、王法の御繁榮。御燒香相濟む上は、各々方丈へ御入りあつて、御休息あられませう。

荒次　長老の詞に任せ、もてなしにあづからん。イザ、各各方。

ト立ち上がらうとする。

源左　アイヤ、義高どの、暫らく。只今原田氏仰せの如く、神靈御追福のこの折から、先達て願ひ奉る、三ケの莊安堵の御教書、今日の席に於て、下し置かれんとある、兼ねての御内意。何卒これにて。

荒次　成る程、父義村が指圖の御教書。各々方には、先づお先へ。

六郎　然らば御兩所。

四人　萬事は後刻。

和尚　イザ、御案内いたしませう。

ト禪の鳴り物にて、和尚、先に立ち、六郎に皆々附き添ひ、上座へ入る。荒次郎、源左衞門、殘る。

荒次　源左衞門、これへ寄つて、佛前の供物、慎んで頂戴召され。

ト合ひ方になり、源左衞門、摺り寄つて平伏する。荒次郎、思ひ入れあつて、小さ刀を拔き、切尖に供物の饅頭を貫き、出す。源左衞門、頭を下げ、チツと見て、紙を出し、受けようとする。

忝なくも源家の宗祖、右大將賴朝公の靈前へ捧げし供物、手をかくるは尊靈へ、畏れ、此まゝにて頂戴おしやれ。

源左　ムウ。昔唐土、楚の莊王、その臣廉清を疑ふ事あつて、心を試さんと、刀の切尖に果物を貫き、手づからこれを與へ給ふ。

荒次　廉清、君の心を察し、手をこまねき、口を以て賜物

を受け納む。

源左　源左衛門常世、義高どのへ異心なき印。斯くの通り。

ト両手を突き、鎌を出す。荒次郎、グッと押しつける。源左衛門、饅頭鍬へ取る。荒次郎、キッと見る。源左衛門、手早く太刀鞘へ納め

荒次　有り難く頂戴、仕つてござりまする。

ト刀を納め

荒次　ハテ、よく云ひ馴れたものだなア。源左衛門、佐野三浦は元は同姓。有職たる當時の威勢を見よ。さぞ口惜しからう。

源左　運は天なり、道は人なり、足る事を知る源左衛門、いさゝかお羨やましい儀はござらぬ。斯く宣ふ三浦御親子、人の榮えを憎しみ偏み、北條どのを亡ぼして、我れ一人、四海の政治を司らん、兼ねての結構。

荒次　なんと。

源左　大塚を打つに外るゝとも、よもや相違はござるまいがの。

ト荒次郎、ぎつくり

荒次　聞け常世、身に覚えなき無實の難題、返答に依つては、その儘は立たせぬ。

トきつと柄に手をかけ

我れ〳〵親子に遺恨あつてか。

源左　イヤ、全く以て。

荒次　家の手柄を遺恨に思ひ、それゆゑの云ひかけか。

源左　サア、それは。

荒次　但し慥かな證據があるか。

源左　サア、それは

荒次　血迷うての穿鑿か。

源左　サア。

荒次　證據があるか。

源左　サア。

荒次　サア。

源荒　サア〳〵〳〵。

ト段々下座の角まで追ひ詰め

荒次　返答ぶて。ド、どうだ。

ト源左衛門、小さうなつてゐて、懐より返り蒔の六面の手箱を出し

源左　この手箱、御存じか。

荒次　ヤア。

ト恟り。

源左　時頼公調伏、證據の一品。
荒次　常世、覺悟。
　ト刀を拔かうとする。源左衞門、扇にて、その臂を、キッと留め
源左　エヽ、淺まし、義常どの、そも我れ我れが先祖と云ふは、源三位頼政より、代々家に傳はる、兵團に等しき射術の傳書。佐野は直傳、本家の血脈。三浦は遙か流れの枝葉。久しく民間に沈落せしが、御親父義村どの、歩中間の卑しきから、次第々々に役儀を進み、奸計を以て人をなづけ、巧言を飾つて君を惑はし、今日も昇進、明日も昇進、朝日の昇るに等しき立身。先祖太夫の時政より、忠勤厚き勳しにて、代々鎌倉の執權たる、北條氏と肩を並べ、有職の司ともなり、天運循環とは云ひながら、みな君の御恩ならずや。道を以てする時は、忠を盡して君を補佐し、仁を以て下を憐み、義を重んじて諸侯に交はり、四海の爲に寢食を忘れ、身をひしびしにになすとても、盡きたらぬ主君の恩。報ぜんと思ふ所存はなく、上を掠め下を締め上げ、金銀を貪る我まゝ非道。忠臣無二の北條氏を、害せんと計る不忠不義。コレ、鳥の兩翼、日月二つ、片輪車の世に立つた、例しは更にござらぬぞや。サア、斯やう申すも、源は、同姓のよしみを存ずるゆゑ。何卒心を翻へし、父を諫むるは子たるの道、御親子ともに本心に、立返るものならば、國家の爲、二つには、三浦の家名も萬々歲。かばかり盡せども承引なくば、證據を顯はし、調伏の罪を糺さうか。サア〳〵サア。
　ト段々に上座の柱の角まで押しつけ
善惡二つの御返答、この座を去らず承らう。ナ、なんとでござる。
荒次　ハア、誤まつた〳〵。マ、少し爰をゆるめて下されい。
　ト源左衞門、扇を引き、跡へ寄る。荒次郎も、キッと下に居て
天に口なし、人を以て云はしむると、いま御自分の諫言は、天道常世が口を藉つて、我れ我れ親子に日頃の非道を、戒め給ふと存ずれば、勿體ないとも怖ろしとも、五臟六腑に徹し、四十四の骨々まで、かつちかつちと鳴り渡つて、熱湯の涙が、はら〳〵とこぼれましてござるわいなう。せめて御諫への云ひ譯には、この座を去らず、腹かッさばき

ト刀に手をかけ、源左衛門を見る。源左衛門、こなしあつて、

とサア、存じ詰めてはござれども、この身の善悪は是非もなし。老嚢ありし父義村、悪人の名を殘さん事、何程か殘念至極。譜代の一大事、必らず他聞に洩れざるやう、これ一つが遊びの種、お頼み申す常世どの。この世の對面これ限り、おさらばでござる。

源左　すりや、貴殿ならぬ拙者が諫言、お心に徹せしゆゑ

荒次　日天神も照覽あれ、荒次郎が心の裡は、今日の只今より、潔白なる君への忠臣。

源左　ホヽ、出かされたり、天晴れ〳〵。それでこそ誠の武士。その本心を聞く上は、詮議の種ともなるべき一品、お渡し申すは貴殿へ寸志。

荒次　すりや、証據となるその箱を

源左　この上ながら萬事につけ、お愼みが肝要でござる。

ト荒次郎、手箱を取つて

荒次　御厚意のよしみ、エヽ、忝ない。

ト戴く、音樂になり、奥より六郎、皆々、出て

六郎　荒次どの、我が君のお待ち兼ね。最早御下向あられませう。

ト荒次郎、ちやつと手箱を隠し

荒次　直さま御前へ出仕いたし、御機嫌の伺ひ申さう。

和尚　お役目御苦勞に存じまする。

荒次　和尚、近日。

ト行かうとする。

源左　アイヤ〳〵、荒次郎どの、何卒君の御教書を、

ト荒次郎、とぼけた顔にて

荒次　ハア、御教書とは、なんでござるな。

源左　御失念候ふか。拙者が本領安堵の御教書、下し置かれんとある兼ねての約束。

荒次　存ぜぬ。知りません。

源左　ナ、なんと。

荒次　北條が推擧に依つて、再勤の源左衛門、時頼に追從し、隨分と氣に入つて、北條から願つて貰やれ。

源左　コレサ、義高どの、それでは貴殿、たつた今

荒次　何がどうした。三浦親子は四海の有職、君のお用ひ、諸侯の用ひ、お身達如き外樣者の身の上、取繕ろひする間がないわい。

ト源左衛門、當惑して

源左　手の裏返すやうに、今さら左樣に違變あつては

荒次　約束變替へ常の習ひ、否だと云つたらなんとする。

ト源左衛門、キッと詰め寄せ

源左　イヤ、さうは云はさぬ。武士と武士との詞は金鐵。思案極めて有無の返答、速かに承らう。

ト柄に手をかけ、睨みつめて云ふ。

荒次　帶劍に手をかけて、御名代の身を切るか。イヤサ、殊に以てその刀は、我が君よりの拜領でないか。

ト源左衛門、ハッと心附き、ちやつと放す。

御泊番の場所と云ひ、拜領の刀に血を注ぐは君への畏れ。その身は元より、親兵衛も、斷罪は遁がれぬぞよ。

ト源左衛門、喰ひしばりながら、下げ緒を摑まへる。

イヤサ、各々、參りませう。

ト源左衛門、顏をキッと見て

源左　餘りと云へば

ト荒次郎、扇にて、源左衛門が額を、丁と打つ。チヨンと木の頭。

チエヽ。

ト拳を握る。荒次郎、扇をサッと開き、應揚に使ふ。

キザミにて　幕

大詰

佐野屋敷の場
鎌倉殿中の場
水門口の場

役名――三浦荒次郎義高。佐野源藤太經貴。松浦右門。米村刑部。稻田熊藏。荒木玄蕃。衣笠三木之進。栃橋勇介。同女房、お袖。下女、お龜。奴、五百平。手代傳兵衛。源左衛門妻、玉笹。佐野兵衛政常。佐野源左衛門常世。

造り物、平舞臺、見附け唐紙、上の方、折り廻り障子屋體。下座、切り戸。いつもの所、中の口の心にて、黑塗しの門口。下手の横に、衣裳簞笥置直しあり、よき所に手水鉢、切り割る仕掛け。すべて小身なる屋敷の體、幕の内より、吳服屋、肴屋、酒屋、並び居る。栃橋勇介、薪を割つて居る。お龜、下女の形にて、洗濯して居る。琴唄にて、幕明く。

吳服　コレ〳〵、勇介どの、薪ばかり割つてゐては、濟みさうもないものぢや。



初演の繪番附

油屋　こりやマア、どうしてくれるのぢや。
勇介　段々貴樣達が皆尤も。この間にお上にも、お物入りが續いたから
肴屋　その斷わりはもう聞き飽きた。とんだ和郎だわえ。
玉笹　コリヤ〳〵、お袖はまだ歸らぬかや。
ト玉笹、着流し、姿の拵らへにて、奥より出る。
かめ　お袖どのは、今朝八幡さまの、社家まで參られましたが、どうぞ、もそつと隙が入るでござりませう。
玉笹　オヽ、これは皆、來やつたなう。
肴屋　この間は、暫らくお目にかゝりません。
呉服　勇介どの、こりや、いつまで待たすのだ。全體
ト云ひかける。
勇介　オヽ、コレ〳〵、三人ながら、ちやつと來て下され。
ト表へ連れて出て
おてまへ達も氣の利かない。あれに玉笹さまの、お側で云つてくれる事もないではないか。
呉服　サア、それが嫌だから毎日々々、おてまへに催促しても、今日遣らうの明日遣らうのと、からきり埒が明かないから。
玉笹　勇介々々、ちやつと來や。
勇介　ハイ〳〵。
ト内へ入る。
御用でござりまするか。
玉笹　出入りの者が用と云ふは、拂ひの催促ではないかや。
勇介　左樣でもござりませぬ。少々間違ひの事がござりまして。
油屋　カウ、勇介どの〳〵。
勇介　オイ〳〵。
ト表へ出る。
肴屋　いま埒の明かねえ事なら、今日は殿樣へ、直々に。
勇介　これはしたり、さう麁忽に云つて、もし玉笹さまのお耳に入つては
三人　耳へ入るやうに云ふのだわえ。
ト此うち玉笹、思ひ入れあつて、簞笥の抽出しを明け、衣裳を一々出す。お龜、手を拭き、盥を片附けて、莨盆、持ち行く。
玉笹　勇介々々。
勇介　ハイ〳〵、只今參りまする。
玉笹　皆そこへ呼んでたも。

油屋　ソレ、おいらを呼んで來いだ。入らつしやれ〳〵。
　トどや〳〵と、内へ入る。
玉笹　重助、近うおぢや。
呉服　ヘイ〳〵。
玉笹　この小袖の價で、殘らずそこへ、持つて行て見てたも。
呉服　畏まりました。
　ト懷中より算盤を出し、置いて見る。
かめ　申し、あのお小袖を、どう遊ばしまするえ。
玉笹　勇介や、この程より其方等夫婦の心遣ひ、よう推量してゐるわいなう。前方への小袖を殘らず拂うて、昔の借錢を拂うてたもいなう。
勇介　飛んだ事を仰しやりまするな。決して左樣な儀をなされずとも、ちつと心當がござつて、袖乞を遣はしましたれば、押しつけ積りを致して歸るでござりませう。
玉笹　ハテ、寶に身の差合はせ。一つには又殿樣の御外聞。わし次第にしてたも。どうも心が濟まぬわいなう。
勇介　この左傳めは、もう歸りさうなものだが。
　ト向うを見て、心遣ひのこなし。呉服屋、思案して
呉服　ざつと三十五兩ばかりの物でござります。
玉笹　其方が好いやうに取捌いて、二人の衆にも、譯を附けて進ぜてたも。
呉服　有り難う存じまする。
　ト風呂敷へ包む。
油屋　お縫どの、お油はまだありまするか。
肴屋　よい肴が出ます。明日持つて上がりませう。
勇介　エヽ、忌々しい。現金なら此方で買ふわい。
三人　ヘイ〳〵、お喧しうござりませう。
　ト合ひ方になり、三人、向うへ入る。
かめ　斯う云ふ事なら、とつくにさう仰しやればようござります。わたしが質に置いて上げますのに、あたらお小袖を、アヽ、惜しい事をなされました。
　ト玉笹、此うち、ちやつと文を書き、卷き、封じて、文箱へ入れ
玉笹　勇介や、大儀ながらこの文を、雪の下の伯母樣の所へ持つて行て、急にお返事を聞いて來てたも。
　ト渡す。
勇介　ヘイ〳〵、畏まりました。カウ、お縫どの、今日はおてまへ、歸つてもらつちやア勝手が惡い。今夜は泊る積りに思つて下され。

かめ　明日は大佛さまのお屋敷へ雇はれて行く筈。わしはどうでも大事ないが、定めて内で、案じさつしやるであらう。

勇介　おてまへの事を案じるやうな、御亭主の顔が見てえ。

かめ　お前のやうな好い男サ。

勇介　ハア、、ドリヤ、行つて參りませう。

ト唄になり、勇介、向うへ行きかける。と傳兵衞、着附け、羽織、手代の形にて、向うより出る。花道にて、行き合ひ

傳兵　笠間の番頭、どつちへ行かつしやる。

勇介　あなたのお屋敷へ參りまする。

傳兵　それは御大儀。

勇介　おてまへ樣、お使ひだな。

傳兵　エイ、ちよつと雲の下まで。

勇介　早く行つてござりませ。

傳兵　ゆるりとさつしやれ。

ト入れ違うて、勇介は向うへ、傳兵衞は本舞臺へ來て

傳兵　ヘイ、傳兵衞でござりまする。

玉笹　傳兵衞、よく來やつたなう。

トずつと入る。

傳兵　殿樣はまだ、お下がりはござりませぬか。

玉笹　今日は建長寺の御法事につき、御佛參遊ばしたれば、どうで、もそつと隙が入りませう。なんぞ急な用でもあつてか。

傳兵　只今御家來五百平どのが、金子百兩持參いたすやうと、殿樣の頂のお手紙。諸事はお下がりを待ちまして、お直に申し上げませう。この金は預かりなされて下さりませ。

ト財布より金を出し、玉笹が前へ置く。

玉笹　何か樣子は知らねども、封のまゝ預かつて置きまする。

ト手箱へ入れる。奴一人出て

奴　ハッ、三浦家よりの使者、只今これへ。

玉笹　殿樣のお留守のうち、思ひも依らぬお使者とは。

傳兵　私しは暫らくお次へ。

玉笹　取散らしたもの、片附けてたも。

かめ　畏まりましてござりまする。

傳兵　ドレ、お下がりを待ちませうか。

ト唄になり、傳兵衞は奥へ、お龜はあたり片附ける。向うより經景、三木之進、上下にて、出て

經景　イザ、三木之進どの。
三木　先づ〳〵。
　ト合ひ方になり、兩人、内へ入る。
經景　玉笹どの、この程は打絶え申した。
玉笹　三浦家のお使者は、どなたかと存じますれば、御一門の經景さま。
三木　拙者主は鎌正が身内、衣笠三木之進と申す者でござる。
玉笹　お役目御苦勞に存じまする。マア〳〵、あれへ。
經景　罷り通りまする。
　ト大小の鳴り物になり、兩人、上座へ通り、座に着く。
玉笹　お聞き及びもござりませう。主常世は北條家のお頼みにて、鎌倉表へ發參。未だお館へは下がりませぬ。
三木　お留守の儀は承知で參つた今日の使者は玉笹どの、主人よりもじ、内意。
玉笹　聞きも及ばぬ玉笹へ、大家よりのお使者とは、なんとも合點が參りませぬ。
經景　サ、そこが御内意。一家の事なれば源藤太、密かに頼み越さるゝ、義村どの、御上意。
玉笹　委細御聞かされ下さりませう。

經景　別儀でもござらぬ。當家の主源左衛門、先達てより有職へ、三ケの庄の御教書推擧の願ひ。佐野と三浦は元來同姓。家に傳はる射術の傳書、御一覽なされたき由、御懇望なれども、彼れこれと故障を云つて、傳書を御覽に入れざるゆゑ、殊の外御立腹。身も氣の毒に存ずるから、いろ〳〵に申し宥め、サア、相談と申すは爰だ。おてまへが内證で、一卷を差上ぐれば、早速御機嫌は直ると云ふもの。
三木　さすれば常世が願ひの通り、忽ち下がる安堵の御書。ハテ、お墨附が下がるや否や、源左衛門どのは大名格。こなた樣も大名の奥方と敬はるゝ。三方四方めでたい揃ひ。御一覽濟み次第、傳書は返濟いたす。
經景　そもじの心只一つで、目前常世が立身出世。家の爲を思ふならば、源左衛門が歸らぬうち、箱を開いて射術の一卷、我れ我れに渡さつしやれ。内意と申すは、この儀でござる。
玉笹　何事かと存じますれば、思ひも依らぬ傳書のお望み。もし私しが一存で、心に任せぬ時は
三木　意地強き主人義村、源左衛門どのゝお身の上、品に依らば所領改易、再び元の浪人暮らし。サア、さうなら

ぬうち、直ぐ素直に、傳書を渡すが家の爲。

ト此うち玉笹、何かとお龜に云ひつける。お龜、心得、簞笥の抽出しより、金子を出し、傳兵衛の持つて來た百兩包みを出す。

玉笹　家の大事を思し召し、各々樣の御深切、有り難う存じます。お指圖に任せ、殿へは内證、一卷お預け申しませう。ソレ、お龜。

かめ　ハイ〳〵。

ト右の金子を、兩人の前へ直し

憚りながら、お受取り下さりませう。

三木　早速のお受け、奇特々々。ドレ〳〵、改めて

トとくと見て

こりやア金子だ。エ、聞えた。傳書を渡すまい爲に、賄賂を以て我れ〳〵を賺込み、執成しを頼む心か。そりやならぬ。三木之進は誠の武士。金銀に目をくれ、御用を缺く事罷りならぬ。何を馬鹿な。

ト經景、こなしあつて

經景　その一卷、源藤太、改めて受取り申す。

玉笹　すりや、あなたが、御得心遊ばして。

經景　在職の御前體、好きに執成し仕る。落ちついてござるがよい。

三木　コレサ、經景どの、賄賂にほだされて、一卷お受取らず、此まゝすご〳〵立歸り、申し譯はなんと召さるゝ。

經景　よく物を積つて見さつしやい。この辛い世の中に、百兩と云ふ傳書が、なかなか迂闊に手に入るか。これ取らぬは、うつけの最上。

三木　して、御主人よりお咎めあらば

經景　申し譯は貴殿のお腹。

三木　ヤア。

經景　拙者が腹は貸し申さぬ。

三木　それでは、

經景　ハテ、差出すと、マ、、拵へてござれさ。

トきつと云ふ。三木之進、思案して

三木　どうかそれでは詰まらぬが

ト經景、こなしあつて

經景　源左衛門へは何事も、必らずともに拵へ辯に

ト右の百兩を懷へ入れる。

一卷確かに落手いたせば、三木之進どの、イザ、罷り歸らうか。

ト三木之進、いろ〳〵思案して

三木 金子は某殿が取込んで、申し譯は拙者が贖ふ。どうか御了簡が合はぬやうだ。

經景 玉笹どの、面目。

玉笹 お役目御苦勞に存じまする。

經景 さらばでござる。

ト經景先に、三木之進、思案しい〳〵、行かうとする。障子の内にて

兵衛 御兩所、待つた。誠の一巻、お渡し申さう。

兩人 なんと。

ト立ちとまる。合ひ方になり、障子屋臺を引拔く。兵衛、浪人なる拵へ、着附け、袴にて、小さき箱を抱へ、出て來る。

經景 あなたは御隱居兵衛どの。

玉笹 さては最前からの御様子を

兵衛 殘らず聞いた。心遣ひ、辛抱々々。

ト兵衛、眞中へ出る。兩人、立ちかゝり

經景 何と若人、すりや、こなたに、御獻上の

兵衛 一巻を渡すから、今の金を爰へ出しやれ。

經景 イヤサ、これは

兵衛 返せと云ふに。

ト睨む。

經景 サア、返すわえ。誰れぞ返すまいと云ふにこそ。

ト惜しさうに出して、渡す。兵衛、引ッたくり

兵衛 玉笹、とくとしまつて置きやれ。

玉笹 ハツ。

ト手箱へ納める。

三木 アヽ、嬉しや。先づ切腹には遁がれ申した。これと申すも兵衛どの、御賢慮に附いたから。余程御老巧に見えまするが、お目はようござらうな。

兵衛 まだ下げ針をも打ち兼ねませぬ。

三木 お齒は如何でござるな。

兵衛 梅の種でも食ひ割ります。

三木 ハテサテ、して、お耳は

兵衛 蟻の鳴くまで聞えます。

三木 ヤレ、結構な儀でござる。おあやかり申したい。

兵衛 エヽ、ごくにも立たぬ追從云はずと、早く[illegible]りやれせ。

ト箱を出す。三木之進、蓋を明け、小幅の掛け物を出し、開き見て

三木 こりや、探幽の三番叟の繪。

經景　上に何か謂がある……月影を、盜む心の愚かさは、寶に猿公の手が長いから。

兵衛　身が家に傳はる傳書は、いづれも妙な物であらうが。

ト兩人、顏見合し、双方よりグッと詰めかけ

經景　伯父者人。

三木　イヤサ、兵衛。

經景　こりや、我れ／＼を

兩人　馬鹿にするのだな。

兵衛　この兵衛がしないでも、生れ附いた馬鹿だわサ。

兩人　ヤ、なんと。

兵衛　コリヤ、よく聞けよ。あの彈正の猩親仁め、元は歩中間の二合半、猿智恵でちよか／＼と、お館中を引ッ掻き廻し、いまは有職の司呼はり。ヘヽヽ。おかしくつて臍がくねる。誠の武士の目から見れば、オヽ、この猿の劍烏帽子、諺に云ふ山猿の冠り。仁義、正しき北條どのと威勢を爭ひ、嫉みそしるは、千匹の鼻缺け猿が、一匹の鼻猿を笑ふ譬へ。慾心と云ふ肱を延ばし、人の寶を摑み足らいで、小猿どもに云ひつけて、玉篋を詐らかし、傳書をうま／＼してやらうでな。ベッカコ、罷りならぬ。コリヤ、この掛け物の狂歌の通り、月影を、盜む心の愚さは、寶に猿公の手が長いから。

トくる／＼卷いて、向うへ投げ出す。

それを土産に持ち歸り、佐野の兵衛が斯く云つたと、猿松親仁に云ひ聞かせよ。ハテ、何奴も

ト三木之進を睨む。憤り

此奴も

ト經景を見る。後へ寄る。

猿猴を擬んだやうに、ハテ、まじ／＼とした面だなア。

ト莨盆引寄せ、莨吸ひつける。玉篋、顏見合せ、心遣ひのこなし。

經景　ヤア、云はせて置けば、ずば／＼と、方途もない惡口雜言。

兩人　切り下げてくれう。

ト双方、拔きかけうとする。兵衛、經景が肱を押へ、三木之進を片手にて、押へ

兵衛　猿が筍を抱へたやうに、柄に手をかけなんとする。コリヤ、身どもを切る心か。ハヽヽヽ、佐野の兵衛は人でござるぞ。猿で人間が切れるものではないわい。

ト双方、膝を替へて、引ッくり返し

ナニ、つがもねえ。

ト兩人、キツとなり

經景　切れるか切れぬか

三木　其うち見せう。

ト行かうとする。兵衛、睨む。恟り。

經景　イヤ／＼、君子は危ふきに近寄らず。

三木　恥を恥と思はぬが、三浦の家風なれば

經景　此まゝに罷り歸るでござらう。

ト二足三足行て、立ち留まり

三木　エヽ、命冥加な

兵衛　何がどうした。

兩人　我れ／＼だなア。

ト唄になり、ツイと向うへ逃げて入る。此うち玉笹、心遣ひのこなし。

玉笹　これはマア／＼、どうなる事ぞと、いかう案じ申したに、以前に變らぬ勇々しい御詮議、お嬉しう存じまする。

兵衛　彼れら風情の五人十人、まだ／＼苦にする事でねえてサ。

かめ　氣味がよくて／＼、ぞく／＼致しました。

玉笹　とは云ふものゝ、日頃より邪智深い三浦どの、もしやあなたのお身の上、大事とはなるまいか。

兵衛　ナニサ、蒼浪の水に心を清むる、濁世の賢なる例し。例へ改易に逢へばとて、それを恐れて非道の三浦に、へつらふ所存當てない。不義にして富み且つ貴ときは、誠の武士の恥づる所、悴とてもその所存、なに案ずる事ではない。殊に以てお身は臨月。左の子は男子の印。身を全く平産し、早く親孫の顔見せてくりやれ。

玉笹　今に始めぬ事ながら、お慈悲深いお志し、有り難う存じまする。御機嫌の好いこの折柄、御隱居樣へ一つのお願ひ。

兵衛　弟次郎左衛門が勘氣の詫びか。

玉笹　廣い世界を尋ねても、掛替へのなき御兄弟、さぞお力があるまいと、思へば苦勞になりまする。只ならぬ身の今日あつて、明日をも知らぬわたしが命。お聞き屆け下さりませいなア。

兵衛　お身が深切過分なれど、この儀ばかりは叶ふまい。

玉笹　サア、そこを偏へに、父御樣の御威光を持ちまして、殿樣へのお執成し。

兵衛　若輩ながら弟めも、不忠を思ひやつて、源左衛門が

勘當せしは、深い仔細あつての事。その譯も今は云はれぬ。申し聞かす時節があらう。

玉笹　左樣に事を分けてのお詞、推してお願ひ申すも無禮。

兵衛　源左衛門歸るまで、とろ／＼と一寢入り。

玉笹　お龜、お足でも揉んであげましや。

かめ　ハイ／＼、心得ましてござりまする。

ト兵衛、立ち上がり

兵衛　今にも倅が歸らうとも、今日の樣子は必らず隱密。

玉笹　左樣ならば御隱居樣。

兵衛　玉笹、立居に隨分氣を附け召されい。

ト兵衛、こなしあつて、お龜、附き添ひ、奥へ入る。

玉笹、跡に、こなしあつて

玉笹　日頃一徹なお氣性ゆゑ、言葉に云うてはござれども、取分け御鍾愛の孫樣、お案じなさらいでなんとせう。惡から云ふも旦那樣のお下がりあらば、その上にて又、仕樣模樣もあらう、さうぢや／＼。

ト合ひ方になり、鏡臺を向うへ出し、髮を撫でつけにかゝる。バタ／＼にて、勇介、氣の急く見得にて、出て

勇介　今の噂が實說ならば、殿樣のお身の大事。まゝよ、何にもせよ。

トつか／＼と本舞臺へ來て

只今罷り歸りました。

トつツと入る。

玉笹　オヽ、勇介、其方の歸りを、待ち兼ねてゐたわいなう。

勇介　玉笹さま、あなたは、なんぞお聞きなされましたか。

玉笹　聞いたかとは、そりや何をえ。

勇介　殿樣のお身の上を。

玉笹　なんと云やる。

勇介　只今お使ひの歸り足、途中にて人の噂、今日御法事の席に於いて、此方の御主人と、三浦の若殿荒次郎とのと、爭論の上、惡口雜言。

玉笹　ヤア。

勇介　その上荒次郎めが扇を以て、殿樣の御面體を、したたかに打つたとの事。

玉笹　左樣の事なら、日頃より積みの積い鬱憤にも、よも御堪忍なさるまい。その場を直ぐに[illegible]を

勇介　サヽ、そこが實否の知れぬところ。かばかり心配を

受けながら、手をつかねて荒次郎を、おめ／＼と歸せしは、腰拔け武士の源左衛門と、一犬吠ゆれば千人の、噂にかゝる主人の汚名。

玉笹　コレ、勇介、なんにもせよ、其方、早う建長寺へお迎ひ

勇介　ドレ、一走り行て參りませう。

ト駈け出す。駕籠一挺、槍持ち、挾み箱。五百平、草履取りにて、行き合ひ

五百平々々々、殿樣には。

五百　お駕籠の内に。

勇介　無事のお下がり。エヽ、忝ない。

ト勇介、先に、本舞臺へ來る。

五百　お歸り／＼。

ト門口へ駕籠を下ろす。五百平、草履を直す。勇介、戸を明け、源左衛門、上下にて、小さ刀を提げ、ズッと入る。駕籠は下座へ、供廻り、入る。勇介、槍を受取り、長押へかける。玉笹、源左衛門が顔を見て、キツとこなしあつて、氣を替へ

玉笹　只今お下がりでござりまするか。

源左　やう／＼歸つた。

ト少し醉うたる體にて、上へ通る。玉笹、手を支へ

玉笹　今日は大切なお役目、さぞお疲れ遊ばしませう。して、お首尾は如何でござりまする。

源左　イヤモウ、大極上々吉の首尾。なんと、きついものか。

玉笹　ついに覺えませぬ御機嫌。御酒でも召上がられましてござりまするか。

源左　如何にも、下された。御大切の役目、滯りなく相濟み、和尚がもてなしの精進酒、アヽ、醉つた／＼。

玉笹　イカサマ、無理に御酒でも召上がられずば、無事にお歸り遊ばすまい。殿樣、さぞ御無念でござりませうなア。

源左　玉笹、そりや何を云ふ。

玉笹　諸大名滿座の中で、荒次郎が非道の惡口。

源左　ヤア、すりや、その事を、早聞いたか。

勇介　雲の下より歸り道、中間小者が噂とりどり、承つて下郎めも、口惜しくつて／＼とんと腹が裂けますわい。

源左　ハテ、惡事千里を走るぢやなア。

玉笹　それにあなたは手をつかねて、すごすごお歸り遊ばしたは、どうでも深い思し召しが、あつての事でござり

ますかいなア。

源左　イヤ、思し召しもないぢや。

玉笹　エヽ。

源左　出頭第一たる三浦の御子息、我れ〳〵如き小身者は、例へどのやうに云はれても、あやまつて置かねばならぬ。殊に御親父義村どのへ、頼み置いたる家の御系譜、荒次郎に敵對はゞ、推擧は愚か家斷絶、恥を知るの義を磨くのと、しやちばるは野暮な奴さ。斯く云へば源左衛門を、腑甲斐なしとも腰抜けとも、お身達が思ふ事も面目ないが、何を云うても家名が大切、恥辱に品は替へられぬわえ。

ト巻き舌にて云ふ。兩人、顏見合せ、つッと寄つて、双方より詰めかけ

玉笹　殿、源左衛門さま。

勇介　御酒興で、御意

兩人　なさるゝか。

源左　氣狂ひも水こぼさず、醉うても大事は、滅多にや立てられぬ。

ト玉笹、鏡臺の鏡を取つて、キッと突きつけ

玉笹　武士の面に疵を受け、それでも御堪忍遊ばしまするか。

ト源左衛門、鏡に手をかけ、思ひ入れあつて

源左　堪忍のなる堪忍が堪忍か、ならぬ堪忍するが堪忍。

兩人　チエヽ。

ト源左衛門、思ひ入れ、扇を瓶に當てる。玉笹、こなしあつて、刀掛けの大小を取り

玉笹　勇介、おぢやゝ

勇介　ござりませ。

ト駈け出さうとする。

源左　待て。血相變へて、いづれへ行く。

玉笹　女でこそあれ、命を的に

勇介　三浦が館へ踏み込んで

玉笹　せめて殿樣のお恥辱を

源左　雪がんとばかり一途に逸り、兩人とも犬死。

兩人　なんと。

源左　ハテ、待てと云へば、マア〳〵、待つたがよいわサ。

ト兩人、ツカ〳〵と立ち戻る。

玉笹　どうして又、私しどもが犬死に

兩人　なりまする。

源左　三浦は大身、數百の家來、われ達二人が摩利支天阿



初演の繪番附

修羅王ほど働くとも、本意は元より三浦親子に、薄手一つ負はされうか。

兩人　サ、それは。

源左　シタガ、呑んだ身共より、一水も呑まぬ其方達が、こりや、醉うて居るさうなわえ。

兩人　ホイ。

ト下に居る。源左衛門、こなしあつて

源左　玉笹、其方には暇をくれる。

玉笹　エヽ。

源左　勇介も勘當だ。家來でないぞ。

ト勇介、玉笹を引退け、源左衛門が側へどつかと座り

勇介　殿、玉笹さまは元より、この下郎めに何科あつて。

源左　源左衛門が力と頼む、三浦家へ敵對しては、身共に敵對するも同然。

玉笹　エヽ。

源左　なんと理屈か。しやつとも云つて見ろ。

ト玉笹、勇介を引退け

玉笹　そりやあなた、御眞實でござりまするか。

源左　酒の醉ひ、本性違はず、近年の眞實サ。

ト玉笹、いろ／＼こなしあつて

玉笹　ほんにマア、こりや、なんとした事ぞ。永の月日を只の一度、御機嫌損じた事もなう、日頃の御不便に引替へて、御胴慾な今の御仰せ。心に思はぬ申し過しも、御大切の御爲りから。お心に障りなば、御打擲は愚かな事、お手討ちになりましても、露お恨みとは存じませぬ。お暇の事はお免しなされて下さりませ。申し、お情でござりますわいなア。

ト源左衛門、思ひ入れあつて

源左　何か仰せらるゝやうだが、一つも我れらが耳には入らぬ。いとしい妻を突き出し、家風に合はぬ家來を遠ざけ、大磯小磯化粧坂、新吉原の傾城に、馴染みでも拵らへたならば、また一入面白からう。頼み甲斐のない源左衛門が、足元の明るいうちに、キリ／＼とお歸りなされい。

玉笹　ハア、飛鳥川とは世の譬へ、是非もない身の果ては

ト死ぬると云ふ事をして

捨てるにも捨てられぬ、せめてお腹のこの嬰兒を、生み落すまで暫しのうち

源左　これはしつこい。親の事さへ思はれば、顔見ぬ腹な悴が事は、糸瓜の皮のだん袋。兩人とも、早く屋敷を出

て行かつしやい。
玉笹　こりやマア、なんとせうぞいなア。
ト大聲に泣き出す。と奧より、傳兵衛、出て
傳兵　殿様、傳兵衛でござります。
源左　其方は笠間の番頭、先刻途中より書面を以て
傳兵　仰せ越されました百兩の金子、取敢へず持參いたし、
玉笹さまへお渡し申し置きました。
源左　早速の調達、大儀。過分々々。
傳兵　下地からのお取替へ、都合百兩餘り、その上、今日の
金子も都合なされて、さつぱりと御返濟下されまし。ち
つとも待たれませぬ。
源左　何ぞ心に障つたか、手荒しく催促いたすか。
傳兵　永々お出入りの傳兵衛、ついぞ斯やうな失禮を、申
し上げた事はござりませぬが、フツ〳〵愛想が盡きました。
先刻からの一部始終、聞けば聞くほど……こりや、あ
なたのお勝手。モウ〳〵、斯うなつては、片時も待たれ
ませぬ。只今お渡しなされませ。
源左　借りた物は返すが當。いま返濟いたすであらう。
ト合ひ方になり、源左衛門、立つて、玉笹が側にあり
し大小を取り、玉笹、思ひ入れ。また蒔繪きの手箱を

持ち、眞中へ出て、手箱より折り紙を出して
刀は眞改・差添は遠州國平、判金二百枚の折紙、負債の
償ひ、持つて歸れ。
ト投げ出す。
傳兵　すりや、お差し料の二腰をかえ。殿様、刀脇差は武
士の魂ひ。こりや申さいでも知れた事、その魂ひを手放
して
源左　そりや、ずんど昔の事。今の武士は刃物より身上が
大事、々、大切。町人の傳兵衛、誠の武士の性根は知る
まい。なんと、洒落た世界であらうがな。
ト傳兵衛、額を顰め
傳兵　あんまり呆れて物が云はれぬ。
源左　足手纏ひは殘らず拂ふ。借金は濟ましてしまふ。何
もかもこれでさつぱり、一本立ちの源左衛門。以來は我
まゝ暮らし。ア、兩國の水の流れや、筆に書くとも及
ぶまじ。
勇介　サア、玉笹さま、泣いてござる所でない。早くお立
ちなされい。暇の出たこの屋敷に、ナニ愚圖々々として
居るものか。日頃に變つた今日の薄情。さは云へこれに
は一物あるべき事だと思つたが、重代の二腰まで、手放

す心でガラリと知れた。あの和郎に魂ひはない。狐か狸が入れ替つてあるのだ。

傳兵　マア、そんなものだ。ナニ、勇介さま、幸ひ此方の近所に、好い茶店があるから、當分は玉笹さまを、あれへ入れて置きませう。

ト玉笹、始終泣いて居る。勇介、側へ行き

勇介　これはしたり、ナニきな〳〵。サア、お立ちなさい。

ト玉笹、腹を抱へ、苦しむこなし。

こりや、怪しからぬ惱みだ。お龜〳〵。

かめ　アイ〳〵。

ト出て

なんぞ用でござんすか。

勇介　用どころか、玉笹さまが頻りにお惱みなさる。

かめ　ドレ〳〵。

ト介抱して

ほんに、こりや、とんだ事だ。

勇介　エ丶、時も時、折も折、また御持病のお癪氣だね。

かめ　イヤ〳〵、さうぢやない〳〵。こりや、氣が附いたのぢやわいなア。

傳兵　なんぢや、氣が附いた。そりや怪しからぬ事ぢや。

勇介　どうせう〳〵。

トうろたへる。

かめ　爰で出ては大變だ。サア、わたしが肩を、しつかりと捕まへて

ト肩に引ッかけ

さうぢや〳〵。

勇傳　危なうはないか〳〵。

ト皆々介抱して、障子の内へ入れる。

勇介　時に傳兵衛どの、かゝり合せた時の不承。おてまへ、近頃大儀ながら

傳兵　取上げ婆さま、呼びに行くのか。

勇介　早く頼む〳〵。

傳兵　ナッと、承知だ。

ト駈け出さうとして

南無三、これを忘れてなるものか。

ト大小を引ッ抱へ

とんだ所へ來合せた。

トうろたへ、向うへ入る。勇介、源左衛門を見て

勇介　この大變に寐てゐて濟むか。コレ、起きさつしやい起きさつしやい。

ト ゆすぶる。障子の内にて
かめ　勇介どの〳〵。
勇介　なんだ〳〵。
かめ　そこに盥があらう。奥の湯を汲んで來て下され。
勇介　オヽ、湯か〳〵。
ト盥を抱へ
南無佛神樣、無事平產なさしめ給へ。
かめ　早う〳〵。
勇介　オヽ、合點だ。
ト奥へ走り入る。合ひ方になり、源左衞門、頭を上げ、障子屋體の方を見る。奥にて
兵衞　悴はどれに、源左衞門、悴。
ト又ころりと寢る。兵衞、提げ刀にて、ツカ〳〵と出て、源左衞門を拔打ちにせうとする。源左衞門、むつくと起きて、キツと留め
源左　親人、こりやどうさつしやる。
兵衞　ヤア、不孝の悴め、首ツ二つだ。
源左　イヤ、滅多に命は捨てませぬ。
兵衞　なにを。
ト引ツ外して、切つて行く。源左衞門、逃げ出す。烈しき鳴り物にて、いろ〳〵追ひ廻す。トヾ源左衞門、手水鉢の蔭へかゞむ。兵衞、見事に手水鉢の片々を切り落す。鳴り物、しやんととまる。
源左　佐野家重代、左文字の切れ味。
源左　ム、。
トこれなりに、眞中へ、ツカ〳〵と附いて出て
兵衞　まツこの通り藥次郎を、大袈裟にぶツ放し、本意を達せよ、悴源左衞門。
ト源左衞門、下にヂツと居て
源左　さては拙者が所存の程を
兵衞　子を知る事父に如かず、知らいでなろうか。
ト勇介、盥を持つて
勇介　ソリヤ、湯だ。
ト障子の内へ入る。
かめ　アイ〳〵、次手に鰹を搔いて、お汁をして下さんせ。
勇介　合點だ〳〵。
かめ　さやつと〳〵。
勇介　ヤレ、忙しない。
ト入る。
兵衞　ヤア、玉笹は產だな。ヤレ

源左　イヤ〳〵、親人、お察しの上は包んで詮なし。この程よりの千辛萬苦。
兵衛　さぞあらん。
　ト下に居て
この程よりのお主の振舞ひ、三浦親子にへつらふは、さては彼れらが逆意を察し、近寄つて
　ト切ると云ふ事をして
所存であらうがの。
源左　邪智深き荒次郎、某に不覺を取らし、自滅させんと毎度の無禮。家再興を存ずるゆゑ
兵衛　胸を擦つて堪へて居つたな。
源左　今日御代參の席に於て、扇を以てまツこの通り。
兵衛　ドレ。
　ト顔をキツと見る。内にて
かめ　もう押しつけでござりまする。御辛抱なされませ。
兵衛　ナニ、もう生るゝか。
　ト障子の方へ、こなしあつて
荒次郎め、うぬ、憎くい奴の。
　ト柄に手をかけ、きしむ。
源左　其まゝに飛びかゝり、只一討ちと存ぜしが

兵衛　短刀拜領ゆゑ、我が君への畏れを思ひ
源左　手を空しくすご〳〵と
兵衛　オヽ、よく辛抱した。ヤレ、出かいたなア。
源左　又二つには親人に、せめてこの世のお暇乞ひ。
兵衛　ナニ、この親が面が見たさに
源左　立歸りましてござりまする。
兵衛　ムウ。
　ト云はうとして
たわけ者め。義に依つて親をも討つは、武門の習ひだわえ。
　ト源左衛門、とん〳〵と手を打ち
源左　ハア。
　ト兵衛、こなしあつて
兵衛　親子別れの杯くれう。
源左　ハア、。
　ト水を柄杓に汲み、持つて出て、一口呑んで、差出す。
頂いて、呑む。内にて
かめ　これはしたり、お氣を慥かに。コレ、玉笹させる。
兵衛　また悩むか。ハテ、心遣ひ。
　ト源左衛門、右の百両を兵衛の前へ置き

源左　僅かなれども、お賄ひ。
兵衛　何から何まで。
ト時計の暮れ六ツ。兵衛、指を折り
最早暮れ六ツ。
源左　館は今宵、今様の御催ふし。
兵衛　三浦親子も必定出仕。
源左　奥殿の騒動に紛れ
兵衛　窺ひ寄つて
源左　只一討ち。
兵衛　門出の餞別。
ト右の刀を差出す。
源左　ハ、ハツ。
ト取つて、頂く。
兵衛　コリヤ、親に心を引かされて、必らずともに不覚を取るな。
源左　仰せに及ぶべき。天理に背く三浦が非道。
兵衛　討つて捨てるが四海の治まり。
源左　屍は土泥に曝すとも。
兵衛　忠臣義門の名は末代。
源左　首尾よく致して御覧に入れん。

兵衛　出かした、悴。
源左　親人様。
兵衛　早く行け。
源左　ハツ。
トつか／＼と花道へ行く。オギヤア／＼と、赤子泣く。
兵衛　ソリヤ、出たワ。
ト源左衛門、ぎつくり、立ちとまつて、兵衛と顔見合せ
未練であらう。
源左　おさらば。
トついと向うへ走り入る。お亀、出て来て
かめ　お喜び遊ばしませ。お生れなされたお子様は、玉のやうな
兵衛　女子か、男子か。
かめ　和子様でござりまする。
兵衛　ナニ、男子か。介抱／＼。
かめ　ハツ。
ト走り入る。
兵衛　ムウ。
トぎつくり、思案して、膝、丁と打ち、股立ちをキツ

と取り、下げ緒を外し、襷にかけ、長柄の槍を取つて、しごく。勇介、後へ出る。

さうだ。

ト勢ひ切つて、駈け出さうとする。勇介、ツッと寄つて、突き廻し

勇介　お待ちなされ。こりやどれへ。

兵衛　エヽ、面倒な、退け。

ト引退け、行かうとする、石突きを取つて

勇介　イヽエ、様子を聞かない其うちは、下郎めがお止め申す。

兵衛　桐ケ谷の間道を、倅より先へ廻り、兆次郎めをたんだ一突き。

トとん／＼と引き戻す。

勇介　すりや、殿様はお館へ。

兵衛　切り込む覚悟でたつた今

勇介　それ承つたら下郎が先へ

ト駈け出すを、引き戻し

兵衛　待ち居らう。産婦の介抱、見捨てゝ行くか。

勇介　エヽ。

兵衛　源左衛門ばかりが主で、生れた倅は主でないか。

勇介　サア、それは。

兵衛　聞入れずば、腹せうか。

ト刀に手をかける。

勇介　エヽ、申し

ト留める。

兵衛　跡が大事、頼んだぞよ。

トつか／＼と花道の角まで行く。

勇介　暫らく／＼。

ト兵衛、キッと留まる。勇介、障子屋台へ入る。赤子を抱へ、ツカ／＼と出て

せめてこの和子様に

兵衛　ナニ、それが孫めか。

勇介　ソレ、お祖父様だ。

ト兵衛の方へ見せる。

兵衛　えゝ子だなア。

ト釣り鐘、ゴンと鳴る。

南無三、後れた。

ト力み迫つて、向うへ入る。玉笹、障子屋台を明け、勇介と顔見合せ

玉笹　果報拙ない

ト赤子泣く。

勇介　オヽ、泣かつしやるな〳〵。

トいぶろ。チョン〳〵と、道具廻る。

造り物、一面の高塀、丈夫なる石垣、上手、筋違ひに、四ツ足門の半分を見せ、この所、出入り、所々に矢ざま鐵砲ざま。鎌倉上屋敷内曲輪の體、眞中に水門、これも出入り、暮れ六ツの鐘にて、道具納まる。

ト向うより、右門、刑部、豊前、玄蕃、銘々紋附きの提灯、灯させ、出る。門の内より、三木之進、股立ちにて、出る。双方、本舞臺にて行き合ひ

右門　お身は三浦家の御家來、衣笠三木之進どのではないか。

三木　これは各々樣、只今御出仕でござりまするか。

刑部　さればさ〳〵、今宵は若君御誕生の御祝儀。

豊前　今樣の御催ふし。

玄蕃　三浦どの御親子には、最早お詰めなされたか。

三木　大殿には未だ出仕なく、若殿には押しつけ。それにつき各々樣へ、主人より密々の内意。

四人　ナニ、御内意とは。

三木　その儀は

ト皆々に囁く。

刑部　すりや、一大事を

四人　源左衛門が

三木　何かは詳しく、詰め所に於いて

豊前　然らばいづれも

三人　サヽ、お越しなされい。

ト始終時の鐘にて、三木之進、先に、一件皆々、門の内へ入る。ト向うより、隅切り角に十文字の箱提灯一對、乘り物、若黨、挾み箱、槍持ちなぞ、静かに出て、門の内へ入る。チョン〳〵にて、返し。

右の高塀、胴折りにて、高舞臺の廊下になる。舞臺前、花道兩側、芥子畑をセリ出す。所作の鳴り物にて、道具、納まる。

ト向うより源左衛門、上下侍ひに手燭を持たせ、静かに出る。上座より右門、出て、右の廊下を傳ひ、下座の梯子を下りて、花道へかゝる。源左衛門、行き合ひ

源左　松浦右門どの。

右門　源左衛門、どれへ行く。

源左　ちとお願ひの儀がござつて、荒次郎どのに御意得たく、わざ〳〵これへ。

右門　ハテナア。

ト向うへ入る。そろ〳〵本舞臺へかゝる。次に刑部、また上座より廊下を傳ひ、出て來る。

刑部　お身は常世でないか。

源左　米村刑部どの、三浦の若殿は、いづれにいらせられまするな。

刑部　荒次郎どのゝ番はよした。

源左　ヤア。

刑部　身は存ぜぬわえ。

ト云ひ捨てゝ、向うへ入る。これより廊下口へかゝらうとする所へ、豊前、靜々出る。

源左　花田豊前どの、荒次郎どのには、お詰め所に御座なさるゝかな。

豊前　イヤ〳〵、確かに奥殿へござつたであらう。追ツつけこれへお下がりなさるゝ。

源左　でござるかな。

ト豊前、靜々向うへ入る。

大儀々々。

侍ひ　ト襖より、金子を出してやる。

有り難う存じまする。

ト侍ひ、ツイと入る。源左衛門、鯉口しめし、四方を見廻し、こなしあつて、梯子を昇り、廊下へかゝる。右のうち始終所作の鳴り物なり。上座より茶道、手燭を持ち、先に立つて、荒次郎、長上下にて、出て來り

荒次　坊主、なん時だ。

坊主　お時計の半時を、只今打ちました。

源左　三浦荒次郎。

荒次　ヤア、源左衛門。

源左　日頃の遺恨。

ト拔打ちに切りつける。坊主、手燭を捨て、逃げて入る。荒次郎、逃げようとするを、長袴の裾を、キツと踏まへる。荒次郎、小さ刀を拔き、裾を切らうとする所を、疊みかけて切り込む。荒次郎、下屋へ拔け、吹替へになる。源左衛門、切り伏せ〳〵

思ひ知つたか、人外め。

ト突ツかゝつて、止めを刺す。この見得、チョン〳〵にて、道具、引返す。



初濱の繪番附

元の外廓になる。

ト日覆より、半輪の月、出る。内にて

うち　お廊下に於て、三浦荒次郎を、佐野源左衛門が討ちとめたり。諸侯の面々、君の御座を圍まれよ。

大勢　ハア、。

ト大バタ〳〵、アリヤ〳〵、早太鼓になる。と上座の門より、右門、うろたへ、走り出て

右門　サア〳〵〳〵、なか〳〵斯うしてはゐられぬわえ。

ト向う花道へ逃げ出す。向うより兵衛、返し前の形、槍を提げ、ツイ〳〵と出る。

ヤア、こな様は

兵衛　三浦に一味の松浦右門。

右門　兵衛どの。

兵衛　覺悟しろ。

ト突きかゝる。

右門　待つた、御免下されい。

兵衛　なにを。

ト烈しく突きかゝる。右門、是非なう抜き合せ、いろいろ立廻つて、トゞ槍玉に上げられる。兵衛、槍をグツと引抜き、死骸を蹴やる。死骸は揚げ幕へ入れる。

兵衛、ツカ〳〵と本舞臺へ來る。豐前、上座より出て

豐前　この一大事、一時も早う彈正どのへ、お知らせ申さん。ソレ。

ト兵衛、立ち塞がり

兵衛　豐前、待て。

豐前　なんと。

ト兵衛、突きかける。

コリヤ、狼藉な、なんとする。

兵衛　人非人の彈正が荷擔人。

豐前　それ知られては

ト烈しく立廻つて、トゞ豐前を突きとめ、穂先の血汐を拂うて、一息ホツとつく。と玄蕃、刑部、出て來り

刑部　こりや、存じよらぬ儀でござる。

玄蕃　斯やうな節は、逃げまするが奥の手でござる。

ト兵衛、槍にて、兩人を突き廻す。

兵衛　米村刑部、荒木玄蕃。

兩人　源左衛門が父兵衛。

兵衛　うぬらも彈正が一味同心。

兩人　何がなんと。

兵衛　生けて置かれぬ國賊めら。觀念ひろげ。

両人　うぬからくたばれ。

ト双方、抜打ちに切つてかゝる。二人を相手に、立廻りのうち、兵衛、手を負ふ。面白き槍タテ、さまざまあつて、トヾ刑部を突きとめる。玄蕃は逃げ出すを、投げ槍にて、突きとめる。此うち三木之進、出かけ居て

三木　[illegible]暴れの兵衛。捕つた。

ト十手にて打つてかゝるを、身をかはして

兵衛　うぬらが手に合ふ、親仁ぢやないわえ。

三木　所詮斯う

ト又打つて行く。兵衛、刀引抜き、切りまくる。三木之進、叶はず、逃げて入るを

兵衛　うぬ、いづくまでも

ト追つかけ入る。始終早太鼓、アリヤアリヤの聲。本花道よりお袖、凜々しき形、一本差し、東の花道より勇介、走り出て、舞臺へ来て、行き合ひ

そで　勇介どのか。

勇介　女房か。

そで　最前は道にて

勇介　残らず聞いたか。

そで　お館の騒動は

勇介　御主人方の御身の上。

そで　心元ない、なんにもせよ。

勇介　来い。

ト行かうとする。水門の扉のうち、バタバタにて、勇介、お袖に目配せして、双方より、柄に手をかけ、窺ふ。早太鼓、段々かすめる。兵衛、水門の戸を蹴破り、手を負ひ、血刀を提げ、スツと出る。

両人　曲者。

ト双方より、切りかける。立廻つて、三人一時に顔見合せ

そで　ヤ、、、、御隠居様。

兵衛　袖、勇介。

両人　あなたは手疵を、ヤア、。

兵衛　両人、喜べ。悴は本意を達したぞよ。

勇介　すりや、殿様には

そで　荒次郎を

両人　エ、、忝ない。

ト云うて、顔見合せ

ホイ。

兵衛　ト兵衛、捨て石に、どつかと腰かけ
この體ならば、所領は改易。

兩人　ヤ、、。

兵衛　近う〳〵。

兩人　ハツ。

ト摺り寄り、兵衛、一卷を出し

兵衛　コリヤ、この一卷は先祖より、家に傳はる射術の傳書、卽ち佐野の系圖も同然。汝等に預ける。弟次郎左衛門に巡り逢ひ、茶入れの功を立て、生れし小兒が力となつて、佐野の家を再興せよと、くれ〴〵も傳へよや。

勇介　ハツ、御意の趣き、心魂に徹し

そで　承知いたしましてござりまする。

勇介　夫婦の者が肉をあばき

そで　身は八裂きになりますとても

勇介　和子樣を守り育て

そで　佐野のお家を

勇介　引起さいで

兩人　置きませうか。

兵衛　オ、、よう云つた、喜ばしいぞよ。

勇介　とかう云ふうち時刻が延びる。

そで　二人の者がお供いたし

勇介　叶はぬまでも手疵の保養。

兵衛　たわけ者。疊の上で相果てるは、武士たる者の本意に非ず。主君へ敵對ふ人外めら、討つて捨てしは國家のお爲。戰場の討死同然。倅と云ひ身共まで、天晴れ武運全き最期。勇介、喜べ。

勇介　ヘイ。

兵衛　袖も歎くな。

そで　ハイ。

兵衛　めでたいではないか。

そで　おめでたう

兩人　存じ奉りまする。

トこなしにて云ふ。

兵衛　其方達は片時も早う、この所を立退け立退け。

勇介　お覺悟の上は力及ばず、恐れながらお介錯。

兵衛　イ、ヤ、年こそ寄つたれ、人手は賴まぬ。

ト刀を杖に、立ち上がり、キツとなり

兩人、さらば。

ト刀を首に押し當てる。勇介、お袖、手を合せ

兩人　南無阿彌陀佛。

ト兵衛、首を押し切り、ばつたり。チョンと、頭入れる。舞臺前、板返しに、首、ひよいと出る。ツカ／＼と寄つて、手をかける。ト目口、がく／＼と動く。キザミにて

幕

花菖蒲佐野八橋（終）

解說

渥美清太郎

歌舞伎劇を內容に依つて分類すると、隨分夥しい項目が出來るが、その中でも「お家騷動」なる一種類は、可成り重要な題目として必然數へなければならない。お家騷動といへば、大名または大きな旗本などの家に起る紛亂を題材としたもので、姦臣あつて家を押領せんとする、忠士あつてこれを拒む、その間に起る悲劇である。斯うした材料の淵源は頗る古い。特に京坂にあつては、初期の歌舞伎劇には缺くべからざる基本的の世界であつた。富永平兵衞だの近松門左衞門などの時代は、お家騷動がなくては狂言が成立しない位であつた。下つて正三から五瓶へかけての時代も、二の替り狂言と言へば先づお家劇動が一日の筋の始まりであつた。その影響でツイ幕末に至るまで、大坂にはお家騷動が多かつた。殊に寛政期あたりから小說が流行しはじめ、實錄本が配布されるに至ると、この方面ではお家騷動が主要な材料であつたから、それに刺戟されて、特に多少の事實ある、世人の周知せる騷動物へ手をつけるに至つた。即ち初期に於ては、そのお家なるものも架空的であつたのが、實材に原を求めるに至つたものである。伊達騷動、柳澤騷動、加賀騷動なぞが、續々脚色されるやうになつたのである。江戸では割にこの方面の脚色に乏しかつたが、それでも伊達騷動だけは、隨分盛んに上演され、本全集にさへ「伊達騷動狂言集」を特に加へた程である。上方では益々盛んに、江戸ではそれほどでなく、同じやうな傾向で進んで來たが、講談が盛んになつてから、江戸でもその影響をうけて、明治へかけては可成りお家騷動も脚色された。併し京坂には敵はない。明治になつてから京坂では特にお家騷動劇が殖えたのだから。

本卷には代表的なお家騷動を四種收めた。

梅柳若葉加賀染（うめやなぎわかばかがぞめ）

文政二年五月、江戸玉川座の初演。作者は四世鶴屋南北である。

加賀騷動は普通芝居では「多賀家」として取扱ふ。名題にも加賀の文字があるし、內容から云つて、これはてつきり加賀騷動を思はせるが、內實は名題の柳で表した柳澤騷動なのである。實錄本の「護國女太平記」を加賀騷動に準へて脚色したものなのである。大坂にも同じ題材の脚本に「けいせい揚柳櫻」があるが、それよりも巧みに出來てゐる。傳說では綱吉が將軍に就く以前、日蔭者の庶室でおさ

めの手管にかゝる事になつてゐるが、序幕庵室はそれを當込んだもので、翠月は柳澤と護持院隆光の二役を兼ね、大領は綱吉、お柳はおさめで、例の「船出へ上る」の歌の件もチャンと入つてゐる、二幕目の英一淡といふ畫家は、英一蝶の當込みで、女房持ちを淺妻としたのも、淺妻船の暗示である。三幕目の木崎辰五郎も、柳澤に關係のある淀屋辰五郎の事であらう。大詰で大領の深川遊では、柳澤が邸仕立てゞ綱吉を饗應した傳説をとつたもので、お柳が大領を殺すと見せるのは、御臺所が綱吉を殺したといふ説を脚色したものである。長谷部軍左衛門といふのは井伊掃部頭に嵌めてあるのである。結構が非常に巧い。

この狂言は天保九年に「柳樽彩會加賀笄」と改題再演されたが、默阿彌はこれを取つて背寄せの岩藤を嵌め込んだので、柳澤氣分はすつかり無くなつて、本當の加賀騷動になつてしまつた。

初演の役割は左の通り。

翠月尼、鳥居又助（五世松本幸四郎）お柳の方、紅葉狼おみん、下女お松實ハ淺尾濱町（五世瀬川菊之丞）花房求馬（坂東彦三郎）鰐江一角、手代助八（市川宗三郎）多賀大領（市川茂々太郎）紅屋後家おくま、口上云ひ八八（嵐雛六）花房主膳、谷澤縫殿母（市川門三郎）石井五兵衛、福田屋金六（大谷馬十）瀬川勇藏（市川小團次）香川權平、古鉄買ひ權七（市川藁五郎）柏木曾平太（澤村長太郎）深川嘉藤次（坂東吉次郎）藤屋吾妻（瀬川路之助）小竹駒吉（市川高麗藏）茶道町山（松本虎藏）奥女中千早（瀬川富三郎）片瀬村彌五兵衛、獄業師團五平（坂東善次）安達自伯（松本小次郎）下女およし、奥女中梅田（松本よね三）大江息女紅梅姫、又八娘後屋後に淨妻小侍（五世岩井半四郎）多賀大領。湯島の三吉。長谷部軍左衛門。木崎辰五郎後に合邦太郎實ハ石谷六郎綱之（七世市川團十郎）

けいせい蝦夷錦（えぞにしき）

寛政元年九月、大坂中の芝居に上演されたもので、作者は奈河七五三助である。伊達騷動の書替への一種であるが、全體の結構が妙に顔見世狂言くさい。役者が無暗と口上を云つたり、登場人物に行方不明が多かつたり、調子が一體に變つてゐる。伊達騷動に蘭葉幸藏を持込んだのも妙である。安宅の關を夢にしたなぞも面白い。全體にわたつて極めて特色が多いので加へて見たのである。

松前蔵之助。奴三田平。板倉主膳之助。濱平兼吉 市川八百藏。帶刀妻政岡、狐の化身（吾妻藤藏）傾城高

尾（市山太次郎）才原勘解由實ハ津の井ちんくわん。豆腐屋權兵衛（坂東岩五郎）武藏坊辨慶、蝦夷の勇王陽。茶の子勘兵衛（市川門十郎）富樫左衛門、眼通坊、針金文七（今村七三郎）源義經、下女おるい（嵐源之助）佐々木六角之助、平大盡（中村京十郎）傾城葛城（嵐安次郎）千草姫（淺尾彌太郎）熊本將監、熊本甚五兵衛（叶新平）甚五兵衛女房錦木（中村条之介）秋塚帶刀（關三十郎）萩の方、淺平女房お峯（山下金作）稻葉幸藏、才原大藏、津輕三平（姉川新四郎）浮世渡平（三枡大五郎）

濃紅葉小倉色紙（こいもみぢをぐらのしきし）

文化十年九月、大坂中の芝居に上演したもので、作者は奈河晴助。小倉藩小笠原家騷動の傳說を脚色してある。吉三郎の當り藝として評判になり、京坂は元より、江戸でも度々上演され、明治になつてからでも彥三郎納升で見せた事もある位。江戸でも五世幸四郎が兵庫で、床の間の一軸の後から出て、何も云はずに隱んだ葉切れの凄さなぞ、話題に殘つたものである。明治の中期に大坂で勝諺藏がこれを改作して「小笠原諸禮忠孝」として擴めてから、原作は廢つてしまつたが、晴助としては傑作の部に入れるべき脚本であらう。

小松屋宗七、岸田久我助（市川市紅）笹原左門之助、隼人佐眞弓（尾上新七）玄海灘龍助、小松屋宗右衛門（嵐冠十郎）笹原采女之助、南京の八平次（嵐團八）笹原左京之頭（嵐璃三郎）月本源次郎（中山來太郎）小倉兵右衛門（大谷友右衛門）朝日の局、女房滑（嵐璃光）千倉神右衛門（桐島儀左衛門）腰元早瀨、千草姫（叶民子）妹夕露（嵐富三郎）向井金左衛門（嵐雛三郎）犬守兵庫（中山新九郎）傾城三吉野、女房お梶（中村歌六）笹原隼人、米山の三吉狐、船頭島の小平次（嵐吉三郎）

花菖蒲佐野八橋（はなあやめさののやつはし）

佐野善左衛門が田沼山城守を殿中で刃傷に及んだ事件は間もなく大坂で「稻光田舍月」（有與狂言集收錄）に脚色されてから、別に上場も見なかつたが、寛政元年六月に大坂の北堀江座で、菅專助が同じ材料を「有職鎌倉山」といふ義太夫にした。善左衛門を佐野源左衛門、山城守を三浦荒次郎として北條時代に世界を取り、釣天井の一件まで加へたもので、なか〳〵巧く脚色してある爲に賞讚されて、歌舞伎にも數度上演された。本狂言はそれをお家歌舞伎化した

ものて、佐野次郎左衛門の一件まで加へて賑やかにしてあるが、頁の都合で次郎左衛門の働く二番目は收錄が出來なかつた。文化八年五月中村座の初演、作者は奈河篤助、非常な大當りを取つたものである。

白藤大助（坂東善次郎）須左衛門妻下部善六（澤村田之助）三浦屋花菖蒲（尾上松綠）佐野次郎左衛門、船橋勇介＝尾上菊助＝大工與五作（尾上榮三郎）宗高六（中村明石）北作小三郎（中村七三郎）義村妻萩の方（市川おの江）＝佐野與左衛門常世（澤村源之助）勇助女房お紬＝瀨川路考、佐野民部、三浦荒次郎義高（三世中村歌右衛門）

責任校訂

渥美清太郎

日本戲曲全集・第廿四卷
お家狂言集・第廿七回配本

編纂者檢印

昭和六年四月二十日印刷
昭和六年四月廿四日發行　（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　木呂子斗鬼次
製本者　高崎幸三郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一　三七八八
振替東京一六一七

臺販所　新倉東文堂

神田區松下町七番地　（明治印刷株式會社・印刷）



